

東方～夢き命の理解者～

shin—Ex—

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

一夢 命（ひとつゆめ みこと）は、誰よりも愛情深く、誰よりも命の尊さを知るものだった。しかし、彼は変わってしまった。何よりも愛したものを失ってしまったから。それ以来、彼は無意味に、無価値に、夢くただ虚しく生きていた。そんなある日出会った2匹の猫。この猫との出会いが彼の失ったものを取り戻す物語の始まりとなる。

目次

4 作合同座談会	1
愛なきものの幻想入り	
プロローグ	8
設定	11
スperlカード	23
幻想郷縁起	26
第1話	32
第2話	38
第3話	44
第4話	51
第5話	59
第6話	67
第7話	76
第8話	84
第9話	96
第10話	102
紅霧異変く目覚める力く	
第11話	108
第12話	116
第13話	123
第14話	129
第15話	135
第16話	142

第37話

第36話

第35話

第34話

第33話

第32話

常識はずれのいつもの日常

座談会

第31話

第30話

第29話

第28話

第27話

第26話

第25話

第24話

第23話

第22話

第21話

永遠亭く愛しき面影を持つ姫君く

座談会

第20話

第19話

第18話

第17話

318

310

303

296

289

282

275

266

260

251

243

234

225

217

208

201

193

186

176

169

162

155

149

第60話

第59話

第58話

第57話

第56話

第55話

第54話

第53話

第52話

第51話

第50話

第49話

第48話

第47話

第46話

第45話

春雪異変く悉くを断つ道化く

閑話 第0話く序奏く

第44話

第43話

第42話

第41話

第40話

第39話

第38話

521

511

500

491

480

471

463

456

448

437

430

422

415

407

401

393

386

377

369

363

354

345

337

329

第61話

第62話

座談会

最強の道化の日常

第63話

第64話

第65話

第66話

第67話

第68話

第69話

第70話

第71話

第72話

第73話

特別編く年越しく

第74話

閑話 第0話く二幕く

萃夢想く鬼は何に酔うのかく

第75話

第76話

第77話

第78話

第79話

第80話



531



543



552



561



568



578



586



595



601



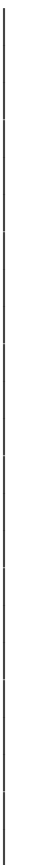
608



616



628



637



645



653



666



674



684



691



700



709



717



725

第81話

紅月狂く吸血鬼の愛せしものく

第82話

第83話

第84話

第85話

第86話

第87話

第88話

第89話

第90話

特別編く咲夜く

第91話

第92話

特別編くフランく

第93話

第94話

特別編く霊夢く

第95話

第96話

風神録く現人神の秘めし想いく

第97話

第98話

第99話

第100話

734

744

752

759

766

773

782

792

798

807

818

824

830

836

842

849

855

864

872

879

第120話	第119話	第118話	衝撃!○○○になったミコト!!	閑話 第0話〜三幕〜	第117話	第116話	第115話	第114話	第113話	第112話	コラボ特別編 神無月神社〜過去と未来を見通す巫女〜	二周年企画〜剣士と剣士〜	二周年企画〜Color of Knife〜	第111話	第110話	第109話	第108話	第107話	第106話	第105話	第104話	第103話	第102話	第101話
1063	1056	1046		1039	1029	1022	1013	1005	998	991		982	976	964	957	948	940	932	923	915	907	900	893	884

第121話	守月姫く例え禁忌を犯そうともく	1071
第122話		
第123話		
第124話		
第125話		
クリスマス特別編(前編)		
クリスマス特別編(後編)		
第126話		
第127話		
第128話		
第129話		
第130話		
第131話		
第132話		
閑話 第0話く四幕く		
再会く悉くに愛されし深黒く		
第133話		
第134話		
11761171		
11641158115211471142113711301124110811021095109010841078		

4 作合同座談会

主人公&メインヒロイン集合座談会じゃああああああ!!

一同「」「」「」

「……え?なんで皆そんなテンション低いの?なんでそんな冷めた目で私を見るの?」

ミ「いやいや……だってな?」

響「あまりにも急なことだし」

ル「対応に困るといふか……」

命「はつきり言っついていけない」

そんな辛辣な!?

霊「そうでなくてもこっちは急に連れてこられたんだからイライラしてるのよ」

咲「折角響様と一緒にお節を作っていたのに」

楯「私はルミナと初詣行くってウキウキ気分だったのよ?」

黒「コミュニケーションの皆さんでお祝いしていた途中で呼び出されたので私もちよつと……」

「……はい。それに関しては申し訳ありませんでした。ですが折角このような場を設けたわけですからどうか少しでもいいのでお付き合いを……」

霊「仕方がないわね。わかったわよ」

響「まあ座談会終わらせないと帰らせてくれそうにないしな」

ありがとうございます。それでは座談会を進めていきましょう。と、その前に皆さん甘酒どうぞです。

黒「ありがとうございます」

ル「甘酒か……前世では苦手だったんだよな俺」

楯「でも今は飲めるんでしょ?」

ル「ああ」

ミ「そういえばルミナはこの中で唯一神様転生した主人公なんだっ
たな」

霊「オリ主ものでは結構メジャーなのにうちではルミナだけよね」

咲「どうしてルミナだけ神様転生なのかしら？」

メタいことを言ってしまうと神に惚れさせて神を敵にするためですね。数ある二次創作の中でも転生させた神が敵になるっていう展開はあまりないのでやってみたかったですよ。

命「その結果生まれたのがあのヤンデレフェニスっていうことか……。うちには同じ名前の子がいるから凄い違和感があるな。しかも俺の眷属だし」

響「まあミコトからしたらそうなんだろうな」

黒「響さん、ミコトさんではなくて命さんですよ」

響「と、そうだった……。というか紛らわしいな。名前の表記の仕方が違うだけで二人は同一人物なんだろう？」

まあ容姿、性格、能力、生きてきた環境は同じですからね。

楯「正直容姿が全く同じだから私たちには判別できないのよね」

霊「そう？私はどうちがミコトなのかわかるわよ」

黒「私もどちらが命さんなのか判別できません」

咲「判別ができるって……。愛の力は偉大ね」

ミ命「愛の力？どう言う意味だ？」

そしてこの安定の鈍さである……。まあこの二人にも相違点はありますけどね。

響「というと？」

だいたいこんな感じです。

- ①命のほうがミコトよりも能力が高い
- ②命のほうがクラマ、シラマと早く再会している
- ③命はフェニスを従えている
- ④ミコトの方がハーレムが広い

ミ「おい、最後のないだよこれ」

霊「……。まあ東方の方がキャラ数が多いから当然と言えば当然なのよね。おかげで私は……」

黒「霊夢さん……。そちらほどではないにしろ命さんもハーレムですからその苦労私もよくわかりますよ」

霊「あんたも苦勞してるわね」

黒「はい……」

なにやら二人の間で妙な親近感が……

ミ「本当に何なんだよ……と、そうそう。容姿が同じといえ
ば俺はここに居る咲夜に違和感を感じるな」

咲「ああ、そういえばミコトのいる幻想郷にも私が居るんだったわ
ね」

まあ正確には幻想郷の咲夜さんがオリジナルでバカテスの咲夜さ
んはクロスの結果生まれたんですけどね。

ル「そんなに違和感あるのか？」

ミ「ああ。なにせ容姿や性格は当然としてもイノチまで同じだから
な」

まあそれは違和感があっても仕方がないですね。

響「うちには他にも妹紅や輝夜、アリスがいるし。もしも会ったら
かなり違和感を覚えることになるだろうな」

でしようね。

さて、それではそろそろあれをやるかな？

楯「あれ？あれってなにかしら？」

主人公の能力比較です。折角の機会なのでやっておこうと思いま
して。

命「まあ読者の中にも気になってる人はいるかもしれないからいい
んじゃないか？」

というわけで大まかに能力を比較すると以下ようになりますね。

戦闘能力

命〈ミコト〉ルミナ〈響

頭脳

ルミナ〈ミコト〓命〉響

身体能力

命〈ミコト〉響〈ルミナ

集中心

響〈ルミナ〉ミコト||命

料理

ミコト〈命〉ルミナ〈響

フラグ建設率

ミコト〈命〉ルミナ〈響

とまあこんな感じですよ。

命「一つ激しくつつこみたいものがあるんだが……」

響「まあそれは後にしよう。わかつてはいたけど俺は能力的に4人の中で一番劣っているんだな」

それはまあ仕方ありませんよ。響さんって4人の中では一番普通に近い方なんですから。

咲「ですが集中力は一番優れています。流石ですね響様」

響「ありがとう咲夜」

集中力に関しては召喚獣の操作で培われたものですね。次点がルミナさんなのはIS操縦があるからです。

楯「そのルミナは頭脳が一番優れているようね。まあISを設計できるほどなんですもの。当然と言えば当然ね」

ル「俺としては他の3人とあまり差はないと思うんだけどな」

黒「そしてやはり戦闘では命さんが一番ですね」

命「おれはミコトよりも早期にクラマ、シラマに再会して能力に覚醒したからな。しかもフェニスのおかげで炎も操れるし」

霊「でも料理の腕はミコトの方が高いみたいね」

まあミコトさんの場合は特別なことがない限り毎日作っていますからね。命さんはレティシアさんやリリさんに止められて時々しか作れないのでそおで差ができたんです。

ミ「皆……特に霊夢に美味しいものたくさん食べさせたいからな」

霊「ミコト……ありがとう」

ミ「ところで最後のフラグ建築率なんだが……俺がトップなのはどういう事なんだ？」

霊「・・・はあ」

響「霊夢がまたため息ついてるな・・・これに関しては俺最下位で良かったよ」

まあ響さんだって凄くモテますけどね。それこそ一般男性と比べるど月とスツポンと呼べるレベルで。

響「そこで落とすのかよお前は・・・」

さてさて、とりあえずこの話はここまでにして次の企画いつてみましょうか。

咲「次は何をやるの？」

それはですね・・・ヒロインの4人に相手の方に思いをぶつけてもらいます！

霊「なっ!?それってまさか・・・」

黒「こ、告白・・・ですか？」

告白でなくてもいいですよ。ただ思っていることを言ってくれればいいので。

それではまずは霊夢さんからいつてみましょうか。

霊「わ、わかったわ。えっと・・・ミコト、あんたと出会って私凄く幸せよ。それこそミコトと出会う前までの生活が色あせて感じるぐらいに・・・私はミコトのいる今の生活が凄く充実してるの。色々大変なこともあるけど・・・これからも私と一緒にいてくれる？」

ミ「霊夢・・・それは俺のセリフだよ。俺も霊夢が居るから今が楽しいと思えるんだ。だから俺はこれからも霊夢と一緒にいるよ」

霊「ありがとう／＼」

うんうん。いい感じですね。

それでは次は咲夜さんお願いします。

咲「ええ。響様、出会った当初は私が無脳だったが故に響様の魅力を理解できずにいましたが・・・今なら響様は誰よりも素晴らしく、誰よりも暖かい方なのだと理解しております。私自身未熟ですので至らぬ点があるかもしれませんが・・・どうかこれからも私をお

側においてください」

響「まったく、こういう時ぐらいいもつと碎けた感じでいいのに……大丈夫だよ。俺が咲夜を手放すことなんて未来永劫ありはしない。咲夜は俺にとつてかけがえのない人なんだから」

咲「ありがとうございます」

ではお次は楯無さんいってみましょう！

楯「了解よ。ルミナ……初めはあなたとはあまりいい関係を築けずにあなただを何度も怒らせたり苛立たせてしまっていた。でもね……今だから思うの。あれは必要な事だったんだって。ああいうことがあったから私は……ルミナの事を知ることができて、ルミナをより愛おしく思うようになった。これからも……私にあな自身を教えてね」

ル「もちろんだよ。なにせ楯無は誰よりも愛おしい存在だからな。だから……俺にも教えてくれよ。俺がまだ知らない楯無のことを」

楯「ええ。いっぱい教えてあげるわ♪」

ではラスト黒ウサギさん！

黒「は、はい！命さん。まだ出会った少ししか建っていませんが命さんは私に多くの希望を与えてくれました。そして私にとって命さんは……なくてはない存在になりました。命さん……本当にありがとうございます。そしてこれからもよろしくお願いいたします！」

命「こちらこそよろしくな黒ウサギ。俺が黒ウサギの希望だというのなら……俺はそうあり続けられるように頑張るよ」

黒「命さん……」

うんうん。皆さん良かったですよ！

さて、そろそろお開きにしましょう。皆さんお付き合いありがとうございます。ごぞいます。

霊「まあ……なんだかんだ少し楽しかったわね」

ル「同感だな」

黒「私もです」

響「またこういった場を設けることはあるのか？」

まあ機会があればやろうと思っていますよ。
それじゃあ年始恒例の挨拶で締めにいきますよ。
それでは………

「「「あけましておめでとう！今年もよろしくお願いいたします
！！」」」

愛なきものの幻想入り プロローグ

side 命

「ふう・・・」

冷たい風を肌で感じながら、俺は森の近くの道を歩いていた。季節は冬。それも気温は氷点下に達するほどの真冬日。だからだろうか、休日にもかかわらず人の影は見当たらない。かく言う俺も好き好んで外を歩いているわけではない。外出している理由はただ一つ。

家居たくないのだ。

あそこには俺の居場所はない。いや、家だけではない。この世界には俺の居場所など、とうにないだろう。

(いつそ本当に消えてしまおうか)

冗談でもなんでもなくそう思ってしまう。どうせ、俺が消えても誰も何も思わない。そう思わせるほど、俺は世界の全てに絶望していた。

「はあ・・・」

何度目かわからない溜め息を吐く。すると、

チリン♪

小さな鈴の音が鳴った。どこからか気になった俺は周囲を見渡す。

しかし、音を鳴らしたと思われるものは見当たらない。

(気のせいか)

そう思いまた歩き出すと、

チリン♪

また聞こえた。もう一度、周囲を見渡してみる。すると、森の手前に二匹の猫を見つけた。

音の正体だ。首に鈴を付けている。一匹は雪のように白く、もう一匹は夜のように黒い。なぜか俺はその二匹の猫から目が離せなかった。確かに猫は好きな方だが、ここまで興味が惹かれることは本来ない。自分でも疑問に思いながら猫を見つめていた。しばらく見つめ

っていると、猫は森に入って行った。

(俺を呼んでる?)

なぜか俺はそう思ってしまった。しかし、そう思ったことに何の違和感も感じない。俺は猫を追って森に入って行った。

どれだけ歩いただろう。少なくとも1時間は歩いている。俺の足は止まらない。いや、止められない。

ただひたすら猫について歩いて行く。

「なあ、どこまで行くんだ?」

俺はついそう尋ねてしまった。すると猫は答えるように、同時に振り返った。

チリン♪

また鈴の音が聞こえた。それと同時に奇妙なことがおきる。突然周りの景色が揺いだのだ。

(何だ、今のは?)

俺はいいようなない感覚に陥って、思わず頭を抑える。ふと、先ほどまで猫がいた場所を見してみる。

しかし猫はいない。

(どこに行った?)

そう思い周囲を見渡す。すると、自分がいた場所から右手の方に開けた場所があることに気づいた。

さらに、木々の隙間から明らかに人工の建物が見える。

(こんなところに建物?)

俺は気になって建物の方に歩き出す。そして、森を抜けると建物の姿を完全に目にした。

「神社?」

そこにあつたのは、幻想的な雰囲気醸し出す神社。これが俺の幻想入りの瞬間だった。

設定

オリ主設定

名前

一夢 命（ひとつゆめ みこと） *今後ミコトと表記

二つ名

『儂き命の理解者』

性別

男

年齢

16歳

身長

176cm

体重

58kg

能力

『命を理解する程度の能力』

文字通りあらゆる命を理解し、命の力を行使する能力。主に以下の
使用法がある。

- ① 命を気配と知って察知する
- ② 他者に生命力を渡して回復能力を促進させる
- ③ 生命力を使い自身の力を強化する

④ 命の状態から怪我や感情を読み取る。しかし怪我はともかく感情はよほど強くなければ読み取れない

以上のように非常に応用が危機使い勝手がいい。この他にも使用用途はある。しかしこれらの能力は命のないもの……つまり幽霊、亡霊には適用されない。

追加能力

- ⑤ 対象の命を奪うことができる

危険度

低

人間友好度

中

容姿

Fateのセイバーを黒髪金目にしたもの。目つきは若干悪い。

そのため、かつこいいというよりは美人の部類に入る。体型は身長
の割に痩せているように見えるが、鍛えているのでそれなりに筋肉は
ある。女に間違えると激怒し長時間説教する。

性格

容姿のせいでよく冷めたクールなイメージを持たれるが、誰よりも
他人思いで、優しい。しかし、本人は自身の優しさを認めておらず、た
だの自己満足と思っている。またふざけたりネタに走ったりもする。
そのため変わっていると認識されることもある。かつては誰よりも
命を尊び、愛情深かったが、愛したものを失った時に絶望に苛まれ、命
を尊ぶ心と愛情が失われてしまった。

設定

上述したとおり、愛情深い者であるが、周りの人間にはほとんど愛
されておらず、親でさえも例外ではない。3つ上に兄がおり、その兄
が非常に優秀であるため親は兄を優遇し、兄に比べ落ちこぼれであつ
たミコトには冷たい態度をとっていた。しかし実際には兄よりもミ
コトの方が遥かに優秀であり、ミコトは兄の立場のために、落ちこぼ
れの振りをしていた。いつしか周りの人間からも落ちこぼれだと思
われて、一部の人間を除き、彼を避けるようになった。そのため彼に
とって本当に大切だと思える人物は数人しかいない。

あまりに愛されなさすぎているため自分に対する愛になかなか気
がつけずにいる。むしろ無意識に気づいていない節がある。

前述したとおり非常に優秀な人間であり、頭脳、運動能力、精神力
どれをとっても、人としてかなり高い能力を持っている。特に計算能
力に秀でており、計算能力は八雲藍に匹敵するほどである。

かつては命を尊ぶ心をもっていたため、無意味な殺生はしなかった
が、今では生き死にに興味がなくなってしまう。特に自分の命
のことをどうでもいいときえ思っている。本人は自身が変わってし

まった自覚は有り、かつての自分に戻りたいと思っているが、戻るためのきつかけをつかめずにいる。

幻想郷に来てからは迫害されること、虐げられることがなくなり若干感情が豊かになった。また、未だに消極的ではあるが命に対して考えるようになった。

『西行寺幽々子』の命を奪ったことにより命を尊ぶ心を完全に取り戻した。

同時に『西行寺幽々子』の命を奪ったことに対する責任と重圧を永遠に背負っていくことを覚悟している。

人前で肌を露出することを嫌っているため常に長袖の服を着用している。

とある理由から戦闘能力が並の人間以上に有る。

家事は得意で、そこらの主婦ではかなわないほどである。

甘いものが食べれない。それなのに甘いものを作るのが非常に得意。

神楽を失ったことによっておとずれたある変化によって自分に向けられる愛に気がつくことができなくなっている。

オリキャラ設定

名前

紫黒神楽（しこくかぐら）

二つ名

『愛を統べる美しき深黒』

性別

女

享年

14歳

能力

あらゆるものに愛される程度の能力

文字通り全てから愛される能力。人はもちろん動物、そして世界からでさえも愛されている。

危険度

高

人間友好度

極低

容姿、性格

Pandora Heartsのアリス

設定

数年前にミコトが生涯愛した少女。一言で言えば彼とは真逆の少女で『全て』に愛されている。ミコトのことを誰よりも理解しており、ミコトの心の支えであった。彼女もまたミコトのことを深く愛しており、ミコト以外の人間にはほとんど興味を示していなかった。またミコトのみを愛していてミコト以外に愛を向けることもなかった。数年前に自殺し、そのことがミコトを変えるきっかけとなった。

何ものからも愛されていたがそれゆえに誰かを愛することを誰よりも恐れていた。そんな時にミコトに出会い。ミコト限定にだが愛することを恐ることがなくなった。ミコトもまた神楽に愛されることよって救われた。

自殺した理由はミコトを愛さない世界に対しての復讐のため。世界に愛された自分が自殺すれば世界に対して十分な復讐になると考えた。見事にその思惑通り神楽を失った世界は衝撃を受け、各地で未曾有の天変地異が起きた。

名前

紫黒竜希（しこくたつき）

二つ名

『悉くを断つ道化』

性別

男

年齢

16歳

能力

『悉くを斬る程度の能力』

あらゆるものを斬ることができ、文字通り斬ることができないものなど無い。たとえそれが神でも概念でも心でも。誓約として『刀』を使わなければならない、また斬るものが強大であればあるほど刀自体も強力なものでなければ刀自体が能力に耐えられずに壊れる。

危険度

低

人間友好度

極高

容姿

BLEACHの黒崎一護を黒髪黒目にした姿。

しかし普段の表情は締りがなく、人懐っこい笑顔でヘラヘラしている（要はコンが入っている状態の一護に近い）

性格

非常に破天荒・・・というか常に巫山戯ている。

特に戦闘となると普段の1.5倍は巫山戯るので真面目に戦っている相手にとっては不愉快極まりない。

ただフレンドリーであり誰とでも仲良くはなれる。

というのは竜希が作った仮の人格、すなわち仮面である。

本来の竜希は非常に真面目で物事を深く考えることができる人物である。

また常に冷静で物事において自分が最適であると思える行動をとる。

つまりTOシリーズのゼロスとかレイヴンみたいな感じ。

設定

外の世界で数少ないミコトの親友でありミコトの理解者。

神楽の双子の弟でもあり神楽のことある意味ではミコト以上に理解していた。

とにかくいつも巫山戯ており考えていることが少々わかりにくい。異常なまでに武芸に秀でており人間のレベルを遥かに超えている。

特に剣技は凄まじく能力も相まって『最強』である。

紫黒家という300年前まで幻想郷に暮らしていたものの末裔で、竜希はその一族の中でも歴代で最も強大な力を持っている。

決して自らが強く望むことが敵わない存在であり、そのせいで竜希は生まれてから今まで心から満たされたことがただの一度もない。

このことからミコトは竜希を『世界で最も不幸な存在』と認識している。

竜希もまた神楽以外の何者からも愛されなかったミコトを『世界で最も哀れな存在』と認識していた。

上記の理由から真面目に生きていることに意義見出すことができなくなってしまう、普段は道化の仮面をかぶることにしている。

強く望む『求め』を二つ持っている。妖夢がそのうちの一つの『求め』を満たす可能性があるため妖夢に強く期待している。また、ミコトはもう一つの『求め』も妖夢なら満たせるのではないかと思っている。

紅

紫が幻想郷を作る前に出会った男性。ミコトと同じく愛されていなかったらしい。紫は彼を滅したようだが彼に対して特別な感情が・・・？

能力

???

クラマ、シラマ

二つ名

『千変万化の忠猫』

性別

女

年齢

16歳

能力

『主に応え姿を変える程度の能力』

ミコトが望んだ姿と性能に姿を変える能力。ほとんどどんなものにも姿を変えられるが生物に変化することはできない。ミコトは主に戦闘時に彼女たちを銃などの武器に変えて戦う。

危険度

低

人間友好度

低

容姿

リリカルなのはのフェイトに猫耳猫尻尾がついており、黒い髪と黒い目をしているのが霊獣のクラマ。

リリカルなのはのフェイトに猫耳猫尻尾がついており、白い髪と白い目をしているのが妖獣のシラマ。

性格

共通

二人とも礼儀正しく、主であるミコトには常に絶対服従。どのような命令にも逆らわない。

クラマ

ミコトに対する忠誠はかなり高いがどこか抜けたところがありたまに本当にミコトの使い魔なのかと思わせる言動をする。

シラマ

感情が表に出にくい。よく子供っぽい行動をとるがクラマが間の

抜けたことをするとフォローすることがよくある。

設定

10年前、ミコトに命を与えられ命を救われた猫。ミコトは彼女たちを救った際に力の大部分を渡してしまったためミコトの力の大部分が失われてしまった。

ももとは普通の猫であったがミコトの力が影響してそれぞれ霊力、妖力が増幅し霊獣、妖獣となった。

命を与えられ10年間生きてきたが本来の猫以上に長く生きてたためにもう十分に生きてきたと思いきミコトに命を返すことにした。

また、ミコトの現代での扱いに思うところが有り、ミコトに苦しんで欲しくないと思いき命を返す際に幻想郷に連れて行こうと決意した。

現在はミコトの命と完全に同化しており、ミコトの使い魔のような存在になった。

シラマは話すことができずに主に動作で意思疎通を図る。クラマはシラマの考えが分かるためクラマがシラマの気持ちを代弁することがある。

普段は鈴の姿でミコトの右手に巻き付かれている。

愛されなかった者の末路

文字通り何者にも愛されなかったモノの末路。その姿は黒く、基本的には人型だが自らの姿、形を変えることができる。何よりも愛を求めめる存在であるが愛を感じることができない哀れな存在。また、自らの同士を増やすためにも彷徨ってる。本来は幻想郷には存在しない。

命なき暴虐者

文字通り命を持たない暴虐者。その姿は愛されなかったものの末路を白くしたようなものである。命を持つ者に襲いかかり命を『奪おう』とする。この者達もまた本来なら幻想郷に存在しない。

ミコトのヒロイン達の感情

霊夢

賽銭を入れてくれたことから恩人として感謝している。また、紫からミコトのことを聞かされ、ミコトを愛そうと誓う。しかし現在ミコトに向ける感情は同情や小学生の初恋程度のもものであり、愛には程遠い。

紅霧異変後

ミコトに対する愛情が確かになりつつある。同時に若干ミコトに依存しつつある。

永遠亭編後

ミコトが今のようになってしまった原因を作った神楽について知りたがっている。

日常編後

神楽のことを少し知ることができたがそのせいでさらに疑問が深まってしまう。ミコトの過去を誰よりも知りたがっている。

妖々夢編後

竜希から神楽のこと、そしてミコトの変化について聞かされミコトを愛し続けることを強く誓う。しかしその愛は大きすぎ、形は歪み始めてしまっている。

藍

今まで見たことのない表情を見せたミコトを気にしておりもっと知りたいと思っている。また自分のミコトに対する感情はまだうまく理解できていない。

魔理沙

ミコトの容姿と優しさに一目惚れした。そして短い間だがミコトの人柄に接して確かな恋に変わる。

ルナチャイルド

説教されたことからミコトを恐れていた。しかし転んだ時に毎回のように面倒を見てもらううちに尊の優しさに惚れた。

ルーミア

食べ物してくれる人ということで好印象。しかし彼女の心の奥底で

は彼に対して確かな感情が芽生えている。

咲夜

ミコトのことを面白く、気が合う人だと思っている。ある意味性格的に一番ミコトに近い。

レミリア

敵である自分の願いを叶えようとしてくれるミコトを信頼している。また、妹を救ってくれたミコトに多大の感謝を抱いている。

フランドール

ミコトのことを兄のように慕う。ただ普通の兄に向ける感情よりはやや恋愛寄り。ミコトのヒロインズの中で一番積極的に周りに羨ましがられている。

輝夜

愛することを恐る自分を救ってくれたミコトを心から感謝している。そしてミコトのことを心の底から愛している。現在のところミコトへの感情が一番はつきりしている。

鈴仙

自分の目を正面から見ってくれるミコトに特別な感情を抱く。特にミコトの月のような色の目に強く惹かれている。

てゐ

仲間たちを助けてくれたミコトに感謝している。そして自分のことを理解してくれているミコトに好感を持っている。

文

ミコトのことは今一番の興味の対象になっている。同時にミコトに失礼なことを聞いてしまったことを申し訳なく思っている。実は文はミコトの……？

優心

読者考案のオリジナルキャラクター。父の形見である煙管を持っているが無事であるミコトに興味を持っており、ミコトのことを深く知りたいと思っている。

メルラン

文々。新聞に記載されたミコトの特集記事で見てミコトに一目惚

れた。恋心を抱くというよりはフアンのような心理に近い。

幽々子

ミコトに救われたことによってミコトに惹かれるようになった。同時に重荷を背負わせてしまったミコトに対して申し訳なく思っている。

幽香

花の命を尊重し、慈しむ心をもつミコトに興味を持つ。またミコトがマスターパークを使ったことによつて更に興味は強くなっている。

萃香

自らの孤独を埋めてくれたミコトに好意を寄せる。恋愛感情はあるがほぼ無自覚。

早苗

霊夢に次ぐミコトのセカンドヒロイン。ミコトの中学時代の後輩であり、ミコトを一途に慕う。現段階ではただ一人ミコトに想いを告げた。

にとり

ミコトの優しさに見事に心を射抜かれた。もはやベタ惚れである。リファイア

読者考案のオリジナルキャラクター。文文。新聞をきっかけにミコトを知り、実際に会って惚れ込んだ。

竜希のヒロイン達の感情

妖夢

竜希の『求め』となり、竜希を呪縛から解き放とうと強く願っている。また竜希の持つ特殊な魅力に当てられており、無意識にだが恋心を抱いている。

雲上空

自分よりも遥かに強い力を持っている竜希に惹かれている。同時に自分では越えられないことを悔しがっている。

美鈴

自分と同じく強者である竜希の胸の内を理解してあげることができずに嘆いている。

椀

初対面時に竜希にたらしこまれてしまった。いつか自分の尻尾を竜希に触らせてあげようと考え日々ブラッシングを心がける。

加奈子

竜希の異常なまでの強さに実は惚れ込んでいた。軍神といえどやはり女であるようである。

そのほか設定

時期は紅魔郷前。しかし、永夜抄は終わっている。

アリスは魔理沙中毒でない。

藍は橙中毒でない。

咲夜はPADでない。

紫の冬眠はある程度抑えられている。

スペルカード

ミコト

混符『アンビバレンス』

黒と白の弾幕を展開して放つ。ミコトの持つスペルカードは基本的にこれをベースにしている。黒の弾幕は魔力で強化した霊力、白の弾幕は魔力で強化した妖力を秘めている。

混符『アンビバレンス・ストリーム』

黒と白のレーザーを数本放つ。直線上にいる相手に対して強く効果を発揮する。

混符『アンビバレンス・スプラッシュ』

黒と白の大きな二つの球体を放ち、一定距離球体が敵に接近すると拡散して小型の弾幕を大量展開する。

混符『黒と白の螺旋』

黒と白の弾幕を螺旋状の展開する。当人曰く一番見栄えがいらしい。

混符『黒と白の驟雨』

黒と白の弾幕を上空から雨のように降らせる。ミコトの持つスペルカードの中では最も範囲が広い。

混符『黒と白の奈落』

アンビバレンスの弾幕密度をより濃くしたスペルカード。ミコトのスペルカードの中では被弾率が一番高いので弾幕ごっこでは最も適している。

恋符『マスタースパーク』

ミコト流マスタースパーク。魔理沙のものよりも威力は落ちるが

それでも迫力満点。

混符『トリニティ・マスタースパーク』

ミコトの魔力、クラマ霊力、シラマの妖力を一つに結集して放つミコト流マスタースパーク。威力は魔理沙の『ファイナルマスタースパーク』と互角。

命極『国生みの伊邪那岐』

あらゆる生命を癒す空間型の結界を張る。治癒する対象はミコトが決めることができる。一度に複数の生命を癒すために作ったスペルカード。

命獄『黄泉の伊邪那美』

空間型の結界を展開し空間内に居るすべての生物から命をじわじわと汲み上げる（奪う）事ができる。こちらも対象はミコトが決めることができる。但し無限の命を持つ蓬莱人には効果は薄い。命を奪うという特性上ミコトはあまり好んで使わない。

執事秘技『銀光繚乱』

あとがきで一度だけ使ったネタスペル。銀のフォークとナイフを大量に投げる。フォークとナイフを使ってるのは本人曰く『フォークとナイフは執事の武器だから』らしい。

ラストスペル

???

ミコトのラストスペル。あまりにも強力にして悍ましすぎる効果を持つ為に作ったミコト自身は禁忌にしている。

竜希

飛天『瞬龍閃』

相手が瞬きをするのに合わせて最速の抜刀術を放つ技。竜希自身の速さも相まって決まればほぼ不可避。

飛天『絶龍閃』

竜希の能力を込めることによって威力を高めた抜刀術。抜刀に時間をかければかけるほどにその威力は増す特殊な技。

飛天『偽龍閃』

利き腕で抜刀をするふりをして逆の手で抜刀する技。タイミングをずらして相手のガードをすり抜けさせる為に使用する。家庭教師ヒットマンREBORN!の時雨蒼燕流『五月雨』とほとんど同じ。

真・奥義

???

奥義である『天翔龍閃』を超える剣技。本人曰く『使ったら世界が真っ二つになるかも』と評しているためまず使うことはない。

霊夢

霊符『白紅の結界』

ミコトの弾幕を参考に霊夢が作ったオリジナルスペカ。白と紅の弾幕を展開する。その威力は夢想天生に迫る

幻想郷縁起

儂き命の理解者

一夢命

能力

命を理解する程度の能力

危険度

低

人間友好度

中

主な活動場所

如何なる場所でも

博麗神社に住まう外の世界からの来訪者、すなわち外来人である。普段は博麗神社の雑務をこなしているが紅魔館で執事の仕事をしたり永遠亭で診察をしたり寺子屋で子供たちに勉強を教えたりと活動範囲は相当広い。

幻想郷には彼以外にも外来人は何人かいるがミコトは外来人の中でも珍しく外の世界に帰ることを望まず、幻想郷での生活に馴染んでいる（※1）。外の世界に関する知識は非常に豊富であるので外の世界に興味がある者は彼から話を聞いてみるといいかもしれない。

※1 携帯とか言う機械にも依存していない

く命を理解する能力く

ミコトは命を理解する能力を要している。周囲の命を気配として察知したり、自身の生命力を他者に分け与えて治癒したり、生命力を使って身体能力を向上させたりとその用途は多岐にわたる。また、命から強い感情や強い意思を読み取ることもできる。

特に凄まじいのは命を奪うことさえできる点だ。彼にこの能力から逃れる術はほとんどなく、発動されれば命を諦める他ない。ミコト

がこの用途で能力を使用することは殆どないのでそこまで心配する必要はないと思うがやはり恐ろしいと言わざるを得ない。

非常に強力な能力であるが弱点もある。命を持たないもの、すなわち幽霊や亡霊といった類には一切通用しないという点だ。その為ミコトは幽霊と戦闘することを苦手としているようである。

くクラマ、シラマく

ミコトはクラマという霊獣とシラマという妖獣を使い魔として従えている。クラマとシラマは普段、自身の能力で鈴の姿を撮りミコトの右腕に巻かれており、有事の際にミコトの武器に変化してミコトを支援する。

また、クラマもシラマもミコトの命に同化しており、その為ミコトは二人の霊力、妖力を自身の力として用いることができるようだ(※2)。

※2 その上魔力まで扱えるのであるから贅沢である

く魔法使いく

ミコトは魔力を有していることから魔法も使用することができる。彼自身も魔法に興味があるらしく魔理沙からマスタースパークを教わり、使うことができるようだ。

また紅魔館に住まうパチュリーは彼の魔力に目をつけ、自らの弟子にしようとしていると小耳に挟んだことがある。よほど才があるようだ。

く目撃報告例く

・博麗神社に参拝に行ったら親切に参拝の作法を教えてくれた。帰るときには頭を下げってお礼を言ってくれて非常に礼儀正しいと思つた(匿名)

ミコトは非常に親切である。おそらく彼にとってはそれが普通の対応なのであろう。尤も博麗神社の評判を上げるためにやっている

可能性もなくはないが(※3)。

※3 彼は意外と打算的だ

・この間いつもと違う服装で買い物にきました。口調も違っていたし少し戸惑いました(八百屋の娘)

紅魔館で執事の仕事をしている時に訪れたのであろう。執事の時
の彼は普段とは違っていているようだ。

・よく人里で会うが美人で優しいから息子の嫁さんになって欲しい
の(匿名)

確かに女性のように見えるが彼は男性である(※4)。彼の前でそ
れを言わないように気をつけて欲しい。

※4 しかし外見は絶世の美女と言っている

〈対策〉

非常に戦闘能力は高く、悍ましい能力を有しているが身構える必要
はない。彼は争いを好まない穏やかな性格であるのでこちらから危
害を加えなければむこうも危害を加えることはまずないだろう。例
え危害を加えたとしても事情によつては攻撃するよりも先に注意を
促そうとするのでその時に誠意をもって謝れば許してくれるかもし
れない。どうしても彼との衝突が避けられないのなら彼の能力の及
ばない幽霊を味方につけることをお勧めする。尤も幽霊が協力して
くれるなどごく稀であるだろうが。

またミコトに対してやってはいけないことがある。それは彼を女
性と間違えたり彼を女性扱いしてしまうことだ。無邪気な小さな子
供ならばまだ大丈夫であるがそれ以外の人物であるなら例外なく人
生のこれ以上ないというほどの心的外傷を負うことは避けられない。
私の調べでは霖之助、慧音、レミリアがその被害にあっているらしい。

悉く断つ道化

紫黒竜希

能力

悉くを斬る程度の能力

危険度

低

人間友好度

極高

主な活動場所

冥界

生者でありながら冥界の白玉楼に住まう変わり者。その世界から来た外来人であり、同じく外来人であるミコトとは盟友関係にあるらしい。主に妖夢と共に白玉楼の雑務をこなして日々を過ごしている。

性格は破天荒の一言。常に笑顔を振りまきながら巫山戯た様な言動をとっている為、慣れるまでは同じ空間にいると非常に疲れる（※1）。しかし初対面の者であっても友好的に接し、基本的には親切ではあるので人によっては好感を持つかもしれない（※2）。

※1 かく言う私も一緒にいると非常に疲れる

※2 私は苦手であるが

く悉くを斬る能力く

竜希の能力は文字通り、森羅万象あらゆるもの斬り裂くことができる能力である。物質はもちろんのこと精神や概念、はたまた絆といった形の無いものさえなんでも斬ることができるといえばその恐ろしさは十分に伝わるであろう。さらに本人曰く刃を通して斬らないこともできるといふ（※3）。

制約として刀を使わなければならないらしいが竜希は常に帯刀しているのです。そのような制約はあつてないようなものだろう。また、能力を使うにはそれなりの業物を使わなければならないらしい。

※3 意味があるのかと私は思う

く絶柵く

竜希の持つ愛刀。刃渡り30寸にも及ぶ長刀で、その刃はまるで夜のように黒い。刀の付喪神である雲上空が竜希の為に制作した刀であり、雲上空曰く幻想郷でも5指に入る業物といっても過言ではないらしい。竜希の能力にも十分に耐えられるようでもまさに鬼に金棒である(※4)。

※4 その程度ではすまないであろうが
く紫黒家く

外来人である竜希だが実は彼はかつて幻想郷に存在した紫黒という一族の末裔でもある。紫黒は幻想郷の創世にも関わった歴史の古い一族であるが300年前にある不祥事を起こしたために幻想郷から去っている。稗田家の記録によると紫黒はある重大な使命を秘めていたのだが年月が経つにつれその使命を歪めていってしまい、その結果300年前の不祥事に起こす結果になってしまったようだ。300年前に紫黒家が起こした不祥事についてはここでは語らないので興味があるものは竜希に直接聞くといいであろう。尤も答えてくれるとは限らないが。

く最強く

見かけからはとても判断できないが竜希の実力は相当高い。それこそ幻想郷の賢者紫をもつてして幻想郷最強と言わしめるほどにだ。人間でありながら身体能力は並の妖怪を大きく上回り、大妖怪でさえも蹂躪し、幻想郷を滅ぼすことも造作無いらしい。真偽のほどは私には判断しかねるがもし真実だとしたら正気の沙汰ではない(※5)。

※5 紫の言っていたことなので信憑性に欠ける

く目撃報告例く

・よく人里に顔を出すな。いつも笑っているけれど何がそんなに楽しいのだろうか？(匿名)

理由は不明だが彼はいつも笑顔を絶やさない。本人はどういうつもりなのかは知らないがその笑顔は確実に彼の破天荒さを助長して

いる（※6）。

※6 しかし幻想郷において強いものが笑顔であることを忘れてはならない。

・この間森で妖怪の大群と戦っているのを見た。表情や雰囲気はいつもと同じだったのに妖怪たちを無傷で倒していて正直少し恐かった（匿名）

彼は戦う時でも笑顔を絶やさない。妖怪たちは竜希を夕御飯にしようと思ひ襲いかかったのであるが返り討ちにあつたようだ。妖怪たちの冥福を祈るばかりである。

・この前うちの子と遊んでいるのを見た。楽しそうだったけど拐かされないか心配になった。（匿名）

気持ちには非常にわかる。何故か彼からは不審さを感じられる。お子さんには竜希と一緒にいるときは注意するようによく言つて聞かせることをお勧めする。

↳ 対策

負けたくないなら戦うなの一言に尽きる。もしも戦うことになつてしまったら勝つことは早期に諦めるべきである。下手に希望を保持しても無駄なのだから。

といつても竜希自身は戦いを好まない人畜無害な人物なのであまり心配をする必要はないであろう。怒らせてしまったとしてもいきなり襲いかかるなどという失礼なこともまずしない。

敵にさえ回さなければ特に気を使う必要も礼儀を払う必要もなく、普段通りに接していれば厄介事にならずに済むのでそのことを肝に銘じておくように。

重ねて言うが負けたくないのであれば竜希に決して戦いを挑んではならない（※7）。

※7 大事なことなので2回言った

第1話

side ミコト

俺は目の前にある神社を眺めていた。お世辞にも大きいとは言えない神社。しかし、小さいとも言えない神社だ。ただ、参拝客がいなことから、あまり有名な神社ではないのだろうと推測した。

(さっきの猫も見失ってしまったし、とりあえず参拝するかな)

そう思い、俺は鳥居をくぐり、神社の境内に足を踏み入れた。真ん中は歩かないように、いつか数少ない友人が言っていたことを思い出しながら、境内を歩く。やがて賽銭箱の前に到達する。賽銭を入れようとポケットから財布を取り出す、小銭を取り出そうとするがあることに気づいた。

(1円玉しかないな)

小銭入れの中には1円玉が3枚しかない。いくらなんでも賽銭に1円玉を使うのは失礼だ。そう思い、札いれを開けてみる。そこにあったのは諭吉が2枚。どう考えても賽銭には多過ぎる金額だ。しかし、今はこれしか手持ちがない。両替使用にも近くに売店らしきものは見当たらない。

(仕方がない)

俺は2枚の諭吉のうち1枚を手にして、賽銭箱に入れた。その後作法どおり、2礼2拍し、目を閉じ、手を合わせお参りする。といっても、神様に願うことも、願いたいことも俺にはない。強いて願うとしたら。

(昔の自分に戻れるきっかけが来ますように)

しばらく念じて、目を開け、手を下ろす。そして、また1礼しようとした瞬間。

(誰か近づいて来る?)

生き物の気配を感じた。少し違和感があるが、この感じからしたら人間だろう。神社の中からこちらに近づいてくる。

俺は、生き物の気配に敏感だ。近くに生き物がいれば、たとえ見えていなくてもわかる。だから今も2つ(・・・)の生き物の気配を感じ

ている。そして、近づいてきた人間が姿を現した。近づいてきた者の正体は巫女だった。歳は俺よりもいくつか年下であろう。顔は男性受けする可愛いものだと思う。しかし、俺が一番気になったのはその服装だ。紅白の装束を着ているがなぜか腋の布がない。袖はベルトのようなもので固定されており、胸元には黄色いスカーフ。髪には大きめの赤いリボンをつけている。俺の知っている(大して詳しくないが)巫女装束とは明らかに異質なものであった。そんなことを考えていると、紅白巫女は満面の笑みを浮かべ俺に近づいてきた。

「あなた！参拝客ね！」

紅白巫女はものすごい勢いで俺に顔を近づけてそうやってきた。

「あ、ああ」

その勢いに気圧されながらも俺はかろうじて返事を返せた。紅白は賽銭箱を持ち上げて中身を確かめるように振った。

(どこにそんな力があんだよ)

そう思いながら、俺は見ていた。すると紅白は表情を変えた。

「……ない」

紅白はそう呟き、俺の方を見た。……とてつもない怒りの表情をあらわにして。

「あなた！賽銭も入れずに参拝するなんてどういうつもり！」

どうやら俺が賽銭を入れたことに気づいてないらしい。まあ札だから音がならなかったのだろう。というか。

(俺以外に賽銭入れた奴いないのか?)

俺以外に入れたものがあるならば音が鳴るはずだ。しかし実際に音はならなかった。つまり俺以外に賽銭を入れたものがない。参拝客がいないということだ。まさかここまで廃れた神社だとは。

「人をぬか喜びさせてそんなに楽しいのかしら？」

紅白は怒りで震えながらおれに向かって言う。

「落ち着け、お前は誤解している」

「言い訳無用！覚悟しなさい！」

そうやって紅白は手のひらに光る玉を出してきた。

(なんだ、あれ？気○弾?)

俺が気になって見ていると、紅白はその玉は俺に向かって放つてきた。玉は俺の頭部に直撃し、体は少し宙に浮き、地面に叩きつけられ、俺は意識を失った。

side 霊夢

「まったく・・・」

私はいま機嫌が悪い。その原因はそこで寝ている（気絶させた）男（女っぽいけど私の勘がいつているから男だ）にある。こいつはあろうことか賽銭を入れずに参拝したのだ。だから私はこいつに弾幕による天罰を与えた。まあうちの神社には信仰する神様は居ないけど。「しばらくはまた貧乏生活か」

これからの生活を考え、思わず落ち込む。喜びがあつた分落ち込みは倍増した。

「あくあ、お札でも入ってないかしら」

そうして、賽銭箱の中を覗いてみる。するとそこには一枚の紙が入っていた。その紙を拾って見てみると、その紙には男性の絵が描かれており、端には10,000という数字が書かれていた。私はこの紙を見たことがある。以前紫に見せてもらった外の世界のお金。それも日本とかいう国で一番価値が高いお札だ。

「どうしてここに？」

そう口に出したとき、私ははっとした。

『落ち着け、お前は誤解している』

彼はあのとときそう言っていた。つまり彼はきちんとお賽銭を入れて、参拝していたのだ。よく見れば彼の服装は幻想郷では見ないものだ。よってこの外の世界のお金は外来人である彼が入れたもので間違いない。私は恩人に弾幕をぶつけ気絶させてしまったのだ。

「どうしよう・・・」

今回のことは明らかに話を聞かず気絶させた私に非がある。

「とりあえず、中で寝かせるか。」

私は彼を連れて神社の中に入って行った。

俺は今夢を見ている。なぜ夢だとわかるかと言えば目の前にはずのない人物がいるからだ。

世界に愛された彼女。あらゆるものに愛された彼女。俺が生涯愛そうと誓った彼女。そして、誰からも愛されなかった俺をただ一人愛してくれた彼女。

その彼女が今俺の目の前にいる。俺は嬉しかった。夢とはいえ愛する彼女に会えたから。しかし、同時に悲しかった。自分のせいで死んでしまった彼女を目にして。

彼女は2度俺を変えた。1度目は出会った時。誰からも愛されなかった俺の悲しみと苦しみを癒やして、生きることと希望を与えてくれた。2度目は死んだ時。彼女の死が俺の中にあつた命に対する思いと愛をなくさせ、生きること、そして世界そのものに絶望させた。(お前はもう、俺を変えてくれないのか?)

そう思っていたら、彼女が俺の後ろを指差した。それに従い後ろを向く。そこには何人もの人がいた。そのほとんどが俺の知らない人物だ。ただ見覚えのある人物もいる。例えば、先ほど俺を気絶させた紅白だ。なぜここに彼女がいるのだろうか。そう考えていたら、彼女達の方から光が俺に伸びてきた。その光に包まれた時、俺は眠りから目覚めるのを感じた。

目を覚ました俺の目に最初に映ったものは建物の天井だった。どうやら俺は布団の上で横になっっているようだ。

「知らない天井だ・・・」

ひとまずお約束の言葉を言っておく。次に俺は現状の確認にうつることにした。布団から起き上がり周囲を見渡してみる。一言で言えばありふれた質素な和室だ。開いた襖から外の景色が見える。外の景色から察するにここは神社の中なのだろう。

(あいつが運んできたのか?)

そう疑問に思っていると、人の近づく気配を感じた。しばらくして、近づいてきた人物が姿を現す。先ほど俺を気絶させた紅白だ。手には濡れたタオルと水の入った桶を持っている。

「あら、起きてたのね」

「ああ、ついさつき目が覚めた」

「そう。気分はどう？ずいぶんうなされてたけど？」

「うなされてた？俺がか？」

「他に誰がいるのよ」

まあ確かに俺しかいないな。タオルと桶は俺のために持ってきてくれたらしい。それにしてもうなされてたってどんな夢を見てたんだろうか？なぜか思い出せない。ただなんとなく嬉しいような悲しいような気がしていた。

「ちよつと、大丈夫？」

紅白は突然黙り込んだ俺に、心配そうに話かけた。

「大丈夫だ。問題ない」

また俺はお約束の言葉を返した。

「そう。ならいいわ」

紅白は俺の言葉を聞くと安心したようにそう返した。どうやらこのお約束の返しは知らないらしい。

「その、えつと・・・」

紅白は俺の方を向いてなぜか申し訳なさそうにどもっている。

「どうした？何か言いたいことでもあるのか」

気になった俺は聞いてみた。すると

「さつきは、ごめん」

紅白は小さな声でそう言った。恐らく俺を気絶させたことを言っているのだろう。

「別に、気にする必要はない」

「でもー」

「謝ったってことは誤解だっけ気づいたんだらう？だったら俺はもう何も言えないし気にしていない。むしろあんな紛らわしいことをした俺にも非がある」

「そんなこと」

「本人がいいと言っているんだからもういいだろ。この話はもうおしまいだ」

実際俺は気にしていないし、怒ってもいない。何より、正直この話は早く終わらせたいかった。

「そう。わかったわ。もう謝らない」

「それでいい」

こうして、この件は幕を閉じた。

「そういえばまだ自己紹介してなかったわね。私は博麗霊夢。」

「この博麗神社の巫女よ。あなたは？」

「俺は一夢命だ。一夢と呼ばれるのは慣れていないからできればミコトって呼んでくれ」

「わかったわ。よろしく、ミコト。私も霊夢って呼んでくれていいわ」
「わかった。よろしく霊夢」

これが、俺がかつての俺に戻るきっかけを与えてくれた、楽園の素敵な巫女、霊夢との出会いである。

第2話

side ミコト

「改めてお礼を言うわ。お賽銭ありがとう！」

霊夢は俺に向かって満面の笑みを浮かべ礼を言ってきた。

「別に、手持ちがそれしかなかっただけだ」

俺はそう返した。事実、俺の財布には諭吉しかなかった（アルミも3枚あったが）わけだから嘘は言っていない。

「それでもお礼を言うわ。本当にありがとう！」

またしても笑みを浮かべ礼を言う。初めて対面した時と同じ笑顔だ。

（この笑顔が諭吉1枚か）

だとしたら安いと思った。俺の周りにはこんなふうな俺に笑顔を見せてくる人なんてほとんどいない。だからこそ、俺にとって霊夢の笑顔には諭吉以上の価値があるように思えた。

（後でもう一枚入れるか）

俺は心の中でそう固く決意した。手持ちがアルミ3枚になろうが構わない。

「お礼にお茶を」馳走するわ！付いて来て」

そう言って、霊夢は俺の手を引いて居間に向かった。

side 霊夢

「お茶入れてくるから少しここで待ってて」

そう言って、私は台所に向かった。今、私の気分はとても晴れやかだ。久しぶりにお賽銭が入った。しかも、かなりの高額だ。

（後で、紫に変えてもらおう）

私は、鼻歌まじりにお茶の準備を始めた。いつもは何回使ったかわからない出がらしを使っているが今日は違う。急須に入っている古い茶葉を捨てて、棚から新しい茶葉を取り出し、急須に入れる。恩人

をもてなすのだ。贅沢しなければ。

(そうだ、確かまだ)

私は、茶葉が入っていた棚とは違う棚をあけ、そこから栗羊羹を取り出した。以前紫にもらった人里で美味しいと評判の栗羊羹だ。実際私も食べたが。程よい甘さと大きめの栗がうまく合わさってとても美味しい。最後のひと切れであったが、ミコトはは恩人。しかも勘違いで気絶させてしまった。ミコトは気にしていないといていたが、私はどうしても気にしてしまう。普段の私であるなら彼の言うとおり気にすることはなかったが、彼は恩人だ。気にせずのはいられない。恩人のためなら栗羊羹のひと切れやふた切れさし出すことに抵抗などない。私は栗羊羹を皿に載せた。お湯も沸いたようなので急須にお湯を入れ、湯呑を2つ用意してお盆に乗せて、ミコトの待つ居間に戻った。

「お待たせ、ミコト」

そう言って居間に入る。そこには私の恩人であるミコト。そして、幻想郷の賢者八雲紫がそこにいた。

side ミコト

霊夢がお茶を入れたに行った。人にお茶を淹れてもらうのはひさしびりだな。俺はひとりになった部屋でそう考えていた。さて、ひとりで待つのも暇だし、そろそろ話を聞かか。

「いい加減姿を現したらどうだ？」

俺は、一見すると何も無い空間に向かってそう言った。すると、その空間が開いた。開いた空間には多くの目のようなものが見える。そして、その空間から1人の女性が現れた。長い金髪に、白い帽子、白と紫色の衣装で、傘を持っている。10人中10人が振り向いてもおかしくないほどの美女だ。しかし、その雰囲気はどこか胡散臭さを醸し出しており、人間とは違った気配を感じた。

「よくわかったわね。いつから気づいていたの？」

「この神社に入ったときからだ。ずっと気配を感じていた」

そう。この女性は俺が神社に入ってからずっと俺を見ていた。姿は見えなかったが、神社に入ってから気配は感じていた。そして、目

を覚ましたあの時も気配を感じていた。このことから俺は彼女が俺を見ていたのだと結論づけた。

「そう。あなた、ただの人間じゃあなさそうね」

「さあ。どうだろうか？」

「おもしろいわね。あなた、名前は？」

「聞いてたんだろ？だったら名乗る必要はない」

「わかってないわね。こういうのは本人の口から聞くことに意味があるのよ」

「だったら先にあんたが名乗れよ。人の名前を尋ねるなら自分から名乗るのが礼儀だろう？」

「ふふ。それもそうね。私は八雲紫。霊夢の保護者みたいなものよ」

「八雲ね。わかった。俺は一夢命だ。もう知ってるだろうけど。」

「よろしくね。一夢君」

「一夢と呼ばれるのは慣れていないといっただろう」

「あら、あなただつて八雲と読んでいたじゃない。名前で読んで欲しかったら紫と呼びなさい」

「どうやら彼女は胡散臭いプラス食えない女性のようなだ。」

「わかったよ。紫」

「それでいいのよ。ミコト君」

「できれば君付けもやめてほしいんだが」

「ふふ。わかったわミコト」

本当に食えない人だ。そう思っていると、霊夢が居間に向かって来るのを感じた。少しして霊夢が居間に着いた。

「お待たせ。ミコト」

そう言つて霊夢が居間に入ってきた。そして、紫の姿を確認すると。

「なんでいるのよ。紫」

呆れた様に、いや実際呆れているのだろう。紫に言った。

「あら？私がここにいたらいけないのかしら？」

「当然よ、ここは私の神社なんだから勝手に入ってこないで」

「どうやら、というよりやはり、霊夢の保護者というのは嘘のようだ。」

保護者だったらこんなふうに言われることはないだろう。

「冷たいわね。ところでいいのかしら？せつかくのお茶が冷めちゃうわよ」

「わかってるわよ。今淹れるわ」

そう言つて霊夢はお茶の準備を始めた。

「大丈夫？紫に変なことされなかった？」

お茶の準備をしながら霊夢が訪ねてきた。どうやら霊夢の紫に対する信頼は薄いようだ。

「大丈夫だ。俺の暇つぶしに付き合ってくれただけだから」

「そう。ならいいわ」

「ひどいわね。そんなに私が信用できない？」

「できないわね」

霊夢は迷いなく断言した。しかし、どうも本気で言っているようには聞こえなかった。

「ふふ・・・♪」

どうやら紫も本気で言ってるわけではないと気づいてるようだ。

「はい。どうぞ」

そうこうしているうちに。お茶を淹れ終わったようだ。俺と霊夢の前にお茶が置かれている。さらに俺の前には栗羊羹も置かれている。

「あら？新しい茶葉を使うなんて、奮発したわね」

「別にいいでしょ。紫には関係ないんだから」

「関係なくなてないわ。私も飲むんだから」

そう言い紫はどこからか取り出した湯呑にお茶を注いだ。

「ちよつと！誰も飲んでいいなんて言っただけよ！」

「いいじゃない。もともとの茶葉は私があげたものなんだから」

「うっ」

反応を見る限り、事実のようだ。霊夢は反論できずにいる。

「ところで、羊羹は彼の分しかないのかしら？私も食べたいのだけだ」

「悪いけど彼の分しかないわ」

「あら。残念ね」

どうやら羊羹は俺の分しかないらしい。しかし困ったことになってしまった。

(俺甘いもん食べれないんだけど)

そう。俺は甘いものが苦手なのだ。食べると気分が悪くなってしまふ。しかし、残したりしたら、せっかく用意してくれた霊夢に失礼だ。どうしたものかと考えていたら。

「どうしたの?」

霊夢が俺に尋ねてきた。お茶にも羊羹にも手をつけない俺に疑問を持っただろう。

(白状するか)

俺は意を決して話す。

「俺甘いもの食べれないんだよ」

「えっ? そうなの」

「ああ」

「ならその羊羹は私が」だからこの羊羹は霊夢が食べる」

紫の言葉を遮って俺は言った。

「いいの?」

「ああ。後ひと切れしかないってことは霊夢も好きで食べてたんだろ? だったら遠慮する必要はない。これはもともと霊夢のものだからな」

そう言い俺は霊夢に勧めた。

「そ、そう。じゃあ遠慮なくいただくわね」

そして霊夢は羊羹を半分に割って口に含んだ。どうやら彼女の味覚に合うらしい。とてもおいしそうに食べている。その姿を見れただけで十分だった。

「羨ましいわね。 霊夢」

紫は羨ましそうに、そして微笑ましそうに言った。

「・・・ん」

霊夢は羊羹が乗った皿を紫の近くに置いた。

「あらっ?」

「あんたも食べたいんでしょ？もともとあんたから貰ったものだし、あげるわ」

どうやら霊夢は若干ツンデレの気があるようだ。

「ふふ……♪ありがとう。霊夢」

そのことは紫もわかってるらしい。

「……ふん！」

霊夢は気恥ずかしいのかそっぽを向いた。俺はお茶を飲みながらその様子を眺めていた。久しぶりに他人に淹れてもらったお茶は美味しかった。

第3話

side ミコト

さて、お茶も一通り味わえたり、そろそろ聞くか。

「霊夢、紫。聞きたいことがあるんだがいいか？」

「何（かしら）？」

・・・息ぴったりだな。

「ここは・・・この世界は一体何なんだ？」

俺が尋ねると霊夢が少し驚いた表情をした。

「話していないのによく気づいたわね」

「ああ。神社に来た時から、俺たちの世界では感じられないような何かを感じた。そして霊夢の光の玉や紫のあれを見て確信が持てた。ここは俺がいた世界とは違うってな」

俺は、この神社に入ってから見てきたものでそう結論づけた。

「なかなか賢いのね。あなたの言うとおりよ。ここはあなたの住んでいる世界じゃない。この世界は幻想郷。あなたの世界とは隔離された世界よ」

「そうか。なぜ幻想郷と言うんだ？」

「この幻想郷にはあなたたちの世界で空想の生き物とされている妖怪や妖精、神霊が人間共に暮らしているの。あなたの世界からしたら幻想のようでしょう？だから幻想郷というのよ。」

「よくわかったよ。ところで紫は妖怪なのか？」

「ええ。周りからはスキマ妖怪と呼ばれているわ」

「スキマ妖怪？聞いたことないな」

「まあ当然ね。私の知る限り私以外にスキマ妖怪はいないから」

なるほど、どおりで知らないわけだ。

「そのスキマっていうのはさつきお前が出てきたあれのことか？」

「そうよ。私には境界操る程度の能力というものがあるの。スキマはその能力を使っただしたのよ」

境界を操る程度の能力か。なんで程度が付いているのかわからないが、使い方次第では恐ろしい能力だと容易に想像できるな。

「霊夢には何かそういった能力はあるのか？」

「あるわよ。私の能力は空を飛ぶ程度の能力。文字通りの力よ」

「空飛べるのか？」

「ええ。でもまあ珍しくは無いわよ。空を飛べる奴なんてざらにいるし」

(いや、普通人は飛べないから)

俺は思わずツツコミたくなったが妖怪や妖精が住んでいる世界だ。それがここの常識なのだど割り切ることにした。

「まあ、霊夢の場合は少し特殊だけどね」

「特殊？」

「霊夢の能力の本質は空を飛ぶことじゃないの。霊夢の能力の本質はあらゆるものから宙に浮くことよ」

「宙に浮く？概念的な意味でつてことか？」

「ほんとに賢いのね。そのとおりよ。宙に浮くということは概念的な意味を持つわ。わかりやすく言うとなにも縛られず、左右されないことを意味するわ」

(これまたとんでもないな)

人は皆自分、または誰かの概念に縛られている。それに縛られずに生きるというのは難しい。俺自身縛られて生きている自覚を強く持っているので誰よりもそのことをわかつているつもりだ。

「ところで、霊夢が妖怪かどうかは聞かないのかしら？」

「聞く必要はない。霊夢が人間だということは会った時からわかつていた」

「そうなの？」

「ああ。俺はいきものの気配に敏感でなんだ。それで生き物ごとに感じられる気配は違うんだよ。だから霊夢の気配で人間だとわかった」(まあほかの人間と少し違う感じがしたけど。幻想郷の人間だからだろうか?)

「へえ、いくなれば生き物の気配を感じる程度の能力っていったところかしら？」

「どうだろうか？間違っていないだろうがなんかしっくりこない」

「そうね。詳しくはわからないけどあなたの力はそれとは少し違う気がするわ」

「まあ、今気にすることでもないと思うけどな。ところで紫、さつきお前は幻想郷は俺たちの世界とは隔離されていると言っていたな」

「ええ、そうよ」

「ならどうして俺は幻想郷に来てるんだ？」

隔離されているということは簡単に干渉できないはずだ。それなのに俺は今幻想郷にいる。

「幻想郷とあなたたちの世界は私が作った博麗大結界という結界で隔たれているのだけれど、この結界は時々強い思いの影響を受けて弱まることがあるの。その時幻想郷とあなたたちの世界を隔てていた境界が曖昧になって人や物が行き来することが可能になるの。」

(強い思いか)

俺の思いが結界に影響を与えたのか？それとも・・・

「結界に直接干渉できる奴はいないのか？」

「いるわよ。この結界を作った私とその結界を管理する博麗の巫女、つまり霊夢なら結界に干渉できるわ」

なるほど。博麗の巫女が管理するから博麗大結界なのか？

「あんたが結界をいじったからミコトが幻想郷に来たんじやないの？」

「確かに今まで何度か結界をいじったことはあるけど今回は私じゃないわ。そういう霊夢はどうなの？」

「そんなことして私に何の得があるのよ」

「実際お賽銭は入ったけどね」

「そんなの結果論でしょ？実際お賽銭を入れてくる補償がないのにわざわざそんな面倒なことしないわ」

「まあ、霊夢がそんな面倒なことするわけないわね」

霊夢と紫がそんな会話をしているとき、俺は例の猫のことを考えていた。

「なあ紫。俺が幻想郷に来たとき白い猫と黒い猫が近くにいなかったか？」

「猫？知らないわ」

「そうか。霊夢は？」

「私も見てないわよ。その猫がどうかしたの？」

「ああ、実は・・・」

　　少年説明中

「ふうん。その猫を追ってたら幻想郷についたの」

「ああ。ふたりなら何か知っているかと思ったが」

「残念だけど、私は知らないわ」

「私も心当たり無いわね」

「そうか・・・」

あの猫は俺が幻想郷にきたことと関係ないのだろうか？俺は強く疑問に感じた。今更だがあの猫たちにはおかしなところがあつた。さつきも言ったが俺は生き物の気配に敏感だ。それなのに、あの猫からは気配を感じられなかった。こんなことは今までになかった。

（あの猫は一体？）

俺は気になって仕方がなかった。

「ところでミコト、これからどうするの？」

俺が猫のことについて気にしていると霊夢が話しかけてきた。

「これから？」

「ええ、あなたの世界へ帰してあげてもいいけど、今日はもう遅いから家に泊まってったら？」

　　元も世界に・・・か。

「・・・霊夢、紫。俺はあの世界に帰らないとダメか？」

「?どういうこと？」

「これから、この世界で暮らそうと思う」

「・・・!どうして!？」

「・・・あの世界には、俺の居場所はない。だから俺は帰りたくない、いや帰らない」

「・・・ミコト」

「本当にいいのかしら？あなたにも家族や知人はいるでしょう？心配するのではなくて・・・」

「・・・心配する奴なんていないさ」

「えっ?」

「衣食住は自分で何とかする。お前たちには迷惑をかけない。だから頼む。この世界にいさせてくれ」

「本当にいいのね? さつきも言ったけれどこの世界には人間以外にも妖怪や霊がいる。身の安全は保証できないわよ」

紫が俺に念を押す。しかし俺の決意は揺るがない。もうあそこに帰るつもりはない。それに、この世界にいれば昔の自分に戻れる。そんな気がした。だから

「それでもいい。俺はここにいたい」

「・・・わかったわ」

「紫!」

「霊夢。私たちが何を言っても無駄よ。あなたもわかっているでしょう? 彼の決意はもう誰にも変えられない。」

「・・・そうね。わかったわ。なら家に住みなさい」

霊夢は少しの間考えたのち、そう答えた。

「・・・いいのか?」

「ええ。あなたは恩人だから。それくらいのこととするわ。ただし! ただで住まわせるつもりはないわ! いろいろ手伝ってもらってから。そのつもりでいなさい。」

「霊夢・・・ありがとう。俺にできることならするよ」

「ええ。これから宜しく」

こうして、幻想郷で暮らすことが決まった。

side 霊夢

「それにしても珍らしいわね。霊夢があんなこと言うなんて」

「なによ、何か悪い?」

「いいえ、別に♪」

・・・なんかムカつくわね。まあ紫の言うこともわかるけど。普段の私なら絶対にあんなこと言わない。でも彼は恩人だ。放っておくことはできない。それに・・・

『・・・心配する奴なんていないさ』

あの時、彼はそう言った。まだ出会ったばかりだからはつきりとはわからないが、彼は悪い人間には思えない。むしろいい人のように思える。それなのに心配する人がいないってどういうこと？どうして家族も友人も心配しないなんて言えるの？それに何より、それに何よりあの目、悲しそうな、苦しそうな、辛そうな、そして・・・何かに飢えたような目をしている。私の知る限り、あんな目をした人はほかに知らない。一体何があったらあんな目になるの？

「霊夢？どうした？」

「なんでもないわ」

放っておけない。ミコトのことを。

知りたい。ミコトのことを。

救いたい。ミコトのことを。

どうして恩人であるとは言え会ったばかりの彼のことなのにここまでするのかわからない。それでも私は気になるのだ。どうしようもなく。

(どうしちゃったのかしら？私)

私は私の知らない私に少し戸惑っていた。けど

(まあ気にしすぎても仕方ないか)

私はそう結論づけた。

あと、彼と暮らすのが少し楽しみというのは内緒にしておこう。

第4話

side ミコト

「お祝いをしましょう」

突然紫はそんなことを言い出した。

「お祝い？何のだ？」

「決まってるじゃない。あなたの歓迎会よ。幻想郷に新しい住人が増えるんだからお祝いしなきゃ」

俺のお祝いか。歓迎されるなんていつぶりだろうか？

「お祝いってなにをするのよ」

「食事会よ。本当は宴会がいいんだけど今からじゃあ他のひとを呼ぶのは難しいから私達だけでやりましょ」

「別にやるのは構わないけど(むしろ大賛成だけど)家にはお祝いするほどの食べ物無いわよ？」

「それは大丈夫。私の家から持ってくるわ。少し待ってなさい」

そう言うやいなや紫はスキマを開いて入って行った。というより、

(俺の意志は無視なのか?)

紫の奴、俺の意志聞かずに行きやがった。

「楽しみね。ミコト」

(まあいいか。霊夢もこう言ってるし)

俺達は食べ物を取りに行った紫の帰りを待った。

少年少女待機中

しばらくして、霊夢と他愛のない話をしていると紫が帰ってきた。その傍らにはふたりの女性がいる。

ひとりは金髪でスタイルがよく白と青の衣装で札の付いた帽子を

かぶっている。なにより特徴てきなのは髪と同じ色をした尻尾だ。しかも9本もある。

もうひとりは見たい目は小学生ぐらいの少女。茶髪で赤と白の衣装を着ていて緑色の帽子をかぶっているし。ただ帽子の隙間から黒い恐らく猫のものであろう耳がはみ出ており、黒い尻尾が二本生えている。

「随分早かったわね」

「もう少しゆつくりの方が良かったかしら？」

「っ／＼／＼／＼なに馬鹿なこと言ってるのよ！」

「ふふ♪」

「なあ紫。彼女達は？」

「私の式とその式の式よ」

「紫様から話は聞いています。私は八雲藍。紫様の式です。ほら、橙も挨拶しな」

「はい！藍様！藍様の式の橙です。よろしくお願いします！」

「ああ。こちらこそよろしく。聞いているかもしれないけど俺も名乗っておく。俺は一夢命。ミコトと呼んでくれ」

「せっかくだからふたりも歓迎会に参加させようと思うのだけれどいいかしら？」

「ああ。構わない」

「ありがとうございます。それじゃあ藍、食事の用意お願いね」

「わかりました」

「俺も手伝う」

「ミコトは今回の主役なんだから、そんなことしなくていいんじゃない？」

「いや、俺のために開いてくれたからこそ俺も手伝いたいんだよ。これでも料理はできるほうだから迷惑はかけない。ダメか」

「いえ、そう言ってくれてるのに無下にはできないわ。ミコトもお願いね」

「ああ。任せてくれ」

「なら私もお手伝いします！」

「いえ、橙はダメよ。他にやってももらいたいことがあるから」
「橙にやってももらいたいことですか？」

「ええ。橙には探して欲しい猫がいるの」

「！紫・・・」

「探し猫ですか？」

「そうよ。鈴を付けた黒の猫と白の猫を探してきて欲しいの。見つけたら連れてきてくれないかしら？・ミコトが探してるの」

「わかりました！友達に聞いてみます！」

「お願いね橙。食事会が始まるまでには帰ってきなさいね」

「はい！」

そう言っただけで橙は凄い勢いで外にでていった。

「どうして橙に探しに行かせたんだ？」

「私の式の橙は化け猫なんだ。だから橙には猫の友達がたくさんいる。猫探しにはうってつけというわけだ」

「そうなのか」

「ああ。さて、私達は食事の用意をしにいこう」

「そうだな」

そうして藍と共に台所に向かう。

「待って。私も手伝」
「霊夢もダメよ」

霊夢も手伝おうと一緒に来ようとしたが紫は止められた。

「どうしてよ？」

「霊夢には話したいことがあるのよ。だから残りなさい」

「断るわ。私は聞くつもりないし」

「ミコトの話何だけどなあ（ボソツ）」

「聞くわ！」

さっきまでの態度と打って変わって霊夢は話を聞く気になったようだ。紫がボソツと何かを言ったようだがなんて言ったんだ？

「そう言う訳だから食事の用意はふたりでお願いね」

「わかった（わかりました）」

そう返事をして俺と藍は食材をもって台所に向かった。

トントントン♪

リズムミカルな音を立てて俺は食材を切り分ける。

「手際がいいな」

汁物を作りながら藍が訪ねてきた。

「料理は普段から作っているからな。なれているんだよ。そういう藍も慣れているみたいだな」

「私も長い間作っているからな。慣れているんだ」

「そうか。そういえば、藍ってもしかして九尾の妖狐なのか？」

「ああ、そうだ。知っているのか」

「九尾の妖狐は俺たちの世界でも割と有名だからな」

主に某忍者の漫画の影響でな。それにしても、九尾を式として従えているなんて、紫の力は俺の想像以上なのかもな。結界を作ったと言っていた事から幻想郷を作ったものだということは分かっていたが。紫には下手なことはしない方がよさそうだな。

「紫の式になってどれくらいなんだ？」

「さあな。随分長い間紫様の式だからよく覚えていない」

覚えていないほど紫に式として仕えているのか。

「藍にとって紫はどんな存在だ？」

「そうだな・・・いい加減なところがあるし、仕事を押しつけるし、なに考えてるかかわからないし、すぐに寝ようとする。何度あの一の式を止めたいと思ったことか」

散々ないわれようだった。

「だが、それと同じくらい・・・いや、それ以上にあの一の式であって良かったと思うことがある。あの一とは私にとって永遠に憧れる、畏敬の念を抱かせる存在だ」

「・・・随分と慕っているんだな」

「ああ。といっても本人の目の前では絶対に言わないがな」

まあ紫のことだから言わなくてもわかっているんだろうけどな。

「橙はどうだ？藍の式何だろ？」

「そうだな・・・橙はまだ私の式になって日が浅いからな。正直まだまだ未熟なところも多い。もつともそれは私の未熟さでもあるがな。だが橙には素質がある。それこそ私をゆうに超えるほどの才能がな。だから橙がどんなふうにも成長するのか楽しみだ」

微笑みながらそう言う藍はまるで子供のことを語る親のようであった。

「・・・羨ましいな（ボソツ）」

「えっ？」

「いや、なんでもない」

思わず声に出してしまったようだ。ただ小さかったようで藍には聞こえていないみたいだ。俺には藍のように想ってくれる人はいない。いや、かつてはいた。彼女は俺を想ってくれていた。ただ彼女は俺のことを想（・）い（・）すぎた。それゆえに彼女は・・・
そこで俺は考えるのをやめた。

side 藍

『一夢命』

外の世界から来た外来人だ。まあ私にとってはそこまで珍しいものではない。長年紫様に式として仕えてきたからな。紫様はたまに結界を緩め外から人を幻想郷に入れることがあるからな。大半の人は元の世界に帰っていくが希にそのまま幻想郷の住人となる者もいる。彼もそのひとりだろう。特別思うところはなかったし興味もなかった。・・・そうあくまで『なかった』なのだ。あの話のあと一瞬見せたあの表情。悲しみを孕んだ表情。後悔を孕んだ表情。今まで多くの人間を見てきた。だから似たような表情をしたものも見たことがある。だがあくまで似たようなだ。彼は違う。私は彼と同じ表情をしたもの知らない。その表情には私では計り知れない何かがあるように思えた。

(彼は一体?)

年はまだ16〜18といったところだろう。少年もいいところだ。そんな少年がなぜあんな表情をする?なぜあんな表情ができる?一体彼に何があった?私はそんなことを思いながら食材を切り分ける。

「っ痛!」

「・・・!藍!」

考えながら包丁を使っていたからだろう。指を切ってしまった。

「大丈夫か?」

「ああ。問題ない」

少し深く切ってしまったが私は妖獣だ。この程度の怪我すぐに治る。そうして調理に戻ろうとすると、彼の手が伸びてきた。彼は怪我した手を取ると。

パクッ

怪我した箇所を口に含んだ。

(っ／／／／／)

私は突然の彼の行動に驚いた。熱い。顔が赤くなるのがわかる。一体ミコトは何をしているんだ!しばらくするとミコトは口をはなした。

「待ってる。霊夢に包帯かなにかもらってくる」

「ちよ、ちよっと待て!」

「?なんだ?」

「ななな、なぜ、ああ、あんなことを」

「傷は舐めれば早く治ると言うだろう」

「だからって本当にやるやつがあるか!」

「そうか。まあ気にするな」

「気にする!」

「もしかして嫌だったか?だとしたら悪かった。勝手なことをしてしまっ

「い、いや。別に嫌だったわけでは／／／／／というか私は妖獣なんだ

!この程度の怪我何もしてなくてもすぐに治る」

「そうだったのか。やはり俺が悪かったな。済まない」

「も、もういい。以後気をつけてくれ／＼」

「わかった。肝に銘じておくよ」

そう言っただけで彼は調理に戻った。まったく、何なんだ彼は？見た目の雰囲気からしてもっとクールなものだと思ってたが。全然違くないか。ある意味詐欺だろう。

(・・・まあ悪い気分ではなかったが)

そんなことを考えながら、私は調理を続けた。

この時、私は気づかなかった。

彼が口に含んだ指の怪我が、いつもより早く治っていたことに。

第5話

side 霊夢

「紫、ミコトについての話って何？さっさと話さない」

ミコトと藍が料理に行つたあと、私は紫に話を聞こうと尋ねた。

「まあそれはあとでいいじゃない。それよりもミコトがくれたお賽銭出さない。変えてあげるから」

紫のやつ何もつたいぶってるのよ。．．．まあ私も早く変えて欲しいと思つてたから素直に渡しておくか。

「はい」

「確かに受け取つたわ、はい」

そうしてミコトからのお賽銭と引き換えに私は幻想郷で使えるお金を受け取つた。．．．こんな大金見たのいつ以来かしら。ホント、ミコトには感謝してもらったりないわね。

「嬉しそうね。霊夢」

「まあね」

いつもだつたら軽く受け流していたが、今は気分がいいし。今回は素直に返しておこう。まあ．．．

「それで、ミコトに関する話って何よ」

聞くことはちゃんと聞くけどね。

「せっかちなね、いつか損するわよ？」

「そんなの知つとことじゃないわ。いいから早く話さない」

全く。自分で話があるつて言つておいて。ホント紫は何考えてるのかしら。

「．．．霊夢あなた、ミコトのことをどう思っているかしら？」

「どうって／＼／紫には関係ないでしょ！」

いきなり何を言い出すのよ！紫は！

「．．．いいから答えなさい」

ここでようやく私は気づいた。紫はからかつて言っているんじゃない。真剣に聞いていたんだ。

「．．．正直わからないわ。だって私はまだミコトのことほとんど知ら

ないもの。だから私は知りたいの。ミコトがどういう人なのか。ミコトがどうしてあんな目をしているのか。私はミコトという存在のことを知りたい。今はそれだけよ。」

本当は知りたい以上の感情があるのかもしれない。でも私はあえて口には出さなかった。ミコトのことを知らない私が口に出していることとは思えなかったから。

「そう……」

紫はそう呟くと何かを考え始めた。

(どうしたのかしら、いつもと明らかに違う)

そう、いつもとは全く違っている。今の紫にはいつもの胡散臭さが全くと言っていいほどない。今私の目の前にいる紫は幻想郷の賢者にふさわしい威厳と風格、覇気が感じられる。そんなことを思っていると紫が考えるのをやめ、重い口を開いた。

「霊夢……。あなたミコトのことを知りたいといったわね？」

いつもの調子じゃない。迫力ある声色だ。

「……ええ。言ったわ」

でも私は臆しない。さっき言ったことは本当だから。ミコトのことが知りたいから。だから私は恐れない。

「……わかったわ。教えてあげるわ。私が知ってしまったミコトのことを」

紫が知ってしまった。その言葉を聞いて私は一瞬戸惑った。知ってしまったということは『知りたくなかった』ともとれる。一体何を知ったの？

「直接ミコトに聞いたわけじゃないし、ミコトのことを調べたわけじゃないわ。でも私は知ってしまったわ。ミコトはかつての私の知り合いに似ていたから……」

……ミコトに似た人。なぜか私には想像つかなかった。ミコトに似た人がいるということが何故か信じられなかった。

「ミコトに似た人がいるなんて信じられないといった顔をしているわね。無理もないわ。私も信じられなかったもの。まさか、……あいつと同じ目をする人がいるとは思わなかったもの……」

一体紫とそいつのあいだに何があつたのか気になる。でもそれ以上

「・・・いいから早く話しなさい」

私は知りたい。

「・・・わかつたわ。話すわよ。ミコトは・・・」

そこまで言つて紫は少し口ずさんだ。そして数瞬して口を開いた。

「・・・なにもものからも愛（・）さ（・）れ（・）て（・）い（・）な

（・）い（・）存在よ」

・・・紫は今なんといった？愛されていない？ミコトが？私は紫が何を言つてるのかわからなかった。

「本来この世界に愛されていない存在なんていないわ。自分は孤独、自分はひとりと思つている人にだつて愛してくれる人はいるわ。ただ気づいていないだけでね」

「・・・」

「でもミコトは違う。どういうわけか知らないけど、彼は愛されていない。彼のことを想つてくれる人はいるかもしれないわ。でもそれは愛情とは違う。」

『・・・心配する奴なんていないさ』

あの時彼が言つていた言葉。あれは自分には愛してくれる人がいないということ？彼はわかっていた？自分が愛されていないということ。だから彼は幻想郷に残つた？帰る場所がないから。あの時のあの飢えた目。彼は愛に飢えている？彼は愛を求めているの？

「・・・霊夢。彼には気をつけなさい」

「・・・気をつけるって何によ」

「彼は危険すぎる」

「危険？」

「さつきも言つたでしょう。愛されていないものなどいない。それは愛されなければ生きていけないからよ。それなのに彼は生きている。愛されることなく。それはとても恐ろしいことよ」

「何がよ？」

「愛されないのは想像以上の地獄よ。きっと私やあなたじゃ耐えられ

ない、地獄さえ生ぬるい地獄よ。彼はそれに耐えている。そんな彼が愛を求めたら？そして愛されることを拒絶されたら？そうなれば・・・幻想郷はかつてない程の危機を迎えるでしょうね」

「ミコトが幻想郷を滅ぼすって言うの!?!そんなこと・・・ミコトがするはずない!」

「あなたの考える理屈じゃあないのよ。それになんでそんなこと言い切れるの?あなたは彼のこと何も知らないでしょう?」

「それは・・・」

「それに彼には力がある。得体の知れない力が。だからこそ余計危険なのよ。」

「・・・」

わたしは何も言い返せなかった。

「なら・・・なんで?なんで彼を幻想郷に住ませようとしてるのよ?彼が危険なら彼の世界に帰せばいいじゃない!」

「それはダメよ。彼は外の世界では愛されていない。いつ彼が世界を滅ぼそうとするかわからない。外の世界と幻想郷はつながっている。外の世界が滅べば幻想郷も滅びるわ。だから彼はここにいなければならない。・・・いざと言うとき彼を滅するために」

「!・・・そんなこと・・・」博麗霊夢」

紫は私の言葉を遮った。

「あなたの使命は何?」

「・・・幻想郷を守ること」

「そうよ。それが博麗の巫女の使命よ」

「・・・」

どうして?どうしてミコトを滅つさなきゃいけないの?・・・嫌だ。

ミコトを滅したくない。私は・・・ミコトと一緒にいたい。

「・・・気持ちは分かるわ霊夢。でも、それがあなたの使命よ。あなたは幻想郷に住むものを守らなければならない」

『幻想郷に住むもの』を守る?」

・・・そうか。そうすればいいんだ。

「わかったは、私は幻想郷を守る。そのために・・・ミコトを滅（・）
ぎ（・）な（・）い（・）。」

「!・・・どういうつもり?」

「紫が言ったんじゃない。『幻想郷に住むものを守らなければなら
ない』って。だから守るのよ。幻想郷の住人であるミコトを」

「自分が何を言ってるのか分かってるの?」

「わかってるわよ。要はミコトに幻想郷を滅ぼさせなければいいの
よ。だったら・・・」

私がミコトを愛するわ」

「・・・霊夢。口で言うほど簡単じゃあないのよ?今あなたが彼に抱い
ている感情は愛じゃない。ただの同情。もしくは愛情ごっこよ」

「だったら私は、それを本物の愛にする」

私の意志は揺るがない。たとえ誰が言おうと意志は曲げない。

「霊夢・・・わかったわ。そこまで言うなら止めない。でも覚悟しな
さい。もしあなたが失敗したら・・・あなたもろとも彼を滅する」

紫が私を殺気を込めた目で睨みつける。正直いって怖い。でも

「上等よ。私は失敗しないわ。絶対に」

「・・・そう。霊夢」

「・・・何よ」

「・・・ミコトをお願いね」

なぜ紫がそう言ったのかはわからない。でも、

「任せなさい」

私は力強く答えた。この決意が消えてしまわないように。

side ミコト

「こんなものかな?」

「そうだな」

俺と藍は料理を作り終えた。

刺身に肉じゃが、けんちん汁、とんかつ、ちらし寿司、猫を探してくれている橙のために作ったカレイの煮付けに料理を作ってくれた藍のために作りたいなり寿司（もちろん三角）。そして俺のとおっきき苺大福。なかなか豪勢になったな。

「それにしても、甘いもの食べれないのに作れるなんて変わっているな」

「やっぱり変か？」

「正直な。でも美味しそうだ。今度作り方教えてくれ」

「ああ。いつでもいいぞ」

俺は藍にそう答えた。今度ほかのと一緒にレシピを書いておこう。

「さて、運ぶか」

「そうだな」

そう言っ俺は両手に皿を載せ、藍は両手と尻尾に皿を乗せた。・・・器用だな。ある意味羨ましい。

そうして霊夢と紫の待つ居間に向かった。

少年、妖獣移動中

「お待ちせ（しました）」

そう言い居間に入る俺と藍。・・・気のせい・・・ではないな。二人の空気がとてつもなく重い。

「あら、おかえりなさい♪」

「おかえり、ミコト♪」

ふたりは重い空気に反して音符が付きそうな（というかついている）勢いで返事をした。

「あ、ああ」

「皿持つわよ」

「ああ、頼む」

気のせいだろうか、なんか霊夢の雰囲気がかつきと違うのだが、
そうして皿を机に並べていると、

「ただいま戻りました！」

橙が帰ってきた。

「お帰り、橙。どうだった」

橙の主人である藍が尋ねる。

「ダメでした・・・みんな知らないって」

「そうか」

橙はそういうと落ち込んでしまった。

「橙」

「はい？」

ポン、なでなで。

「お疲れ様」

俺は橙の頭に手を乗せなでた。

「！はい！」

どうやら橙は元気を取り戻したようだ。

(・・・いいな)

何故か霊夢と藍が俺に視線を向ける。さらにそんなふたりを見て
紫はクスクス笑っている。一体どうしたんだ？

「さて、みんな揃ったし、食事にしましょう」

紫の合図とともにみんな席に着いた。俺の隣には霊夢と藍が座つ
た。

「はい、ミコト」

向かいの席に座った紫が俺にグラスを渡す。っていうか

「これ酒じゃねえか」

「そうよ。なにか問題ある」

「問題もなにも俺未成年だぞ」

「ミコト、この幻想郷で暮らすならひとつ教えておくわ。幻想郷では
常識は通用しない」

常識が通用しないって。ふと俺が横を見ると霊夢と橙も酒の入つ
たグラスを持っている。(橙は20歳超えてるかもだが)俺は黙って

グラスを受け取った。

「それでいいのよ」

幻想郷では常識は通用しない。俺の中でそれを幻想郷の常識として心に刻んだ。

「それじゃあミコトの幻想郷入りを祝して・・・」

「「乾杯！」」

さあ、宴の始まりだ。

第6話

side ミコト

太陽が沈み、月が登り始めた頃。俺、霊夢、紫、藍、橙の5人は机の上に並べられた料理を味わっていた。

「藍は料理がうまいな。こんなうまいの向こうじゃ滅多に食べられないぞ」

「そ、そうか？ありがとう。ミコトの料理も美味しいぞ。その年でよくここまで作れるな」

「まあ、料理は割と好きだしな。毎日作っていればうまくなる」
「毎日作っていたのか？」

「ああ、俺が作らなきゃなんなかったからな」
「・・・大変だったんだな」

「別に、そうでもないさ。さつきも言ったように料理は好きだから苦にはならなかった」

藍とそんな会話をしながら、箸をすすめる。やっぱり美味しい。普段味なんてほとんど感じない自分の料理さえ美味しく感じる。みんなと食べているからか？

「・・・ミコト」

「？なんだ、霊夢？」

「今度料理教えて」

「ああ、構わないぞ」

霊夢がそう頼んできたので了承した。断る理由はないからな。

(・・・まさかここまで差があるなんて)

？気のせいだろうか。霊夢の雰囲気少し暗い気がする。

「ミコト。私もいいか？」

そんなことを思っていると。藍が俺に訪ねてきた。

「構わないが・・・藍に教えられることはほとんどないと思うぞ？」

正直俺より料理うまいし。

「そんなことない！ミコトから教わりたいことは山ほどある！」

「そ、そうか。わかった」

やけに強気に言ってくる藍に気圧され俺はそう答えた。

(やった！またミコトと料理ができる！)

さて、今度俺の得意料理のレシピまとめないとな。俺がそんなことを考えていると。

「ところでミコト？お酒が全然進んでいないようだけど？」

唐突に紫がそんなことを言ってきた。というか紫が渡した酒、一口飲んでみたけど結構きついんだよな。飲み慣れていない俺にとつて喉が焼けるような感覚がして結構きつい。

「あら、ミコトお酒飲めないの？」

霊夢が俺に聞いてきた。その手にはもう何杯目になるかわからない酒が注がれたグラスを持っている。

……自分より年下の霊夢がこんなに飲めるのに俺は全然飲んでいない。

(なんか情けなく感じるな)

そう思った俺はグラスを手に持ち、中に入っている酒を一気に飲み干した。やはり喉焼けるように熱い。だが、

(……美味しいな)

今まで飲んだことない量の酒を一気に飲み、俺は少し気分がよくなるのを感じた。これが酒の力というやつか？

「あら、なかなかいい飲みっぷりね。そんなに一気に飲んで大丈夫？」
酒を一気飲みした俺に霊夢はそう尋ねた。なので俺は

「大丈夫だ。問題ない」

そう返した。しかも紫までかぶせてきた。どうやら紫にはこのお約束がわかるようだ。気がついたら俺と紫は互の手をがっしり掴んでいた。……俺は少し酔っているのだろうか？

「……何やってんのよあんたたち」

「いや……まあ気にするな」

「そ、そう、それよりもう一杯飲む？」

「ああ、いただこう」

俺は霊夢に酒を注いでもらった。

「ほら、霊夢も」

「ありがと」

霊夢にグラスが空になっていたので（何杯目だ？）酒を注いだ。

「ミコト。私もいいか？」

「ああ」

藍のグラスも空になっていたので酒を注ぐ。

「珍しいですね。藍様いつもあまり飲まないのに」

「そうなのか？」

「ま、まあな。今日くらいいいだろう」

「ふうん。今日くらいね」

「な、なんですか？紫様」

「ふふ♪別になんでもないわ、ミコト、私にもお願い」

「わかった。橙はどうする？」

「私もいただきます」

「わかった」

そう言っつて結局俺は全員分注いだ。まあ嫌ではなかったから全然構わない。全員の分注ぎ終えたらまた酒を飲んだ。一度一気に飲み干したからだろうか？あるいは既にアルコールが回っているからだろうか？先ほどよりも楽に飲めた。

「お酒の味は気に入ったかしら？」

「ああ。悪くない」

「そう♪はい、どうぞ」

「まだ入ってるぞ」

「あら？こんな美人のお酌を断るわるのかしら？」

「自分で言うな」

（まあ否定はしないがな）

俺は酒を一気に飲み干し、グラスを紫に差し出した。

「ふふ。律儀ね」

そう言っつて紫は酒を注ぐ。そして再び酒を飲もうと口をつける。

（ん？）

俺は酒に違和感を覚えた。さっきまでのものと違う。先ほどの酒

は恐らく強いものだった。しかしこの酒は……もつと強い。

「紫。この酒はなんだ？」

「あら、気づいてしまったようね。このお酒は酒豪の鬼さえ酔わせることができる強いお酒よ」

なんつうもん出してんだこいつ。

「紫、お前なに」「みくこく」とく」

紫を問いたださそうとしたら突然霊夢が抱きついてきた。

「えへへく」みくことあつたやくい」

霊夢は顔を赤くし、目がトロンとしており、呂律が回っていない。

(……間違いなく酔っているな)

誰がどう見ても霊夢は酔っているとわかる。俺は思わず頭を抑えなくなつた。そんな俺にお構いなしに霊夢はすり寄ってきた。

「みくことよく」

「霊夢。とりあえず離れてくれ」

俺だつて年頃の男だ。可愛い女の子にこんな風にすり寄られて来られたら理性が持たない。

「にやんで？みくことはわたやしのことよきらい？」

霊夢が瞳を潤ませて上目使い気味に俺に対して言う。だから霊夢さん。今は勘弁してください。

「違う。霊夢、落ち着いて聞いてくれ。お前は「霊夢なにやっている！」」

俺が霊夢を説得しようとするのが声を荒げて霊夢を注意した。話を遮られたのはあれだが、藍も説得に加わってくればなんとか……「わたしもみくことにだきつく」

……ならないな。藍も酔っている。恐らく原因は先ほど紫が俺に勧めてきた酒を飲んだからだろう。俺は元凶に事態を收拾してもらおうと睨みつける。

クスクス」

どうやら無駄なようだ。クスクス笑って楽しんでますアピールをしている。

「みくことよく。だつこく」

「わたしいも〜♪」

駄目だ。ふたり共理性が完全に崩壊している。まだあつて間もないがこんなこと普段なら絶対に言わないと断言できる。こうなったら

(橙に助けを)

そうおもい橙の方を見る。しかし、

「スウ〜・・・」

橙は酔いつぶれて眠ってしまったようだ。最後の希望が……。いや、逆に考えよう。橙まで霊夢と藍のようにならなくよかつたと。それに今は、

「みことよく♪」

このふたりをなんとかするのが先決だ。

「つ、疲れた・・・」

本当に大変だった。あの後、ふたりは頭を撫でてくれやら、だっこしてやら、ほっぺにキスしようとするやら、断ると泣き出すやら、熱いと言って服を脱ごうとするやら本当に大変だった。その渦中のふたりは今眠っている。ダメもとで子守歌を歌ってみたら眠ってくれた。

(やってみるものだな)

俺がそんなことを思っていると

「お疲れ様。ミコト」

元凶がいけしやあしやあといつてきた。

「全くだ。どこかの誰かのせいで散々だ」

「あら、ひどい人もいたものね」

本当に喰えない奴だ。

「本当にな。これは詫びとして俺の質問に答えてもらいたいな」

「そう、ちなみに聞くけど質問ってなにかしら？」

「なんで霊夢に殺気を向けた？」

そう聞くと紫は表情を変えた。

「・・・気配に敏感だとそういうことにも敏感なのかしら？」

「質問に質問を返すな。いいから答えろ」

「・・・強いていうならあなたが原因よ」

「俺がだと？」

「ええ。私はあなたを・・・あなたが愛されていないことを知っているわ」

「・・・」

「だから霊夢に言ったわ。いざというときはあなたを滅するようになっても、霊夢は断ったわ。それどころかあなたを守ると、救うと言った。だから私は霊夢に言ったのよ。いざというときは霊夢もろともあなたを滅すると」

「・・・そうか」

「驚かないのね」

「紫の言っていることは理解しているからな。俺がどれだけお前たちにとって危険なのかはわかっている」

「そうなの・・・」

「ああ。だが・・・だからこそ断言できる。俺は・・・お前の考えるような驚異にはならない。なぜなら俺は・・・」

『私はお前を・・・お前だけを愛してやる！この私の愛を独占できることを光栄に思え！』

「唯（・）（一）（・）（無）（・）（二）（・）（の愛を知っているから。愛されることを知っているから。だから俺はもう・・・愛されなくてもいい・・・」

「俺は・・・あいつの愛を独占していた。あいつの唯一無二の愛を。だから俺はもう愛されなくてもいい。俺はもう・・・十分すぎるほどの

愛をもらった」

「それを私が信じるとでも？人は強欲よ。一度すれば覚えてしまい忘れられず何度も求める。例えあなたでも・・・いえあなただからこそ例外じゃないわ」

「確かにな普通ならそうだろう。だがさつきも言ったが俺がもらったのは唯一無二の愛だ。あの愛は俺にとって・・・いや、すべてのものにとって特別なもの。あれを得ることができた。俺はそれで満たされた。」

「・・・」

「信じられないといった顔だな。なら俺を・・・」

今ここで殺せばいい。今なら何の抵抗もしない」

俺がそう言った後、俺たちの間に沈黙が流れた。

「・・・やめておくわ。確かにあなたは幻想郷にとって驚異になるかもしれない存在よ。でも今はまだ違う。私もできるだけあなたを滅することはしたくないから」

「そうか・・・優しいんだな」

「勘違いしないでちょうだい。私はただ霊夢の悲しむ顔が見たくないだけよ」

(それを優しいというのだがな)

「私はもう帰るわ。藍と橙は連れて帰るからあなたは霊夢をお願い」

「ああ。わかった。・・・紫」

「なにかしら？」

「・・・生かしてくれてありがとう」

「・・・」

俺がそう言うのと紫は藍と橙を連れて黙ってスキマを開いて行ってしまった。

「・・・片づけるか」

そう言うって俺は机の上に残った食べ物と皿、グラスを片付けた。食べ物も明日もまた食べられるようにしておいた。それにしても

(『もう愛されなくてもいい』、か)

先ほどの紫との会話で言った言葉。この言葉には少し語弊がある。正確には『もうあいつ以外に愛されなくてもいい』だ。あいつの愛以外いらぬ。あいつ以外に愛されなくてもいい。あいつの愛がもう一度手に入るなら・・・もう別（・）の（・）な（・）に（・）か（・）た（・）ち（・）を愛することができるようになるという願いは叶わなくていい。もしあいつがあもう一度愛してくれたその時は、あいつだけを愛する。・・・たとえそれがあいつの願い望んだ俺でなくても。

「今の俺を見たら・・・お前は思うんだろうな・・・」

『神楽』

俺は月を見ながらそう呟いた。

side 紫

ミコトとの話を終え、私は藍、橙を連れ、自分たちの住居に帰ってきた。

『あいつの愛を独占していた。あいつの唯一無二の愛を』

『俺はもう・・・十分すぎるほどの愛をもらった』

『俺はそれで満たされた』

あの時・・・彼が言っていたことが頭の中で反芻する。彼が幻想郷の脅威にならないというのは今もまだ信用できない。でも・・・『なあ、紫は・・・紫だけは・・・僕を愛してくれるか？』
「・・・もし、あの時、あなたを愛しきることができたら・・・あなたを救えたのかしら？」

『紅（くれない）』

私は、かつて救えなかった・・・私が滅してしまった男の名を呟いた。

第7話

side ミコト

『ミコト、お前は这个世界を愛してるか?』

『どうした?いきなり?』

『いいから答えろ』

『?まあ、愛してるな』

『恥じらいもなく断言するな』

『聞いてきたのは神楽だろう』

『まあ、そうだが。だがなぜ愛しているんだ?あんな仕打ちを受けておいて』

『なぜといわれてもな。愛してるから愛してるんだよ。ただまあ……』

『お前に会わせてくれた。それだけで愛する理由は十分だ』

『……そうか』

『神楽?』

『ミコト、私は这个世界が憎い』

『えっ?』

『这个世界は……だからな。だから这个世界を許せない』

『神楽……』

『だから私は……』

『这个世界に復讐する』

『えっ?』

『私は这个世界にとって、最も忌まわしく、最も残酷で、最も最悪な方法で復讐する、だからミコト』

『……』

「っ神楽!!」

伸ばした手は何にも触れず、見慣れない天井にのぼされていた。

(・・・夢か)

久しぶりに見たな。

神楽がいなくなってしまうときの夢を。

おそらく、昨日の紫との会話が原因であろう。

(最近は見なかったのにな)

神楽のことを忘れたことは一瞬たりともない。だがあの夢を見ることはなかった。それなのにいまになってみるということとは。

(俺は今求めているのか?)

神楽の愛を。あの力強くも繊細で暖かい愛を。俺は求めている?

・・・やめよう。今更求めても、もう手に入らないことは分かっている。願っても意味などない。なら考えない。それが今の最善だ。

「やて・・・と」

俺は携帯を取り出す。こんなところに基地局などあるはずがないから使えないことは分かっている。だが時計は機能している。時間を確認するために携帯を取り出したのだ。

(・・・6時前か)

携帯は6時前を示していた。だいたいいつもどおりの時間だ。ならば

(まずはいつもどおりに・・・だな)

俺は起き上がり、布団をたたみ、片付け、部屋を出た。

これは夢だ。そうに違いない。そうでなければならぬ。

今私の目の前には地獄が広がっている。紫が、藍が、橙が、魔理沙が、アリスが、そして多くの幻想郷の人が……死んでいる。血塗られ、顔を苦痛と絶望に染め、死んでいる。

『何よ……これ』

(夢だ、夢だ夢だ夢だ！こんなの現実じゃない！夢に決まっている！)

私は必死に否定した。そんな私の目の前に『彼』が現れた。

『ミコト！』

良かった！ミコトは無事だったんだ！そんな思いが私の中を駆け巡った。これは夢だと分かっている。それでもミコトが無事だったのはうれしかった。

『ミコト！よかった無事だったのね！』

『……』

私はミコトに問いかける。しかしミコトは何も答えない。

『……ミコト？』

『……霊夢』

ようやく答えた。でもその声の調子は私の知るミコトのものとは違っている。

『……コト？』

私は言い知れぬ感覚に襲われた。

(なに？これ？一体なんなの？)

『霊夢……』

サヨナラ』

『え？……』

ザシユ！

一瞬私は何があったのかわからなかった。だが気がついてしまった。私は……彼の持つ血塗られた刃に貫かれていることに。

「ツ！」

気がついたら目の前には見慣れた天井があった。

(今の……夢?)

夢だった。いまのは夢だった。やはり夢だった。私の思ったとおりだった。それでも

(……夢でよかった)

私はあれが夢だと分かりほっとした。そうだがあんなことするはずがない。だって彼は……

『あなたは彼のこと何も知らないでしょう?』

私は紫に言われたことを思い出した。……そうだ私は彼のことを何も知らない。なのになんで彼があんなことしないと切り切れる?

『何も』知らないのに。

(これは、私のただの願望?)

私はようやく気がついた。私が夢の中の彼を否定したのは……私の自分勝手な願望だということに。それでも私は

(ミコトはあんなことしない)

ミコトがあんなことをしないと改めて思った。いや『信じた』というほうが正しい。たしかに、ミコトのことは何も知らない。でも……この私の勘がいつているのだ。だから大丈夫だ。そう思い私はこれ以上このことを考えるのをやめることにした。

「にしても、なんで私寝てるの?」

私は記憶を辿り思い出そうとした。

たしかミコトの歓迎会を開いて、ミコトたちと食事をして、紫の勧

められたお酒を飲んで……

なぜだろう……そこから先が思い出せない。いや、思い出したくない。なぜだかわからない。だが私の頭の中で思い出していないと警鐘を鳴らしているのがわかる。

(……やめましょう)

私は私の勘に従い、思い出すのをやめた。そして布団から起き上がり、朝食を作るため台所に向かった。

台所に向かう途中。いい匂いが漂ってた。

(あら？もしかして……)

私は先ほどより足早に台所に向かうと

「おはよう。霊夢」

やはりミコトがいた。どうやら朝ごはんの準備をしていたらしい。

「おはよう。朝ご飯作ってくれたの？」

「ああ。といつてもまだ出来ていないがな。勝手に悪いけどお風呂沸かしておいたから先にお風呂入ってこい」

「ええ、ありがとう」

正直嫌な夢を見たせいで汗をかいて気持ち悪かったから彼の気遣いが嬉しかった。

「それじゃあ入ってくるわ」

「ああ。いってらっしゃい」

……いってらっしゃい、か。

「いってくるわ」

私は気分が良くなるのを感じお風呂場に向かった。

「それで？俺は何をすればいい？」

お風呂を出て、彼用意した朝ごはん（ご飯に味噌汁、焼き魚、ほうれん草のお浸しだ。やはり美味しい）を食べていると彼がそう訪ねてきた。そういえば仕事を手伝ってもらったことを思い出した。

「そうね・・・それじゃあ境内の掃除をお願いしようかしら？」

「掃除ね。わかった。」

そう返事を返して彼は止めていた箸を進めた。

（そういえば彼の服調達しないと）

彼の姿を見てそう思った。彼の服装は昨日と同じだ。まあ彼はほとんど手ぶらで幻想郷に来たので着替えなんてあるわけない。幸い彼のおかげでお金はあるから安いものなら買える。

「ごちそうさま」

どうやら彼は食べ終えたようだ。

「霊夢。食べ終わったら食器を台所に置いていてくれ。昼ご飯作る前に洗っとくから。あと台所残っているとんかつは昼にカツ丼にするから残して置いてくれ」

ミコトは自分の食器を片づけながら言った。

「食器ぐらい私が洗うわよ。お昼ご飯も作るわ」

私はそう返した。いくらミコトが居候とはいえそこまでさせるのは気が引ける。

「わかった。じゃあ食器の片づけはお願いする。けど昼ご飯は俺に作らせてくれ。早くあの台所に慣れたいんだ」

「だったらお昼ご飯はふたりで作らない？そうすれば手間は減るでしょ？」

「そうだな・・・じゃあそうしよう」

（よし！これでミコトと料理できるわ！）

私は心の中でガッツポーズをとった。

「それじゃあ俺は境内の掃除してくる。掃除道具は外にあった倉庫みたいな小屋の中か？」

「ええ。そこにあるわ」

「わかった。じゃあ行ってくる」

「ええ。行ってらっしゃい」

彼は自分の食器を持って部屋からでた。

・・・いつてらっしゃい、か。

これもいいわね。

side ミコト

俺は今箒を持って境内の掃除をしている。今は冬で落ち葉のピークである秋は過ぎているが、以前落ち葉の量は多い。極端に大きい神社ではないが小さい神社でもないので結構大変だ。

「ようやく終わったな」

掃除を始めて2時間程だったろうか。ようやく落ち葉を集め終わった。俺の目の前には落ち葉の山がある。境内中の落ち葉を集めたのでかなりの量だ。この落ち葉を処理しようとしたとき。

(ん?)

近づいてくる人の気配を感じた。少なくとも霊夢でないと思われる。なぜならその気配は神社の外の空から感じたからだ。俺はそちらの方を見てみようとする

「わ〜！退いてくれ〜！」

気配のする方から声が聞こえた。そちらを見てみると何か(もちろん人だか)がものすごい速さでこちらに向かって来た。

(まずいな)

そう思った俺はその場から急いで退いた。そして空からきた何かはすごい勢いで先ほど集めた落ち葉に突っ込んでいった。衝撃で砂埃と落ち葉が舞った。

(大丈夫か?)

そう思い。突っ込んできた何かの方を見ていると次第に砂埃が晴れてきて見えるようになってきた。

砂埃が晴れ、そこにいたのは大量の落ち葉を体中つけ、白黒の服と大きな黒い帽子をかぶった金髪の『魔法使い』の少女がいた。

第8話

side ミコト

前回のあらすじ。白黒の金髪魔法使い？が空から降ってきた。何を言っているかわからないかもしれないが今日の前で起きている事実だ。

(と、まあふざけるのはここまでにして)

俺は本題に入ることにした。

「お前、大丈夫か？」

俺は白黒に話しかけながら手を差し出した。

「ああ。大丈夫だぜ。ありがとな」

白黒は俺の手を掴んで起き上がった。

「ふう、えらい目にあっただぜ」

そう言つて白黒はまとわりついていた落ち葉を払った。しかしまだ襟のあたりに何枚か付いている。

「まだ付いてるぞ」

「えっ？どこだ？」

「襟のあたりだ。じっとしている」

そう言つて俺は襟についている葉っぱをとってやろうとした。

「ひうっ！」

葉っぱを取ろうと首筋に触れたら白黒は妙な声をあげた。

「？どうした？」

「なっなんでもないぜ！」

(い、いきなり首筋に触られたから変な声出た・・・)

白黒は恥ずかしそうにうつむいた。

(ほんとにどうしたんだ?)

俺がそんなことを考えていると。

「ミコト！どうしたの!?!すごい音がしたけどー！」

霊夢がやってきた。まあ気配で分かっていたが。

「おっ！よう霊夢。来てやったぜ」

「・・・魔理沙。何しに来たの？」

白黒は霊夢を見て挨拶した。霊夢はこれまた呆れたような目で見ている。

「何しにつて、特に用はないぞ？」

「用がないなら来ないでよ」

霊夢は白黒とそんな会話を繰り返していた。なんか友人・・・というより悪友といった感じだな。

「なあ、霊夢。この子は？」

俺はいい加減気になったので霊夢に聞く。

「ああ、こいつは「ちよつと待った霊夢！自己紹介くらい自分でできるぜ！」

そう言つて霊夢の言葉を遮つて白黒は言った。

「私は霧雨魔理沙！普通の魔法使いだ！」

白黒は魔理沙というのか。というか『普通の魔法使い』つて、魔法使いは普通なのか？

「ところでお前誰だ？見ない顔だが」

「ああ。俺は一夢命。この神社に居候しているものだ」

「へえ〜そうなのか。・・・霊夢。どういう風の吹き回しだ？お前が居候を置くなんて」

「別に。あんたには関係ないでしょ」

そういえば昨日紫も同じようなこと言っていたな。そんなに珍しいのか？

「ふう〜ん。まあいいけど。ところでミコト。お前もしかして外来人か？」

外来人というのはおそらく俺のように外の世界から来たもののことだろう？

「ああ、そうだ。よくわかったな」

「そりゃあな。幻想郷でそんな格好している奴いないからな」

「そうなのか？」

ちなみに今俺は長袖の服の上にシャツとコートを羽織っていて下はジーンズを履いている。言われてみたら巫女である霊夢はともか

く（まあ霊夢の巫女服もかわっているが）紫たちの服装は俺たちの世界のものと違っていたな。

「と、そうだミコト、後でそのことで話があるから」
「ん。わかった」

俺は返事をして再び掃除に戻ることにした……魔理沙が落ち葉をぶちまけたからな。

「魔理沙。あんたもミコトを手伝いなさい」

「はあ!?なんで私が!？」

「あんたのせいで落ち葉がこんなに散らかってるんでしょ?だいたいどうしてこんなことになってるのよ?」

「いやあ。スピードの限界を超えてやろうとしたら止まれなくてな」

「やっぱりあんたのせいじゃない。いいから手伝いなさい。何のために箒持ってるのよ」

「私の箒は掃除のためにあるんじゃない。飛ぶためにあるんだぜ」

「あつそ。じゃあ頼んだわよ」

そう言つて霊夢は神社の中に戻つていった。さて、掃除しますか。

side 魔理沙

今私はミコトと一緒に落ち葉の掃除をしている。なんで客の私がこんなことを……まあ私がぶちまけたんだが。

「悪いな魔理沙。手伝ってもらつて」

「まあ気にすんな。私にも原因はあるし」

まあ、いくら私でも掃除してる奴の目の前で文句は言えないな。

「そういえばミコト、ひとつ聞いていいか?」

「なんだ?」

「ミコトって……男か?」

私はミコトに対して疑問に思っていたことを聞いた。正直ミコトを見たとき女だと思つていた。髪は長いしまつげも長いし何よ

り……すげ〜美人だし。でも男口調だし（まあ私が言うのもアレだが）自分のこと俺って言ってるし声は男っぽいからわからなくなつた。

「……そうだが。なぜそんなことを聞く」

ミコトは私にそう返した。……なぜだろうか少し、いやとてつもなく機嫌が悪そうなのだが。

「い、いや少し気になつただけだ。深い意味はない」

「そうか」

そう言つてミコトは掃除に戻つた。

（な、なんかわからないけどやばかつた）

ともかく私は地雷を回避できたようだ。

「よし。終わった！」

「ああ、お疲れだったな。魔理沙」

「全くだ。これは美味しい飯でもご馳走してもらわないとな」

「そうか。それじゃあ霊夢と相談してみよう」

掃除が終わり、ミコトと共に霊夢がいる神社内に向かつた。

「霊夢。掃除終わったぞ」

「お疲れ様。思ったより早かつたわね」

すぐに霊夢を見つけ、ミコトは掃除が終わつたことを報告した。

「まあ、この私が手伝つたんだから当然だぜ」

「……あんたがいなければもっと早く終わつてたんでしょうね」

う……霊夢のやつ痛いところ付いてくるぜ。

「まあいいわ。ところで魔理沙。あんたうちでお昼食べるの？」

「ああ！もちろんそのつもりだぜ！」

「もちろんつて……何当たり前のように言ってるのよ。まあいい

わ行きませよミコト」

「ああ、魔理沙少し待っててくれ。今からつくりに行くから」
「ミコトも作るのか？」
「ああ。霊夢とふたりで作る」
「そうか。ウマイの期待してるぜ」
「期待に添えるよう頑張らせてもらおう」
「いい心がけだ」
「ほらミコト、早く行くわよ」
「ああ」

霊夢とミコトは台所に向かった。……ミコトの料理か。なんか楽しみだぜ。

side 霊夢

私は今ミコトと一緒に昼食のカツ丼を作っている。

「ほんとに手際いいわね。ミコト」

「そうか？これでもいつもの台所と違うから結構手間取っているんだが」

(手間取ってこれなの？)

私はミコトとの差をいつそう感じて少し落ち込んだ。

「それより霊夢。魔理沙とは付き合い長いのか？」

「そうね。いつからだか忘れたけど結構長いわ。なんでそんなこと聞くの？」

「いや、ただ仲良さそうだなと思って」

ミコトはそんなことを言ってきた。私が魔理沙と仲がいい？

「そんなことないわよ。魔理沙とはただの腐れ縁だし。今日みたいに夕飯たかりに来るし、仕事の邪魔してくることもあるし」

「でも悪くないと思ってるんじゃないのか？」

「それは……まあそうだけど」

「だったら仲がいいってことだ。魔理沙もきつとそうだと思うぞ」
「……そう」

全く。ミコトは何を言い出すのよ。……まあ少し嬉しいけど。……そういえばミコトは

「……ねえ、ミコト」

「なんだ？」

「その……ミコトにはいるの？……私にとっての魔理沙のような人が」

私は聞いてしまった。ミコトがどんな存在なのか紫に聞かされていられるにもかかわらず、好奇心に勝てずに聞いてしまった。

「……いるぞ。俺にも霊夢にとつての魔理沙のような奴がな」

「そうなの？」

「ああ。といつてももう随分長い間会っていないがな。だから俺がいなくなったことも気づかないだろうな」

「どうして会ってないの？」

「家庭の事情でな。遠くに住んでて気軽に会えないんだよ」

「へえ」

少し意外だった。彼の境遇を考えるとそんな人いないと思つていたので。

「……そんな人いない」

「え？」

「つて思つてたろ？」

「うっ」

(なんでわかったのよ)

私は思わずたじろぐ。

「紫に聞いたんだろ？俺のこと。だったらそう思うのは当然だ」

「……知つてたの？」

「ああ。昨日紫に話したことを聞いたからな」

おそらく私が眠ったあとに紫に聞いたのだろう。つていうか一体どこまで聞いたの？結構知られたら恥ずかしいところもあるんだけど。

「えつと、ミコト……大丈夫だ」

え？

「俺は気にしてない」

・・・一体何を気にしていないかわからなかった。でもミコトは本気で言っている気がしたしこれ以上聞くのは気が引けた。だから私はこれ以上このことを話すのをやめた。

「よしっ。完成だ。持っていこう。魔理沙が待ってる」

そうこうしているうちにできた。私たちはできたカツ丼を持って魔理沙のまつ居間へと戻った。

side ミコト

「ご馳走様。いや〜うまかった」

魔理沙が俺たちの作ったカツ丼を食べて満足そうに言った。

「喜んでもらえてなによりだ」

「ミコトって料理うまいんだな」

「まあ、毎日作ってればそれなりにな、それに今回は霊夢も手伝ってくれたし」

「へえ〜。・・・なあ霊夢」

「何よ？」

「ほんとに手伝ったのか？」

「失礼ね！どう言う意味よ」

「いや〜ただ気になっただけだぜ」

「ちゃんと手伝ったわよ！（まあほとんどミコト一人で作ったけど）」

「このふたりほんとに仲がいいな。と、そういえば。」

「霊夢。俺に話があるって言ってたよな？なんだ？」

「ええ、あとでミコトの服を買いに行こうと思ってる。そのことよ」

「俺の服？」

「ええ。ミコト今それしかないでしょ？だから買いに行きましょう」

まあたしかに俺の服は今着ているこの一着しかないから助かるな。

「ありがとう。霊夢」

「べ、別に。気にしなくていいわよ」

霊夢は顔をそらしていった。

「どうしたく霊夢？顔が赤いぜ？」

「なんでもないわよ！」

霊夢と魔理沙がそんな会話をしている。俺は食後のお茶を入れながら聞いていた。

「さて、行きましょ」

あれから少し休んで今は外にいる。

「ちよつと待った。霊夢。これから行くのは香霖のところだろ？」

「ええ、そうよ」

「大丈夫なのか？」

大丈夫？なにか問題あるのか。

「大丈夫よ。はい、ミコト」

そう言つて霊夢は何かお守りのようなものを渡してきた。

「これから行くところは魔法の森っていつてね。幻覚を見せる森で少し危ないのよ。でもそれを持っていれば大丈夫だから落とさないようにしてよ」

「わかった。ありがとう。霊夢」

俺はお守りを受け取つて落とさないようにしっかりとポケットに入れた。それにしても、『魔法の森』とは随分な名前の森だ。さすが幻想郷といったところか。

「霊夢それもだがまだ問題があるぜ」

「問題って何よ？」

「いや、霊夢・・・どうやって行くつもりだ？」

「どうって。飛んでいくに決まってるでしょ」

．．．．．なんだと？

「なあ霊夢．．．．．昨日幻想郷が来たばかりの奴が飛べるのか？」

「．．．．．あ」

霊夢．．．気づいてなかったのか。

「はあ、しょうがない。私の箒に乗せてやるぜ」

魔理沙がそう提案してくれた。

「いいのか？」

「ああ。美味いご飯食べさせてくれた礼だ。遠慮するな」

「待って。なら私が運んでいくわ」

霊夢もそう言ってきた。

「いや．．．いくらなんでも人一人抱えて飛ぶのは危ないだろ。私だったら箒に乗せるだけでいいし、霊夢が連れてくより安全だと思うぞ」
「．．．．．そうね。わかったわ」

霊夢は渋々といった感じに納得した。魔理沙に連れて行かれるとなにかまずいのか？

「それじゃああ行くぜ。しっかり捕まってる」

俺は魔理沙の後ろに乗って魔理沙の方を掴んだ。そして地面から浮き上がり、空へと飛び立った。霊夢も飛んでいる。飛べるとは聞いていたが実際目にするるとすごいな。俺たちは目的地へと向かって飛んでいった。

side 魔理沙

「どうだ？空を飛ぶ感じは？」

私は後ろに捕まっているミコトに聞いた。

「ああ。いい気分だ」

ミコトはそう答えた。実際どことなく嬉しそうだ。しかし．．．

(近くで見ると一層美人顔だな)

整った顔、長い艶のある髪。目つきは多少悪いがそんなこと気にならないくらい美人だ。．．．私も女なので少し羨ましい。

「前見てないで大丈夫か？」

「あ、ああ。そうだな」

私はミコトのの方をから前へと視線を戻した。

「どうしたんだ？俺の顔なんか見て？」

「べ、別になんでもないぜ」

（言えない・・・ミコトの顔に見とれていたなんて）

（魔理沙のやつ。ミコトに見とれてたわね）

どうやら霊夢にはバレているらしい。ジト目でこちらを見ている。

「なあ霊夢。俺も空を飛べるようになるか？」

ミコトが霊夢にそう聞いてきた。

「どうかしら？試してみないとわからないわ。でも飛びたいなら私も

協力するわよ。飛べたほうが今後いろいろ便利だし」

まあ、確かに移動は楽になるしな。

「そうか。じゃあ頼んでいいか」

「ええ。いいわよ」

「その時は私も協力するぜ」

「あら？どうしてよ？」

「なんだ？理由がいるのか？」

「別にそういうわけじゃないけど」

「それじゃあ構わないな」

私もミコトに飛び方を教えることになった。

「魔理沙。ありがとな」

「ああ。気にするな」

（まあミコトと一緒にいたいからってというのが理由なんだがな）

私はそんなことを考えながら目的地の香霖堂へ向かった。

しばらくしてようやく香霖堂へ到着した。

「ここで服を買うのか？」

「ええ、ここは香霖堂。だいたいなんでも売っている道具屋よ」

霊夢が香霖堂について簡単な説明をする。

「こんなことでぼさつとしてないでさっさと入ろうぜ」

「そうだな（そうね）」

私はふたりに店の中に入るように促した。

「いらっしやい・・・って霊夢と魔理沙か」

「よう香霖。来てやったぜ」

「こんにちわ、霖之助さん」

私たちが店に入ると店の主。森近霖之助が出迎えた。まあ私は香霖と呼んでいるが。

「こんにちわ。それで、今日は何のようだい？」

「ええ、今日は服を買いに来たの」

「服を？いつもの巫女服かい？」

そういえば霊夢の服は香霖が用意しているんだったな。・・・あの格好香霖の趣味か？・・・だったら正直少し引くな。

「いえ、今日はこの人の服を買いに来たの」

そう言つて霊夢はミコトを香霖の前に連れてきた。すると・・・バサツ！

香霖が持っていた本を落とした。

「どうしたんだ？香霖？」

「・・・」

香霖は何も答えない。本当にどうしたんだ？

「霖之助さん？」

「えつと・・・どうしたんですか」

ふたりも気になっているのか香霖に尋ねた。すると香霖はやつと口を開いた。

「・・・美しい」

香霖はミコトを見てそう呟いた

「はっ」

「なんて美しいお嬢さんなんだ！頼む！僕と付き合ってくれ！」

「はああああ!?!」

（ちよっ！香霖のやつミコトに惚れたのか!?!確かにミコトは女に見え

るくらい美人だけど！いきなり付き合ってくれってマジかよ！

霊夢の方を見てみると霊夢も同じことを思っていたのか、とてつもなく驚いた表情をしていた。

「それは・・・じゃない」

ふとミコトの方からそんな声があった。何故かミコトは震えている。

「お、お嬢さん。お名前を聞かせてもらってよろしいですか？」

そんなミコトに香霖は遠慮なくそんなことを聞いてきた。

ブチッ！

香霖がミコトに聞いた瞬間。何かが切れるような音がした。いや切れるようなのではない。これは・・・

「俺は女じゃない!!」

確実に切れた音だった。

そのあとのミコトは凄かった。有無を言わせない迫力で香霖を正座させ、自分が男だということを永延と香霖に話し、説教をした。説教が終わったのは30分もした後で、終わったあとの香霖の表情は精根尽き果てたものだった。

・・・あの時、地雷を回避できて本当に良かったと心の中で強く思った瞬間だった。

第9話

side ミコト

「こんなものかな？」

「そうね」

「ああ。いいと思うぜ」

俺たちは香霖堂にて俺の服を見繕い終えた。結果和服と外の世界でも有りそうな服を数着、黒いコートを2着ほど購入することに決まった。

(正直疲れた)

本当に大変だった。なにせ霊夢と魔理沙があれやこれやと服を俺に着るよう押し付けてきたのだ。この時のふたりはとても生き生きとしており、逆らいつらい雰囲気をもとっていた。さらに服を着た際にはあのポーズをとってくれこのポーズをとってくれと言われ、するまで服を脱がせてくれなかったのだ。二人つてそんなキャラだったか？

だがまあそれはまだマシだった。問題は霖之助だ。あいつ俺はさんざん男だと言ったのに女物の服をいくつも勧めてきやがった。しかも霊夢と魔理沙まで目を輝かせて乗ってきたし。なので俺は3人を正座させて説教した(だいたい1時間くらいだ)。・・・まあ結局根負けして数着来てしまった俺も俺だが。そういえばあの時のふたり、なんか顔赤くしたと思ったら膝をついて落ち込んでいたがどうしたんだ？

「それでいいんだね？それじゃあお代だけど・・・またつけかい？」

購入する服が決まった俺たちに向かって霖之助が言ってきた。それにしても霖之助は変わった気配をしているな。人と・・・おそらく妖怪の気配が混じっている。半妖というやつか？

「いえ、今回はちゃんと払うわ」

「はあ!? どういう風の吹き回しだ!？」

ちゃんと払うと言った霊夢に対して魔理沙が大きさに驚いて言っ

た。霖之助も驚いている。

「失礼ね。私だつてたまにはちゃんと払うわよ（収入もあつたし）」

いや、霊夢たまにはなくちやんと払えよ。

「ま、まあ僕としてはそうしてくれると助かるからいいんだけど」

「ならいいじゃない。はい」

そう言つて霊夢は見たことないお金で会計をした。これが幻想郷の通貨か。やはり俺たちの世界のものとは違う。

「はい、毎度ありがと」

「それじゃあ行きましようか」

「ああ」

「わかつたぜ」

俺たちは出口へ向かつて歩いて行つた。しかしここにはほんとなんでももあるな。ストーブ、本、コンピュータ、ティーカップ、携帯音楽再生機、ゲーム機、コーラ、鳥居が刻まれた隕鉄、甲羅、酒、写真機、三稜鏡、古い皿、壺の破片、携帯電話、テレビ、浄水器。どうやら外の世界のものもあるようだ。・・・まあ使えるかは知らないが。なんでもあるのはいが統一感無さ過ぎるだろ。そうして店の商品を見ながら歩いていると、

（ん？）

俺は二つの物に目があった一つは刀。ひとつは煙管だ。

「霊夢、魔理沙、ちよつといいか？」

「？どうかした？」

「ああ。少しな。霖之助。この煙管と刀見ていいか？」

「ああ。いいよ」

俺は霖之助の許可をもらいます刀を手にとつた。刀を鞘から抜くと・・・刃が研がれていない刀身が姿を現した。

（これじゃあ切れないな）

完全に刀としては不良品とっていいだろう。切ることが目的にも関わらずきれいなだから。そして次は煙管を手取る。あまり詳しくはないが素晴らしい造形だと思つた。

「気に入ったかい？良ければ譲つてあげるよ」

「・・・いいのか？」

「ああ、先ほど迷惑をかけてしまったお詫びだ」

「そうか。なら遠慮なくもらおう」

「それ持つて行くの？」

「ああ。幻想郷はいろいろ物騒みたいだからな。護身用に持つておこうと思う」

「そっか。いいんじゃないか？」

「ああ。それじゃあもらつていくぞ霖之助」

「うん。それじゃあまた必要なものがあつたら来てくれ」

「ありがとな」

そうして俺たちは店から出た。

「それじゃあ飛び方を教えるわね」

俺たちは神社に帰つてきて（もちろん魔理沙の箒に乗せてもらつて）買った服に着替えて（和服の方）外に出て霊夢に飛び方を教えてもらうため外に出ている。ちなみに刀は腰に指している。

「でも教えるつたつてどうやって教えるんだ？」

魔理沙が霊夢にそう尋ねる。

「そこなのよね、正直空を飛ぶのなんて感覚的にやってるから理屈どうこうを教えられないのよね」

早速行き詰まったな。どうすればいいんだ？

「まあはじめは意識を集中させるとかじゃあないか？魔力やら霊力やら気やら何かあれば多分それで飛べると思うし」

「ちよつと待て。空を飛ぶにはその魔力やら霊力やら気がなけりや飛べないのか？」

「ええ。そうよ」

・・・なんか一気に飛べる気がしなくなってきたな。

「まあとにかく集中してみろ。そうすりや多分魔力か霊力か気があるかわかると思うし」

「・・・はあ。わかった」

俺は言われたとおり集中するため目を閉じた。すると

チリン♪

「え?」

あの音が聞こえた。俺が幻想郷へ来ることになったきっかけを作った猫達の鈴の音が。俺は周りを見渡したが猫たちはいない。

「どうしたの?」

(霊夢たちには聞こえていない?気のせいだったのか?)

「ミコト?どうした?」

霊夢と魔理沙が心配そうに俺を見てきた

「いや、なんでもない」

そうやって俺は再び目を閉じ意識を集中させた。・・・なぜだろう?今なら飛べる。そんな気がした。

「え?これって・・・」

「おお。ミコト飛べてるじゃん」

「え?」

目を開けてみると俺は5mほど宙に浮いていた。いつの間に飛んだんだ?

「ミコト。とりあえず降りて来い。できるか?」

「ああ。やってみる」

俺はしたに降りるように意識した。すると俺の体は下へと向かっていく。そして地面に着陸した。

「すごいぜ!ミコト本当に自分で飛んだことないのか?」

「ああ。そんなことは一度もない」

「それなのに飛べるなんてびっくりだな!なあ霊夢!」

「・・・」

「どうした霊夢?」

「えっ!そ、そうね、すごいわミコト」

どうしたのだろうか霊夢の様子がおかしい。

「なあミコト。もう一度飛んでみろよ！」

「そうだな。やってみよう」

俺は再び空へ向かって飛んだ。

side 霊夢

私は今驚いている。それはミコトが飛んでいることにじゃない。ミコトから感じた力にだ。

魔理沙は感じていなかったが、ミコトが飛んだ時に感じた力。それは霊力と魔力・・・そして妖力だ。霊力と魔力はわかる。人間でも持っている力だし同時に持つてる奴も希にいる。でも妖力は違う。妖力は妖怪しか持てない力だ。人間には持てない。それなのにミコトからは妖力を感じた。

(一体どうして?)

霖之助さんのように半妖だというのならまだわかる。でもミコトは生粋の人間だ。私は巫女だからそれがわかる。そのミコトが何故か妖力を持っているのだ。

(ミコト・・・あなたは一体なんなの?)

私はわからなくなつた。昨日から一緒にいて性格的なことは少しわかつたけど。わからないことがまたひとつ出来てしまった。また・・・知りたいことができてしまった。

聞けばなにかわかるだろうか? いや、ミコトは自分の力のことを分かっているようだった。聞いてもわからないだろう。

『それには力がある。得体の知れない力が。だからこそ余計危険なのよ。』

昨日紫が言っていたことを思い出す。ミコトの得体の知れない力。これもその一つなの? だから危険なの? 私は空を飛ぶミコトを見て思った。ついさつき飛べるようになったばかりなのにミコトは上に、下に、右に、左に自在に飛んでいた。・・・その表情はどこか嬉しそうだった。

・・・そうだ。どんな力を持っていたとしてもそれを使うのはミコト自身だ。ミコトが危険なことを考えなければ大丈夫だ。私は言ったじゃない。ミコトを信じるって。だったら
(ちゃんと信じなきゃね)

今朝の夢のようにはならない。私はミコトを信じているから。だから

・・・絶対に大丈夫だ。

side ミコト

俺はある程度空を飛んで満足したので、霊夢たちのところに戻ってきた。
きた。

「つと。どうだった霊夢?」

俺は先程まで様子のおかしかった霊夢に尋ねた。

「ええ、初めてにしては良かったわよ」

どうやら霊夢はいつもの調子に戻ったようだ。よかった。

「よかったどころじゃないぜ!初めてであんなに飛べるなんてすごいぜ!」

魔理沙が大げさに褒めてきた。まあ、悪い気はしないのでいいが。

「それで?初めて空を飛んだ感想は?」

「ああ。初めてだからまだ慣れてなくて少し思い通りにいかないところもあったけどやっぱり楽しかったな。もつと練習して自在に飛べるようになりたいな」

「そう、ならこれからは毎日練習ね」

「ああ」

俺はもつとうまく飛べるようになるために明日から練習しようと思心に決めた。

「・・・なあミコト」

「ん?なんだ魔理沙?」

「ついでだし、弾幕の練習もしてみないか?」

第10話

side ミコト

「弾幕？」

俺は魔理沙の言った事の意味がわからなかった。

「まあ実際に見たほうが早いかな」

そう言っただけ魔理沙は自分の周囲に星の模様がついた光の玉を出した。

「これが弾幕に使う弾。こいつを幕のようにたくさん出すのが弾幕っていうんだ。」

この光の玉・・・もしかしなくてもあの時・・・霊夢に気絶させられた時にぶつけられたやつだ。

「なんでその練習をするんだ？その弾幕っていうのは出せたほうがいいのかな？」

俺は疑問に思っただけで聞いた。

「そうね。弾幕出せないと弾幕ごっこができないから。幻想郷で生活していくには必要かもしれないわ」

「弾幕ごっこ？」

「ええ、この幻想郷では弾幕を使った戦闘・・・弾幕ごっこがよく行われているわ。この弾幕ごっこによって問題を解決したり争いを収めたりしてるのよ。」

「そうなのかな」

「ええ。詳しく話すと少し長くなるからそれは後でゆっくり話すわ」

「とにかく今は弾を出すことから始めようぜ。空を飛べたら多分出せるはずだ」

「どうやって出すんだ？」

「とにかく弾を出すイメージを作りなさい。そうすれば多分出るから」

イメージか。俺は自分の周囲に弾を出すイメージを作ってみた。すると・・・

「おっ、出たぜ」

俺の周囲に弾が出た。しかし・・・

「なんかちよつと変わってるな」

「・・・そうね」

俺も周りに浮いている玉は6つほどで俺から見て右側に3つ左側に3つだ。問題はその色なのだが・・・右側に出ている弾は黒色で左側に出ている弾は白色だ。

「やっぱりこれ変わってるのか?」

「そうね。こういうのは見たことないわ」

「私もないぜ」

一体俺って何なんだ?自分で自分がわからん。

「まあともかく弾幕は出せたんだ。実際に弾幕ごっこやってみようぜ」

そう言つて魔理沙は箒に乗つて空を飛んだ。

「私がお前に弾幕で攻撃するから、お前も弾幕を出して私に攻撃して来い。弾に当たったら負けだ。ただしちゃんと躲せる隙間は作れよ。それがルールだから」

「わかった」

返事をして俺も空を飛んだ。

「じゃあ準備はいいわね。・・・始め!」

霊夢の合図とともに俺は魔理沙にとりあえず10個ほど弾を飛ばした。魔理沙はそれをひらりと簡単に躲す。

「その程度じゃあ当たらないぜ!弾幕はこう出すんだ!」

そう言つて魔理沙が玉を出した。・・・数え切れない数の。まさに弾幕といった感じだ。

「つて、ちよつと待て魔理沙!いくらなんでもこれは多すぎるぞ!」

「そんなことないぜ!普通だ、普通!」

「くっ」

俺は魔理沙を放った弾幕をkarouうじてだが交わすことができた。

「よく避けたなニコト!」

「そりやどうも!」

今度は俺から弾幕を放った。先ほどよりもはるかに大きい規模の

ものだ。

「やるな！でも甘いぜ！」

魔理沙は箒を乗りこなして巧みに避けた。やはり慣れている魔理沙の方に分があるか。まあ……

(簡単には負けられないがな)

そう思い俺はさらなる弾幕を出して応戦した。

side 霊夢

私は今ミコトと魔理沙の弾幕勝負を眺めていた。

(本当にすごいわねミコト。初めてで魔理沙とあそこまでやれるなんて)

もちろん魔理沙は手加減しているだろう。しかし、それを差し引いても初めてであそこまで動けるミコトはすごいと思う。……同時に少し恐ろしいとも思っていた。

実は私は彼に弾幕のことを教えるかどうか悩んでいた。ミコトがこれから幻想郷で生活していくには確かに弾幕が出せる方がいいだろう。しかし……弾幕は使いようによっては危険だ。その気になれば命を奪うこともできる。ミコトが弾幕を使いこなしてしまえば……あの夢が現実になる可能性が高くなるのではないかと考えてしまった。

(……大丈夫)

そう。大丈夫なはずだ。私は信じてるから。ミコトはそんなことしないと、そんなことしたいと思わないと。……でも、もし……ミコトが夢で見たようなことをしてしまったとき……

私はミコトを止められるだろうか？

「初めてにしては上出来だぜ！ミコト」

「はあはあ、それは嬉しいな……」

私が考え事をしていたらそんな声が聞こえてきた。二人を見てみると魔理沙は余裕そうに笑っていてミコトは肩で息をしていた。まあ無理もない。魔理沙はなれているしミコトは今日が初めてなのだから。

「でもそろそろ決めるぜ！」

そう言つて魔理沙は小さな八角形の火炉……ミニ八卦炉を取り出した……つて！

「ちよつと！魔理沙それは……」

「恋符「マスタースパーク」!!」

魔理沙がそう唱えるとミニ八卦炉から極太のレーザー。マスタースパークを放った。

(いきなりスペルカード使うなんて何考えてるの!?)

「ミコト避けて！」

ミコトにそう言うがミコトはその場から動く様子がない。いやおそらく動けないのだ。そしてマスタースパークがミコトを襲った。しかし、私の目に映ったのは私が全く予想できなかった光景だった。ミコトは腰にさしてあった刀を抜き、マスタースパークを切ったのだ。

(ま、マスタースパークを切った!?)

私はあまりのことに声が出ないほど驚いた。魔理沙も驚いているのか口をぽかんと開けている。

「……なあ霊夢、魔理沙」

啞然としている私たちに対してミコトが声をかけた。

「な、何？」

「な、何だぜ？」

私はなんとか返すことができた。

「……これ、俺の反則負けか？」

「え？」

「いやだつて刀使っちゃったし」

「い、いえ。刀を使つても反則にならないわ」

「あ、ああ。特に問題ないぜ」

「そうか。それならいい」

そう言つて彼は刀をしまった。ほ、本当にミコトつて何者？

俺が魔理沙が出した極太のレーザーのようなものを切ったら霊夢と魔理沙の様子が少しおかしくなった。どうしたんだ？

「というか魔理沙、さっきのはなんだ？今までのとは違っていたが」

「ああ、あれはスペルカードだ」

「スペルカード？」

また新しい言葉か。覚えることが多いな。

「そのスペルカードってなんだ」

「スペルカードというのはいわゆる得意技を出すときに使用するカードのことよ。さっきは話してなかったけど弾幕ごっこはこのスペルカードを使うことを前提としているわ」

「そうなのか。じゃあそのスペルカードがないと弾幕ごっこって出来ないんじゃないのか」

「いえ、そういうことではないけど……今話すといろいろややこしいから後で話すわ」

「そうか、わかった。それで魔理沙。続きやるのか？」

「いや。今回はここまでにしよう。続きはまた今度な」

「わかった」

とりあえず終わったので俺は地面に降りていった。魔理沙もだ。

「ふう。流石に少し疲れたな」

「お疲れ様。というか魔理沙！初心者のミコトにマスタースパーク打つなんてどういふつもりよ！」

霊夢が魔理沙にそう怒鳴りつけた。

「い、いや〜つい夢中になっちゃってな。悪い悪い。でもまさか私のマスタースパークが切られるとは思わなかったぜ」

「そうか？あれくらいならなんとかなるぞ？」

「あれくらいならって……普通は無理よ。弾幕躲すのもうまかったし、ミコトって何か剣術か武術が使えるの？」

「俺じゃなくて俺の知人が使えるんだ。俺はそいつの特訓に付き合ってたからある程度刀が扱えるようになって武術の心得もついたんだ」

まさか幻想郷でこんなふうな役に立つとは思わなかったがな。

「そっか。この調子ならけっこうすぐに強くなれそうだな」

「そうか。ならよかった」

幻想郷で生きてくには強くないとキツそうだな。

「さて、もう日が暮れてきたし、中に入りましょう」

「そうだな」

霊夢の言葉に従って俺は神社の中に向かった。正直クタクタだな。

「ミコトは疲れてるみたいだし。今日の夜は私が作るわ」

「ああ。助かる」

本来なら俺が作ると言いたいところだが今は無理そうなので霊夢に頼むことにした。

「しようがないから私が手伝ってやるぜ」

「どうやら魔理沙も手伝い用だ。というか

「魔理沙料理できんのか？」

「失礼なやつだな。霊夢よりはちゃんとできるぜ」

「失礼なのはあんたよ！というかあんた夜ご飯まで家で食べる気!？」

「いいだろちゃんと手伝うんだから」

「はあ・・・もうわかったわよ」

なんとというかドンマイだな霊夢。

その後俺は霊夢と魔理沙が作った料理を食べ（何故か料理対決になっていた。ちなみに霊夢の勝ちになった）、お風呂に入り、疲れていたのので早めに就寝した。俺の幻想郷生活2日目が幕を閉じた。

紅霧異変く目覚める力く

第11話

side ミコト

幻想郷に来て1週間が経った。この一週間でいろいろあった。

まず、3人のいたずら妖精サニーミルク、ルナチャイルド、スターサファイアの相手だ。この3人は神社に来て落とし穴をほったり落ち葉を落としたりといたずらし放題だった。しかもご丁寧に能力を使って姿を消したり、音を消したりして見つかりにくくしてやっている。まあ俺は気配を感じれるからあんまり意味はなくすぐに見つけられたが……。見つけたあとは説教をやった。そうしたらこの妖精たちは反省したのか泣いて俺に謝ってきた。それ以来何故か俺と霊夢はこの妖精たちになつかれてしまった。俺や霊夢を見つけると嬉しそうに話しかけてくるようになった。……。まあ相変わらずいたずらはいっているが。

あと人里にも行った。どうやら幻想郷に住む人たちの生活水準は外の世界より低いらしい。本で見た江戸時代のような町並みをしている。ただ無駄なものが多い外の世界の街よりよほど美しく見える。住む人も生き生きしているように見えた。この人里では上白沢慧音という人に会った。初めて会った時不思議な気配をしていたので何者かどうか聞いたら突然頭突きされた。確かにいきなり聞いた俺も遠慮がなかったがあれはすごく痛かった。意識が飛びかけたからな。そのあとすっかり話をして互いに悪かったと頭を下げて謝った。話を聞いたところ慧音は白沢と人間の半獣らしい。本当にこの幻想郷にはいろいろな人がいるのだと思った。色々話しているうちに今度自分が開いている寺子屋で子供たちに勉強を教えてあげて欲しいと頼まれた。うまく教えられる自信はないがやってみようと思う。

魔理沙の家にも行ったな。……。正直あまり思い出さたくないが。魔理沙の家は魔法の森の中にあった。どうやら魔理沙は『霧雨魔

法店』という何でも屋的なことをしているらしいが霊夢いわく留守にしがちであり仕事自体はしていないらしい。まあ今はそれはいい。魔理沙の家はとにかく散らかっていて物が多かった。魔理沙には蒐集癖があるらしく頻繁に物をどこからか拾ってきているらしい。ちなみに香霖堂の商品の中にも魔理沙が拾ってきたものもあるらしい。しかも魔理沙は捨てられない人らしく物は溜まっていくようだ。しかしこれもまあいい。問題は・・・魔理沙が作った魔法薬だ。いきなり飲んでくれと渡されてははじめは得体がしれなかったので飲むのを渋っていたがどうしてもというので仕方なく飲んだ。魔理沙曰く栄養剤のようなものらしいからまあ大丈夫だろと思っていたが・・・俺の認識は甘かった様だ。飲んだ瞬間体中がしびれて動けなくなり、幻覚まで見えてきた。そんな俺の様子を見て魔理沙は慌てて解毒剤を作り俺に飲ませた。結果として解毒剤は効いたので痺れと幻覚はなくなった。魔理沙のことを思い切り説教しようと思ったが涙目になって何度も頭を下げて謝ってきたのでさすがに怒るに怒れず結局許してしまった。・・・ただ魔理沙の作った薬はもう簡単には飲まないと誓った。

そして・・・紫に会った。といってもまあそこまで深刻な話にはなっていないが。紫は俺を警戒してはいるが俺が驚異とならなければそれでいいらしい。むしろ俺は紫に気に入られているらしい。俺も同じだ。紫のことは気に入っている。いや、気に入っているというよりは尊敬しているといったほうが正しい。まだ出会って間もないが、紫からはそんな感情を抱かせる威厳のようなものがある。だからこそ藍も橙もそして霊夢も紫のそう言ったところに敬意を評しているのだらうと思う。それはそうと紫に俺のキャッシュカードを紫に渡しておいた。必要になった時に紫に頼んでお金をもらうためだ。頼んだら紫は快く引き受けてくれた。・・・まあ、なにか企んでるような表情もしていたが気にしないでおこうと思う。

そして今は・・・

「これでー」

「甘いぜー」

魔理沙と弹幕ごっこしている。魔理沙と初めて弹幕ごっこをしてから一週間あれからほぼ毎日霊夢と魔理沙を相手に弹幕ごっこをしている。流石に毎日やっているもので少しは強くなったと思う。

「だいぶやるようになったな！でもまだ負けないぜ！」

そう言つて魔理沙は一週間前とは比較にならない規模の弹幕を展開してきた。やはりあの時は手加減していたようだ。俺はその弹幕を躲したり刀で切り落としたりして凌いだ。そしてスペルカードを取り出して発動する。

「混符「アンビバレンス」!!」

スペルカードを発動すると魔理沙の横に黒と白の弹幕が展開され魔理沙に襲い掛かる。

「いい弹幕だ！でも当たらないぜ！」

そう言つて魔理沙は俺の読（・）み（・）通（・）り（・）弾幕を躲した。俺は弹幕を変わした魔理沙に向かって突っ込み魔理沙の首元に刀を突きつけた。

「うっ……」

「俺の勝ちだな魔理沙」

俺は刀を突きつけたまま勝利宣言した。

「くっそく！とうとう負けた！」

「ようやく勝ちを拾えたな」

そう言いながら俺は刀を仕舞い魔理沙と共に地面へと降りた。

「すごいわね。まさかたった一週間で魔理沙に勝つなんて」

試合を見ていた霊夢がそう言ってきた。

「全くだぜ。まさかスペルカードを囿に使うなんて思わなかったぜ」「なにものも使い様ということだ。まあスペルカードがなければ勝てなかったと思うが」

そう、俺はこの一週間で霊夢に白紙のスペルカードをもらつてスペルカードを3枚作つた。どうすれば勝つ事ができるようになるかを徹夜で考えて作つた自信作だ。……ただこのスペルカードをフルに使つても霊夢には勝てなかったが。というか霊夢の「夢想天生」つてチートだろ。攻撃が当たらないってどうやって勝てと？

「さて、それじゃあ晩ご飯にするか。直ぐに作るから待ってる」
「ええ」

「今日もうまいの期待してるぜ」

「またうちで食べていくの……」

「まあ、気にするな！」

「気にするわよ！」

このやりとりからわかるかもしれないが魔理沙は頻繁にというかほぼ毎日博麗神社でご飯を食べている。霊夢は怒っていたが魔理沙はやめるつもりはないらしい。毎回ご飯時になるといつの間にかきている。まあ、俺がもう一枚諭吉を提供したので（霊夢は満面の笑顔で礼を言っていた）食費の心配は今のところないからいいが。

「ほら喧嘩すんな。うまいもん作ってくるからおとなしくしてろよ」

「わかったわ（わかったぜ）」

（……このふたり、やっぱ仲いいな）

俺は晩御飯を作り、3人で食事をした。

「ふう」

3人で食事し終え、魔理沙が帰ったあと。俺は縁側で煙管をふかしていた。外の世界では未成年が何をやっていると思われるだろうがここは幻想郷。そんな常識にとらわれる必要はない。はじめはむせていたが今は煙管のよさが分かってきたという感じだ。

「お風呂空いたわよ、ミコト」

霊夢の声がしたので俺は振り返った。霊夢は寝巻きに着替えており、風呂上り特有の蒸気をまとって頬をピンク色に染めている。……正直今の霊夢はかなり可愛いと思う。

「ああ。吸い終わったら行くよ」

そう言っただ俺はまた煙管を啜えた。

「それ本当に好きね」

霊夢が聞いてきた。まあそう思うのは無理ない。煙管を手に入れてから毎日吸っているからな。

「ああ。悪くない」

「どう？幻想郷の生活は慣れた？」

「まあな。はじめは驚くことが多かったが今は驚くことにも慣れたと
いった感じだ。向こうに居た時よりずっと楽しい」

「そう・・・帰りたいと思ったことはある？」

「ない」

俺は即答した。あそこに帰りたいなど微塵にも思わない。たとえ向こうにいる友人に会えなくても構わないと思った。それだけ俺はこの幻想郷を気に入ってるのだ。

「霊夢」

「なに？」

「これからもよろしく」

俺はおそらく・・・久方ぶりに笑顔を浮かべて霊夢に言った。珍しいと思っただのか霊夢は少し目を見開いた。しかしすぐに微笑みを浮かべ

「こちらこそよろしく」

そう返してくれた。俺はその言葉に満足した。

「じゃあ俺お風呂入ってくる」

「そう。私はもう寝るわね」

「ああ。お休み」

「お休み」

そう言って霊夢は寢床に向かった。俺はお風呂を満喫して寢床に入り眠った。

外に紅の霧が出始めていることに気がつかず。

「まだ出ているな」

俺は外に広がる紅い霧を見つめてそう呟いた。これでもう三日になる。この赤い霧が出ているせいで太陽の光が遮られ、ただでさえ寒い冬がより一層寒くなってしまった。おかげで洗濯物がなかなかかわかない。それ以上に問題があるのはこの霧が普通の人には有害であることだ。霧を浴びすぎると体調が悪くなるらしい。おかげで人里に住む人間は家の外に出られなくなってしまった。慧音が寺子屋を開けないと嘆いていた。

「なあ霊夢これってやっぱり異変じゃあないか？」

神社に来ていた魔理沙が霊夢にそう尋ねた。

「ええ、間違いなく異変ね」

「じゃあ解決しなきゃなんないだろ？お前は博麗の巫女なんだから」「わかってるわよ。私もそろそろ解決しに行こうと思ってたところよ」

どうやら霊夢は博麗の巫女として異変を解決しに行くらしい。

「俺も行こう。霊夢」

「ミコトもっ？」

「ああ。霊夢言っただろ？仕事を手伝ってもらおうって。だから俺も手伝うよ。幸い俺は霧の影響を受けないみたいだしな」

「いいの？危険かもしれないのよ？」

「わかってる。覚悟の上だ」

「……わかったわ。お願いするわ」

「ああ」

俺も異変の解決に協力することにした。

「待った！私も行くぜ！」

「魔理沙も？どうしてよ？」

「まあ私も気になってたしな。霊夢だけに美味しいところは持って行かせたくないし」

「全く……遊びじゃないのよ」

「大丈夫。わかってるって」

「はあ……いいわ勝手にしなさい」

こうして魔理沙も異変解決に協力することになった。

数刻後俺は動きやすい格好（外の世界にありそうな服に黒いコート）に着がえて外に出た。

「着替え終わったわね」

「ああ」

「それじゃあ行くぜ」

そう言って俺たち三人は異変を解決するため飛び立った。

この時、俺はこの異変が俺にとって大きな転機になることをまだ知らなかった。

第12話

side ミコト

「ところで今どこに向かっているんだ？」

異変解決のため出発してしばらくして俺は先頭を飛ぶ霊夢に聞いてみた。

「さあ？わからないわ」

「・・・は？」

俺は霊夢の返事に思わずそんな声をあげてしまった。

「えっと・・・霊夢？なんで行くあてもないのにそんなに迷いなく飛んでいるんだ？」

「勘よ。勘」

(いやいや霊夢さん？勘って、それでいいんですか？)

俺は心の中で思わず敬語で突っ込んだ。

「なあ魔理沙。大丈夫なのか？」

俺は少々心配になったので魔理沙に聞いた。

「大丈夫だぜ。霊夢の勘はよく当たるからな」

魔理沙までそんなことを言っている。これはもう従うしかないよ
うだ。

「何よミコト。私の勘が信じられないの？」

霊夢が自信満々な顔でそう言ってきた。

(そんな顔で言われたら信じるしかないな)

「いや、信じよう。頼りにしている」

「任せておきなさい」

そう言って前を飛ぶ霊夢に俺と魔理沙はついて行った。

(ん?)

あれからおおよそ20分くらい経っただろう。森の中で奇妙なものを見つけた。

(なんだあの黒い塊)

そこにあつたのは黒い塊だった。大きさは子供がすっぽり入るくらいだ。しかも……

(中から気配がするな。この気配は……妖怪か?)

幻想郷に来て一週間経って、俺は妖怪特有の気配もわかるようになった。

「なあ霊夢、魔理沙。あれ」

「ええ。妖怪ね」

「間違いないな」

やはり妖怪か。俺たちは襲いかかってくる可能性を考えいつでも戦闘できる心構えをした。そうしていると黒い塊はこちらに近づいてきて、

ドン！

………近くにあつた木に思い切りぶつかった。

「うう……痛いく」

気にぶつかると黒い塊は消え、中から小さな女の子が出てきた。黒と白の服を着て金髪の髪をしており赤いリボンをつけている見た目幼い女の子だ。

「あく大丈夫か?」

俺は涙目になっているその子に思わず聞いてしまった。

「うう〜大丈夫……」

かなり痛かったんだろうな。正直大丈夫には見えない。

「ミコト、なんで妖怪のことなんて心配してるのよ」

「いや、今の見てるとついな」

霊夢は心配する必要はないというがあんな涙目の顔見たらな。

「ねえところであなたたちは……」

「食べてもいい人類?」

その言葉を聞いた瞬間霊夢と魔理沙は身構えた。しかし俺は……

「いや、食べちゃダメだよ」

そう言ってルーミアを諭した。

「えくでもお腹すいたく」

そう言って女の子は手をパタパタさせていった。

「じゃあちよつと待ってろ」

そう言って俺は持っていた荷物の中からおにぎりを取り出した。

「ほら、これでもたべろ」

「いいの？」

「ああ」

女の子はおにぎりを受け取って食べた。

「俺はミコトと言うんだが、お前の名前は？」

「私はルーミアだよ」

「そうか。ルーミア、美味しいか？」

「美味しいよミコト」

「・・・人間よりか？」

「うくん、わからない。人間食べたことないから」

「食べたことないの？妖怪なのに」

霊夢がルーミアにそう尋ねた。

「だってわざわざ襲うの面倒だもん」

「変わった妖怪だぜ」

やはり人を襲わない妖怪は珍しいのか？でも紫や藍も人を襲って食べてるようには思えない。あの二人も特殊なのか？

「だったらルーミア。これからも人間なんて食べないほうがいい。ま
ずいから」

「へく。そうなのか」

ああ、多分な。俺はルーミアの頭を撫でる。ルーミアは気持ちよさ
そうに目を細めた。

(いいなあ・・・)

何故か霊夢と魔理沙の視線を感じる。というか前にもこんなこと
なかったか？

一瞬、ルーミアのリボンに手が触れると・・・俺は何か強い

寒気を感じた。

「ッ！」

俺はルーミアの頭から手を離れた。

(なんだ？今のは？)

「どうしたの？ミコト？」

突然手を離れた俺に疑問を感じたのか霊夢が訪ねた。

「いや、なんでもない」

俺は霊夢に余計な心配をかけたくなかったからそう言った。

「なあ霊夢、ミコト。そろそろ行くこうぜ」

どうやら魔理沙は待ちくたびれたらしくそう言った。

「そうね。行きましょう」

「ああ」

「行っちゃうの？」

「ああ。また会ったときはなにか食べさせてやるからもう人間を食べないって約束してくれないか？」

「わかった。約束する」

「いい子だ」

「ミコト」

「わかってる。じゃあなルーミア」

「バイバイ。ミコト」

俺たちはルーミアと別れ先に進んだ。

「ところでミコト。どうしておにぎりなんて持ってたの？」

疑問に思ったのか霊夢が俺に聞いてきた。

「いつまでかかるかわからなかったからな。弁当として作っておいたんだ」

「そう．．．．．私の分もあるわよね？」

「ああ、あるぞ。もちろん魔理沙の分もな」

「おお。気が利くなミコト。あとで食べようぜ」

「そうね」

(まあ俺のおにぎりはさつきルーミアにあげちまったがな)

そんなことを考えながら俺たちは先に急いだ。．．．十分後に

お弁当を食べて。

しばらく進むと湖が見えてきた。かなり大きくて……

「凍ってるな」

「冬なんだし凍ってても不思議じゃあないだろ？」

俺のつぶやきに魔理沙がそう答えた。

「確かに今は冬だし霧のせいで太陽の光がなくて一層寒いがこの規模の湖が凍るのは流石に不自然だ」

「そうなの？」

「ああ。おそらく何か原因がある」

そんな会話をしていると俺たちに向かって冷気が向かってきた。俺たちは冷気に反応してその場から退いた。すると俺たちのいた場所に氷の弾幕が降り注いだ。

「へえ、あたいの攻撃を交わすなんて結構やるのね」

声のした方を向くとそこには水色の髪に白と青の服を着て氷の羽を持った活発そうな女の子と緑の髪に青い服を着て見慣れない形の羽を持った女の子がいた。

「チ、チルノちゃん！いきなり攻撃したら危ないよ！」

「大丈夫だよ大ちゃん！あたいったら最強だから！」

どうやら青い子はチルノというらしい。緑色の子は大ちゃんと呼ばれている。

「お前たちいきなり何するんだ！」

「ここは最強のあたいの湖だ！勝手に入ってくるな」

どうやらこの湖を凍らせたのはチルノらしい。この規模の湖を凍らせられるなんてなかなかやるな。

「あなたたち、妖精ね」

「そうよ！あたいは最強の妖精チルノよ！」

「は、はじめまして。私は大妖精と呼ばれています」

霊夢が聞くと二人の妖精は答えた。あの緑色の妖精は種族名で呼ばれているのか。

「さつきも言ったけどここはあたいの湖だどつとと出でいけ！

氷符「アイシクルフォール」!!」

チルノはスペルカードを使ってきた。というか持っていたのか。俺たちにくつもの氷塊が襲いかかった。

(ん？あれって・・・)

霊夢と魔理沙を見ると笑みを浮かべている。二人も気づいたな。俺たちはある場所に向かって飛んだ。

「どうだ！まいったか」

チルノは決まったと思っただけで勝利宣言している。しかし俺たちに……………

「悪いがその弾幕には当たらないぜ」

「というよりもう当たるのは無理ね」

「確かにな」

弾幕が当たることはない。

「な、なんで！」

チルノが驚いたように声を上げた。

(いや、なんでと言われても)

俺たちがいるのはチルノの正面だ。チルノの弾幕はなぜか……………チルノの真正面に全くかかっていないのだ。

「こんなわかりやすい安全地帯があるんだから当たるわけないわ」

「全くだな。次はこっちから行くぜ」

そう言っただけで魔理沙はミニ八卦炉を構えた。

恋符「マスタースパーク」!!」

魔理沙がうったマスタースパークは見事にチルノに直撃した。

「きゃあああああ!!」

「ち、チルノちやくん！」

直撃したチルノは遠くに吹っ飛んでいき大妖精はチルノを追って行った。

「少しやりすぎじゃないか？」

「大丈夫だろ？あれでも加減はしたし、妖精は結構タフだからな」

「そうね。大丈夫よ」

本当に大丈夫か？かなり吹っ飛んだけど。

「そんなことよりミコト、魔理沙。あれ」

俺と魔理沙は霊夢が指さした方角に視線を向けた。そこには……大きな紅い屋敷があった。

「ん？この近くまで来たことあるけどあんなところにあんな目立つ屋敷なんてなかったと思うが？」

「どうやらあの屋敷はもともとここにあったものではないらしい。」

「あの紅い屋敷に今回の異変の現況がいるわ。私の勘が言ってるから間違いないはずよ」

「まあたしかにあれはあからさまに怪しいな」

俺も元凶はあの屋敷にいると思った。

「さて、行くわよ。ミコト、魔理沙」

「ああ」

俺たち三人は元凶がいるであろう屋敷へ向かって飛び立った。

第13話

side ミコト

霊夢の勘を頼りに異変の元凶を探す俺達は紅い屋敷を見つけた。

「また見事なまでに紅いな」

「紅い霧に紅い屋敷。わかりやすい共通点だな」

「間違いないわね。異変の元凶はここにいるわ」

それにしても全く迷わずに勘でここを探し当てるなんて霊夢はすごいな。

「・・・ここまで紅いと目が痛いな」

「私も少しチカチカするわ」

「いったいこの屋敷を建てた奴はどれだけ紅が好きなんだろうか？
正直目にきつい。」

「ふたり共、早く行こうぜ」

屋敷の紅さに目が眩んでいる俺と霊夢に向かって魔理沙が言った。
魔理沙は平気なのか？魔理沙について屋敷の門に向かうとそこには・・・

「すすすす・・・」

赤い髪に緑を基調とした服、龍の文字がついている帽子をかぶった
女性が立ったまま門に寄りかかり眠っていた。

「なんだ、こいつ？」

「門の前に立っているということはおそらく門番だろう」

「立っているというか寝てるけど。本当に門番なのかしら？」

俺達は門番を目の前にそんな話をしてしていると・・・

「ん、んくん」

門番の女が伸びをして起きてしまった。起きる前に屋敷に入るつもりだったんだがな。仕方ない。

「よっ。おはよう」

「あ、おはようございます」

「屋敷の中に入っていいか？」

「はい。いいです・・・ってダメですよ！」

「つち。後少しだったんだがな。」

「・・・なあ霊夢」

「なに?」

「前から思ってたけどミコトって・・・結構変わった奴だよな?」

「・・・そうね」

「なんか霊夢と魔理沙に失礼な事言われているけど今はスルーしよう。」

「ここを通りたければ私を倒してからにしてください!」

「そう言っただけで門番は戦闘態勢にはいつた。・・・この門番・・・」

「わかったわ。だったら私が相手になるわ」

「そう言っただけで霊夢は前に出ようとするが。」

「待て。霊夢」

「俺は戦おうとする霊夢を引き止めた。」

「なによ、ミコト」

「彼女とは俺が戦う」

「え?どうしてよ?」

「どうしてもだ。ふたりともいいか?」

「まあ、構わないけど」

「私もいいぜ」

「決まりだな」

「俺は門番と戦う為に前に出た。」

「あなたが相手ですか。先に言っておきますけど今退くなら見逃してあげますよ」

「それは嬉しい申し出だが俺にも退けない理由があるんでな。逃げる訳には行かない」

「そうですね。それなら全力で行かせてもらいます!華人小娘、紅美

鈴!いざ尋常に勝負!」

「俺は一夢命だ。先に謝っておく、すまない」

「?なにがですか?」

「この勝負・・・」

一気に決める！混符「アンビバレンス」!!」

俺は不意打ち気味にスペルカードを発動した。それでも美鈴は反応して避けた。

「あまいですよ！その程度では私は倒せません！」

「混符「黒と白の螺旋」!!」

「え？わわっ！」

俺は続けざまにスペルカードを発動した。螺旋状の弾幕が美鈴を襲う。美鈴はかろうじて避けることができようだ。・・・が、

「混符「黒と白の奈落」!!」

「ちよっ！待ってくださ・・・きゃあああああ！」

さすがに間髪入れずに使った3枚目のスペルカードによって現れた弾幕には反応しきれず、美鈴は弾幕の餌食になった。

「きゅ・・・」

弾幕をもろに受けた美鈴は目を回して気絶している。

「・・・よし。屋敷に入るか」

門番が気絶していることを確認して、俺は霊夢と魔理沙に屋敷に入るよう促した。

「え、ええ。そうね」

「あ、ああ。入ろうぜ」

（容赦なさすぎるでしょ（だろ）！）

霊夢と魔理沙が何か言いたそうな顔をしているが俺は大して気にせずに屋敷の中に入った。

「中まで紅いのかよ・・・」

屋敷に入った俺達は外装と同様に紅い内装を目の当たりにした。本当に目に悪い。早いところ慣れないとな。

「ねえミコト。さっきのは容赦なさすぎじゃない？」

内装に目をあてられている俺に対して霊夢が聞いてきた。まあ俺も少しやりすぎたと思う。だが……

「仕方がないだろ……ああでもしないと確実にこっちがやられていたからな」

「……どういうこと？」

「以前武術に精通した友人がいるって言っただろ？そいつの相手をしてきたからだと思うが武術者がもつ特有の闘気みたいなものがわかるんだよ。それでさっきの門番からは立ち居振る舞いからかなりの闘気を感じてな。相手のペースで戦ったらマズいと思つてスperlカードを一気に使つて終わらせたんだ」

「そう……さっきの門番つてそんなに凄いの？」

「ああ。かなりの使い手だろうな。多分接近戦になつたら俺達じゃあ束になつても勝てないだろうな」

まさかあいつ並みの闘気を持つ奴がいるなんてな。

「そんなに強いんだ……まあもう戦うことはないだろうから気にする必要は無いわね。先に進みましょう」

「ああ。そうだな。……ん？」

霊夢と共に先に進むもとうとあることに気がついた。

「おい……魔理沙はどうした？」

そう。魔理沙がいつの間にかいなくなっているのだ」

「あら？そう言えはいないわね。まあ魔理沙のことだから大丈夫よ」

霊夢は魔理沙のことは大して気にせず先に進んでいった。

(……ここで魔理沙なら大丈夫だと納得する俺も大概だな)

霊夢と同じく、魔理沙なら大丈夫だと思つた俺も霊夢に続いて先に進んだ。

あれから10分。俺達はメイドの姿をした妖精を倒しながら先に

進むが……

「あーもう！いくらなんでも広すぎるわよ！」

「確かに。これは異常だな」

そう、広すぎるのだ。大きい屋敷だからある程度は広いと思っていたがこれは広すぎる。明らかに外から見た屋敷に合わない広さだ。

「おそらく誰かね能力が作用しているんだろうな」

「誰だかわからないけど面倒なこととしてくれるわね」

「あら？それはごめんなさいね」

「!!」

突然、俺達の会話に割って入ってきた声が聞こえてきた。俺と霊夢は声のする方向を向くと、そこには無数の銀のナイフが俺達に向かってくるのを見た。俺は刀を抜いてナイフを弾いた。

「よく反応できたわね」

俺はナイフを投げたであろう人物の姿を目にした。銀色の髪にメイド服、カチューシャをつけた俺と同じ年ぐらいの少女だ。俺は彼女の登場に驚いている。なぜなら……

(近づいてくる気配を感じなかった……)

そう。今でこそ気配を感じるが彼女が近づいてくる気配を全く感じなかったのだ。こんなこと今までにはなかった。

「いきなり攻撃してくるなんて、礼儀がなっていないわね」

「ごめんなさい。私が礼儀を尽くすのはお嬢様だけなの」

「……そのお嬢様が霧を出したのか」

「だとしたらどうするの？」

「決まってるわ！私が退治する！」

「そう。ならここから先に……」

瞬間。メイドは突然姿を消し、

「通す訳には行かないわね」

俺達の後ろに現れた。霊夢は反応が遅れたようだが俺はすぐに気配を感じたためメイドに向かって弾幕を放った。しかしメイドにはなった弾幕はすべて避けられてしまった。

「あら？いい反応してるわね」

「あいにくと気配に敏感なものでね。すぐにわかったよ」

何の能力かはまだ確定できないがここは……

「霊夢。彼女も俺が相手をする」

「また？どうしてよ？」

「まだはつきりとわからないがあいつの能力は俺のほうが対処しやすいと思う。だから俺がやる」

「わかったわ。その代わり、元凶とは私が戦わせてもらうわよ」

「ああ。わかった」

俺はメイドと戦うため刀を構えた。

「あなた1人でいいのかしら？2人できてもいいのよ？」

「霊夢にはそのお嬢様と戦ってもらうからな。あんたの相手は俺1人でいい」

「随分余裕ね。でもいつまでその余裕が続くかしら？」

「最後まで続かせるさ」

俺とメイドは互いに笑みを浮かべながらそんな話をする。

「ふふ。あなたなかなか面白いわね。名前を聞いてもいいかしら？」

「ああ。一夢命だ。できたらミコトと呼んでくれ。あんたは？」

「私は十六夜咲夜。この紅魔館のメイド長よ」

「そうか。じゃあ挨拶はここまでするさ……」

「はじめようか（はじめましょう）」

ほぼ同時に、俺は弾幕を、咲夜はナイフを放ち戦いの引き金を引いた。

第14話

side ミコト

「混符「アンビバレンス」!!」

俺は咲夜を討ち取るべくスペルカードを発動した。弾幕が咲夜を襲うが………

「あまいですよ」

咲夜はまた一瞬で俺の背後に移動し、手に持ったナイフで直接切り掛かってきた。俺は初撃を刀で防ぎ、そのまましばらく咲夜と斬り合いをする。

「あなた人間よね？なかなかいい体裁きしているわね」

「そつちも随分と人間離れた能力を持っているようだな」

「それは誉め言葉として受け取っていいのかしら？」

「もちろん……だ!」

俺の切れない刃が咲夜にあとわずかに届くと思われた瞬間。また咲夜は姿を消し、別の場所に現れた。

「できれば今の当たって欲しかったんだがな」

「そういうわけにはいかないわ。たとえその刀が切れないとわかってても当たったら痛いもの」

まあ、当たったら痛いんだから好き好んで自分から当たりにいくわけがないか。それにしても本当に厄介な能力だ。

(このままじゃあただ消耗するだけのジリ貧。まずは咲夜の能力を見極めないとな)

俺は咲夜の能力を分析することにした。

まず第一に咲夜は一瞬で移動することができる。俺が移動した瞬間気配を感じることができなかつたから一瞬で間違いないだろう。

次に咲夜はこの屋敷………たしか紅魔館だったな。紅魔館を自身の能力で広くしている。はじめに言ったあの言葉からこれも間違いない。

そして咲夜の能力にはインターバルがある。一度使ったら約5秒間能力が使えなくなるようだ。これは今までの戦いでわかつた。

そして最後に咲夜は攻撃にも能力を使っている。ナイフを数本投げたかと思えば次の瞬間には数十本が増えて襲いかかってきた。

以上のことから咲夜の能力は『空間』に干渉するものというのが一番正解に近いと思う。だがあくまで一番近いだ。確定ではない。

空間を操る力だと仮定しても不可解な点がいくつかある。

まずナイフを増やすこと。これは空間を操っているからでは説明しづらい。それに咲夜は自分に対して能力を使っているが、俺に対して能力を使っていない。俺に対して使えばこの勝負、とつくに決着をつけられたはずだ。自分以外には使えないわけでもないだろう。現に屋敷には干渉している。まだ能力の確定には遠い。

「急に黙りこんでどうしたのかしら？」

「ああ。お前を倒す算段を立てていたんだ」

「そう。それで、何か思いついたかしら？」

「さあ、どうだろうな？」

正直算段は全くといっていいほどたっていない。となるとここは……

「混符「黒と白の螺旋」!!」

咲夜を観察する。それしかできないだろう。咲夜の動きを観察するために俺はスペルカードを発動した。

「いい弾幕ですが……無駄ですよ」

そう言い、咲夜はまた一瞬で移動した。……しかし俺は今回は見逃さなかった。移動する直前に手にあるものを持っていたことを。

(あれは……なるほど。そういうことか)

俺は咲夜の手にあるものを見て咲夜の能力がわかった。

「なんどやっても無駄よ。あなたの攻撃は私には当たらないわ」

「……時間」

「!？」

「お前の能力は『時間を操る程度の能力』……だろ？」

「……そうよ。よくわかったわね」

「ああ、初めはお前の能力が『空間を操る程度の能力』だと思ったがす

ぐに違う時わかったよ」

「どうしてかしら？」

「空間を操るなら自分よりも俺の場所を移動させた方が確実に勝負をつけやすいからな。それをしなかったから空間自体を操るわけじゃないとわかった。まあ、わかったのは空間を操る能力じゃないことだけ。で何の能力かはしばらくわからなかった……時計を見るまではな」

「あら、気を付けていたのだけれど見られてしまったようね」

「さっきのスペルカードはあなたの動きを観察するために使ったんだよ。おかげで移動する直前に時計を持つているのが見えた。それで能力は時間に関連したものだ。と確信したよ。時間は空間と密接に関係しているからこの紅魔館がお前の能力で異常に広がっていることも納得できる」

「聡いわね。私はまんまとあなたの思い通りになってしまったというわけね」

「まあそういうことだ」

「……でもそれがどうかしたのかしら？能力がわかったからって私に勝てるとは限らないわよ」

「……そいつはどうかな？」

俺は手にした刀を鞘に納め、刀から手を離した。

side 咲夜

「……武器をしまうなんて何のつもりかしら？」

「さあ？何だろうな？」

一体何を考えているのかしら？まさか諦めた？……いや、それはないわね。彼とはついさっき会ったばかりだが、こんなに簡単に諦める人じゃないことはわかる。ミコトが何を企んでいるかはわからない。……でもそろそろ終わりにさせてもらいましょう。

「悪いけどこれで決めさせてもらおうわ。・・・さようなら。あなたとは違う形で会いたかったわ」

きつと彼とは良い関係が築けたでしょうね。

「幻符「殺人ドール」!!」

私はスペルカードを発動して彼に私の能力で数十本もの数のナイフを放った。ナイフが無防備なミコトを襲い私の勝利が決まる・・・事はなかった。

「なっ!?!」

ミコトは自分が着ていたコートを脱いで彼を襲うナイフをすべて受け流したのだ。さらにミコトは受け流したナイフを数本つかみ私に目掛けて投げてきた。

「っ!!」

あまりのことに一瞬反応が遅れたが、私はかろうじてナイフを避ける事ができた。しかし、彼の攻撃はそれで終わらなかった。ミコトはナイフを避けた私に向かって刀に手をかけて迫ってきていた。そして彼はそのまま抜刀し・・・

バギッ!

私の手にあつた懐中時計を叩き壊した。

「えっ!?!」

ミコトは私が驚いている隙に刀をかえして私の首筋に刃を当ててきた。

「これでもう時間は操れない。俺の勝ちだ」

私がミコトに負けた瞬間だった。

side ミコト

俺は咲夜の首筋から刀を離し、鞘に納めた。

「お疲れ。ミコト」

「ああ」

俺は霊夢の労いの言葉にそう返した。

「・・・なぜとどめをささないのかしら？」

咲夜が敗者の自分にとどめをささない理由を聞いた。

「さつきのですでに勝負はついた。俺はお前に勝つ為に戦っていたんだ。倒すことが目的じゃない。それにお嬢様のところに案内してほしいからな」

「・・・私が敵であるあなた達をお嬢様の下に案内すると思っっているのかしら？」

「案内してくれないなら自分達で探すさ」

「・・・わかったわ。お嬢様のところに案内してあげる」

「あら？ いいの？ 私はあなたの言うとおりに敵よ」

「私は敗者よ。敗者が勝者の言うことを聞くのは当然でしょう？ 好き勝手動かれて屋敷をめちやくちやにされたらかなわないし。それに・・・お嬢様はあなた達に負けないわ。私はお嬢様の強さを知っているから」

「・・・随分信頼しているんだな」

「当然よ。なにせあの方は・・・私が生涯尽くすと決めたただひとりのお嬢様なもの」

咲夜の力はかなりのものだ。人間でありながら時間という強大な力を操る。それだけでなく咲夜自身の身体能力も並みの人間を大きく超えている。その咲夜にここまで言わせるとは、そのお嬢様の實力はそれほどものなのだろう。

「なあ霊夢、やはり俺も・・・「必要ないわ」

俺は霊夢と共に戦うように言おうとしたが霊夢は断った。

「ミコト、私は博麗の巫女よ。私には私の手で異変を解決する義務があるわ。だからそのお嬢様は私が倒すわ。それともミコトは私のことが信用できないの？」

・・・全く。そんなの答えは決まっている。

「信じているさ。霊夢なら負けないってな」

「それでいいのよ。ミコトは信じて見てなさい」

「ああ。そうさせてもらう」

「そうだ。まだ出会ってそこまで日が経っていないが俺は知っている。霊夢がどれほど強いのか。霊夢が負けることはないことを。だから……霊夢なら大丈夫だ。」

「……随分信じ合ってるのね。あなたたち恋人同士なのかしら？」
「なっ／＼／＼／＼あんた何言ってるのよ！別にそんなのじゃないわよ！」

「そうだ。霊夢が俺なんかの恋人なわけないだろ」

「……」

俺が否定するとなぜか霊夢がジト目で見てきた。別にまずいこと言っていないよな？

「……そう。ごめんなさいね」

誤解したことに咲夜は謝ってきた。何故かどことなく嬉しそうな顔をしている気がする。

「……あなた、さっさとそのお嬢様のところに連れて行きなさいよ」

「ええ、今お連れするわ」

そう言っただけで咲夜は歩いていく。俺たちはお嬢様に会うために咲夜の後をついていった。

第15話

side ミコト

「コート穴だらけになっちやったわね」

咲夜に連れられお嬢様のもとへ向かっていると霊夢が話しかけてきた。

「まあ仕方ないさ。あれしか方法が思いつかなかったからな」

「まさかコートでナイフを防がれるとは思わなかったわ」

「思いつきでやったんだが・・・なんとかなるものだな」

「思いつきでって・・・失敗したらどうするつもりだったのよ」

「・・・痛かっただろうな」

「たぶんだけど・・・痛かったじゃあすまないわよ？」

「まあ成功したんだからいいだろ。コートはあとで直すし」

「ミコト・・・あなたって本当に外見とイメージ違うわね」

「そうか？」

「ええ。会ったばかりの私もそう思うわ」

霊夢と咲夜、2人に言われるとは・・・そういや神楽とあいつにもよく言われていたな。

「と、そういえば咲夜。聞きたいことがある」

「何かしら？」

「金髪で白黒の服を着て箒を持っている魔法使いの女を見なかったか？」

「見なかったけど・・・知り合いかしら？」

「ああ。一緒に来たんだが、途中からはぐれてな」

「そう・・・もしかしたらあそこかしら？」

「心当たりがあるの？」

「ええ。多分だけど・・・図書館にいるわね」

side 魔理沙

私は今霊夢たちと分かれて紅い屋敷をひとり探索している。理由はもちろんこの異変の犯人を私の手で倒すためだ。霊夢には美味しいところは持って行かせないぜ！まあ本当はミコトも連れて行きたかったんだけど・・・霊夢と何か話しているみたいだから仕方なく一人で探索することにした。そんな私の前に大きな扉が現れた。

「お？何かありそうだぜ」

私は扉を開いて中に入った。

扉を開いた先には大きな本棚がたくさんあった。

「図書館か」

私は本棚にある本を眺める。なかなか興味深い本がたくさんあるぜ。

「ちよつと借りてくぜ」

私は本に手をのばそうとすると・・・

「悪いけどうちは本の貸出はしていないわ」

声のする方を向くとそこには女が2人いた。ひとりとは私と同じくらい背で紫色の髪をしていて顔色の悪い女。もうひとりは赤い髪にコウモリみたいな翼をはやして頭にも同じような翼に似たものをつけた女だ。

「お前たち誰だ？」

「私はパチュリー・ノーレッジ。この図書館の主よ」

「私は小悪魔と申します」

「そうか」

名前を聞いて私は再び本に手を伸ばした。

「話を聞いてなかったの？ここは貸出してないの」

「そう硬いこと言うなよ。少し借りるだけだぜ」

死ぬまでな。

「ダメよ。ここの本は私のものなんだから貸さないわ」

「融通が利かないやつだぜ」

「融通が利かなくて結構よ。さっさと・・・出て行って」

紫色の奴が私に向かって弾幕を放ってきた。

「おっと」

私は箒に乗って躲した。

「いきなり攻撃してくるなんて、物騒なやつだ」

「人の本を勝手に持っていきこうとするやつに言われたくないわ」

「ちゃんと借りるって言っただろ？」

「私は許可してない」

そう言つてまた弾幕を放ってきた。今度は赤いのも一緒にだ。

「甘いぜ！」

私は弾幕を躲してあいつらに弾幕を放った。ふたりはそれを飛んで躲す。

「火符「アグニシャイン」!!」

紫色はスペルカードを使ってきた。

(これは火の属性・・・こいつも私と同じ魔法使いか)

私は襲い掛かる火を躲した。

「やるな！でも負けないぜ！」

私は先ほどよりも規模の大きい弾幕を放った。

「くっ！」

「きゃあああ！」

「小悪魔！」

紫色には躲されたが赤いのは当たった。

「赤いのは早くも退場のようだな」

「ここからが本番よ！火&土符「ラーヴァクロムレク」!!」

紫色のが新たなスペルカードを発動してきた。

(火属性と地属性の魔法を同時に発動できるのか)

「二つの属性を同時に発動できるなんてやるな！でもそれじゃあ私は捉えられないぜ！」

私はまた弾幕の隙間をぬって躲した。

「くっ！速い！」

「今度はこっちから行くぜ！恋符「マスタースパーク」!!」

私は紫色のに向かってマスタースパークを放った。紫色はかろうじてにだが躲す。

「残念ね外れよ。まさかそんな魔法を使えるなんて思わなかったけどそれくらいなら躲せるわ！」

躲されたか。あの紫色中々やるぜ。

「遊びはここまでよ！これで決めるわ！日符「ロイヤルフレア」!!」

紫色のは先ほどよりもはるかに規模の大きいスペルカードを発動してきた。流星にこれを躲すのはきついぜ。……仕方ない。霊夢と響に勝つために作ったとっておきだったんだが使わせてもらわず！

「どう？いくらなんでもこの弾幕は躲せるかしら？」

「躲す必要はないぜ。打ち消させてもらう！魔符「スターダストレヴァリエ」!!」

私はスペルカードを発動した。私の弾幕が紫色の弾幕とぶつかって互いに打ち消しあった。

「うそー！」

「これで終わりだ！」

私は箒に乗って紫色のに突っ込んだ。

「きやあああああ！」

紫色はもろに受けて吹き飛んだ。

「むきゆう……」

紫色は気絶している。当分起きそうにないな。

「やっぱり弾幕はパワーだぜ！さてと……」

私は本棚から本を数冊手にしてしまった。

「悪く思うなよ。ちよつと死ぬまで借りてくだけだからな」

私は気絶している紫色に言った。

「さて、そろそろ元凶を探しに行くか」

私は図書館を出て再び異変の元凶を探しに行った。

side ミコト

「ねえ。まだ着かないの?」

霊夢が咲夜に聞いた。まあ咲夜との勝負が終わってからもう15分も歩きっぱなしなので聴きたくなる気持ちはわかるな。

「もう少しよ」

「それさつきも聞いたきがするんだが」

「大丈夫よ。あと5分ほどで着くわ」

(まだ5分もかかるのか。少し広くしすぎじゃあないか?逆に不便だろ)

俺がそんなことを思っていると・・・

「!!」

何かの気配を感じた。

「どうしたのミコト?急に立ち止まって」

「・・・霊夢、咲夜止まれ。・・・何かいる」

「え?」

俺がそういうと前方に無数のそれが現れた。それは黒い人型のような何かだった。

「ちよつと!なによあれ!あれもあんたたちが出したのなの!」

「違うわ。あんな趣味の悪いもの私たちはこの屋敷に置いてないわ」

(こいつらのこの気配・・・人間なのか?それにしては気配が薄い。それに・・・)

なんだ?こいつらを見ていると何故か・・・嫌な気分になる。

「・・・ホシイ」

「え？」

「ホシイ……ホシイ……ガホシイ」

「こいつら何言ってるの？」

「あなたたち何者？誰の許しを得てこの屋敷にいるのかしら？」

「……ホシイ」

咲夜の声が聞こえていないのか。それとも聞こえているにもかかわらず無視しているのか。こいつらは答えない。ただ同じ言葉を繰り返す。

「……ホシイ……ガホシイ」

気味が悪い。なぜこんなにこいつらを見ているとこんなに嫌な気分になる？

「どうやら言葉が通じないようね」

「そうみたいね。だったら……消えてもらいましょう」

そう言っただけで咲夜は奴らに向かってナイフを投げた。ナイフに当たった奴は弾けて消えた。

「っ！本当になんなのよこいつら！」

「霊夢、話はあとにしよう。こいつらは得体がしれなさすぎる。気配もおかしい。倒したほうがいい」

「そうね。こんなやつらを紅魔館にのさばらせておきたくないわ」

「わかったわ。こいつら全員滅してやる！」

こいつらを倒すべく俺たちは戦闘態勢に入った。すると奴らはこちらに向かってきた。しかも腕の形を変形させて刃のようにしている。

「ホシイ！……ホシイ！」

「さっきから欲しい欲しいって何が欲しいっていうのよ！」

霊夢が奴らに弾幕を放った。当たった奴は消滅するが如何せん数が多い。奴らは勢いを衰えずに向かってくる。

「はっ！」

俺は向かってくる奴らを刀で攻撃する。

「霊夢、咲夜！ふたりに向かってくる奴を弾幕で倒してくれ！近づいてきたやつは俺が倒す！」

「わかったわ！」

そう言つて咲夜はナイフを投擲し霊夢はスペルカードを取り出した。

「霊符「夢想封印」!!」

霊夢と咲夜が放つた弾幕は敵の大多数に命中し消滅させた。当たらなかつた奴らは俺が刀で叩き伏せる。そんな戦い方を約3分ほど繰り返す。

「これで最後だ！」

俺は最後の一体を滅した。

「全く。しつこかつたわ」

「弱いくせに数だけはいともものね。鬱陶しかつたわ」

「そうだな。あいつらは一体なんだつたんだ？」

「さあ？わからないわ。でもどうせ考えてもわからないんだから先に進みましょう。咲夜、案内しなさい」

「ええ。わかつているわ」

俺たちが再びお嬢様の下へ向かおうとすると……また先程のやつらと同じ……だが大きい気配を感じた。

「……ホシイ」

「!!」

声のする方向を向くとそこには黒い大きな霧のようなものがあった。その霧は俺に向かって近づいていき俺を覆い尽くした。

「ミコトー」

霊夢が俺の名を叫んだ。しかし霧に包まれた俺は意識が落ちていくのを感じ返事できなかつた。

「……ホシイ……『アイ』ガホシイ」

……そうか。なんで俺がこいつらを見て嫌な気分になつたのかわかつた。こいつらは、こいつらの存在は……俺に似ているからだ。

俺は意識を完全に失い倒れた。

第16話

no side

『全く！なぜお前は賢（さとし）に比べてダメなんだ！』

『本当ね。一夢家の恥さらしだわ！』

『落ち着いてよ父さん、母さん。しょうがないよ。ミコトだって好きでこんなふうになっただんじやないんだから。いちいち僕と比べるなんてかわいそうだよ』

『あら、賢は優しいわね』

『本当に賢は我が家の誇りだ！それに引き換えこの落ちこぼれが！』

『だからやめなつて』

（これは・・・父さん、母さん、兄さんか。そういえば俺は家族にこんな扱いをされていたな。我ながらひどい扱いだ）

『あいつつて賢さんの弟だろ？』

『なんであんな奴が賢さんの弟なんだ？』

『本当！あんなのが弟なんて賢さんかわいそう』

（ああ。そうだ。兄さんを知ってる人からは俺こんな扱いだったな）

『ねえミコトくん。なんでお兄さんの賢くんができて君にできないの？』

『賢くんの弟だつて言うから期待していたけど・・・先生の間違いだつたみたいだな』

『君はお兄さんの顔に泥を塗っている自覚はあるのか』

（学校の先生からもこんなこと言われてたっけな。兄さんの弟だつてだけで期待して欲しくないんだけど）

『あいつつて落ちこぼれなんだろ？』

『そうそう。それで家族に迷惑かけてるんだつて』

『うわ。なのになんであんな清ました顔してんだよ』

『ひよつとして自分は顔がいいからってなにもできなくてもいいとか思ってるのかな？』

『うわっ！どんだけナルシストだよ。気持ちわりい』

『俺だつたらあんな女みたいな顔嫌だな』

(陰口言うなら本人に聞こえないようにしろよ。それとこの顔については好きでこんなふうに生まれたわけじゃない)

(……なんだ？この気持ち。こんなこといつも言われてたのに。自分がどんなふうに思われてるかなんて知ってるのに。慣れてるのに。なんでだ？なんでこんなに………苦しいんだ？)

(………苦しい、苦しい、苦しい苦しい苦しい！)

(なんで？なんでだ？俺は世界を愛しているのに！たくさん愛しているのに！)

(なんでみんな俺を苦しめる？)

(助けてくれ！頼むから助けてくれ！頼むから誰か………誰か………アイシテクレ！)

その時、ミコトの目の前にミコトが最も愛した少女、ミコトを唯一人愛してくれた少女………神楽がいた。

(そうだ！俺には神楽がいる！神楽が愛してくれる！神楽がいれば何もいらない！)

ミコトは神楽ものとへ行き神楽に手を伸ばした。

『ミコト………サヨナラだ』

俺の手が神楽に触れる直前。神楽は砂となって消えた。

(あ……ああ………うああああああ!!!)

(なんで！なんで！なんでなんでナンデナンデ！)

(どうしていなくなったんだ！どうして逝ってしまったんだ！神楽！)

(欲しい。欲しい欲しいホシイホシイホシイ！)

ミコトは愛に飢えた。愛を求めた。………誰も愛してくれないと知りながら。………愛する者がいないと知りながら。

(………アイガ………ホシイ)

ミコトはただ愛を求める存在になった。………まるであの黒い存在のように。

『………ミコト』

そんなミコトの耳に声が聞こえてきた。ミコトを呼ぶ声が。

(………ダレ？)

ミコトは振り返った。そこには……光と何人もの人影があった。

(アレハ……誰だ?)

『ミコト』

人影のうちの一人がミコトの名を呼ぶ。ミコトはその人影に向かって歩き出した。

(あれは……俺は知っている?)

ミコトは歩いていく。そこにいるのが誰だかはまだわからない。それでも導かれるように歩いていく。

『ミコト』

人影のうちの一人が手を差し出す。ミコトはその手に向かって手を伸ばす。するとその人影はミコトの手を掴んだ。ミコトは手に温かく優しい温もりを感じる。そしてミコトは自分の手を掴んだ人影の姿を捉えた。それは紅と白の腋の布がない巫女服を着て頭に大きな赤いリボンをつけた少女だった。

(れ……い……む?)

その少女の姿を完全に捉えた瞬間ミコトは光に包まれた。

side ミコト

「……………コト！ミコト！」

「う……………ん」

「！ミコト！目が覚めたのね！」

俺が目を覚ますとそこには霊夢の顔があった。それもかなり近い。

「霊夢？」

「よかった。ミコトが目を覚まして」

霊夢は先程までの心配した顔から安堵の表情になった。ふと、俺は自分の頭が何か柔らかいものの上に乗っているのに気がついた。……………どうやら俺は今……………霊夢に手を握られ膝枕さ

れているようだ。

「っ!!」

俺は現状に気がつきすぐに飛び起きた。

「?どうしたの?ミコト?」

「な、な、なんでもない!」

俺は自分でもわかるほど明らかに動揺して答えた。

(ど、どうしたんだ俺?なんでこんなに動揺している!)

俺はなぜこんなに動揺しているかわからなかった。

「?そう。ならよかったわ」

霊夢は動揺している俺に少し疑問に思ったようだが流してくれた。

「ミコト、ちゃんとお礼を言っておきなさい。あなたが意識を失った後、その巫女。ずっとあなたの名前を心配そうに呼んでたんだから」

「ちよ、ちよっと!何言ってるのよ!」

霊夢が俺を心配していた?

「.....霊夢」

「な、なによ」

「ありがとう」

「///べ、別にお礼なんていらないわよ!私はただミコトに何かあったら神社の仕事一人でやらなくちゃいけなくなつて困るから.....」

霊夢はやたら早口に言った。最後の方は小声になって少し聞きにくかった。

「それでもありがとう。霊夢」

「ま、まあそこまで言うなら受け取っておくわ!どういたしまして!」

霊夢は目を背けていった。顔も赤いし怒ってるのか?

「.....はあ。あなたたち。いつまでやっているのかしら?」

「つと。悪いな咲夜。ところでさっきの黒いのはどうなった?」

「あの黒いのならあなたが気絶したあとに消えたわ。本当になんだったのかしら?」

「.....あの黒いの。間違いなくあれは俺に似た存在。.....愛されていない存在、愛を求めている存在だ。なんであんなものがこ

ここに出てきてんだ？それにさっきの夢・・・何か関係あるのか？

「まあさっきも言ったけど考えてもしようがないわ。さっさと先に進みましょう」

「そうだな」

「ええ。行きましょう」

（そうだ。今考えても仕方ない）

俺は考えるのをやめ、霊夢たちと共にお嬢様のもとに再び歩き出した。

「着いたわ。ここよ」

俺たちは今大きな扉の前に立っている。

「ここにそのお嬢様とやらがいるんだな」

「ええ。初めに行っておくわ。決して粗相の無いようお願い」

「考えておくわ」

「はあ。それじゃあ開けるわよ」

咲夜が霊夢の発言にため息をつき扉を開けた。

「随分遅かったわね。咲夜」

俺たちが扉の中に入ると中には幼い少女が大きな椅子に座っていた。白い服を着て白い帽子をかぶり、水色の髪、体の割に大きいコウモリのような翼、口元に牙、そして・・・まるで血のように紅い瞳をもつ少女だ。

「申し訳ございませんレミリア様」

「まあいいわ。随分面白いものを連れてきたみたいだし」

少女は俺と霊夢を見ながら言った。少女の言葉にはなにか強い威圧感のようなものを感じた。

（カリスマ・・・というやつか）

この少女には強いカリスマ性がある。おそらくこのカリスマ性は紫に匹敵するほどだろう。だからこそ強い力を持つ咲夜や美鈴はレミリアに従っているのだろう。

「重ね重ね申し訳ございません。彼に敗北し、お嬢様の障害になると分かりながら連れてきてしまいました。どのような罰も受ける所存です」

「気にしないでいいわ。ちようど退屈していたところだし。楽しめそうだわ」

そう言つて少女は椅子から立ち上がり、こちらに歩いてきた。

「はじめまして。私はレミリア・スカーレット。この紅魔館の主で誇り高い吸血鬼よ」

レミリアはスカートの端を掴んで丁寧にお辞儀した。

「こちらこそはじめまして。私は一夢命。どうかミコトと呼んでください。どうぞよろしくお願いします」

俺はレミリアにお辞儀し返した。

「あら。あなたは礼儀がなっているわね。それで？そつちの紅白は名乗らないのかしら？」

「仕方がないから名乗ってあげるわ。私は博麗霊夢。博麗の巫女よ」

「あなたは礼儀がなっていないわね。まあいいけど。それで？あなたたちは何しに来たのかしら？」

「決まつてるでしょ？あの紅い霧を消してもらうためによ」

「断るわ。せつかく出したのになんで消さなくちゃならないのよ」

「まあそうだな。ちなみになぜあの霧を出したんだ？」

「太陽の光を隠すためよ。あれのせいで私は昼間に外を出歩けないの。だから霧は隠すために出したの」

ふむ。なるほどな。

「たしかに。それは重大だな」

「え？」

「そうね。昼間に外に出れないなんて・・・日向ぼっこしながら昼寝ができないわ」

全く由々しき自体だな。

「ちよ、ちよつとあなたたちそれでいいの？」

「何がだ（何がよ）？」

「い、いや、だつてあなたたちはこの霧を消しに来たんでしょ？だつた

「私のすること否定しないの？」

「と言われてもな。レミリアにはレミリアの理由があつてやった事なんだろう？ だったら否定なんてしないさ」

「強いて言うなら洗濯物がなかなか乾かないことに個人的に文句があるくらいね」

「そ、そう。 だったら私のこと見逃すのかしら？」

「それとこれとは別だ（別よ）」

俺と霊夢はきっぱりと言った。

「あなたのしたことは否定しないわ。でも私はあの赤い霧を消すためにここに来たの。これは私の事情よ。だからあなたに事情があつても……あなたを倒して霧を消す！」

そう言つて霊夢は戦闘態勢に入った。

「……そう。 わかつたわ。 だったらかかってきなさい！ 私も私の事情のためにあなたを倒す！」

レミリアもまた戦闘態勢に入った。 両者しばらくにらみ合いそして……

「霊符「夢想封印」!!」

「紅符「スカーレットシユート」!!」

二人の戦いは始まった。

第17話

side ミコト

俺と咲夜は二人の戦いを少し離れたところから見ていた。

「咲夜、この屋敷は禁煙か？」

「いえ、特に決まっていなくていいけれど……なぜそんなことを聞くの？」

「いや、ちよつと煙管を吸いたくてな」

「吸っても構わないと思うけど……灰は飛ばさないでね」

「ああ。わかってる」

俺は煙管に火をつけて吸う。一応携帯できる灰皿（自作）も持っている。

「……随分余裕ね。あの巫女が心配じゃないの？」

「なんでだ？」

「なんでって……あの巫女が相手にしているのはレミリアお嬢様よ。はつきり言って勝目なんてないわ」

「確かに。あの子は強そうだな。俺じゃあ多分勝てないだろう。」

「だったら加勢しなくていいの？」

「必要ないさ。霊夢は負けない」

「……なぜそんなこと言い切れるのかしら？」

「信じているからな。霊夢のことを。咲夜もそうだろう？」

「え？」

「あの子のことを信じてるから手を出さないんだろ？」

「……当然です。レミリアお嬢様は負けません」

「俺もそれと同じだよ。霊夢は負けないと信じている。なんなら賭けてもいいぞっ！」

「あら？それじゃあお嬢様が勝ったら……そうね、一日私に付き合ってくれないかしらっ？」

「何させる気だよ」

「さあ？なにかしらね？」

「まあいい。その代わり霊夢が勝ったら……そうだな、俺に一日付き合ってもらおう」

「あら、何させる気？」

「さあ？なんだろうな？」

「ふふ。やっぱりあなた面白いわね」

「それはどうも」

俺たちは笑みを浮かべて戦いの行く末を見守った。

side 霊夢

「人間の分際で中々やるじゃない！」

「あなたも異変の元凶だけあってやるわね！」

私と吸血鬼は弾幕を応酬しながら言った。正直あの吸血鬼は強い。屋敷の中にいたメイド妖精と比べ物にならないくらいに。魔理沙やミコトじゃあかなわないかもしれないわね。でも……

「負けないわ！夢符「封魔陣」!!」

「ふふ……紅符「スカーレットマイスタ」!!」

私がスペルカードを使うと吸血鬼も使ってきた。私の弾幕とあいつの紅い弾幕がぶつかり合い互いに打ち消し合う。

「いいわ！あなたいいわ！まさかこの私とここまで戦えるなんて！」

「それはごつちのセリフよ。まさか今ので決まらないとは思わなかったわ」

「終わるわけないじゃない！こんなに楽しいんだから！」

（全く、これだから妖怪は面倒ね。……でもまあ私も少し楽しいと思ってるけど）

「これはどうかしら？神術「吸血鬼幻想」!!」

「っ!!」

吸血鬼が新たに放った弾幕を私は躲す。けどちよつときついわね。（このままじゃあ……）

私は少し焦りを感じていた。このままじゃまずい。負けるかもしれない。私は不安に駆られた。ふと、私はミコトのいる方に目がいった。ミコトは煙管を吸いながら。笑みを浮かべて見ている。

(・・・全く。こっちの気も知らないで・・・でも)

負けられない。ミコトは信じてくれているんだ。私が勝つのを。だからミコトは笑って見ていてくれるんだ。だったら私は負けない。彼が・・・ほかの誰でもないミコトが信じているから!

「楽しいけどそろそろ終わりにするわ! 神槍「スピア・ザ・グングニル」!!」

吸血鬼は自分の身の丈以上もの大きな槍を手に持った。

「これで終わりよー!」

吸血鬼は私に向かって槍を投擲してきた。私は目を閉じる。そして槍が私を貫く・・・ことはなかった。

「なっ!」

槍は私をすり抜けるように私の後ろの壁に突き刺さった。

「な、なんで! どうして当たらないの!?!」

『『夢想天生』。『夢想封印』の究極形にして私の最強のスペルカード。これを発動した私はあらゆるものから宙に浮き、あらゆる攻撃を受け付けない!』

私は目を閉じながら答えた。

「な、なんですって! なによ・・・そのでたらめなスペルカード!」

「気をつけなさい。これから放たれる弾幕は・・・これまでの比じゃないわよ!」

そうして私から今までのものとは比べ物にならない規模の弾幕が放たれた。

「くっ!」

目を閉じているので見えないが恐らく吸血鬼は必死に避けているのだろう。でも・・・

「無駄よ。『夢想天生』からは逃げられない。この勝負・・・」

「きや、きやああああ!」

「私の勝ちよ!」

目を開けるとそこには弾幕を受けた吸血鬼の姿があった。こうして私と吸血鬼の勝負は終わりを迎えた。

side ミコト

「お嬢様！」

咲夜は弾幕を受け倒れたレミリアに向かって駆け寄った。俺も煙管をしまい霊夢のもとへ歩き出す。

「お疲れ様。霊夢」

「何がお疲れ様よ。煙管なんて吸って随分のんきだったわね」

「ははっ、すまないな。でも霊夢が勝つって信じてたから」

「それくらい、わかってるわよ」

俺と霊夢は互いに笑みを浮かべてそんな話をした。

「う．．．う．．．」

「お嬢様！大丈夫ですか！」

「さ、咲夜．．．」

「申し訳ございませんお嬢様。私がああな巫女を連れてこなければ．．．」

「あら、咲夜は私が勝つのを信じてなかったのかしら？」

「そんなことありません！信じていました！」

「ならあなたは悪くないわ。悪いのは咲夜の期待に応えられなかった私よ」

「そんなこと．．．」咲夜

「ごめんなさい。あと．．．信じてくれてありがとう」

「お嬢様．．．いえ、私がお嬢様を信じるのは当然です」

「ふふ．．．」

レミリアと咲夜もまた笑みを浮かべ話していた。

「レミリア。大丈夫か？」

「ええ。大丈夫よ。敵である私を心配するなんて．．．あなた変わってるわね」

「本当にそうね」

「ちよつと待て。霊夢はともかくなんで今日会ったばかりの咲夜まで納得してるんだ」

「あなたが変わった人だということは短い時間でも十分にわかったわ」

「・・・俺はそんなに変わっているのか」

「何今更言ってるのよ」

「・・・流石に少しくるな。」

「さて、吸血鬼。わかってるわね」

「・・・ええ、あの霧はちゃんと消すわ。私は負けたもの」

「悪いな。レミリア」

「謝らないでちょうだい。余計惨めになるわ」

「そうか・・・わかった。もう謝らない」

「それでいいのよ」

「・・・レミリア。なにか方法はないのか?」

「方法って・・・なんのよ」

「お前が太陽の光を浴びても大丈夫になる方法だよ」

「ミコト!?何言ってるのよ!」

「レミリアは昼間でも外に出たいんだろ?霧は消さなきゃならないんだ。だったらなにか別の方法がないのかと思ってるな」

「・・・ないわよ。そんな方法あったらもう試してるに決まってるでしょ?」

「まあそうだな。なら考えてみるか」

「考えるって・・・あなた本気?」

「ああ」

「一体あなたに何の得があるって言うの?」

「得は・・・まあないな」

「だったらなんで!」

「俺がしたいからだ」

「え?」

「・・・昔こんなことを言う知人がいてな『誰に何を思われようと自分がしたいことをしろ』ってな。だからやるんだよ」

「・・・あなた、本当に変わってるわね」

「結局そうなるのか・・・まあいい」

「……信じてもいいのかしら？」

「うん？」

「あなたなら……そんな方法を見つけられるって」

「……俺はただ考えるだけだ。思いつく保証なんて一切ない。信じる信じないはレミリアが決める」

「……私は……信じるわ。あなたを……ミコトを」

「いいのか？信じれば期待を裏切るかもしれない」

「見くびらないで。それぐらい覚悟の上よ」

「わかった。考えてみるよ。きつと方法を見つけてみせる」

「ええ。よろしく」

レミリアは俺に向かって微笑んだ。その微笑みは見かけ相応の少女のもののように思えた。

「さて、話しはまとまったみたいだからさっさと霧を消して頂戴」

「わかってるわよ」

霊夢がレミリアに霧を消すように促した。これで今回の異変は解決……

「！咲夜！レミリアを連れてそこから離れろ！」

「え？」

咲夜にそう言う俺は霊夢を抱えてその場から退いた。

「ちよ／＼／ミコト!？」

咲夜も戸惑いつつもレミリアを連れその場から退いた。すると……

ドーン!!

先程まで俺たちがいた場所が吹き飛び煙が上がった。

「な、何!？」

「これは……」

(……なんだ？この気配は……なにか……おかしい?)

やがて煙が晴れそこには……ひとりの小さな少女がいた。

第18話

side ミコト

赤と白の服、白い帽子、金色の髪、本当に翼なのかと疑うような形の翼。そして・・・何よりも印象的なのはその紅の瞳。その瞳には・・・確かな狂気が宿しているように見えた。

(なんだ？この子は？この子から感じるこの気配は？)

俺は戸惑っていた。この子の存在から感じる言いようのない気配に。

「フラン!? どうやってここに・・・あなたは地下にいるはず!」

「さあ？ わからないわ。なぜか扉が開いていたもの」

「! そんな・・・どうして・・・」

レミアアの様子が明らかにおかしい。あの子は一体・・・

「咲夜。あの子は?」

「・・・フランドール様。レミアア様の妹よ」

「妹? ならどうしてレミアアは妹にこんなに動揺してるのよ?」

「・・・妹様はレミアア様の手によって地下に幽閉されていたの」

「幽閉・・・だど? なんでだ?」

「それは・・・ねえ、あなたたち」

咲夜の答えを聞く前にフランが遮った。

「・・・なんだ?」

「あなたたちは誰? もしかして人間?」

「・・・ああ。俺は一夢命。ミコトと呼んでくれ」

「・・・私は博麗霊夢よ」

「へえミコトに霊夢って言うんだ。私生きてる人間って初めて見た! ねえ、あなたたち。私と

遊びましょ?」

「っ!!」

俺はフランが遊ぼうと言った瞬間刀に手をかけて一気に引き抜いた。

「ミコト?どうしたの?」

いきなり抜刀した俺に驚いたのか霊夢は俺の方を見た。

「霊夢!よそ見るな!」

「え?」

その瞬間。霊夢に向かって紅の弾幕が迫ってきた。

「っ!」

霊夢はギリギリで反応し躲すことができた。

「今のを躲すんだ。結構やるんだね?」

フランは笑顔で霊夢に言ってきた。

「あんた!いきなり何すんのよ!」

「何って...遊びだよ?弾幕ごっこ!」

またしてもフランが笑顔で言ってきた。しかしその目には...相変わらず狂気が宿っている。

「私を倒せたらあなたたちの勝ちで...あなたたちが壊れたらあなたたちの負けね!」

...俺の聞き間違いじゃなければフランは今俺たちが壊れたらと言っていた。つまりフランは...俺たちを壊す気だ。

「ダメよフラン!早く地下に戻りなさい!」

「嫌よ!お姉さまばかりミコトたちと遊んでずるい!私だって遊ぶんだから!」

そう言っつてフランは俺たちに弾幕を放ってきた。俺と霊夢は弾幕を躲す。

ドーン!

「な!」

俺たちが躲した弾幕が壁にぶつかり壁が跡形もなく粉々に砕けた。
(こんなの当たったら痛いじゃすまない。本当に...壊れる)

俺は戦慄した。フランが言っていたこと本気だ。本気で俺たちを壊そうとしている。

「いけません！妹様！」

咲夜はフランを止めようと叫んだ……が

「うるさいなく咲夜は……黙ってて」

フランは咲夜に向かって弾幕を放った。咲夜なら避けられない弾幕ではないが霊夢との戦闘のダメージでまだ動けないレミリアが近くにいたため咲夜は身動きが取れなかった。

「くっー！」

俺は咲夜と弾幕の間に割って入りフランの弾幕を刀で叩き落とすた。

ビシッ！

刀は衝撃に耐えられずにヒビが入った。

「ミコト！」

「咲夜！レミリアを連れてできるだけ離れろ！急げ！」

「っ!!分かったわ！」

「ミコト！気をつけて！」

咲夜はレミリアを連れて離れた。

「すっごくいい！そんなおもちゃで私の弾幕を叩き落とすなんてミコトってすごいんだね！」

「褒めてくれてありがとな」

俺は笑みを浮かべて返すが実際にはかなり余裕はない。正直刀を持っていた手が痺れて感覚がほとんどない。刀を握るだけで精一杯だ。

「……霊夢、いけるか？」

「誰に言ってるのよ。当然でしょ？」

「……そうか」

霊夢はああ言っているが実際にはかなりきついだろう。先ほどのレミリアとの戦いで夢想天生まで使ったのだ。かなり消耗しているはずだ。かくいう俺も美鈴や咲夜との戦いでスペルカードを使いすぎ、体力もかなり使ってしまったので長期戦は無理だろう。

「ふふふ。これはどう？禁忌「カゴメカゴメ」!!」

フランがスペルカードを発動した。おびただしい量の弾幕が襲い

掛かる。

「くっ、混符「黒と白の奈落」!!」

「霊符「夢想封印」!!」

俺と霊夢は同時にスペルカードを発動し、フランの弾幕にぶつけて相殺した。

「あはは！やるわね！すつつつごく楽しいよ！」

フランは笑いながら言う。・・・だが

(なんだ？さつきから・・・フランが笑うたびに何か感じる)

そう。さつきからフランが笑うたびになにか妙な感覚が俺を襲ってきた。それに・・・この感覚はなぜか知っているような感じがした。

「じゃあじゃあこれは？」

そう言ってフランは両手を前にだし、手を開いた。

「きゅっとしてく・・・」

ゾクッ！

俺は凍るほどの寒気さを感じた。

「霊夢！」

「わかってるー！」

俺と霊夢はその場から飛び退いた。

「ドカッー！」

フランが手を握ると俺たちがいた場所が爆発した。

「ちよーなによ今のー！」

「驚いた？これが私の能力だよ。私の能力は『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』なの！つまり・・・」

そう言ってフランはまた手を前にだし開いた。

「私はなんでも壊せるの！きゅっとしてドカッー!!」

そう言ってフランはまた俺たちのいる場所を壊しにかかった。俺と霊夢は動き回ることなどでなんとかそれを躲す。

(くっ、これじゃあ反撃する隙がない！)

このまま避けているだけじゃあ自体は好転しない。しかし回避で精一杯で攻撃することができない。霊夢の方を見ると霊夢も同じよ

うで苦々しい顔をしている。

(このままじゃあ二人とも・・・どうすれば)

俺はこの事態を打開する方法を考えた。

side 霊夢

「くっ!」

私は焦っていた。今フランとかいう吸血鬼の攻撃を避けているが正直いつまで避け続けられるかわからない。ミコトには大丈夫だと言ったがさっきのレミリアとの戦いで消耗しすぎたのだ。

(このままじゃまずいわね。何とかしないと)

ミコトの方も大分消耗しているようだ。かなり苦しい表情をしている。やられるのも時間の問題だ。せめて魔理沙がいれば何とかなるかもしれないが・・・

(全く!なんでもいいいときにはいるくせに肝心なときにはいないのよあいつは!)

私は肝心なときにいない白黒の魔法使いに思わず文句を言いたくなった。でも今いない奴のことを考えてもしょうがない。今は現状を打破する方法を考えないと。

「.....」

私が考えているとフランは攻撃をやめた。

「?何のつもり?」

「.....飽きた」

「え?」

「この壊し方飽きた。別の方法で壊す」

飽きたって.....この子本当に遊びでやってるようね。でも助かったわ。さっきの攻撃を続けられたらもたなかった。

「うくん・・・決めた!あなたたちは.....斬り壊してあげる!

禁忌「レーヴァテイン」!!」

フランがスペルカードを発動するとフランの手に巨大な紅い剣が現れた。

「いっくよ〜」

フランは私に向かってとつもない速さで斬りかかってきた。

「霊夢ー」

「っ！」

私に向かって振り下ろされる刃を私はどうにか避けられた。そしてフランが私に攻撃してきた隙にミコトがフランに手に持った刀で斬りかかる。

「甘いよ〜」

しかし、フランはいとも容易くミコトの攻撃を受け止め逆にミコトを弾き返した。

「ぐっ！」

「ミコト！」

「よそ見なんてしていいの？」

フランが再び私に斬りかかりにくる。私はフランの攻撃を避けることしかできなかつた。

(一体どうすれば……)

私はどうすればいいか考えていたら……

ガクッ！

(!!)

私の体が疲労に耐えられなくなり膝がおちた。もちろんフランはそれを見逃さない。

「アハハ！霊夢これでおくしまい！」

私はこれからくるであろう衝撃に思わず目を閉じた。そして私を衝撃が襲う。……しかしその衝撃は斬られたものとは明らかに違っていた。何かに突き飛ばされたような……いや間違いなく突き飛ばされた衝撃だ。

(何?)

私は何が起こったのかと思い目を開けた。そこには……

ミコトがいた。手にはフランの斬撃を防ごうと構えていたであろう刀身が粉々になった刀を持ち、フランに斬り裂かれ体から鮮血を流すミコトが

「ミ……コト？」

私がミコトの名を呼ぶとミコトは崩れるように倒れ伏した。

第19話

side 霊夢

「ミ……ミコト?」

私は目の前で起きたことが理解できなかった。いや、理解しなかった。

ミコトが倒れている……目を閉じ、体から血を流して、ピクリとも動かない。

「な……んで?どうして?」

なんでミコトが倒れている?どうして血を流してる?どうして目を開けない?どうして動かない?……私のせいだ。ミコトは私を庇ってそして……

「いや……いやあああああ!」

私はようやく目の前で起きたことを理解してしまった。

「ミコト!お願いだから目を開けて!ミコト!」

私は必死に叫んだ。だがミコトは目を覚まさない。反応しない。

「ミコト!ミコト!ねえ!……お願いだからそんな冗談止めてよ!目を開けてよ!」

私は涙目になって叫んだ。……それでもミコトは何の反応も示さない。

「ミ……ミコトオ……」

私は耐えきれなくなり涙を流してしまった。そんなとき……
「アハハ!霊夢を壊したと思ったらミコトが壊れちゃった!まあいいや!」

ミコトを……壊した?……そうだ。コイツだ。コイツが……ミコトをこんなにしたんだ。

「許……さない」

「え?なあに?」

「絶対に……許さない!」

私は感情に任せてフランに襲いかかった。

「何・・・だよ、これ」

屋敷内を探索していたらデカい音が聞こえたから音のした方向に向かったらそこには・・・血を流して倒れるミコトと目に涙を浮かべ必死に叫ぶ霊夢がいた。

(なんでミコトが倒れてる?なんで霊夢は泣いてるんだ?)

そんなことを考えていたら霊夢は近くにいた金髪で赤と白の服を着た奴に襲いかかっ行って行った。・・・「絶対に許さない」と言つて。

(あいつがやったのか?)

私はそいつに対して怒りを覚えた。そいつをぶっ倒してやりたいという衝動に駆られた。しかし私の足はそんな感情と裏腹にミコトの元へ向かっていた。

「ミコト?」

私はミコトの姿を間近で見た。顔は生気が抜かれたように青白く。瞼はかたく閉ざされている。体には斬られたような傷があり傷口からは血が流れている。

「は、はは。嘘だよなミコト?何かの冗談だよな?」

私はミコトに向かってそう言った。いつの間にか箒を手から落としていた。

「あなた邪魔よ!離れて!」

突然声が聞こえてきた。声のする方に目を向けるとメイド服を着た女と白い服を着て背中からコウモリのような羽が生えた小さな女がいた。

「咲夜!早く治療を!」

「はい!」

どうやらこいつらはミコトの治療をしようとしているらしい。私はその様子を黙って見ていた。私の頬にはいつの間にか涙が流れていた。

俺は今真っ暗な空間の中にいた、右を見ても左を見ても、前を見ても後ろを見ても、上を見ても下を見てもただただ真っ暗だった。

(これが死後の世界ってやつか?)

俺はこの空間はよくアニメや漫画である死後の世界だと思った。

(俺は………死んだのか?)

ここにくる前に何が起きたかは覚えていない。俺は………フラッシュに斬られたんだ。一応刀で防御はしていたが刀は砕かれてしまつて全く意味をなさなかった。

(これで終わりか………)

正直に言えば俺は自分の生き死には興味がない。あの時………神楽を失った時に自分が生きようが死のうがどうでもよくなった。今まで生きていたのは特別死ぬ理由がなかったからだ。だから今死んだとしてもそれでかまわない………以前の俺ならそう思っていただろう。

(………なんでだ?なんで俺は………死にたくないと思ってるんだ?)

わかかなかった。自分が生きることに関値なんてないと思っていたのに。自分が生きることに関値がないと思っていたのに。なんで死にたくないと思うのだろうか?

チリン♪

そんなことを考えていると鈴の音が聞こえた。俺が幻想入りした時の始まりの音が。俺が音のする方を見てみるとそこには………2人の少女がいた。ひとりは黒い髪に黒い服、そして黒い猫のような耳に黒い尻尾が生えている。もうひとりはさっきの子の黒が白になった姿をしている。そして俺が何より気になったのは………首に鈴を付けていることだった。

「………お前たち、あの時の猫か?」

「はい」

「………(コクン)」

黒い子が答えた。白い子は頷いている。

「なんでここにいる？」

『命』を返すためです」

「命を返す？」

「覚えてませんか？ 私達は10年前にあなたに命を救われました」

「10年前……まさかあの時の？……たしかに俺はあの時助けようとした。だが俺は何もしていない。あのときお前たちは自分で起き上がっただろ？」

「いえ、違います。あのとき私達はあなたに『命の力』をもらったのです。そしてその力によつて傷が癒えました」

『命の力』を渡した？ どういうことだ？」

「それがあなたの真の能力の一部です。しかし問題が起きました。当時のあなたは力を使いこなす事ができず『命の力』を渡す時に能力の大部分も渡してしまったのです。それによつてあなたの命と能力はほとんどなくなつてしまいました」

「命と能力が……」

「……私達はもう十分に生きました。だからあなたに『命』を私達ごと返します。……あなたにはやるべきことがあるのでしよう？」

「……やるべきこと」

俺は目を閉じた。まず始めに霊夢の姿が見えた。霊夢には幻想郷で世話になった礼をまだぜんぜん返せていない。霊夢だけではない。魔理彩にも、藍にも、橙にも、紫にもだ。咲夜とは賭けをして勝った報酬をもらつてないし、レミリアとは約束がある。それにフラン……俺を斬つた時のあの子の表情……あの子がかつての俺と同じだ。だから……

「お前たち。名前は？」

「私はクラマ。霊獣のクラマです。そしてこの子は妖獣のシラマです」

「クラマ、シラマ。俺は……俺が生きる為に、お前たちの『命』をもらう。いいな？」

俺はクラマとシラマに確認した。

「はい。これより私達はあなたの……ミコト様の『命』として。ミコト様に仕えます」

「……(コクリ)」

クラマは覚悟を決めた表情で答えた。シラマもクラマと同じ表情で頷いた。

「ありがとうクラマ、シラマ。……行くぞ」

「はい……(コク)」

俺は2人の手をとり、2人から『命』をもらった。

side 霊夢

「はあはあ……」

「ねえ霊夢。もう終わりなの？」

私は感情任せにフランに襲いかかったものの疲労がたまった身体は私の意志についていけず、すぐに動けなくなってしまった。

(こんなことなら普段からもっと修行しておくべきだったわね)

私は普段、修行を怠ったことを激しく後悔した。

「あくあ。なんかもう飽きちやったし……これで終わりしよ」と

そう言っつてフランは弾幕を私に放ってきた。私にはもう避けるだけの体力も気力もない。何より……

(これで……ミコトのところに行けるかしら?)

もしミコトの下へ行けるならばここで終わっても構わない。そう思った私は覚悟を決め目を閉じた。

(ミコト……私も行くから)

そしてフランの弾幕が私を襲う……ことはなかった。いつまでたっても弾幕が私を襲う事はない。代わりに……包み込まれるような暖かい感触を感じた。

(何?この感触……)

疑問に思った私は目を開く。そこには……

「全く。何諦めてるんだ霊夢？」

間違いない。間違えるはずがない。そこには私が最も想い焦がれた人……ミコトが私を抱きかかえていた。

「嘘……どうして？」

だってミコトはさっき……。

「霊夢……心配かけて悪かったな。俺はもう大丈夫だ」

「ミ……コトオ」

私は嬉しくなり涙を流した。そんなとき……

「わあく治ったんだねミコト！じゃあ……さっきの続きしよ！」

フランは私達の状況を全く意にかえさず弾幕を放ってきた。しかし……

「え？」

その弾幕は私達を襲うことはなかった。私達を襲う前に黒い女と白い女が弾幕をかき消した。

「ご苦労様。クラマ、シラマ」

「はい。ミコト様」

（何こいつらは？ミコトの知り合い？）

「霊夢。色々聞きたいことはあるだろうが今は待ってくれ。後で話すから」

そう言っつてミコトはフランの方に歩き出した。

side ミコト

「さて、待たせて悪いなフラン」

「大丈夫だよ！それよりミコト……また遊んでくれるよね？」
フランが狂喜の表情を浮かべて言ってきた。……能力が戻った今ならわかる。やはりフランは……

「……ああ。いいよ。遊ぼうフラン。……クラマ！シラマ！」

「はい（コク）」

俺が2人の名を叫ぶと2人はその姿を自らの色と同じ銃に変え俺

の手に収まった。

「……………いくぞ。フラン」

俺は銃を使いフランに向かって弾幕を放つ。この紅魔館での最後の弾幕ごっこが始まった。

第20話

side 霊夢

今私はミコトの戦いを目の当たりにしている。ミコトの動きは先ほどまでより明らかによくなっている。しかもミコトから感じていた霊力、妖力、魔力も強くなっている。一体ミコトに何があったの？

「霊夢」

「魔理沙・・・いたのね」

「ああ。ついさつき来たんだ・・・ミコトが倒れた時に」

「・・・そう」

見ると魔理沙の目は少し赤く腫れていた。おそらく魔理沙も泣いていたのだろう。

「ねえ魔理沙。ミコトに一体何があったの？」

「・・・私にもわからない。あいつらの治療を受けてたミコトが突然起き上がったんだ。・・・でも治療されてたとはいえあんな身体で動けるとは思えないぜ」

「その白黒の言う通りよ」

魔理沙と話していたら咲夜とレミリアがきた。

「確かに私は治療していたわ。でもあくまで応急処置をしただけ。動けるはずがないわ」

「ならどうして？」

「わからないわ。でもこれだけは言える。ミコトは本来死ぬ運命だったわ。たとえ治療して今は生き長らえたとしても長くはもたなかった。でもミコトは・・・自らの死の運命を打ち消したわ。どうやってかはわからないけれども」

「死の運命を・・・」

(ミコト・・・あなたは本当に何者なの？)

あの2人のこともいい、余計に疑問が生まれてしまった。ただ今私が願うことは・・・

「ミコト・・・負けないで」

ミコトが負けないこと。ミコトが無事に勝って帰ってくることを

私は強く願った。

side ミコト

「アハハハハハ！」

俺はフランの弾幕を手に持った銃……クラマとシラマの力で打ち消している。フランは相変わらず狂ったように笑っている。……どこか……どこか……そう。

「禁忌「恋の迷路」!!」

フランはスペルカードを発動する。まるで迷路のような弾幕が俺に迫ってくる。

「混符「アンビバレンス・ストリーム」!!」

俺はクラマとシラマの力で新たに作ったスペルカードを発動する。互の弾幕がぶつかり合い消滅した。

「すごい！すごいよミコト！さっきまでとは全然違う！すっごく楽しい！」

「そうか」

フランはひたすらに弾幕を放つ。俺は弾幕を打ち消す。それが何度も繰り返された。

「じゃあじゃあこれはどお？禁忌「フォーオブアカインド」!!」

フランがスペルカードを発動するとフランが4人になった。

「二「行くよ！禁忌「レーブアテイン」!!」二」

4人のフランは先ほどの巨大な剣を出して俺に向かってきた。

「………混符「黒と白の驟雨」!!」

俺はスペルカードを発動した。弾幕が雨のように降り注ぎ4人のフランのうち3人に当たり弾幕に当たったフラン達は消えた。

「アハハ！すごいね！まさかもう破られるとは思わなかった！でも残念だね！本体の私には当たってないよ！」

「当たってないんじゃないよ。当たってないんだ。俺にはフランの本体がわかってたからな」

「え？どうして？」

「それが俺の能力だからだ。俺の能力は『命を理解する程度の能力』。あらゆる命を理解でき、命の力を公使する能力だ。だから俺は本物のフランの命と分身のフランの命を理解して分身にだけ弾幕が当たるようにした」

「アハハ！ミコトはすごいね！でも何で本体の私を狙わなかったの？」

「さあ、何でだろうな？」

「むく。ミコトの意地悪！いいもん！だったら話たくしてあげるから！」

フランは剣を持ち上げて斬りかかってくる。俺はクラマとシラマをふた振りの剣に変えて応戦する。

「アハ、アハハハハハ！」

フランはやはり笑っている。ーしそうに。ーしそうに。ただ自分の力に忠実に……本当にかつての俺によく似ている。私たちは違うが本当によく……

(……ここまでだな)

しばらく斬り合っていたが俺はフランと距離を取った。そしてクラマとシラマを黒と白の鈴に変え右手に巻きつけた。

「アハハ！どうしたのミコト？もつと壊しあおうよ！」

「……フラン。もう終わりにしよう」

「……え？」

「もう……遊びは終わりだよ」

「……何で？どうして！どうして終わりなの！こんなに楽しいのにーどうしてー！」

「……フラン。本当に楽しいのか？」

「え？」

「……本当に壊すことを楽しんでいるのか？」

「何……言ってるの？楽しいに決まってるでしょ？」

「だったら何で苦しんでるんだ？」

「え？」

「…………フランの命を感じてるからわかる。フランは苦しんでいる。悲しんでいる。それこそ命に表れるほどに」

「な、何言ってるの？違うよ？私苦しんでも悲しんでもないよ？」

「そんなことない。フランは…………フランの命が苦しいって悲鳴をあげている」

「違う…………」

「フランは本当は…………壊したくないんだ」

「違う!!」

フランは剣を振り上げ俺に斬りつけた。そして…………俺の左手が斬り落とされた。

「あ…………」

「…………どうだフラン？嬉しいか？楽しいか？俺を壊してどう思った？」

「あ、ああ…………」

「…………さつき俺を斬った時もそうだったよ。今と同じように…………泣きそうな顔をしていた」

「わ、私…………」

「壊すことを拒めないんだろ？壊すことが自分にできることだから…………壊すことから逃げられなかった。だから壊すことを楽しいと、遊びだと思おうとした」

「…………」

「フランの気持ちはよくわかる。俺も同じだったから…………辛かったし苦しかった。誰も愛してくれないのに愛することが。それでも無理にでも愛しようとしていた…………それが俺にできることだったから。だから愛することを拒めなかった。余計に自分を苦しめるってわかってても。愛することをなによりも大切だと思おうとした」

「ミコトも…………同じ？」

「ああ…………フラン、もう自分に嘘をつくな。自分の本当の気持ちを偽っても…………余計に苦しいだろ？」

「あ…………わああああ!!」

フランは泣きながら抱きついてきた。俺はフランを優しく抱きとめる。

「本当は……本当は壊したくなかった……でも……逆らえなくて……だから……楽しいって……遊びだって思わなきやって」

「わかっている……わかっているから。大丈夫。壊そうとするのを拒めなかったら俺が止める。あそびたいなら俺がちゃんと遊んであげる。だからフランもちゃんと壊すことを拒めるようになるう？」

「うん……うん！」

フランは泣き続ける。今までの苦しみを、悲しみを全て吐き出すように。そんなフランを俺は泣き止むまで抱きしめ続けた。

side 紫

「………終わったようね」

私は霊夢たちの様子を見る為に使っていたスキマを閉じた。随分とヒヤヒヤさせてくれたわ。霊夢に修行を怠らないように釘を刺しておかないといけないわね。それにしても………

「……ミコト」

ミコトの能力……『命を理解する程度の能力』……はつきり言って強力すぎる能力だわ。もし私が思うとおりの能力だとしたら……一層彼を警戒しなければならぬ。それに彼はあの存在になりかけた。

あの黒い存在のことは知っている。愛されなかった者のなれの果て。ただ得られない愛を求め続ける愚かで哀れな存在。私はミコトがああなることを恐れている。もし強力な力を持つミコトが

あの存在になつてしまえば………幻想郷は崩壊してしまうかもしれない。

第一なぜあれがここに現れたの？私は幻想郷であいつらがいるなんて把握していない。それも1体2体ならともかく十体以上もだ。誰かが手引きしたとしか思えない。

「まさか………」

この時私の脳裏にはある人物がよぎった。でもありえない。あいつは………私が滅してもう存在しないはずだから。

「……調べる必要があるわね」

私は黒い存在について調べることに決めた。

no side

「あくあ。思ったよりすぐに終わっちゃったな」

幻想郷でも現代でもない空間の一室でひとりの男が呟いた。彼の目の前には大きなモニターが有りそこにはミコトたちが映っていた。「もうちよつと暴れてくれると思っただけど………まあいつかなかなか面白いものも見つけたし」

そう言つて男はモニターの中のミコトを見た。

「ミコトくんか………おもしろい子だ♪」

男は上機嫌に言った。その顔は新しいおもちゃを見つけた子供のようだった。

「ははは。さうと、作戦失敗の報告に行きますか」

そう言つて男は立ち上がり部屋から出ていく。

モニターにはまだミコト達の姿が写っていた。

座談会

スペシャル座談会のコーナー！

今回は今までの振り返りをしていきます！ゲストはこちら！

「ミコトだ」

「霊夢よ」

まずはこの小説の2大主人公のお二人と共に進めます。

「今回の座談会では本編で語られなかったところを話していくわ」

「まずはプロローグの話だ」

はい。ミコトさんがクラマさんとシラマさんに導かれ幻想入りする話です。

「そもそもどうしてあのふたりは俺を幻想郷に連れてきたんだ？」

おふたりは現代におけるミコトさんの境遇に対してかなり思うことがあってようです。誰からも愛されずに虚ろに生きるミコトさんを助けたいと思い幻想郷に導いたんです。

「あのふたりは幻想郷のことを知っていたんだな」

ええ。人間にはあまり知られていませんが神や妖怪、もののけの類には幻想郷のことは知られていることになっていますからね。

「そう。そういえばミコトはあのふたりの気配を感じれなかったみたいだけど、どうして？」

あのふたりの命はほとんどミコトさんの命と同じですからね。自分の命と同じだったので気づけなかったんです。自分のおいはわかりづらいつて言うじやないですか？あれとほとんど同じですよ。

「なるほど。そういうことか」

そして幻想入りしたわけですが・・・実はこの時既にクラマさんとシラマさんはミコトさんと同化したんです。

「そうなのか？でもだったらこの時点で俺の力は戻っていたんじゃないか？」

いえ。10もの間彼女たちの命とミコトさんの命は離れていましたから、完全に同化するのにはかなり時間が必要なんですよ。なのでこの時点では命と能力は還せていません。

「そういうことね。そしてミコトが博麗神社に来たわね」

「ああ。……霊夢とあつてすぐに気絶させられたな」

「……あれは本当にごめん」

「まあ気にするな。結果としてあれがきっかけになったんだからな」

「ですね。あのことがあつてミコトさんと霊夢さんが話すきっかけになりましたから。そして、ミコトさんは幻想郷のことを知り、幻想郷で暮らすことになりました。」

「まあ現代で生きていても何も意味はないし。それに俺のことを知っている人がいない幻想郷ならかつての俺に戻れるかもしれないと思っただけな」

「そうですね。そしてそのあとミコトさんは藍さんと共にお祝い用の料理を作りに行きました。」

「ああ。そういえば俺が藍の指を口にくわえたら……」

「ちよつと待つて！あんたそんなことしてたの!？」

「ああ。藍が指を切ったから応急処置の一環だな」

「ほんとにあんたは……」

「どうした霊夢?」

「なんでもないわ。続けて」

「ああ。それで藍の指を口にくわえたら傷の治りがいつもより早いつて書いてあつたよな? クラマとシラマの傷も直していたらしいし。俺の能力とどう関係しているんだ?」

「そうですね。ではここでミコトさんの能力について話しましょう。前回出てきましたがミコトさんの能力は『命を理解する程度の能力』です。これは小説のタイトルにもなっていますね。」

「どういう能力なの?」

「文字通り、あらゆる命を理解してその力を行使する能力です。」

「抽象的ね。具体的には何ができるのよ?」

「まず命を気配として察知することができます。これは頻繁に出てきましたね。ちなみに当初は周囲10m程度の気配を察知できていましたが能力が戻った今はkm単位で察知できるようになっています。」

「かなり広いな」

それだけ強力というわけです。次に治癒の能力です。これは自身の命……つまり生命力を相手に送ることによって相手の回復力を促進させているんです。藍さんとクラマさん、シラマさんに使った能力はこれですね。ちなみに使いすぎると自分の命が削られ消耗してしまいます。

「そんな力もあるのか。この能力って意識しなくても使えるのか？」

はい。この力はミコトさんの意志に反応してオートで発動することもあります。だから彼女たちには無意識で使っていますよ。さて、3つ目として命の状態を読み取る能力ですね。これはその命がどんな状態かを理解する能力です。例えば怪我をしていたり感情を命から読み取ったりできます。ただし感情は命に表れるほど強いものしか読み取ることができません。

「フランの時にはこの能力で感情を読み取ったんだな」

はい。それだけフランさんの感情が強かったということですね。最後に命を使って力そのものを強くするものですね。これは腕力や体力、霊力、魔力、妖力を強化するというものですね。

「フランと最後に戦ったとき動きが良くなったのはこの能力ね」

はい。そうです。まあ今のところわかっている能力はこういったものです。がまだまだ応用が利くので使い方は様々あります。

「なんというか……使い勝手良すぎじゃあないか？」

だからタグにあるでしょう？能力はチートって。正直使い方によつては本当に危険にもなりますしね。まあ弱点もありますが。

「弱点？」

はい。単純に命がないもの、例えば幽霊とかにはこの能力は適用されないんですよ。

「そうなのか。幽霊といえば……」

ハイストップです。この話はここまでですよ。いい加減話の軌道に戻さないといけませんし。

「わかったわ。次は私と紫の話ね」

はい。ここで霊夢さんはミコトさんがどういった方なのかを知り、

愛することを決意しました。

「そういえば紫が言っていたミコトに似た人って……」

はい。後に紫さんが言っていた『紅』という方のことです。この方のことについてはいずれまたということ。

「わかったわ。そして次は……」

「翌日の話だな」

何言ってるんですかミコトさん？食事会の話がまだ……

「飛ばせ」

え？でも……

「いいから飛ばせ。……いいな？」

は、はい。わかりました……

(何があったのかしら？私よく覚えてないんだけど)

じゃあ翌日の話ですね。まずはおふたりの夢です。ミコトさんは神楽さんがいなくなる時の夢で霊夢さんはミコトさんが幻想郷の驚異となる夢です。

「まあ俺の夢は前日の紫との話が原因だな」

「私の夢も紫との話が原因ね」

そうですね。そして霊夢さんの夢はバッドエンドパターンの一つ。

バッドエンドルート②『幻想を脅かすもの』です。

「ああなる可能性もあるってことね……」

はい。まあ詳しく話を書くつもりはありませんが。私はバッドエンド好きじゃあないですし。

「でも思いつくのかよ……」

それは……まあはい。

「まあいいわ。ミコトをあんなふうにするつもりなんてないし」

さて、話を戻します。ここで魔理沙さんが出てくるわけですが……言っておきますと魔理沙さんはミコトさんに一目ぼれしていますね。

「そうなの？」

ええ。といっても本人無自覚ですが、まあミコトさんは美形で優しい方なので惚れてしまっても仕方ないでしょう。そして服を買いに

香霖堂に行くわけですが……

「あそこではミコトがすごかったわ……」

あそこではミコトさんの説教が2回も行われましたからね。

「はつきり言っただけであれはお前たちが悪い。人が気にしているところをついてきたんだ。さすがの俺も怒る」

「本当に悪かったと思うわ」

まあミコトさんは小説なのでイメージしづらいでしょうが本当に女性と見られてもおかしくないような容姿をしていますからね。それも超美形。

「だからっていきなり霖之助に告白されるとは思わなかった……」

あれは……はい。まあすみません。

「あと香霖堂といえばミコトは刀とキセルを手に入れたわね」

はい。刀の方はろう〇剣〇の逆刃刀をイメージしました。まあ原作と違い全く切れませんが。これは万が一の時に怪我をしないようにするためです。煙管を持たせたのは単純にキャラを立てせようと思ったからです。

「そうか。そのあと神社に戻って空を飛ぶ練習をしたわけだが……」
「この時にミコトから霊力、魔力、妖力を同時に感じたのよね。これはどうして？」

はい。魔力は単純にミコトさんが持っていたものです。ですが霊力と妖力は違います。これはクラマさんとシラマさんが原因です。二人が同化していたので二人の力が還元された結果です。ちなみに弾幕も黒は霊力。白は妖力を使って出されています。

「なんで黒と白なんだ？」

単純に私の趣味です。

「……そうか」

さて、ここからは紅魔郷編の話ですよ。

「まあその前に書かれていない1週間の話があるんだが……あれは本当に大変だった」

「ミコト本当に疲れた顔していたものね」

まあ現代じゃああんな濃い生活なかなかないですものね。

「それで紅霧異変が起きたわけだが……まあはじめの方は読んだままだよな」

まあはじめの方で深い設定や疑問は特にないと思いますが……「なら先に進みましょう。私が気になったのはミコトと咲夜の戦いだけど……どうしてミコトはあんな作戦とったの？」

「あれは咲夜の虚をつくためだ。誰だって不測の行動を取られたら動きが止まるだろ？それを利用したんだ。まあ失敗したら確実にやられていたが」

書いた我ながら無茶な作戦ですね……

「次にあの黒いのだけど……あれってやっぱり誰かが手引きしてたのね」

はい。前回の話のラストに出た方がそうですね。

「一体何者なんだ？」

まあ今言えるのは原作には登場しない敵いうことです。それ以上はネタバレになるので言えません。

「そういうことなら仕方ないわね。それにしても……ミコトつてあんなにひどい扱いを受けていたのね」

「まあ今考えればかなりひどいな。幻想郷に来る前はどうでもいいと思っていたがな」

「でもあの扱いはいくらなんでもやりすぎじゃない？」

まああれにも設定はあります。ミコトさんは『世界に愛されていなかった』からあのような扱いを受けていたんです。

「どういうことだ」

端的に言いますとこの小説内では世界が意志のようなものを持っているんです。そしてその世界の意味がミコトさんを愛していなかったの……世界に住む者は世界の分身みたいなものでして。世界が愛していない＝誰からも愛されないということですよ。

「なんか……ものすごく重いんだが」

まあ私もこれはやりすぎ？と思いましたが……

「そしてレミリアとの戦いね」

まあ正直その件は話すことあまりないような気がしますが……

「強いて言うならミコトはとんでもないお人よしということね。敵だったレミリアの願いを叶えようとするんだから」

「まああれはレミリアのためというのもあるが俺がそうしたいと思っただけだから。日の光を浴びて昼寝できないなんてもったいないだろ？」

「それには同意するわ」

「……似たものカップル（ボソ）」

「何か言った（か）？」

「いえ何も！そしてフランさんが出てきて最後の戦いですね！」

「というよりフランはどうやって出てきたんだ？幽閉されていたんだろ？」

「それはあの黒いのを手引きした人の仕業ですよ。彼はある目的のためフランさんを外に出して暴れさせようとしたんです。」

「一体どうして？」

「それはある目的ですよ。まだ言えませんが。」

「そうか……ところでフラン強すぎないか？霊夢と二人がかりでも全く叶わなかったんだが……」

「そうね。いくら疲れているからってあれは……」

「まあラスボスですからね。あれくらい強くていいんじゃないかと思っただけ。」

「そのおかげで俺は死にかけたがな」

「まああれは物語上必要な演出だったので……仕方ありません。」

「まあそうだな。死にかけたおかげでクラマとシラマから命が還ってきたんだからな」

「でもどうしてこの時に戻ってきたの？時間がかかるんじゃないか？」

「それはミコトさんの命が空になりかけたからですよ。ミコトさんの命は失った命を取り戻そうとしてそのため同一の命であるクラマさんとシラマさんを完全に取り込んだんです。それがなければ間違はなく死んでいました。そして復活してフランさんと最終決戦に臨んだというわけです。」

「あとは書いてあるとおり、フランが苦しんでいることに気がついてフランをなんとか止められたんだ」

「……左手が切り落とされたけどね。主、当然治るんでしょね」
そのままなら治りませんよ。

「なんでよー！ミコトは生命力が強いんだからあれくらい治るでしょ！」

いえ。ミコトさんの生命力が強いといってもミコトさんはあくまで人間ですから。人間の限界を超えた再生は無理なんですよ。

「じゃあミコトはこのまま……」

いえ。そういうわけではありません。

「どういうことだ？」

ちゃんと治す当てはありません。それが次章の話です。

「次章は俺の手を治す話なのか？」

はい。まあそれだけではありませんが……詳しくは本編の最後で予告します。

「そうか」

「これで振り返りは終わりね」

いえ。まだ終わっていないことがあります。

「終わってないこと？なんだそれ」

ズバリ！ミコトさんが今まで何人にフラグを建てたかです！この小説はミコトさんがハーレムになるんですからこれは発表しておかなければ！

「……さいですか」

「それで？今までミコトは誰にフラグを建てたの？」

以下の人に建ててますよ。

霊夢

魔理沙

藍

ルナチャイルド

ルーミア

咲夜

レミリア

以上の7名です！

「ちよつと待て！俺はいつルナにフラグを建てた！」

語られなかった一週間によく転ぶルナさんの面倒を見ていた時です。ルナさんは見事にミコトさんの優しさに惚れましたね。

「……まあ気持ちは分かるわ。ところでフランには建ってないの？」

まあフランさんはミコトさんの妹的な存在になる予定なんで。フラグは建ってませんし建てませんよ。フランさんは後で幻想入りする方のハーレムに加わるので。

「へえ。そんなの」

「………というかまだ紅魔編が終わっただけなのにもう7人に建ってるのかよ」

ほんとに何人とフラグを立てるんでしようね？

「………霊夢。協力してくれ」

「わかったわ」

え？協力？おふたりは一体何をするつもりで？

「混符『アンビバレンス・ストリーム』!!」

『『夢想天生』!!』

ぎゃああああああああ!!

ピチューン！

「ふう。では座談会はこれで終わりだ。ここまで付き合ってくれてありがとう」

「最後に次章の予告をして締めるわ」

次章

フランを止めるために左手を失ったミコト。

そんなミコトに霊夢は治せるかもしれない場所を教える。

その場所は永遠の命をもつ者が住まう地……『永遠亭』
左手を治すためミコトは永遠亭に向かう。

そしてそこで出会ったのはかつてミコトが愛した者の面影を持つ

永遠の姫『蓬莱山輝夜』

ミコトは彼女と出会い何を感じるのか？

次章 東方く儂き命の理解者く

永遠亭く愛しき面影を持つ姫君く

「次章もまた見てくれ（見てちょうだい）!!」

わ、私のセリフ……

永遠亭く愛しき面影を持つ姫君く

第21話

side ミコト

『はあ．．．．．』

『どうしたんだ神楽？随分大きなため息だが』

『ああ。昨日5人に同時に告白されてな．．．．．』

『それは凄いというか流石というか．．．．．』

『何度断つてもしつこく迫ってきたんだ。正直鬱陶しかった。私にはミコトがいるというのに』

『そうか。大変だったな。それでどうしたんだ？』

『ああ。私がかだす条件を達成したら付き合つてやることにした』

『大丈夫なのか？そいつらのうちの誰かが条件を達成したら．．．．．』
『安心しろ。それはない。かなりの無理難題を突きつけたからな。よほどの天才．．．．．それこそお前レベルでないと到底達成などできん。奴らもすぐに諦めるだろう』

『俺を買いかぶりすぎじゃないか？』

『妥当な評価だ』

『そうか．．．それにしても無理難題を突きつけて諦めさせるなんてまるで．．．．．』

そこで俺は夢から覚めた。

目を覚ましたら知らない天井だった．．．．まあネタは置いていて、俺は紅魔館の客室で目を覚ました。あの戦いの後レミアの厚意で紅魔館に泊まらせてもらったのだ．．．．ただ正直あの戦いの後は大変だった。本当に大変だった。ある意味異変を解決するために動いていた時より大変だった。

フランが泣き止んだ後、咲夜に左手の止血等の処置をしてもらった。フランと話していた時はあまり感じなかったがとてつもなく痛かった。まあこれはまだそこまで大変ではなかったからいい。問題は他にある。まず霊夢には「何度心配させれば気が済むの！」と思いきり説教されてしまった。しかもそれを見たフランが自分のせいだとまた泣きながら謝ってきて、さらにそれを見たレミリアが「フランを泣かすな！」といって霊夢を怒鳴りつけ、霊夢はさらに反論、そして矛先は俺に戻ってきてまたフランが泣いてレミリアが怒つての繰り返しになった。途中で咲夜が仲裁に入ってくれたのでなんとか事なきを得た。

しかし、まだ騒動は続いた。突然部屋に紫の髪をした女の子……パチュリーが現れ魔理沙に本を返せと迫っていき魔理沙はそれから逃げてと部屋の中でドタバタと追いかけてこが始まった。流石に俺は泥棒は良くないと思って魔理沙をどうにか捕まえ説教をしてパチュリーに謝らせた。……何故か俺も謝ることになった。そしてパチュリーにどうにか本を貸してもらえないかと説得して30分の説得の末なんとか本を貸してもらえることになった。正直魔理沙に少々甘かったかなと思っただが、魔理沙が笑顔になっていたのだからいいかと思ってしまう。俺はこんなにお人好しだったのだろうか？

さらに騒動は続く、今度は侵入者（もちろん俺たち）を捕まえに美鈴が部屋に突入。しかし部屋に入った勢いとは裏腹に俺を見た途端怯えた表情をした。少々やりすぎてしまっただろうか？それだけなら美鈴にとつてまだ良かったかもしれないが……問題は咲夜だ。咲夜は美鈴に門番のくせに何をしていたと正座させ説教し始めた。俺は説教される原因を作ってしまったらに美鈴に恐怖心を植えつけてしまった罪悪感からなんとか咲夜を説得して説教をやめさせた。……どうでもいいがなぜ咲夜は美鈴を中国と呼ぶのだろうか？

これで騒動は終わり……になればよかったんだがな。まだ重要なことが残っている。クラマとシラマ、そして俺の能力とどうして

怪我がすぐに治ったかの説明だ。一からすべて説明したのでかなり時間がかかったな。

これらのことをしているうちに時間があつという間に過ぎ深夜になってしまい紅魔館に泊まることになったのだ。ちなみにみんないろいろありすぎて疲れてしまい、食事もせず入浴もせずに眠ってしまった。以上説明終わり……って俺誰に説明してたんだ？

(ちなみにこれらのことをすべて書くとき軽く2〜3話消費してしまう恐れがあるのでこの説明で割愛させていただきます by 作者)

コンコン

何か誰かからの知らせが流れていたときノックの音が聞こえてきた。

「はい」

俺は返事をしたノックをしてきたのは……

「咲夜よ。入っていい?」

「ああ。いいぞ」

咲夜が部屋に入ってきた。手には俺のコートを持っている。

「おはようミコト。このコート、直しておいたわよ」

そういえば途中から羽織ってなかったな。俺は咲夜から渡されたコートを受け取った。見事に穴は塞ぎ新品同様になっていた。

「わざわざすまないな。咲夜」

「気にしなくていいわ。私が穴を開けたようなものだし。それよりも今から朝食にするわよ。皆もう集まっているからミコトも来なさい」

「ああ。わかった」

俺は咲夜について部屋から出た。

「お待ちせしました。お嬢様」

「ご苦労さま。咲夜」

5分ほど歩いて(相変わらず広いな)ようやく皆(霊夢、魔理沙、レミリア、フラン、パチュリー、小悪魔、美鈴)がいる部屋にたどり着いた。

「お兄様〜!」

フランが俺に飛びついてきたので俺はそれを受け止めた。ちなみになぜかフランは俺をお兄様と呼んでいる。あとフランはもう地下に幽閉されることはない。あの戦いのあとフランの破壊衝動はなりを潜めたようだ。

「ちよつとフラン!何やってるの!」

「何って、お兄様に抱きついてるだけだよ。もしかしてお姉様羨ましいの?だつたらお姉さまも抱きついたら?」

「なつ何言ってるのよフラン!そ、そんなことこの私がするわけないでしょ!」

レミリアが思い切り反論してきた。顔を真っ赤にするほど嫌なのだろうか?

「え〜本当に?お姉様」

「う、う〜・・・」

ただ言えることは今のレミリアには昨日見たときのようなカリスマがないということだな。

(いいなあ)

(フランのやつ・・・羨ましいぜ)

(妹様、羨ましですね・・・って私は一体何を考えて!)

あとなぜか霊夢、魔理沙、咲夜がこっちを見ている。どうしたんだ?

「お兄様!早く座ってご飯にしましょ!」

「ああ。そうだな」

フランが俺の右手を引いてきたので俺はフランについていき席に座った。席はフランと霊夢の隣だ。

「全員席についたわね。それじゃあ・・・」

「いただきます」

俺たちは食事を始めた。

「ん……うまいな」

「ふふ。そう言ってもらって嬉しいわ」

「咲夜が作ったのか？」

「ええ。そうよ」

さすがは紅魔館のメイド長といったところだな。

「お兄様、あくん」

「フラン！あなたまた何やってるの！」

フランがフォークに料理を刺して俺に食べさせようとするのを見てレミリアがまたフランを叱った。

「え？だ、だっってお兄様左手が無いから食べにくいかなと思っ
て……」

どうやらフランは厚意でしてくれたらしい。それを咎められて少し涙目になっている。

「え？あ、ちよ、ちよつとフラン？ご、ごめん！私たちが悪かったから泣かないで！」

フランの様子を見てレミリアがあたふたしている。……今
のレミリアを見ると本当にカリスマブレイクしてしまったように
思えた。

「ミコト、あくん」

フランとレミリアの様子を見ていたら霊夢が隣から俺に料理を食
べさせようとしてきた。

「霊夢、俺は大丈夫だぞ。自分で食べられる」

「あくん」

「いや、だから霊夢、俺は「あくん」……」

何だろう？霊夢からの圧力が凄くて断りづらい。

「……あくん」

俺は結局根負けし食べてしまった。皆がいるところでやったから
さすがに恥ずかしい。というか前から思ってたけど俺って押しに弱
いな。

あれからしばらくして食事が終わり、今は咲夜が煎れてくれた紅茶（これまたとてつもなく美味しい）を飲んでる。結局俺が一番食べるのが遅く最後に食べ終わった。しかも霊夢だけでなく、魔理彩、フラン、なぜか咲夜とレミリアにまで食べさせられる羽目になった。なぜ食事するだけでこんなに疲れるのだろうか？

「ところでミコト。あなたの左手はいつぐらいに治るの？」

レミリアが紅茶を飲みながら聞いてきた。

「いや、この手はもう治らないぞ」

俺もまた紅茶を飲みながら返した。

「「「え？」「」」」

皆が疑問の声を同時にあげた。息ピツタリだな。

「ちよ、ちよっと待つんだぜ！お前の生命力があれば治るんじゃないのか!？」

「いくら何でもなくなった手を再生させるのは無理だ。生命力が強いといってもあくまで人間としてであって妖怪とかよりは弱いんだから。精々傷口がふさがるのが早いぐらいだな」

「そんな……」

「じゃあ、ミコトの手はずっとそのままってこと？」

「そうなるな」

俺が答えると部屋はしばらく静寂に包まれた。

「……ごめんなさい」

静寂を始めに破ったのはフランだった。

「わ、私のせいで……お兄様の左手がずっと……なくなっただけ……本当にごめんなさい」

フランは泣きじゃくりながら謝ってきた。

「……フラン。これは俺が選んだことだ。フランが思い詰めなくしていい」

「けど……」

「フランの泣いてるところを見ると辛いんだ。だから泣き止んでく

れ」

「……………うん」

俺がそう言うのとフランは泣き止んでくれた。

「よし。いい子だなフランは」

俺はフランの頭を撫でながら言った。

「でも本当にいいののか？片手じゃあいろいろ不便だろ？」

「いいもなにも、もう治らないんだから仕方ないだろ？」

「そうか……………」

たしかに不便かもしれない。でも慣ればなんとかなるだろう。まあそのなれるまでが苦労しそうだが。

「……………ねえミコト、もしかしたらあるかもしれないわ。

左手を治す方法」

「え？」

ずっと黙り込んでいた霊夢が口を開き治す方法があるかもしれないな
いと言ってきた。

「あなたを『永遠亭』に連れて行くわ」

『永遠亭』……………その地で俺は、かつて俺が愛し、俺を唯一愛し
てくれた少女……………神楽の面影を見ることになる。

第22話

side ミコト

俺は今霊夢と共に竹林を奥へと進んでいた。

「この竹林の奥にその永遠亭があるのか？」

「ええ。そうよ」

そう。俺たちは今、永遠亭に向かっている。俺の失った左手を治すために。

く回想く

「永遠亭？」

「そうよ。そこに行けば治るかもしれないわ」

「なるほどな。たしかにあそこなら可能性があるぜ」

霊夢の言葉に魔理沙が同意した。

「どういうこと？なんでそこならミコトの手が治るのかしら？」

レミリアが霊夢に聞いた。俺も気になる。

「永遠亭は迷いの竹林ってところの奥にある屋敷の事なんだけどそこには薬師がいるのよ。その薬師ならミコトの左手を治す薬が作れるかもしれないわ」

「・・・霊夢。いくらなんでも薬でこの手が治るとは到底思えないのだが」

どんな良薬でもなくなつた左手を再生させるなんて不可能だ。いくらここが常識にとらわれない幻想郷と言っても限度があると思う。

「たしかに。ただの薬師が作った薬なら治らないでしょうね。でもその薬師は普通じゃあないわ。その薬師は・・・蓬萊人なのよ」
「！蓬萊人・・・だと」

「……まさか幻想郷にはそんなやつまでいたとはな。」

「お兄様、ほうらいびとって何？」

フランは疑問に思ったのか首をかしげて聞いてきた。

「蓬莱人っていうのは不老不死……つまり何があっても死なない人間のことだ」

「へえ、そうなんだ」

「その薬師はもうかなり長い間生きているわ。そんな奴ならあなたのなくなった左手をもとに戻す薬を作れるかもしれない。行ってみる価値はあると思うわ」

「……そうね。それなら試してみる価値はあるかもしれないわ」
レミリアも霊夢に同意してきた。

「お兄様の手治るの？」

「あくまでかもしれないがな。確定ではない」

「でも治るかもしれないんだよね？」

「ああ」

「だったらその永遠亭に行ってお兄様！私、お兄様に苦しい思いして欲しくない！」

フランが目には涙を貯めて言ってきた。そんな目で言われたら断れない。

「………咲夜」

「え？何かしら？」

急に話しかけられ咲夜は驚いた顔をした。

「……俺の手が治ったら料理を教えてください。それが賭けの報酬だ」

「！ふふ。ええ、わかったわ」

「お兄様！」

「霊夢。その永遠亭に案内してもらっていいか？」

「ええ。もちろんよ」

～回想終了～

そんなことがあり俺と霊夢は永遠亭に向かっている。ちなみに魔理沙はここにはいない。一緒に来たいみたいだったがパチュリーから借りた本を一週間後には返すため早く帰って本を読まなければならぬようだ。パチュリーはちゃんと一週間で返さなければもう貸さないと言っていたので一日でも惜しいのだろう。

あとレミリアが治ったら紅魔館に来いと言ってきた。そのときの顔が何か企んでいるような気がしたがどちらにせよ手が治ったら昼夜に料理を教わりいくので同意しておいた。その時フランがすごく嬉しそうな顔をしていたのが印象深かった。

「着いたわ。ここが永遠亭よ」

どうやら着いたらしい。俺の目の前に建物があった。純和風の建物で紅魔館ほどではないがそれなりに大きい屋敷だ。

「.....」

俺は能力を使って周辺の命を探った。感じた命は4つ。そのうち2つは妖怪のものだ。そしてもう2つは人間の命だが.....
(なるほど。これが蓬莱人の命か)

その命は俺が今まで感じたものの中で最も生命力の強い命だった。吸血鬼であるレミリア、フランの生命力も相当なものだったがこれはその比じゃないほどの命だ。

「あの、何かご用ですか?」

俺が考えにふけていると話かけてくるものがいた。まあ能力でわかっていたが。その子は学生服のような服を着て、長い薄紫の髪、赤い瞳、そして長い兎の耳をつけた少女だった。

「こんにちは。確か鈴仙だったかしら?」

「はい。そうです。霊夢さん、そちらの方は?」

「はじめまして。俺は一夢命だ。できたらミコトと呼んでくれ。君は?」

「私は鈴仙。鈴仙・優曇華院・因幡です」

またすごい名前だな。覚えにくそうだ。

「それで、ご用は何ですか?」

「今日は永琳に用があつて来たのよ。今いるかしら？」

「はい。師匠ならいます。案内しますね」

「ありがとう鈴仙。助かるよ」

「では着いてきてください」

俺と霊夢は鈴仙に付いて永遠亭に入つて行つた。

「あの、ミコトさん」

屋敷の中を歩いてると鈴仙が話かけてきた。

「何だ鈴仙？」

「一つだけ言っておきます。私の眼は見ないでくださいね」

人によつては言つてることの意味が分からないだろうな。まあ俺は能力のおかげでわかっているがな。本当に俺の能力は便利すぎるな。

「着きました。ここです」

そうこうしているうちにどうやら永琳という薬師がいるところに着いたらしい。

「師匠、鈴仙です。入りますね」

鈴仙が部屋の戸を開けた。そこには1人の女性がいた。長い銀髪を三つ編みにしており、赤と紺のツートンカラーの服をきた女性だ。そして何より……非常に強い命を感じる。間違いなく蓬莱人だろう。

「珍しいわね。霊夢がここに来るなんて。それに初めて見る人もいるようね」

「はじめまして。俺は一夢命というものだ。ミコトと呼んでほしい」

「わかったわ。私は八意永琳よ。それで？今日は何の用かしら？」

「ええ。私達は……」

俺と霊夢は2人で永遠亭にきた理由を話した。

少年、少女説明中

「……………というわけだ」

「そう。左手の再生……」

永琳は顎に手をあてて考えこんだ。

「……………無理ね」

永琳から返ってきた答えはある意味予想通りのものだった。

「そうか。やはり左手の再生は無理か」

「いえ違うわ。左手を再生させること自体はできるわ。問題は他に
あるの」

「他の問題？それってなによ？」

「左手……というより人体を再生させる薬はあるわ。でもその薬を服用すると膨大な生命力を消耗するの。並の人間じゃあ到底持ち得ない生命力を。例えば左手が再生しても生命力が枯渇して間違いなく死ぬわ」

……………生命力か。

「だから諦めなさい。左手を再生させる為とはいえ死んだら元も子もないでしょう？」

膨大な生命力……………俺ならあるいは……………

「……………永琳。具体的にはどれくらいの生命力を消耗するんだ？」

「そんなこと聞いてどうするのかしら？」

「いいから答えてくれ」

「そうね……………大体常人の5倍の生命力が必要よ」

5倍か……………なら問題ないな。

「永琳、その薬を譲ってくれないか？」

「……………あなた、話をちゃんと聞いていたの？死ぬ気？」

俺が薬を譲ってほしいと言ったら永琳は呆れた表情をして返した。

まあ普通はそう反応するだろうな。

「その点なら心配ない。俺の生命力は常人よりも遥かに強い。だから生命力が枯渇することはないだろう」

「………なんで自分の生命力が強いなんてわかるのかしら?」

「それが俺の能力だからだ。俺の能力は『命を理解する程度の能力』。文字通りあらゆる命を理解することが出来る。だから自分の生命力がどれくらいなのかわかる」

「……霊夢、彼の言っていることは本当かしら?」

永琳は霊夢に確認をとった。まあ初対面の俺の言うことが信じられなくても無理はないな。

「本当よ。まあ私が確認する手段なんてないけど。でもミコトはそんなつまらない嘘をつくような人じゃないわ」

「そう………ちなみに聞くけどあなたの生命力はどれくらい強いのかしら?」

「少なくとも見積もっても平均的な人間より10倍以上はあるな」

「10倍ですって!それなら………わかったわ。あなたに薬を譲ってあげるわ」

「本当か?」

「ええ。あなたなら大丈夫そうだから」

「なら早速くれないかしら」

「それは無理ね。薬はこれから作らないといけないから。他にもやらないといけないことがあるから1週間は待ってちょうだい」

まあ今ないのなら仕方がないな。

「そう。わかったわ。それじゃあ1週間後にまた来るわ。行きましようミコト」

「ああ」

俺は霊夢と共に帰ろうとした。が

「待ちなさい」

帰ろうとする俺達を永琳は止めた。

「何だ?」

「ミコト、あなたには薬ができるまでの1週間、ここに居てもらおうわ」

永琳が言ってきたのは予想外のことだった。

「どうしてよ?」

「薬を作るにはミコトの細胞が必要なのよ。それにいろいろ検査も毎日必要なの。毎日神社から通うのは手間でしょう? だったら薬ができるまでの間ここに居た方がいいわ」

永琳が言うことはもつともだな。

「霊夢。永琳はああ言っているがどうする?」

「どうするって、何で私に聞くのよ?」

「1週間も霊夢のところを離れてもいいのかと思ってな」

「なっ!ど、どういう意味よ!」

霊夢がなぜか顔を赤くして聞いてきた。

「いや、神社のこととか霊夢1人で大丈夫なのかと思ってな」

「!な、何だ、そのことね・・・」

一体何だと思ったのだろうか?

「大丈夫よ。ミコトが来る前までは私1人でやってたんだから、問題ないわ。それに薬を作る為なんだからそんなこと気にしなくてもいいわよ」

「そうか。わかった。ならこれから1週間世話になる。よろしくな永琳」

「ええ。よろしく」

こうして薬ができるまでの1週間。俺は永遠亭で世話になることになった。

「それじゃあ私は神社に帰るわね。一日神社を空けっ放しにしちやったし」

「わかった。手が治ったら帰るから。またな、霊夢」

「ええ」

霊夢は部屋から出ようとした。その時・・・

「永琳。少しいいかしら?」

部屋に1人の少女が入ってきた。

「!!」

俺は部屋に入ってきた少女に、かつて俺が愛し、俺を愛してくれた

たったひとりの少女……神楽の面影を見た。
「か……ぐら？」
俺は無意識にそうつぶやいていた。

第23話

side ミコト

部屋に入ってきた少女は永琳と話をしている。

(なんで俺はあの子を神楽と?)

長い黒髪にピンク色の服、赤く長いスカート少女。たしかに髪の色と長さは神楽と同じくらいだ。だがそれ以外の点では神楽と似通った点は見られない。それなのになぜこの子に神楽面影を見たのかわからなかった。

「わかったわ。ありがとう永琳。……って霊夢。あなた来てたの?」

「今更気がついたの?」

「別にいいでしょ。ところで知らない人がいるけどその人は?」

「今うちに住んでる同居人よ」

「……」

「?ミコト、どうしたの?」

「あ、いやなんでもない。はじめまして、俺は一夢命。ミコトって呼んでくれ。君は?」

「私は蓬莱山輝夜。この永遠亭の主よ」

『かぐや』か……神楽とは一字違い……って何考えてんだよ俺は。

「輝夜が永遠亭の主なのか。これからよろしくな」

「え?よろしくって何が?」

輝夜は俺がよろしくと言ったことに疑問を感じたようだ。

「姫。彼はこれから一週間ここに居ることになりました」

「どうして?」

「それは……」

永琳は輝夜に俺がここで世話になる理由を説明し始めた。

「それじゃあミコト、私は今度こそ帰るわね」

「輝夜に挨拶していなくてもいいのか?」

「別にいいわよ。輝夜には用はないし。それじゃあまたね」

「ああ。また」

霊夢は部屋から出て神社に帰っていった。

「へえ、そういうこと」

「はい」

霊夢が出て行ってすぐに説明が終わったようだ。

「ミコト」

「なんだ？」

「永遠亭の主としてあなたを歓迎するわ。これからよろしく」

「ああ。よろしくな輝夜」

「ええ。ところで霊夢は？」

「霊夢なら輝夜が永琳と話しているあいだに帰ったよ」

「全く。私に一言挨拶もなしに帰るなんて・・・」

「まあ霊夢だからな」

「・・・そうね。納得だわ」

今ので納得するのか。まあ言ったのは俺だが。

「と、そうだ永琳。これから一週間世話になるんだ。何か俺に手伝えることはないか？」

流石に世話になるのに何もしないというのは俺の矜持に反する。

「そうね・・・といっても今あなたは左手がないから手伝えることなんてたかが知れてるんじゃないかしら？」

・・・それを言われると痛いな。実際左手がなくていろいろ手間どったりすることがあったし。この手じゃあ料理とか掃除とかやりにくそうだと容易に想像がつく。

「だったら私に少し付き合いなさい。暇なんですよ？」

俺がどうしたものかと思っていたら輝夜がそう言ってきた。

「そうね。ミコトの診察をしようにも準備が出来ていないし、今ミコトができることは特にないから姫の相手をしてちょうだい」

「わかった。俺でよければそうしよう」

「なら付いてきて。私の部屋に行きましょう」

「ああ」

俺は輝夜について部屋を出た。

side 霊夢

私は今永遠亭を出て神社への帰路についている。

(……ミコト)

ミコトのことを考えながら。別にこれから一週間ミコトがいなくて寂しいって思ってるわけじゃあ……ないわけではないけど。今考えているのは別のことだ。

『か……ぐら？』

ミコトは輝夜を見てそうつぶやいていた。その時のミコトの表情は今まで私が見たことのないものだった。目を見開いて驚いたようにそして……切なそうな表情をしていた。

(……『かぐら』)

おそらく人の名前だろう。ミコトは輝夜をその『かぐら』とかいう人と見間違えたのだろうか？まあ私はミコトではないのでミコトがどう思ってるかわわからない。ただ……『かぐら』はミコトにあるような表情をさせられる人ということだけはわかった。外の世界で誰からも愛されなかったというミコトを……

(一体何者なの？)

私の中で『かぐら』という人物に対する興味が大きくなっていった。

(ミコトは……聞けば答えてくれるかしら？)

私はそんなことを考えながら神社へ帰っていった。

俺は今輝夜の部屋で輝夜と向かい合って座っていた。

「それで・・・俺は何をすればいい？」

「なんでもいいから話をして。何かあるでしょ？」

なんでもいいからと言われても・・・正直困るな。ここは俺が疑問に思ったことを聞いてみるか。

「なあ輝夜。聞きたいことがあるんだが」

「何？」

「輝夜って・・・あのおとぎ話の『かぐや姫』なのか？」

「おとぎ話？どういうこと？」

「と、知らないのか」

「ええ。どんな話？」

「ああ。そのおとぎ話っていうのは・・・」

俺はおとぎ話のことを簡単に話した。

「・・・という話だ」

「・・・そう。その話からしてそのお話の『かぐや姫』は確かに私ね。話の内容もだいたいあっている」

やはりそうだったか。蓬莱山輝夜という名前からもしやと思ったが。

「でも・・・違うところもあるわ」

「月に帰っていないってところか？」

「それもだけど・・・まだあるわ。私は・・・月から追い出されたのよ」

「・・・そうか」

「理由は聞かないの？」

「聞いて欲しいのか？」

「そういうわけじゃあないわ」

「なら聞かないさ」

「そう・・・」

俺と輝夜のあいだにしぼし沈黙が続いた。

「そういえばあなたはその話をどこで知ったの？」

輝夜の問いかけにより沈黙は破られた。

「あのおとぎ話は外の世界で伝わっていた話なんだよ。外の世界では結構有名なんだ」

「ということとは……ミコトは外来人なの？」

「ああ。幻想郷には二週間ほど前に来た」

「そう、どうして博麗神社に住んでるの？」

「幻想郷に来た時に最初に会ったのが霊夢でな。俺が幻想郷で暮らすと言ったら厚意で神社に住ませてくれることになったんだよ」

「へえ。じゃあ……なぜ幻想郷で暮らそうと思ったの？ 外の世界に帰りたいとは思わなかった？」

「……外の世界に帰りたいとは全く思わなかったよ。今も同じだ。帰るつもりはない」

「……そう」

「理由聞かないんだな」

「あなたと同じよ聞いて欲しくないことを聞くつもりはないわ」
「そうか」

「……ミコト、あなたに幻想郷に住む先人としてこれだけは言っておく……幻想郷はあらゆるものを受け入れてくれる」

「え？」

「外の世界で何があったかわからない。でもこの幻想郷はあなたを拒んだりしないわ」

俺を拒まないか……確かにそうだな。幻想郷の人たちは外の世界のやつらと違って俺を否定しないし虐げたりしない。紫だつて俺を警戒してもこの世界で生きていくことを否定しなかった。

「だから……何も心配しないで生きていきなさい」

「……そうか。輝夜」

「何？」

「ありがとう」

俺は笑顔を浮かべて俺に気遣ってくれた輝夜に礼を言った。

「べ、別に……お礼を言われるようなことじゃないわよ／＼／」

輝夜はなぜか頬を赤く染め目をそらした。

(な、なによあの笑顔……反則じゃない)

「どうした、輝夜？」

「な、なんでもないわよー！」

輝夜は顔を赤くしたまま言ってきた。

あのあと、俺は輝夜と色々な話をした。永遠亭に住んでいる永琳、鈴仙、そしてまだ会っていないという子のこと。俺の能力についてや先日の異変であったことなど本当に色々だ。そんな話をしているとき

「姫、失礼します」

永琳と鈴仙がやってきた。

「永琳、鈴仙。何か用？」

「ええミコトに聞きたいことがあります」

「俺に聞きたいこと？」

「ええ。ミコトの能力で命を探知することができるかしら？」

「できるぞ。その能力がどうかしたのか？」

「ちよっと探して欲しい子がいるのよ」

「探して欲しい子？」

「はい、因幡であっていうここで住んでる子なんですけど……異様に帰りが遅いんです」

鈴仙の言葉を聞き外を見ると辺はもう暗くなっていた。輝夜との話に夢中になっていたため気がつかなかったようだ。

「いつもはこの時間にはとっくに帰ってきているのだけど今日は遅すぎるわ。あなたの能力で今どこにいるのかわからないかしら？」

「輝夜から聞いたがそのてゐってという子は鈴仙と同じ兔妖怪だよな？」

「はい。そうです」

「ならわかると思う。やってみよう」

俺は能力を発動して命を探った。広範囲に渡って探ってみると鈴仙の気配に似た命を見つけた。おそらくそれがてゐだろう。しかし……

「……てゐって子らしき命は見つけた。でも少しまずいことになっているかもしれない」

「どういうこと?」

「その子の周囲に複数の命を感じた。兎妖怪の命と別の妖怪の命だ。そして兎妖怪の方の命はかなり弱っている」

「それって!」

「多分兎妖怪は別の妖怪に襲われて傷ついているんだと思う。そしててゐはその子達をかばって動けない状況なんだろう」

「永琳、鈴仙!」

「はい!」

「ええ、すぐに行きましょう!ミコト!案内をお願い!」

「ああ!」

俺は輝夜、永琳、鈴仙を連れててゐのいるところへと急いだ。

第24話

side てゐ

「お前らー！ここから出てけ！ここは私の竹林だ！」

私は目の前にいる5体の妖怪たちに叫んだ。

「はあ？そんなん知らねえな」

「誰がいつお前のもんだって決めたんだ？」

「まあお前のもんだろうがなからうが関係ねえけどな。俺たちは俺たちのやりたいようにやるだけだ」

こいつらわ全く聞く耳を持たない。どうやらこいつらはこの竹林と私のことを知らないようだ。

「そんなんどうでもいいからよお、そこどけよ。早くそいつら喰いたいんだ」

「「ヒツ!!」」

私の後ろにいる怪我を負った兎妖怪たちが悲鳴を上げた。こいつらはこの子達を喰おうとしている。そのためにこの子達を襲つているところを私は見つけて間に入ったのだ。

「どくわけないだろー！この子達をお前たちに喰わせてたまるか！」

正直兎が食べられることは少し位は仕方がないと私は思う。でも、目の前で泣いて助けを求めるこの子達を放っておけなかった。

「そうか・・・なら仕方ねえな。てめえから喰ってやるよ！」

そう言つて奴らは近づいてきた。私はそこまで強い妖怪ではない。だからきつとこいつらに敵わない。私は恐怖で目を閉じると・・・

「混符『アンビバレンス』!!」

「ぎゃあああああ!!」

知らない声と悲鳴が聞こえてきた。私が目を開けるとそこには・・・私を襲おうとした奴が黒と白の弾幕に飲まれる光景が目に見えた。

「な、なんだ!?!」

「何が起こつた!?!」

突然のことに奴らは混乱している。すると・・・

「動くな」

妖怪ども中の一体の頭に筒のようなものを突きつける者が現れた。そいつは長い黒髪に黒いコートを着ていて左手がない男(女かもしれない)だった。

「少しでも動いてみる……頭に風穴があくぞ」

そいつは、ものすごい殺気をまとって妖怪を脅した。

「貴様らもだ。動くんじゃないぞ」

「な、なんだ貴様は！」

「答えるつもりはない」

「ふざけんな！」

奴らのうちの一体が忠告を無視して男に襲い掛かる……が
ビュッ！

ザシュッ！

そいつの頭に矢が突き刺さり、そのまま貫通した。襲いかかった妖怪は絶命し倒れる。

「だから言っただろ？動けば頭に風穴があくと」

矢が飛んできた方を見るとそこには……

「お師匠様！」

弓を構えたお師匠様がいた。そしてお師匠様だけでない。

「てゐー！」

「てゐー！大丈夫？」

いつの間に来たのか、鈴仙と姫様が駆け寄ってきた。

「う、うん。私は大丈夫」

私は二人に大丈夫だと答えた。

「さて、お前ら……どうする？ここから消えるなら見逃してやるけど？」

「き、消えます！ですから勘弁してください！」

「……わかった」

男は妖怪から筒を離れた。お師匠様も弓を下ろす。すると……
「……なくんてな！消えるわけねえだろバカ！」

妖怪どもは男に襲い掛かった。

ザシュ!

そして体が引き裂かれる……

「「ぎゃああああああ」」

男ではなく妖怪どものだ。男はいつの間にか黒い剣を手にしている。彼がやったのだろう。

「致命傷は避けてやった。もう一度言うぞ……とつとつと消えろ、二度とここに現れるな」

男は先程以上の殺気を放ち言った。

「「ひ、ひいいいいいい!!」」

妖怪どもは一目散に逃げていった。

「ふう、これでいいか? 永琳」

「ええ。ありがとう」

「礼はいいさ」

男はお師匠様にそう返した。いつの間にか手に持った黒い剣が消えていた。

side ミコト

「大丈夫か?」

妖怪どもを撃退して俺はてるに声をかけた。

「う、うん。あんたは?」

「俺は一夢命。訳あってこれから永遠亭で世話になることになった者だ。ミコトと呼んでくれ。お前は因幡てゐだな?」

「なんで知ってるの?」

「輝夜から聞いたんだよ。怪我はあるか?」

「私は大丈夫。でも……」

てるは後ろの兎妖怪たちを見た。やはり怪我をしているようだ。

「お師匠様! 手当を!」

「ええ」

永琳たちは兎妖怪の手当をしようとした。

「ちよつと待つてくれ、永琳」

俺はそんな永琳に待つたをかけた。

「何かしら?」

「ちよつとな」

俺は兔妖怪たちに近づき、俺の生命力を兔妖怪たちに与えた。兔妖怪たちの怪我が癒えていく。

「!これって・・・」

「怪我が・・・治った?」

「どうして?」

怪我が急速に治ったのを見て輝夜と鈴仙、てゐは驚いた表情をした。

「・・・これもあなたの能力かしら?」

「ああ。俺の生命力を与えて回復力を促進させたんだ」

「便利な能力ね」

「まあな」

「ミコトの能力?それって何?」

てゐは気になったのか聞いてきた。

「それは後でゆっくり話す。お前たちまだ痛むか?」

俺は兔妖怪たちに聞いた。

「いいえ!」

「大丈夫です!」

「ありがとうございます!ミコトさん!」

「気にするな」

兔妖怪たちは俺に向かって礼を言ってきた。

「さて、それじゃあ帰りましょう。永遠亭に」

「はい。姫」

事態が片付いたので俺たちは永遠亭に戻った。ちなみに兔妖怪たちも一緒だ。怪我が治ったが念のため永琳に見てもらおうそうだ。

「それで？ミコトの能力って何さ？」

「てゐるが俺に聞いてきた。ちなみに今は兎妖怪たちの診察が終わり、鈴仙が作った料理（俺も手伝ったがやはり片腕では難しかった）を食べている最中だ。」

「俺の能力は『命を理解する程度の能力』。文字通りあらゆる命を理解し、命の力を行使する能力だ。さっき兎妖怪の怪我を直したの俺の生命力を兎妖怪たちに与えて回復力を促進させたんだよ。ちなみにお前たちの居場所がわかったのもこの能力のおかげだな。お前たちの命の気配を察知して見つけた」

「随分と便利な能力だね。でも生命力を与えるって……あんたは大丈夫なの？」

「てゐるは心配そうに聞いてきた。」

「大丈夫だよ。俺は生命力が並の人間よりはるかに強いからな。あのくらい問題ない」

「そう……ミコト」

「なんだ？」

「私とあの子達を助けてくれてありがとう」

「てゐるは笑顔で俺に礼を言ってきた。」

「気にするな。俺がそうしたかっただけだからな」

「それでもありがと」

「……ああ」

「へえ、てゐるが素直にお礼を言うなんて珍しいわね」

「鈴仙がてゐるに向かって言った。」

「な、何さ！私だって助けられたんだからお礼ぐらい素直に言えるよ！」

「ふくん。そう」

「むむむ、なんかムカつく……」

「普段のてゐるは素直じゃないのか？」

俺は気になったので輝夜と永琳に聞いてみた。

「そうね……」

「普段のてゐるは……」

「ちよつと姫様、お師匠様！あまり変なこと言わないで！」

てゐるは必死な様子で輝夜と永琳を止めた。

「あら？まだ何も言っていないわよ？」

「一体てゐるは何を言われると思ったのかしら？」

「うっ……そ、それは……」

てゐるは何やら顔を伏せてもじもじしている。対してに輝夜と永琳は何やら楽しそうな表情をしている。その様子を見ている鈴仙もだ。

「……あゝ輝夜、永琳、やっぱいいや。聞かないぞく」

俺がそう言うのとてゐるは顔を上げた。ぱあつと明るい表情をしている。

「え？いいの？」

「ああ、本人は聞かれないみたいだし。まあ一週間ここにいるんだからいろいろわかるだろ」

「そう、わかったわ」

輝夜と永琳は納得したようで再び箸を動かした。それに伴いてゐる、鈴仙も止めていた箸を動かし食事をすすめる。幻想郷に来てから食事のたびに思うがやはり……

(誰かと一緒に食べる食事は楽しいな)

俺もまた箸を動かし食事を進めた。

「ふう」

日付が変わろうかという時間。俺は屋敷の縁側にいた。ちなみに皆は既に寝入っている。俺は煙管を取り出した。もちろん輝夜たちには許可をもらっている。

「火、つけましようか？」

「ああ、頼むよ……紫」

俺は突然現れた紫に頼んだ。

「あら？驚かないのね」

紫は煙管に火をつけながら聞いてきた。

「ああ。気がついていたらからな。紫もそれはわかってたんだろ？」

そう俺は紫のことに気がついてた。永遠亭に着いて能力を使った時に感じた4つの命のうちひとつは紫のものだったからだ。

「こそこそ見てるなんて、趣味悪いぞ？」

「ふふ。ごめんなさいね」

紫はあまり悪びれていない様子で微笑んだ。全く紫は……

「……俺の手、治るそうさ。紫にとっては残念か？」

紫は俺を警戒しているからな。俺の手が治らない方が都合がいいと思っっているかもしれない。

「……いいえ、そんなことないわ。治るとわかって嬉しいくらいよ」

俺はなんとなくだが紫は本心で言ってくれているのだと思った。

「そうか、ありがとう……ところで紅魔館の時も見てたよな？」

「ええ。霊夢たちがちゃんと仕事をしているか気になったもの」

「そうか。なら聞くが……あの黒いのはなんだ？」

「……」

あれが何かと聞いたら紫の顔は険しくなった。

「あれは……あなたと同じよ。何者にの愛されなかった者の末路……哀れで愚かな存在よ」

愛されなかったものの末路、俺と同じ……俺もあのととき、あの存在になりかけていた。……いや俺はわずかの間とはいえとはい

えあれになっていた。

「幻想郷にはもともとあれはいたのか？ 霊夢は知らなかったようだが？」

「……いいえ、あれはもともと幻想郷にはいなかったわ。私があるを知っているのは外の世界で見たからだし」

「だったらなんで紅魔館に現れたんだ？」

「わからないわ。だから藍に今調べさせているわ」

「そうか……」

（もともと幻想郷にはいなかった……誰かが手引きしたのか？）
「私も聞いていいかしら？」

俺が煙管を吸いながらの頭の中であの存在のことを考えていると紫が聞いてきた。

「なんだ？」

「……神楽っていう子のことを聞いていいかしら？」

……やはりか。そんな気はしていた。

「神楽は……以前紫に話した……俺を愛してくれたたったひとりの子だよ」

「……そう。もうひとついいかしら？」

「ああ」

「なぜ輝夜を見てその子の名をつぶやいたのかしら？」
「……」

「輝夜は……その神楽という子に似ていたのかしら？」

「……いや、髪の色と長さは似ていた。だがそれ以外に外見上の特徴は見られなかった」

「ならどうしてかしら？」

「それは……俺にもわからない」

「……そう」

そう。輝夜は特別神楽に似ているわけではない。それでも俺は……輝夜に神楽の面影を見た。

「……もう行くわね。あなたの手が無事治ることを祈っているわ」
「ああ。またな、紫」

「ええ。また」

紫はスキマを開いてその中に入っていった。そして俺は月を眺めながら煙管を吸う。

．．．．．もうすぐ満月だな。

第25話

第25話

side ミコト

俺は今永琳に右腕を差し出している。

「それじゃあいいわね？」

「ああ」

俺に確認をとると永琳は俺の右腕を突き刺した。

「……はい。採血終わり」

注射器で。採血のためにだ。

「これで今日の検査は終わりよ」

「ああ、ありがとう」

永遠亭生活2日目の午前、俺は永琳に検査をしてもらっている。俺の身体の状態や作る薬にアレルギーの類があるのかを調べるためにだ。さっきの採血もそのためのものであり、後、薬を作るための細胞摂取もかねているらしい。

「それにしても、何度見てもやっぱり普通の人間と変わらないわね」

永琳は俺の診察記録を見て言った。

「いや、それは当たり前だろ。俺は普通の人間だぞ？」

「……ごめんさい。まだ1日しかあなたを見ていないけどそれは否定せざるをえないわ」

……俺って一体。

「それに、普通の人間だったらそんなに早く塞がらないわよ」

永琳は俺の右腕を指して言った。採血のために刺した注射をのあとはどうに消えていた。

「しかも他人の怪我也治せるのでしょ？あなたがいれば医者いらずかしら？」

「そうでもないさ。治せる怪我には限度があるし病気は進行を遅らせたり悪化を防ぐことは多分できるが治すことはさすがにできない」

さすがにこの能力にも限度というものがあるからな。

「それでも医者からしたら十分に羨ましい能力よ。あなた、医者にな

る気ある?」

「考えておくよ」

俺と永琳は互いに笑みを浮かべてそんな話をした。

「と、そうそう。あなたにお願いがあるのだけれどいいかしら?」

「それでは行ってきます」

「ええ」

「おみやげ買ってきてね」

「行ってらっしゃい。鈴仙、ミコト」

「ああ」

永琳、てゐ、輝夜に見送られ、俺は鈴仙と共に人里に向かった。

永琳からのお願いとは鈴仙と共に人里に薬を配ってきて欲しいというものだった。いつも鈴仙ひとりで行っているらしいのだが、どうも鈴仙は人間が苦手らしくいつも帰りが遅くなるそうだ。そこで俺がついて行くことで効率をあげるらしい。……正直俺も人付き合いとかが苦手な方なんだがな。

「ミコトさん、この竹林は迷いやすいですからしつかりついてきてくださいね」

「大丈夫だよ。それに万が一はぐれても能力を使えば直ぐに鈴仙を見つけれられるからな」

「ふふ。そうですね」

……こうして話していると人間が苦手とは思えない。むしろ好意的なように思える。となると原因は……

(あの眼か)

昨日、鈴仙は自分の眼を見ないように忠告した。俺を狂わせないようにするために。鈴仙の命から鈴仙の能力は狂気に関するものだということはわかっている。おそらく鈴仙の眼を見たら狂気にとらわれるのだろう。さつきもこちらに振り返らずに言っていたし。

(優しい子だな)

鈴仙は優しい。だからこそ人間が苦手になってしまったのだろう。人間を狂わせないために。

「……………」

俺は前を歩く鈴仙の前に回りこんだ。

「え？ミコトさん？」

そして鈴仙の肩を掴み鈴仙の眼を見た。

「ミ、ミコトさん！なにしてるんですか！」

鈴仙は俺から離れようとするが肩を掴まれているため離れられない。仕方なしにすぐに眼を閉じた。

「鈴仙、眼を開いて」

「で、でも！」

「大丈夫だ。大丈夫だから眼を開けて」

鈴仙は恐る恐る眼を開けた。そして俺は露わになった鈴仙の紅の眼を見つめた。同じ紅でもレミリアのものともフランのものとも違う。鈴仙の紅だ。

「あ、あれ？どうして……………」

鈴仙は自分の眼を見ても狂気に陥らない俺を不思議に思った。

「狂気は命にあらわれるほどの感情だからな。俺に命に影響を及ぼ力は効かない。だから俺は狂気に陥らないんだよ」

「……………そうなんですか。本当に便利な能力ですね」

「そうだな」

本当に俺の能力つてチートな気がするな。

「……………鈴仙、少なくとも俺は鈴仙の眼を見ても狂ったりしない。だから俺には変に気を遣わなくてもいいからな？」

「……………はい！ありがとうございます！」

鈴仙は笑顔で俺に礼を言った。

side 鈴仙

「さて、行くか」

そう言つてミコトさんは私の肩を掴んでいた手を離した。

「あつ……」

「どうした、鈴仙？」

「な、何でもありません！」

「？そうか」

ミコトさんは私が声を上げたことに疑問を感じたようだがなんとか誤魔化せたようだ。正直私は……ミコトさんが手を離れたとき、残念な気持ちになった。

ミコトさんが私の眼を見つめていたときに見えたミコトさんの眼。優しく、美しい淡い金色の……私の故郷の月と同じ色の眼。私はその眼に見とれた。もつと見ていたいと思った。

(……ミコトさん)

『「夢命』。私の眼を見ても狂わない人。私の眼を見てくれる人。私は……彼に惹かれた。どうしようもなく。昨日会ったばかりの人に。彼がどんな人なのかほとんど知らないのに。私だけではなく、きつとてゐるもだ。ミコトさんのもつ不思議な魅力に惹かれたのだろう。それならば昨日のてゐのミコトさんへの対応も領けるから。」

「……仙、鈴仙」

「は、はい。なんですか？」

「人里はこつちじゃないのか？」

そう言つてミコトさんは私が進んでいた方とは違う方向を指した。ミコトさんが言うように私は人里とはまるで違う方向を歩いていた。

「あ、す、すみませんミコトさん」

「別に構わないが……大丈夫か？何かぼんやりしていたが？」

「だ、大丈夫です！お気になさらず！」

「そうか。ならいいが」

そう言つてミコトさんはまた歩き出した。私はそのミコトさんの横について歩く。

(ま、まさか道を間違えるほどミコトさんのことで頭がいっぱいになっていたなんて……今日大丈夫かな)

私は今日これからの仕事をうまくやれるか不安になった。

そして、その不安は的中し、ミコトさんのことばかり考えてしまい、ミコトさんと2人で薬を配っていたにも関わらずいつもより時間がかかってしまった。……お師匠様になんて説明しよう。

side ミコト

深夜、俺は昨日と同じく縁側で煙管を吸っていた。(そこ！時間飛びすぎとか言わない！by作者)……なんか変なメッセージが発信された気がするがスルーだ。

とりあえず今日もまあ大変だったな。薬を配っているとき鈴仙がやたらとぼんやりとしていてなかなかはかどらず、どうしたかと聞いても何でもないの一点ばりで教えてくれなかった。まあ鈴仙にもいろいろあるのだと思えば深くは聞かなかったが。問題は永琳だった。どうして二人で行ったのにあんなに遅かったのかとものすごい(怖い)笑顔で言われた。俺はこれから起きるお仕置きを想像して体を恐怖で震わせる鈴仙の横で永琳に頭脳をフルに使って思いついた言い訳(という名の虚偽報告)を話し、なんとか永琳を信じさせることができ(まあ嘘だと気づかれたかもしれないが)事なきを得た。ちなみにそのあと涙目になった鈴仙に何度もお礼を言われた。一体永琳は鈴仙にどんなお仕置きをしていたんだろうか？

そのあとは鈴仙と夕食の準備をしたのだがここでも鈴仙はぼんやりすることが多く、何度も調味料や材料を間違えそうになって指を切ったりしていた。指の怪我は俺の能力ですぐに直したからいいが俺も左手が使えない状態で料理を作っていたのでかなり苦戦した。まあ料理自体はちゃんと美味しく出来たのでよかったが。

そんなこんなで今日もいろいろあった。なんか幻想郷に来てからゆっくり出来る日がほとんどないような気がする。……まあ退屈しないのでいいが。

「ニコト、まだ寝てなかったの？」

そんなことを考えながら煙管を吸っていると輝夜が声をかけてきた。

「ああ。幻想郷にきてから寝る前に煙管を吸うのが日課でな。輝夜は？」

「私は寝付きが悪かったから月を見に来たの。日課ってことは昨日も吸ってたの？」

「ああ。昨日は紫が付きあってくれたよ」

「あのスキマが？なんでいたのよ？」

「……さあ。俺は紫のお気に入りに入りらしいからそれでじゃないか？」

本当は俺を監視していたからなんだろうけどな。

「全くあのスキマは勝手に……」

輝夜は紫に対してぼやいている。まあ勝手に屋敷にあられたのだから当然の反応だろう。

「まあまあ、それより座ったらどうだ？」

俺は未だに立っている輝夜にそう促した。

「そうするわ。隣いい？」

「ああ」

輝夜は俺の隣に座った。そして真っ直ぐに月を見つめる。

「もうすぐ満月ね」

「ああ。あと3日くらいかな？」

「そうね。また例月祭の準備をしなきゃ」

「例月祭？」

聞きなれない言葉だな。

「永遠亭で毎月満月の日に行われるお祭りよ。薬草の入ったお餅を捧げたり丸いものを集めて祀るの」

「へえ」

ふむ。変わった祭りだな。

「・・・ねえ、ミコトは月は好き？」

「・・・嫌いだよ。・・・でも好きだ」

「え？何それ、どういうこと？」

「・・・」

輝夜は疑問の声をあげた。まあ俺が言ったことは矛盾しているから当たり前か。

「・・・月が嫌いなのは俺の眼と同じ色をしているから。外の世界ではこの眼は気味悪がられていたからな。」

そして、月が好きなのは・・・

「・・・私は好きよ。月」

何も答えずにいると輝夜はそう言ってきた。

「たとえ追い出されても・・・もう帰らないと決めていても、月は私の故郷だから」

そう言っつて輝夜は月に向かって手を伸ばした。その表情はとても愛おしそうだ。

「・・・そうか」

「それとね、最近新しい好きな理由ができたの」

「新しい理由？」

「ええ。月は・・・あなたの眼と同じ色をしている」

「!!」

輝夜は俺の眼を見ながら言った。そう言っつた輝夜に俺はまた神楽の面影を見た。

「あなたの眼を見ているとね、なぜかやっぱり月は美しいんだなっと思ふの。そして月がまた好きになった。・・・あなたのおかげよ？」

「・・・月が俺の眼と同じ色なんじゃなくて俺の眼が月と同じ色だろ？」

「ふふ。そうね」

輝夜は口元を抑えて微笑んだ。

「・・・もう寝ようか。煙管も吸い終わっつたし」

「そうね、ねえミコト」

「なんだ？」

「明日もここで煙管吸う？」

「ああ。そのつもりだ」

「私も一緒にいていいかしら？」

「……ああ」

「ありがとう」

俺と輝夜は各々の寝室に向かった。

『月は……あなたの眼と同じ色をしている』

布団に入った俺は先程の輝夜の言った言葉を思い出していた。

(……あの言葉)

『月はお前の眼と同じ色をしているな。おかげで月が好きになった』
かつて、神樂が俺に言った言葉。そして俺が月が好きな理由でもある。

……俺はなぜ輝夜に神樂の面影を見たのか少しだけわかった。

第26話

side ミコト

永遠亭生活3日目。天気がいいので散歩しようとして外に出たら

「……………」

「……………鈴仙」

「……………なんですか?」

「……………変わった趣味だな」

「違います!」

鈴仙がいた……………逆さ吊りの状態で。

「大丈夫だ。たとえば鈴仙にそういった趣味があっても俺は気にしない」

「そう言いながらなんで目を伏せて去ろうとしてるんですか!?!引いてるんですか!?!」

「違う……………下着が見えてるぞ」

「……………え?」

鈴仙のスカートは重力に従っている。そして鈴仙は今逆さ吊り。つまり……………スカートがもろに捲れてしまっている状態だ。

「つ!!ミコトさん!見ないでください!」

鈴仙は顔を赤くし急いでスカートを抑えた。

「いや、だから目を伏せていただろう?」

……………まあもう見てしまっているのだが。

「それじゃ俺はこれで」

俺はその場から離れようとした。

「ま、待ってください!私を降ろしてください!」

「好きでやってるんじゃないのか?」

「好きでこんなことするわけじゃないでしょう!一体私はどれだけ特殊な趣味の持ち主なんですか!?!」

「まあ確かにおかしいと思ったが幻想郷では常識に捕らわれてわいけないと聞いたから、てつきり普通の趣味かと……………」

「いくら何でもそこまで常識外れじゃないです！お願いですから早く降ろしてください！」

「わ、わかった。降ろしてやるから少し落ち着け」

俺は鈴仙の足にくくりつけられた縄を解いて下ろしてやった。見ないように目を閉じていたのでかなりてこずった。………とか鈴仙が自分で飛んで解けばよかったんじゃ………もしかして気がつかなかった？………まああえて言わないでおこう。

「あ、ありがとうございます。ミコトさん」

「ああ。にしても趣味じゃなければなんで逆さ吊りになんてなったんだ？」

考えられるのは永琳のお仕置きだろうか？昨日随分怯えていたし。これくらい的事よくされるのかもしれない。

「てゐの悪戯です！全くあの子は………」

「てゐの？てゐってそんなことするのか？」

「はい！いつもなんです………あ」

「？どうした？」

急に鈴仙の様子が少しおかしくなった。

「え、えっとですね？てゐは確かに悪戯しますけど悪気があるわけじゃ………無くもないんですけど。でもてゐは悪い子じゃあないんです！本当はいい子なんですよ！だからあの子のことを悪く思わないでくださいね！」

なぜか鈴仙は慌てた様子で必死に訴えかけてきた。

「鈴仙、なんでそんなに必死になってるかは知らないけど大丈夫だ。俺はてゐが悪い奴だなんて思わないぞ？」

あれぐらゐの悪戯ならまだ可愛い方だし。

「本当ですか!？」

「こんなことで嘘ついてどうすんだよ」

「よ、よかった〜」

鈴仙は安心した様子で肩をなでおろした。

「………鈴仙は優しいな」

「え？」

「普通は自分に悪戯を仕掛けた奴のことを庇ったりなんかしないぞ？」

「そ、それは……確かにてるはいつも悪戯ばかりするけど、けっこう長い付き合いだし……あの子のことはわかってるつもりなので……」

「そうか」

「っ!!わ、私、師匠に用がありますからもう行きますね!」

鈴仙は屋敷の中に走って行ってしまった。顔を赤くしていたので恥ずかしくなったのだろう。

「……よかったな。鈴仙に好かれているみたいだぞ。てゐ」

俺は茂みの方を向いてそう言った。

「……気づいてたんだ」

茂みの中からてゐが出てきた。

「ああ。一瞬だけど能力使ったからな」

「……ずるい能力」

「かもな」

「……失望した？」

てゐが心配そうな顔をしてそう言った。

「してないよ」

「本当に？」

「ああ。さつきも言っただろ？嘘ついてどうするんだよ。第一なんで失望されたと思ったんだ？」

「私、いつも悪戯するから……」

てゐは顔を伏せて言う。

「……てゐは鈴仙のことが嫌いで悪戯してるんじゃないだろ？鈴仙が好きだから……だから悪戯しちゃうんだろ？」

「……(コク)」

てゐは無言で頷いた。ゆえにそれが本心だとわかった。

「だったら失望なんてしないよ。まだ俺には二人がどんな関係なのか全部わかるわけじゃあけどそれがふたりの関係なんだろ？まあでも少しやりすぎだったかもしれないから謝るときはちゃんと謝らない

とな?」

そう言つて俺はてゐの頭を撫でながら言つた。

「……うん」

「じゃあ行つて来い」

「うん。……ありがと。ミコト」

てゐは屋敷の中へ向かつた。おそらく鈴仙のところに向かつたのだろう。

あのふたりがどんな関係なのか細かいことは俺にはわからない。でもふたりがお互いのことを嫌っているなんてことはないだろう。ふたりとも優しい子だしな。

「……さてと」

俺は近くにあつた岩に腰掛けた。……待つために。

腰掛けてから5分ぐらいたつただろうか? 待つていた者が来た。さつき能力を使った時に近づいてくるのがわかつたのだ。

「ん? 誰だお前?」

その者は白く長い髪に独特な服(確かもんぺとかいうのだ)を着ている。そして……輝夜や永琳に似た命の持ち主だ。

「俺は一夢命というものだ。訳あつて永遠亭で世話になっている。ミコトと呼んでくれ」

「ミコト……お前がミコトか!」

「知ってるのか?」

「ああ。慧音に聞いた」

慧音……人里で会つた寺子屋の先生か。

「慧音の知り合いなのか?」

「まあな。つと自己紹介をまだしてなかつたな。私は藤原妹紅だ。よろしくな」

「ああ」

妹紅が手を差し出ししてきたので俺は握手に応じた。

「ところで今輝夜はいるか？」

「ああ、いるぞ。輝夜に何か用か？」

「ああ……輝夜を殺しに来た」

「……そうか、わかった。少し待っていてくれ」

俺は輝夜呼びに屋敷に入った。

「輝夜」

俺は自室で読書していた輝夜を見つけたので声をかけた。

「何、ミコト」

「妹紅がお前を殺しに来ているぞ」

「……我ながらおかしな物言いだな。」

「はあ、またか……仕方ないわね。すぐに行くわ」

そう言っつて輝夜は部屋を出た。……仕方ないと言っているがどこか嬉しそうな気がする。

「……なんでついてくるの？」

輝夜は後からついていく俺を疑問に思ったのか聞いてきた。

「ダメか？」

「そういうわけじゃないけど」

「ならいいだろ？」

「そうね」

俺たちは妹紅のところに向かった。

「来たな輝夜……今日こそ殺す！」

「殺れるものなら殺ってみなさい！」

「上等！」

会うやいなや輝夜と妹紅はお互いに向かつて弾幕を展開した。

(・・・二人とも本気だな)

二人とも本気で殺し合っている・・・でも

「またやっているのね」

「永琳」

いつの間にか永琳が現れた。

「あのふたりはそんなに頻繁に殺し合っているのか？」

「ええ。軽く1000回は超えているわね」

そんなにか。

「・・・・・・・・驚かないのね」

「・・・・・・・・妹紅は藤原不比等の子だろ？」

「・・・・・・・・よくわかったわね」

「まあ藤原と聞いてなんとなくな」

藤原不比等・・・かつて輝夜に無理難題を出され交際を断られた貴族だ。

「妹紅の目的は父親の復讐・・・・・・・・だがそれは表向き」

「・・・・・・・・なぜそう思うの？」

「憎しみっていうのは命に現れるほどの強い感情だ。妹紅が輝夜を憎んでいるなら俺にはわかる・・・・・・・・でも妹紅から憎しみは感じられない。それに輝夜も妹紅も蓬萊人、殺しても死なないだろ」

そう。妹紅は輝夜を憎んでなんていない。だから死なないと分かっているながら殺し合っているんだ。むしろ・・・・・・・・

「・・・・・・・・二人とも生き生きしているな」

「ええ。そうね」

俺の目の前で輝夜と妹紅は激しい弾幕を繰り出している。・・・お互いに笑いながら。

「・・・・・・・・でも」

「・・・・・・・・ああ。ちよつとな」

いくらなんでもやりすぎだな。弾幕を打ち合う二人の周辺は焼け野原になっている。このままでは屋敷が焼けてしまうのも時間の問

題だ。

「止めてくる」

「ええ。お願い」

俺は二人を止めるために前に出た。

「やるな輝夜！」

「貴方こそ！」

ふたりは周りの状況などお構いなしにさらに戦いを激化させていた。

「これでどうだ！蓬萊「凱風快晴——フジヤマヴォルケイノ——！！」

「神宝「蓬萊の玉の枝——夢色の郷——！！」

二人はスペルカードを発動し、これまでとは比較にならないほどの弾幕が展開される。……これはさすがにヤバすぎるな。

「混符「黒と白の驟雨」！！」

俺はスペルカードを発動し二人の弾幕を阻んだ。

「なっ！ミコト！なにをするのよ！」

「これは私と輝夜の戦いだ！邪魔するな！」

ふたりは戦いに割って入った俺に激しい剣幕で言ってきた。

「ふたりの邪魔をして悪かったとは思う。だが……周りを見てみる」

「……あ」

ふたりはここでようやく周りが焼け野原となっていることに気が付いた。

「これ以上やったら永遠亭なくなるかもしれないが……続けるか？」

「……仕方ない今日はここまでにしといてやる」

「……そうね」

どうやらやめてくれたようだな。

「今日はここで退いてやる。だけど次こそはお前を殺す」

「上等よ。返り討ちにしてやるわ」

このやりとりももう数え切れないほどやってるんだろうな。

「じゃあな」

そう言って妹紅は帰っていった。

「さてと、妹紅も帰ったことだしミコト、お茶にしましょ」

「そうだな・・・と言いたいところだが無理だと思うぞ?」

「なんでよ?」

「後ろ見てみろ」

輝夜は後ろを振り向いた。そこには・・・・・・・・ものすごい笑顔の永琳がいた。

「え、永琳?何?そのものすごい笑顔・・・・・・・・」

「姫、ちよつとお話があるんですがよろしいですか?」

「え・・・あの・・・・・・・・ミ、ミコト!助けて!」

輝夜は満面の(黒)笑みを浮かべる永琳に恐怖し俺に助けを求めきた。

「・・・・・・・・諦めろ。輝夜」

「そ、そんな・・・・・・・・」

輝夜の顔がどんどん青ざめていく。

「姫・・・・・・・・少々やりすぎですよ?」

「い、いやあああああああ!」

輝夜の悲鳴が竹林中に響き渡った。

「今日はえらい目にあつたな輝夜」

「全くよ。ミコトが助けてくれないから」

「無茶言うな。あの永琳に逆らえるわけないだろ」

「まあそうだけど・・・・・・・・」

深夜になり俺はいつもどおり屋敷の縁側で煙管を吸っている。輝

夜も一緒だ。

「ねえ、気になったんだけど煙管って美味しいの？」

「美味しいというか・・・気分が良くなるんだよ」

まあ元をただせば薬物だし。

「そう・・・少し吸わせてもらってもいいかしら？」

「ああ、いいぞ」

特に断る理由もないので煙管を輝夜に渡した。もちろん啜える部分はきちんと拭いておいた。

「(別に拭かなくてもいいのに) ありがとう」

輝夜は煙管を受け取って口に啜えた。

「どうだ？」

「そうね。悪くない・・・いえ、いいものね」

「そうか」

「・・・私もこれから吸おうかしら？」

「いいんじゃないか？ただ言っておくがそれはやらないからな」

素人目に見ても素晴らしい施しがしてあるこの煙管は俺のお気に入りだからな。

「残念ね。少し狙っていたのだけれど。仕方ない。明日蔵の中を探してみるわ。探すの手伝ってくれる？」

「ああ」

「ありがとう。はい、返すわね」

輝夜は煙管を返した。俺は再び煙管を啜える(もちろんちゃんと拭いた)

その後は輝夜としばらく他愛の話をし、煙管を吸い終わると部屋に戻って眠った。

第27話

side 霊夢

なんだかずいぶん久しぶりに出てきたきがするわね……まあいいわ。ミコトと離れて暮らすようになって今日で4日目。私は……

「な、なあ霊夢。顔が怖いんだが……」

「……元々よ」

とてつもなく機嫌が悪い。ミコトに大丈夫と言っておきながらまさかたった4日離れているだけでここまで……私は一体どれだけミコトに依存しているのだろうか？まだ一週間くらいしか一緒に住んでなかったのに……

「そんな顔しているとミコトが帰ってきた時に嫌われるぜ？」

「は？（ギロツ）」

私はふざけたことを言った魔理沙を睨みつけた。

「……悪い、今言ったことは取り消そう」

「ならはじめから言わないでよ。ていうかあんた紅魔館で借りた本読んでるんじゃないの？なんでここに来てるのよ」

「ああ、ある程度読み終わったからミコトに会いに……じゃなくて息抜きに来たんだぜ」

……やっぱりミコトに会いに来たのね。

「残念だったわね。ミコトがいなくて」

「だ、だからただ息抜きに来ただけだって！」

本当にわかりやすいわね……ただ魔理沙の気持ちはわかる。はじめは同情だった。紫に聞いたミコトの境遇に同情した。だからミコトを愛そうとした。……でも今は違う。私はミコトに惹かれた。ミコトのことをひとつを知ること、ミコトの笑顔を見るたびに。私のミコトに対する感情は大きくなった。……今ならばつきり言える。私はミコトを愛していると。

「……早く帰ってこないかな？」

「なんだ？やっぱりミコトが帰ってくるのが待ち遠しいのか？」

「なっ！いきなり何言ってるのよ！」

「声出てたぜ？」

「……………」

……………まさか声に出ていたとはね。

「……………どうやらミロトはいないようね」

突然、聞き覚えのある声が聞こえてきた。

side ミロト

現在の時刻は昼過ぎ。俺は今永琳の検査を受けて話を聞いていたのだが……………

「……………」

「ぼんやりとしてどうしたの？」

永琳の話に集中できていなかった。

「ん？まあちよつと考え事をな」

「考え事？」

「ああ。霊夢どうしているかなと思ってさ」

「霊夢が？」

「ああ。霊夢は大丈夫だと言っていたがどうにも心配だな」

ちやんとご飯食べているだろうか？睡眠はちやんととっているか

？まさか怪我したり病気にかかったり……………本当に心配だ。

「まああの巫女なら大丈夫……………いえ、ある意味大丈夫じゃないわね」

「大丈夫じゃない？どういうことだ？」

まさか霊夢に何か……………

「いえ、あなたの考えるようなことはないわ」

「そうか……………じゃあ何が大丈夫じゃないんだ？」

「……………霊夢は苦労しているわね。ウドンゲもてるも……………姫様

も苦労しそうね」

永琳は呆れた様子でそう言った。

「なんだそれ？第一なぜそこでその3人が出てくる？」

「はあ・・・自分で考えなさい」

「???どういうことだ？」

「おおい、ミコト」

俺が永琳に言われたことを考えているとてゐが現れた。

「どうしたてる？何か用か？」

「ミコトにお客さんだよ」

「俺に客？一体誰だ？」

「私よ」

そう言つて出てきたのは意外な人物だった・・・

「咲夜!?!」

「ふふ、こんにちはミコト」

「あ、ああ」

なんで咲夜が永遠亭に？

「じゃあ私は行くね」

「ええ。案内ありがとう」

咲夜から礼を言われたてゐるは部屋から出ていった。

「えくと咲夜？一体何でこ永遠亭に？」

「お嬢様と妹様にいつまでたつても屋敷に來ないミコトの様子を見て
來いと言われました」

「・・・いや、まだ一週間も経っていないんだが」

「お嬢様たちにとつては待ち遠しいみたいね」

だからって気が短すぎないか？

「はじめは博麗神社に行つただけど靈夢からあなたは永遠亭にいる
と言われて、それで來たのよ。ちなみにさっきの子は竹林で永遠亭を
探していた時に声をかけられて案内してもらつたの」

やはりてゐるはいい子だな。

「そうか。ということは靈夢にあったんだよな？靈夢はどうだった
？」

「霊夢は……まあ元気ではあったわよ」

「元気では？なんか含みがあるな。やっぱり何かあったのか？」

「……はあ、自分で考えなさい。」

咲夜は先程の永琳と同じように呆れた様子で言った。本当に何なんだ？

「……」

ふと、永琳の方を見ると永琳は無言で咲夜のことをじっと見つめていた。

「永琳？どうした」

「えっ？」

「咲夜を見つめていたが」

「え、ええ、彼女はいつたい誰なのかと思って」

「挨拶が遅れましたね。私は十六夜咲夜。紅魔館のメイド長よ」

「そう……やっぱり」

「え？」

「……私は八意永琳よ。よろしく」

「？はい。よろしくお願いします」

……やはり永琳の様子がおかしいな。咲夜に何かあるのか？そういういえばこの二人……

「ところでミコト、左手はどうなのかしら？」

「霊夢から聞いてないのか？」

「ええ。自分で確かめて来いと言われてね」

「そうか。まあ左手は見ての通り治っていない。今永琳が薬を作ってくれているところだ。あと2、3日あれば完成するんだよな？」

「ええ」

「というところでレミリアとフランにはまだそちらに行けそうにないと伝えてくれ」

「わかったわ」

これは治ったら早めに紅魔館に行かないとな。

(ん？そういうえば……)

俺はここであることを思いついた。

「なあ永琳、永琳の能力って『あらゆる薬を作る程度の能力』なんだよな？」

「ええ、そうよ。それがどうかしたかしら？」

「例えば・・・吸血鬼が太陽の光を浴びても大丈夫になるような薬ってできるか？」

「！ミコト、あなた・・・」

「そうね・・・その吸血鬼に直接会って色々調べる必要はあるけど出来るわ」

「それは本当「本当ですか!？」」

咲夜が俺の言葉を遮って食い入るように聞いてきた。

「ええ」

「・・・その薬を作ってください。お願いします」

咲夜は永琳に頭を下げて頼み込んだ。

「・・・ひとつ聞いわ、あなたにとってその吸血鬼というのはどういった存在なの？」

永琳は真剣な表情で咲夜に聞いた。

「お嬢様は・・・レミア様は私にとって何よりも大切な方・・・恩人です。だから・・・私は何があってもお嬢様の願いを叶えたい」

咲夜の目は本気だった。すごい忠誠心だな。いったい咲夜とレミアの間は何があつたのだろうか？

「・・・わかったわ。その薬作るわ」

「！ありがとうございます！」

「お礼はいいわよ。私自身その薬は作ってみたいと思っていたから」

「それでもありがとうございます」

「・・・ええ」

「・・・なんだろう？咲夜を見る永琳の暖かく優しい目は？輝夜を見るときはまた違う目だ。

もしかして・・・

咲夜と永琳の命が似ていることに関係があるのだろうか？

「私はもう帰るわね。これ以上は屋敷の仕事に差し支えちゃうから」

「ああ。今日はわざわざありがとな」

「気にしなくていいわ・・・私も会いたかったし（ボソツ）」

「ん？何か言ったか？」

「なんでもないわ。それでは薬の件よろしくお願いします」

「ええ。近いうちにそちらに行つて検査させて色々調べさせてもらおうわね」

「よろしくお願いします。それじゃあ帰るわね」

咲夜は部屋から出ようとした。

「迷わず帰れるか？」

「大丈夫よ。帰り道は覚えているから」

そう言つて咲夜は部屋から出て、帰つていった・・・と思つたら

「そうそう、言い忘れていたわ」

「なんだ？」

「帰つたらちゃんど霊夢と話をしなさい」

「？もちろんそのつもりだが」

「ならいいわ。それじゃあ今度こそさようなら」

「ああ」

今度こそ咲夜は帰つていった。ほんとになんだったんだろう？

空に月が浮かぶ時間。俺は今日も日課の煙管を吸う。

「やっぱいいいわね。煙管って」

「そうだな」

もちろん隣には輝夜がいる。その手には昼前に俺と共に蔵で探した煙管がある。

「明日は満月・・・例月祭ね」

「ああ」

「ミコトにも色々手伝ってもらおうから」

「わかっているさ」

そして輝夜と他愛のない話をして煙管を吸った。

side 霊夢

私は今縁側に腰掛けて月を眺めている。いつもなら寝ている時間だが今日は寝つきが悪かった。

「……………やっぱり行けばよかったかしら？」

咲夜がミコトに会いに永遠亭に行くとき、私も来ないかと誘われた。……………でも私は行かなかった。ミコトに大丈夫といった手前、会いに行くのは少し私の沽券に関わると思ってしまうからだ。……………まあ今になって少し後悔しているが。

「随分淋しそうな顔をしているわね、霊夢」

いきなりそんなことを言う聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「……………何しに来たのよ。紫」

「霊夢がミコトがいなくて淋しがっているんじゃないかと思ってね」
「……………あつそ」

正直紫が言っていることは事実なのだが……なんか癪に障るから言わないでおこう。

「……紫、あなた言っていたわよね？私のミコトに対する感情は愛情じゃないって」

「……ええ。言ったわ」

「今なら自信を持って言えるわ……私はミコトを愛している」

「……ええ。わかってるわ」

「これで……ミコトを滅する必要はないわね」

「……いいえ、それは違うわ」

「どうしてよー！」

私はミコトを愛している。これは間違のない感情だ。それなのにどうして？

「……確かに霊夢はミコトを愛するようになった。そしてあなただけじゃあないわ。ミコトを愛しつつある子は他にもいる」

それは分かっている。魔理沙とかレミリア、咲夜……あとあのルナっていう妖精もそうね。

「でも……問題は彼自身にあるのよ」

「ミコトに？」

「ええ。ミコトは……無意識に自分への愛を気づこうとしていない」

「……どういうこと？」

「文字通りの意味よ」

自分への愛を気づこうとしていない？ミコトは愛を求めているんじゃないの？

「……霊夢、あなたは『神楽』という子のことについてミコトに聞いているかしら？」

『神楽』？それってあの時の……

「……直接聞いただけじゃないけど名前だけは知ってるわ。その神楽っていう子がどうかしたの？」

「おそらくその子が彼が愛に気づかない理由よ」

「どういうこと？」

「それはわからないわ。私も詳しく聞いたわけじゃあないから。でも……その子の存在が大きく関わっているのは間違いないわ」

「……一体『神楽』ってミコトのなんなの？」

「……霊夢、ミコトを本当に救いたいのなら……その子を知ることを知る必要があるわよ」

「……」

「……私はもう行くわね。おやすみ霊夢」

紫はスキマを開いて帰っていた。

「ミコト……」

私は目を眺めながら永遠亭にいるミコトに思いを馳せていた。

第28話

side ミコト

「そこで塩を小さじ二杯入れて」

「・・・小さじ？」

「10gぐらいだ」

「・・・10gってどれくらい？」

「・・・とりあえずその小さいさじで2杯入れとけ」

「わかったわ」

俺は今輝夜と料理をしている。なぜこんなことをしているかというと・・・

「・・・暇だ」

今日は満月。ここ永遠亭では例月祭という催しが行われる。その準備が行われている中俺は縁側に座っていた。俺もその準備を手伝おうと思ったが・・・

「手伝う？別にいいよ。それに片手じゃうまく餅つきできないでしょう？」

てゐのところで餅つきを手伝いに行ったら片手じゃうまくできないからと言われ。

「手伝う？いいですよ！ミコトさんはお客さんなんですからゆっくりしててくださいー！」

鈴仙のところに行ったらお客さんだから手伝わなくていいと言われた。そして俺は暇になってしまったのだ。

「・・・どうするかな」

俺はこれからどうしようと考えていたら・・・

「ミコト、ちよつといいかしらっ？」

輝夜が話しかけてきた。

「なんだ、輝夜？」

「暇そうね」

「……まあな」

「だったらちよつと付き合つて」

「構わないが……何するんだ？」

「お昼ご飯を作るのよ」

「昼ご飯を？」

「みんな今日の例月祭の準備をしてくれているけど……私は何もしてないのよね」

「……」

「な、何よその目は！仕方がないでしょ！皆が手伝わなくていいって言うんだから！」

「……まあ俺もそうだが。」

「だからせめて皆に料理を振る舞いたいんだけど……手伝ってくれる？」

「……全くそんな風に頼まれて断れるわけないだろ。」

「わかった。俺でよければ手伝おう」

「ありがとう！ミコト！」

と、そういうわけで輝夜と料理をしているわけだが……

「輝夜！それじゃあ手切るから！」

「え？私だったらちよつと切つても大丈夫だけど」

「そういう問題じゃない！」

輝夜つて……

「輝夜！それ醤油じゃなくてソース！」

「違うの？」

「違うから！」

本当に……

「輝夜！火強すぎだ！弱めろ！」

「え?どうするの」

「それもわからないのか!?!」

「……料理できなさすぎだろ。」

「……あとは蓋してしばらく煮込む」

「わかったわ」

よ、ようやくここまで来た。正直尋常じゃないくらい疲れた。

「……ごめんねミコト」

「何がだ?」

「私……料理下手で」

「今まで作ったことは?」

「……ない」

「なら仕方ないさ。初めてなら皆こんなものだ」

まあ輝夜はちよつと……アレだけど。

「ミコトもそうだった?」

「……まあ似たようなものだったよ」

……ごめん。正直輝夜よりはマシだったって思う。

「何か間がなかった?」

「気のせいだ」

「ならいいけど……ミコトって結構容赦ないのね」

「何がだ?」

「料理教えるのよ。ミコトのことだからもつと優しく教えてくれると思っただ」

「料理は一瞬の油断で台無しになることがあるからな。今回は皆に食べてもらうんだから下手なものは食べさせられなだろ?」

「まあそうね」

「それに……食事っていうのは命をいただくものなんだ。下手なものを作ったら調理される食材に申し訳ないだろ?」

「命をいただくか……そうね」

「分かってくれれば一歩前進だ。これから料理するときは今言ったこと忘れずにするんだぞ?」

「うん」

輝夜とそんな話をしていると。

「お腹すいた〜」

「あら？何かいい匂いがするわね」

「本当ですね」

てゐ、永琳、鈴仙がやって来た。

「と、3人とも来たか待つてろ、もう少しで完成するから」

「あら？もしかしてミコトがお昼作ってくれたの？」

「いや、主に作ったのは輝夜だ」

「……………え？」

三人の声があつた。そして若干青い顔をしているように見えるのは俺の気のせいではないだろう。

「皆は座って待つてて。すぐに持つて行くから」

「……………」

三人は何も言わずに席に着いた。

「皆、例月祭の準備ありがとう。食べて頂戴」

「……………」

皆はなかなか箸を進めようとしなない。

(ウドンゲ、てゐ。覚悟を決めましょう)

(……………はい)

(私の命運もここまでかな……………)

三人はおそらく目線で何らかの会話をして覚悟を決めた顔をして料理を口にした。

「！美味しい……………」

「本当に……………」

「……………マジ？」

三人は驚いた表情をしている。そこまで輝夜の料理を信じてなかったのか。……………まあ輝夜ひとりで作っていたらみんなの不安が的中していたかもしれないが。

「……よかった」

輝夜はみんなの反応を見て胸を撫で下ろした。輝夜も不安だったのだろう。

「ミコト、食べないの？」

なかなか箸を進めない俺に対して輝夜が言ってきた。

「食べるよ」

俺も料理を口にした。そして皆で団欒して昼食をとった。

「ふう……」

時刻は深夜俺は今日も縁側で煙管を吸う。

例月祭はどうしたって……正直丸いものと餅を供えて祀るだけだったからそこまで言うことないんだよな……強いてあげるなら俺がてゐの作った超激辛の餅を食べてのたうち回っていたことぐらいだろうか？ちなみにこの餅、ブート・ジヨロキア（世界一辛い唐辛子……なぜ永遠亭にある？）が仕込まれていたらしく俺の味覚を冗談ではなくマジで破壊した。もちろんこれはやりすぎと思ったのでてゐには説教した……まあちよつと説教してすぐに許したが。俺はやはり甘いのだろうか？

「ミコト、舌はもう大丈夫？」

となりで煙管を吸う輝夜が心配そうに聞いてきた。

「大丈夫だ。問題ない」

俺はお約束の返しをした。……実際はまだ痺れてるけど。

「そう。ならいいわ」

……やはり通じるのは紫だけか。

「……綺麗な満月ね」

「……ああ」

「……あなたの眼と同じ色ね」

「……ああ」

俺の眼と……

「ねえミコト」

「・・・なんだ？」

「どうして月が嫌い？・・・好きなの？」

「・・・そういえば結局答えていなかったな。」

「俺の目は・・・月と同じ色だ。だから嫌いなんだ」

「え？」

「外の世界ではこの眼は気味悪がられた。だから同じ色をしている月が嫌いなんだ」

「・・・そう。じゃあ好きな理由は？」

「・・・好きな理由か。」

「・・・俺の目と同じ色だからだ」

「それって嫌いな理由じゃ・・・」

輝夜は首をかしげた。好きな理由と嫌いな理由が同じであることに疑問に思ったのだろうか。

「・・・昔、こんなことを言う奴がいた。『月はお前の眼と同じ色をしているな。おかげで月が好きになった』とな」

「それって・・・」

「ああ。輝夜が俺に言ったことと同じだ。その言葉を言った奴はな・・・俺にとって何よりも大切な存在だった」

「何よりも？」

「ああ。・・・俺が何よりも愛して・・・俺をたったひとり愛してくれた子だった」

「たったひとり、ミコトを愛した・・・」

「・・・今ならわかる。どうして輝夜に神楽の面影を見たのか。」

「その子は・・・輝夜によく似ていたよ」

「私に？」

「ああ。輝夜と同じで・・・愛されていて・・・愛することを恐れていた」

「え？」

「・・・恐いんだろ？誰かを愛することが」

「！そんなこと・・・」

「ないと言いい切れるか？」

「それは……」

「誰かを愛することが恐いから拒絶したんだろ？自分を愛しているという者を、かつてお前に求婚してきた者たちに無理難題を与えて」

「……」

「輝夜は永遠に生き続ける。だから……愛する人ができてもその人は先に逝ってしまう」

「……めて」

「だから愛することを恐れた。愛する者は必ず自分を残して逝ってしまうから」

「……やめて」

「だから輝夜は……共に永遠の時を生きる永琳以外を……鈴仙とてゐるを心から愛そうとしない」

「やめて！」

輝夜は俺に怒鳴った。その顔は怒りと悲しみを秘め、その目は……かつての神楽と同じだった。

「……悪かった」

「……私こそごめん」

俺と輝夜の間には沈黙が流れる。

「……もう行くわね。おやすみミコト」

「……ああ。おやすみ」

輝夜は自室に戻っていった。

「……」

『私は……恐いんだ。誰かを愛することが……私の愛で人が変わってしまうことが怖い』

神楽と輝夜、愛することを恐る理由は違う。でも……やっばり同じだ。

「……どうすればいいんだ？」

輝夜を救いたいと思った。神楽と同じ目をした輝夜を。神楽と同じように愛することを恐る輝夜を。たとえそれが……

神楽を殺したことに對する罪悪感からくるものだとしても。

「俺は……輝夜を救うよ。神楽」

俺は神楽が好きだった月に向かってそう呟いた。

第29話

side ミコト

太陽が最も高く上がる時間。俺は縁側に座り、輝夜のことを考えていた。今日まだ輝夜に会っていない。いや、会えないといったほうがいいだろう。輝夜は自室から一步も外に出ていないからだ。原因は間違いない。昨日の俺との会話だろう。

「ミコトさん」

「なんだ？ 鈴仙」

「師匠が呼んでますよ」

「わかった」

俺は立ち上がり永琳のもとに行こうとすると……………

「……あの、ミコトさん」

「なんだ？」

「その……………ごめんなさい。なんでもないです」

「……………そうか」

俺は鈴仙を背に永琳のもとに向かった。

「なんの用だ？ 永琳」

「ええ、薬の件で話があるの。……………でもその前にいいかしら？」

「なんだ？」

「姫と何があったのかしら？」

……………やはりその話か。鈴仙もそのことを聞こうとしたのだろう。

「姫が部屋に閉じこもっているのはあなたが原因でしょう？」

「……………ああ」

「何があったの？」

「……………」

俺は永琳の問いかけに答えずに黙り込んだ。

「答えるつもりはないようね。ならいいわ。．．．．ただこれだけは言っておくわ。あなたが姫を傷つけるなら私は．．．．私達はあなたを許さない。絶対に」

「．．．．肝に銘じておく」

私達．．．．鈴仙とてゐもということだろう。やはり輝夜は愛されているな。．．．．そしてその愛が輝夜を苦しめている。

「．．．．本題に入りましょう。薬が完成したわ。これがそうよ」
永琳は琥珀色の液体ののった小瓶をとりだし、俺に渡した。

「この薬が．．．．」

「ええ。この薬を飲めばあなたの左手は再生するわ。でも．．．．」
「副作用があるんだろ？」

「ええ、その通りよ」

人体を再生させるほどの薬だなんの副作用もないなんてありえない。
「まず膨大な生命力を消費する。これはもう話したからわかってるわね？」

「ああ。その点は問題ない」

「次に再生に伴う苦痛。左手を再生させるほどの変化を体に強いているのだから相当な苦痛を感じるはずよ。左手を切り落とした時とは比較にならないほどの．．．．それこそ死んでしまうんじゃないか？ほどの苦痛が襲ってくることを覚悟しなさい」

「わかった」

「それと再生仕切るのに今日一日かかるわ。それまでは痛みでまともに動くこともできないと思っておいて」

「ああ」

覚悟を決め俺は薬を一気に飲む。今まで飲んだどの液体よりも強い苦味を感じた。

「っ!!」

薬を全て飲み干した瞬間。薬の副作用による全身に焼けるような、引き裂かれるような激痛を感じた。

「どうかしら？」

「・・・想像以上の痛みだ」

「薬が効いている証拠よ。今日一日頑張って耐えなさい。あと意識は飛ばさないようにしたほうがいいわ。意識がなくなったらそのままシヨック死するかもしれないから」

「わかった」

俺は意識の飛びそうなほどの痛みに耐え答えた。

side 輝夜

『・・・・・・・・恐いんだろ？誰かを愛することが』

私の頭の中で昨日ミコトが言っていた言葉が反芻する。

『誰かを愛することが恐いから拒絶したんだろ？自分を愛しているという者を、かつてお前に求婚してきた者たちに無理難題を与えて』

『輝夜は永遠に生き続ける。だから・・・愛する人ができてもその人は先に逝ってしまう』

『だから愛することを恐れた。愛する者は必ず自分を残して逝ってしまうから』

・・・・・・・・ミコトの言っていたことは真実だった。私はどうしようもなく怖い。愛することが・・・愛する者ができてしまい・・・・愛する者が逝ってしまうことが。だから私はムキになって真実を突き立てたミコトに怒鳴ってしまったのだ。ただ・・・・ミコトの言っていたことの中で間違っていることもある。

『だから輝夜は・・・共に永遠の時を生きる永琳以外を・・・・鈴仙とてゐるを心から愛そうとしない』

私は・・・・・・・・共に永遠に生き続ける永琳さえも愛することができ

なかった。

永琳には感謝している。私を助けてくれたことに。私とともにいてくれることに。私を……愛してくれていることに。でも私は永琳を愛することができなかった。……いつか永琳に拒絶されるのではないかと恐れて。……永琳がそんなことしないと信じている。でも……それでも私は信じきれなかった。

私たちは永遠に生き続ける。変わらず永遠に。でも思いは？感情は？愛情は？本当に変わらないなんて言い切れる？……幻想郷に来る前に私は多くの人にあった。数え切れないほど多くの人を。そして私は知った。変わらぬ人などいないということ。

どんな人間でも変わる可能性がある。悪人が善人になることもあれば、善人が悪人になることだってある。なら……永琳だって変わってしまう可能性はある。私を拒絶し、私を愛さなくなる可能性がある。だから私は永琳を愛することができない。

私は愛する人と死に別れて苦しみたくない。

愛する人に拒絶されたくない。

だから私は……

誰も愛さない。

ツー……

いつの間にか私の目には涙が流れていた。

「輝夜ー！出てこい!!」

涙を流す私の耳に聞きなれた声が聞こえてきた。妹紅のものだ。今日も私を殺しに来たのだろう。

(……あいつの相手をすれば少しは気分が晴れるかな?)

私は涙をぬぐい、妹紅のもとへ向かった。

「今日は姫様はお相手できないんです!」

「なんでだよ!屋敷にいるんだろ!」

「それはそうですけど……とにかく今日はダメなんです!」

外に出るとそこには妹紅と鈴仙がいた。私のことで言い合いになっっているらしい。

「鈴仙。もういいわよ」

「姫様!」

「ようやく来たな輝夜!」

「ええ。待たせて悪かったわね」

「あ、あの姫様」

「なに?」

「えっと……」

どうやら私を心配しているらしい。まあ今日一日部屋に閉じこもっていたのだから心配されても仕方ないか。

「私なら大丈夫よ。鈴仙は屋敷に戻ってなさい。巻き込まない自信がないから」

「……わかりました」

鈴仙は屋敷の中に戻っていった。鈴仙を見送り、私は妹紅と向き合う。

「輝夜！今日こそお前を殺す！」

「それはこっちのセリフよ」

何度目になるかわからないこのやりとり。いつもいつもよくもまあお互い飽きないものね。……しかし、そのあとの展開はいつもと違うものとなった。

「……」

妹紅はいつまで経っても攻撃してこなかった。

「どうしたのよ？さっさとかかってきなさい」

「……やめだ」

「え？」

「今日はやめだ。今のお前を殺す気にはなれない」

「なっ！どう言う意味よ！」

「どうもこうもない……そんな死ぬほどつらそうな顔してるやつを殺そうなんて思えないんだよ」

「っ!!」

「……私が殺したいのはいつものお前だ。今のお前じゃない。だから今日は殺さないで置いてやる。じゃあな」

妹紅は私に背を向けて帰ろうとした。

「……待ちなさい」

私は妹紅を引き止めた。

「なんだよ。何度言われても今日はやらないぞ」

「わかってるわよ。あなたに聞きたいことがあるの」

「私に聞きたいことだと？」

「ええ、あなたは……誰かを愛した事がある？」

「は、はあ!?何言ってるんだよお前は！」

私の問いに妹紅は顔を真っ赤にした。

(なぜよりもよって妹紅に聞いてるんだろ?)

そう思いながらも知りたかった。……私と同じく永遠の時を生きる妹紅がどうなのかが。

「いいから答えて」

「……わかったよ。正直私は誰かを愛した事はない。慧音には感謝してるけど、愛とはちよつと違う気がするしな。ただ……」
「ただなによう？」

「……いつか、愛する人ができたらいいなとは思うな」

妹紅は顔を赤くし、目を逸らして言った。

「……どうして？」

「え？」

「どうしてそんな風に思えるのよ！私達は蓬萊人なのよ！愛する人ができてもずっと一緒にいられない！確実に私達より先に死ぬ！それなのにどうして愛したいなんて言えるのよ！」

私は感情のままに妹紅に怒鳴った。

「輝夜、お前……馬鹿だろ？」

妹紅は呆れた様子で言ってきた。

「なっ！どういう「なんで愛する前から別れる時の事考えてるんだよ？」……え？」

「確かに、愛する人と死に別れるのはつらいだろうな……きつと家族を失う時と同じくらいつらいだろう。でもそれが愛さない理由になるのはおかしくないか？誰かを愛するのって死に別れてつらい思いをするためじゃなくて愛したいと感じたから愛するんだろ？」

「……」

「第一いちいち先のこと考えたって面倒だろ？確かに私達は永遠に生き続けるけどこの瞬間は今しかないんだぞ？だったらいつ来るかどうか……そもそも来ないかもしれない先のことばかり考えるより今、後悔しないように生きる方がよっぽど有意義だろ」

「……」

私は妹紅の言うことに何も反論できなかつた。死に別れるのが怖いから愛さない？ならいつその時がくる？永琳が私を拒絶する？そ

もそも永琳は私を拒絶するの?・・・妹紅の言うとおり私が考えていたのはいつくるかわからない先のこと。こないかもしれない仮定のことだ。今考えても答えなんて出ない。それなのに私はなんであんなに思い悩んでいたのだろうか?・・・なんだか自分が馬鹿らしくなってきた。

「・・・妹紅」

「なんだよ?」

「あなたって・・・単純ね」

「はあ!?それが質問に答えてやった奴にいうことか!?馬鹿みたいに面倒なこと考えてる輝夜よりよっぽどましだ!」

「・・・まったく、そのとおりね」

「え?」

「妹紅」

「な、なんだよ」

「あなたのおかげで色々踏ん切りがついたわ。ありがとう」

私は妹紅に心からの感謝を述べた。

「・・・明日は雨、いや嵐がくるな」

「・・・それは一体どういう意味かしら?」

「輝夜が私に礼なんか言うからだ。当然の考えだろう?」

「・・・運がいいわね。今私は機嫌がいいから見逃してあげるわ。でも私の機嫌がいろいろうちにさっさと帰りなさい。殺されたくないでしょう?」

「言われなくても帰るよ。だけど覚悟しておけよ。次に会ったときは必ずお前を殺す」

「やれるものならやってみなさい。返り討ちにしてやるわ」

「ふんっ、じゃあな」

そんないつものやりとりをして。妹紅は私に背を向けて帰って行った。

「・・・本当にありがとう。妹紅」

私は妹紅に聞こえないように再び礼を言った。

「・・・さて、行かなきゃね」

私は屋敷の中に・・・・・・・・ミコトに会いに行った。昨日の話の続きをするために。そして・・・・・・・・

ミコトを愛するために。

第30話

side ミコト

薬を飲んでからどれくらい経っただろうか？体には相変わらず激痛が走る。しかし痛み慣れてきたのか薬を飲んだときよりは幾分楽になった。

「……まさか薬を飲んでたったの2時間でそこまで再生するとは思わなかったわ」

俺の左手は手のひらの先まで再生している。

「それもあなたの能力が関係しているのかしら？」

「おそろくな。俺もこの能力については全てを把握しているわけじゃないから詳しくは分からないがな」

「そう。まあこのペースなら夕飯前までには再生しきるわね」

「そうか」

俺としてはありがたいな。正直この痛みと長時間付き合いたくない。それに……

(輝夜と早く話が出来そうだな)

輝夜とは話をしなければならぬ。……何としても輝夜を救いたいから。

「はい」

輝夜のことを考えていたら目の前に水の入ったコップが出てきた。

「ありがとうえいり……」

俺は永琳が渡してくれたのだと思い礼を言おうとした。しかし俺に水を渡してきたのは永琳ではなかった。俺に水を渡したのは……

「いらないの？ミコト」

輝夜だった。

「……いや、もらおう」

俺は輝夜から水を受け取り飲み干した。

「永琳、ミコトと話があるから少し外してくれないかしら？」

「わかったわ。何かあったらすぐに呼びなさいね」

「ええ」

永琳は部屋から出ていった。

「……………輝夜、昨日は「ごめんねミコト」え？」

輝夜は俺の言葉を遮った。

「昨日のこと、本当にごめんなさい」

輝夜は俺に頭を下げて謝った。

「輝夜が謝ることじゃない。輝夜の気持ちをちゃんと考えずにあんなことを言った俺が悪かった。だから謝るのは俺の方だ。本当にすまない」

俺は輝夜に頭を下げた。

「……………いえ、やっぱり悪いのは私よ。ミコトの言ってることは事実だった。私はそれを突きつけられてムキになってしまった。ミコトは私のことを思ってあんなことを言ったんだって分かっていたのに、それなのに私は……………」

「いや、そんなこと」「ミコト」

輝夜はまた俺の言葉を遮る。

「今回の件は私が悪かった。だからあなたが謝る必要はない。わかった？」

「……………ああ。わかったよ」

「ここまで言われてまだ謝ろうとするのは輝夜に失礼だと思い俺は納得することにした。」

「それでいいわ」

輝夜は微笑みながら俺に言った。

「……………ミコト、少しだけ私の話聞いてくれる？」

「……………ああ」

「……………私はね、ミコトの言うとおりに怖かったの。愛する人が先に逝ってしまうことが。その悲しみと苦しみを背負うのが。どうしようもなく怖かった。……………でもそれだけじゃないの。ミコトの言うことでひとつだけ間違っていることがあった」

「間違っていること？」

「ええ……………ミコト、あなたは愛する人に拒絶されたことがある？……………愛する人に拒絶か。」

「……ああ。あるよ」

「そう……私はね、それも怖かったの。愛する人に拒絶されるのが……永琳に拒絶されるのが。だから私は……永琳さえも愛せなかった」

「……」

「だから私は誰も愛せなかった。誰も愛したくなかった。でも……あなたと話をして……いえ、あなたと出会って私は気がついてしまった。私は……本当は愛したいのに愛することを拒んでいたんだって」

愛することを望みながら愛することを拒む……本当に神楽と同じだな。

「気づいてしまった後は苦しかったし、辛かった。私はどうすればいいのかわからなくなってしまったの」

……俺はそこまで輝夜を思いつめさせてしまったのか。

「そんな時に妹紅がいつもと同じように私を殺しに来たの。私はいつもどおり妹紅と殺し合おうとした……でも妹紅は応じなかった。私が思い悩んでいることに気がついて、そんな私を殺す気にはなれないと言つて妹紅は帰ろうとしたわ」

妹紅がそんなことを……きつと長い間殺し合っていた妹紅だからこそ気がついたんだろうな。

「私は帰ろうとした妹紅を引き止めて聞いたわ。妹紅は誰かを愛したことがあるかどうか。妹紅は誰かを愛したことはないといった。でも妹紅はこうも言ったわ。いつか愛する人ができたらいいって。私は妹紅にどうしてそう思えるのか聞いたわ。私たちよりも確実に先に死ぬのにどうして愛せるのかって」

自分よりも先に死ぬ……輝夜と妹紅にとっては避けられない現実。

「そしたらね？妹紅に馬鹿だらつて言われたわ。そんな先のことを考えてどうするんだって、苦しむために愛するんじゃないって愛するために愛するんだって、今を後悔しないように生きる方が大切だって。それを聞いて私は……自分が思い悩んでいたことが馬鹿らしい

「このように思えたわ」

「……………苦しむために愛するんじゃないやなくて愛するために愛する。」

「……………今を後悔しないように生きる。」

『そんな風に苦しむために愛してどうするって言うんだ。無理をするな』

『後で絶対に後悔する生き方なんてするな。今この時はこの瞬間しかないのだからな』

俺もかつて神楽に言われたな。あの時の言葉は本当に心に突き刺さった。

「私ね、それでようやく吹っ切ることができたの。今なら……………愛する人を愛することができる」

「!!」

『私はもう迷わない。私は……………お前を愛する』

この時、俺はまた輝夜に神楽の面影を見た。

「ミコト、私が誰かを愛そうと思えるようになったのはあなたのおかげよ」

「……………俺は何もしていない。お前を救ったのは妹紅だ」

「確かに。私は妹紅の言葉に救われたわ。でも私を救うきっかけを作ったのは他の誰でもないミコトなの。だからミコトのおかげでもあるの。本当にありがとう」

輝夜は笑顔を浮かべて俺に言った。その笑顔は絶世の美女と呼ばれるのにふさわしいと思わせるものであった。

「……………輝夜、愛するものを亡くすのは本当に辛いことだ」

「え?」

「昨日話しただろ?俺には愛する人がいたって。彼女は……………もう死んでこの世にいない」

「!!」

「だから俺にはわかる。愛する人を失う悲しみが。その辛さが。輝夜はそれでも誰かを愛せるか?」

俺はわざと輝夜を追い詰めるようなことを聞いた。輝夜の覚悟を

知るために。輝夜に知ってもらうために。

「……私はもう決めたの。先のことばかり考えないって。今を後悔しないようにするって。だから私は……愛することをやめない」

輝夜の目には不安が宿っているように見えた。しかし同時に強い覚悟が宿っているようにも見えた。

「……後悔はしなかった」

「え？」

「彼女を亡くして、俺は苦しかった。でも彼女を愛したことを後悔した事はない。彼女を愛した事実は、記憶は、思いは消えないから」

「ミコト……」

「意地悪なことを聞いて悪かったな。でも輝夜の覚悟を聞いてわかった。輝夜なら……きつと大丈夫だって」

「ミコト……当然よ。私が覚悟したんだもの」

「……そうだな」

俺と輝夜は互いに笑顔を浮かべた。

side 輝夜

「心配してくれてありがとう、ミコト」

私は私のことを心配してくれたミコトに改めてお礼を言った。

「気にするな。俺はただ俺の思うようにしただけだ」

「それでもありがとう。……ミコト」

「なんだ？」

「ミコトは……愛するものを失った今も、誰かを愛せる？」

私はミコトに聞いた。本当は聞くべきではなかったのかもしれないが、どうしても聞きたかったから。

「……正直幻想郷に来るまでは無理だった。でもまだ二週間だけで幻想郷で過ごして……大切だと思える人達に出会えた今なら……」

以前のように誰かを愛せると思う。いや、愛せる」

「……そっか、今なら愛せるのか

「……そう、ならミコトは……ごめんなさい。なんでもないわ」

「?..そうか」

私はミコトにその大切だと思える人たちの中に私は含まれているのか、そして……私のことを愛してくれるかどうか聞こうと思ったがやめた。流石にそこまで聞くのは失礼すぎる。でも……（いつか必ず、あなたに愛されてみせるわ）

私はミコトに……愛するミコトにいつか必ず愛されようと決意を固めた。

第31話

side ミコト

日が沈み、月が登り始めた時間帯、俺は外に出ていた。

「……………ミコト、本当にいいのね？」

輝夜は俺に確認を取った。

「ああ。頼む」

「わかったわ。それじゃあいくわよ！」

輝夜は俺に向かって弾幕を放ってきた。

ザンツ！

俺はその弾幕を両手に持った剣で全て弾いた。

「……………よし」

「もう左手は完全に元通りになったみたいね」

そんな俺の様子を見て永琳が言った。

「ああ、問題はないな」

俺は左手で剣を強く握ったり振ったりしてさらに動きを確かめながら答えた。

「永琳の薬のおかげだありがとう」

俺は永琳に心からの礼を言い、頭を下げた。

「ええ。どういたしまして」

「輝夜もありがとな。確認に付き合ってくれて」

「気にしなくていいわよ。これくらいいたいしたことないから」

「はは、そうか」

俺は剣を鈴に戻しながら言った。

「ねえ、気になってたんだけどその鈴ってなんなの？てゐを助けた時には銃にもなっていたわよね？」

「私も気になるわ。その鈴はどういったものなの？」

輝夜と永琳は気になったらしく聞いてきた。どうやら鈴を変化させていたことには気がついていたようだ。

「そうだな……………クラマ、シラマ出てこい」

俺が呼ぶと鈴の本来の姿であるクラマとシラマが出てきた。

「鈴が人になった!？」

「これは……」

輝夜と永琳はクラマとシラマを見て驚いている。

「マスター、お呼びですか？」

「ああ。輝夜と永琳に二人のことを教えようと思つてな」

「了解しました」

クラマは俺にそう言つたあと輝夜と永琳に向かい合つた。シラマもだ。

「はじめまして。私はクラマ。ミコト様の使い魔の霊獣です。こちらはシラマ。私と同じくミコト様の使い魔の妖獣です」

「……(ペコリ)」

クラマは自分とシラマの紹介をした。シラマはクラマが紹介すると頭を下げた。

「そう、鈴の姿をしていたのはそれがあなた達有能力だからかしら？」

「はい。私たちの能力は『主に応え姿を変える程度の能力』。この能力で普段は鈴の姿をしています」

「なるほど。その能力で剣になったり銃になったりしてたのね。でもなんで普段は鈴の姿をしているの？」

「私たち自信、命なき存在ですから。私たちがこの姿になるとミコト様の生命力を消耗してしまいますので普段は鈴の姿をしています」

「そういうこと……でもなんで鈴なのかしら？」

「それは私たちが鈴が好きだからです」

「……(コク)」

「……は？」

クラマの発言に輝夜と永琳は呆けた顔をした。おそろくいくら好きだからといって普段から鈴の姿をしている二人のことを変わつていると思つたのだろう。……まあ俺も二人は少し変わつてい

「マスター、もう戻つてもよろしいですか？」

「ああ。ありがとな」

「いえ、戻りますよ、シラマ」

「……………(コク)」

クラマとシラマは鈴に戻って俺の右手首に巻き付いた。

「ねえミコト。二人がああ姿になるとあなたの生命力が消耗されると言っていたけど大丈夫なの？さっきまで左手を再生させてたから生命力を消費してたのよね？」

輝夜は心配そうに聞いてきた。

「大丈夫だよ。確かに結構の生命力を消費したけどあれぐらいどうってことない」

事実以前まで俺はほとんどの生命力がないまま問題なく生活していたからな。これぐらい消費したぐらいなら問題ない。

「そう、ならよかったわ」

輝夜はホツとした様子で言った。

「姫、お師匠様、ミコトさん！ご飯ができましたよ！」

鈴仙が食事の準備が出来たことを教えに来た。

「ありがとうドング。姫、ミコト行きましょう」

「ああ(ええ)」

俺たちは食事を摂りに屋敷の中に戻った……………永遠亭での最後の夕食を摂るために。

「あ、きたきた、早く座って」

居間に着くとてゐが座って待っていた。机にはこの一週間の中で最も豪華で最も多くの料理が並べられていた。

「今日はすごいぶん豪華なのね」

輝夜が机の上の料理を見て言った。

「そりゃあもう、鈴仙ってばミコトさんが永遠亭で摂る最後の食事だからって言うてすごい張り切ってたから」

「ちよ、ちよつとてゐ！そういうてゐだつて普段は何もしないのにミ

「コトさんのためだって手伝ったじゃない！」

「そ、それは言わないでよ！」

「そうか。二人は俺のために……」

「鈴仙、てる。ありがとう」

「／／／／／／／／／／」

俺が礼を言うのと鈴仙とてゐるは顔を赤くした。一体どうしたんだろう？

（………最後か）

「姫、どうかされましたか？」

「なんでもないわ永琳。それじゃあ食べましょう」

「そうね。じゃあ……」

「」「」「いただきます」」「」

俺たちは食事を始めた。食事中は皆他愛のない話をして、笑顔だった。食べ物はかなり量の量があったにもかかわらず全ての皿が綺麗に空になった。………まあほとんど俺が食べたのだがな。左手の再生で生命力を結構消費したからそれを補おうとどんどん箸が進んだ。こうして永遠亭での最後の夕食は終へと向かっていった。

「今日も月が綺麗ね」

「………そうだな」

俺と輝夜は縁側で月を眺めながら煙管を吸っている。

「こうしてミコトと月を見ながら煙管を吸うのも今日で最後なのね」

「ああ。そうだな」

「………ねえ、ミコト」

「なんだ？」

「ここで………永遠亭で暮らさない？」

輝夜はまっすぐ俺の目を見ながら言った。

「……ありがとう。そう言ってくれて嬉しいよ。でもその話には乗れない」

「どうして?」

俺は目を閉じて。ある人物のことを思い描いた。

「……霊夢が待っていてくれるから」

「……霊夢が?」

「霊夢は俺に自分の家に住みなさいって言ってくれた。だから俺の帰る場所は霊夢のいる博麗神社なんだ。霊夢が俺に出て行くように言わない限りは霊夢と一緒に博麗神社で暮らしたい」

「……正直な話、実は自分自身どうしてここまで霊夢と共に暮らすことにこだわっているのかはわからない。ただ……霊夢に言われたときはすごく嬉しかったし……今は早く霊夢の顔が見たいとさえ思っている。なんでだろうか?」

「……そう。ねえミコト、あなたって……ごめんなさい。なんでもないわ」

「?そうか」

輝夜は俺から目を背けた。輝夜は今なんて言おうとしたんだろうか?」

「ねえミコト、もっと近くであなたの眼を見ていい?」

「ああ。いいぞ」

輝夜は近づいてきて俺の眼を覗き込んできた。ただ……想像以上に近い。鼻の先がぶつかりそうだ。

「本当に綺麗な眼ね。本物の月のよう……」

「そうか」

「……ねえミコト、私のお願ひ聞いてくれる?」

「なんだ?」

「自分の眼を嫌わないで欲しいの。ミコトの眼はとても美しいから。だから……ミコトに嫌って欲しくないの。だからお願い」

「……わかった。善処する」

「ふふ。そこは絶対に嫌わないって言うところでしょう?」

「悪いな。俺は絶対っていう言葉は使わないようにしているんだ」

そう。俺は絶対なんて言葉は俺は信じない。……そんな無責任な言葉は使いたくない。

「ミコトらしいわね。何故か納得だわ。なら……ちゃんと善処してね?」

「……ああ」

「……もう寝ましよ。ミコトも今日は疲れたでしょ?」

「……そうだな」

俺たちはそれぞれの自室に向かい眠りについた。

side 輝夜

『霊夢は俺に自分の家に住みなさいって言ってくれた。だから俺の帰る場所は霊夢のいる博麗神社なんだ。霊夢が俺に出て行くように言わない限りは霊夢と一緒に博麗神社で暮らしたい』

ミコトのあの言葉。もしかしてミコトは霊夢を……。おそろくミコトは意識しているわけではない。無意識に霊夢を……。負けないわよ。霊夢」

私は今ここにいない霊夢に対して対抗心を燃やした。

side ミコト

太陽が登って間もない時間。俺は永遠亭の玄関前にいた。

「世話になったな、皆」

「ねえミコト、やっぱりもうちよつと永遠亭にいたら？まだ左手も治ったばかりなんだから」

「そうですね！もう少し様子を見ましよう！」

神社に帰ろうとする俺をてると鈴仙が引き止めてきた。

「ダメよ二人共。ミコトの帰りを霊夢が待っているんだから。下手に引き止めたりなんかしたら・・・めっせられるわよ？」

「うっ」

二人は輝夜の言葉を聞き萎縮した。・・・一体霊夢はどれだけ恐れられているんだろうか？

「・・・ねえミコト、また永遠亭に来てくれる？」

輝夜は俺にそう言ってきた。

「もちろんだ。左手の治療費も払わないといけないし、それに・・・永遠亭のことは気に入ってるからな。また遊びに来るよ」

「本当に!？」

「また来てくれるんですか!？」

「ああ」

俺の言葉を聞いて二人はとても喜んでいるようだ。そんなに俺はなつかれたのか？

「治療費のことは払えるようになったらでいいから無理はしなくていいわよ」

「ありがとな永琳」

「気にしなくていいわ」

「そうか・・・それじゃあもう行くな」

俺は永遠亭に背を向け、神社に帰ろうとした。すると・・・

「ミコト！」

輝夜の声が聞こえたので俺は振り返った。

「・・・またね！」

輝夜は笑顔でそう言った。その笑顔は・・・神楽のものとは違う輝夜だけの笑顔だった。

「ああ。またな」

俺は輝夜にそう返して今度こそ博麗神社へと帰るために永遠亭を

発った。

side 霊夢

ミコトが永遠亭に行ってから7日目。私は……

「……はあ」

とてつもなく落ち込んでいた。まさかミコトに会えないのが生活がこんなにもきついとは思わなかったわ。

「ミコト……何してるんだろ？」

この7日間、私はほとんどミコトのことを考えていた。ミコトは何をしているのか？あの兎詐欺(てる)に変ないたずらをされていないか？鈴仙に避けられて悩んでいないか？永琳に変な薬を飲まされていないか？輝夜のわがままに振り回されていないか？……こんな具合に時間さえあればミコトのことを考え夜も眠れず昼寝もできずにいた。

そしてなにより私が恐れていることは……

ミコトが帰ってこないんじゃないかということだ。

「……い……む」

考えたくなかった。そんなことはないと思いたかった。けど……考えずにはいられなかった。

「お……れ……む」

全く有りないという話ではない。もしかしてミコトは永遠亭が居心地がいいと思ってしまっているかもしれない。そして……神社に帰ってこずにこれからずっと永遠亭で暮らそうと思っているの

かも。

「おい、れ．．．む」

あるいは．．．．永遠亭にいる誰かのことが好きになってしまったなんてことも十分に．．．

「おい！霊夢！」

「え？」

私は近くで割と私の名を呼ぶ割と大きな声を聞き顔を上げた。そこには．．．

「全く、どうして何度も呼んでるのに反応してくれないんだ？霊夢」

「ミ．．．コトなの？」

「何を当たり前のこと言っているんだ？」

「．．．．本物よね？」

「逆に聞くがどうして俺の偽物がいると思うんだ？」

間違いない。ミコトだ。私はずっと会いたいと焦がれていたミコトが目の前にいる。ミコトが．．．．帰ってきた！

ガバツ！

「ちよっ！霊夢!?!」

私は嬉しさのあまりミコトに抱きついた。

「おかえり！ミコト！」

「．．．．ああ。ただいま霊夢」

座談会

永遠亭編完結記念座談会！

それでは永遠亭編完結を祝しまして座談会を開きます！進行はこのお三方！

「ミコトだ。よろしく」

「霊夢よ」

「輝夜よ。来てあげたわ」

では早速進めていきましよう！

「それより少しいいかしら？どうして霊夢がいるのよ」

「何よ、私がいたら悪いの？」

「別にそうは言ってないわ。ただ霊夢は今回の章で出番がなかったのにこの場に来て話すことなんてあるのかが気になったのよ」

「うっ、それは・・・」

まあまあいいじゃないですか輝夜さん。霊夢さんは本小説のメインヒロイン何ですから。今回の章でほとんど出ていなくてもまだミコトさんに次いで登場回数が多いんですし。

「だそうよ、輝夜（軽いドヤが・・・もとい誇らしげな顔）」

「・・・その顔凄いムカつくわね」

「2人ともその辺にしておけ。そろそろ話を進めないとグダつくぞ？」

「わかったわ」

・・・ミコトさんの言うことは素直に聞くんですね。

「何か言った（か）？」

いえ、なにも！それでは話を進めましよう！

「また前回みたいに今回の章を一話つつ振り返るのか？」

いえ、今回は違いますよ。あれって意外と大変ですからね。今回はこの小説のメインテーマについての話をしていきますよ。

「メインテーマというと・・・」

はい。章タイトルにもなっている神楽さんと輝夜さんについてです。なぜミコトさんが輝夜さんに神楽さんの面影を見たのかという

ことですね。

「それは私も気になるわね」

「ええ。一体何でミコトは私にその神楽っていう子の面影を見たのかしら？」

それは輝夜さんが非常に神楽さんに似ていたからですよ。ただ似ていたといっても外見がではなく雰囲気が必要です。

「雰囲気だと？」

ええ。輝夜さんは神楽さんと同じく愛される雰囲気というものを持っていました。ミコトさんはその雰囲気を感じ取り輝夜さんに神楽さんの面影を見たということ。これが第一の理由ですね。

「第一っていうことはまだあるの？」

ええ。第二に輝夜さんが神楽さんと同じく誰かを愛するのを恐れていたことですね。ミコトさんは輝夜と暮らすうちにそのことに気がついたんです。そして恐れる理由こそ違えどその感情は神楽さんと同じであったためにミコトさんには輝夜さんと神楽さんが重なって見えたのです。

「そう……じゃあ2人が愛することを恐れる理由って一体なんなの？」

輝夜さんの場合は愛する人を亡くすことと愛する人に拒絶されることに対する恐怖ですね。これは輝夜さんが永遠に生き続けることから愛する人は必ず自分よりも先に逝ってしまう悲しみと自分と同じように永遠に生きる永琳さんもいつか自分を拒絶するかもしれないという不安からくるものです。

「……輝夜、あんた面倒なこと考えてたのね」

「私だって好きでそんなこと考えてたわけじゃないわ。でも自分は永遠に生きるんだって思ったら嫌でも考えさせられるのよ」

「でも、同じように永遠に生きる妹紅はそんなこと考えてなかったじゃない」

それは輝夜さんと妹紅さんの生きてきた環境の違いによるものですね。輝夜さんは昔からとにかく愛される方でしたから愛することについて考える機会が多かったです。対して妹紅さんはあまり人

付き合いをしない方なので愛することについて深く考える事がなかったんです。まあそれ故に輝夜さんのように深みにはまらず愛について一般的な考えを持っているんです（まあ実は妹紅さんにも色々あるんですがそれは今話すことではないですね）。

「ようは輝夜は馬鹿みたいに無駄に考えすぎてたつてことね」

「馬鹿みたいになってなによ！」

「否定できるのかしら？」

「うっ」

「まあ俺は輝夜の考えてたことはまるきり無駄というわけではないと思うがな。輝夜の考える事が起きないなんて言い切れないから。ただその考えに捕らわれすぎてしまったようだが」

「そうですね。ですが結果的にミコトさんと妹紅さんのおかげで吹っ切ることができたから良かったじゃないですかね。」

「そうね。そのことには本当にふたりに感謝してるわ」

「さて、それでは次に神楽さんが愛することを恐れる理由ですね。これはミコトさんから説明お願いします。」

「ああ。神楽が愛することを恐れていた理由は自分が愛することによって愛された者が変わってしまうと考えていたからだ。神楽は愛される事によってもたらされる変化が必ずしもプラスとなるものではないと理解していたからな。しかも神楽は自分の愛が特別なものだとわかっていたから余計にそう感じたんだ」

「特別？どういうこと？」

「神楽は文字通りあらゆるモノから愛されていた存在だ。彼女を愛していないモノなんてなかった。そんな神楽の愛を受けたらどうなると思う？愛されたものは自分が特別なんだと舞い上がり人格が変わるのは目に見えている」

「でもそれが悪い変化になるとは限らないんじゃない？」

「いや、俺は神楽に愛されていたからわかる。神楽の愛は精神を乱す麻薬に近い。並の人間なら精神が耐えきれずに下手をすれば人格が崩壊するほどに強いな。そうなってしまう元には戻れないだろう」

「でもそれならミコトの人格だつて崩壊するんじゃないかしら？ただでさえミコトは愛されなかったっていうんだから」

「いや、逆だよ。愛されてなかったからこそ俺は人格を崩壊させなかった……いや、崩壊しても大丈夫だったんだ」

「どういうこと？」

「……主、ここからはお前が説明してくれ」

はい。わかりやすくいえばミコトさんの人格はとつくに壊れてたんですよ。

「え？」

まあ誰からも愛されず、認められずに拒絶されて生きていたわけですからね。いくら精神力が強くても正常を保てませんよ。はつきり言つてミコトさんの精神はズタボロでそれに伴い人格も壊れてしまつていたんです。ですがそんな状態だったからこそ神楽さんに愛されることによつて壊れた人格が崩壊して逆に正常な人格に戻つていったんです。そして神楽さんもまた自分が愛してもおかしくならなかつたミコトさんによつて救われてミコトさん限定ですが愛することへの恐怖を払拭することができたんです。

「なんかややこしいけど……要はその神楽つて子がミコトを救つてミコトも神楽つて子を救つたつていうことね」

まあ端的に言うつてそうですね。

「そう……ならミコトが私を救うとしたのつて私とその神楽つて子に似た境遇だったからなの？」

それはミコトさんに直接聞いてください。

「……どうなの？ミコト」

「……確かにそれも少しある。でも輝夜は神楽に似ているだけ神楽自身じゃあないからな。俺が輝夜を救いたいと思つたのは輝夜が輝夜だからだよ」

「私が私だから？」

「面倒な言い回しね。要は輝夜が大切だと思つたからでしょ？」

「まあそうなんだろうな。確信は持てないが」

「そ、そう……ありがとう／＼／＼」

「気にするな」

いい感じですね。それではこの話が纏まったので次の話にいきますか。次に話す事と言えばやはり……今回の章で新たにミコトさんのハーレムに加わった方達についてですね！

「やっぱり話すのか……」

まあある意味この小説のメインでもありますからね！これを語らずして何を語るんですか！

「……そうか」

それでは発表しましょう！今回の章で新たにハーレムの一員となったのはこの方達！

輝夜

鈴仙

てゐ

以上のお三方です！

「まあそれはいちいち発表しなくても本編見ればわかることだけだね」

そうですね。でもこういう場で発表する事に意味があるんですよ！

「そうなのか？よくわからんな」

「……というか永遠亭にいる4人のうち3人もミコトに惚れるってやりすぎじゃない？」

確かに霊夢さんの言うとおりですね。そもそも今回の章では本来輝夜さん以外はハーレムに加わらないはずだったんです。

「そうなの？」

ええ。いくらなんでもあのおふたりまでハーレムに加わると多いかなと思ったので。

「じゃあなんであんなったんだ？」

ぶっちゃけて言ってしまうと……その場のノリですね。「ノリ？」

今回の章って結構行き当たりばったりで書いていたのでその時に思いついたことをとりあえず書こうというスタンスで進めてたんで

す。その結果……気がついたら鈴仙さんとてゐさんもミコトさんに惚れてました。

「気がついたらって……もつとしつかりしろよ」

はい。ですがこれだけははっきり言わせてもらいます……鈴仙さんとてゐさんをハーレムに加えたことに後悔はありません！

「……あつそ」

反応薄い!?

「ともかくこれでミコトのハーレムの人数が合計10人になったわね」

「まだ東方キャラ半分も出てないのにもう10人……」

そこはまあミコトさんだからですね。

「納得だわ」

「……二人共俺をなんだと思ってるんだよ」

「S級のフラグメーカー」

「……息合わせて言うほどなのか」

流石はミコトさんですね！

「……褒められている気が全くしない」

まあまあ。さてそろそろ次回から始まる新たな章について話して締めましょう！

「次回からはどんな話になるんだ？」

ずばり日常編です！次回からミコトさんの幻想郷での日常生活の話になります！

「ミコトの日常か……」

「興味深いわね。一体……」

「ミコトは何人にフラグを立てるのかしら？」

「……もう勘弁してくれ」

まあ実際にミコトさんに惚れる方は何人も出てきますがね。

「主!」

仕方ないじゃないですか。この小説はそういう仕様なんですから。そこは諦めてください。

「くっ」

さて、それでは次章予告して締めますか！

幻想郷でのミコトの日常は波乱万丈!?

教師になったり執事になったり医者になったり大忙し!?

挙げ句のはてに取材で質問責めに!?

ミコトの歓迎宴会でさえ休まらず!?

そして新たに立つフラグ！

とにかくハチャメチャな日常！

次章 東方く儂き命の理解者く

常識はずれないいつもの日常編

乞うご期待！

「次回もまたきてください（きてくれ）（きなさい）!!」

常識はずれのいつもの日常

第32話

side ミコト

目を覚ますとそこには懐かしい天井があった。

「……………そうか。俺、博麗神社に帰ってきたのか」

一週間見ていなかった天井を見て、自分は帰ってきたんだと、そして……………自分の帰る場所はここなのだと思つて改めて思った。

「……………朝飯作るか」

俺は久しぶりに博麗神社で食べる朝食を作ろうと思いき上がるうとすると……………

「ん？」

自分が寝ている布団が妙に盛り上がっているのに気がついた。

「何だこれ？」

俺は何かと気になり布団を捲る。するとそこには……………

「スウ……………」

霊夢がいた。霊夢は規則正しい寝息をたてて眠っている。

「……………」

パタン

俺は何も言わずに布団を戻した。理由は霊夢が俺の布団の中で寝ていたことに驚いたから……………ではない。もちろんそこにも驚きはしたがもつと他に驚くべきことがあったからだ。

それは眠っている霊夢の姿だ。霊夢は寝巻きではなくいつも着ている巫女服を着ている。それだけならまだいいのだが問題は……………その巫女服が乱れていることだ。胸元は大きく開かれていつも巻いていたであろうさらしが緩んでほどけかかっている……………隙間から見えそうになっている。下もスカートが大きくはだけて下着がモロに見えてしまっている。

(・・・落ち着け、俺。冷静になれ)

俺は自分に強く言い聞かせた。そしてどうしてこのような状況になっっているのか記憶を振り返る事にした。

(昨日は神社に帰って来た後、霊夢にちゃんと左手が治った事を確認させて(霊夢は30分程手を握ってきた)この一週間で永遠亭であったことを話して、気がついたら夕食の時間になったから霊夢とふたりでいつもよりも少し豪華な夕食(俺の手が治った祝らしい)を作って、ふたりでその料理を食べて、それから・・・ん?)

俺の記憶はそこで途切れてしまっていた。

(それから何があったんだ?)

俺はその先のことを必死に思い出そうとした。おそらく夕食の時に降にかあつたからこんな状況になっている筈なのだと思つたからだ。しかし、どんなに思い返してもそれ以降の事が思い出せなかった。

(何で思い出せないんだ? 一体何が・・・)

「・・・クラマ、出てきてくれ」

俺が呼ぶとクラマが黒い鈴から元の姿に戻った。

「お呼びですか? マスター」

「ああ。クラマは鈴の状態でも外の様子はわかるんだよな?」

「はい。把握しています」

「・・・昨日夕食の時に何があった?」

そう、俺がクラマを呼んだ理由は昨日何があったのを聞くためだ。ちなみにシラマを呼ばなかったのはシラマはしゃべれず説明できないからだ。

「はい。昨晚マスターは霊夢様と仲睦まじく楽しそうに食事をしていました・・・」

「ちよつと待てクラマ。何だその説明は」

「ありのままを話しているだけです?」

「・・・かいつまんだ説明でいい。何があったかだけ話してくれ」
正直さっきのクラマの説明は少し恥ずかしい。

「わかりました。昨晚、霊夢様とお食事の最中、おふたりが紫様が出し

たお酒を飲んで……………」

……………は？

「待てクラマ……………何でそこで紫が出てくる。昨日紫はいなかったはずだぞ」

「はい。直接顔を出した訳ではありませんから。マスターは能力をO F Fにしていたのでそう思われても仕方ないでしょう。紫様はスキマを開いてマスター達が用意したお酒と紫様が持っていたお酒を取り替えていました」

「……………それ本当か？」

「はい」

……………このとき、俺の脳裏には幻想郷初日の夜の出来事がよぎった。紫が出した酒を飲んだ霊夢と藍の対処をしたあの日のことを。もしかしなくても紫が置いていった酒はあの時と同じ酒だろう。

「クラマ、俺と霊夢はその紫が出したっていう酒を……………」

「はい、飲みました」

「……………どうなった？」

「完璧に酔っていらつしやいました」

……………やはりか。紫の奴本当に何考えてんだよ。

「クラマ、その後俺と霊夢は……………いや、やっぱりなんでもない」
俺は酔った状態で霊夢に何をしたのか聞こうと思ったがやめた。……………情けないが聞いたら後に引けなくなると思ったからだ。

「心配しなくても大丈夫ですよ。マスター」

そんな俺に対してクラマは心配ないと言ってきた。良かった、どうやらマズい事にはなっていない……………

「霊夢様は悦んでいましたから」

……………全く良くなかった。問題大ありだ。

「何さらりと爆弾発言してんだお前は！」

マズい。マズいマズいマズい！俺は一体霊夢に何をしたんだ!?何をしてしまったんだ!?

(落ち着け、落ち着くんだ俺！冷静になれ！)

「3. 1 4 1 5 9 2 6 5 3 5 8 9 7 9 3 2 3 8 4 6 2 6 4 3 3 8 3 2
7 9 5 0 2 8 8 4 1 9 7 1」

俺はなんとか冷静になろうと円周率を暗唱した。正直何でそんなことをしているのかわからないが 間違いなく混乱していたのだろう。

「うん」

俺が必死に落ち着こうとしていると霊夢が目を覚ました。

「あ、おはよう。ミコト」

霊夢は起き上がり呑気に寝ぼけ眼で挨拶してきた。 もちろん服は乱れたままだ。

「あ、ああ。おはよう霊夢」

「うん」

霊夢はまだ眠たいようでもぼんやりとして目をこすつている。 そんな霊夢を見て心の底から可愛いと思ってしまうている俺は確実に平静を保てていないのだと思った。だがしばらくすると

「あれ? どうしてミコトが私の布団の中にいるの? 」

どうやら意識がはつきりしてきたようで霊夢は現状に疑問を抱き始めた。 まあ正確には霊夢が俺の布団で寝ていたんだけどな。

「おはようございます。霊夢様」

そんな霊夢に対してクラマは当然のように挨拶をした。

「おはよう ってクラマ、あなたどうして表に出てきてるの? 」

霊夢は普段鈴の姿をしているはずのクラマが表に出てきていることの少々驚いているようだ。

「マスターに呼ばれたからです。それより霊夢様。着衣が乱れていますので整えた方がいいですよ」

「え? 」

クラマに言われて霊夢は自分の姿を確認した。そして自分の現状を理解した霊夢は顔を真っ赤にし

「きゃあああああ！」

霊夢は悲鳴を上げ、俺に弾幕を放ってきた。……俺はその弾幕に飲まれて意識が閉ざされていくのを感じた。

「本当にごめんなさい」

あれからしばらくして意識が戻った俺に対して霊夢は非常に申し訳なさそうに謝った。

「いや、気にしなくていい。あんな状況だったんだから仕方がない」

「でも……」

「気にしなくていいって言ってるだろ？俺は気にしていないし。それに悪いのは……」

「……そうね、元はといえば元凶は……」

「紫だ（ね）」

紫……次に会ったら覚えてろよ？

「ところでミコト……あなたは本当にお酒を飲んだ後の事は覚えてないのよね？」

「ああ。全く覚えていない。一体何が「気にしなくていいわ」

霊夢は俺の最後まで言い終わる前にそう言った。どうやら霊夢は俺が気絶している間にクラマに酒を飲んだあと何があったのかを聞いたらしい。ただ俺が聞いても詳しいことを教えてくれない。クラマに聞こうとしても顔を真っ赤にして止めてきた。まあ霊夢が言うには……そういうことには至っていないようだ。その点は本当に良かったのだが……

「なあ霊夢。やはり気にな「気にしなくていいわ」

「いや、でも「気・に・し・な・く・て・い・い・わ」……わかっ
た。気にしないでおう」

「……本当に何があつたのだろうか？気にはなるが霊夢から聞
き出すのは無理そうだから俺は気にしないことにした。」

「さて、それじゃあ朝ごはんにしましょ」

「……昼食の間違いじゃないか？」

「……そうね」

今の時間は大体13時……既に昼過ぎだ。どうやら朝の騒動
で相当時間を取られてしまったらしい。そもそも俺が起きた時既に
11時だったのだ。まさか起きるのが遅くなるほど酔っていたなん
てな。二日酔いになっていないのが唯一の幸いだ。

「いただきます」

14時になって。ようやく俺と霊夢は二人で作った遅めの昼食を
摂ることができた。

「随分遅くなってしまったな」

「そうね……それもこれも紫のせいだわ。絶対に退治してやるわ」

「その時は俺も全力で手伝おう」

「頼むわ」

俺と霊夢は次にあつたら必ず紫を退治しようと心に強く誓った。

「と、そうだ麗夢。俺明日からいろいろ出かけることになるから」

「出かける？どこに？」

「紅魔館とか寺小屋とか永遠亭とかにだな。左手が治つたらレミリア
達に会いに行くことになってたし、慧音と子供たちに勉強を教える約
束もしたし永琳に左手の治療費を払わなきゃいけないからな」

「そう。色々やることがあるのね」

「ああ。それと幻想郷を見てみたいっていうのもあるな」

結構長いこと経った気がするけど俺が幻想郷にきてまだほんの2週間ちよつとしか経ってないからな。まだ見てない所とか行つてみたい所がたくさんある。

「ふうん。まあいいけど、その代わりやることはちゃんとやってよ?」

「ああ。わかってる」

「それと……ちゃんと夕食前までには帰ってくるようにしてね?」

霊夢はどことなく不安そうな顔でそう言った。……もしかして俺が1週間永遠亭で暮らしてる間寂しかったのだろうか?

「ああ。ちゃんと帰ってくるよ。俺の帰る家はここだからな」

「そう。ならいいわ」

俺が答えると霊夢はどこか嬉しそうな表情をした。

その表情を見て俺も嬉しく感じた。

第33話

side ミコト

「……………相変わらずの紅さだな」

俺は今紅魔館の前に立っている。レミリア達に俺の左手が治ったことを報告するために来たのだ。

「さて、入るか」

俺は紅魔館に入るために門に近づいた。すると……………

「すう……………すう……………」

そこには門に寄りかかって立ったまま寝ている美鈴の姿があった。

「……………また寝てるのか」

以前異変を解決するために紅魔館に来た時も寝ていたな。そのことを咲夜に散々説教されていたのに懲りない奴だ。……………そうだ

「ん……………あー、あー」

俺はあることを思いつき声の調節をした。そして……………

「何をしているのかしら、中国？」

咲夜の声色を真似して美鈴にそう言ってみた。

「ひゃあーごめんなさい咲夜さん！どうかナイフだけは勘弁してくださいー」

すると美鈴は飛び起きて土下座して謝ってきた。その動作は流れるように美しく全くの無駄がなかった。さすがは美鈴といったところだ。

「本当にすみません。もう二度と仕事中に寝ませんからどうかご慈悲を……………」

美鈴が顔を上げ俺の顔を見て固まった。

「あ、あれ？ミコトさん？咲夜さんは……………」

「ああ。さっきのは俺だ。そんなに似てたか？」

「……………え？」

美鈴はポカンと口を開けて唾然としている。しばらくそうしているとワナワナと体を震わせて……………

「なんてことをしてくれるんですかミコトさん！本当に心臓が破裂す

るかと思っただんですよ」

俺に怒鳴ってきた。

「いや、そもそも美鈴が寝てなければよかった話だろ？それとも本当に咲夜に見つかったほうが良かったか？なんなら咲夜に報告しておくけど」

「ごめんなさい。私が悪かったです。どうかそれだけは勘弁してください」

美鈴はすぐさま無駄のない動きでまた土下座してきた。．．．．その反応速度にはある意味尊敬できるものがあるな。

「．．．．．というかなんで門番なのに寝てるんだよ」

「いや、だって門番の仕事ってすぐく暇で．．．．．どうしても睡魔に勝てなくて寝ちやうんですよね」

「．．．．．そうか。ところで美鈴．．．．．すまないな」

「?なんで謝ってるんですか?」

「．．．．．後ろ見てみる」

「え?」

美鈴は後ろを振り返った。するとそこには．．．．

「．．．．．(ニコニコ)」

ものすごい(黒い)笑顔をした咲夜が立っていた。

「さ、咲夜．．．．．さん?」

美鈴は咲夜の姿を確認すると顔を真っ青にした。

「中国、あなたは今までそんな不真面目な態度で門番の仕事していたのかしら?」

「え、あ、あの．．．．．」

「．．．．．少し反省してもらわないといけないわね」

咲夜はスラリと数本のナイフを取り出した。

「ご、ごめんなさい!これからは絶対に寝ません!どうか許してくださいー!」

美鈴はまたしても美しいフォームで土下座をする。．．．．まさかこんな短時間に同一人物の土下座を三回も見ることになるとはな。

「……………中国」

咲夜は笑顔で美鈴に声をかけた。

「咲夜さん……………」

美鈴は咲夜が許してくれたのだと思ひ顔を綻ばせる。だが……………
「覚悟しなさい♪」

「は、ははは……………」

咲夜は全く許していないようだ。美鈴はもはや笑うしかないよう
だ。

「幻符『殺人ドール』!!」

「きゃあああああ!」

美鈴は咲夜が放った夥しい量のナイフを受け、そして……………

「きゆうく……………」

ものの見事に気絶した。

「……………なあ咲夜。流石にやりすぎじゃあないか?」

「大丈夫よ。中国は体が丈夫だから」

「いや、ボロボロになってるんだが。全く大丈夫そうに見えないぞ」

「そんな事よりよく来たわねミコト。お嬢様も妹様も待つてたわよ」

そんな事よりつて……………流石に美鈴が哀れに思えてきた。

「左手はもうすっかり元通りみたいね」

咲夜は俺の左手を見ながら言った。

「ああ。この通りな」

「お嬢様達もきつと喜ぶわ。それじゃあ屋敷に入りましょう」

「と、ちよつと待つてくれ」

俺は屋敷に入るように促した咲夜に少し待つように言つて美鈴に
近いた。そして美鈴の傷を能力を使って直した。まあ流石に意識ま
では戻せないけどな。

「わざわざそんな事する必要ないわよ?」

「いや、流石に目の前でボロボロになってるのを放つては置けないか
らな」

それに美鈴がこうなつたのつて俺にも責任があるから何だよな。
俺が聞かなければ美鈴は咲夜にやられずにすんだかもしれないし。

「相変わらずのお人好しね。まあ、あなたらしいけど」

相変わらずって……まだ会って間もない咲夜にそこまで言われる程俺はお人好しなのか？しかもでは全くそんなことないと思うんだが……

「さて、いい加減そろそろ行きましょう」

「そうだな」

俺は咲夜と共に門をくぐって屋敷の中に入って行った。

「……………ようやく着いたか」

15分程歩いて、ようやくレミリア達の大広間の前に着いた。

「前も思ったが広くしすぎじゃないか？ここまで広いと不便だろ」

俺は屋敷の中の広くしている張本人である咲夜に聞いた。

「私もそう思ったのだけれど、お嬢様が屋敷の広さは主の心の広さを表すからとにかく広くしろと言っていたので……………」

……………今胸を張って堂々と言い張るレミリアの姿が思い浮かんだ。なんとというか……………見た目相応に子供っぽいような気がする。

コンコン

「お嬢さま。咲夜です。ミコトを連れて参りました」

俺がレミリアの子供っぽさについて考えていると咲夜は扉をノックして俺が来たことをレミリアに知らせた。すると……………

「ミコトが!?!ちよつと待つてー!」

レミリアは少し待つように言ってきた。一体何をしているんだ？

「なあ咲夜、レミリアは何をしているんだ？」

「さあ？私にもわからないわ」

「……………もういいわよ」

しばらくしてようやくレミリアからの許可が下りた。俺と咲夜は扉を開けて部屋に入る。部屋の奥には大きな椅子に座っているレミリアがいた。

「ようやく来た「お兄様」!!」

レミリアの言葉を遮って、フランが物凄い勢いで俺の方に飛び込んできた。

「お兄様！ようやく来てくれた！私待ちくたびれちゃったよ！」

フランは明るい笑顔を向けて俺に言った。

「そうか。待たせてごめんな、フラン」

俺は左手でフランの頭を撫でながら言った。

「お兄様左手!!」

「ああ、この通り元通りに治ったよ」

「よかった」

フランは左手が治ったのがわかると。更に笑顔になって抱きつく力を強くした。……正直強すぎて肋骨が折れそうだ。

「……」

ふとレミリアの方を見ると……レミリアは目に涙を溜めている。おそらく話そうとしていたのにフランに遮られたからだろう。

「フラン、ちょっと離れてくれるか？」

「うん」

俺は抱きついているフランを離してレミリアに近づいた。そして……

「待たせて悪かったな。レミリア」

視線をレミリアに合わせて頭を撫でながらそういった。

「ニコト……って何やってるのよ!？」

レミリアははじめは嬉しそうに目を細めていたが、急に顔を赤くして怒り出した。

「何って……レミリアの頭撫でてるだけだけど？」

「子供扱いしないでよ！」

「悪い悪い。でも今にも泣き出しそうなレミリア見るとつい子供っぽ

「それでミコトは賭けに勝ったから咲夜に料理を教わるつもりなんですよ?」

「ああ。今日はその為に来たっていうのもあるからな」

「……はつきり言うわ。ダメよ」

「……はっ」

「何がダメなんだ?」

「咲夜に料理を教わることがよ。咲夜は私の従者よ。主の断りもなく決めたことを認めるわけにはいかないわ」

「……まあ言ってることもわからなくはないが。」

「……ただし、私が出す条件を受けるといふなら認めてあげないこともないわ」

「条件?なんだそれは?」

「ミコト……」

紅魔館の執事になりなさい」

「……はい?」

第34話

side ミコト

「はあ!?!紅魔館の執事!?!」

紅魔館での話が終わった後、俺はひとまず神社に帰って来た。レミア達には泊まっていけと言われたが霊夢と夕食までには帰って来ると約束していたからな。そして今は霊夢と夕食を食べながら紅魔館でのことを霊夢に話している。

「何でそんなことになってるのよ?」

「まあ成り行きでな」

「どんな成り行きよ……それで?まさかその話受ける気?」

「ああ。何事も経験だし。やってみようと思う」

「やってみようと思うって……じゃあミコトはこれから紅魔館で暮らすの?」

霊夢は不安そうな顔をして聞いてきた。

「いや、執事になると言ってもたまにの話だ。せいぜい月に3、4日程の事だから紅魔館で暮らすつもりはない」

まあレミアには毎日紅魔館で執事として尽くしてほしいと言われたがな。さすがに霊夢の断りもなくそんなこと決められないし、何より俺自身博麗神社で暮らしていたいと思ってるしな。

「そう。ならいいわ」

俺が紅魔館で暮らさないと聞いて霊夢はホッとした様子だ。そんなに俺って霊夢に重宝されているのか?

「とりあえず明日から3日くらい紅魔館で働くことになっている。その間は神社に帰ってこられないけどいいか?」

「ええ。わかったわ」

ひとまず霊夢からの許可が得られた。

「すまないな霊夢。帰って来たばかりなのに神社のことあまり手伝えなくて」

「まあそのことはいいわよ。帰ってきたらその分働いてもらうから」

「ああ。もちろんだ」

「それと……」

翌日、俺は再び紅魔館を訪れた。今この場には俺、レミリア、咲夜、そして……

「何で霊夢までいるのよ」

なぜか霊夢もいる。

「何よ？何か問題ある？」

「問題も何も私はあなたを招待した覚えないんだけど？」

レミリアは怪訝そうな顔をして言った。

「別にいいじゃない。あと今日は泊まつてくから」

「はあ!?何勝手に決めてるのよ!」

「あら？まさか紅魔館の主はそんなことも許せないほど心が狭いのかしら？」

「うっ……一体どういうつもりで紅魔館に泊まるつもり？」

「別に。ただの気まぐれよ」

(まあミコトの執事姿が見たいからなんだけどね)

(絶対にミコトが理由ね)

「はあ。わかったわ。特別に許可してあげるわ」

「わかればいいのよ」

こうして霊夢は今日紅魔館に泊まることになった。

「ところでレミリア、執事の仕事って何やればいいんだ？」

霊夢とレミリアの話が一段落したので俺は肝心な事をレミリアに聞いた。

「基本的には掃除とか食事の用意をしてもらうことになるわ。詳しいことは咲夜に聞きなさい。それと……咲夜。ミコトにあれを渡しなさい」

「はい」

レミリアの指示を受け、咲夜は俺に袋を渡した。

「これは？」

「制服みたいなものよ。紅魔館で働く時はそれを着なさい」

どうやら袋の中身はいわゆる執事服というやつのような服なのか気になり袋の中身を見てみた。そこにあつたのは……

「……レミリア、これはなんだ？」

「だからあなたの制服よ」

「それはわかっている。俺が聞きたいのは

なぜ俺の制服がメイド服なのかだ」

そう。袋の中身は執事服ではなくメイド服だった。しかも咲夜がきているものではなく……なぜか肌の露出部分が多いものだった。

「色々考えてみたけどミコトが一番似合いそうだったのはそれだよ。だからそれを着てちょうだい」

……プチッ!

笑みを浮かべているレミリアのその言葉を聞いて俺の中で何かが切れるのを感じた。

「……レミリア。少し話をしようか？」

「え？」

side 霊夢

(レミリア……やってしまったわね)

今私の目にはレミリアを正座させて説教しているミコトの姿が映っている。

「れ、霊夢。ミコトは一体どうしたのかしら?」

その様子を見ていた咲夜が少し顔をひきつらせて聞いてきた。

「ミコトは女と間違えられたり女の格好をさせられるのを嫌ってるのよ。詳しくは聞いてないけど女っぽい顔のせいで外の世界で色々あったみたいよ」

「それで説教しているのね」

「ええ。あんなつたらもう止めるのは無理ね」

「そう……」

咲夜はどこからか袋を取り出した。

「何?その袋」

「……ミコトのために用意した執事服よ」

「……は?じゃあさつきミコトに渡したのは……」

「……お嬢様が冗談のつもりで用意したものよ」

レミリア……あんた本当に何やってるのよ。

「……これどうしましょう?」

「ミコトに渡せばいいじゃない」

「……今行ったら私も説教を受けそうね」

「受ければいいじゃない。あんたの主人は進行形で受けてるのよ」

「……いくら私でもあれはちよつと」

……咲夜。あんた本当にレミリアの従者なの?まあミコトの説教を受けたくないっていう気持ちはわかるけど。私も二度と受けたくないし。

「咲夜」

「!な、何かしらミコト?」

レミリアへの説教を終えたらしくミコトはこちらに来た。ちなみに説教を受けていたレミリアは……
「……」

疲れたようでごったりしている。

「レミリアに聞いたがちゃんと用意してある執事服を持ってるんだよな?」

「え、ええ」

「渡してくれ。着替えてくるから」

ミコトは服を渡すように行ってきた。

「……私には説教しないのかしら？」

「レミリアに悪いのは自分だから咲夜には説教しないでくれて涙目で言われたからな。流星にそんな風に言われたら説教なんてできない」

「……お嬢様」

咲夜は申し訳なさそうにぐったりしたレミリアを見つめた。

「咲夜。早く渡したら？」

「そうね。はい、ミコト」

咲夜はミコトに服を渡した。

「ん。それじゃ俺はそこらへんの部屋で着替えてくるな」

そう言つてミコトは着替えるために部屋から出ていった。

「お嬢様。大丈夫ですか？」

咲夜はミコトが部屋から出ていくとすぐにレミリアに駆け寄った。

「うく……えらい目にあつたわ」

「自業自得ね。冗談でもあんなことするからよ」

「仕方ないじゃない。面白いことになると思つちやつたんだから」

「……本当にそれだけかしら？」

私は他の理由があるのではないかと思ひ聞いたみた。

「……少しだけミコトのメイド服姿が見たいとも思つたわ」

「……私も思つたわ」

レミリアと咲夜は少し顔を背けていった。

「はあ、そんなことだろうと思つたわ」

「だ、だってミコトのメイド服姿よ！みたいに決まってるじゃない！」

レミリアは開き直つて力強く言った。

「まあ気持ちはわからないでもないけど……見れなくて幸せだったかもしれないわよ」

「?どういうことよ」

レミリアは疑問に思つたらしく首をかしげて聞いてきた。

「私も前にミコトに女物の服着させようとしたんだけど……」

「ちよつと待ちなさい。ミコトは女の格好させられるのが嫌いなんですよ？説教されなかったのかしら？」

「……されたに決まってるでしょ。そのことは思い出させないで」
あれは……私の人生で思い出さたくない記憶ベスト3に入るほどのトラウマだったわ。

「……ごめんなさい。話を続けて」

「ええ。それで強引に頼み込んでなんとか着てもらったの。その服はすごく似合っていたんだけど……」

「けどどうしたのよ？」

「……私の女としての自信がいろいろと崩れ去った瞬間だったわ」

「……そんなに？」

「……ええ」

あの時は一緒にいた魔理沙と思わず膝をつくほどショックだったわ。

「それは……ある意味見られなくてよかったかもしれないね、お嬢様」

「そうね……」

「私も同感だわ。次ミコトの女装姿を見たら……立ち直れない気がするもの」

「……」

私たち三人の間に何とも言えない空気が流れた。

「三人とも……なぜ暗くなっているのですか？」

そんな空気を醸し出しているとミコトの声が聞こえてきた。

「あ、ミコトもう……」

私はミコトにもう着替え終わったのかと聞こうとしたがその先の言葉が出てこなかった。

振り返った私の目に映ったのは黒いスーツのような服に黒いネク

タイ（イメージは黒執○のセバス○ヤン）をつけたミコトだった。

「……」

ミコトの姿を見た私たち三人はすぐさま視線をそらした。レミリアと咲夜は顔を赤くしている。自分では見えないが私も顔が赤いだろう。

(こ、これは・・・)

(想像以上の破壊力ね)

(まさかここまでとは私も思いませんでした)

私たちはミコトに聞こえないように小声で言った。はっきり言って今のミコトはヤバイ。本当に。いい意味でヤバすぎる。とにかくカッコよすぎる。

(・・・あの服ってレミリアが選んだの?)

(ええ。そうよ)

(よくやったわレミリア。あなたのセンス最高よ)

(流石はお嬢様です)

(ま、まあ当然ね。私も自分で自分を褒めてやりたいわ)

「三人とも先程からどうされたのですか？ 様子がおかしいですけど？」

「ここそとしている私たちを不思議に思ったのかミコトが聞いてきた。」

「な、なんでもないわ。それよりもミコト、その口調どうしたの？」

「はい。これから三日間執事として過ごすことになりますので、まずは口調からでもしっかりしようと思ったのですが・・・おかしいでしょうか？」

「そ、そんなことないわ。いいと思うわよ」

「ありがとうございます霊夢様」

(・・・マズイ。これ私のツボに完全にはまってる)

私はしばらくの間執事ミコトを直視できなかった。

第35話

side 咲夜

「それじゃあまずは屋敷内の掃除からね」

私はまずはミコトに掃除の仕方を教えようとしていた。ただ……..

「わかりました。咲夜さん」

…….. 本当にこれは慣れないわね。

「ミコト、私の前でその口調と呼び方はやめてくれないかしら？」

お嬢様と霊夢は気に入っていたようだけど私には違和感があります。ぎて妙な感じなのよね。

「ですが私は今はこの紅魔館に仕える身。私にとって咲夜さんは先輩にあたります。先輩に敬意を表するのは当然だと思えますが？」

ミコトって形から入るタイプなのね。少し意外だわ。

「その先輩がやめてほしいと言っているのよ。だからやめなさい」と言われましたも……..

そのうえ結構頑固ね。…….. 仕方がない。私が早めに慣れるしかなさそうね。

「…….. はあ。わかったわ。もうその口調のことは何も言わないわ」
「ありがとうございますいます咲夜さん」

ミコトはニコリと微笑んでいった。…….. 性格まで変わってないかしら？

「それじゃあ始めましょう」

私は時計を取り出した。

「能力を使うんですか？」

「ええ。この広い屋敷を私とあなたのふたりで掃除するんですもの。時間を止めなければやってられないわ」

「私と咲夜さんのふたりで？確かこの屋敷には他にも妖精のメイドがいましたよね？彼女たち掃除はしないんですか？」

「ええ。あの子達は基本的に自分たちのことしかしないで屋敷の仕事はほとんど何もしてないのよ。はっきり言ってあまり役には立たな

いしあてにしていけないわ」

だからたまにでもミコトが紅魔館の執事になつてくれたのはすごく助かるのよね。

「……屋敷の仕事をしていないのに何故彼女たちはメイドとして屋敷にいるのですか？」

「……それは私にもわからないわ。まあさっきも言ったけどあの子達は自分のことは自分ですから邪魔にならないし基本的に無給だから特には気にしていないわ。万が一侵入者が来た時には一応戦つてくれるみたいだし」

「あく……そういえば前に私達が屋敷に侵入したとき確かに襲いかかってきましたね。……あまり問題になりませんでした」

まあ所詮は妖精だから弱くても仕方がないわね。

「さて、話はここまでにしていい加減始めましょう」
「はい」

私は能力を使って私とミコト以外の時間を止め、掃除を開始した。

始めてから4時間ほどして（実際に時間は経っていないが）掃除は終わった。

「ふう。ようやく終わりましたね。さすがにこの広い屋敷の掃除は少し骨が折れます」

「……ねえミコト」

「なんですか咲夜さん？」

「あなた、随分掃除に手馴れていないかしら？」

正直始めは教えるのに時間を割くことになると思っていたけれどミコトは掃除の仕方を分かっているようで私が教えることはほとんど何もなかった。おかげでいつもよりも遥かに早く掃除が終わった。

「慣れていきますからね。これくらいなら問題なくできますよ」

(慣れている?)

私はミコトのこの言葉に僅かな疑問を抱いた。はつきり言ってミコトは手際が良すぎる。それは慣れていているというレベルではない。私のように従者でもない限り、普通に生活しているだけでここまでできるようになる必要があるだろうか？

(ミコト、あなたは一体どんな生活をしていたの?)

「咲夜さん。次は何をすればよろしいのでしょうか？」

「えっ？」

ミコトに対して思いを馳せていた時に話しかけられ私は思わず間の抜けた声を出してしまった。

「?どうしたんですか、咲夜さん？」

「な、なんでもないわ。次はベツトメイキングよ」

「はい。わかりました」

私は誤魔化すようにミコトに次の仕事の内容を言った。

(.....本当に手際がいいわね)

ネットメイキングをするミコトを見ながら私は改めて思った。一つ一つの動作が丁寧かつ速い。もちろん私もミコトと同じくらい.....いや、それ以上にこなせる自信はある。しかし私が今のミコトのようにできるようになるまでに少なくとも2年はかかっただろう。ベツトメイキングは見た目以上に手間な作業なのだ。

「咲夜さん?どうしたんですか?先程からぼんやりされていますけど?」

「な、なんでもないわ」

私としたことが、ミコトに気がいってしまつて仕事をおろそかにしてしまふなんて。メイド長失格ね。

「……失礼します」

「え？」

ミコトは私の額に自分の額を押し付けてきた。

「なっ!？」

私は突然のことに驚きを隠せなかった。今ミコトの顔が私の目の前にある。私は自分でもわかるくらいに顔が赤く、熱くなるのを感じた。

「……少し熱いですね」

ミコトはそう言つて額を離れた。

「あつ……」

「どうしました咲夜さん？」

「な、なんでもないわ!」

……さすがにもつとああしていたかつたとは言えないわね。

「そうですね。それより少し熱がありますよ。今日はよくぼんやりしていましたし無理せずに休んだらどうですか？」

ミコトは心配そうにそう言つてきた。

「だ、大丈夫よ。問題ないわ」

「ですが顔も赤いですよ?無理して体を壊してしまつてはレミリアお嬢様が心配なされでしょうしやはり休んだほうが」

「大丈夫と言っているでしょう。しばらくすれば治まるわ」

ぼんやりしていたのも熱があるのもミコトが原因だもの。

「……わかりました。ですが辛くなつたらすぐに休んでくださいね?決して無理はしないでくださいね」

「ええ。わかつているわ」

ミコトに返事を返して私達はベットメイクに戻つた。

「これでベツトメイク終了ですね」

「ええ。そうね」

しばらくして私達はベツトメイクを終えた。ただ……ベツトメイクは掃除と違ってミコトがいるにも関わらずいつもより時間がかかってしまった。というのもミコトと額を合わせてからミコトに目がいつてしまい仕事がかどらなかつたのだ。しかも今のミコトは執事服姿、一度意識しだしてしまつたらどツボにはまつてしまい目が離せなくなつてしまうのだ。私もまだまだだね。

「さて、次の仕事はなんですか？」

「次つて……あなた疲れてないの？ずっと動きっぱなしでしょう？」

「大丈夫ですよ。これくらい大したことありません」

ミコトは何も問題はないといった感じだ。実際に表情から余裕が伺える。

「それに咲夜さんも休んでいないじゃないですか。先輩が休んでいないのに私が休むわけにはいきませんよ」

「……執事になつてもミコトの律儀さは変わらないわね。」

「それじゃあ次はお嬢様と霊夢のお茶の準備をしましょう」

今日は霊夢も客としてきているから霊夢の分も用意しないと。

「お茶の準備ですか……」

ミコトは顎に手を当て何かを考えるぞぶりを見せた。

「どうしたのミコト？」

「……咲夜さん。少しお願いがあるのですが」

「お願い？何かしら？」

「はい。お願いというのは……」

「お嬢様、靈夢。お茶の準備が出来ました」

「ご苦労様。咲夜、ミコト」

私はお嬢様と靈夢の前に紅茶を差し出した。

「こちらもどうぞ」

そしてミコトはお嬢様と靈夢の前に生クリームを添えたシフォンケーキが乗った皿を置いた。

「あら？このケーキは？」

「お茶請けとして作らさせていただきましたきまいた」

「ミコトが作ったの？」

「はい。咲夜さんをお願いして作らさせていただきました」

そう。ミコトのお願いというのは厨房を貸して欲しいというものだった。

「そういえばミコトってお菓子作りが得意だって言ってたわね」

「はい。手前味噌ですがお菓子作りならそれなりに自信がありますので」

「そう。それじゃあいただくわ」

お嬢様と靈夢はフォークで一口大にしたケーキを口に含んだ。

「！美味しい・・・」

「さすがミコトね」

どうやらお嬢様と靈夢の口にあったようだ。二人は本当に嬉しそうに笑みを浮かべている。その気持ちは私にもよくわかる。私もさつき味見させてもらったからだ。ミコトの作ったシフォンケーキは本当に美味しかった。特に生クリームは絶品で甘すぎないでシフォンケーキをうまく引き立てていた。

「咲夜が淹れてくれた紅茶にもよくあうわ。やるわねミコト」

「お褒めの言葉ありがとうございますレミリアお嬢様。今回は時間があまりありませんでしたので簡単なものになってしまいましたですが次

回はきちんとしたものを用意させてもらいます」

「こ、これで簡単のものなんだ」

ミコトにとってこれが簡単なものだと思い、霊夢は驚いた表情をした。

「ええ。霊夢様にも帰ったら私のとおきを作らせていただきます」

「ふふ。楽しみにしているわ」

霊夢はさらに嬉しそうな表情をして言った。よほど楽しみなのでしょうかね。

「私も次を楽しみにしているわよ」

「はい。レミリアお嬢様」

（お嬢様も心から楽しみにしているようね。……正直お嬢様にあんな表情をさせられるミコトが羨ましいわ）

……この時、私はミコトからお菓子のレシピを聞こうと心に決めた。

第36話

side 咲夜

私は今ミコトと共に夕飯を作っている。約束したとおりミコトに料理を教えようと思ったのだが……

「咲夜さん、味見をお願いしてよろしいでしょうか？」

「ええ。わかったわ」

私はミコトの作った料理を口に含んだ。

「……うん。美味しいわよ」

「本当ですか？」

「ええ」

「そうですか。良かったです」

ミコトは自分が作った料理が褒められて嬉しいようで笑顔になっている……正直この笑顔はある意味凶器だと思う。

「それにしても、ミコト十分料理できるじゃない。私が教えることなんてないわよ」

事実ミコトは無駄のない動きで料理を作っていた。

「そんなことありませんよ。咲夜さんが料理を作るところを見るだけでも私には十分に勉強になったのですから」

ミコトはそう言ってくれた。でも……正直私はミコトのすぐ近くにいることで変に緊張してしまい平静を保ちながら料理を作るのに必死だったからいつもどおりに料理ができているのか自信がなかった。

(……メイドとして私はまだまだ未熟ね)

ミコトに意識がいつて自分の仕事に集中できないなんて。これじゃあ紅魔館のメイド長失格だわ。

「……はあ」

「ため息なんてついてどうかしましたか？咲夜さん」

思わずため息をついてしまった私にミコトが心配そうに声をかけてきた。

「なんでもないわ、気にしないで。さて、料理もできたから夕食にしま

しょう」

「そうですね」

「それじゃあ私は料理を運んでおくから、ミコトは妹様を呼んできてもらえるかしら？」

「わかりました」

「お願いね。妹様がいる場所は覚えているわね？」

「ええ。覚えています。それでは行ってまいります」

ミコトは妹様を迎えに行った。それにしても……今度からミコトと料理をするときは心の準備をしておく必要があるそうね。

side フランドール

「はあ……退屈だな」

私はベットに寝ころがって暇を持て余していた。

「お兄様……どうして来てくれないの？」

お兄様は今日から紅魔館で執事として働くことになっている。それなのに……来ない。

「……約束したのに」

昨日お兄様は私と遊んでくれるって約束してくれた。それなのに
お兄様は来てくれない。お兄様が来るって聞いたからいい子にして
部屋で待ってたのに。

「……お兄様」

お兄様は……私のことなんてどうでもいいのかな？私のことなんて……
嫌いなのかな？だから遊びに来てくれないのかな？

「お兄様あ」

そう思うとすごく悲しくなってきた。私を苦しみと悲しみから救ってくれたお兄様。私にとって本当の兄のように大切なお兄様。

そんなお兄様に嫌われたら私は……
「うう……」

私は思わず泣きそうになった。そんなとき……
コンコン

誰かが入り口のドアをノックしてきた。そして……

「フランドールお嬢様、御夕食の準備ができました」

「!!」

扉の向こうから聞こえてきたのはお兄様の声だった。私は急いで入り口の扉を開き……

「お兄様！」

お兄様に飛び込んだ。

「と、フランドールお嬢様。いきなり飛び込んできては危ないですよ」
お兄様は私を受け止めながら注意してきた。でもそんなことより……

「お兄様、どうして遊びに来てくれなかったの？ 私いい子にして待ってたんだよ？」

今はこっちの方が大切だ。

「申し訳ございませんフランドールお嬢様、色々とやることや覚えることが多くなかなかこちらに赴く時間を確保できませんでした」

お兄様は本当に申し訳なさそうな顔をして謝ってきた。

「お兄様忙しかったから来れなかったの？」

「ええ」

「そっか。それなら仕方ないね。許してあげる」

「ありがとうございます、フランドールお嬢様」

良かった。私お兄様に嫌われてた訳じゃないんだ。

「ところでお兄様。その口調どうしたの？ 何だか咲夜みたい」

「はい。私も今は咲夜さんと同じく紅魔館に仕える身ですので。咲夜さんを真似てみたんです。おかしいでしょうか？」

「ううん、おかしくなんてないよ！ その服もすごく似合ってる！ かわいいよー」

「そうですか。ありがとうございます」

この服って確かお姉様が選んだんだっけ……さすがお姉様だわ！

「さて、それでは夕食を食べに行きましょう。フランドールお嬢様」

「うん！ねえお兄様」

「なんですか？」

「手繋いでもいい？」

「はい。もちろんです」

お兄様は微笑んで左手を差し出してくれた。私はその手を握った。

「えへへ〜♪」

大きくて暖かいお兄様の手。繋いでいるとすごく安らぐ。

「さて、行きましょう」

「うん！」

私はミコトと並んで夕食を取るために大広間に向かう。

「ねえお兄様、明日は遊びに来てくれる？」

「ええ。是非とも行かせていただきます」

「絶対だよ？約束だよ？」

「はい。約束です」

ミコトは微笑んで約束してくれた。明日が楽しみだなく♪

「レミリアお嬢様。フランドールお嬢様を連れてきました」

お兄様と共に広間に入るとそこには霊夢、パチュリー、咲夜、そしてお姉様がいた（美鈴は門番の仕事でない）

「苦労様ミコト……って何やってるのよ！」

広間についた私とお兄様を見てお姉さまは驚いたように声を上

げた。

「?別に私達何もしてないよ?ね、お兄様」

「ええ」

私もお兄様も意味が分からず頭をかしげる。

「なんで手を繋いでるのよ!」

「なんでと申されましても・・・フランドールお嬢様にお問い合わせからですが?」

「そっだよ。私がお願いしたんだ。もしかしてお姉様・・・羨ましいの?」

「なっ／＼／そ、そんなわけないじゃない!どうして私が!」

お姉様は顔を真っ赤にして否定した。本当は羨ましいくせに。お姉様は素直じゃないなあ。

(・・・羨ましい)

あ、霊夢と咲夜も羨ましそうな顔してる。ふたりもお兄様が好きならもつと積極的になればいいのに。

「も、もういいわ!夕食にしましょ。座りなさいフラン」

「は〜い」

お姉さまに促されて私は自分の席に着いた。

「それじゃあいただきますしよ」

「いただきます」

お姉様の合図で皆夕食を食べ始めた。

「あ、これ美味しい!」

「本当ですか?フランドールお嬢様のお口に合ってよかったです」

「え?もしかしてお兄様が作ったの?」

「はい。僭越ながら私が作らせてもらいました」

「すご〜い!お兄様料理もできるんだ」

「まあ多少はできます。といつても咲夜さんに比べたら私などまだまだですが」

お兄様は控えめにそう言った。

「あら、そんなことないわよ。咲夜にも引けを取らないと思うわ」

「そうですね。正直十分すぎるほどできると思うわ」

「いえ、そんな私などまだまだ……」

お姉様と咲夜も褒めている。それでもお兄様は遠慮がちだ。「前から思っていたけれど、ミコトって結構謙虚よね。執事になってもそういうところは変わらないのね」

お兄様と一緒に暮らしている霊夢がそう言った。お兄様って普段から謙虚なんだ。今は執事だから謙虚なんだと思ったわ。

「私が謙虚ですか……自分ではよくわかりませんね」

「まあそういうところもミコトらしいからいいと思うけどね」

「そうね」

「ええ」

「いいんじゃないかしら？」

「私もそう思う！」

皆お兄様の謙虚さには特に不満はないみたい。

「私らしいですか……やはりよくわかりませんね」

お兄様顎に手を当てて少し考える素振りをした後そう答えた。そんな風に他愛のない話をしながら私は夕食を食べ進めた。

side 霊夢

「こちらが霊夢様のお部屋です」

夕食後、私はミコトに連れられて客室に案内された

「案内ありがと、ミコト」

「はい。それでは私はこれで。何かあったら呼んでくださいね」
「ちよつと待って」

部屋から出ようとするミコトを私は引き止めた。

「なんででしょうか霊夢様？」

「少し話し相手になって欲しいんだけどいいかしら？」

「話し相手ですか……はい。私でよろしければ」

「ありがとう」

「どうやら相手をしてくれるみたいね。なら……」

「話をする前にいつもの口調に戻してくれないかしら？」

今のミコトの口調もいいけどやっぱりいつもの口調の方が私は好きだし。

「ですが私は紅魔館の執事で霊夢様はお客様ですので……」

「……どうしてもダメ？」

「……わかったよ。霊夢」

少し考える素振りをした後、ミコトはいつもの口調に戻した。

「それでいいのよ。どう？執事の仕事は？」

「そうだな……思った以上に大変かな。今までひとりで切り盛りしてきた咲夜を素直に尊敬する」

「そんなに大変だったの？」

「ああ。なにせ紅魔館は本当に広いからな。咲夜が時間を止めなければやっていけないと言っていたがまさにその通りだ」

時間を止めるって……咲夜が言うときまさに文字通りね。

「そうなんだ。というかなんでわざわざこんな風に広くしてるのかしら？どう考えても不便だと思っけど」

「どうやらレミリアが屋敷の広さが主の心の広さを表すからと言ったからここまで広くしているそうぞ」

「……今胸を張って堂々と言い張るレミリアの姿が思い浮かんだんだけど」

「奇遇だな。俺も咲夜に聞いたときは同じことを思ったよ」

見た目相応に子供っぽいわねレミリア。

「それにしてもミコト、その格好似合ってるんだけど……窮屈じゃない？」

私はミコトの姿を見ながら言った。

「そんなことないぞ。着心地いいから割と気に入ってる。用意してく

れたレミリアには礼を言わなきゃな」

「そう。それならいいけど」

まあレミリアは冗談とはいえ余計なもの（メイド服）まで用意して
いたけど。

「そういえば俺が執事の仕事している間霊夢は何をしていたんだ？」

「ええ。私は……」

そんな風に私は寝るまでの間ミコトと話しながら過ごした。

第37話

side 霊夢

「それじゃあ私は帰るわね」

「はい。霊夢様」

「ここは紅魔館の玄関。朝になって朝食を食べ終わったので私は神社に帰ることにした。ミコトは私を見送りに来てくれている。

「執事の仕事頑張つてね。それと明日にはちゃんと帰つてきなさいよ」

「わかっております」

ミコトは丁寧な言葉遣いで言った。今はもう完全に執事モードのようね。

「ならいいわ。それじゃあまた明日」

「はい。また明日に」

私はミコトに見送られて神社へと帰った。………はあ、またミコトがいない一日を過ごさなきゃならないのか。

side フラン

「フフ♪」

今日の私は気分がいい。なぜなら……

コンコン

「フランドールお嬢様。ミコトです。入ってもよろしいでしょうか？」

「来た!!」

私はお兄様が部屋に入ってくる前に扉を開けてお兄様に飛びついた。

「お兄様〜!」

「つと、フランドール様、いきなり飛びついてはいけません。昨日も言ったでしょう?」

「あ、ごめんなさいお兄様」

「わかってくださればいいんです」

お兄様は優しく私の頭を撫でてくれた。私お兄様に撫でられるのすごく好き! すごく安らぐし気持ちいいもん!

「ねえ! 今日遊びに来てくれたんだよね?」

「はい。本日の仕事はあらかじめ終わりましたからね。レミリアお嬢様と咲夜さんにも許可はもらっていますので」

「どれくらい一緒にいられる?」

「夕食の準備を始めるまでの間は時間がありますよ」

やった! 今はお昼すぎだから今日はお兄様とたくさん一緒にいられる!

「それでは何をして遊びますか?」

「そうだな」

何して遊ぼうかな... そうだ!

「ねえお兄様! 一緒にお屋敷の中をお散歩しましょ!」

「散歩ですか?」

「うん! 私最近になってようやくお屋敷の中を自由に歩けるようになったんだけどまだどこに何があるのかよくわからないんだ! だからお兄様と一緒に色々見て回りたいの!」

「なるほど、わかりました。では行きましょう」

お兄様は私に手を差し出した。

「うん!」

私はその手を掴んでお兄様と屋敷内の散歩に出かけた。

ついに私視点がきました！……とまあおふざけはここまでに
しましょう。

「♪」

私は今屋敷の花壇の花に水をやっている。私は門番以外に屋敷の
花の世話も任されている。

「みんな元気に綺麗に咲きましたね」

花に話しかけると元気に育つというのは本当みたいだ。現に私が
話しかけながら育てたお花はこんなにも綺麗に咲き誇ってる。

「フフ♪」

自分が育てた花が綺麗に咲いているのを見ていたらなんだかすご
く嬉しくなりますね。心が洗われるようです。

「綺麗に咲いていますね」

声のする方を振り返るとそこにはミコトさんと妹様がいた。ミコ
トさんは妹様が日光に当たらないように日傘をさしている。

「ミコトさん、妹様、お散歩ですか？」

「ええ、そうですよ。美鈴さん」

「……え？いまミコトさん『美鈴さん』って……」

「どうしたんですかミコトさん？急にさん付けしたりして！しかも口
調も丁寧ですし！」

「今の私は紅魔館の執事ですので。同じ屋敷で働く人間として先輩で
ある美鈴さんに敬意を表するのは当然ですよ」

「け、敬意……!!」

とうとう……とうとう私にも敬意を払ってくれる人ができた！
紅魔館に来て〇〇年。今まで誰からも敬意を払われず、雑に扱われて
きた私にもついに！

「フフ。フフフフ……」

ああ。嬉しすぎて思わず笑みが止まりません！

「……フランドールお嬢様。美鈴さんは一体どうなさってんでしょ
うか？」

「うん。わかんない」

ミコトさんたちが何か言っているけど関係ない。今はこの喜びを

噛み締めなければ!

「……まあ何か喜んでいるようなのでいいんですが。それにしても本当に綺麗な花たちですね」

「本当!この花って美鈴が育てたの?」

「はい!これも私のお仕事なので!」

「そうですか……それにしても薔薇にアネモネ、リリー、マーガレット、マリーゴールド。随分と色々な花があるんですね」

「ミコトさんは花壇を見渡して言った。」

「わかるんですか?」

「ええ」

「へえ、ミコトって花に詳しいんだね」

「花が好きで友人がいましたので。それで詳しくなりました」

「ミコトさんの友人ですか……」

「その方はどんな人なんですか?」

「私は気になったので聞いてみた。」

「そうですね……一言で言うと強い人ですね」

「強い人?」

「はい。とてつもなく強い力を持っている方ですね。間違いなく人間の域を超えていますし。正直彼に勝てる者はどこにも存在しないんじゃないかっていうほどですから」

「そんなにですか?」

「ええ。たとえ接近戦でも美鈴さんでは勝てないと思います」

「接近戦でもって……」

「正直私は接近戦なら誰にも負けない自信がある。たとえ咲夜さんやレミリアお嬢様が相手でも接近戦なら勝てるだろう(まあ戦いませんが) そんな私よりも強いって……」

「ぜひ一度お手合わせしたいですね」

「そうですか。まあ、彼は外の世界の人間ですからよほどのことがない限り幻想郷にはこられませんのでその機会はないと思います。それに……会ったら会ったで多分疲れると思いますし」

「え?どういふこと、ミコト?」

「彼は……ひどく破天荒な方ですからね。相手をすると疲れやすいですよ」

ミコトさんは少し遠い目をして言った。……一体その人と何があったんだろ？

「さて、フランドールお嬢様、そろそろ行きましよう。他にも色々回ってみたいでしょう？」

「うん！それじゃあね美鈴！」

「それでは美鈴さん。私達はこれで失礼します」

「あ、はい」

ミコトさんは妹様を連れて屋敷の中に戻っていった。それにしてもミコトさんの友人……本当に気になりますね。

side パチュリー

「待ちなさい魔理沙！」

「な、何なんだよ一体！私が何をしたって言うんだよ！」

私は今図書館の中で魔理沙を追い掛け回している。理由は……

「私の本を返しなさい！」

「本ならちゃんと返しただろ！」

「他にも持ってたものがあるでしょ！そっちも返しなさい！」

「げっ、バレてた！」

魔理沙が私に無断で持っていた本を取り返すためにだ。魔理沙はミコトに説教をされたにもかかわらずこつそりと本を盗っていたのだ。

「ちゃんと後で返すから勘弁してくれ！」

「いつまで借りるつもりよ！」

「私が死ぬまでだ！」

「ふぎけるな！」

私は本を取り返そうと魔理沙を追うが……

「！ゴホツゴホツ」

途中で咳き込んでしまい体がうまく動かない。まさかこんな時に限って喘息がでるなんて……

「パチュリー様!!」

小悪魔が心配して駆け寄ってきた。

「だ、大丈夫……ゴホツゴホツ！」

う……少しまずいかも。急に走ったせいか呼吸が苦しい。

「パチュリー様！大丈夫ですか！」

「パチュリー！」

「ミ、ミコト、フラン……」

声がる方向を振り向くとミコトとフランが居た。

「落ち着いてください。ゆっくり深呼吸を。小悪魔さんは水を持ってきてください」

「お、お水をですか？」

「早くしてください」

「は、はい！」

小悪魔は慌てた様子で水を取りに行った。

「ス……ハ……ス……ハ……」

私はミコトの言うとおりに深呼吸をする。そのミコトは深呼吸をする私の背中をさすってくれている。

「お水を持ってきました！」

「パチュリー様、ゆっくり飲んでください」

「うん……」

私は小悪魔から水を受け取って少しずつ飲む。

「大丈夫？パチュリー」

フランが心配そうな表情で聞いてきた。

「……ふう、もう大丈夫よ。心配してくれてありがとうありがとうフラン。ミコトも、おかげで楽になったわ」

「そうですか。よかったです」

「良かった」

ミコトとフラン安堵の表情で言った。よほど心配してくれたようね。

「それにしても一体どうしたんですか？何やら騒いでいたようですが」

「ええ。実は……」

ミコトに聞かれたので私は事情を説明した。

少女説明中

「そうですか、魔理沙様が……わかりました。少し待っていてください」

そう言っつてミコトは魔理沙のいる方向に向かった。能力を使ったようでどこにいるのかわかるようね。それにしても……

「ね、ねえパチュリー」

「……何？フラン」

「なんか今のお兄様すごく怖いんだけど……」
「……そうね」

話を聞いたミコトはニコニコと笑っていた。ただその笑みは……何かとてつもなく黒くて恐ろしいものだった。

(……自業自得とはいえ少し同情するわ。魔理沙)

私はどこかにいる魔理沙をほんの僅かだが哀れに思えた。

「……ふう、どうやら撒いたみたいだな」

パチュリーを撒いたようなので私は一息入れた。

「それにしてもパチュリーのやつケチくさいな。これだけたくさん本があるんだから一冊くらい別にいいだろう」

私は周りの本棚を見ながら言った。本棚には本が所狭しと収まっている。

「それに私はちゃんと返すって言ってるのに。短気な奴だぜ。きっとカルシウムが足りてないんだ」

「でしたら魔理沙様は少し常識が足りていませんね」

「ひゃあっ！」

急に聞き覚えのある声が聞こえてきて私は驚いた。声のした方向を振り返るとそこには……

「ミ、ミコト!?!」

そこにはミコトがいた。

「ミ、ミコト? 何でここにいるんだ? しかも何なんだ? その服と口調!」

ミコトは黒を基調としたいいつもとは明らかに違う服を着ている。しかもやたらと口調が丁寧だ。

「私は今紅魔館で執事として働いていますので」

「こ、紅魔館の執事!?!」

そ、それはびっくりだぜ。何でそんなことになってんだ? それに……

「ミコト! 左手治ったんのか!?!」

私の目の前にいるミコトには以前失われた左手がある。

「ええ。先日治りました」

「そうか! 良かったな! というか治ったんなら報告に来いよ!」

「すみません。中々時間を作れなかったものでして」

「全く。まあ私は優しいからな! 許してやる!」

「ありがとうございます」

ミコトの左手が……へへ、なんだか自分のことみたい嬉し
いぜ。

「それよりも魔理沙様。少しよろしいですか？」

「ん？なんだ……ぜ？」

私はミコトを見て思わず固まった。ミコトは今見たことのないよ
うなにこやかな笑顔をしている。ただその笑顔からは……やた
らと黒いものを感じる。

「パチュリー様から聞きましたが……どうやら悪い癖がまた出て
しまったようですね」

「え、えっと……ミコト？」

「魔理沙様……少しOHANASHIしましょう」

「は、ははは……」

く執事OHANASHI中く

「どうもすみませんでした」

私はパチュリーに盗った本を差し出して土下座して謝った。

「パチュリー様。魔理沙様もこうして反省しているようですし。どう
か許してあげてください。お願いします」

ミコトもまたパチュリーに頭を下げた。

「……ま、まあ今回は許してあげるわ。罰も受けたようだし、
なによりしっかりと反省しているようだし」

パチュリーは私に哀れみの目を向けて言った。

正直今のミコトの説教は恐かった。すごく恐かった。今まで見た
何よりも恐かった。普段のミコトよりも丁寧でにこやかだった
分……余計に恐ろしかった。

(や、ヤバイ……思い出してきたら目頭が熱くなってきた)

ミコトのあの説教を思い出したら涙が出てきた。しかも途中でな

んかIUPキノコを返せとかわけのわからないこと言ってきたし……しかもIUPキノコとかいうのなぜか持ってたし。本当にこういう事なんだ？

「魔理沙様、なぜ泣いておられるのですか？」

ミコトは心配そうな顔で聞いてきた。

「……………なんでもないぜ。気にするな」

「?…そうですか。わかりました」

まあミコトが原因なんだけどな。でも悪いのは私だったから何も言えないぜ。

「魔理沙、今回はミコトに免じて許してあげるわ。けどもし次勝手に本を持っていったら二度と貸さないから」

「その時は私も本気で説教させてもらいますので。先ほどとは比にならないので気をつけてくださいね」

……………え?本気で説教?さっきのって本気じゃなかったのか?

「……………肝に銘じておくれ」

「わかってくださればいいです」

ミコトはまた笑顔で言った。その笑顔は先程の様な黒々さは無いはずなのに……何故か怖かった。

「それではパチュリー様。私達は散歩の途中ですので行きますね」

「またね〜パチュリー、魔理沙!」

ミコトとフランは手を繋いで図書館から出ていった。……………ミコトと手を繋げるなんて、フランのやつ羨ましいぜ。

side フラン

「ん〜疲れた」

私はお兄様との散歩を終えて自分の部屋に戻ってきた。

「お疲れ様です。どうでしたか？」

「うん！楽しかったよ！」

思ったとおりお兄様と一緒に散歩は楽しかったわ！……ま
あ図書館でのお兄様は恐かったけど。

「それは良かったです」

まあ今のお兄様は恐くないからいいけどね。それにしても……
「ふわぁ〜……」

散歩したら少し眠くなっちゃた。

「眠いんですか？フランドール様」

「うん……ちよつと……」

「そうですか。眠ってもいいですよ。夕食の時間になったら起こしま
すから」

「うん……」

私はベットに入って横になった。

「ねえお兄様……」

「なんですか？」

「……眠るまで手握ってほしい」

「わかりました」

お兄様は手を握ってくれた。手のひらからお兄様のぬくもりを感
じる。

「お兄様」

「はい」

「また……一緒に散歩してくれる？」

「ええ。私でよければ」

「約束……だよ」

「はい。約束です」

「あり……がと」

私はお兄様のぬくもりを感じながら眠りについた。

第38話

side レミリア

「どうぞ、レミリアお嬢様」

「ありがと、ミコト」

夕食が終わり、私はミコトが淹れた食後の紅茶を受け取り口に含む。

「いかがでしょうか？」

「そうですね・・・62点といったところかしら」

私はミコトが淹れた紅茶に点数をつけた。

「62点ですか・・・厳しいですね」

ミコトは苦笑いを浮かべて言った。どうやらもつと評価される自信があつたようね。

「あら？私としては十分高い評価を与えてるつもりなんでけど。咲夜でもこのレベルの紅茶を淹れられるようになるまで半年はかかったもの」

事実表情には出していないけれどミコトがこのレベルの紅茶を淹れたことに驚いたし。

「まあ味自体は十分美味しいわ。ただ香りが弱いわね。お湯の温度が少し低かつたんじやないかしら？」

「ふむ、ちゃんと適温で淹れたつもりなのですが」

「紅茶はお湯の温度がコンマ数度違うだけで味、香りが変わってくるわ。最適な温度で淹れられるようになるには経験を積まないと難しいわ」

「咲夜の言う通りね。一朝一夕では私を満足させられる紅茶は淹れられないわ」

「そうですね、ではレミリアお嬢様を満足させられる紅茶が淹れられるように精進します」

「いい心掛けね」

ふふ、これは期待できそうね。

「さて、食器を洗いに行くわよミコト」

「はい。それではレミリアお嬢様、失礼します」
「待ちなさい」

私は部屋から出ようとしたミコトを引き止めた。

「何でしょうか？」

「洗い物が終わったら私の部屋に来なさい」

「レミリアお嬢様のお部屋にですか？」

「ええ、少し用があるから。いいかしら？」

「もちろんです」

「それじゃあ部屋で待っているから絶対に来なさい」

「はい」

ミコトは微笑みを浮かべて返事をして部屋から出た。私も自室に戻り、ミコトを待つことにした。

コンコン

「レミリアお嬢様、ミコトです。入ってもよろしいでしょうか？」

部屋に戻り30分程してミコトが来た。

「ええ、入りなさい」

「失礼します」

扉を開きミコトが部屋に入ってくる。

「お待たせして申し訳ございませんレミリアお嬢様」

「いえ、そんなに待っていないわよ。気にしないでいいわ」

むしろ思ったより早かったぐらいだ。やはり咲夜とふたりだと仕事早いわね。

「ミコト、2日間執事として働いた感想はどうかしら？」

「そうですね、やはり慣れていないので戸惑うことも多々あり、執事になったばかりとはいえ力不足だと感じました。私もまだまだですね」

戸惑うって……私の目には十分過ぎるほどこなしていたように見えたのに。本当に今のミコトは謙虚ね。

「ところでレミリアお嬢様、用とはなんでございますか」

ミコトは本題に触れてきた。

「それは……あなたにひとつ仕事を教えようと思ってね」

「レミリアお嬢様自ら私に仕事をですか？」

「ええ、というよりこれは私にしか教えられない仕事なのよ」

「どのような仕事なのですか？」

「ミコト……あなたの血液型は何かしら？」

「……B型でございます」

私が聞くとミコトは一瞬目を見開き、そして何かを察したように微笑みながら答えた。

「そうB型なの……いいわね」

B型……私が一番好きな血。

「ごうちに来なさいミコト。仕・事・よ」

「はい」

ミコトは言うとおりに私の下に近づいてきた。

「跪きなさい」

「わかりました」

ミコトは私の前に跪く。まるで忠誠を誓うかのように。私はそんなミコトの首筋に顔を近づけ、そして……

「いただきます」

ガプツ

牙を突き立ててミコトの血液を吸う。

ああ、美味しい。これがミコトの血液なのね。こんなに美味しい血液初めてだわ。

まるで極上の紅茶のよう

まるで甘美な麻薬のよう

いつまでも吸っていたい

これを私のものになりたい

私だけのものにしたいたい……

永遠に……

「くっ……」

「!!」

私はミコトの苦しそうな声を聞いて口を離した。危なかったわ。正気に戻っていなければミコトの血を全て吸い尽くしてしまっていただろう。普段大量に血を吸えない私が思う程ミコトの血は美味しかった。

「大丈夫？ミコト」

「ええ……私は……大丈夫です」

ミコトは笑顔を崩さずなんでもなくように答えた。しかしその顔は血の気がなく青白い。やはり血を吸い過ぎてしまったようだ。

「ミコト、ごめんなさ」レミリアお嬢様。血がこぼれていますよ「え？」

謝ろうとする私にミコトは割り込んでそう言った。

「じっとしててください」

ミコトはハンカチを取り出して私の口元を拭いた。

「ん……」

私はされるがままにミコトに口を拭いてもらう。

「はい、拭き取れましたよ」

「……ありがとう」

やっぱりそうだ。ミコトは優しい。今だって謝ろうとした私を氣遣ってあんなことをしたんだろう。……ミコトの血を吸い、苦しめた私を氣遣って。あの時もそうだった。私が異変を起こした時。私が異変を起こした理由を聞き、私の為に力を貸すと言ってくれた。フランに壊されそうになったにもかかわらず左手を犠牲にしてまでフランを苦しみと悲しみから救ってくれた。

ミコトにはすごく感謝している。ミコトのおかげで私は太陽の下にでられる希望が持てた。ミコトのおかげでフランと向き合うことができた。ミコトのおかげで私はフランと……ちゃんとした家族になれた。でも……どうして？どうしてミコトは……

「……どうして？」

「お嬢様？」

「ミコトは……どうしてそんなに優しいの？」

私は思わずそう聞いてしまった。

「私が優しい……ですか？」

「ええ。他人を気遣って、思つて、受け止めて、救つて……どうして誰かの為にそこまでできるの？」

「……以前言った通りですよ。私は私の為にしたい通りになっているだけです。だからただの自己満足ですよ。私は……優しくありませんから」

ミコトはそう答えた……どこか悲しそうな顔で、自嘲気味に笑いながら。

「ミコト……そんなことない！あなたは「レミリア様」

ミコトはまた私の言葉を遮った。

「そろそろ失礼してよろしいでしょうか？まだ仕事が残っていますので」

「……わかったわ。もう下がっていいわよ」

「それでは失礼します」

ミコトはお辞儀をしたあと部屋から出ていった。

「ミコト、どうしてあなたはそこまで……自分の優しさを否定するの？」

ミコトがいなくなりひとりきりになった部屋で私はそう呟いた。

side ミコト

「……………ふう」

今日の仕事を終え、俺は用意された部屋のベットで横になった。ちなみには仕事を終え執事ではないため口調は通常に戻している。

『ミコトは……………どうしてそんなに優しいの?』

今、俺の頭はレミアが言った言葉がよぎっている。

はつきり言って俺は自分が優しいなどと思っていない。俺は自分の為にしか何事もなさない。自分の為にしか

自分の力を使わない。誰が何と言おうと、なんと思おうと、俺は……………俺の行動はただの自己満足だ。

いつからだろうか?自分の優しさを自己満足だと思おうようになったのは?

いつからだろうか?自己満足だと思わなければ何事もなせなくなったのは?

いつからだろうか?誰かに認められようとした優しさがただの虚しいものにならってしまったのは?

いつだっただろうか?他人に優しくしたって、誰も俺を認めてくれない。誰も俺を愛してくれないと知ったのは。

だから俺は……………俺の優しさは自己満足でなければならない。その自己満足が俺の……………意義だから。

俺は目を閉じ眠りについた。

「それじゃあもう帰るな」

次の日の午後。その日の仕事をあらかた終わらせたので、普段の私服に着替えて神社へと帰ることにした。レミリア、フラン、咲夜はその見送りに来てくれている。

「口調戻したのね」

「ああ。今は執事じゃあないからな」

「本当に切り替えが上手ね」

「褒め言葉として受け取っておくよ」

咲夜の言葉に俺はそう返した。

「お兄様、帰っちゃうの？」

「ああ。俺の家は博麗神社だからな、帰らないと」

「……もっとお兄様と一緒に居たかった」

フランは泣きそうな顔で言っている。

「泣かないでフラン。また来るから。な？」

「……うん」

「よし。いい子だな」

俺はフランの頭を撫でながら言った。

「……ミコト」

「なんだ？レミリア」

「……絶対にまた来なさいよ。執事として目一杯働いてもらうから」

「はは。ああ、また来るよ」

「それともう一つ。あなたに言うておくことがあるわ。耳を貸しなさい」

「?わかった」

俺はレミリアに耳を近づけた。

「……………覚悟しなさい。私は絶対に——あげるわ」

話を聞いて、俺はレミリアから離れた。

「じゃあまたな。皆」

「ええ」

「またね!お兄様!」

「待ってるわ」

俺は紅魔館を後にした。

『……………覚悟しなさい。私は絶対にあなたにあなたの優しさを認めさせてあげるわ』

「……………やれるものならやってみろ。レミリア」

俺は空を見上げてそう呟いた。

第39話

side ミコト

紅魔館で執事の仕事をしてから3日経ち、今日俺は人里に来て、あの場所を探していた。

「ミコト」

俺を呼ぶ声が聞こえ、そちらに振り向くと

「妹紅」

そこにいたのは妹紅だった。

「二週間ぶりだな。相変わらず輝夜とは殺し合ってるのか？」

「ああ！もちろんだ！」

妹紅は満面の笑みで力強くそう答えた。話しの内容と表情が物凄いミスマッチだな。まあ聞いたのは俺なんだが。

「と、そうだ。妹紅、お前に聞きたいことがあるんだがいいか？」

「何だ？」

「寺子屋ってどこにあるんだ？」

「寺子屋？」

「ああ。左手も治った事だし慧音との約束を果たそうと思ってるな」

そう。俺が今日人里に来たのはいつかした慧音との約束を果たす為、寺子屋の子供達に勉強を教える為だ、

「なるほど、そういう事か。それじゃあ私が慧音の寺子屋に案内してやる」

「それは助かる。ありがとうな」

「気にするなって。じゃあついて来い」

「ああ」

俺は前を歩く妹紅のあとについて行った。

「着いたぞ」

妹紅に案内されて5分後。俺は寺子屋に辿り着いた。

「それじゃあまずは慧音に挨拶しよう」

「そうだな」

妹紅は寺子屋の扉に手をかけて開いた。

「お〜い慧音、ミコトを「遅い！」

ゴツン！

「ギイツー！」

扉を開いた妹紅はすぐ近くにいた慧音から何故か頭突きされた。頭突きを受けた妹紅は目を回して気絶している。

「遅刻するなど言っただろう！何度言えばわか……」

慧音はなにやら怒鳴っていたが妹紅の姿を確認すると言葉を発するのを止め固まった。そして……

「も、妹紅?!大丈夫か、しっかりしろ！」

物凄い勢いでオロオロとし始め、妹紅の体を上下左右に揺さぶった。その妹紅はというと微動だにしない。間違いなく大丈夫ではないな。

「慧音、少し落ち着け」

俺はそんな慧音を落ち着かせようと近づいた。

「あ、ああ。そうだな……ってミコト?何でここに?」

「前に子供達に勉強を教えるって言ってただろ?だから来たんだ。それよりも今は妹紅だ。とりあえず中で寝かせるぞ」

「わ、わかった」

俺と慧音は妹紅を寺子屋の中に連れて行った。

「よつと」

俺は慧音が敷いた布団の上に妹紅を寝かした。でもなんで寺子屋に布団があるんだ?

「慧音先生。なんで妹紅お姉ちゃん寝てるの?」

「お昼寝?」

「そ、それは……」

寺子屋の中にいた子供達は気絶している妹紅を見て慧音にそう聞いてきた。対する慧音は目を泳がせ言い淀んでいる。

「ねえ君達ちよつといいかな？今は休み時間？」

「うん。そうだよ」

俺はそんな慧音に助け舟を出すべく話題を変えた。慧音はホツとしたような顔をしている。

「ねえ、貴方だあれ？」

子供たちの中のひとりが俺に聞いてきた。

「ああ。俺は一夢命。君達に勉強を教えに来たんだ。ミコトって呼んでくれ」

「へえ、そうなんだ。よろしくねミコトお姉ちゃん！」

「「「よろしくミコトお姉ちゃん！」」」

(……お姉ちゃんか)

俺は子供たちにお姉ちゃんと言われて若干凹んだ。自覚はあるけど……俺ってそんなに女っぽく見えるのか？しかもものすごく純真な目で言ってきたから否定しづらい。だがしかし、ここでちゃんと教えておかないと今後この子たちにお姉ちゃんとして扱われてしまう。ここはきちんと言わなければ。

「うんよろしく。でも俺はお姉ちゃんじゃなくてお兄ちゃんだからそこは間違えないで欲しいな」

「「「ええっ！嘘!？」」」

……うん。わかってた。何となくこうなるんじゃないかってわかってた。でも……わかってても悲しいものがあるな。しかも……

「……なんで慧音まで驚いているんだ？」

「い、いや、てつきり女の子だと思ってたから……」

「……口調でわからなかったのか？」

「いや、なんか『俺女』っていうのがあるって聞いたからミコトもそうじゃないかと……」

どこでそんな聞いたんだよ。なんだか頭が痛くなってきた。と

りあえず慧音には後で説教しよう。

「ねえミコトお兄ちゃん。お兄ちゃんは何を教えてくれるの?」

慧音にどう説教しようかと考えていたら一人の女の子がそう聞いてきた。

「ああ。俺は君達に算数を教えようと思ってね」

「えー、算数〜」

教える内容を話したらそんな声が聞こえてきた。周りを見ると少し嫌そうな顔をしている子が何人かいる。どうやらここには算数が嫌いな子が多いようだな。

「皆は算数が嫌い?」

「うん」

「あんまり好きじゃない」

「足し算と引き算はわかるんだけど……掛け算とか割り算はよくわからない」

うん。やっぱりそのあたりか。

「そつか。確かに難しいもんね。でも覚えておくときつと役に立つからちゃんと勉強しよ?」

「でも……」

「大丈夫。俺がわかりやすく楽しく教えてあげるよ」

「楽しく?」

「うん。慧音、授業を初めてもいいか?」

「ああ。頼む」

「よし、それじゃあ皆席について」

「二は〜い」

皆は俺の言うとおりに席に着いた。素直でいい子達だな。さて、それじゃあ始めますか。

side 慧音

(さて、お手並み拝見だな)

これからミコトの授業が始まる。私は教室の後ろの方で見ていることにした。

「それじゃあまずは割り算を教えようかな」

「えゝ割り算・・・」

「僕割り算嫌いゝ」

割り算という言葉聞いて皆嫌そうな声を出した。本当に嫌いなようだな。さて、どう教えるミコト？

「ははは。大丈夫だよ。さつきも言ったけど楽しく教えてあげるから」

「楽しく？」

「うん。皆は甘いもの好きかな？」

ミコトは子供達にそう聞いた。それが割り算とどう関係があるんだ？

「うん！大好き！」

「僕も大好き！」

「私も大好物だよ！」

「そっか。やっぱり皆好きだよね。実は・・・今日はそんな皆に大福を作ってきたんだ」

そう言つてミコトはどこからかたくさんの大福を取り出した。一体どこに持っていたんだ？

「わくわく大福！」

「美味しそ〜う！」

ふむ、確かに美味しそうだな。

「早くちようだいお兄ちゃん！」

「その前に。皆に聞きたいことがあるんだけどいいかな？」

「なあに？」

「俺が持ってきた大福は27個、そして慧音さん先生と妹紅お姉ちゃんを含めると9人いるんだけど・・・この大福を皆で分けると一人何個になるかな？」

なるほど。そういうことか。

「そんなの簡単だよ！1人3個だ！」

子供達の内、1人が答えた。

「そうだね。27個を皆で分けると1人3個だ。よくわかったな。実はこれが割り算なんだよ」

「えっ?」

「割り算っていうのはね、こういうふうにたくさんものを皆で分けるときに一人いくつももらえるかっていう考え方もあるんだよ。皆わかったかな?」

「うん、すぐにわかった!」

「私もわかったよ!」

「僕も!」

どうやら皆わかったようだな。

「どう?そんなに難しくなかったでしょう?これから割り算を解くときは今みたいに考えればわかりやすいんだよ。今回は大福で考えたけどもつと違うもので考えてもいいんだ。皆が考えやすいものでね。さて、それじゃあ割り算のことが少しわかったお祝いだ。皆で大福を食べよう」

「「わ〜い!!!」」

ミコトは皆に大福を分け与え、目を覚ました妹紅と一緒に皆で大福を食べた。ミコトの手製らしいその大福はとても美味しかった。大福を食べた後は皆を外に連れ出して鬼ごっこやケイドロといった遊びをした。ミコトはこの遊びの時も色々なルールを取り入れて皆に割り算、掛け算を教えていた。結果ミコトの言っていたように皆は楽しく割り算、掛け算を知ることができたようだ。

(こんな教え方もあるんだな)

私は自分では思いつかなかった方法で子供達に授業をするミコトを素直に尊敬した。

「またね！・ミコトお兄ちゃん！」

「うん。またね」

授業が終わり、俺は家に帰る子供達を見送った。結果でいえば授業は成功。皆は楽しく割り算、掛け算を理解してくれたようだ。

「今日はありがとう、ミコト」

子供たち全員が帰ったのを見送った後、慧音が礼を言ってきた。

「礼はいいよ。約束だったし、俺も好きでやっていたんだからな」

「いや、そうはいかないさ。ミコトのおかげで皆割り算、掛け算の苦手意識を改善できたんだからな。ミコトには本当に感謝している。本当にありがとう」

「・・・まあ役に立ったならいいけど」

再び慧音に礼を言われ俺は少々気恥ずかしくなり、顔を背けた。

「なんだ？もしかしてミコト照れてるのか？」

そんな俺を見て妹紅はからかうような笑みを浮かべて言ってきた。

「・・・そんなんじゃない」

俺は一応誤魔化しておいたが・・・きつと意味ないんだろうな。

「ふふ。なあミコト、もしお前さえよければまた子供達に勉強を教えてやってくれないか？皆ミコトのことを気に入ったようだし。ミコトの授業の仕方は私にとっても学ぶところが多いからもつと見たいんだ。いいか？」

「いいもなにも俺もそのつもりだよ。皆にもまた来るって約束したからな。流石に毎日というわけにはいかないがたまに来るよ」

「そうか。ありがとう」

「だから礼はいいって」

慧音は律儀な奴だな。まあそれほどあの子達のことを大切に思っているっていうことか。慧音はいい教師だな。・・・さて、それじゃあ

「ところで慧音」

「なんだ？」

「・・・よくまあ俺を女の子だと思ってくれたな？」

「・・・え？」

俺は神社に帰る前に慧音に説教をした。となりで妹紅が青白い顔
をしてみていたが気にしないことにしよう。

第40話

side ミコト

「こんにちは」

「あらミコトくん、いらっしやい」

俺は八百屋の売り子の女性に挨拶をした。俺は今人里に食材の買い物に来ている。まずは八百屋で野菜の買い物だ。

「今日は何がおすすめ？」

「今日は白菜、大根、ネギがお勧めよ。いいのが入ったから」

ふむ、白菜に大根にネギか……。最近また寒くなってきたし、鍋にしようかな。

「じゃあそれをもらおうかな」

「毎度。ミコトくん美人だからサービスするよ」

「ははは、冗談がうまいな」

「……………冗談じゃないんだけどな」

「ん？何か言った？」

「なんでもないわ。今袋に入れるから待ってて」

「ああ」

一体なんて言ってたんだろう？そういえばこの人俺が来るたびに顔を赤くしてるけど俺何かしただろうか？

「お、ミコトくん。買い物かい？」

「ああ。後でおじさんの魚屋にも寄るよ」

「そうか。なら今日捕れたばかりのフナをとつとかないな。またな」

そう言っておじさんは魚屋に戻っていった。フナか……。取れたばかりなら刺身がいいか？だが煮付けも捨てがたいな。

「はい、ミコトくん。詰め終わったよ」

「ありがと。はい、お代」

「うん。それじゃあまた来てね」

「ああ」

俺は買った野菜を受け取り、今度は魚を買いに行く。それにして

も……

「あ、ミコトお兄ちゃん。こんにちは！」

「今日も買い出しかミコト？せいがでるな」

「あ、み、ミコトさん……こんにちは／＼」

……幻想郷にはいい人が多いな。こんな俺なんかも友好的に話しかけてくれるなんて。外の世界では考えられなかったな。あの世界の人は……ほとんどが俺を嫌悪していたからな。

本当、俺があの世界にどれだけ嫌われていたか認識させられる。あの世界で俺の存在を受け入れてくれる人なんてそれこそ片手で数えるぐらいしかいなかったしな。本当に……幻想郷に来られて良かったかもしれない。

「よし、こんなもんだな」

しばらくしてある程度の食材の調達が完了した。

「さて、帰るか」

俺は購入した食材を持って神社への帰路についた。

(うーん……やっぱり鍋は明日にして今日はフナの刺身にするかな？刺身なんて普段あんまり食べれないし)

俺は今日の晩御飯の内容を考えながら歩いていると……
「ん？」

道に何かが落ちていているのを見つけた。俺は近づいてそれを拾い上げた。

「これは……新聞？」

落ちていたものの正体は新聞だった。

「幻想郷にも新聞があるのか……なんて読むんだこれ？」

新聞には大きく『文々。新聞』と書かれている。この新聞の名前だろ。

「……帰ったら霊夢に聞いてみるか」

俺は新聞を荷物と一緒に手に持ち、再び博麗神社への帰路につい

た。

「ふう、ようやく着いた」

人里から歩いて1時間してようやく博麗神社に帰ってきた。わかつてはいたが神社から人里は結構距離があるな。何となく歩いてたけど、やっぱり飛んで行ったほうがいいな。

「ん？」

神社の中に入ろうと境内に入ったところには霊夢ともう一人誰かがいた。その人は白い服に黒いスカート、赤い小さな帽子をかぶった少女だった。

(霊夢の知り合いか?)

とりあえず俺は近づいて話しかけることにした。

「ただいま霊夢。お客さんか？」

「ミコト・・・帰ってきちゃったのね」

俺が話しかけると霊夢は頭を押さえた。

「どうしたんだ？霊「あなたがミコトさんですね!!」うおっ」

俺が霊夢にどうかしたのか聞こうとしたら、もうひとりの少女がすごい勢いで俺に迫ってきた。

「はじめまして！烏天狗の射命丸文と申します！どうぞよろしくお願
いします！」

文はそのままの勢いで俺の手を握り顔を近づけてきた。

「あ、ああ。よろしく」

「ちよっと文！ミコトが戸惑ってるでしょ！やめなさい！」

「あやや、これはすみませんミコトさん」

「い、いや気にするな」

うん、間違いないな。俺……この子苦手だ。嫌いじゃないけど苦手なタイプだ。

(ここまで戸惑ってるミコト初めてみるわ。文が苦手なのかしら?)
「それではミコトさん！あなたには色々聞きたいことがあるんです！気を取り直して是非取材させてください！」

文はいつの間にかペンとメモを取り出した。その目は眩しいほどに輝かせている。

「取材？」

「ええ！私は『文々。新聞』という新聞を作っています記者なんです！」

「『文々。新聞』？それってもしかしてこれか？」

俺は荷物の中から拾った新聞を取り出した。

「あやや！それはまさしく私の『文々。新聞』！」

「それどうしたのよミコト？」

「神社に帰る時に拾った。後で読んでみようと思ってな」

「おお！私の新聞を読もうとしていただけるとは嬉しいですね！これはなおさら取材させてもらわなければ！」

「いや、なんでそうなる！」

俺と霊夢は思わず突っ込んでしまった。

「まあいいじゃないです！ミコトさんには色々聞きたいことがあるんですから！」

「はあ……取材は受けるからとりあえず食材だけ先にしまっけていいか？いつまでもこのままにしておくわけにはいかないから」

「はい！どうぞどうぞ！」

「……じゃあちよつとここで待っていてくれ」

「私も手伝うわミコト」

「ありがと、霊夢」

俺と霊夢は食材をしまいに神社の中の台所に向かった。……まだ取材受けてないのになんかすごい疲れた気がする。

「大丈夫ミコト？」

私は食材をしまいながらミコトに聞いた。

「大丈夫って何がだ？」

「なんか疲れてるように見えるんだけど。それにあんなに戸惑ってるミコト初めて見たし」

「あくそうだな。文は俺の苦手なタイプだからちよつとな」

「そうなの？」

「ああ。どうにもあのノリがな」

意外ね。ミコトにも苦手なタイプがあるんだ。

「だったらなんで取材を引き受けたの？文が苦手なら嫌なんじゃない？」

「別に嫌ってわけじゃあないさ。苦手ではあるが嫌いではないから」

「苦手と嫌いつて違うの？」

「まあ少なくとも俺は違うな。むしろ文には好感持ってるし」

「苦手だけど嫌いじゃなくて好感が持てる？」

「なんだかわけがわからないわ。つまりミコトは文を……どう思ってるの？」

「まあ霊夢が深く考える必用はない。あまり気にするな」

「ええ。そうするわ」

「考えても答えが出るわけでもないし。ミコトの言うとおりもう考えるのはよそう。」

「さて、食材もしまい終わったし文のところに戻るか」

そう言っつてミコトは文のいるところに戻っていった。

「あややや！来ましたねミコトさん！それでは色々聞かせてもらいましょう！」

ミコトが戻ってくるやいなや、文はものすごくテンションを上げてミコトに迫ってきた。

「それではまず、以前起きた『紅霧異変』について聞かせてください！あれはミコトさんが解決したと噂が流れていますがそのところどうなんですか？」

ああ、あの異変か。そういえばそんな名前がついたんだっけ。

「それは違う。あれは霊夢が解決したんだ。俺は少し手伝っただけだ」

「え？ですが噂によるとミコトさんが大活躍して吸血鬼さんたちを籠絡させて異変を解決させたと……」

「……どこでそんな噂を聞いたか知らんがそれはデマだ。霊夢が異変の元凶を倒して異変を解決した。それが真実だ」

「そうだったんですか」

文は少し残念そうにそう言った。ただまあ文の言った噂はあなたがデマではないわ。実際レミリアもフランもミコトに惹かれたみたいだし。

「まあ真実を知ることとも記者のさが！気を取り直して次の話に行きましよう！」

こうして文はミコトに次々と質問をしていった。それこそ間断なく次々とだ。そしてミコトは戸惑いつつも質問に答えていった。

「ふむふむなるほど。これはいいネタ……もとい！いい話が聞けました！記事にしがいがありそうですね！」

今ネタって言った。間違いなくネタって言った。あんたは一体どんな記事を書くつもり？

「……取材はもう終わりか？」

ミコトは少し疲れた様子で言った。まあ休みなく喋ってたんだから仕方ないわね。

「最後にひとついいですか？ミコトさんは外の世界から来た外来人だそうですね？」

「……ああ。そうだが」

「外の世界ではどのような生活を送っていたんですか？きっとミコトさんほどの器量が良い人なら面白い……じゃなくていい生活を送っていたんでしょうね！」

面白いって……ほんとに文は。

「……面白い生活をか」

私が文の言ったことに頭を抱えていると、ミコトは表情を暗くしていた。

「あややミコトさん？どうしたんです？」

「確かに面白いかもな。外の世界での俺の生活は……コメディよりも滑稽な喜劇だからな」

ミコトは自嘲気味に笑みを浮かべてそう言った。

『ミコトは……なにもものからも愛されていない存在よ』

私はミコトが幻想郷に来た日に紫から聞いたことを思い出していた。

そうだ。ミコトは誰からも愛されていないなかったんだ。そんなミコトが楽しい生活なんて送れた？……いや、きっとそんなことはない。だってミコト自身が言っていたじゃない。元の世界に帰りたくないって。自分がいなくなっても……心配する人なんていないって。

「……ミコト。あなた「すみません」文？」

「私……遠慮がなさすぎました。自分が聞きたいからってミコトさんのことを考えずに……本当にすみません」

文はミコトに頭を下げて謝った。

「いや、こつちこそ悪かった。雰囲気悪くしちゃったな」

「いえ、お気になさらずに」

……なんか空気が重いわね。

「ねえ文」

「なんですか霊夢さん？」

「どうせなんだからミコトの写真も撮ったら？」

私はこの空気をなんとかしようと思いい文に提案してみた。

「写真ですか！いいですね！いいでしょうかミコトさん？」

「ああ。構わない」

「ではでは……」

文はどこからかカメラを取り出した。

「それでは撮りますね！」

パシャッ！

文はカメラを構えて何枚もミコトの写真を撮る。

「うんいいですね！やっぱり被写体がいいと撮りがいがあります！」

「あくうん。それは良かった」

ミコトは苦笑いを浮かべてそう返した。やっぱり文のノリが苦手なようね。

「と、そうだ！次は霊夢さんと一緒に取りましょう！」

「わ、私も？」

「ええ！ささ、どうぞ霊夢さん！」

……ミコトと写真か。

「それじゃあ……」

私はミコトの隣に立った。

「霊夢さんもつとミコトさんによってください！というか腕組んじやってください！」

「文、霊夢にそんな無茶を「わかったわ」霊夢!？」

私は文の言うとおりミコトと腕を組んだ。

パシャッ！

「はい、いただきました！」

ミコトが驚いているスキに文は写真を撮った。

「……文。頼むからその写真は新聞には載せるなよ？」

「え？なんでですか？こんないい写真なんだから載せましょうよ」

「ダメだ。あらぬ誤解を与えるだろ」

私としては大歓迎なんだけどね。

「うくん、仕方ないですね。わかりました、新聞には載せません」

「絶対に載せるなよ」

「わかってますって！信用してくださいよ！」

正直あんまり信用できないわね。あの文だもの。

「さて、それでは私はこれで失礼します。帰って今回の取材内容を記事にしなければなりませんので。それではミコトさん、霊夢さんさようなら」

文は羽を出して帰ろうとした。

「待ちなさい」

「あや？なんですか霊夢さん？」

「……さっきの写真現像したら私に頂戴」

私は文に近づいてミコトに聞こえないように耳打ちした。

「もちろんですよ。その代わり、ちゃんと私の新聞読んでくださいよ？」

「わかったわ」

「それでは今度こそ失礼します！」

そうやって文はものすごい速さで飛んでいった。流石は自称幻想郷最速ね。

「霊夢。最後に文になんて言ったんだ？」

「なんでもないわよ。ミコトは気にしなくていいわ」

「そうか。それにしても……すげえ疲れた」

「ふふ。お疲れ様」

「……なんか機嫌よさそうだな？俺は疲れたっていうのに」

「気のせいよ」

まあ実際ミコトの写真が手に入るからとか文の取材で私が見知らなかったミコトの一面が知れたからとかの理由で機嫌はいいんだけどね。

「……まあいつか。それじゃあ夕飯の準備にしよう」

「そうね」

私達は夕飯を作り神社の中に入った。

ちなみにミコトの取材内容の載った文々。新聞は過去最高の発行部数、購読者数を叩き出したそう。まあ当然の結果ね。

第41話

side ミコト

「はい。もう大丈夫ですよ」

「ありがとうございます」

「いえ、お気になさらずに」

「……今俺は永遠亭で白衣を着て怪我をした人の治療を行っている。何故こんなことになっているかというところそれは3時間前に遡る。」

〜3時間前〜

「誰かいるか?」

今日、俺は永遠亭に来ていた。その理由は以前左手を治した時の治療費を払うためだ。その為に先日紫に会い（もちろんあの時（第32話）の報復は忘れていない。まあ仕留めそこねたが）紫に預けていた俺のキャッシュカードから金を引き出してもらっていた（もちろん幻想郷の金に換金してもらい）。

「はいはいどちらさん……つてミコト!?!」

玄関から出てきたのはてみだった。

「よっ、てゐ」

「よっ、じゃないよ!今日はどうしたの!?!」

てゐはすごい勢いで俺に迫って聞いてきた。なんでこんなテンション上がってるんだろう?」

「ああ。今日は前に左手を治したときの治療費を払いに来たんだ。永琳はいるか?」

「うん。まだいるよ」

ん?まだ?」

「まだってどういうことだ?」

「もうすぐしたら紅魔館に出かけるみたい」

「紅魔館に?」

「うん。ほら、あの薬作る為に吸血鬼の診察するんだって」

「ああ。なるほどな」

永琳、ちゃんと薬作ってくれるみたいだな。別に疑っていたわけではないがきちんと行動を起こしてくれているとわかるとやはり安心する。

「もうちよつとしたら出発するみたいだから早く用済ませたほうがいいよ」

「そうだな」

「はい、それじゃあ入った入った！」

てゐるは俺の背中を押して永遠亭の中に入れた。

「おい押すなって」

「お構いなく〜」

(てゐってこんな子だったっけ？なんかはしゃいでる?)

俺は若干テンションの高いてゐるを疑問に思いつつ永琳のところへ向かった。

side 輝夜

「夕飯前には帰ってきますので留守は任せましたよ姫、ウドンゲ」

「わかりました」

「いつてらっしゃい、永琳」

私と鈴仙はこれから紅魔館に出かける永琳を見送りに部屋に来ていた。

「それじゃあ行ってくるわ」

「ちよつと待った！」

出かけようとする永琳をてゐるが引き止めた。

「てゐる？一体どうしたの？」

「出かける前にお客さんの相手してあげて」

「お客さん？」

「俺だよ」

そう言って部屋に入ってきたのは……

「ミコト（ミコトさん）!!」

私の最愛の人。ミコトだった。

「久しぶりだな。輝夜、鈴仙、永琳」

「本当によ！来るの待ってたのよ！」

「そうですよ！」

私と鈴仙はミコトに詰め寄った。

「すまない。中々タイピングがなくてな」

ミコトは少し申し訳なさそうに言った。

「まあ仕方ないから許してあげるわ」

「ああ。ありがとう」

ミコトは笑みを浮かべながら言った。

（ふふ。久しぶりのミコト♪）

私はその笑みを見て自分でもわかるほど機嫌が良くなった。

「それでミコト？今日は何しに来たの？」

「ああ。今日は前に左手を治した時の治療費を払いに来てな。永琳が

出かける前で良かったよ」

「そうね」

「とりあえずこれだけあれば足りるか？」

ミコトは永琳にお金を渡した。細かくはわからないがそれなりの

金額だ。

「ええ。むしろ多すぎるぐらいよ。もう少し少なくていいわ」

永琳は多すぎるといって受け取ろうとしなかった。

「いや、左手を丸々再生したんだからこれくらいが妥当だ。それにこ

れには感謝の気持ちも込めているんだ。受け取ってくれ」

「……わかったわ。そこまで言われたら受け取らないわけにはいか

ないわね」

そう言って永琳はお金を受け取った。

「そういえばこれから紅魔館に行くんだってな」

「ええ。前にミコトが行っていた薬を作る為にね」

「なら俺が紅魔館まで案内しようか？」

「「ええっ!?!」」

私はミコトの今の発言について声を出してしまった。私だけでなく鈴仙とてゐもだ。

「ん？何驚いてるんだ3人共?」

「な、なんでもないわ!」

「そ、そうです!」

「あはは・・・」

((せつかく来てくれたのに・・・))

せつかく来てくれたミコトが紅魔館に行ってしまう。そういうミコトの優しさも私が好きなどころなんだけどやはり残念に思ってしまう。私だけでなく鈴仙とてゐもだろう。

「いえ、私なら大丈夫よ。紅魔館の場所はちゃんと把握しているから」
「そうか。ならいいが」

((よしっ!永琳(お師匠様) ナイスよ(ナイスです)!!))

私達は心の中で永琳に最大限の感謝を抱いた。これでミコトといられるわ!

「それに・・・ふふ」

永琳は私達の方を見て微笑んだ。どうやら私達に気を遣って言うてくれたようね。さすが永琳。空気が読めてるわ。

「どうかしたのか?」

「いえ、なんでもないわ。それよりちょっとミコトにお願いがあるのだけれどいいかしら?」

「お願い?」

「ええ」

永琳はどこからか白衣を取り出した。

side ミコト

「なんだ?この白衣」

俺は永琳が取り出した白衣を見ながら聞いた。

「ミコトには私がない間永遠亭に来た人の治療をして欲しいの」

「治療を？」

「ええ。あなたの能力なら問題ないでしょう？」

「まあ確かに能力を使えば可能だが治せるのは怪我だけだぞ。病気とかは治すことはできない」

俺ができるのは命の力で回復力を促進させることだからな。さすがに病気までは治せない。

「それでも確か進行や悪化は防げるんでしょ？」

「まあそれくらいならできるが」

「それで十分よ。あとはウドンゲに薬を出してもらおうから。というこ
とでお願いな」

永琳は俺に白衣を差し出した。

(まあ特に断る理由はないな)

「わかった」

俺は白衣を受け取りながら永琳のお願いを承諾した。

〜回想終了〜

と言った具合で俺は永遠亭で医者のようなことをしているのだ。

永琳は白衣を着ていないのに何で俺は白衣を着ているのかだとか
白衣を着たとき輝夜、鈴仙、てゐがなぜか顔を赤らめてテンションが
上がっていたとか、そもそも俺の回想なのに何で輝夜の視点があつた
のかとか色々突っ込みたいところがあるがとりあえず……

「なあ、怪我人って普段からこんなにくるのか？さっきのでもう5人
目なんだが」

「い、いえ。普段はもつと少ないです」

「というより来ない日の方が多いはずなんだけど……」

「……」

そう。何故か永琳が紅魔館に出かけてからやたらと怪我人が永遠
亭に来るのだ。輝夜達が言うにはどうやら普段はこんなに来るこ
とはまずないらしい。ちなみに患者は妹紅や竹林に住む兎妖怪たちが
案内していたようだ。それにしても5人って……

「なあ三人共、俺って……なんか呪われてるのか？」

「何言ってるのよ！そんなわけないでしょ！」

「そうですよ！突然何を言ってるんですか！」

「いやだって俺が白衣を着た途端一気に5人も来たんだぞ？もう呪われてるとしか思えないんだが？」

「……………」

俺がそう言うのと三人は反論できずに黙ってしまった。

「い、いや、偶然！偶然だってミコト！……………多分」

「そうですよ！偶然ですって！……………きつと」

少ししてようやくくると鈴仙がフォローしてくれたが……………否定しきれていない。

「逆に考えましょう！いくら永琳でも流石に5人も一気に治してあげるのは無理だけどミコトがいたから治してあげられた！ミコトはいいタイミングで来たのよ！」

「俺がいなかったら5人も来なかったかもな？」

「え？あ、それは……………」

……………輝夜よ。フォローするなら最後までしてくれ。だんだん悲しくなってきた。というか俺今すげえネガティブになってるな。

「……………やっぱりあれは偶然だったのよ。そうに違いないわ。それ以外ありえないわ」

輝夜は俺に全く目を合わせずに言った。やっぱり最終的に行き着くのはそこか。

「……………そうだな。偶然だよな」

俺も偶然だと思うことにした。……………そう思わないともつと悲しくなりそうだし。

「さて、それじゃあひと段落しましたしお茶にしましょう。ミコトさんも疲れているでしょうし」

「そうね」

「お茶お茶〜」

俺達はお茶を飲みに行くために診察室から出ようとする……………

「ミコトさんー！」

ひとりの兔妖怪『りん』がすごい勢いで診察室に入ってきた。

「この子を……この子を助けてください！」
その手には血まみれになった小さな兎がいた。

「この子……どうしたの!？」

「竹林の外で妖怪に襲われてて……それで……」
てゐるの問いかけに兎妖怪は泣きながら答えた。

「とりあえずそこに寝かして」

「はいー!」

りんはベットに兎を寝かした。俺は兎の容態を確認する。

(……これは)

「お願いしますミコトさん……その子を……助けてください。大切な……友達なんです」

泣きじやくりながらりんは言った。だが……

「……無理だ」

「ミコト?」

「この子は……治せない」

「……どうしてですか?どうして治してくれないんですか?治してくださいよ! 私達の怪我を治した時みたいにこの子の怪我也治してください!」

りんは俺が着ている白衣を掴んで懇願してきた。それでも……
「無理だよ。この子は治せない。この子は……もう死んでるから」

「え?」

「俺の能力は……命がないものには効かないんだ。だから……俺にこの子は治せない。治すことができない」

俺の能力『命を理解する程度の能力』は命のあるものにしか適用されない。つまり……死んだものには全く効かない。

「……は、はは。嘘ですよね?そんなの嘘ですよ?治してくださいよ。ミコトさん」

「……すまない」

「すまないってなんですか?早く治してくださいよ。ねえ、早く……」
「……」

俺は答えることができなかった。

「ミコトさん！」

「りん……もうやめなさい」

「……てゐさん」

「この子はもう……助からないんだよ」

てゐは正面からりんに向き合って言った。

「あ……ああ……うわあああああああ！」

りんはてゐにしがみついて大声で泣き喚く。

「お墓作ってあげよ？この子が……静かに眠れるように」

てゐはりんを優しく抱きとめて言う。俺はその光景を黙って見て
いることしかできなかった。

あれから数刻して、俺達はあの兎のお墓を作り埋葬した。

「皆さん、この子のお墓を作るのを手伝ってくれてありがとうございます
ます」

「ううん。気にしないでいいわ」

「私達には……これくらいしかできませんから」

「それでも……ありがとうございます」

りんは笑みを浮かべて言った。とても儂く、悲しげな笑みを浮かべ
て。

「本当にすまない、りん。俺は……」

「……もういいんです。ミコトさんのその気持ちだけで……
十分ですから」

「……そうか」

「はい。それでは私はこれで。失礼します」

りんは頭を下げて竹林の奥へと姿を消した。

「……」

「あの……ミコト……」

「……俺たちも中に戻ろう。永遠亭を開けっ放しにしてたからな」

「……そうですね。戻りましょう。そろそろお師匠様も戻ってきますし」

「……そうですね」

「うん」

俺達は永遠亭に戻る。その間誰も一言も喋らなかった。

第42話

side ミコト

「……………ここか」

俺は今、人里から少し離れた地にたつ一件の家の前に来ている。

コンコン

「誰かいますか?」

俺は玄関を数回ノックした後人がいるかどうかを確かめる。すると……

ガラツ

「は〜い、誰かしら?」

出てきたのは青い髪にハイビスカスの髪飾りを付けた女性だった。

「はじめまして。俺は一夢命というものです。どうかミコトと呼んでください」

「これはご丁寧に。おねーさんは優心、雅優心（みやび　こころ）よ。優心って呼んで。よろしくね♪」

ぼわぼわしているというかほんわかしているというか……なんか近所のお姉さんっていう印象だな。よくわからないけど。

「それで〜?ミコトくんはなんの用でここに来たのかな?」

「ええ。優心さんは羅宇屋（らうや）ですよね?」

俺は優心さんの問いかけに普段の俺からは考えられない丁寧な口調で応えた。なぜか自然にこんな口調になってしまう。

「そうよ〜。幻想郷でもタバコが流行り始めたからそっちの仕事は最近あまりしてないけどね。なるほど。あなたが紫が言っていた久しぶりのお客さんね」

「ええ」

羅宇屋とは羅宇のヤニ取りやすげ替えを行う仕事だ。俺が今日ここに訪れたのは煙管の羅宇を取り替えるためだ。以前紫に会った時に煙管の調子が悪かったから相談したところここを紹介された。

「ふふ。それじゃああなたの煙管を見せて頂戴」

「はい。どうぞ」

俺は煙管を取り出し優心さんに渡す。

「!これは……」

煙管を見た瞬間優心さんは顔を強ばらせた。

「優心さん?」

「……」

優心さんは黙って煙管を見つめ続けている。その雰囲気は先ほどのものとは違う。憂いを帯びた悲しそうな、愛おしそうな目をしている。

「……ミコトくん、これをどこで手に入れたのかしら?」

しばらくして優心さんが聞いてきた。その視線はいまだに煙管に向けられている。

「これは香霖堂というところでもらったものですけど」

「そう、そんなところに……」

「この煙管がどうかしたんですか?」

「ええ。この煙管……すごく綺麗ね!」

「……はい?」

先ほどの憂いを帯びた表情とは一変。優心さんは目を輝かせた。

「この洗練された造形、装飾……素晴らしいわ!是非これを譲って頂戴!代わりにここににある煙管ならなんでもあげるから!お願い!」

優心さんは思わず了承してしまいそうになるほどのすごい勢いで迫ってきた。

「えつと……この煙管は俺のお気に入りだから譲れません。これの代わりになるものがあるとは思えませんし。諦めてください」

「……はあ、やっぱダメか。仕方ないわね、諦めるわ。それじゃあ仕事に取り掛かりますか!羅宇を取り替えればいいのかしら?」

「ええ。お願いします」

「りよくかい。それで?色はどうするかしら?」

「……羅宇の色か。」

「……黒で」

「黒?私から聞いておいてなんだけどこの煙管なら今と同じ紅のほうが

「がいいんじゃないかしら？」

「……いえ、黒でお願いします」

「まあミコトくんがそう言うならいいけど……何か黒に思い入れがあるのかしら？」

「……思い入れか。」

「……ただ黒が好きなだけです。それ以外に理由はありません」
そう。ただ好きただけだ。何よりも黒が。

「わかったわ。それじゃあ羅宇を取り替えてくるからここで待っていて頂戴」

「ええ。わかりました」

優心さんは作業部屋と思われる部屋に入った。

「……ふう」

俺は部屋の適当なところに座る。

「……演技うまいですね。優心さん」

彼女は……真実を語っていなかった。あの煙管を欲した本当の理由を。さつき彼女ははぐらかそうとしていたので敢えて乗った。

あの煙管は彼女にとって特別なものなのかもしれない。それこそ……彼女の『心』に深く関わるほどの。だが、それでも……

「……なんであれにこだわってんだろ？」

俺はあの煙管を手放したくなかった。理由はわからないが……あの煙管を持ち続けたいと思った。

side 優心

「……まさか、今になってこの煙管が見つかるなんてね」

私は煙管の羅宇を取り替えながら言った。

この煙管は私が1000年前からずっと探し求めていたもの。この煙管を見つげるために私は羅宇屋になったのだ。

「正直……もう諦めてただけどなく」

この煙管は……父が持っていた煙管。父が大事に大事にしていた煙管。老衰で父が亡くなった後私に渡された煙管。そして……父以外を認めなかった呪われた煙管。

父が亡き後、多くの人がこの煙管を求めた。私は自分では煙管は吸わないので求める人全てに煙管を吸わせてあげた。だが……この煙管を吸った者はことごとく命を落としたり。例外なく全てだ。だから私は……恐ろしくなっこの煙管を捨ててしまった。父の形見だったのに……

「後になってすごく後悔したなく」

後悔した後はもう遅かった。煙管の行方は分からず、探しても見つからなかった。だから私は羅宇屋になったのだ。羅宇屋になれば煙管が向こうから来てくれるのではないかと思ったから。そして羅宇屋になって1000年。ようやく、私が求めていたものが来た。来たのがだ……

「あなたは新しい所有者を見つけたのね」

私は羅宇を取り替え終わった後の煙管を見てそう呟いた。元々は紅い羅宇がついていた煙管。父は気に入って紅の羅宇を使っていた。でも今は黒い羅宇がついている。紅以外はこの煙管には合っていないと思っていたけど……黒い羅宇のついたこの煙管も美しい。

「あなたがミコトくんの物だっという証明かしらね」

一夢命。父を除いてこの煙管を吸っても死ななかつた、たった一人の存在。この煙管は彼を認めたのだろう。だから彼はこの煙管を吸っても死なないのだ。

「仕方がない、か」

これは煙管だ。煙管は誰かに吸ってもらうことによつて真価を發揮する。なら……この煙管は彼が持つべきだ。

「……彼は殺しちやあダメよ。彼、あなたに相応しい人みたいだから」

私は最後に煙管にそう呟いてミコトくんの待つ部屋に戻った。

side ミコト

「お待たせ、ミコトくん」

30分程して優心さんが戻ってきた。

「はい、羅宇の取り替え終わったわよ」

優心さんに差し出された煙管を受け取った。煙管には深い黒の羅宇がついている。

「どうかしら?」

「ええ。素晴らしいです。ありがとうございます」

「ふふ、どういたしまして」

「それじゃあお代を・・・」

俺は代金を払おうと財布に手をかける。が・・・

「お金はいらわないわ。その代わりに幾つかお願いを聞いてくれるかしら?」

「お願い?」

「ええ。まず・・・ミコトくんって料理が得意かしら?」

「ええ。まあそれなりに得意ですが」

「なら食事を作ってくれないかしら?自分で作るものを食べるのには飽きちゃったから」

料理か。まあそれくらいなら全く問題ないな。

「わかりました」

「ふふ、ありがと。それじゃあ次をお願いね。これからする質問に答えて欲しいの」

「質問に?」

「ええ。いいかしら?」

「・・・はい。どんな質問なんですか?」

「あなたは・・・この煙管を持つことによって不幸が起きるとしたらどうする?」

優心さんは真剣な表情で聞いてきた。・・・この煙管が不幸を

ね。やはりこの煙管には何かあるようだな。だが……
「……別に、どうもしないですよ。さつきも言いましたがこの煙管はお気に入りですので。手放すつもりありませんし。それに……不幸には慣れていきますんで」

例えこの煙管がどのようなものでも、俺はこれを持ち続ける。その意志が変わることはない。

「……そう。わかったわ。それじゃあ次のお願いよ」

「まだ何かあるんですか？」

「大丈夫よ。これが最後だから。それに大したお願いじゃあないし」

「どんなお願いですか？」

「その煙管。ここで吸ってくれないかしら？」

「まあそれくらいなら」

俺は煙管を吸う準備をする。

「はい」

優心さんは火を出してきた。

「ありがとうございます」

俺は火をつけて煙管を吸う。

「どうかしら？」

「ええ。いい感じですよ」

「それはよかったわ。ミコトくん」

「なんですよ？」

「これからもご鼻屑に♪」

優心さんは暖かい笑顔を向けて言ってきた。

「ええ」

俺は煙管を吸いながら答えた。

第43話

side ミコト

「それにしても早いものだなく」

博麗神社の一室の炬燵に入ってお茶を飲んでいると遊びに来た魔理沙がそんなことを口にした。

「何が早いのだよ」

「決まってるんだろ？ミコトが幻想郷に来てだよ。もうすぐで2ヶ月になるんだぜ」

「……そうか、もうすぐで2ヶ月なのか。」

「そう言われればそうね。もう2ヶ月……あつという間だったわね」

「本当にな。ミコトもそう思うよな？」

「……いや、俺はそうでもない。むしろまだ2ヶ月しか経ってなかったのかと思った」

「そうなの？」

「ああ。なにせ……この2ヶ月は色々濃かったからな」
俺は目の焦点を少し遠くして答えた。

幻想郷に来て2ヶ月、本当に色々あった。初日には酔った霊夢と藍を宥めた。翌日には空を飛び弾幕を出せるようになった。一週間後には紅霧異変を解決するために紅魔館に乗り込み咲夜、フランとの死闘。その後は失った左手を治すために一週間永遠亭で過ごす。左手が治つてようやく博麗神社に帰つてき後も紅魔館で執事になったり、寺子屋で子供たちの先生になったり、永遠亭で医者になったり。文からの取材を受けたり煙管の羅宇をすげ替えるために優心さんのところにも行ったな。

これだけのことがたったの2ヶ月の間に全部起こった。しかもこれ以外にもまだ色々なことあった。本当に色々なことが。まあ全部説明するとかかなり長くなるので説明は割愛するが。……とい
うか俺は誰に説明しているんだ？

「普通じゃない？まあ異変は起きたけど」

「そうだぜ。話を聞く限り少し騒がしかったくらいで普通だぞ?」

霊夢と魔理沙は何事もないといった感じでそう言う。

「いや、これで普通とか……外の世界からきた俺にとってこれはかなり異常だぞ?まず向こうじゃありえないからな」

「そうなの?だとしたら外の世界ってつまらなさそうね」

「全くだ。よくミコトはそんなつまらない世界耐えられたな」

「いや、別につまらないことは(多分)ないんだが」

まあ俺は外の世界での生活を楽しいと思うことが少なかったから正直よくわからないがな。

「まあそれはそれとしてミコト、ひとつ聞いていいか?」

「なんだ?」

「なんでまたお茶淹れてるんだ?私達の分もミコトの分もまだ残ってるだろう?」

魔理沙の言うとおり俺はお茶を淹れている。まだ霊夢のも魔理沙のも俺のも残っているにも関わらずだ。

「必要だからだよ。そうだよな……紫」

「え?」

俺が紫の名を呼ぶと魔理沙は疑問の声をあげた。そして……

「ふふ。本当に気が利くわねミコト」

スキマが現れ、中から紫が出てきた。

「それはどうも」

俺はいきなり出てきた紫に全く驚くことなくお茶の入った湯呑を紫に渡した。

「ありがとう」

紫は湯呑を受け取りお茶を口に含む。

「うん。美味しいわよ」

「それは良かった」

「ってちよつと待て!なに自然に会話してるんだよ!」

俺と紫のそんなやり取りをしていると魔理沙が突っ込んできた。

「どうかした魔理沙?急に大声出して」

「いやいやいやいや!なんで急に紫が出てきたのにそんなに平然とし

てるんだよ!？」

「急にはないぞ。魔理沙が来る前からいたし」

まあ姿は現わさなかつたけどな。神社にいるときは基本的に命を感じる能力はONにしているから俺にはわかつた。

「だつたら言えよー」

「そんなこと言われても……なあ？」

「そうよ。だって……」

「突然出てきて驚かせたほうが面白いだろ（でしよ）？」

俺は紫と声を合わせて言った。やはり紫とは話が合うな。

「面白いって……お前らな」

「諦めなさい魔理沙。いつものことだから」

霊夢は少し呆れた様子で言った。そう、霊夢の言うとおりいつものことなのだ。紫が来るたびにこのやりとりは行われている。その度に霊夢は驚いていたがもう慣れたようだ。

「……霊夢。苦労してるんだな」

「もう慣れたわよ」

魔理沙が珍しく霊夢に同情しているな。そんなに苦労かけるようなことだったのか?だとしたら要反省だな。

「それよりも紫、何しに来たのよ。お茶を飲みに来ただけじゃあないんでしょ?」

霊夢が紫に聞いた。紫が神社に来るときは何かしら用事があるからな。まあ大抵は暴れまわってる妖怪を退治して来いというものが。

「ええ。実は……ミコトの歓迎宴会をしようと思つて」

「ミコトの歓迎宴会?」

「そうよ。ミコトが幻想郷に来てもうすぐで2ヶ月。この間の新聞のおかげでミコトの存在も幻想郷中に知れ渡ることになったし。ミコトも本格的に幻想郷の一員になったって意味合いを込めての歓迎会よ。どうかしら?」

「いいなそれ!やろうぜ!」

「そうね。ミコトが来たばかりの時は簡単な食事会のようなことをし

ただけだし、まだミコトが来てから一回も宴会はしてないし。いいんじゃないかしら」

「決まりね」

「……おい、中心人物である俺をさし置いて勝手に話すすめて速攻で決まったぞ。俺の意思は無視なのか？まあ別に断るつもりはなかったからいいんだけど。それに……」

「あら？なんかミコト嬉しそうね」

「ん？そうか？」

「ええ。顔が少し緩んでるわ」

「霊夢は微笑みながら言ってきた。……まさか顔に出るとはな。」

「霊夢の言うとおりの正直言って結構嬉しい。俺がこの幻想郷の一員として認められたような気がするから。俺はここにいてもいいんだって思えたから。だから今回の紫の提案は俺にとって非常に嬉しいものだ。」

「それで、いつやるんだ？」

「明日よ」

「……いつだったって？」

「だから明日よ」

「……24時間後？」

「そうよ」

「……いくらなんでも急すぎないか？それじゃあ人が集まらないで宴会にはなりそうもないぞ？」

「紫、いくらなんでも急すぎるわよ。そんなんじやあ人が集まらないじゃない」

「霊夢も同じことを思っていたらしく紫に言った。」

「大丈夫よ。だってあなた達以外の人達にはもう言うてあるもの」

「……は。」

「ミコトの歓迎宴会をすることはもう1週間前に連絡済みで皆にも了承を得ているわ。だから人はちゃんと集まるわよ」

「……なんで当事者である俺や霊夢達への連絡が最後になってい

るんだ?」

「そんなの決まってるでしょ……その方が驚いてくれて面白いと思ったからよ♪」

紫はすごいいい笑顔で言った。実際に俺たちの反応は紫にとって面白かったようだ。

「……霊夢、魔理沙。済まなかった。これからは驚かせるようなことは自重する」

「……分かればいいわ(ぜ)」

今まであんまりなかったから知らなかったけど……驚かされると疲れるんだな。本当自重しよう。……まあまたするかもだが。

「ああ、それから会場は博麗神社にしてるから」

「はあ!? どういうことよ!!」

「いいじゃない。この神社なら皆場所は知ってるしそれだけの広さがあるんだから」

「準備や後片付けはどうするのよ!」

「ちゃんとみんなでやるから大丈夫よ」

「うちで宴会するとき準備はともかく、後片付けは誰かに手伝ってもらったことなんてほとんどないんだけど?」

「……それじゃあねミコト、霊夢、魔理沙。また明日」

紫はスキマを開いて中に入っていった。

「待ちなさい紫!」

「無駄だ霊夢。紫の命はもうどこにも感じない」

「全くあいつは」

霊夢は額に手を当てながら言った。

「あくなんかごめんな霊夢」

「なんでミコトが謝ってるんだ?」

「そうよ。私が怒ってるのは紫にでミコトには関係ないわよ」

「いや、俺の歓迎宴会のせいで霊夢に苦労かけることになるみたいだから」

「……はあ」

俺の言葉を聞いて霊夢は一瞬キョトンとした顔をし、その後呆れたようにため息をついた

「ミコトって本当に律儀ね。歓迎される側のアンタがそんなことは気にしないでいいのよ」

「そうだけ。前々から思ってたけどミコトはいちいち気にしすぎだぜ。もっと気楽いけよ」

「……俺が律儀か。そんなことはないと思うんだがな。充分気楽に生きてるつもりだし。」

「まあ魔理沙みたいに気楽になりすぎても困るけど」

「どう言う意味だよ霊夢！」

「そのままの意味よ」

そのまま霊夢と魔理沙は口論になった。俺それを特に止めるわけでもなく眺めていた。二人は仲がいいから言い合いをするのは猫がじゃれ合うのと同じようなものだと思っているからだ。

（……明日は俺も可能な限り手伝おう）

俺は少しぬるくなってしまうたお茶をすすりながらそんなことを考えていた。

↳翌日

もうすぐ日が沈むという時間帯。宴会に参加するべく俺の知り合い（中には知らない人達）が博麗神社に訪れ皆で宴会の準備をしている。そんな中俺は……

「……暇だ」

一人暇していた。というのも俺も宴会の手伝いをしようとしたら

「ミコトは何もしなくていいぞ。これはミコトの歓迎宴会の準備なんだから主役はゆっくりしてるといい」

「ここは私たちがやるからミコトは楽しみにして待っていなさい」

「ミコトさん！準備は私たちがやりますのでどうぞゆっくりしててください！」

と藍、咲夜、鈴仙に言われてしまい手伝うことができなくなり、暇になってしまったのだ。

「……はあ」

本当に暇だ。なんにもやることないし皆宴会の準備をしているからに話し相手もない（レミリアやフラン、輝夜までも準備に参加している）。

「随分暇そうね。ミコト」

そんな風に暇を持て余していた俺に紫が話しかけてきた。ちなみに今は周囲に人が多すぎて落ち着かないため能力をOFFにしている。なので紫の接近に気がつかなかった。

「全くだ。皆は俺を気遣ってくれてるみたいだが正直俺としては準備の手伝いをしたい。じつと待つだけというのは俺の性に合わない」

「あなたって本当に真面目ね。そんな風に生きてて疲れない？」

「疲れないよ。それが俺の生き方だからな。というよりなんで皆してあんなに張り切って準備しているんだ？正直何人かは面倒くさがると思っていたんだが」

「そりゃあ張り切りもするわよ。なにせこれはミコトの為の宴会ですもの」

俺のための宴会だからだと？

「どういうことだ？」

「今日ここに来た皆はあなたに感謝しているのよ。皆あなたに助けてもらった。あるいはあなたに手を貸してもらった。そんな人たちばかりよ。だからあなたをもてなそうと準備しているのよ」

……俺をもてなす為に。

「……ミコト。あなたが外の世界でどんなふうに住らしたのかは詳しくは知らないし少なくとも私は知ろうとは思わない。でもこれだけは言っておく……ここはあなたが以前まで暮らしていた世界じゃない。ここではあなたを拒む人はいないしあなたを虐げる人もいない。あなたは……この幻想郷の一員よ」

紫はいつもの胡散臭い笑顔でなく、優しく暖かい笑顔でそう言った。

「……昨日も思ったけど、紫は俺を警戒しているんだろ？俺は幻想郷を滅ぼすかもしれないから。そんなふうにしていいの？」「いいのよ。あなたが幻想郷の敵になるのならその時に相応の対応をする。でも少なくとも今は違うでしょう？ならあなたは……大切な幻想郷の一員よ」

「……そうか」

本当に紫のことはいまいちよく掴めないな。でも……

「紫……ありがとう」

「……ふふ。どういたしまして♪」

俺の礼の言葉に対して、紫はいつもの胡散臭い笑顔を浮かべて返した。

「ミコト」

「ん？」

声のする方に振り向くとそこには霊夢がいた。

「宴会の準備できたわよ。行きましょ」

霊夢は手を差し出してきた。

「ああ」

俺は霊夢の手を掴み、霊夢と共に宴会の会場に向かう。

さっきまで俺がたところを振り返ると紫はそこにはいなかった。

第44話

side ミコト

「はいみんな注目！」

宴会の会場である博麗神社の一室に霊夢の声が響き渡った。

「今日は皆の知っているとおりミコトの歓迎宴会よ。そこでミコトに乾杯の音頭をとってもらうわ。ほら、来なさいミコト」

「あ、ああ。えつと……今日は俺の歓迎会に来てくれてありがとう。それで、その……」

……やべえ、何話していいのか全くわかんねえ。

「おいおい！まさかミコト照れてるのか？」

「……うるさい」

言い淀む俺に向かって魔理沙がからかってきた。他にもやけた奴が何人かいる。

「……あゝもう！とにかく来てくれてありがとう！これからもよろしく頼む！以上だ！乾杯！」

「「「かんぱーい!!!」」」

多少……というかかなり投げやりになってしまったが乾杯の音頭をとり宴会が始まった。

「随分と戸惑ってたわね。それにすごく投げやりだったし」

乾杯の音頭をとった俺に対して霊夢がクスクスと笑いながら言った。

「仕方がないだろ。こんなの初めてで慣れてないんだから」

「だからってあれはないわよ」

「……わかってるよ。もう言わないでくれ。結構恥ずかしいんだから」

「ふふふ。ええ、わかったわ。ほら飲みましよ。これはミコトのための宴会なんだから」

「ああ」

俺は近くにある酒とツマミをとった。

「ミコト」

俺が酒をグラスに注ぐと霊夢はこちらに自分のグラスを向けてきた。

「もういつかい。今度は私達だけでね」

「……そうだな。それじゃあ……」

「乾杯」

コツン

俺は霊夢とふたりで乾杯する。あまりいい音ではなかったが、その音は耳によく通った。そして俺と霊夢はグラスの中の酒を飲み干す。これが俺にとつての宴会の本当の始まりだ。

「よっミコト！飲んでるか？」

霊夢と一緒に酒を飲んでみると魔理沙が話しかけてきた。その傍らには見覚えのない人物が立っている。金髪に白い肌、青と白の服をきた少女だ。

「ああ、飲んでるよ。それよりその子は？」

「はじめまして。私はアリス・マーガトロイド。魔理沙の友人よ。あなたのことは魔理沙から聞いているわ。よろしくねミコト」

「ああ。よろしく」

魔理沙の友人か……。それにしても結構礼儀正しいな。

「なあミコト。今なんか失礼なこと考えなかったか？」

「いいや、そんなことないぞ」

実際は考えてたけどな。さすがというかなんというか、勘がいいな魔理沙。

「それよりもミコト。私はあなたにお礼を言いに来たの」

「俺に礼だと？」

「ええ」

「アリスはミコトと初対面でしょ？それなのにミコトになんの礼を言いに来たっていうのよっ」

霊夢がアリスに聞いた。確かに俺はアリスから礼を言われるようなことはした覚えが全くない。

「あなた魔理沙に人のものを盗るなって説教してくれたんでしょ？そのおかげで魔理沙持つて行かれた本が返ってきたのよ。正直返してもらえないと思つて諦めてたから嬉しかったわ。だからお礼を言うの。ありがとうミコト」

「……なるほど。アリスも魔理沙の悪い癖の被害者だったのか。」

「気にするな。俺は俺が魔理沙の行いに問題があると思つたから説教しただけだからな。その結果アリスの物が帰ってきただけだ。特別礼を言われるようなことじゃあないさ」

「そんなことないわ。その結果が私にとってプラスになつたんだから。お礼を言うのは当然よ」

「だが……」

「ミコト、そういう時は素直に礼を受け取っておけばいいのよ。でないと話がこじれることもあるんだから。ミコトのそういうところ、少し改めたほうがいいわよ」

霊夢が俺に対してそう言ってきた。……確かに霊夢の言うとおりかもしれないな。礼を受け取らないのはアリスにとって失礼かもしれないし。

「そうだな。それじゃあその礼は受け取っておくよ。どういたしまして、アリス」

「ええ」

俺が礼を受け取るとアリスは微笑んだ。霊夢の言うとおり、礼は素直に受け取るものだな。それが相手の為でもあるし。

「また魔理沙に何か盗られたらいつでも言ってくれ。すぐに魔理沙に説教するから」

「そうするわ」

「……いや、お前ら本人を目の前にして何言ってるんだよ。というか私は別に盗つてるわけじゃあないぜ。ちよつと死ぬまで借りるだけだ」

「その死ぬまでが問題なんだよ（なのよ）」

「だ、だってアリスは人間の私よりも絶対に長生きするから私が死ぬまでなんてあつという間だろ?」

「……また魔理沙は。」

「ほう、死ぬのなんてあつという間か……じゃあ魔理沙、お前のその筈、10年程貸してくれないか?」

「はあ!?なんでだよ!10年も貸せるわけないだろ!」

「何言ってるのよ。10年なんてあつという間でしょ?だって10年後つて言ったらまだミコトも魔理沙も余裕で生きてるんだから」

「うっ……それは……」

「……わかっただろ。10年でも十分に長いんだ。だからもう死ぬまで借りるなんて馬鹿なことはずんなよ?」

「……わかった」

よし。魔理沙はきつちりと反省したようだな。

「わかればいい」

俺は魔理沙の頭を撫でた。

「ん……って何するんだぜミコト!」

「わり、嫌だったか?」

「い、いや。別にそういうわけじゃあ……」

魔理沙は小声でそう言った。やっぱ嫌だったのかな?

「……あもう。羨ましい」

「……何かしら?ミコトの前だと魔理沙がなにか可愛いわね」

「さて、んじゃあ飲みなおすか。ほら、三人とも酒注ぐからグラス出せ」

「「うん」」

俺は三人のグラスに酒を注いだ。そして自分のグラスにも酒を注ぎの再び酒を飲み始めた。

「ミコト、ちょっといいか？」

「藍」

しばらくして霊夢も魔理沙もアリスも他の人の所に向かった後、藍が声をかけてきた。なんでだろ？藍と話すのってすごく久しぶりなような気がする。つい三日前に数式について4時間語り合ったばかりだっていうのに。

「楽しんでるかミコト？」

「ああ。すごく楽しいよ」

「それは良かった。これ、私が作ったんだが食べてみてくれるか？」

そう言って藍はいなりずしを差し出してきた。

「ああ、もちろん。それじゃあいただきます」

俺は藍の作ったいなりずしを口に含む。

「うん。美味しいぞ」

「そうか。良かった」

藍は嬉しそうに言った。よほど自分が作ったものが褒められて嬉しかったのだろう（いや、違うから by 作者）

「それよりもミコト、すまなかった」

いきなり藍が謝ってきた。

「何がだ？」

「……………以前紫様がいろいろ迷惑をかけてしまったようだからな……………ああ、そのことか。確かに迷惑（特に32話とか32話とか32話とか）はかけられたな。」

「前にあったときは話に夢中になりすぎて言うのを忘れてしまっていて……………本当にすまない。紫様に代わって謝る」

藍は頭を下げてきた。

「別に藍がそこまでしなくてもいい。それにあまり気にしていないし……………言い方はおかしいけど楽しくもあったからな」

「楽しかった？」

「確かに紫のしたことで迷惑に感じたこともあった。けど、外の世界じゃ俺にそんなことしてくる奴はあんまりいなかったからな。だ

からそうやって紫が構ってくれるのが楽しくもあつたんだよ」

「・・・そうか」

「ああ。だから紫には迷惑以上に結構感謝してたりする」

これは俺の本心だ。紫は掴めないし胡散臭い奴で俺のことを警戒しているけど・・・紫のおかげで幻想郷での生活が更に楽しく思えてるのも事実だ。だから紫には感謝している。

「あ、これ紫には内緒で頼むな」

流石に本人に知られたら恥ずかしいし。

「ふふ、どうしようかな？」

藍はいたずらっぽく笑ってそう言った。藍ってこんな奴だったっけ？

「・・・頼む」

「そうだな・・・今度ミコトがとっておきの甘いお菓子を作ってくれたら言わないで置いてやる」

くっ、足元見やがって。

「わかったよ。それで手を打つ」

「契約成立だな。楽しみにしているよ」

「ああ」

こうして、俺は藍にとっておきのお菓子を作ってやることになった。

「こんなところで何してるのよ。ミコト」

私は宴会場から出て縁側で座っているミコトに声をかけた。

「ああ。ちよつと一服しにな」

そう言つてミコトは煙管を取り出した。

「そう。火付けてあげるわ」

「ああ。頼む」

私はミコトからマッチを受け取つてミコトの煙管に火をつけてあげた。

「ありがとう」

ミコトは煙管を口に咥えた。

「どうミコト楽しんでる?」

「ああ、もちろんだ。こんなに楽しいことは外の世界でもあんまりなかったしな」

・・・外の世界か。

「ねえミコト・・・ごめん。やっぱりなんでもないわ」

「・・・17回」

「え?」

「これで17回目だ。俺が永遠亭から帰つてきてからそうやって霊夢が俺に何か聞こうとしたの」

「数えてたの?」

「まあな。それよりも聞きたいことがあるんなら遠慮せずに聞けよ。気になってることがあるんだろ?」

・・・気になってること。私が知りたいこと。それは・・・

「ねえミコト。ミコトは・・・外の世界で愛されてなかったのよね?」

「ああ。そうだ」

ミコトは普段通りに、何も動じずに答えた。

「それじゃあ・・・『神楽』って子はどなの?」
「!？」

『神楽』の名前を出したらミコトは目を見開いた。先程とは明らかに違う反応だ。

「……そっか。あの時、霊夢もいたんだよな」

あの時っていうのは輝夜と会った時、ミコトが『神楽』の名を口に
した時だろう。

「紫に何か言われたのか？」

「……ええ。まあ」

紫は言っていた。今のミコトが愛されていることに気がつかない
のはその神楽が原因だと。だから私は知りたい。『神楽』のことを。

「……そうか」

それからミコトは黙り込んだ。何も言わずに、煙管を吸っている。
その表情には憂いを帯びていた。私はそんなミコトを黙って見つめ
る。

「……世界」

「え？」

「神楽は……俺にとって世界だった。誰からも愛されず、辛く
て、苦しくて生きるのが嫌になっていた俺に希望を……意義を……
愛をくれたたった一人の人だったから。神楽がいたから俺の世界が
成り立っていたんだ」

ミコトの世界……ミコトをたったひとり愛した人。それが『神
楽』

「……神楽は今どうしてるの？」

私はミコトに聞いてしまった。……ミコトがなんて答えるの
かを薄々気がついていながら。

「……死んだよ」

……やっぱりそうなんだ。当然ね。そうでなきゃ……
ミコトが神楽を置いて幻想郷に来ることなんてなかっただろうから。
ただ……

「神楽は……俺が殺した」

「!？」

ミコトのこの答えは予想外だった。

「ミコトが……殺した？」

「……ああ」

どういうこと？どうしてミコトは神楽を殺したの？神楽は……
ミコトにとって世界なんでしょ？それなのにどうして……

「ミコトそれって「霊夢」

ミコトは私の言葉を遮った。

「そろそろ戻ろう。せつかくの宴会なんだから。楽しまないとだろ
？」

ミコトは笑みを浮かべてそう言った。ひどく儂く、悲しそうな笑顔を浮かべ。

「……そうね。戻りましょう」

私はそう答えた。可能な限り笑顔で、可能な限り自然に。何事もなかったかのように。

「んじゃ行くか」

「ええ」

私はミコトと並んで宴会場に戻り、ミコトと一緒に飲み直した。宴会が終わるまでずっと。あの話がなかったことにするかのよう。ひたすらにミコトと楽しみながらお酒を飲んだ。

閑話 第0話〈序奏〉

その出会いは偶然か必然か

その出会いは喜劇か悲劇か

その出会いは……奇跡か禍いか

誰よりも深い愛を持ちながら誰からも愛されなかった少年

誰からも愛されていながら誰も愛さなかった少女

これは少年が幻想に迷い込み命の理解者となるよりも前の話

美しき深黒（しんこく）の少女との出会いのお話

〈3年前〉

side ミコト

俺の目の前に見える光景は偽りだ。

父さんと母さん、兄さんと共に楽しそうご飯を食べている。

友人たちと一緒に笑い合って他愛のない話をしている。

好きな女性と腕を組んで歩いている。

この光景は全部偽りだ。

真実であるはずがない。

なぜなら俺は

誰からも愛されていないから。

「……またこの夢か」

学校の屋上、そこにある階段室の上で眠っていた俺は目を覚ました。最近毎日のように見る夢。皆と笑い合う夢。皆と語り合う夢。ただ……普通にと人と触れ合う……ただの『幸せ』な夢。

「……くだらない」

本当にくだらない。こんな夢を見るとは。こんな……永遠に訪れることはないであろう『幸せ』な夢を見るなんて。

夢は深層心理だ。夢はその者の心の願望を表す。

つまり……俺はあんなありふれたただの『幸せ』を求めているということだ。

絶対に手に入らないと知っているのに。

「ははは……」

俺は乾いた笑い声をあげる。

ありえない……ありえないありえないありえないありえない

ありえないありえないありえないありえないありえないありえないありえないありえない

あんな『幸せ』俺にはありえない。なぜなら俺は誰からも愛されていないから。誰からも虐げられているから。誰も俺のことなんて見ないから。

だから……あれはただの……虚しい『夢』なんだ。

「……………今何時だ？」

俺は携帯を取り出し時間を確認する。時刻は14時。まだ授業の真つ最中だ。まあ俺には関係ないけどな。授業なんて入学以来一度も受けたことない。そのことを咎める人もいない。俺は皆に嫌われているからいい方が都合がいいのだ。たとえこのまま授業に出なくても、やつかい者の俺は問題なく卒業できるだろうしな。

「……………もうひと眠りするか」

俺はもう一度眠ろうと目を閉じた。すると……

♪

「ん？」

歌が聞こえてきた。聞いたことのない知らない歌が。その歌を奏でる美しい声が。

そしてそれと同時に感じたことのないいい香りを感じた。

俺は気配に敏感だ。だから人がいることには気がついていた。いつもなら誰が来たとしても気にせず無視をしていたが……………「誰だ？」

今回は何故か気にせずにはいられなかった為俺は下を見た。

そこには『黒い』少女がいた。

黒く長い髪に黒い眼、学校指定の黒い制服を着て黒い煙管を啜えた『深黒』の少女が。

「……………誰だ？」

俺に気がついたらしく少女はこちらに振り向いた。

「……………すまない。気を散らせてしまったか？」

俺は少女に謝った。

「……………」

少女は何も言わない。

「どうした?」

「……………いや、なんでもない。こちらこそすまなかつたな。まさかこんな時間に誰かいるとは思わなかつたのでな」

俺が声をかけると少女は煙管をしまいながらそう答えた。まあ今は授業中だからそう思っても仕方がない。

「……………おいお前、こっちに来い」

少女は俺に近くに来るように手招きした。

「……………ああ」

俺は階段室の上から降りて少女の近くに行く。そして少女のすぐ隣に立つ。

「……………お前、名前は?」

「……………命だ。一夢命」

「一夢命か……………良い名だ。覚えてやろう」

少女は笑みを浮かべながら言った。

「……………それはどうも」

「ふん。愛想のない奴だ。私は神楽、紫黒神楽(しこくかぐら)だ。特別に神楽と名前で呼ぶことを許してやる。光栄に思うんだな。その代わりに私もミコトと呼ばせてもらうがな」

神楽は笑みを浮かべたまま偉そうにそう言った。だが何故かそんな少女の態度に不快な思いは全くしなかつた。

「……………なあ、あんた「神楽と呼べ」といったらどう?」……………
神楽」

「なんだ?」

「お前は……………なんとも思わないのか?」

「?何がだ?」

「……………俺のこと不快に思わないのか?」

「?何を言っている?何故会ったばかりのミコトに対して不快に思わなければならぬ?」

「……神楽は俺を不快に思わない？今まで会ってきた人とは違うのか？」

「そんなことよりもミコト、少し屈め」

「なんでだ？」

「いいから屈めと言っているんだ。視線を私に合わせろ」

神楽は命令口調で言った。

「……わかった」

俺は少し屈んで神楽と眼を合わせる。神楽の黒い眼と。

「……ふん。やはり中々の美形だな。まあこの私には劣るがな」

「……そうだな」

俺は素直にそう思った。神楽は美しい。今まで見てきた誰よりも、何よりも。これ以上に美しいものなんて存在しないと思わせるほどに……美しい。

「……」

「……」

俺と神楽は見つめ合う。瞬きの一つもせず。一瞬たりとも眼を逸らさずに。俺の眼には神楽の黒い眼が映る。神楽の眼には俺の黄金の眼が映る。

「……ミコト」

しばらく見つめ合っていると神楽の顔が近づいてきた。そして……神楽の唇と俺の唇が重なった。

「!!」

俺は神楽の行為に驚き大きく後ろに飛び退いた。

「な、ななな、何してんだよ神楽！」

俺は自分でもわかるぐらい動揺しながら神楽に言う。

「何って……ただキスしただけだろう？てつきりミコトほどの美形なら慣れていると思ったのだが案外初心なのだな」

「ただキスしただけって……なんでそんなことしてんだよ」

「なんでだど？そんなの……口止め料に決まっているだろう？」

「口止め料？」

「そうだ。私は体調が悪くて保健室に行っていることになっているの

でな。ここで授業をサボって煙管を吸っていたなんてバレたら面倒なことになるのだな。そこで口止め料として私の唇をくれてやったのだ。どうだ嬉しいだろ？」

くれてやったって……………

「んなことしなくて話すつもりなんて全くなかったんだが」

「そうなのか？まあいい。念には念ということにしておいてやろう」

なんとというか神楽って少し…………いや、かなり変わった奴だな。

「さて、それじゃあそろそろ授業も終わるし、私は教室に戻る。お前は どうする？」

「俺は……………ここに残るよ」

そもそも授業に出るつもりなんて全くないからな。

「そうか……………ミコト、お前は明日もここに居るか？」

「ああ。明日どころか学校がある日は毎日ここに居るよ」

「ふっ、そうか。わかった。明日もまた来る。その時は話し相手になっけてくれよ？」

そう言つて神楽は不敵な笑みを浮かべ、屋上をあとにした。

「……………変わった奴だな」

紫黒神楽……………俺を否定しなかった人間。

「……………明日か」

俺は明日神楽に会えるのが少し楽しみだった。

side 神楽

「……………一夢命か」

あいつ以外では初めてだな。私を前にして自分を偽らなかったの

は。

私を目の前にした人間は自分を偽る。何よりも愛しい私に氣に入られようと自分を偽って、ちっぽけなつまらない人間を演じる。

私はそれが氣に入らない。

私の為に簡単に自分を捨て、まるで下僕のように私のご機嫌を伺うだなんて……馬鹿としか言えん。

そんなことをしても私は貴様らに興味を持たないというのに。

そんなことをしても……私は貴様等を愛すつもりはないというのに。

だが……ミコトはそんな奴らとは違った。

ミコトは自分を偽らない。

ミコトは……『ミコト』として私に接してくれていた。

私にとってそれは……とても嬉しかった。

「……ふっ」

明日になればまたミコトに会える。そう思うと私は笑みを浮かべずにはいられなかった。

春雪異変く悉くを断つ道化く

第45話

「ぐっ！」

「はい、俺の勝ちく」

「またミコトの負けか。これで47連敗だな」

「・・・神楽、一々数えないでくれ、結構凹むんだから」

「いやくでもミコちゃんかなり強くなったよ」

「それでもお前には全然敵わないけどな。というかその呼び方やめろ」

「まあまあいいじゃん別に！それと俺に勝てないのは当然だって！なんせ俺は————だからなく。俺に勝てる奴なんて————ぐらいだ！まあでもこのままミコちゃんがちゃんと修行すればもしかしたら方が一、億が一勝てるかもねく」

「そうか・・・ならばミコト！もつと修行してこいつを負かせ！私が許す！」

「わかった、任せろ」

「ちよつとカグちゃん!?君は俺の味方じゃないの!?!ミコちゃんもそんないい返事しないでよく!」

side ミコト

俺が幻想郷に来て4ヶ月が経った。幻想郷での生活にも慣れ、外の世界にいた時とは比べ物にならない位充実した生活を送っている。もはや幻想郷は俺の故郷だと断言できるほどだ。ただ・・・最近

はこの幻想郷で不満に思うことがある。それは……

「クシユツ」

「大丈夫かミコト？」

「ああ。少し寒いだけだ」

「ならいいけど……というかミコトって随分と可愛いくしやみするのね」

「……ほっとけ」

一向に春が訪れないことだ。俺が幻想郷に来たのが1月。今はもう5月なのに一向に雪が止まず、全く暖かくなならない。それどころか日に日に寒くなっていく気がする。そのせいで炬燵もしまえないし。今も俺と霊夢、家に来ている魔理沙の三人で炬燵にくるまっている。

「ほんっと寒いよな。こんなに寒いと何もする気にならないぜ」

「とか言いながらあんたはなんでわざわざ家に来てるのよ」

「いや、家の炬燵の調子が悪くてな」

「直しなさいよ。毎日のように来られるこっちの身にもなりなさい」

「まあ別にいいじゃないか霊夢。その代わりにいろいろ雑用手伝ってもらってるんだから」

「……結構強引に手伝わされてるような気もするぜ」

「何か言ったか魔理沙？」

「いや、なんでもないぜ」

「そうか。それより二人共、みかん剥けたぞ」

俺は皮の剥けたみかんを霊夢と魔理沙に渡した。

「お、サンキュ」

「ありがと、ミコト」

二人はみかんを受け取り口に含んだ。

「やっぱり炬燵にはみかんね。普段よりもすごく美味しく感じるわ」
「確かにな。炬燵にみかんの組み合わせを考えた人は偉大だと思う」

「全くもって同感だわ」

うん。やっぱり霊夢とはこういう時話が結構合うんだよな。

「まあ確かに私も炬燵にみかんの組み合わせは好きだが……いい

加減桜に酒の組み合わせも楽しみたくなってきたぜ」

「……………それも同感ね」

……………まあ確かにいい加減に雪景色にも飽きてきたし寒いのも嫌だもんな。

「ミコトも花見しながら酒飲みたいと思わないか？」

「……………どうだろうな。正直桜ってあんまり好きじゃないから」というかどちらかというとなんか嫌いな部類だし。

「そうなの？桜が好きじゃないなんて珍しいわね」

「まあそうかもな。俺も俺以外で桜が好きじゃない奴なんて会ったことないし」

「なんで好きじゃなんだ？」

桜が好きじゃない……………嫌いな理由か。

「……………なんとなくだ」

「え？」

「だからなんとなく好きじゃないんだ」

「いや、なんとなくって……………」

「お前らだつてなんとなく好きになれないものぐらいあるだろ？」

「まあ確かにあるが」

「それと同じだよ」

「……………そう。なんかいまいちしくりこないけどわかったわ」

霊夢と魔理沙は渋々といつか感じてだが納得したようだ。

……………本当は桜が嫌いな理由はちゃんとある。俺が桜が嫌いな理由、それは……………散る姿が美しいからだ。俺は花にとつて散るということとは『死』を意味すると思っっている。そして桜が散る姿は咲き誇る姿よりも美しい。つまり……………誇らしげに生きる姿よりも儂く散る姿の方が美しいということだ。俺はそれが気に食わない。だから俺は桜が嫌いなのだ。

でも……………『あいつ』は桜が好きだつて言ってたな。咲き誇る姿

も。儂く散る姿も。『あいつ』は桜の何もかもが好きだって言ってたっけな。……正直かなり似合わないけど。『あいつ』に桜のイメージって合わないし。

「……なあ霊夢、ミコト」

俺が『あいつ』のことを考えていると魔理沙が口を開いた。

「何、魔理沙？」

「こんなこと言うの今更かもしれないんだが……やっぱりこれって異変なんじゃないか？」

「……全く、何を言い出すかと思えば。そんなの……」

「間違はなく異変だな（異変ね）」

俺と霊夢は声を揃えて言った。

「間違いなくって……ミコトはともかく霊夢は博麗の巫女だろう？
だったら行動起こせよ」

「魔理沙の言うとおりにね」

「え？」

なんの前触れもなくスキマが開き、そこから紫が現れた。

「……紫、あんたは普通に出てこれないの？」

「ふふ、残念ながらそれは無理ね」

「……そう」

霊夢は紫の態度に呆れているようだ。

「というかミコト！前にも言ったけど紫がいるんなら言えよ！驚くだろう！」

「そう言われてもな……今回は俺も気がつかなかったぞ？」

「え？そうなの？」

「ああ」

「まあミコトが気づかないのは当然よ。いつもみたいに様子を見てたわけじゃなくて今来たばかりだから」

流星に今来たばかりの紫の気配なんてわかるわけないな。

「それよりも紫。今日は何しに来たんだ？」

「ええ。今日は異変が起きていていうのに全く動こうとしない霊夢に活をいれに来たのよ」

「そんなこと言ったって仕方ないでしょ。寒くて動く気になれないんだから」

「……それでいいのか霊夢？」

「……本当にそれだけかしら？」

紫が割と真剣な眼差しを向けて霊夢に聞いた。

「……どう言う意味よ？」

「……別に、なんでもないわ」

「……」

何だ？ 霊夢の様子が少しおかしい。確信は持てないけど……何かを心配しているような気がする。

「ただこれだけは言っておくわ。今回のこの異変は霊夢とそして……ミコトにしか解決できないわ」

俺と霊夢にしか解決できないだど？

「それはどういう事なんだ紫？」

「私は今回の異変の首謀者を知っているわ」

「「え？」」

俺と霊夢、魔理沙は紫から首謀者を知っていると聞いて思わず声を上げた。

「異変の首謀者の名前は西行寺幽々子。亡霊を統べる『白玉楼』の主。そして……私の友人でもあるわ」

「紫の友人？」

「ええ。そうよ」

「だったら紫がその幽々子って奴に言って止めさせなさいよ。友人って言うならあんたが言えばやめてくれるんじゃないの？」

「もう言ったわ。でも止めてくれないの。何故か頑なになって全く止めようとしてくれない」

「なら力づくで止めさせなさいよ」

「幽々子は私の友人よ。そんなことできるわけないじゃない」

友人だからそんなことできないか……紫にもそういう情ってあるのか。

「そもそもなんでそいつはこんな異変を起こしてるんだぜ？ 春を来な

「いようにさせてなんになるんだよ?」

「わからないわ。聞いても教えてくれなかったもの」

「異変をお越した理由は不明か。というか……」

「……ねえ紫。その幽々子って奴は本当にあんたの友人なの? あんたの話を聞くと全然そんな感じに思えないんだけど」

「霊夢が俺の思っていたことを聞いた。」

「失礼なこと聞いわね。れっきとした友人よ。あなた達が生まれるよりもずっと前からだね。だからこそ私も戸惑ってるのよ。幽々子がどうしてこんなことをしたのかわからないから」

「紫はそう言った。表情には出ていないが様子からして心配そうにしている気がする。」

「そうか……。それで? どうして俺と霊夢にしか異変が解決できないんだ? その理由をまだ聞いていないぞ?」

「それは……。幽々子の能力が関係しているわ」「能力に?」

「ええ。幽々子の能力は『死を操る程度の能力』。文字通り、人でも妖怪でも一切の抵抗を許さずに絶命させる能力よ」

「!?!」

「幽々子の能力を聞いて霊夢と魔理沙は驚いている。まあ無理もないな。死を操れるだなんて強力で恐ろしすぎる能力だからな。」

「……なるほど。それで俺と霊夢じゃなきゃ解決できないってことか」

「どういうことだミコト?」

「俺には『命を理解する程度の能力』がある。この能力のおかげで俺には命に影響を及ぼす力が効かない。そして霊夢の能力『空を飛ぶ程度の能力』はあらゆるものから浮いた状態になり、概念に縛られない。つまり能力に縛られずに能力を受け付けられないから平気だつていうことだ」

「ミコトの言うとおりよ。仮にあなた達二人以外が幽々子に挑んだとしたら幽々子の能力で十中八九死ぬわ。だから異変を解決するには幽々子の能力が効かない霊夢とミコトの力が必要というわけよ」

正確に言えば死ぬことのない輝夜や妹紅、永琳なら大丈夫なんだろうがな。ただ正直この3人が自分から異変を解決しに行くとは何故か思えないんだよな。それ以外のやつでも文字通り死ぬ気でいけばでもなんとかなるかもしれないけど……流石にそんなことをする度胸がある奴はいないだろう。

「わかったかしら霊夢？これはあなたとミコトにしか解決できない異変なの。もしあなたたち二人が動かなければ……幻想郷から春が失われるわ。ひよつとしたら春だけじゃなく夏も秋もなくなってしまうかもしれないわね。それでもいいのかしら？」

「……わかったわよ。行けばいいんでしょ行けば」

「それでいいのよ。それが博麗の巫女の責務なんだから」

「……」

「さて、ミコトはどうするかしら？」

「どうするって……霊夢が行くんなら俺も行くに決まってるだろ？いい加減春になって欲しいし博麗神社で世話になってるんだからちゃんと霊夢の手伝いしないとだしな」

「ここで行かないなんて選択肢はつきり言ってありえないな。」

「……やっぱり」

「霊夢？」

「……準備してくるわ。ミコトも準備しておきなさい」

「あ、ああ。わかった」

霊夢は準備のために部屋から出ていった。霊夢様子は明らかにおかしい。本当にどうしたんだ？がおかしい。

side 霊夢

「……やっぱりミコトも行くんだ」

当然だ。ミコトはそういう人だ。ミコトは誰かの為に自分の力を

行使することを全くためらわないから。だから私が異変を解決しに行くことになればミコトもついてくることになるのは目に見えている。

でも……私はミコトについて来て欲しくなかった。

だって……前の異変の時のようなことに……ミコトが死んでしまいそうになるんじゃないかと思ったから。

だから私はミコトについて来て欲しくない。ミコトを危険な目に合わせたくない。

それでもミコトはついて来る。それが……ミコトだから。

だったら……私は……

「……絶対に守るわ」

絶対にミコトを守る。ミコトを危険な目には合わせない。たとえ何があってもミコトを守ってみせる。

愛しいミコトを。

第46話

side ミコト

「くしゅっ……やっぱり寒いな」

「そうね」

俺と霊夢は雪のなか白玉楼のある冥界に向かっていた。ただ……

「本当、寒いよな」

「……魔理沙。なんであんたまでいるのよ」

なぜか魔理沙も一緒にいる。

「なんだよ？私がいちや悪いのか？」

「あんた紫の話聞いてなかったの？今回の異変の現況の幽々子って奴は私かミコトにしか相手にできないのよ。それなのにあんたが来ても意味ないでしょ」

「意味がないとは失礼な奴だな。確かにその幽々子ってやつ相手はできないかもしれないけどそれ以外なら別だぜ。冥界に行くまでの間に邪魔する奴が出ないとは限らないんだからそいつらの相手くらい私がしてやる。ありがたく思え」

魔理沙は胸を張っていった。

「どうせ本音は前みたいに私に美味しいところ持って行かれないからでしょ？」

「まあそれもあるな」

「全くあんたは……ミコトからもなんとか言いなさいよ」

「なんとか言えと言われてもな……別に俺は構わないぞ？確かに幽々子の相手は俺か霊夢が相手にすることになるだろうけど魔理沙の言うとおり邪魔してくる奴らがいるかもしれない。そういう奴の相手を俺と霊夢だけでしていると消耗していざ幽々子の相手をすると気に力を発揮できなくなつてら困るし、魔理沙がいてくれたら俺としても霊夢としても助かるんじゃないか？」

「さすがはミコト、わかってるぜー」

「……はあ、しようがないわね。わかったわよ好きにしなさい」

霊夢は俺の言うことに納得して魔理沙がついてくることを許可し

た。

「ただし、何度も言うけどその幽々子って奴は私かミコトが倒すわ。その時はおとなしくしてなさい。わかったわね」

「ああ！わかってるぜ！」

「……本当にわかってるのかしら」

「はは、頼りにしてるぞ魔理沙？」

「おう！任せとけ」

魔理沙は力強く返事を返した。頼もしい限りだな。

「さて、それじゃあ魔理沙、早速だが……相手が来たみたいだぞ？」

「え？」

「喰らえ〜！」

突然声が聞こえてきて、声のする方から弾幕が降り注いできた。

「なっ!？」

霊夢と魔理沙は突然のことに驚きながらも弾幕を躲す。もちろん俺もだ。そこまで規模が大きいわけではなかったので容易に躲せた。

「誰だぜいきなり!」

そう言つて魔理沙は弾幕がきた方を見た。そこにいたのは……「ふふん、今のを交わすなんて結構やるじゃん！まあ私ほどじゃないけどね！」

チルノだった。

「ん？お前どつかで見たことあるような……」

「そういえばそうね。どこでだったかしら？」

霊夢と魔理沙はチルノを見て首をかしげた。どうやらちゃんと覚えていないらしい。

「異変を解決するために紅魔館に紅魔館に行った時だろうか？忘れたのか？」

「紅魔館に……あつ」

どうやら二人共思い出したようだな。

「そうか。あの時の雑魚妖精か」

「あたいは雑魚じゃない！最強なんだ！」

チルノは魔理沙の雑魚という言葉に反応して怒った。

「あくはいい。それじゃあ即効で終わらせてやるからかかってこい」

魔理沙はわかりやすくチルノを挑発した。

「むくだったら望み通り終わらせてやる！氷符「アイシクルフオール」!!」

チルノはスペルカードを発動した………前回俺達に使ったものと全く同じスペルカードを。

「……お前、馬鹿だろ？」

魔理沙は呆れたように言った。

「馬鹿じゃない！最強だ！」

「いやだって……このスペカは前にも使っただろ？対処法ももうわかってるし」

そう言いながら魔理沙はチルノの目の前に移動した……このスペカにおいて絶対の安全領域に。

「あ、あれ？なんで当たらないの？」

「いやだからこんなの当たるわけないだろ。とりあえず吹っ飛んどけ。恋符「マスタースパーク」!!」

「きやああああ!!」

マスタースパークをモロにくらったチルノは吹っ飛んでいった……前と全く同じように。これってデジャビュ？

「……あいつ、全く学習してなかったな」

「……そうね。さて、それじゃあ先に進みましょう」

「そうだな。行こうぜ霊夢、ミコト」

「……いや、どうやらまだお客さんがいるみたいだ」

そう言っただけは命の気配がする方向を見た。そこには……白と青の服に白い髪を持つ少女がいた。彼女の周りには雪が激しく渦を巻いている。

「あんた何？」

「……私はレティ、レティ・ホワイトロック。冬の妖怪よ」

少女……レティが答えた。ただその声にはいくらかの怒気が込

められているように思われた。

「そう。それで？一体何のようかしら？」

「……よくもチルノをやってくれたわね」

レティはさらに怒りを強めて言ってきた。

「……チルノはお前の友達なのか？」

「ええそうよ。だから……私はチルノを吹き飛ばしたあなた達を許さない！冬符「フラワーウィザラウェイ」！」

レティはスペルカードを発動して弾幕を放ってきた。俺達はそれを躲す。というかあなた達って……やったのは魔理沙なんだ。まあレティにとっては一緒にいた俺たちも同罪なんだろうが。

「仕方がない。俺が相手をする。二人は下がっててくれ」

俺は霊夢と魔理沙に下がるように言った。

「……いえ、ここは私がやるわ」

「霊夢？」

だが霊夢は自分がやると言ってきた。なぜかその目には強い意志が宿っている。

「……わかった。それじゃあ頼む」

「ええ。レティって言ったわね。私が相手よ」

「ならあなたから倒させてもらおうわ！寒符「リングリングゴールド」
!!

レティは別のスペカを発動した。弾幕が霊夢に襲い掛かる。

「甘いわよ」

だが霊夢はその弾幕を軽々と回避する。

「霊符「夢想封印・集」」

霊夢はスペルカードを発動する。それによって放たれる弾幕がレティの弾幕とぶつかり合い相殺していく。

「そんなー！」

レティが放った弾幕を全て打ち消し、そのままの勢いで弾幕がレティに襲い掛かる。

「っ!!」

レティは自分に迫る弾幕を身目にして思わず目を閉じた。だ

が……

「……………」

フツ

「レテイに当たる直前で霊夢の弾幕は消えた。」

「……………勝負ありね。私の勝ちよ」

「……………どういうつもり？なんで止めを刺さないの？」

「レテイは何故止めを刺さないのか霊夢に訪ねた。」

「……………ごめん」

「え？」

「私の仲間があんたの友達を吹き飛ばしちゃって。本当にごめん」

「霊夢はレテイに謝った。」

「れ、霊夢が謝った？」

魔理沙は霊夢の行動に驚いている。まあ無理もない。正直に言うてしまうと霊夢がそんなことするなんて思えないからな。まだ付き合いの短い俺でさえそう思ったのだから魔理沙は俺よりも驚いているだろう。

「ただ私たちも目的があって行動している。そしてチルノは私達の邪魔をしようとした。だから私達はチルノを倒したの。それはわかって頂戴」

「……………」

「霊夢に返事を返さずにレテイはチルノが吹き飛んでいった方に飛んでいった。チルノを探しに行ったのだろう。」

「……………行きましょ、ミコト、魔理沙……………って二人共どうしたのよ？そんな変な顔して」

「レテイが飛び去って行った後、こちらに振り返った霊夢がそう言った。」

「い、いや、なんというか……………意外だな」

「意外？何がよ」

「霊夢が謝ったことに対してだけ。霊夢があんな風に謝るなんて絶対にありえないからな。しかも霊夢がチルノ吹き飛ばしたわけでもないのに」

魔理沙、流石に言いすぎじゃないか？……………まあ俺も少しそう思ったけど。

「あんた私のことなんて思ってるのよ？……………まあ確かに以前までの私なら謝るなんてことしなかったでしょうけどね。でも……………」
「でもなんだ？」

「……………私もわかるから。大切な人が傷つけられて怒る気持ちはわかる」

霊夢は俺の方をまっすぐ見つめていった。

(霊夢……………お前)

おそらく霊夢がそう思うようになったのは俺が原因なのだろう。紅霧異変を解決するために紅魔館に突入したとき、俺はフランとの戦いで命を失いかけた。後になって魔理沙に聞いた話のだが霊夢は俺がやられたとき、怒りに任せてフランに襲い掛かったらしい。

「ほら、無駄話はここまでにしてさっさと行きましょう。とつとと異変を解決して春を取り戻さないといけないんだから」
「……………ああ。そうだな」

俺達は霊夢に並んで再び冥界に向かう。

あの時、俺は霊夢を悲しませてしまった。俺が弱かったから悲しませてしまった。もうあんな風に霊夢を悲しませたくない。霊夢に……………怒りに囚われて欲しくない。

俺は何があっても絶対に負けないことを心に誓った。

第47話

side ミコト

チルノ、レテイとひと悶着あった後、俺達は再び冥界への入口に向かつて歩を進める。途中妖怪や春を告げる妖精の相手をしたが特に手ごわい相手ではなかったので問題はなかった(リリーさんすみません by 作者)。

「なあ、その冥界はへの入口はまだなのか？」

魔理沙が少し気だるそうに聞いた。

「まだ先よ。何？まさか魔理沙もう疲れたの？」

「べ、別にそういうわけじゃないぜ」

魔理沙は少し目を背けて言った。

「……面倒になったか？」

「ち、違う！そんなことないぜ！」

……凶星だな。まあここまで大して強い奴の相手してないから退屈に感じているんだろう。

「まあ気持ちはわかるさ。だけでもうちよつと頑張ってくれ」

「……わかったぜ」

「よしなら少し……ん？」

少し急ごうと言おうとしたら二つの命の気配を感じた。この命の気配は……

「どうしたのミコト？」

「……霊夢、魔理沙。少し寄り道していいか？」

「寄り道？」

「ああ。少し気になることがあってな」

「まあ別にいいけど」

「ありがとう」

俺は気配のする方向に向かう。霊夢と魔理沙もあとから付いてきた。

「……やはりか」

気配のする場所に着いた俺達の目の前にいたのは……

「なかなかやるわね！」

「そっちもね！でも負けないわ！」

咲夜とアリスだ。二人はなぜか弾幕ごっこをしている。

「あれって咲夜とアリスよね？なんで二人がこんなところにいるの？」

「しかも弾幕ごっこしてるしな。ミコトはあの二人の気配を感じたからここに来たのか？」

「ああ。まあなんで二人が弾幕ごっこしてるのかまでは知らんが」

「そう。それで？どうするの？」

「とりあえず終わるまで待っていよう。その後話を聞く」

「わかった」

ということであつた。俺達は二人の弾幕ごっこを見守ることになった。

キング・クリムゾン!!

「ふふ、私の勝ちね」

「くっ……」

十数分後、弾幕勝負の決着がついた（戦闘描写かけなくてすみません by 作者）結果は咲夜の勝ち。かなりいい勝負をしていたが時間を止める能力を持ち、体術に秀でていた咲夜の動きに途中からアリス

はついていけなくなってしまうたようだ。

「二人共お疲れ様。いい勝負だったよ」

俺は戦い終えた二人に話しかけた。

「ミ、ミコト!？」

「どうしてここに？」

「話をする前に……命極「国生みの伊邪那岐」

俺はスペルカードを発動した。その効果によって俺たちの周りに結界が貼られる。

「なにこれ？なんか暖かい」

「本当……それに傷が癒えていく」

結界の中にいる咲夜とアリスの弾幕ごっこによって生じた怪我はみるみる治癒していった。

「これってミコトのスペカの力なの？」

霊夢が聞いてきた。

「ああ。「国生みの伊邪那岐」はあらゆる命を癒す結界を張るスペルカードだ。その効果で咲夜たちの傷を癒したんだ」

「そうなの。ありがとうミコト」

「気にするな。それよりも二人はどうしてここにいるんだ？」

「ええ。私はお嬢様に命じられてこの長い冬を終わらせるために動いていたの。そしてアリスを見つけてこの異変に何か知らないか聞いたのよ」

「私は特に何も知らないから知らないって答えたわ。ただちようど今試したい魔法があったから咲夜に付き合ってもらったのよ」

ふむ、なるほどな。つまりは話を聞きに来た咲夜にアリスが勝負を仕掛けたということだな。……アリスって俺が思ってるよりも好戦的なのか？やっぱり霊夢と魔理沙の友人なんだな。

「ねえミコト。今私に対して失礼なこと考えなかつた？」

「私もそんな気がするぜ」

……二人共、鋭いな。

「そう言うミコト達はこんなところで何をしているのかしら？」

「ああ。俺達は……」

俺は紫から聞いたこの異変の元凶のことを含めて咲夜に説明した。

〈少年説明中〉

「なるほど、ミコト達も異変を解決するために動いていたのね」

「ああ」

「それにしても、現況の幽々子って奴の能力は厄介だわ。下手に手を出したら死ぬわね」

「そう。だから幽々子の相手は能力が効かない私かミコトがすることになってるの。だから咲夜の出る幕はないわ」

「そうみたいね。でも……お嬢様から勅命を受けたのに何もせずに戻るわけにはいかないわ。私もあなた達に付いて行っていいかしら？役に立てると思うわ」

咲夜もか……

「どうする霊夢？俺は構わないが」

「……はあ。どうせダメって言ってもついてくるんでしょう。だったら好きにしなさい」

「ふふ。決まりね」

咲夜もついてくることが決定したようだ。

「アリスはどうする？お前もついてくるか」

「いえ、やめておくわ。私じゃあまり役には立たなそうだし帰らせてもらおうわ」

「そうか。気をつけて帰れよ」

「ええ。それじゃあ頑張っつてね」

そう言っつてアリスは自宅に帰っつていった。

「それじゃあ俺達は先に進むか」

「そうね。行きましよう」

そして俺達は咲夜と共に再び出発した。

「それにしても、死を操る能力って……幽々子って人は随分ととてもない能力を持つてるのね」

冥界へと向かう道中。咲夜がそんなことを口にした。

「いや、咲夜がそれを言うのはどうかと思うぞ？咲夜だって時間を操るっていうとんでもない能力持つてるんだから」

「……いや、ミコトもそれ言っちゃあいけないような気がするぜ」
「同感ね」

俺が咲夜に対してツツコミを入れると魔理沙がさらに突っ込んできた。霊夢も同意している。

「そう言う意味だよそれ？」

「どうって……ミコトの能力が一番とんでもないからに決まってるじゃない」

「そうね。気配はわかるし傷は治せるし強化もできるし、はっきり言ってミコトの能力は便利すぎだわ」

……俺の能力が便利か。

「まあ確かに使い勝手がいいことは否定しない。だがこの能力にだって弱点はあるぞ」

「弱点？なによそれ」

「ああ。それは……」

ガサツ

「ん？」

霊夢達に俺の能力の弱点を教えようとするのと物音が聞こえた。音がかした方に振り向くとそこには……

「……」

数多の人型の白い何かがそこにいた。

「な、何？こいつら？」

「な、なんか不気味だぜ」

霊夢は奴らの姿を見て少なからず動揺し、魔理沙は不気味がついてる。だが無理もない。こいつらには……言いようのない不気味さを感じる。言葉にはできないが……とてつもなく嫌な感じだ。何よりこいつらからは……

「……感じない」

「え？感じないって何が？」

「こいつらから……命を感じないんだ」

不気味さを感じるのに命を感じることができない。でも……幽霊という感じでもないような気がする。こいつらは幽霊とは違う、もっと別の得体の知れない……悍ましいもののような気がする。

「……ヨコセ」

「え？」

「キサマラノ……イノチヲヨコセ！」

白い奴らは俺達に襲いかかってきた。

「つ!!混符「アンビバレンス・スプラッシュ」!!」

俺は銃を構え奴らにスペカによる弾幕を放った。

「「グアアアアア!!」」

弾幕に当たった奴は断末魔をあげて消滅した。だが残った奴は勢いを衰えずに襲いかかってくる。

「霊夢、魔理沙、咲夜！」

「ええー！霊符「夢想封印・散」!!」

「魔符「ミルキーウェイ」!!」

「幻符「ジャック・ザ・リツパー」!!」

霊夢達もスペカを発動して白い奴らに向かって弾幕を放つ。

「「グウウウウ!!」」

俺の時と同じように弾幕に当たった奴らは悲鳴を上げて消滅する。だが三人掛りの弾幕でも奴らの半数も滅せられずにいた。

「一体なんなんだぜこいつら!?すごく気持ち悪いぞー！」

「わからないわ。本当にこいつらなんなの？」

魔理沙と咲夜はこいつらを気味悪がっている。

「魔理沙、咲夜！口を動かす暇があるなら弹幕出して数減らしなさいよー！」

「霊夢の言うとおりで！今はとにかくこいつらを倒すことを考えるぞ！」

「わかってるわ(ぜ)！」

俺達は奴らに向かって弾幕を放ち続けた。

「混符「黒と白の奈落」!!」

「「ガアア・・・」」

数分してその場にいた白い奴らを全て滅することができた。

「ようやく終わったぜ」

「そうね。本当にこいつらはなんだったのかしら？」

「わからないわ。ただ一つ言えることは・・・こいつらは私達の敵だったっていうことよ」

「・・・そうだな」

「・・・」

「どうしたのミコト？」

「ん？ああ。ちよつと奴らのことを考えていてな」

「何か心当たりあるの？」

「ああ。今の奴ら・・・紅魔館で会ったあの黒いのどこか似ている気がする」

「それってあの時の？そう言われれば・・・」

「口調も雰囲気も・・・確かにあれに似ているわね」

紅魔館であったあの黒いのと今滅した白いの・・・何か関係があるのか？

「そんなのどうでもいだらう？ どうせ考えたって正確なことわからないんだらうし異変にも関係なさそうだしな。そんなことよりさつさと先に進もうぜ」

異変とは関係ない………本当にそうなのか？ 俺には今回の異変とこいつら、何か関係があるような気がする。確信はないが何か関係があるような気が………

「………まあ魔理沙の言うとおりにね。考えたって分からないんだから先に………!!ミコト！」

霊夢が突然俺の名を叫んだ。そして………

「………イノチヲ………ヨコセ!!」

「!!」

霊夢が叫ぶのと同時に白い奴が再び襲ってきた。

(しまった。気配を感じないから気がつかなかった。このままじゃ………)

奴に気がつくのに遅れたせいで回避行動をとれない。霊夢達も間に合わない。このままではやられる。そう思った瞬間………

「………オラァ！」

「ガァー！」

何かが白い奴を蹴り飛ばす光景が俺の目に映った。

「全く。戦闘が終わった直後でも油断しちゃあダメでしょ」

「!!」

黒い短髪に黒い目。気の抜けたようなゆるい表情にゆるい口調。

そして腰に刀を下げた男が俺の方に向かってそう言った。

「た………つき？」

「ハロゥ。久しぶりだね、ミ・コ・ち・や・ん」

たった一人の俺の親友にして俺の知る限り最強の人間。そして、俺の知る限り最も不幸で哀れな道化………紫黒竜希(しこくたつき)がそこにいた。

第48話

side ミコト

「ハロ。久しぶりだね、ミ・コ・ち・や・ん。」

俺の目の前には今俺のたった一人の俺の親友、竜希がいる。その竜希に向かって俺は……

ガチャ、バババババ!

「つて、うお!」

銃を構え弾幕を放った。残念ながら全て躲かれて一発も当たらなかったが。

「ちよつとミコちゃん!?なんで俺に向かって撃つの!」

「うるさい。黙れ。またぶつぱなすぞ?」

「すつげえ辛辣?!俺が何したっていうのさ!」

「その呼び方止めるって言っただろ。いい加減直せ」

「え?別にいいじゃん!ミコちゃんはミコちゃんなんだから」

「……そうか。わかった」

俺は再び銃を構えそして……
ババババババ!

「「グアアアアア!!」」

竜希の後ろにいる白い奴らを打ち抜いた。

「あはは、ナイスショット。ミコちゃん」

「……とりあえず話は後だ。今は力を貸せ竜希」

「了解りようかい。それじゃやりますか!」

俺はクラマとシラマを剣に変え奴らに突っ込む。竜希もまた奴らに突っ込んでいった。

side 霊夢

私たちの目の前でミコトが、そしてミコトに竜希と呼ばれていた少年がああ白い奴と戦っている。

「あいつ……一体誰なんだぜ?」

魔理沙が竜希と呼ばれた少年を見つめて言った。

「わからないわ。でも彼……とてつもなく強いわ」

咲夜の言うとおりで。あいつは強い。白いやつの攻撃を何事もないように余裕な感じで躲して蹴り飛ばし、殴り飛ばす。気の抜けた表情とは裏腹にその動きには一部の隙もなく鋭い。刀を下げているから剣士であるのだろうがその刀を全く抜こうとしない。しかも弾幕も出してない。それなのにこんなに強いなんて……

「……もしかして」

「霊夢、あいつのこと何か知ってるのか？」

「……魔理沙覚えてる？ミコトが武術が使える知人がいるって言ったの」

「そういやそんなこと言ってたな。あいつがそうなのか？」

「ええ。多分そうよ」

「そうか……だとしたらなんでそいつが幻想郷にいるんだよ？そいつって外の世界の人間なんだろう？」

「それは……私にもわからないわ」

（なんで彼はここに居る？どうやってここに？紫が連れてきたのかしら？）

私が頭の中で疑問を抱いている間に、ミコトと竜希はあの白いのを全て倒した。

side ミコト

「ふいりようやく終わった。俺疲れちゃったよ」

「あれだけ動き回って息切れはおろか汗ひとつかいてない奴がよく言う。しかもお前完璧に手抜いてただろ」

「何言ってるんだよミコちゃん。そんなこと……あるに決まってるだろ？」

「……つとにこいつは道化だな。にしてもこいつ……前に会った時よりもまた強くなってる。本当にこいつ人間か？」

「ミコト」

「ん？なんだ霊夢」

「そいつ一体なんなの？ミコトの知り合い？」

「ああ。こいつは「ちよつと待った！自己紹介ぐらい自分でさせろよ」……ならとつととしろ」

「はいはくい。俺は紫黒竜希！ミコちゃんの唯一にして最上の親友で
すーよろしくね〜！」

（（なんか軽そうね（軽そうだな）。こんなのがミコトの親友？））

……霊夢たちが竜希のことどう思ってるか手に取るように
わかるな。

「おじよ〜ちゃん達の名前も俺に教えてもらっていいかな？」

「あ、ああ。私は霧雨魔理沙」

「私は十六夜咲夜よ」

「うんうん。魔理沙ちゃんに咲夜ちゃんね。よろしく〜」

「ちゃん付けはやめろ（やめて）」

「それで？巫女服着た君はなんていうの〜？」

（（聞いてないし））

相変わらず我が道行く奴だな。

「私は霊夢。博麗霊夢よ」

「博麗？そか君が……」

「？なによ〜？」

「うんにや。なんでもないよ。気にしないで〜」

「そう」

さて、自己紹介も終わったみたいだし。本題に入るか。

「おい竜希」

「ん〜？何かなミコちゃん？」

「……（ガチャ）」

「って、何無言で銃構えてくれちゃってるの!？」

「その呼び方止めろ。何度も言わせるな」

「え？別にいいじゃん」

「よくねえよ。お前がそう呼ぶせいで男装女子疑惑をかけられたこと

があるんだぞ」

((ミコト・・・本当に苦労してたんだ))

「・・・なんか霊夢達から同情の視線を感じるけど今はスルーだ。うくん。そんなこと言われてもな。この呼び方が一番しっくりくるし・・・しょうがない。じゃあ百歩譲って『ちゃんちゃん』で手を打とう」

「ちよつと待て！なんだそれは！どうしてそうなった！」

「どうしてって・・・ミコちゃんのちゃんを取って『ちゃんちゃん』なんだよ！」

竜希は胸を張って言った。

「一文字も名前とかぶってないだろ・・・」

本当にコイツの相手は疲れる。

「・・・はあ。もうミコちゃんでもいい」

「だったら最初から言うなよ」

「・・・そうだな」

(あ、あのミコトがここまで疲弊するなんて)

(な、なんかよくわからんが竜希ってすごいな)

(この人・・・破天荒すぎるわ)

「それよりも竜希、聞きたいことがあるんだがいいか？」

いい加減本題に入らないとな。このままじゃあ更に話が逸れそう
だ。

「・・・それはどうして俺が幻想郷にいるのかっていうことかな？」

「!!どうしてお前が「幻想郷を知っているか、だね」・・・ああ」

こいつは外の世界で生まれた外の世界の住人だ。それなのにどうして・・・

「・・・今から300年くらい前かな？幻想郷からある一族が外の世界に移り住んだんだよ。その一族は幻想郷内では結構古い旧家で剣術と武術で有名な一族だ」

「まさか・・・その一族が？」

「そう。それが紫黒一族。俺の祖先にあたる一族だ。だから俺は幻想

郷のことを口伝で知ってるんだよ」

「……竜希がかつて幻想郷に住んでいた一族の人間。」

「そんなの初耳なんだが」

「言っていないからね。少なくともあの時は言う必要があるとは思わなかったし」

「……まあ確かにそうなんだろうが。」

「……ねえ竜希。あんたって博麗のことも何か知ってたの?」

霊夢が竜希に聞いた。さつき竜希が博麗の名に反応したからだろうな。

「ああ知ってたよ。幻想郷の結界を管理してる一族でしょ? 博麗のことも口伝で伝わってたから知ってたよ。他にも幻想郷の創設者、八雲紫のこととかもね」

紫のことまで知ってるのか。そういえば……

「お前はどうかやって幻想郷に来たんだ? 紫に連れてこられたのか?」

普通幻想郷と外の世界は行き来できない。それこそ結界が緩んでいるか紫が連れてくる以外に方法なんてないはずだが。

「うんにゃ、違うよ」

「なんだと? だったらどうやって幻想郷に来たんだ?」

「実はね、外の世界と幻想郷を阻む結界には常に少し綻んでるところがあるんだよ」

「そんなのがあるの?」

「どうやら霊夢は知らなかったようだな。」

「うん。といっても普段はそれでも通り抜けることはできないんだけどね。俺はその綻びをちよつとだけ大きくして結界を通り抜けてきたんだよ。あ、その結界はもう元に戻ってるから心配はしなくていいからね」

竜希は腰に差してある刀に触れながら言った。……なるほど。

その為に竜希は能・力・を使ったということか。

「そうか……それじゃあ最後の質問だ」

「ほいほい。何かな?」

「……なんで幻想郷に来た?」

俺は最も知りたいことを聞いた。

「なんでって、そんなの決まってるでしょ？親友であるミコちゃんに会うためだよ。久しぶりにあの街に戻ったらミコちゃんが行方不明だって言うじゃん？それでもしかしたら幻想郷にいるのかなって思ったんだよ。そしたら案の定だったね」

「……俺に会うためねえ。」

「……本当にそれだけが理由か？」

「どういうこと？」

「他にも理由があるんじゃないか？」

「……そんなのないよ。俺はただミコちゃんに会いたかっただけだって！嬉しいでしょ？」

竜希へラへラした表情を全く変えずに言った。

「……そうか」

「……本当に竜希は、嘘がうまいのも相変わらずだな。」

「それよりもミコちゃん。今度は俺が聞いてもいいかな？」

「なんだ？」

「今ってさ……春のはずだよね？なんで幻想郷雪が降ってるのかな？すんげえ寒いんだけど」

「ああ、そのことかそれは……」

俺は竜希に事情を説明した。

少年説明中

「ふむふむ、なるほどね。そういうことか……」

話を聞いた竜希は顎に手を当て何かを考える素振りをとった。

「……よし決めた！俺もミコちゃんたちを手伝おう！」

「……はあ？何言ってるの？それ本気？」

「本気も本気、ちよく本気だよ霊夢ちゃん！」

「どうしてよ」

「どうしてって・・・親友を助けるのに理由なんて無いだろう？」

「これも嘘だな。何かはわからないが理由があるのだろう。」

「・・・好きにしろ」

「ちよつとミコト!?あんなに言ってるのよ!」

「竜希のことだ。ダメだといつてもどうせ勝手に付いてくる」

「ははは!さっすがミコちゃん!俺のことわかってる」

「でも・・・」

「こいつなら大丈夫だよ。無駄に強いからな。それこそ俺よりもずっとな」

マジでこいつには勝てる気がしないからな。

「・・・はあ。わかったわよ。ミコトがそこまで言うなら止めないわ。けど邪魔はしないでね」

「わかってます。皆、改めてよろしくね」

こうして竜希も同行することが決まった。

後に俺は竜希が付いて来たことは必然だったのではないかと思うことになる。

第49話

side 霊夢

「なあ霊夢」

竜希を加えて冥界に向かう途中で魔理沙が声をかけてきた。

「何？魔理沙」

「竜希って……本当にミコトの親友なのか？なんかミコトとは違いすぎて合わないような気がするんだが」

「魔理沙の言うとおりね。竜希は不真面目というか……破天荒すぎるわ。ミコトとは違いすぎて友人関係が成り立つとは思えないわ」
「どうやら魔理沙と咲夜は竜希がミコトの親友であることを疑っているようね。まあ気持ちはわかるわ。私もさつきまでは疑ってたから。でも……」

「そうかしら？私は案外納得してるんだけど」

「へ？どうしてだよ？」

「あれを見てみなさい」

私は二人がいる方を指し示す。

「うー、寒い寒い。凍えそうだよー」

「寒いに決まってるだろ。そんな薄着をしてるんだから」

「ねえミコちゃん。遥々幻想郷にまで会いに来た俺にその「断る」ってまだ最後まで言っていないよ!?っていうかコート貸してよ！マジで凍えそうなんだって！」

「竜希……子供は風の子だ」

「それどういう意味!?俺子供じゃないよ！」

「そんなことない。16なら十分子供だ。だからお前は寒さに強いはずだ」

「いやいやいやいや！俺が子供なら同い年のミコちゃんだって子供じゃん！イコ〜ルミコちゃんも寒さに強いってことでしょ！だからコート貸してよー！」

「残念だが俺はもう飲酒、喫煙を経験してしまったのでお前のような無垢な子供には戻れないんだ。ということであれは寒さに弱いから

コートは貸さん」

「俺だつて無垢な子供じゃない！汚れ切った大人だ！だからコート貸してください！」

「そうか……・……・竜希さん。寒いのでやはりコートは貸せません。後少し距離を置いて下さりますか？」

「なんで敬語?!しかも言ってることヒデエし！何?!汚れてるって言つたから!?!だから距離ちよつと離れてるの!?!」

「うるさい。静かにしろ。愚痴るな。コートは諦めろ」

「今度は雑!?!飽きたの?俺に構うの飽きたの!?!しかも頑なにコート貸してくれないし!」

「グダグダ言つてないでさっさと行くぞ。これ以上文句言うなら帰れ」

「待つてよミコちゃん!」

私達の目の前でそんな光景が繰り広げられていた。

「な、なんだぜあれ?漫才?」

「……・……・あんなミコト初めて見たわ」

「あんなミコト一緒に暮らしてる私でも滅多に見られないわ。竜希はそんなミコトを引き出すことができる。それは竜希がミコトにとつて親友だつていうことなんじゃないの?」

「……・……・そうね。言われてみればどことなく嬉しそうだわ」

「……・……・だな」

本当に楽しそうなミコト。口では鬱陶しそうにしているけど竜希に会えて嬉しいんだろう……・……・少し竜希が羨ましいわね。「ん?なにになに?3人ともこつち見つめてどつたの?は!まさか霊夢ちゃん達俺に惚れて……・……・」

「……・……・ふっ!」

「ゴミヤツ!?!」

ミコトは竜希の鳩尾を殴打した。竜希は奇声を上げてうずくまる。

「ミ、ミコちゃん……・……・それシャレにならないくらい……・……・痛いんだけど」

「お前が馬鹿なこと言うからだろ。俺はともかく霊夢達に迷惑かける

な

「じよ、冗談に決まってるでしょ……」

「冗談でもそんなこと言うな。次言ったら……俺のスペカのフルコースを食らわせるぞ」

「は、はい……もう言いません」

「分かればいい。三人とも済まないな。竜希の言うことは大体いい加減だから8割くらいは無視してくれていいからな」

「せ、せめて6割ぐらいで……」

「……だそうだ。6割無視しろ」

「え、ええ。わかったわ」

「そ、そうするぜ」

魔理沙と咲夜は若干顔を引きつらせて答えた。

「……なああ霊夢。やっぱり私は信じられなくなったんだが」

「……私も」

「……ま、まああれがああ二人の普段通りってことじゃないかしら？きつとそうよ」

「……正直、私も今を見てたら二人が本当に親友なのか再び疑問に抱いてしまった。そんな時……」

♪

「あら？」

なにか音が聞こえてきた。よくはわからないけどなにか楽器の音だ。

「なんだぜ？この音は？」

「わからないわ。けど……なにか不思議な感じがするわ」

「まあそうだろうね。これは普通の音じゃないから」

「え？」

「竜希、お前なにかわかるのか？」

「うん……なんていうのかな？この音って耳に届くっていうよりダイレクトに頭や感情に来るって感じなんだよね。だから普通の

音じゃないって思ったんだ」

「なるほど。どうする霊夢？異変とは関係ないかもしれないから無視するか？」

竜希の話聞いて魔理沙が言ってきた。

「……それは無理ね。この音、冥界の入口の方から聞こえるわ。このまま冥界に向かえば嫌でも関わることになるでしょうね」

「まあ確かにそうだな。それに冥界の入口から聞こえるってことはなにか異変と関係あるかもしれないしな。どうせ行かなければならないんだから確かめてみよう」

「そうね」

私達は冥界の入口へと歩を進めた。

「よし、練習終わり。そろそろ行くわよ」

「そうね」

「わかった」

冥界の入口に着くとそこには楽器を持った3人の少女がいた。

「あら？あなた達、こんな冥界の入口で何をしているのかしら？」

少女のうちの一人、金髪の子が声をかけてきた。

「あなた達こそ何をしてるのよ？」

今度は銀髪の子が聞いてきた。

「質問しているのはこっちなのに失礼ね。まあいいわ教えてあげる。

私達は呼ばれたのよ」

「呼ばれた？誰に？」

「冥界の主、西行寺幽々子にだよ」

次は茶髪の子だ。

「西行寺幽々子に？」

「そうよ。白玉楼で花見が開かれるそうだからそこで演奏をして欲しいって頼まれたの」

花見って……こっちは春が来なくて困っているっていうのいい気なものね。

「さあ、私達は答えたわよ。あなた達も答えなさい。こんなところで何をしているの？あなた達も冥界に用があるの？」

「ええ。私達は……冥界から春を取り返しに行くの。西行寺幽々子を倒してね」

「西行寺幽々子を倒す？それは困るわ」

「あなた達が亡霊の主である幽々子さんに勝てるとは思わないけど、雇い主に何かあったら困るからね」

「ということ……あなた達にはここで倒れてもらうわ！弦奏

「グアルネリ・デル・ジェス」！

「冥管「ゴーストクリフオード」！

「鍵霊「ベーゼンドルフアー神奏」！

3人は同時にスペルカードを発動して弾幕を放ってきた。

「混符「アンビバレンス・ストリーム」！

それに対してミコトがスペルカードを発動して弾幕を相殺する。

「あら？私達のスペカを一人で止めるなんてやるわね。あなた名前は？」

「……命。一夢命だ」

「……そう。あなたがミコトなの」

「およう？君ミコちゃんのこと知ってるの？」

「ええ。今幻想郷で一番話題になっている人ですもの」

ああ。そういえば文が新聞にミコトのこと載せて以来、ミコトって幻想郷中に知られるようになったんだったわね。しかもあの後も何度も文は取材に来てミコトの特集記事組んでたし、話題になってある意味当然ね。

「だってさ。よかったね有名人になれて」

「……お前に言われるとすごい腹たつな」

「そりやどうも」

「まああなたが誰だろうと関係ないけどね。ここで倒させてもらうから。ね？ルナサお姉さま、メルランお姉さま」

「そうね」

「……………」

ルナサと呼ばれた子は返事をしたがメルランという子は何も答えない。じつとミコトを見つめている……………僅かに頬を赤く染めながら。

「あ、そういえばメルラン、あなたって……………」

「！さ、さあ二人共！とつとこの人たちを倒しましょう！」

メルランは焦ったように言った。これは確定ね。この子、ミコトに気があるんだわ。

「ふふ、わかったわ。それじゃあ行くわよ。メルラン、リリカ」

「ええ（うん）！」

三人は戦闘態勢にはいった。

「霊夢、ここは「霊夢ちゃん」と魔理沙ちゃんと咲夜ちゃんが相手してくれるかな？」

ミコトの言葉を遮って竜希がそんなことを言った。

「……………竜希、お前は何を言っている？これは俺が戦う流れだろ？」

「ダメだよミコちゃんが戦ったら……………あの子達と相性悪いんでしょ？」

え？

「……………ちつ、気づいてたのか」

「まあね」

「竜希、ミコトがあいつらと相性が悪いってどういうことだぜ？」

「うん。ミコちゃんの能力は『命を理解する程度の能力』でしょ？ミコちゃんはあらゆる命を理解できる。けど……………命がない者はどうかな？」

「……………あ」

「命が無い者……………例えば彼女達みたいな幽霊にはミコちゃんの能力は適用されないんでしょ？それってミコちゃんにとってかなり戦いづらいんじゃないかな？」

「……………ああ。そうだよ」

命が無い者には能力が適応あされない……………なるほど、だからあの時あの白いのの奇襲を受けそうになったのね。あいつらは命が無いらしかつたから気配を察知できなかったのね。

「ということでここは霊夢ちゃんたちに任せてミコちゃんは下がつてなよ」

「そうね。相性が悪いんだつたら仕方がないわ。ここは私達に任せておきなさい」

「ああ！ミコトは後ろでゆっくりしてるといいぜ！」

「……………わかつた、頼む。すまないな」

「気にしないでいいわ。ところで……………竜希は戦わないのかしら？」

咲夜が竜希に聞いた。

「うん！寒くてうまく動けないから俺はパスね〜！」

「……………いつ……………一体何しについて来たの（来たんだ？）……………」

「……………まあいいわ。魔理沙、咲夜」

「ああ」

「やりましたよ」

私達は3人と戦うために前に出た。

「あら？あなたたちが相手なの？てつきりミコトが出てくるかと思っただけど」

「こっちにも事情があるのよ」

「へえ、そう。やる前に一応名乗ってあげるわ。私はルナサ・プリズムリバー。ヴァイオリン担当よ」

「私はメルラン・プリズムリバー。担当はトランペット」

「リリカ・プリズムリバー。担当はキーボードだよ」

三人は名乗ってきた。

「そう。私は博麗霊夢。博麗神社の巫女よ」

「霧雨魔理沙！普通の魔法使いだぜ！」

「紅魔館のメイドの十六夜咲夜よ」

私達も自己紹介をする。

「さて、自己紹介も終わったことだし……いくわよ！」
ルナサが弾幕を放つのを皮切りに弾幕ごっこが始まった。

第50話

side ミコト

「それでミコちゃん。誰が本命なのかな？」

目の前で繰り広げられる霊夢達の戦いを見守っていると竜希は突然俺にそんなことを聞いてきた。

「本命って……どう言う意味だよ？」

「またまた。わかっているくせにしらばっくれちゃって！」

「だからどう言う意味だ」

「だ・か・ら！3人の内誰に想いを寄せてるのかって話！巫女の霊夢ちゃん？魔女の魔理沙ちゃん？それともメイドの咲夜ちゃん？いや3人ともすつごく可愛いから迷っちゃうよね！」

……コイツは。何を言い出すかと思えば。

「何を馬鹿なこと言っているんだ。俺と霊夢達はそんな関係じゃないし俺はそんな目であの3人を見ていない。第一そんな目で見ていたらあの3人に迷惑だろう？」

「……ふうん。ねえミコちゃん、それって……本気で言ってるの？」

「？もちろん本気だが」

「……へえ、そっか。まあいいけどね」

竜希は相変わらずのヘラヘラとした表情をして言った。

「……はあ、なんとというか……お前は相変わらず掴めない奴だな」

「それが俺のあいだでいっていますから！そういうミコちゃんも相変わらず……でもないか」

竜希は声のトーンを少し落として言った。

「ミコちゃん……変わったよ。あの時と比べてさ」

「俺が……変わった？」

「うん。あの時……かぐちゃんに愛されていて……かぐちゃんを失った時に比べてね」

「……」

「今のミコちゃんはく……すっごく生き生きしてる。生きるのを楽しんでるって感じだよ。いい変化だね」

竜希は笑顔で言った。その表情はいつものヘラヘラしたものではなく……普通の、本当の竜希の笑顔だ。

「……そうか」

俺が生き生きしているか……神楽と一緒にいた時と比べて……そうかもしれない。あの時の俺は……神楽と一緒にいられば良いと思っていた。たとえどんなに苦しくても……辛くても……ただ一緒にいるだけでよかった。たとえ楽しくなくても。生きていることを実感できなくても。

「でも……悪い変化もある」

「え？」

「あの時のミコトにはあったものが今のミコトにはない。それが……悪い変化だ。とてつもなく悪い……最悪な変化だ」

竜希は神妙な表情で言った。しかも俺をミコトと呼んでいる。竜希が俺をそう呼ぶということは……それほど重要で真面目なことなのだろう。

「……その変化っていうのは一体何だ？」

「それは……ミコちゃんが自分で考えることだよ」

竜希は再びヘラヘラした表情をして答えた。

そうか。つまりは……俺が自分で考えて、気がつかなければ意味がないということか。

「……わかった。考えておく」

「ははは、そうしな。お？向こうはそろそろ終わりそうだよ」

「……そうだな」

俺は竜希との話をやめ、再び霊夢達の戦いに目をやった。

「二ハアハアハア……」

「どうした？もう終わりか？」

「なかなか張り合いはあったけど……その程度じゃあ私たちに勝つのは無理ね」

「くっ」

私達は三姉妹を追い詰めた。この三人はそれなりに強かった。コンビネーションもいい。でも……私たちとは地力が違う。

「こうなったら……メルラン、リリカ！」

「うん！」

「二大合葬「霊車コンチエルトグロツソ怪」!!」

三人は協力してスペルカードを使ってきた。そして、先程までとは比べ物にならないほどの規模の弾幕が私たちに襲いかかって来た。私達はその弾幕を回避する。

「ははは！コイツはなかなかいい弾幕だぜ！」

「そうね。でも……この程度なら問題ないわ」

「ええ。夢符「二重結界」!!」

「恋符「ノンディレクションナルレーザー」!!」

「時符「パーフェクトスクウェア」!!」

私達3人も弾幕を展開した。私たちの弾幕はあいつらの弾幕をかき消していく。そして……

「二きゃああああ!!」

弾幕が三姉妹を飲み込んで勝負は決した。

「よっしゃ！弾幕はやっぱパワーだぜ！」

「何言ってるのよ。弾幕なんだから手数の方が大事でしょ？」

「おいおい、私の弾幕のおかげで勝てたのに随分な物言いだな霊夢」

「は？誰のおかげで勝てたって？」

「だからこの魔理沙様のおかげだぜ！」

「……はあ、そう。ならそういうことにおいてあげるわ」

「なんだよ霊夢！それどう言う意味だ！」

「文字通りの意味よ」

「……はあ、こんなのでよく勝てたわね」

私と魔理沙が言い争いを始めようとするど……

「3人共お疲れ様」

「いや〜！3人共凄かったよ！」

ミコトと竜希が声をかけてきた。

「ミコト！今の見ててくれたか？」

「ああ。見ていたよ」

「どうだった？」

「ああ。かっこよかったよ魔理沙」

「そ、そうか。へへへ／＼／＼」

ミコトに褒められた魔理沙は嬉しそうだ。……羨ましいわね。

「……………」

咲夜もそう思っているのだろう。ミコトと魔理沙をじっと見つめている。

「霊夢と咲夜も。かっこよかったぞ」

ミコトは今度は私と咲夜のことを褒めてくれた。

「！ま、まあ当然よ！魔理沙がかっこよくて私がカッコよくないなんてありえないもの！」

「ふふ。ありがと。ミコト」

……………やっぱり、ミコトに褒められるのってすごくいいわね。

「……………あの〜皆さん？俺のことは無視なのかな？」

「！！いたの（いたのか）？竜希！！」

「いたよ〜というか三人揃って言うのやめて！結構傷つくから！」

竜希は大げさに泣き真似をして言った。まだ会ってそんなに時間経ってないけど竜希をどう扱えばいいのかわかってきたわ。

「……………はあ、もういいや〜。早く冥界に行こうよ。ここは本当に寒いからさ〜」

「そうね。行きましょ」

「ちよっと待ってくれ」

私達は冥界に入ろうとするミコトが引き止めた。

「どうしたのかしらミコト？」

「いや、大したことじゃあないんだけどな」

そう言つてミコトは三姉妹の方に近づいていった。

「……何か用ですか？ミコトさん」

近づいてきたミコトに対してルナサが言った。

「3人共……すまない」

「「え？」」

「怪我……治してあげたいけど、俺の力は命のないものには効かない。だから俺は君たちを治してあげられないんだ。本当にごめん」
「……どうしてあなたが謝るんですか？私達は……あなた達の敵なんですよ？」

メルランが首をかしげて聞いた。

「……君たちはただ呼ばれていただけだった。ただ頼まれて……演奏しに行こうとしただけだった。それなのに俺達が自分勝手な理由で君達の邪魔をした。俺達には俺達の事情があつたけど……それでも君達に悪いことをしてしまった。君達を傷つけてしまった。だから……本当にごめん」

ミコトは申し訳なさそうに三姉妹に頭を下げて謝った。

「「……」」

「……やっぱりあなたが謝る必要はない。あなたは……あなた達は悪いことなんてしてないから。ただ自分たちの目的を果たそうとしただけだから。だから……謝らなくてもいい」

「メルラン……」

「ミコトさん、心配してくれてありがとうございます。私達は大丈夫です。このくらいの怪我は直ぐに治りますから」

メルランは笑みを浮かべてミコトに言った。

「……そうか」

ミコトもまた笑みを浮かべた。

「……本当にミコトは優しいわね」

「……そうだな。敵だったあいつらの心配をするなんて本当にお人好しなやつだぜ」

そんな光景を見て咲夜と魔理沙が呆れながら……でもどこか嬉しそうに言った。好きな人の優しさを目にして嬉しくなったのだ

ろう。

「本当にそうね。でも……それでこそミコトね」

かくいう私も嬉しい。ミコトは本当に優しい人だっということ
再認識できたから。

「……違うよ」

「「え？」」

「ミコトのアレは……優しさじゃない。ミコトのアレは……
ただの自分勝手だ」

「た、つき？」

竜希は先程までのヘラヘラしたゆるい雰囲気とは違う、冷たい空
気を纏って言った。口調も先程までとは違い真面目なものになっ
ている。

「……それって一体どういう意味かしら？」

「……そのままの意味だよ。ミコトのアレは自分の為の
ものだ。アレは優しさなんかじゃあない。ただの自分勝手な自己満足だ」

「……どうして？どうしてそんなこと言えるのよ？あんたはミ
コトの親友なんでしょ？そのあんたがどうしてミコトの優しさを認
めないのよ？」

私は竜希に聞いた。おそらく今の私は……自分で恐ろしい
と思えるほど冷たい声と表情で言っているだろう。それだけ許せな
かったんだ。……ミコトの親友でありながらミコトを認めない
竜希を。

「……俺じゃないよ。ミコトのアレを優しさと認めてないのは俺
じゃない。認めてないのは……ミコト自身だ」

「……だが竜希から帰ってきた答えは私の予想を大きく逸脱し
たものだった。」

「ミコト自身が認めていない？それってどういうことだぜ？」

「文字通りの意味だよ。ミコトは自分の優しさを認めていない。認め
ようとしてないんだ。だからミコトは……自分の優しさで恩を
きせたりしない」

「恩をきせない？」

「恩をきせるって言ったらい方は悪いがそれは優しさによって絆を深めるということだ。少なくとも俺はそう思っている。だがあいつは違う。あいつは……自分の為にしか自分の優しさを振るっていない。いや、自分の優しさは自己満足だと思ひ込んでるんだよ。あいつはそういう奴だからな」

優しさを……自己満足に？なんで？どうしてミコトはそんな……

「皆、待たせて悪かったな」

私がミコトの優しさについて考えていたら、ミコトが戻ってきた。

「？どうしたんだ皆？何か様子がおかしいが」

「そ、それは……」

「いや、今回の異変について色々話してたんだよ。そしたらちよつとシリアスな空気になつちやつてね。ね？人共」

竜希はさつきまでのヘラヘラした表情に戻っておどけた風にそう言った。

「え、ええ。そうよ」

「竜希の言うとおりでせ」

「空気を悪くしてごめんなさいミコト」

「いや、気にするな。確かに今回の異変には不可解な点があるからな。そうなるのも無理はない。それで？何かわかったのか？」

「うんにゃ。結局考えてもよくわかんないから直接首謀者の幽々子って人に聞いてみることにしたよ」

「そうか。それじゃあ直接聞きに行くか」

「りよ、か〜い」

「行こうぜ、霊夢、魔理沙、咲夜」

「え、ええ。そうね」

ミコトに言われて私達は冥界の入口へと向かった。……ミコトの優しさについてのことが頭から離れないままに。

第51話

side ミコト

「それじゃあ行こう」

「ええ」

「準備いいぜ」

「わかったわ」

「りよ〜か〜い」

俺達は結界をくぐり冥界に入るために。幻想郷に春を取り戻すために。

そこに待ちけるもの知らずに。

「………ここが冥界か」

結果をくぐった先に広がる光景。それは……何の変哲のない世界だった。空も、大地も、そこにはえる木々も。強いて言うのなら目の前にある大きな屋敷と大きな木が気になるだけで俺たちが住んでいるところと変わらない風景。ただ、それでもやはり違うところが

ある。ここではほとんど命を感じない。

ここは冥界なのだからここにいるのは大多数が死者なのだろう。だから生きている人、妖怪はいないのはわかる。だが草木からさえ感じない。草木だって生きている。人よりはかすかで小さい命だがそれでも俺にははつきりと分かるのだ。それを感じる事ができないということとは……ここでは草木でさえも死んでいるということだ。文字通りここは死んだ『もの』の為の世界なのだろう。(でもそれだとしたら……どうして……)

「いや、流石は幻想郷中の春を集めているだけのことはあるね。あつたかいやく」

俺が違和感を感じていると竜希の気の抜けた声が聞こえてきた。

「そうだな。でも私達が寒くて凍えそうな思いをしてるっていうのに幽霊たちはぬくぬくと春を満喫しているなんて……許せないぜ」

「そうね。お嬢様を差し置いて春を満喫するなんて、由々しき自体だわ」

魔理沙も咲夜も結構頭にきてるみたいだな。まあ誰だって寒いのは嫌だから気持ちはわかる。

「やる気を出してくれてるみたいだけどあんた達忘れてないわよね？異変の元凶の相手をできるのは私だけよ。邪魔はしないでね」

霊夢は二人に念を押した。

「わかってるぜ。仕方ないから今回はサポートに回ってやるぜ」

「その代わり、負けるのは許さないわよ？」

「ええ。わかってるわ」

霊夢は返事を返した。その返事はいつもどおりどこかそっけないが覚悟が宿っているように感じた。それにしても……相手に出来るのはわたしだけか……

「どったのミコちゃん？」

「何がだよ」

「いやいや、さっきから何か考え込んでるでしょ？気になってね」

……本当にコイツはよく気がつくというかなんというか、目

ざとい奴だ。

「……お前が気にする必用はない」

「ふうん。なら気にしないけど。でもあんまり一人で考えるのはやめたほうがいいよ。考え事が多くなると頭ん中ぐっちゃぐちゃになつて考えまとまなくなっちゃうから。ミコちゃんが優秀なのは知ってるけど、所詮ミコちゃんだつて人間なんだから」

「……わかつてる。必要があれば言うさ」

「ならいいけどね」

つとに竜希は……どこまで……まあ今はいいか。それよりも……

「皆、どうやら出迎えが来たようだぞ」

「「え？」」

俺は命の気配を感じてその方向を見る。皆もそちらに目を向けた。

そこにいたのは銀色のショートボブに黒いリボン、白いシャツに青緑色のベストとスカートを着て二本の刀を持ち、そして……まるで靈魂のようなモヤを傍らに置く少女がいた。

「あなた達は何者ですか？ここは冥界。生者が来るような場所じゃありません。生者は生者の居るべき場所に帰ってください」

「悪いがそういうわけには行かない。俺たちにも事情があるのでな。

第一そういう君はどうなんだよ」

「どういうことですか？」

「君だつて生者だろ？」

彼女からは命を感じる。普通の人よりも弱いがそれでもはつきりと感じる。

「……私は半人半霊です。生者でもあり死者でもある」

「だから自分はここについても問題ない？」

「そうです」

「……そうか」

まあ向こうの事情は俺の知るところではない。これ以上この件に突っかかるのはよすか。

「ねえあんたはここに住んでるよね？」

霊夢が少女に聞いた。

「ええ。そうですか」

「なら西行寺幽々子って奴がどこにいるのか知っているかしら？」

「……幽々子様には何か御用ですか？」

少女は僅かに殺気を向けながら睨みつけてき。

「その様子なら知っているようね。だったらそいつのところ案内しなさい」

「……御用は何かと聞いているんですが？」

「そんなの聞かなくなつてわかつてるんじゃないの？ 私達は……」

「そいつを倒して幻想郷の春を取り戻すために来たのよ」

「そうですか。ならば……あなた達にはここでお引き取りしてもらいます」

少女は刀を手にかけてそう言った。

(これはやるしかないようだな)

俺は少女の相手をすべく戦闘体制を取ろうとしたら……

「……半人半霊」

竜希の呟きが聞こえてきた。

「ん？ どうしたたつ……」

俺はそこから先の言葉を紡ぐことができなかつた。今の竜希は先程までの竜希とは全く違う。俺と話した時に見せた真剣な表情とも違う。静かでなおかつ鋭い気配を纏っている。見ているこちらの息が苦しくなるほどのだ。親友である俺でもこんな竜希はそうそう見ることはない。霊夢達も先程までとは全く違う気配を纏う竜希に対して驚いている様子だ。

「……ねえ君。ちよつと聞いてもいいかな？」

竜希が彼女に聞いた。

「なんですか？」

「君の……お名前はなんていうのかな？」

ガクッ！

竜希がそう聞いた瞬間。少女を含めた俺達全員は思わずこけそう

になってしまった。というのも竜希が彼女に質問した時の雰囲気
が……完全に先ほどのゆるいものに戻っていたからだ。それ
も一瞬で戻った。そのギャップに思わず俺達はこけそうになっ
たのだ。

「……………なぜそのようなことを聞くのですか？」

「なんでって、そんなの決まってるじゃくん！名前がわからないと呼
ぶ時に困るでしょ？いつまでも君って呼ぶのはアレだしさく。そ
れ……可愛い子の名前は是非とも聞きたいものでしょうよ！」

「なっ!?か、可愛いって／＼／＼」

少女は可愛いと言われて顔を真っ赤に染めた。言われなれてい
ないだろうか？命に出るほど照れの感情が出ている。

「それでそれで？お名前は？」

「……………よ、妖夢です。魂魄妖夢」

「……………へえく。魂魄妖夢ね。んじゃあよくむちゃんって呼ばせて
もらうねく。あ、ちなみに俺は紫黒竜希って言うんだ！よろしくね！」
「よ、よろしくなんてするつもりありません！」

……………ああ、先ほどのシリアスはどこに行ってしまったの
だろう？空気ぶち壊した。

「まあまあ、そんなこと言わないでよく……………これから戦う仲
なんだからさ」

「……………え？」

……………は？竜希が戦う……………だと？

「どういうつもりだ。竜希」

「どういうつもりも何も、よくむちゃんとは俺がやり合おうと思っ
てねく」

「は、はあ!?竜希お前何言ってるんだ!？」

「いやいや、驚くことじゃないでしょうよ魔理沙ちゃん。俺はみみこ
ちゃんを手伝うためにここにいるんだから。ここで役に立つとか
ないと付いてきた意味ないでしょく？」

「……………さつきは私達に戦いを押し付けたくせによく言うわね」
「それはほら。さつきは寒かったし。でもここはポカポカしてあった

かいからね〜。今ならコンディションバッチリだよ！ということをやらせてもらうね〜」

「何勝手に決めて「竜希」

俺は霊夢の言葉を遮って言う。

「本気なのか？」

「うん。もちのろんだよ〜」

……竜希が自分から戦うか。

「……そうか。わかった。頼んだぞ」

「「ミコト!?!」」

「まっかせなさい!」

そう言っただけで竜希は妖夢の近くに歩いて行った。

「ミコト! あんた何考えてるのよ!」

霊夢が俺に向かって声を張り上げて言ってきた。

「何がだ？」

「何がだ、じゃないわ! なんだあいつに任せたのよ!」

「あいつが任せろと言ったからだ」

「なっ!?!」

「ミコト、竜希は幻想郷に来たばかりなんだぜ?」

「スペルカードも持ってないのに簡単に任せても大丈夫なの?」

魔理沙と咲夜も不満そうに聞いてきた。まあそう思っても仕方が

ないか。3人は知らないのだから。

「あいつにスペルカードなんて必要ないさ。刀さえあれば問題ない」

「でも……」

「皆が不満に思う気持ちはわかる。だが……あいつを、竜希を信

じてやってくれ」

「……会ったばかりの奴をどう信じろって言うのよ」

まあ当然か。霊夢達にとっただけで竜希はあつたばかりの他人なんだか

ら。なら……

「なら……竜希を信じている俺を信じてくれないか?」

「竜希を信じるミコトを?」

「ああ。頼む」

俺は霊夢達に正面から向き合って言った。

「……なんで？なんでそこまで竜希のことを信じられるのよ？親友だから？」

「それもある。だがそれだけじゃない。俺は……知っているからだ」

「知っている？何を？」

「あいつの……竜希の強さをだ」

そう。俺は知っている。

竜希がどれだけ強いのかを。

竜希が負けるはずがないということ。

竜希が

最強だということを

side 竜希

全く。ミコちゃんったら随分と恥ずかしいこと言ってくれちゃってるね。全部聞こえてるっての。

でもまあ……あのミコちゃんに信頼されてるのは嬉しいねえ。「何をニヤニヤとしているんですか？」

俺に対してよくむちちゃんが言ってきた。

「ああ、ごめんごめん。可能な限り笑顔を絶やさないと俺のスタイルなんだよ。あんまり気にしないで」

「そうですか。それにしても……本気ですか？」

「んにゃ？何が？」

「……本気で私と戦う気なんですか？」

よくむちちゃんが凄みながら聞いてきた。

「ねえよくむちちゃん……そんな眉間にしわ寄せるよりも笑った顔の方が似合うと思うよ？絶対に可愛いと思うし」

「みよん!?ふ、巫山戯ないでください！」

よくむちちゃんは顔を真っ赤にさせて言った。これは怒っているとより照れているって感じだね。しかも『みよん』って……可愛いね。

「巫山戯てなんてないって。本気で言ってるんだから。と、そうそう

俺が本気で戦う気があるかどうか聞いてたんだったね。その答えは……。イエスだよ。俺はよくむちちゃんと戦う」

「……やめていたほうが身の為だと思えますけど?」

「何何?心配してくれてるの?」

「ええ……あなたのようなふざけた方に負ける気など一切しませんから」

……随分とまあはつきり言ってくれちゃって。

「……それはこっちのセリフだよ。断言してあげる。俺は勝つ。必ず」

「……そうですか。わかりました。だったら……その自信を打ち砕いてあげます。覚悟してください妖怪が鍛えたこの楼観剣には斬れぬものなど、あんまり無い!」

よくむちちゃんが長刀を抜きながら俺に言ってきた。というか『斬れぬものなど、あんまり無い!』って……微妙にカツコつかなかね?そこは事実と違っても『斬れぬものなどないって』断言しようよ?

「ちようどいいです。あなたの持つなけなしの春も……全て頂きます!」

そう言つてよくむちちゃんは刀を振りかざして俺に迫ってきた。

さて、戦いのはじまりだ。

確かめさせてもらうよ

『魂魄妖夢』

君が

俺の『求め』になってくれるのかどうかを

第52話

side ミコト

「なあミコト」

「なんだ？」

「えっと………竜希は本当に大丈夫なのか？」

竜希と妖夢の戦いを見ていると魔理沙が聞いてきた。

「何がだ？」

「いやだって………」

「このっ！」

「あひやひや！そんな攻撃俺には当たらないよ〜！」

「はあっ！」

「は〜い、これもハ〜ズレ〜！どうしたの？そんなんじや俺に攻撃当てるなんて無理無理無理だよ〜！」

「くっ………やあ〜！」

「だっから無理だって！」

「さつきからずつとあんな感じなんだぜ？避けてばかりでちつとも自分から攻撃してない。それにあの態度、とても真剣にやってるとは思えないぜ」

「魔理沙の言う通りね。本気でやってるとは到底思えない。巫山戯ているようにしか見えないわ」

霊夢も不満に感じてるようだな。まあ、無理もない。なぜなら……

「確かに、竜希は巫山戯ているな」

「……は？」

3人はキョトンとした顔をした。

「ちよ、ちよっとミコト！ どういう事よ！ あんたさつき竜希の事信じてるって言ったじゃない！」

霊夢が声を荒げて言ってきた

「ああ、言った」

「ならあれはなんなのよ！ 自分から戦いに行っておいて真剣に戦わずに巫山戯るなんて！」

「全くだわ。私はやる気があるから戦いに赴いたのだと思ったのだけれど……はつきり言って竜希には失望したわ」

散々な言われようだな竜希。だがまあ、仕方がないだろう。霊夢達は知らないから。

「まあ、確かにあいつは巫山戯ている。真剣に戦っていないだろう。だが……それでいいんだ」

「「え？」」

そう、あれでいい。あれが……竜希の戦い方だから。

「そうだな……例えばだが魔理沙、お前はどんな時に真剣に戦う？」

「どんな時って……そりゃあ本気で戦う時だけ」

「じゃあなんで本気を出して戦う？」

「そんなの負けれないからに決まってるだろ？」

「それが答えだ」

「は？」

「それが……竜希が本気で戦わない理由だ」

「それって……勝つつもりがないってこと？ だから本気で戦ってないの？」

霊夢が目つきを鋭くして聞いてきた。これは怒っているのだろうか。

「違う、そうじゃない。むしろ逆だ」

「逆?」

「ああ、どういう意味かは……見ていればわかる」

(正直、竜希が本気で戦う方が巫山戯るよりも問題あるからな)

そう言い俺は再び2人の戦いに視線を戻した。

side 妖夢

「はあはあ……」

なんで?どうして……

「大丈夫よくむちゃん?息切らしてスツゴく疲れて見えるけど?」

「うるさい!」

ビュッ!

「おわっ!」

私はへらへらした表情で声をかけてきた竜希さんに対して斬りかかる。しかし私の斬撃はいともたやすく躲されてしまった。しかもわざと大袈裟な反応をしながら。

「ひゃく危なかった。もう少しで服が斬れちゃうところだったよ」

「はあはあ……何なんですか?」

「んにゃ?」

「あなたは一体何なんですか!自分から勝負を仕掛けてきたくせに刀を抜かず避けてばかり!しかもそんな巫山戯た態度をとって!私を馬鹿にしているんですか!」

「馬鹿になんてしてないよ。むしろ感心してるぐらいだよ!」

「感心?」

一体何を言ってる……

「そう。いい太刀筋してるよ。太刀筋なら多分俺よりも上かな?妖忌さんに教わったの?」

……え?

「どうしてお祖父様の名を……」

「あ、やっぱり妖忌さんの血縁なんだ。半人半霊で魂魄苗字だからもしかしてと思っただけどビンゴだったか〜」

「質問に答えてください!」

「アハハ、俺は幻想郷に住んでいた一族の末裔だからね。妖忌さんのことは口伝で伝わってたんだよ。幻想郷で1、2を争うほどの剣客だってね」

幻想郷で1、2を争う剣客……やっぱりお祖父様はすごい剣士だったんだ。

「その妖忌さんの教えを受けたからだだろうね。よくむちゃんの太刀筋がいいのは。でも…….それじゃあダメだよ」

…….え?」

「…….どう言う意味ですか?」

「どう言う意味も何もないよ。はっきり言わせてもらうけど、よくむちゃんは剣士としては優秀だけど、決して強くはない」

「優秀だけど強くない?」

「そ、はつきり言っただけのよ。よくむちゃんは…….俺にとって全く驚異じゃないよ。それを今から教えてあげる」

そう言っただけで、竜希さんは目を閉じた。

「きなよ。今から目を閉じたまま、よくむちゃんの斬撃を全部躲してあげる」

なっ!?

「巫山戯るな!これ以上私を侮辱しないでください!」

「巫山戯てるのは認めるよ。でも侮辱しているわけじゃあないし冗談で言ってるわけでもない。俺は…….本気で言ってるんだよ」

「…….そうですか。だったら…….私も本気であなたを斬ります!」

私は刀を振りかざし、目を閉じた竜希さんに斬りかかる。どうせハツタリだ。直ぐに目を開けるに決まっている。だから私は一切躊躇せずに斬りかかった。だが…….

スッ

「え?」

私の刃は空を斬った。竜希さんは私の斬撃を躲したのだ………
目を固く閉じたまま。

「そ………んな」

「どうしたのよ？むちゃん？もう終わり」

「っ!!」

ビュン！ビュン！ビュン！

私は何度も刀を振るう。しかしただの一度も竜希さんには当たらない。竜希さんはまるで見えているかのように斬撃を躲した。決して薄目を開けているわけでもない。竜希さんは間違いなく目を閉じている。

「なんで………どうして？」

「どうして当たらないのか？」

「くっ」

ザンツ！

もう一度竜希さんに斬りかかる。すると………

ピタツ！

「!？」

竜希さんは………私の刀を左手の人差し指と中指で挟んで止めた。

「つとしまった。全部躲すつて言ったのに止めちやつたよ」

そんな………私の斬撃を躲すならともかくたつたの指二本で受け止めるなんて………しかも目を閉じたまま。

「あ………ああ」

「………悔しいかい？目を閉じたままの奴にここまでされて。でも………これは当然の結果だよ」

「どう………ぜん？」

「うん。だって………俺も剣士だからね」

竜希さんは目を開いて、私の刀を離しながら言った。

意味がわからない。どうして同じ剣士だからという理由で私の剣が全く通用しないのか。

「意味がわからない………って顔してるね。なら教えてあげるよ。

俺が言っていることの意味を」

竜希さんは私から離れながら言う。

「俺も君と同じ剣士だ。それも……相当の実力をもったね」
「……それは自慢ですか？」

「アハハ、そう思いたいならそう思ってくれていいよ。とにかく、俺もよくむちやんと同じく結構優秀な剣士なんだよ。でも、よくむちやんとは決定的に違うところがある。それは……俺がとつものなく洒落にならないくらい強い剣士だっていうことだ」

「強い？」

「そう。俺は強い。誰よりも、何よりも強い剣士だって自信がある。だから……俺にはわかるんだよね」

「……何がですか？」

「よくむちやんがどこを斬るのか、だよ」

「!?どこを……斬るのか？」

「俺もよくむちやんと同じでひたすら剣の修行に打ち込んできた。だから俺の体は剣を敏感に感じ取ることができるし、俺がよくむちやんだったらどう斬るのか、つてのがわかるんだよ。それだけよくむちやんの剣には悪い意味で無駄がないってことでもあるね」

「悪い意味で無駄がない？」

「よくむちやんの動きには無駄がなさすぎるんだよ。だからこそよくむちやんの斬撃は同じ剣士である俺には読みやすくて簡単に躲せるし止めることもできる」

「私の剣が……読みやすい……」

「もしかしなくてもよくむちやんは生き物を相手にした経験があんまりないんじゃないのかな？だから修行で身につけてしまった型通りの太刀筋しか出せない。でも……それじゃあダメなんだよ。剣士として強くなるためには……無駄のない無駄な動きを取り入れなければならない」

「無駄のない無駄な動き？」

「相手に自分の攻撃を読ませないようにするために入れる動きのことだよ。ただ剣を振るうだけのものには一生必要のない無駄なものだ。

だけど……強くなるためにはこれが必要不可欠だ。どれだけ無駄にならないように無駄な動きを取り入れるかが強い剣士にとって重要なことなんだよ。そう言っつて意味でよくむちちゃんはダメなんだよ。いくら剣士として優秀でも、剣士として強くなければ戦いでは勝てない」

「……………」

……何も言い返せなかった。竜希さんが言っていることは全て事実だ。私はただ一人で剣を振るい続けていただけでまともに人を相手にしたことがない。だから私は……剣で戦う術に欠けているのだ。

「それに……よくむちちゃんには他にも致命的な欠点があるからね」

「致命的な……欠点？」

「そう。それをこれから……教えてあげるよ」

竜希さんは先ほどよりもさらに気の抜けた声を出しながら左手で腰にさした刀に手をかけた。

この直後の出来事は、間違いなく剣士としての私の転機となるものであった。

第53話

side ミコト

「……………決まったな。この勝負……………竜希の勝ちだ」
刀に手をかける竜希を見て俺はそう言った。

「どうしてそんなこと言えるの？」

断言した俺に疑問に思っただろう。霊夢が聞いてきた。

「俺は外の世界にいた時に何度も竜希と模擬戦をした。その時もあいつはふぎげ倒していてまともに戦おうとしなかった。ただ……………刀を構えてからは直ぐに戦いは決まったよ。あいつの勝ちでな」
「え？」

「あいつは剣士として強すぎる。一度刀に手をかけたら何もできずに一瞬で俺は負けた。……………あいつにとって刀に手をかけるということはそこで勝負を終わらせるということだ。だからこれでケリがつく。見ていればすぐにわかるよ」

「……………そう。わかったわ」

霊夢は竜希と妖夢の方に視線を戻した。俺もまた視線を戻す。それにして……………

(……………随分と長かったな)

竜希は強い。俺が知る誰よりも。戦いにおいて竜希を上回る者なんて存在しないと思わせるほどに。だが同時に……………竜希は誰よりも戦うことを嫌っている。

だから竜希は戦うときはすぐにケリをつけようとする。嫌いな戦いを長引かせたくないから。俺と戦う時だって最低限俺を鍛えてからはすぐに刀を使って終わらせていた。

それなのに竜希はわざわざあんな挑発をしてまで戦いを長引かせていた。そもそも戦いを嫌うのに自分から戦いを挑んだ時点で妙だ。まさか……………

(竜希……………妖夢はお前の……………『求め』なのか?)

side 妖夢

「覚悟してねよくむちちゃん。この戦いは……これでケリだ」

刀に手をかけたまま竜希さんはヘラヘラしながら、そして体をフラフラと揺らしながら言ってきた。

(あの構えは……抜刀術? しかも左手で……)

刀を右の腰に差していたからまさかとは思っていたが……竜希さんは左手で刀を扱うようだ。

刀は基本的に右手で扱うもの。左手で刀を扱うのは邪道とされている。それこそ左手で抜刀術を使うものなどまずいない。

「あ、ひとつ忠告しておくよ。下手に動かないでね。俺はよくむちちゃんに勝つつもりではあってもよくむちちゃんを傷つけるつもりはないから」

竜希さんは不敵な笑みをうけて言った。傷つけるつもりはない? ならどうやって勝つつもりなんだろう?

……まあいいです。ともかく、竜希さんは強い。私よりも遙かに。それは先ほどのやり取りで認めざるを得ない。でも……それでも私は負けるわけにはいかない。幽々子様の為に私は勝ってみせる。

刀に手をかけているとはいえ、竜希さんの身に纏う空気は相変わらず……いや、先程以上に緊張感のないもので刀を構えるその姿勢も隙だらけではつきり言ってゆるい。あんな構えから鋭い抜刀ができるわけがない。

それに竜希さん自身が先程言っていた。太刀筋なら私の方が上だ

と。だったら……

(例え竜希さんのように斬撃を予測できなくても、躲すことはきつとできる……)

ヒュンツ

(抜刀術は外した時の隙が大きい。そこを付けばまだ勝機が……え?)

今、私の目には信じられないものが映っていた。

私の目に移る光景、それは……私の目の前で刀を抜ききった竜希さんの姿だ。

「勝負ありだな。これが俺の……飛天の剣のひとつ、飛天御剣流『瞬龍閃』だ。ちゃんと見ていたか?」

竜希さんは刀を鞘に収めながら言った。その雰囲気は先ほどのものとは全く違う。まるで引き裂かれてしまうのではないかと思えるほど鋭いものだ。口調も締りのないものから重みのあるものへと変わっている。

「……」

私はその気に気圧されてしまい言葉を発することができなかった。

「……その様子だと、見れていないようだね。まあ仕方ないさ。それがこの『瞬龍閃』だらな」

「い、いつ……抜刀を?」

私はどうにか言葉を口にすることができた。

「……妖夢が瞬きをした瞬間にだ。『瞬龍閃』は相手の瞬きに合わせて最高速で一閃する技だからな」

「まば……たき? そんな、私が戦闘中にそんなこと……」
「してたさ。妖夢、お前は……俺の構えを見て油断していたんだろう?」

「!!」

「あんな隙だらけの構えから放たれる斬撃が鋭いはずがない。だから躲せる。そう思って油断したんだろう?それが妖夢の過ちなんだよ。さっきも言っただろう? 剣士として強くなるには無駄のない無駄な動きが必要だと」

あの立ち居振る舞いは……わざと？わざと隙を見せることで私の気構えに隙を作った？

「まあ例え油断していなかったとしてもあの斬撃を妖夢に躲せるとは思わないけどな。ああ、それともうひとつ……下手に動けなくてよかつたな。もしも少しでも動いてたら……その首を刎ねていただろうから」

ゾクツ！

カラン

竜希さんの言葉を聞いて私は寒気を感じ剣を落としてしまった。

「あ、ああ……」

身体が震える。寒気が止まらない。とてつもなく……
怖い。

「……ちゃんと感じているようだな。『恐怖』を」

恐怖？私が竜希さんに？

「それがさっき言った妖夢の致命的な欠点だよ」

恐怖が私の致命的な欠点……

「それは……私が竜希さんの斬撃に恐怖を感じてしまったということですか？」

「……いや、その逆だよ」

「え？」

「……恐怖を感じていなかった。それが妖夢の致命的な欠点だ」

恐怖を……感じていなかったことが？

「刀で斬られれば痛い。悪くすれば死ぬ。それは当然のことだ。だからこそ……斬られるものも斬るものも恐怖を感じなければならぬ」

恐怖を……感じなければ……

「刀は殺すために作られた凶器。剣術は殺すために編み出された殺人術。恐怖とは……それを扱っているという自覚を与えるものだ。だが……俺に斬りかかるとき妖夢は恐怖を感じていたか？」

「……私……は……」

「感じていなかったらどう？そこが欠点なんだよ。恐怖は刃を鈍らせる、だから必要ないと思っっているかもしれないけど……実際に逆だよ。斬る恐怖を、斬られる恐怖を感じながらその上で戦う覚悟を持つこと。それが俺たち剣士にとって最も大切なことなんだ。それが妖夢には不足していた。だから妖夢は……弱かったんだよ」

「もっと強くなりたいと思っっているなら忘れるな。今お前が感じているその恐怖を。その恐怖を忘れず、覚悟を持つことができれば……妖夢は誰よりも強くなれる。誰よりもな」

そう言っつて竜希さんは私に背を向けて行った。私はただその背中を見つめることしかできなかつた。竜希さんに言われたことを頭の中で何度も反芻させながら……

side 竜希

……少し厳しすぎたかな？下手すると妖夢は二度と剣を握れなくなるかもしれない。

だが……それでも、俺は妖夢に強くなつて欲しかった。

一目見た時からなんとなく感じていた。そして実際に妖夢と戦つてみてそれは確信に変わった。

妖夢には素質がある。それこそ——程に。

だから妖夢には強くなってもらわなければならない。妖夢はようやく見つけた俺の……

『求め』なのだから。

side ミコト

「たっだいま〜!!」

戦いを終えた竜希が戻ってきた。その表情、雰囲気はいつものそれだ。

「ふふふん、どう？：ちやくんと勝ってきたよ」

竜希は胸を張って言った。

「自慢げに言うな。お前が勝つことなんてはなから分かっていたことだ」

「およ？何何？：そんなに俺のこと信頼してくれちゃってるなんて嬉しいねえ」

「ただ……随分と長引かせたいようだな」

「……まあね。妖夢ちゃんは素質があるから」

「……そうか」

やはり妖夢は竜希の『求め』になったということか。

「ミコト、竜希。話なら後にして。それよりも他にやることがあるでしょう」

竜希と話していると霊夢が声をかけた。

「そうだけ。あいつから幽々子がどこにいるのか聞き出さなきゃならないんだからな」

「魔理沙の言うとおりよ。私達の目的は幽々子って人を倒して異変を解決すること。まだ目的を果たしていかないのだから」

「あ、そうだったそうだった！すっかり忘れてたよ」

「忘れてたって……あんたは何のために戦ってたのよ」

霊夢が呆れた顔で竜希に言う。魔理沙と咲夜も若干ジト目になっている。

「アハハハハ！」

「「笑ってごまかすな！」」

「ごめんごめん！それじゃあよくむちゃんに幽々子って人の居場所を聞かないとね」

そうして俺達が妖夢に近づこうとすると……

「ふふ、その必要はないわよ」

声が聞こえてきた。俺達はその声のする方に体を向ける。

そこには桜色の髪に水色の服を着た女性がいた。

第54話

side ミコト

俺たちの目の前に現れた女性。彼女は一体……何者だ？

「ゆ、幽々子様……」

(……え?)

妖夢が女性の名を呼ぶ。

(彼女が……幽々子だと?でも……どうして?)

「ご苦労だったわね妖夢」

「いえ……申し訳ありません。私は……」

「いいのよ妖夢。あなたは十分頑張ってくれたわ。ここから先は……私自らお客さんをもてなすわ」

瞬間、彼女は俺達に向かって夥しい殺気を放ってきた。

「!!」

その殺気に反応して霊夢、魔理沙、咲夜は身構える。

「うわっ、すごい殺気。流石は今回の異変の首謀者つてところだね」

ただ一人、竜希だけは変わらずにヘラヘラしているが。まあ竜希にとってはあの殺気は気にするほどのものではないということなのだろう。本当人間離れしてる奴だ。いや、というよりは人間やめてるって言ったほうがいいか?

「……下がって皆。あいつは私がやるわ」

そう言つて霊夢は一步前が出る。

「ちよつと待ってくれ、霊夢」

そんな霊夢に俺は声をかける。

「なにミコト?」

「……彼女の相手は俺がする」

「え?」

「だから霊夢も魔理沙達と一緒に下がっていてくれ」

そう言つて俺は霊夢を制して前に出ようとする。だが……

「ダメ!」

霊夢は俺を後ろから抱きしめて止めた。

「ダメ、ミコト……行っちゃダメ」

心なしか……いや、間違えなく霊夢の声は震えている。震えた声で……弱々しい声で俺を止める。

「霊夢、なんで止めるんだ？確かにミコトは命がないやつとは相性が悪いけどミコトならあいつの能力は効かないんだろ？」

「そうね。それにミコトはあの3人組と戦ってない分私達よりも消耗が少ないわ。だったらミコトが行ってもいいんじゃないかしら？」

魔理沙と咲夜が霊夢に言った。

「……違う。そうじゃない」

「え？」

「私が……ミコトに行つて欲しくないの」

「……霊夢？」

「能力が効かない？それでも弾幕に当たれば怪我をするかもしれないし死ぬ可能性もゼロじゃない。私たちよりも消耗が少ない？それでもあいつがミコトよりも強かったらそんなこと関係ない」

……確かにその通りだな。

「ミコトが死んじゃう可能性がゼロじゃないって言うなら……私はミコトに行つて欲しくない。もう……ミコトが死んじやいそうになるところなんて私は見たくないの」

霊夢は抱きしめる腕の力を強めていった。

今の霊夢の命からは、強い悲しみを感じる。命に現れるほどの強い悲しみを。

あの時、紅魔館で俺が死にかけた時、俺は霊夢に……こんなにも強い悲しみを与えていたのか。

でも……それでも俺は……

「……ごめん霊夢。それでも俺は……行かなきゃならないんだ」

「……なんで？どうして？ミコトが行く必要なんてない。私が行つてあいつを倒す。それでいいでしょ？ミコトが行かなきゃいけないの？」

「……………さつき、霊夢自身言っていたらどう？能力が効かなくても弾幕に当たれば怪我をするかもしれないし死ぬ可能性もゼロじゃないって。それは霊夢にも言えることだろう？俺だって……………霊夢には危険な目にあつて欲しくないんだよ」

「ミコト……………」

それは心から思ったことだ。霊夢が俺に危険な目にあつて欲しくないと思うのと同じように、俺だって霊夢に危険な目にあつて欲しくない。だって霊夢は……………一緒に暮らす大切な人なんだから。

「それに……………他にもあるんだ」

「え？」

「俺には彼女と戦わなければならない理由がある。だから……………譲れない。俺は彼女と戦う」

「でも……………」

霊夢はまだ納得していないという表情をしている。

「……………霊夢」

ギョツ

「!!」

俺は霊夢に向き直つて正面から霊夢を抱きしめた。

「……………大丈夫だ。俺は……………絶対に大丈夫だから」

俺は『絶対』という言葉を使った。普段なら絶対に使わない言葉。俺が大嫌いな無責任な言葉。だけど……………俺は敢えてこの言葉を使った。霊夢を安心させる為に。そして……………自分に言い聞かせる為に。

「霊夢……………俺は絶対に帰ってくる。無傷で勝つて、ここに……………霊夢の隣に帰ってくる。だから……………俺を信じてくれ」

「ミコ……………ト……………わかったわ。私はミコトを信じる。その代わり……………絶対に帰ってきてね」

「……………ああ」

俺は霊夢から手を離した。そして彼女のいるところまで歩いて行った。

side 魔理沙

霊夢の奴……ミコトに抱きしめられるなんて羨ましいぜ。でも……

(まさか霊夢があんな事考えていたなんてな)

なかなか異変解決の為に動こうとしなかったという割にいざ異変を解決しに行動を起こすといつものに比べてやけに張り切っているとかややる気になっているなど思ったけど……そういう理由だったのか。

動こうとしなかったのは異変を解決しに行けば絶対にミコトがついてくるとわかっていたから。

やけにやる気になっていたのは自分の力だけで異変を解決してミコトにできるだけ戦わせようとしないうえに。

どちらもミコトが危険な目に遭わないようにする為に……
(霊夢、やっぱりお前はミコトのことが……好きなんだな)

あの霊夢が人を好きになるか……未だに信じられないな。……まあそれは私にも言えることか。私もミコトが……好きなんだからな。ただ……

(なんだろう？あの霊夢は……なんか少し怖いぜ)

side 咲夜

……やっぱり霊夢もミコトのことが好きなのね。だからあそこまでミコトの身を案じているのでしょうかね。

(本当に……不思議な人だわ)

一夢命。レミリアお嬢様と妹様に希望を与えてくれた人。レミリアお嬢様と妹様に愛されている人。そして……私が愛する人。彼には不思議な魅力がある。なんなのは具体的には言葉にできないけれど不可思議な魅力が。

私もお嬢様も妹様もその魅力に当てられた。そしてそれは霊夢も例外ではないでしょう。むしろ共に住んでいる分だけ私たちよりも深く魅力を感じているのかもしれない。そしてその分だけ、彼への愛情も深まっている。

でも……だからなのでしょうね。霊夢のミコトに対するあの愛情は……少し重く、歪に見えてしまうのは。

霊夢はまるで……狂ったかのようにミコトを愛しているように見えるのは。

side 竜希

(……やっぱりそういうことか)

ミコトは霊夢に対して『特別』な感情を抱いている。自覚しているかどうかはわからないが間違いなく『特別』な感情だ。

あの感情は神楽に向けた感情と似ているが少し違う。神楽に向けた感情とは違い……安定した感情だ。以前のミコトからは考えられない。

それ自体はきつといいことなんだろう。だけど……問題はやはり

(ミコト自身・・・か)

そう。問題はミコト自身だ。以前のミコトにあつて今のミコトにないもの。そのせいでミコトは今危険な状態にある。とてつもなく危険な状態にだ。だから俺は、もしもの時ミコトを・・・。(頼むから・・・俺にお前を斬らせるようなことにはならないでくれよ?)

side ミコト

霊夢達から離れ、俺は彼女の前に立つ。

「あなたが私の相手をしてくださるのね？」

彼女は扇子を口に当て、俺に微笑みを向けて言った。

「ああ。自己紹介したほうがいいか？」

「ええ。よろしく頼むわ」

「俺の名前は命。一夢命だ」

「そう。いい名前ね。私の名前は・・・いえ、名乗る必要はないわね。なにせあなた達は私を探していたようだから」

・・・彼女を探していた、か。

「なあ、あんたに聞きたいことがあるんだがいいか？」

「いいわよ。何かしら？」

「まずなんで幻想郷から春を奪ったんだ？」

「それは・・・あれよ」

彼女は扇子で大きな木を指した。

「あれは西行妖という桜の木なの。だけど毎年春になつても花が咲かなくてね。私はあれが咲く姿がとっても見たいの。だから妖夢に頼んで幻想郷中の春を集めてもらっていたのよ」

なるほど、あの3姉妹が言っていた花見というのはあの桜でという

ことか。

「そうか……ならどうして咲く姿が見たいと思ったんだ？」

「どうしてって言われても……あんなに大きな桜の木なのよ？きつとすごく綺麗な花を咲かせてくれるに違いないわ。美しいものを見てみたいというのは当たり前前の感情じゃないかしら？」

「……まあ確かに普通はそうだろうな。基本的に桜が嫌いな俺だってあの巨大な木からそんな風に桜が咲くのかは見てみたい。だが……彼女は本当にそれだけが目的なのか？」

「……」

「あら？納得していないのかしら？嘘はついていないのだけれど？」

確かに嘘ではないだろうな。だが……さっき言っていた事以外にも理由があるような気がする。だがまあ聞いたところで教えてくれるとも思えないし、これ以上このことを聞くのはよしておこう。

「それじゃあもう始めてもいいかしら？」

そう言っただけ彼女は戦闘態勢に入った。

「……いや、もうひとつだけ聞きたいことがある」

「あら？まだあったのね。まあいいわ。あなた美人だからもうひとつだけなら答えてあげるわ」

「ありがとう。それじゃあ聞かせてもらおう。あんたは……」

「一体誰なんだ？」

第55話

side ミコト

「……………それは一体どういう意味かしら？」

彼女は俺の問い掛けに対して対してそう答えた。にこやかな表情は変わらないが、俺に対して強い殺気を向けている。

「どうもこうもない。紫から西行寺幽々子は亡霊を統べる亡霊だと聞いていた」

「そうよ。私は全ての亡霊を統べるもの。この冥界の主たる亡霊よ」

「だったら……………どうしてあんたから命を感じるんだ？」

「……………え？」

「俺の能力は『命を理解する程度の能力』。俺はあらゆる命を感じとり、理解することが出来る。だからこそわかるんだよ。あんたが命を持っているってことがな」

「……………」

「もう一度聞こう。あんたは……………一体誰なんだ？」

俺は彼女を睨みつけながら聞いた。

「……………ふふ、ふふふふ……………アハハハハハ！」

彼女は突然笑い出した。まるで狂ったかのように。

「アハハハハ！すごいわミコト！妖夢だってわからなかったのに！まさか気がつくなんて思わなかったわ！」

彼女は笑うのを止めない。彼女の狂喜は止まらない。

「……………いいわ、特別に教えてあげる。私が誰なのかを」

「……………」

「私は……………私の正体は……………」

正真正銘の西行寺幽々子よ！」

突然、彼女は俺に向かって弾幕を展開した。

「っ!!」

咄嗟のことだったが俺はどうにかそれを躲すことができた。

「私に気がついたご褒美よ!あなたは私がコロシテアゲルワ!亡郷

「亡我郷——道無き道——!」

彼女はスペルカードを発動する。夥しい量の弾幕が俺に襲い掛かる。

「ちっ!」

俺はそれも躲す。かなり苦しいがどうにか躲しきることができた。

「まだまだいくわよ!亡舞「生者必滅の理——死蝶——!」

彼女はまたスペルカードを発動する。そして俺はただ、ひたすらに彼女が打ち出す弾幕を躲し続けた。

「ミコトー」

早く助けなければミコトが危ない。そう思った私は私はミコトのもとに駆け寄ろうとした。

「ちよい待ちー」

しかしそんな私の手を掴んで竜希が引き止める。

「離してー」

「嫌だね。離さないよ」

「だったら・・・」

私はスペルカードを取り出す。

「霊夢！お前何しようとしてるんだぜ！」

「やめなさい霊夢ー」

魔理沙と咲夜が私を取り押さえてスペルカードの発動を邪魔する。

「二人共邪魔しないで！」

「そういうわけにいくか！一体どうしたんだ霊夢！少し落ち着け！」

「落ち着け？何言ってるのよ！ミコトが危ないのよ！それなのにどうして落ち着いていられたっつていうのよ！」

ミコトが危ないんだ。私が助けないと・・・あの時みたいにミ

コトが！

「霊夢ちゃん・・・少し黙れ」

「!!」

竜希が私に向かって夥しい殺気をぶつけてきた。私はそれに怯んでしまい動けなくなった。

「はあ全く、やれやれだよ。霊夢ちゃんさ、少しミコちゃんのこと心配しすぎだよ？」

竜希が殺気を抑えて呆れたように言ってきた。

「心配して何が悪いのよ！ミコトは私にとって大切な人なのよ！」

「別に心配するのが悪いだなんて言ってるのはいいことだと思おう」
「ミコちゃんのことを思っているっていうのはいいことだと思おう」

「だったらー！」で・・・も！霊夢ちゃんのそれはちよつといきすぎだよ
「?」・・・え？」

「・・・霊夢ちゃんさ、ミコちゃんのこと信用してないの？」

私が……ミコトを信用してない？

「そんなことない！誰よりも私はミコトを信用してる！」

「……だったらなんで黙って見てられないの？」

「え？」

「ミコちゃんは……『絶対』に大丈夫だって言ったんだよ？あのミコちゃんが……何よりも『絶対』って言葉を嫌うミコちゃんのだ。どうしてもその言葉を信じてあげられないの？」

「それは……」

「……わかってるよ。霊夢ちゃんがミコちゃんを信用していることは。でもね……今の霊夢ちゃんを見るとミコちゃんへの信頼が一切感じられない。ミコちゃんが戦いに行くのを止めようとした時もそうだけど……一方的に自分の気持ちを押し付けているようにしか見えなかったよ？」

！……私の気持ちを……ミコトに？

「……まあその気持ちもわからないでもないけどね。さっきの話を聞く限りじゃあ霊夢ちゃんは目の前でミコちゃんが死にかけるのを見たことがあるみたいだね」

「……ええ、そうよ」

「だから怖かったんだね。ミコちゃんが危ない目に遭つちやうのが。……でもさ、君も……君だからこそ知ってるんじゃないの？ミコちゃんがどれだけ強いのか」

ミコトがどれだけ強いのか……

「もう一度、今度はミコちゃんの親友の俺が太鼓判を押すよ。ミコちゃんは……絶対に大丈夫だよ」

「……」

……竜希の言うとおりね。私は……ミコトを……

「ふたりとも離して。私はもう……大丈夫だから」

「……わかったぜ」

ふたりは私を離した。

「……ミコト」

私はミコトのいる方を見る。ミコトは弾幕を躲し続けている。そ

の表情は苦しそうだ。でも……

「ミコト……信じてるわよ」

心配なんてもうしない。私は知っているから。

ミコトの強さを

ミコトの力を

ミコトなら

絶対に大丈夫だ

side 竜希

……よし、これで霊夢は大丈夫だな。まあ全部ばっちり解決つてわけじゃあないかもしれないけど、これで少しは暴走を抑えられそうだな。全く、まさかミコトだけじゃなくて霊夢の世話まで焼くことになるなんてな。まあこれもミコトの為だから仕方がないか。それよりも……

(ミコト……何か考えてるな)

戦いの時にあんまり考えすぎるとあれほど言ったのにあいつは……まああいつと俺は違うんだ。あれがあいつの戦い方だつ

てことで納得しておこう。ただ……

(頼むから……最悪な結果だけは勘弁してくれよ？そうじゃなければ……お前がどんなに傷ついても文句言わねえからさ)

side ミコト

「ハアハア……」

「随分と息が上がってるわね？」

「ハアハア……そりやあれだけの弾幕を躲し続けてたんだ……疲れもする」

「だったらもういつそ諦めたらどうかしら？そうすれば楽になるわよ？」

「……あいにくと、それを許してくれそうにない奴が後ろで見ているんでな。諦めるわけにはいかないよ」

「そう。だったら……私が諦めさせてあげる！幽曲「リポジトリ・オブ・ヒロカワ——幻霊——！」」

彼女は新たなスペルカードを発動してきた。

(ちっ、このままじゃあジリ貧だな)

俺はひたすらにその弾幕を躲す。

戦いをはじめてから俺はずっと彼女に攻撃をしていない。ずっと

彼女の攻撃を躲し続けている。

もちろん攻撃しないのには理由がある。

俺が攻撃をしない理由。それは………確証を得るため。

彼女が自分のことを幽々子だと名乗った時から俺の中に芽生えた疑念。それに対する確証を得るために俺はこの戦いを長引かせているのだ。

「あくあ、これも躲されちゃったようね。ミコトってしつこいのね。………ねえミコト。一つ提案があるのだけどいいかしら?」
「………なんだ?」

「この勝負………ここまでにしない?このままグズグズと続いても疲れるだけだし」

彼女は笑みを浮かべながら言ってきた。

「あなた達は春を取り戻しにここに来たのでしょうか?だったらもう少し待って頂戴。もう少しで西行妖が咲いてくれるから。そうなら私達はもう春を奪ったりしないわ。だから………この戦いはここで御終い。それでいいでしょ?」

「………」

「あら?もしかして納得できないのかしら?これでもかなり譲歩したのよ?ねえ、お願いだからもう私に戦わせないで。私は戦うためにここに居るんじゃないの。私はもう一度生を謳歌するためにここに居るのよ。だからやめましょうよ」

!もう一度生を謳歌する?」

「………命獄「黄泉の伊邪那美」」

「!!」

俺はスペルカードを発動する。同時に展開された弾幕が彼女を襲う。

「………悪いな。やっぱりこの戦いを中断せるわけにはいかなかった。この戦い………続けさせてもらう」

「……そう、仕方がないわね。やっぱりあなたは……」
コロスワ」

彼女は俺に向かって弾幕を放ってきた。

戦いを続けるか……

我ながらよく言う

これはもう……

戦いではなくなったというのに

第56話

数週間前、博麗神社にて

『それにしても本当にすごいわよね』

『何がだ?』

『ミコトの能力よ。気配を感じることが出来る。傷を癒せる。生命力を魔力や筋力に変換できる。本当に便利ですごい能力よ。正直羨ましいわ』

『そうだな。確かにこの力は便利だ。でも……正直に言えば俺はこんな力を持ちたくなかったと思ってる』

『え?どうして?その力があつて損することなんてないでしょう?』

『確かに損をすることはないだろうな。だが……この能力は危険なんだ』

『危険?』

『ああ。なぜならこの能力は……』

side 霊夢

「ねえよくむちちゃん。ちょっと聞いてもいいかな?」

ミコトの戦いを見てみると、横で竜希が妖夢に声をかけるのが聞こえた。

「……なんですか?」

妖夢は力なく答える。さつき竜希にやられたのがさうとうシヨックだったのか、それとも……

「よくむちちゃんはさ、本当に彼女のこと何も気がつかなかったの?」

「・・・・・・・・・・」

「どうなの？」

「・・・・・・・・あの人がいつもの幽々子様ではないとは思っていましたが
まあ妖夢は幽々子の従者だから気がついて当然ね。」

「・・・・・・・・じゃあさ、君は生前の幽々子ちゃんのごことは知ってるか
な？」

「・・・・・・・・いえ、知りません。幽々子様が亡くなったのは私が生ま
れる前のことですから」

「・・・・・・・・そっか」

「竜希、どうしてそんなことを聞くの？」

咲夜が竜希に聞いた。

「ん？いやね、多分だけど彼女は生前の西行寺幽々子なんだなと
思ったからね。よくむちゃんに確認を取ろうと思ったんだ」

「どうしてそんなことわかったんだぜ？」

「彼女自身が言ってたからね。もう一度生を謳歌するって。だから
彼女は生前の西行寺幽々子で何らかの理由でここにいるんだなと
思ったんだよ」

「生前のって・・・・・・・・それって生き返ったってことか!？」

「生きてた時の肉体がないからちよつと違うけどそんな感じかな
？」

「マ、マジかよ・・・・・・・・」

魔理沙は驚いた表情をして言った。まあそりゃあそうか。何せ死
者が蘇るなんてありえないから・・・・・・・・まあ多分だけど蘇るのとは
違うんでしようけど。

「ねえ霊夢ちゃん。ちよつといい？」

竜希は話に一切参加せずとミコトの戦いを見守り続けてい
た私に声をかけた。

「何？」

私は目を離さずに応じる。

「あく実はさ・・・・・・・・ちよつと謝らなきゃいけないことがあってさ」
「・・・・・・・・それはミコトは全然大丈夫じゃないってことかしら？」

「!?…………気づいてたの?」

「ええ。だってミコト…………あんなにつらそうな顔をしてるんですもの」

幽々子と相対するミコト、その表情はつらく、ひどく苦しそうだ。

「……………ということは、ミコちゃんがやろうとしてることもわかってるんだね」

「……………ええ」

そう。私は知っている。ミコトがこれからやろうとしていること……………いや、ミコトがもうしてしまったことを。

「……………さつき霊夢ちゃんを邪魔した俺が言うのもなんだけどさ、ミコちゃん止めなくてもいいの?このままだったらミコちゃん確実に苦しむことになるよ?」

「……………止めないわ。ミコトだってそれを覚悟した上であそこにいるんでしょ?」

そう。ミコトは覚悟をした上であそこにいる。でなければ……………戦おうとした私を引き止めるはずなどないから。

「それに……………今更行ってももう遅いわ。もう……………止められない」

「……………そっか」

もう止められな。だってミコトは……………もうアレを使ってしまったのだから。

「霊夢……………さつきから何を言ってるんだ?ミコトがどうかしたのか?」

魔理沙が私に聞いてきた。咲夜も気になっているのか私の方を見ている。

「それは……………見ていればわかるわよ。……………もうすぐ終わると思うから」

「……………そうか」

魔理沙と咲夜はミコトのいる方に視線を戻した。

ミコト、それがあなたが決めたことだというのなら私は何も言わな
い。

でも……………どうか……………

(お願いだから……………自分で自分を苦しめないでミコト)

side ミコト

……………もう少しだ。あと少しで……………

「ねえミコト、あなたは一体何を考えているのかしら?」

彼女が俺に問いかけてきた。

「ようやくスペルカードを使って攻撃してきたと思ったらさっきの一
回だけ。そこからはまたさっきと同じように私の弾幕を躲すだけ。
自分から戦いを続けるとか言っておきながらどういうつもり?」

「……………」

「あら? 答えてくれないの? 私はさっきあなたの質問に答えてあげ
たっていうのにひどいわね」

「……………それはすまないな」

「謝らなくてもいいから質問に答えて欲しかったのだけれど……………
仕方がないわね。答える気がないなら……………ここで終わらせて
あげる」

そう言っただけで彼女はスペルカードを取り出した。

「覚悟してねミコト。このスペルカードは今までの比ではないわよ。
なにせ私にとっておきですもの。これを受ければ……………あなた
は確実に死んじゃうでしょうね♪」

彼女は楽しそうに俺に言ってきた。

「……………そうか」

「……つまらないわね、震えるぐらいに恐れおののいて欲しかったのに。……まあいいわ！これで御終いよ！」反魂蝶　—まんか……」

ガクツ

「!!」

彼女がスペルカード発動しようとしたその瞬間。彼女は地面に手と膝をついた。そしてその表情は苦しみに染まっている。

「……え？な……にこれ？体が……動かな……い、それに……苦し……い」

「……どうやらここまでのようだな。実体がないから思ったよりも早かったな」

「ど、どういう……こと？一体……何……を？」

「……俺がさつき発動したスペルカードの効果だ」

「さつき……の……スペル……カード？」

「ああ……さつき俺が使ったスペルカード、命獄「黄泉の伊邪那美」は攻撃用のスペルカードではない。あれは………命を奪うスペルだ」

「……え？」

彼女の顔は恐怖に染まった。

「な……によ……それ………どういうことよ！」

彼女は苦しみながらも声を張り上げていった。

「命獄「黄泉の伊邪那美」は略奪の力。空間型の結界を展開して空間内に居るすべての存在から命を汲み上げるスペルカードだ。この効果によってあなたの命は少しづつ奪われていったんだよ」

「!!……そ……んな……じゃあ………あの弾幕は……」

「このスペルカードが攻撃の為のものだと思わせるためのフェイクだ。お前に怪しまれないようにする為のな」

「あ……ああ……」

「俺から攻撃しなかったのは必要なかったからだ。このスペルカードを発動しさえすれば………全てが終わるからな」

「……う……あ……」

彼女は苦しそうに呻き、恐怖から涙を流す。

「……すまないな。俺は元々戦う気なんてなかった。俺は……あんたの命を奪う為にあんたと相對していた。あんたを……」

殺す為にな」

「……いや……いやああああ！」

彼女はまるでたがが外れたかのように悲鳴を上げた。

「いやーいやいやいやいやいや！死にたくない！死にたくない死にたくない死にたくない！」

彼女は叫ぶ。涙を流して、狂ったように泣き叫ぶ。

「折角……折角生き返ることができたの！もつと美味しいものを食べるの！お昼寝するの！恋もするの！家族も作るの！私は……もつと生きるの！生きて幸せになるの！」

「……」

「お願い！殺さないで！私は……もつと生きたいの！もう死にたくないの！」

彼女は懇願する。先程まで殺そうとした俺に、表情を絶望に染め、悲痛な声をあげ、涙を流して懇願する。でも……

「……そうだよな。誰だって死ぬのは怖い。一度死を経験したあんたなら尚更そう感じるんだろうな……でも……それでも俺はお前を殺す。お前は……死者だから。お前の命は……」

もう失われているはずのものだから」

俺は彼女に言い放つ。

「死ねば命は失われる。生き返るだなんて決して許されない。俺は……許すことができない」

俺は彼女のもとに歩み寄る。そして……

ガチャ

至近距離から彼女の額に銃を突きつける。

「ごめんな。せめて最期は……俺の手で直接終わらせる」

「い……や。いやあ……」

「……さようなら。せめて俺を……」

憎んで

許さないで

恨んで

逝
つ
て
く
れ
」

バン！

彼女の額を銃弾が貫く。

そしてその瞬間……

彼女の命は消え去った。

第57話

side ミコト

「幽々子様！」

銃弾を受け、倒れ伏した彼女に妖夢が駆け寄る。

「幽々子様！……幽々子様！」

妖夢は何度も彼女の身体を揺さぶり名を叫ぶ。すると……

「う、ん……」

彼女は……西行寺幽々子は目を覚ました。

「よう……む」

「幽々子様！大丈夫ですか！」

「ええ……少し頭がクラクラしているけれど大丈夫よ」

「幽々子様……よかった」

妖夢は幽々子を抱きしめた。

「妖夢……心配をかけさせてしまつてごめんなさい」

幽々子もまた妖夢を抱き止めた。その表情は先ほどの狂喜じみた笑顔ではなく優しく見ていると安心するような笑顔だ。

「……なあ、あんたに聞きたい事がある」

そんな幽々子に俺は声を掛けた。空気を読めていないということにはわかつているがどうしても確かめなければならぬことがある。

「何かしらミコト？」

「俺がわかるのか？」

「ええ、彼女に身体を支配されていたけれど意識はあつたから。今まであつた事は把握しているわ」

「……そうか」

それじゃあ幽々子も……俺に銃を突きつけられた時の記憶はあるのか。

「それで？聞きたい事つて何かしら？」

「……ああ、まず確認するがあんたは西行寺幽々子の亡霊で間違いないんだな？」

「ええ、そうよ」

「…………証拠は？」

「証拠か…………どう証明したらいいのかしら？」

幽々子は首を傾げて考えこんだ。

「…………間違いありません」

「妖夢？」

「この方は間違いないなく、この冥界の主たる亡霊、西行寺幽々子様です」

妖夢は幽々子から離れて言った。

「なぜそう言い切れる？」

「私はこの方にずっと仕えてきました。だから…………私にはわかります」

「…………お前の知る西行寺幽々子ではない彼女に従っていたのか？」

「!それは…………」

俺が聞き返すと彼女は言い淀んだ。

「はい、ストゥプ」

竜希が俺と妖夢の間に割って入ってきた。霊夢達もすぐ近くにいる。

「よくむちゃんにそんな意地悪な事いっただメだよミコちゃん。よくむちゃんだつてちゃんと彼女が自分の知る幽々子さんじゃないつて気がついていたんだよく。それでもよくむちゃんは彼女に従う他なかったんだ。彼女もまた『西行寺幽々子』である事は間違いない事だし、よくむちゃんはそれに気がついていたんだろうからね。というか、ミコちゃんだつてそれくらい理解してたんでしょ？」

…………本当に目ざとい奴だな、竜希は。

「…………聞いただして悪かった」

「いえ、ミコトさんの言い分はもつともですから」

…………はあ、本当に俺という奴はどうしようもない。

「それでミコト？何が聞きたいのかしら？さっきの確認が本題ではないのでしよう？」

場の空気を察したのか幽々子が聞いてきた。

「ああ、きつきまであんたの身体を支配していた彼女はあんたの命で間違いないんだよな？」

「そうよ」

「なら……なんで彼女は存在していたんだ？本来死ねば命は失われるはずだぞ」

「そうだ。死ねば命は失われる。それは摂理だ。覆るはずなんてないはず……」

「……どうやらあなたは命を理解する能力を持っていても命のすべてを知っているわけではないみたいね」

「どういうことだ？」

「……いいわ。教えてあげる。彼女がなんで存在していたのかを。といつても、私も彼女に支配されて初めてわかったことなんですけどね」

「……頼む」

「それじゃあ話すわね……そもそもの原因はあれよ」

「そう言つて幽々子が指差したのは……」

「……西行妖？」

「そうよ。あそこには……私の死体があるの」

「！！！！」

幽々子の言ったことに俺達は思わず驚愕した。

「ずっと忘れていたことだけれど……ようやく思い出した。私はあそこで自害したの」

幽々子は悲しそうな顔で言った。

「幽々子様が……自害？どうして……」

「……生きていた頃の私にはね、元々死を操る能力なんてなかったの。私の本来の能力は『死霊を操る程度の能力』。決して死そのものに関わるものではなかった。でも……西行妖のせいで私の力は変わってしまった」

「西行妖のせい？」

「そうよ。西行妖はね、人の精気を吸って妖怪となってしまう桜なの。元々は普通の美しい桜だったけれど、妖怪になってしまったから

は咲くたびに人を死に誘うようになってしまった……悲しい桜よ」

「……………どうして妖怪になったんだ？そもそもなぜ精気を吸った？」

「それは……………」

彼女は表情を暗くした。その表情からはとてつもなく深い悲しみが読み取れた。

「……………すまない。話したくないなら言わなくてもいい。本題はそこではないからな」

「ありがとうミコト……………ともかく私は西行妖のせいで死を操る力を得て……………人を殺すだけの存在になってしまったの。私はそのことに絶望して……………桜が満開の時に桜の下で自害したのよ」

……………自らの能力に絶望して、か。

「同時に私は力がある限り転生しても同じ苦しみを味わい続けるだろうと考えた。だから私は自分の肉体を鍵として西行妖に封印を施したの。西行妖が咲いて人を殺す事は無くなるように、私が転生する事も無くなるように……………そうして亡霊となって私は生前の記憶を全て捨てた。もう何も悩むことがないように」

「……………」

「でも……………それで全てが終わったわけではなかった」

「どういこと〜？」

「……………私の死体の中にはねほんの僅かだけれど命が残っていたの」

「それって……………幽々子さんは死なずに生きてたってこと？」

竜希が聞いた。

「いいえ違うわ。命があつたといつてもそれは微々たるもの。生きているとは到底言えない小さなものよ。でも……………その命はいつまでたつても消えることはなかった。その命には……………未練があつたから」

「未練？」

「ええ……彼女言っていたでしょう？もつと生きたいって。もつと生きて……幸せになりたいって」

「……」

「それが彼女に未練。その未練が彼女という小さな命を保っていた。いつまでも消えることなく。生への執着だけを強くして、ひっそりと、誰にも悟られることなく存在し続けていた。そして……その時が来たのよ」

その時が……

「どういう訳かわからないけれど彼女は私のしたいから飛び出てきてしまったの。飛び出てきて……私の体に移った。彼女も私と同じ『西行寺幽々子』、しかも命を持っている。私の全ては元々彼女のものだったから私の体は容易に彼女に支配され、私の意識は奥底に閉じ込められてしまった。そして私を封じ込めた彼女は……完全な形で蘇るために行動を起こした」

完全な形で……蘇る……

「彼女は……西行妖の封印を解こうとした。そうすることで封印の鍵となった肉体をを開放しようとしたの。そうすれば完全な形で……『西行寺幽々子』が蘇ると考えたから。封印を解くことの意味を知っていながら……彼女は西行妖を咲かせようとしたのよ」

「……生きたいから、か」

「……ええ。これで話はおしまいよ」

「……そうか」

……なんだよそれ。そんなの……

「……哀れだな」

「「え？」」

俺が呟くと皆は俺の方を見た。

「彼女は……哀れすぎる。西行妖を咲かせたところで……生きることなどできはしないのに」

「……どういことですか？」

妖夢が俺に訪ねた。

「……なあ幽々子、聞くがその封印が施されたのはいつの話なんだ？」

「……1000年以上も前の話よ」

「……やはりか」

「やはり？説明してくださいミコトさん。何がやはりなんですか？」

「……幽々子は元々は人間だ。能力を持っていたとしてもそれは変わらない」

「それがどうかしたんですか？」

「……人間が1000年もの時を耐えられると思うか？」

「!!」

「封印を説いたその瞬間、幽々子の肉体には1000年の時が流れる。人間の体ではその時に耐えることが出来るはずない。封印が解かれた瞬間……彼女は死んでいただろうな」

「そ……んな……じゃああの人は……一体何の為に……」
「……生きるためにやったことだった。でも結局は彼女が生きる術など存在しなかった。所詮……彼女は死ぬ運命だったんだ」

「……」

まあそれでも……

俺が彼女を殺したという事実は変わらないがな。

「……それに気がつくことができないくらい、彼女は生きることに固執していたんだね」

竜希がいつもの口調で言った。ただその声はふぎけている時とは違う静かで重いものだった。

「……そうだったんだらうな。ただ……それでも俺は……許せなかったがな」

「……彼女が生き返ろうとしたことが？」

「……ああ」

たとえどんな理由があろうとも、どんなに強い思いがあろうとも、死者が蘇ることなんてあっていいはずがない。許されるはずがない。だって……それが許されるというのなら……俺は……

どんな手を使っても神楽を生き返らせようとするだろうから。

だから……許されていいはずがないんだ。

「……ミコト」

ずっと沈黙を貫いていた霊夢が俺の名を呼んだ。

「……霊夢。終わったよ、異変は無事解決した」

俺は霊夢に向き直り言った。

「……」

ガシッ

霊夢は突然、俺に身を預けてきた。

「？霊夢？」

「……無事じゃない」

「え？」

「全然無事にじゃない！なによ！絶対に大丈夫だって言ったくせに！

どことが大丈夫なのよ！」

「……何言つてんだよ霊夢。俺は大丈夫だっただろう？どこも怪我してないし命の危険だつてなかったんだから」

「でも……でも……傷ついてるじゃない……すごく……すごく……」

霊夢は涙を流しながら言う。

「俺が……傷ついてる？」

「ミコト……すごく辛そうな顔してる……苦しそうな顔してる……泣きそうなほど悲しそうな顔してる……そのどことが大丈夫なのよ？」

「……」

「辛いなら辛いつて言つてよ！苦しいなら苦しいつて言つてよ！悲しいなら……泣いて悲しいつて言つてよ……」

「……」

「お願いだから……ひとりで抱え込まないでよ……ミコトオ……」

「……霊夢」

フワツ

俺は霊夢を抱きしめた。

「……大丈夫だよ。俺は大丈夫」

俺は霊夢に言った。

そうだ、俺は大丈夫なんだ。だって……彼女のほうが……『西行寺幽々子』の方がずっと苦しんだから。悲しんだから。生きたいと強く願っていたのに……結果的には俺がその願いを打ち壊した。たとえ死の運命から逃れられないとしても……俺は彼女の希望を打ち砕いた。

だから……そんな彼女に比べて俺は……大丈夫に決まっている。

「帰ろう霊夢。博麗神社に。帰って花見の準備をしよう。皆春が来るのを待ち焦がれていたんだ。きっと騒がしくて楽しい宴会になる。だから……帰ろう」

俺は霊夢に可能な限り優しい声で言った。

「ミコト……うん」

霊夢は頷いた。きっと俺の心境を察してくれたんだろう。本当に……俺は霊夢に心配をかけさせてばかりだ。

「魔理沙も咲夜も帰ろう……全て終わったんだから」

「……そうね」

「だな。帰って花見の準備だぜー」

そうだ。これで終わったんだ。これで全て……

ゾクッ！

「!!?!」

全てが終わったと思ったその瞬間、俺達は強い寒気と禍々しい気配を感じた。

気配のする方に振り返るとそこには……

禍々しい瘴気を放つ西行妖の姿があった。

第58話

side ミコト

「な、なんだけあれは？」

西行妖を見て魔理沙が呟く。西行妖は黒く、禍々しい瘴気を放っている。

(この感じ……まずい！)

「皆、俺の近くに來い！」

「え？」

「早く！」

「わ、わかったわ」

霊夢達は俺の近くに集まった。

「命極「国生みの伊邪那岐」」

スペルカードを発動し俺達の周囲に結界が貼られた。

「これって……あの時の治癒のスペルカードよね？」

「なんで今これを使ったの？」

咲夜と霊夢が聞いてきた。

「……西行妖をよく見てみる」

俺が言うとは皆は目を凝らして西行妖の方を見た。

「！そんな……どうして……」

幽々子は表情を驚愕に染めた。なぜなら……

西行妖が花を咲かせているからだ。まだ3分程だが徐々に、少しずつ満開に近づきながら。しかも……

普通の桜とは全く違う黒々とした花をだ。

「西行妖は死を撒き散らす桜なんだろう？だからこのスペルカードを発動したんだ。このスペルカードの能力は正確には治癒ではなく生命力の供給だからな」

「それで西行妖の力と相殺させているんですか？」

「ああ、だから結界からは出るなよ」

俺は皆に念を押しした。

「でも……どうして？どうして急に咲き始めたの？」

幽々子が西行妖を見ながら言う。

「それは……詳しくはわからない。だがもしかしたら既に花を咲かせるのに十分な春が集まっていて芽吹くのに時間がかかっていただけなのかもしれない」

「そんな……じゃあ西行妖が咲いたのは……私の……」

妖夢は膝をつき、項垂れる。

「……違うわ妖夢、あなたのせいじゃない。こうなったのは全て……私のせいよ。私が……彼女に意識を奪われさえしなければ……」

そんな幽々子もまた表情を暗くし自分を責めた。

「……二人共、落ち込む気持ちはわかるけど今はそれどころじゃないわ」

「そうよ。今はこの状況をなんとかするのを考えるのが先決よ。落ち込むのは後にして」

霊夢と咲夜が落ち込んでいる二人を諭した。

「霊夢と咲夜の言うとおりだ、あまり時間がない。こうしている間にも西行妖は満開に近づいてその度に力を増してるんだ。それにこの結界もあまり長くは保てないぞ」

はつきり言つて今はかなりまずい状況だ。俺や霊夢、元々死んでいる幽々子には影響がないだろうが……魔理沙と咲夜、それに竜希と半霊の妖夢は違う。結界がなくなれば早々に西行妖の力で死んでしまう。

「でも……一体どうすればいいんだぜ？あの木を倒せばきつと止

まるんだろうが……あんなでかい木を短時間で倒すのはさすがに無理だぜ」

「そうね……時間さえあればなんとかなるでしょうけど……」
魔理沙と霊夢の言うとおりで。西行妖さえ倒してしまえばきっと自体は収まる。だがおそらく間に合わない。今西行妖は8分咲き手前といったところだ。あんな巨木を今から倒そうとしたんじゃあ間に合わない。

「でも皆でやればなんとか……」

「それは無理だ妖夢」

「どうしてですか？」

「あれを倒しに行くにはこの結界から出る必要がある。だが魔理沙、咲夜、竜希、そして妖夢はこの結界からは出られないだろう。出ても大丈夫なのは俺、霊夢、幽々子の3人だ」

しかも結界を貼っている間俺は動くことはできない。実際にやるのは霊夢と幽々子の二人。到底間に合わない。

「そんな……じゃあ……どうすれば？」

「……」

俺は答えることができなかった。はっきり言って現状を打破する方法は……ない。

(……くそつ、どうにもならないのか?)

俺が自分の無力さに腹を立てていると……

「……気に入らねえ」

「……竜希？」

今まで沈黙していた竜希が重く、鋭い、そして……悍ましい程の闘気をまとって口を開いた。

「なんだよあれ？黒い桜？……胸糞わりい」

竜希は西行妖の方に歩み始めた。

「待て竜希！結界から出るな！」

「大丈夫だよミコト。あの程度の力、俺には通用しない。俺はあんなもんの影響受けられる程弱くねえんだよ」

あんなもんって……こいつ……

「……………結界から出てどうするつもりだ？」

「どうする？決まってるんだろ……………あれを斬る」

「なっ!?む、無理よ!あんな大きな木をひとりで斬るなんてできるはずが「できるよ」……………え？」

竜希は霊夢の言葉を遮った。

「俺ならできる。それが……………俺の能力だからな」

「竜希の……………能力？」

「ああ、待ってろ、すぐに終わらせてきてやる」

竜希は結界から出ようとした。

「竜希」

そんな竜希を俺は呼び止めた。

「何だ？」

「……………信じてもいいんだな？」

「……………当然だ。ミコトも知っているだろう？俺は……………『最強』だ」

竜希は一部の迷いも戸惑いも持たず、堂々と言い放った。

「……………わかった。頼むぞ」

「……………ああ」

竜希は結界から出た。竜希の命には全く変化が見られない。本当に西行妖の影響を受けていないようだ。

「ミコトさん……………なぜ竜希さんを行かせたんですか？」

妖夢が聞いてきた。

「……………その答えは妖夢もわかっているんじゃないか？あいつの強さ……………あいつの剣を受けたお前なら」

「……………」

「俺達は待っていればいいんだ。あいつが……………竜希が西行妖を斬るのをな」

「……………そう……………ですね」

俺と妖夢は西行妖へと歩を進める竜希の背に視線をやった。

side 竜希

(……この辺でいいか)

俺は西行妖から少し離れた場所で歩みを止めた。

「……………」

俺は西行妖を見上げた。少しずつ満開に近づく『黒』い桜。そんな桜を俺は……美しいと感じた。ただ同時に……………忌々しいとも感じた。

ス……………

俺は刀に手に掛け、ゆっくりと抜刀する。すると……………
ブワツ!

西行妖は夥しい程の黒い瘴気を俺に向かって放ってきた。俺が自分に仇をなそうとしているのに気がついて俺を殺そうとしているんだろう。

ス……………

ただ俺はそれを気に止めるつもりはない。ゆっくりとゆっくり……………抜刀を続ける。

強く、堂々とした『黒』い桜。その姿は俺にあいつを……………

『神楽』を思い起こさせた

俺は桜が好きだ。だがこの桜を認めたくない

認めるわけにはいかない

この『黒』が咲き誇る姿を見たくない

この『黒』が儂く散る姿を見たくない

『神楽』を思わせる西行妖

俺はこいつを……

斬る

ゴオオオオオ!

黒い瘴気は勢いをまして俺に迫る。そして、もう少しで俺に届くという所で……

ザンツ!

俺は刀を抜ききった。そして……

ギイイイイイイ!

黒い瘴気は消え、周囲には断末魔が響き渡る。

「飛天御剣流「絶龍閃」。この剣は俺の能力により、あらゆるものを断ち切る一閃」

ギイイイイイイ!

西行妖の断末魔は消えない、それどころか苦痛に比例するがごとく、より大きく轟く。

「……すまないな西行妖。お前は間違いなく俺が今まで見てきたどの桜よりも……美しい桜だ。だが……お前を見ていると思いで出してしまうんだよ……」

俺にとって何よりも大切な『黒』を

俺にとって何よりも愛おしい『黒』を

そして……………

どんなに手を伸ばしても絶対に届くことのない『黒』を

だから俺は……………お前の存在を認めることができなかつた」
ギイイイイイイイ!

「さようなら西行妖。お前のその断末魔の叫びを、俺は……………」
死ぬまで覚えているよ」

俺は刀を鞘に収めながら言う。
ギイアアアアアアア!

西行妖の断末魔は更に大きくなる。そして……………

ガチンツ

ギイ………

俺が刀を納刀仕切ると同時に、西行妖から断末魔が聞こえなくなつた。

西行妖は………その存在を消した。

第59話

side ミコト

竜希が西行妖を斬ってしばらくした後、俺達は……

「それじゃあもう一度……カンパニー！」

「乾杯!!」

……未だに冥界に居た。しかも宴会まで始まっている。

「……はあ」

「およ?なんでため息なんてついてんのミコちゃん?」

「……なんでもねえよ」

「そお?ならいいけどさ。というかもつとテンション上げようよ!

折角の宴会なんだからさ!」

「あなたもよ妖夢。もつと楽しみなさい」

「は、はあ」

「霊夢もそんな辛気臭い顔しないで楽しもうぜ!」

「……わかってるわよ」

全く、さつきまで滅茶苦茶ピンチだったのに……竜希も魔理沙も幽々子も切り替え早すぎるだろう。どんだけ宴会好きなんだ?正直このノリに乗り切れん。霊夢と妖夢も俺と同じでテンション上げきれてないみたいだし(ちなみに咲夜さんはレミリアさんを待たせたくないと言ひ紅魔館に帰りました by 作者)。ただまあ……(あんなもん見ちまったんだから、三人がこうなるもの無理ない……か)

俺はある方向に視線を向ける。そこには……

大きな桜の木が満開の状態で咲き誇っていた。

あの時、竜希は間違いなく『西行妖』を斬った。にも関わらず『桜』はこうして咲き誇っている。死を撒き散らしていた時とは違い『桜色』の花を咲かせて。

なぜ斬られたはずの桜がこうして咲き誇っているのか？その理由は……竜希の能力にあった。

「どうしたのミコちゃん？桜をじっと見つめたりしてさあ」

「いや……本当に、お前の能力はとんでもないなと思って」

「……まあね。正直俺自身俺の能力は超ヤバイと思うよ」

竜希は複雑そうな表情で言った。

竜希の能力、それは……

『悉くを断ち斬る程度の能力』

竜希曰くこの能力は文字通り『あらゆるもの全て』を斬ることができる能力らしい。それがたとえ形なきものであってもだ。

更にこの能力は斬らないことさえも選択することができる。

つまり竜希は……この能力を使って桜の木を一切傷つけず

に桜に宿った『西行妖』のみを斬り、消滅させた。

そして内に秘めた妖怪が消滅したことによって、あの桜は『ただの桜』に戻ることができたのだ。

「……………流石は紫黒家の人間と言ったところね」

いつの間にか近くに来ていた幽々子が言った。

「おろ？幽々子さんは紫黒家のこと知ってるの？」

「ええ。紫黒家のことはよく知っているわ……………どういふ目的で存在し、なぜ幻想郷から外の世界に移り住んだのかもね」

「……………へえ、そうなんだ。それにしても……………本当にあの桜は綺麗だよね」

竜希は桜を見ながら言った。どうやら竜希は紫黒家の事について話すつもりはないらしい。

「……………そうだな」

竜希が話すつもりがないのなら聞くつもりはない。だから俺は竜希に話を合わせることにした。

「やっぱりミコちゃんは桜好きじゃない？」

「……………ああ。あの桜が綺麗なのは認めている。でも……………やっぱり好きにはなれそうにない」

「……………そか、まあミコちゃんの考えを否定する気はないよ。でも……………俺個人としては嫌いにはなんないで欲しいかな？あれだって嫌われるために咲いているんじゃないんだから。ミコちゃんならそれわかるよね？」

「……………ああ。わかっている」

嫌われるために存在しているんじゃない。それは……………よくわかる。

「……………ならいいや」

そう言つて竜希は手に持った盃に注がれている酒を飲み干した。

「酒飲めたんだな」

「うん。結構頻繁に一・緒・に飲んでたからね」

「……………そうか」

……………一緒にか。一緒に飲んでいたのはきつと……………あ

いつなんだろうな。

「はいミコト」

幽々子が俺に酒を勧めてきた。

「ん？ああ。ありがとう幽々子」

「どういたしまして♪」

幽々子は空になっている俺の盃に酒を注いだ。そして注がれた酒を俺は一気に飲み干した。

「いい飲みっぷりね」

「まあな」

「・・・ミコト、ありがとう」

「何がだ？」

「私を・・・助けてくれたこと」

「・・・別に礼なんていらないさ。俺はただ・・・」「自分がそうしたいからやっただけ？」

幽々子は俺が言おうとしたことを先に言った。

「それでもお礼を言うわ。あなたがいなかったら私は・・・どうなってしまったかわからないな。もしかしたら私という存在そのものが消えてしまったかもしれない。あなたがどう思っているとも・・・あなたが私を救ってくれたことは事実よ。だから・・・本当にありがとう」

「・・・ああ」

「ふふ。さあもつと飲みましょう。お酒も料理もまだたくさんあるから」

「そうだな」

美しく咲き誇る桜の下で、俺達は酒を飲み、料理に舌鼓を打つ。

幻想郷にいる誰よりも一足早く、春を満喫した。

宴会が終わった後、俺達は幽々子の計らいで白玉楼に泊まることになった。

霊夢、魔理沙は宴会が終わったら速攻で眠りについた。異変解決のために動き回ったので無理もない。そんな中俺は……

「……ふう」

屋敷の縁側に腰掛けて、桜を見ながら煙管を吸っていた。もちろん幽々子の許可はちゃんととってある。

「……何か用か竜希？」

「……さすがミコちゃん。気配に敏感だね」

竜希が縁側の角から出てきた。

「正確には気配ではなく命を感じたんだがな。お前の命は特徴的だからすぐにわかった」

「特徴的？どんなふうに特徴的なのかな？」

「……悲しみと絶望」

「え？」

「……お前の命からは深い悲しみと絶望を感じた」

「……そっか、悲しみと絶望をねえ」

竜希は憂いを帯びた表情で呟いた。

「……それで？なんの用だ？」

「別に用はないよ。ただ夜風にあたりに来ただけ。それよりも……煙管、吸うようになったんだね」

竜希が俺の手にしている煙管を見て言う。

「……ああ」

「それって……カグちゃんの真似？」

「……そうだな。吸い始めたときはそうだったよ。でも……」

今は自分の楽しみのために吸っている」

「……ふうん」

それ以降、竜希は何も言わなかった。ただ黙って桜を見つめる。
「なあ竜希、お前に聞きたいことがある」

そんな竜希に俺は問いかけた。

「な〜に？」

「……お前が幻想郷に来た本当の理由は何だ？」

「……本当の理由？何言ってるのさ、あの時言ったようにミコちゃんに会いに来たんだよ」

「……嘘つくなよ」

「へ？嘘じゃあないけど？」

「……これでも俺はお前の親友だぞ？お前の嘘ぐらいわかる。お前の本当の目的……別にあるんだろ？」

俺は竜希の目を見ていった。

「……はあ、流星はミコトだな。やはり誤魔化せないか」

竜希はしばし目を伏せた後、口調を変えて言った。

「その通りだよ。俺がこの幻想郷に来た目的は別にある。まあミコトに会いに来たというのも確かにあるのだがな」

「……その目的ってなんだ？」

「……聞かなくてもミコトなら検討がついてるんじゃないか？なにせお前は……俺の親友なんだからな」

この聞き方……やっぱり俺の検討通りということか。

「……探しに来たんだな」

「……ああ、外の世界ではもう絶対に見つからないからな」

「……そうか。ならこれからは幻想郷で暮らすのか？」

「そうなるな」

「……外の世界に未練はないのか？」

「……ないよ。未練は……『あの時』に完全に消えた。もう外の世界にいる理由も価値も俺にはない」

……『あの時』か。

「……なあ竜希、お前は……」

俺を憎んでいるか？」

俺が聞くと、竜希は目を見開いた。

「……いきなり何を言うかと思えば、くだらない。そんなの……」

憎いに決まっているだろう？だから俺はお前を許し、お前の幸せを望んでいる・んだよ」

「……そうか」

やはり竜希は……俺を許すのか。

俺を……斬らないのか。

「……部屋に戻る。ミコトはどうする？」

「俺は……もう少しここに残るよ」

まだ……ここに残る理由があるみたいだからな。

「……そっか。それじゃ俺は寝るよ。お休みミコト」

「……ああ」

竜希は用意された部屋へと戻っていった……まあおそろくすぐには眠れないだろうがな。

「……出てこいよ。俺に用があるんだろ？」

「……やはり気がついていましたか」

そう言つて竜希が去つた方向とは逆側から出てきたのは……妖夢だった。

「半分幽霊でも命があれば俺にはわかるさ。まあ竜希もわかつていただろうがな」

だからあいつはここから去つたようなものだからな。

「……それで？お前は俺に……竜希の何を聞きたいんだ？」

「……そこまでわかっているんですか」

「ああ。なにせ妖夢は宴会中ずつと竜希の方を見ていたし、何度も俺に話しかけようとしていたからな。それくらいは容易にわかる」

「……そうですか」
「……聞くなら早く聞いてくれ。俺も疲れているから眠りたいんだ」

「わかりました。私が聞きたいのは……竜希さんがどういう人なのかです。初めて会った時はヘラヘラとした不真面目な方だと思っていました。戦闘中は時は特に不真面目さに拍車がかかってた」

まあ普段のあいつはそうだな。常にヘラヘラと巫山戯ていて……真面目さとはかけ離れていると思わせている。

「ですが……私に刃を振るつた時、あの時の竜希さんは……まるで別人でした。まるで引き裂かれるかのような鋭い雰囲気を感じ、ひどく冷たい声で語り、そして……途轍もなく悲しそうな目をしていた」

「……………」

「私……………気になってしまってます。自分でもどうしてなのかわからないけど……………竜希さんのことがどうしようもなく気になります。ですから教えてください。竜希さんは……………一体どういう方なんですか？私が見たどの竜希さんが本当の竜希さんなんですか？」
妖夢は真剣な眼差しを向けて聞いてきた。

「……………わかった。教えてやるよ。全てではないが俺の知っている竜希を……………最も不幸な存在であるあいつのことを」

side 竜希

「……………およ？俺の部屋の前で何してるの霊夢ちゃん？」

ミコちゃんのいる縁側から離れて戻ってきたら霊夢ちゃんが部屋の入り口の前にいた。

「竜希に話があるの」

「俺に？ミコちゃんじゃなくて？」

「そうよ」

「ふうん……………まあとりあえず部屋に入りなよ。廊下で立ち話もアレだしさ」

「そうね」

俺と霊夢は部屋に入った。

「それで？話って何かな？」

部屋にあった座布団に座って俺は霊夢ちゃんに要件を聞いた。

「……あんたはミコトの親友なのよね？」

「そうだよ。俺はミコちゃんの唯一無二の親友だ」

「ならあんたは……神樂のことを知ってる？」

「!!」

……まさか神樂のことを聞いてくるとはな。想定外だ。

「……ミコトから聞いたのか？神樂のこと」

「……ええ。といっても詳しいことは聞けなかったけど。ただ……ミコトにとって何よりも大切な存在だったってことは聞いたわ」

「そうか……それで俺に詳しいことを聞こうと思ったのか？」

「……神樂の話をした時、ミコトは……酷く儂い表情をしていた。だから私は知りたいの。ミコトにあんな表情をさせる神樂のことを。私は……ミコトのことをもっと知りたいから。ミコトのことを支えてあげたいから。だから……教えて」

……そうか。霊夢はそこまでミコトのことを……

「わかった教えてやる。神樂のことを。そして……最も哀れな存在であるミコトのことを」

第60話

現代に生まれた3人の『異端』

一人は何者からも愛されることのなかった『命の理解者』

一人は何者からも愛された『美しき深黒』

そしてもう一人は………決して満たされることのない『偽りの道化』

side 妖夢

「さて、まずは何から話すべきかな………」

「ミコトさんは煙管を吸いながら言う。

「本当の竜希さんの性格を教えてください」

「……わかった、ならまずはそこから話そう。本当の竜希は………妖夢に刃を向けたとき、そして………西行妖を斬ったときに見せたあの顔が本当の竜希だ。普段見せている巫山戯た態度や口調はあいつが自分につけた自分を偽るための道化の仮面」

自分を偽るための………仮面？

「なぜ竜希さんは………自分を偽っているんですか？」

「………本気にならないためだ」

「え？」

「あいつは……何事においても本気になることを……真剣になることを嫌っているんだよ。だからあんな風に巫山戯た自分の……道化の仮面を付ける。仮面を外すのは……本気で真実を語るときと……刀を抜いた時だけだ」

「本気に……真剣にならないために？……なぜ嫌っているんですか？」

「……」

ミコトさんは口を閉ざした。

「話してくださいミコトさん」

「……妖夢、お前は剣が好きか？」

しばしの沈黙の後、ようやくミコトさんは口を開く。

「え？」

「どうなんだ？」

「剣が好きかどうか……私は今日の竜希さんとの戦いで剣を振るうことの恐怖を知った。でも……」

「……好きです。たとえ剣がどういうものであっても……剣を振るうことに恐怖が伴うとしても……その事実が変わりません」

「……そうか。それじゃ他に好きなことはあるか？」

「他に好きなことですか？そうですね……この庭の手入れをすることが好きです」

私は目の前に広がる庭園を見渡しながら言った。

「……この庭は妖夢が手入れをしているのか。いい仕事をしているな。妖夢自身は自分の仕事に満足しているか？」

「そうですね……私はまだ半人前ですが幽々子様には褒めていただいています。嬉しそうに庭を眺める幽々子様を見てると……すぐく満たされた気分になります」

「……そうか」

ミコトさんは目を伏せた。

「ミコトさん、今言ったことがどうかしたんですか？それが竜希さん

が本気にならないこととなんの関係があるんですか？」

「・・・・・・・・関係あるさ」

ミコトさんは目を開いて言った。

「あいつもな・・・・・・・・竜希も好きなんだよ。そういう庭の手入れとか。他にも歌を歌うこと、舞を舞うこと、花を活かせること、絵を描くこと、そういったことをあいつはこの上なく好んでいる」

「そうなんですか・・・・・・・・なんか意外ですね」

「そうだな。だが・・・・・・・・あいつはそのどれもやらない」

「え？」

「何よりも好きなのに・・・・・・・・何よりもやりたいと思っっているのに・・・・・・・・あいつはやらないんだよ」

「・・・・・・・・どうしてですか？」

「・・・・・・・・ないからだよ」

「ない？」

「ああ。あいつには・・・・・・・・その才能がなかったんだ」

才能が・・・・・・・・ない？

「・・・・・・・・どれだけやっても自分の満足のいくようにできない。いつも自分の能力の無さに絶望していたらしい」

「自分の能力の無さに・・・・・・・・」

「才能がなくても楽しむことができる。そんな風に考える人もいる。だけど・・・・・・・・俺はそうは思えない。好きだからこそ・・・・・・・・才能がないと辛いし苦しいと思う者もいる。才能がないから・・・・・・・・自分の満足のいく結果が得られずに楽しむことができなくなる。竜希も・・・・・・・・そうだ」

「・・・・・・・・」

「しかも・・・・・・・・それだけじゃあないんだ」

「え？」

「今言ったことだけじゃあない。あいつは・・・・・・・・」

自分が心の底から望むものを何一つ手に入れることができないんだよ。才能も………ものも」

望むものを………何一つ手に入れることができない？

「………どんなに望んでいても自分がやりたいことの才能がない。自分が欲しいと思ったものも一時は手にしたとしても必ずこぼれ落ちる。どんなに………」

愛する者から愛されたい願っていてもその人物から愛をもらうことができない。あいつは………決して満たされることがないんだよ」

ミコトさんはまるで自分のことを語るかのように重く、辛そうに語った。

「だからあいつは………本気にならないんだ。本気になっても満たされないと知っているから。真剣にやっても………真剣になるだけ虚しくなるだけだから。だからあいつは本気にも真剣にならない。」

そうすることに……意味を見いださない。道化の仮面をかぶる事を選んだんだ。……それが自分を更に苦しめている」

「道化の仮面を……」

「……自分の望むものを絶対に手にすることができない。だから本気にも真剣にもならない……あれ?でも……」

「剣はどうなんですか? 竜希さんには圧倒的なまでの剣の才能と戦いの才能があります。それこそ……嫉妬してしまうほどの才能が。それに剣を抜いたときは真剣になっているじゃないですか」

「……そうだな。竜希の剣の才能と戦いの才能は、抜けている。この二つの才能であいつを超える者がいるとは到底思えない程だ」

「だったら……」「だからこそ……」竜希は余計に苦しんでいるんだよ「え?」

余計に……苦しむ?

「いつそ、そんな才能さえなければ竜希は……絶望なんてしなかっただろう」

「……どういう……ことですか?」

「言っただろう? 竜希は望むものを手にすることができないんだ。なら……剣の才能と戦いの才能はあいつが求めたものなのか?」

「!!じゃあ竜希さんは……」

「……望んでなんかないさ。剣の才能も戦いの才能も、あいつはそんなものを望んでなんかない。剣も……戦いも……あいつは……何よりも嫌っている」

「……」

「あいつは強さなんて求めていない。剣を振りたいなんて思っていない。それでも……あいつは強くなるために自分を鍛え続けた。剣をふるい続けた。それが……才能を持った自分の責務だと自らに言い聞かせて……望む才能を得られなかったあいつにとって……それはどんなに嫌っていたとしても……すぐるべきものだったから。これから先も……剣を振るい、強くあり続け、戦い続ける。その才能しかあいつにはないから」

「……」

そうか……だから竜希さんは剣を抜いた時にあんな顔をして
いたんだ。嫌っているのに……したくもないのに……
剣をふるって……力をかぎして……それは一体どれほど
の苦痛なのだろう？絶望なのだろうか？

私には……わからない。

竜希さんの苦しみを……悲しみを……私には理解するこ
とができない。

ツ……

「あ、あれ？」

気がついたら私の目から涙がこぼれ落ちていた。

「私……どうして？」

涙が止まらない。

竜希さんのことを思うとすごく悲しい気持ちになる。

私のことじゃないのに……胸が締め付けられるように苦し
い。

「……妖夢、お前に頼みがある」

「私に……頼み？」

「ああ。まず一つはあいつをここに住ませてあげて欲しい」

「ここって……白玉楼に？」

「ああ。竜希は……もう外の世界に帰るつもりはないらしい。だ
から……ここをあいつの帰る場所にして欲しいんだ」

「帰る場所に……私も白玉楼に住んでいますがこの屋敷は幽々子

様のものです。私の一存では決めることができません」

「ああわかつている。だから妖夢の口から幽々子に言つて欲しいんだ。もちろん俺も幽々子にちゃんと話す。だから……頼む」

ミコトさんは私に頭を下げた。

「……わかりました。どうなるかは幽々子様が決めることですが私からも頼んでみます」

「そうか……ありがとうございます」

「いえ……ですがどうしてここ何ですか？ここは冥界で生きている人間なんていません。ここよりも人里で暮らさせる方がいいのでは？」

「いや、あいつにとつてここが一番いいんだ。ここには……お前がいるからな」

「え？」

私が……いるから？

「妖夢、お前は……竜希の『求め』になつたんだよ」

「竜希さんの……『求め』？それって一体どういう……」

「……竜希が元の世界に戻らないのは、あの世界にはなんの未練もないからだ。あの世界では竜希が求めるものは絶対に手に入らない。だからあいつは幻想郷に来た。『求め』を探すために。そして……あいつは見つけたんだよ。何よりもあいつが欲する『求め』を。決して望むものを手にすることができないと知りながらもあいつが切に願う『求め』を」

「それが……私？私が……竜希さんが何よりも欲する『求め』？その『求め』ってなんなんですか？」

「竜希が何よりも求めるもの、それは——だ」

……え？——が竜希さんの『求め』？でも……

「……竜希は何よりも——を求めている。その求めが満たされれば……あいつは苦しみと絶望から解放され、不幸ではなくなる」

「でも……そんな……私じゃあ……」

「妖夢しかありえないんだ。妖夢でしか……ダメなんだ。俺

も……あいつの『求め』になろうとした。でも……俺じゃあ無理だった。……妖夢なら可能性がある。他の誰でもない……竜希自身がそう思っているんだ。竜希が妖夢との戦いを長引かせ、妖夢に剣の恐怖を教えたことがその証拠だ。妖夢は……あいつがようやく見つけた『求め』なんだ」

「私しか……ありえない……」

「……頼む妖夢、あいつを……俺の親友を救ってくれ。お前にしか……できないんだ」

「私にしか……できない……」

……正直、自信がなかった。私が竜希さんの『求め』に答えられるのか。竜希さんを……救うことができるのか。でも……それでも……

「……わかりました。私は……竜希さんの『求め』として……竜希さんを救ってみせます。必ず……私が」

「ありがとう妖夢」

「礼はいりません。これは……私が自分で成そうと決めたことですから」

「……そうか。俺は部屋に戻る。流石にもう眠いからな」

「私も戻ります。竜希さんのことを教えてくださりありがとうございます」

「……ああ。それじゃあお休み」

「はい。お休みなさい」

話を終えた私とミコトさんは部屋に戻っていった。

side ミコト

妖夢に竜希のことを話し終え、俺は自室へと戻ってきて布団に寝転んだ。

「……妖夢……竜希の……二つの『求め』を満たしてくれ」

俺は天井を眺めながら呟いた。

さっき、俺が妖夢に話した竜希の求めはひとつ。それはあいつが何よりも欲している願い。だが……それは他にあいつには別の『求め』がある。いや、正確にはあったという方が正しいであろう。

竜希が何よりも欲していたもうひとつの『求め』

あいつが手を伸ばすことを諦めてしまった『求め』

俺のせいで……

『あの時』に永遠に失われてしまった『求め』

きつと……妖夢ならばその『求め』にさえも答えてくれる。答えることができる。

竜希のことを想い涙を流した妖夢なら

「竜希を頼むぞ妖夢」

俺は目を閉じて眠りについた。

竜希の『求め』が叶えられることを信じて。

第61話

何者にも愛されなかった『命の理解者』

そんな彼を愛した『美しき深黒』

彼女の愛を受け、彼は幸せを得ることができた。

だが……

その幸せを得ることがなければ……

彼は絶望することなどなかつただろう

side 霊夢

「さて、俺から話をする前にまずは霊夢がどれぐらい神楽の事を知っているのかを教えてくださいませんか？」

竜希が私に聞いた。

「……私が知っているのは神楽がミコトを唯一愛したっていうこと、ミコトもまた神楽を愛していたということ、そして……ミコトが神楽を殺したということだけよ」

「……それは全てミコトに聞いたことなんだな？」

「……ええ、そうよ」

「……そうか」

そう言つて竜希は目を閉じた。

「……これが私が知っていることよ。私は……これだけのことしか知らない。ミコトと神楽の間に何があったのか知らないの。だから……竜希の知っている神楽のことを、そして……ミコトのことを私に教えて」

「……わかった。まずは神楽のことを話す」

竜希は目を開いて言った。

「神楽ことなら俺はある意味ではミコトよりもずっとたくさん知っている。なにせ俺は……神楽の双子の弟だからな」

「え？」

竜希が……神楽の双子の弟？

「神楽は……気が強くて、自信家で、態度が大きくて……いつも偉そうにしていた奴だった」

「……また随分とミコトとはかけ離れたタイプね。ミコトは謙虚で他人想いで……自分に自信を持っていないタイプだから。でも……そんな態度をとっていても全く嫌味には感じさせなかった。むしろ敬意さえ感じさせるように常に堂々としていて周りの人間はそんな神楽を慕っていた」

偉そうにしても嫌味に感じさせない……一体どんな感じ

なのだろう？少し想像つかないわね。

「何より神楽は……あらゆるもの全てに愛されていた」

「あらゆるもの全てに？」

「そうだ。いかなる人も、いかなる動物も、そして……世界でさえも神楽のことを愛していた」

「世界も愛していた？」

「神楽は……物事において失敗したことがないんだよ。例えば神楽が選んだことは世界が選んだことになるし。神楽が決めたことは世界が決めたこととなる。つまり……神楽は全てにおいて正しい存在であり、全てを支配することさえできたんだ」

全てを……支配。

「それが紫黒神楽という……あらゆるものに愛された絶対の存在。彼女を愛さないものなど何一つなかった。……だからこそなんだろうな。神楽が……ミコトを愛したのは」

「……どういうこと？」

「……ミコトと出会った当時、神楽はミコトのことを理解することができなかったんだよ。自分と違って決して愛されることのないミコトのことを。だから神楽は自分とは何もかも自分とは違うミコトに興味を持った」

何もかも違う

ミコトと神楽は……正反対なんだ

「それに……それだけではない。ミコトには神楽がそれまでに出会った他の者達とは決定的に違うところがあった」

「他の者たちと決定的に違うところ？」

「ミコトは……神楽と出会っても自分を偽らなかつたんだよ」

「自分を……偽らなかつた？」

「そうだ。今まで神楽が出会ってきた者たちは……神楽に気に入られようと本当の自分を偽り、ちっぽけでつまらない人間を演じていたんだ」

気に入られようと、違う自分を偽る……その気持ちは少しわかるような気がする。私も……ミコトに気に入られようと普

段とは違う自分を演じたことが何度かあるから。

「それが神楽にとってにはなによりも気に入らなかつた。神楽は……そうやって簡単に自分を捨てるような連中のことが大嫌いだったからな。だからこそ、自分を偽らず、ありのままの自分で接してくれたミコトに……神楽は感謝していたんだよ」

ありのままの自分を晒すことに感謝を……やっぱり私にはわからないわ。私の周りに好き好んで自分を偽るような奴なんていないから。

「そしてそれはミコトも同じだった。誰からも愛されず、誰からも虐げられてきたミコトにとっては自分のことを避けずに正面から向き合ってくれた神楽はミコトの救いとなった。ミコトもまた……神楽に深く感謝したんだ」

「……」

ミコトが虐げられていた……やはり信じられないわ。ミコトほど優しく良い人なんて早々いるはずなのに……それが誰からも愛されないということの証明なの？だとしたら……ミコトはあまりにも哀れすぎる。そんな風に生きてきたミコトは一体どれだけ自分と向き合ってくれた神楽に感謝したのだろうか？

「そんな二人が愛し合うようになるのはあまり時間はかからなかつた。二人はお互いのことを深く愛し、大きな幸せを得ることができたんだ」

「……」

そうか、ミコトは神楽のおかげ幸せを得られたんだ。

でも……

「……どうして？」

「ん？」

「だったらどうしてミコトは神楽を殺したの？どうして自分から幸せを手放すようなことをしたの？どうして……自分を苦しめるようなことをしたの？どうして？」

私は竜希に問いかけた。気がつけば私の頬には涙が流れている。

「……幸せだからこそだ」

「え？」

「幸せだったからこそ……その幸せが悲劇と絶望の引き金と
なったんだ」

「悲劇と絶望の……引き金？」

「そうだ……それをこれから話す」

「……」

「さつきミコトが神楽を殺したと霊夢は言っていたが……それは
少し語弊がある」

「語弊？」

「確かに神楽が死んだのはミコトが原因ではあるが……ミコトが
直接手にかけてたわけではない。」

神楽は

自殺したんだよ」

「……え？」

自……殺？

「どういう……こと？なんで自殺なんてしたのよ……ど
うしてよ！どうして神楽はそんなこと！」

私は思わず声を張り上げて竜希に聞いた。

幸せだったのに……お互い愛していたのに……どうしてそんなことを……幸せを捨てるようなことをしたのか私にはわからない

「……復讐のためだよ」

「復讐？」

「……神楽は誰よりもミコトのことを愛していて、誰よりもミコトのことを想っていて……誰よりもミコトを大切にしていた。だからこそ……神楽には許せないものがあつたんだ」

「許せないもの？」

「ああ。神楽は……世界を許すことができなかつたんだ」
「世界を……許せなかつた？」

「そうだ。自分のことは愛しているくせにミコトのことは愛していない。自分を誰からも愛されるようにしたくせにミコトは誰からも愛されないようにして虐げられることを強いた。そんな世界に対して神楽は……強い憎悪の感情を抱いた」

「……」

「そして神楽は憎悪を抑えきれなくなり……世界に復讐する道を選んだんだよ」

「……それがどうして自殺なんてことになるのよ」

「……さつき言っただろ。神楽は世界からも愛されていたのだと。つまり神楽の死は……世界に絶望を与える事となった。事実世界は神楽の死を嘆いた。大地震、火山の噴火、竜巻、地盤沈下、大津波、隕石の落下……神楽が死んだ後、世界の各地で未曾有の天変地異が起きたからな」

未曾有の天変地異……神楽の死は世界にとってそこまでの衝撃だったということなの？でも……そんなことはどうでもいい。問題は……

「……ふざけてる」

「霊夢？」

「なによそれ！ふざけるのも大概にしてよ！そんなことしても……ミコトが苦しむだけじゃない！神楽はそんなこともわからなかつた

の？神楽は……自分の感情の為ならミコトがどうなってもいい
て思ってたの？」

「……そんなこと思っていたわけ無いだろ！」

「!!」

ずつと静かに語っていた竜希が感情的に怒鳴ってきた。

「神楽だつて……神楽だつてそれくらいのこととはわかっていた
！それでも……それでも神楽は……自分の憎しみを抑え
きれなかった。ミコトを愛するがゆえに……世界への憎し
みが溢れてしまったんだ。自分が死ぬことでミコトが悲しむことを知
りながら……絶望することを知りながら……それでも神
楽は復讐をやめることができなかつたんだ」

竜希は涙を流しながら語る。

「……そうだ。神楽は竜希の双子の姉……家族なんだ。ミ
コトと同じように……悲しんだに決まっている。

「……悪い」

「……いいえ、気にしないで」

「……今言ったように神楽が死んだのはミコトを想うがゆえにだ。
だからミコトは……自分が神楽を殺したと思っているんだろう」
「……」

「ミコトは……そのことで自分のことを憎んでいる。自分さえ
いなければ神楽は死ぬことはなかつたと、自分と出会いさえしなけれ
ば……今も生きていたのだろうと。自分への憎しみを募らせて
いるんだ」

「……」

そうか、これでわかった。どうして神楽の話をした時にミコトがあ
んなに儂い表情をしていたのか。

ミコトは神楽の死に責任を感じている。そうして自分を憎んで、恨
んで……自分のことを許せなくなっているんだ。

「……ミコト」

ミコトを救いたい。なによりも愛おしミコトのことを、なによりも
大切なミコトのことを。でも……どうすればいいのかわから

ない。どうすればミコトを救えるのか……私にはわからない。

「霊夢、……ミコトを救いたいか？」

「……ええ。でも……」

「……どうすればいいかわからないか？」

「……うん」

「……愛してくれ」

「え？」

「ミコトを救いたいなら……ミコトのことを愛し続けてくれ。それがミコトを救うことになる」

「愛することが……ミコトを救うこと？」

「そうだ。今日久しぶりにミコトと出会って俺は気がついた。ミコトは……神楽の死が原因で大きく変わってしまった。ミコトにとって最悪な変化だ」

「最悪な……変化？」

「それって一体……」

「ミコトは——してしまっただ」

「——なった？」

「そうだ。そのせいでミコトは……自分に向けられる愛に気がつくことができなくなってしまったんだ。はつきり言ってそれは非常によくない状態だ。このままではミコトは……取り返しのつかないことになってしまう」

「……取り返しのつかないこと」

『……ホシイ』

この時、私の脳裏には紅魔館で出会ったあの黒い存在のことが脳裏によぎった。何故か私は……ミコトがああ黒い存在になってしまっているのではないかと思ってしまった。

「だから……霊夢にはこれから先もミコトのことを愛し続けて欲しい。それが……ミコトを救うことになる」

……ミコトを救う。

「……言われるまでもないわ。私はミコトのことを愛し続ける。ミコトを……救ってみせる。ミコトを……幸せにしてみせ

る。それは……私の願いだから」

「……そうか。ありがとう霊夢」

「……お礼なんていらないわ」

「……そうか」

「……話してくれてありがとう。私は部屋に戻るわ」

「ああ。それじゃあお休み」

「ええ。お休み」

私は部屋から出た。

(……ミコト)

竜希から聞かされたミコトと神楽の話は衝撃的だった。正直に言ってしまうえば……聞かなければ良かったと思えることでもあった。

でも……私の中のミコトに対する思いは変わらない。私はミコトのことを愛し続ける。

だってミコトは……私にとってなによりも大切に愛しい人だから。

「……絶対に。私があなを救うわミコト」

私は誰もいない廊下で自分に言い聞かせるように呟いた。

side 竜希

「……」

「霊夢が去ったあと、俺は布団に入り天井を見つめていた。
「……………ミコトを幸せにしてくれよ霊夢。それが……………」

「俺のミコトへの復讐になる」

俺はミコトが憎い。

ミコトのせいで神楽が……………」

俺にとってなによりも愛おしい神楽が死んだのだから

だから俺はミコトを許す

ミコトの幸せを願う

ミコトが……

許されることも幸せになることも決して望んでなどいないから

ミコトが幸せになることが・・・・・・・・ミコトへの復讐になる
この復讐さえなされれば・・・・・・・・ミコトの幸せを素直に祈る
ことできる

だから・・・・・・・・

「ミコトを・・・・・・・・頼む」

俺はそう呟き眠りについた。

第62話

no side

白玉楼の一室。そこに館の主、幽々子が居た。

「いるんでしょ？出てきて」

幽々子は何もない空間を見つめていった。

「……………」

少し間を置いてその空間に隙間が現れ、中からは……………八雲紫が現れた。

「よくわかったわね幽々子」

「わかるわよ。あなたとはかれこれ1000年の付き合いですもの……………あなたからしたらそれ以上なんでしょうけどね」

幽々子は憂いを帯びた表情で言った。

「……………」

「ねえ紫。聞いていいかしら？」

「……………何かしら？」

「あなたにとって……………私と彼女どちらが本当の『西行寺幽々子』なの？」

幽々子が紫に問う。彼女とは……………この幽々子の体に乗っ取っていた……………ミコトが消した西行寺幽々子のことだろう。

「……………やっぱりそのことなのね」

「ええ。正直に答えて紫」

「……………どっちもよ。私にとって……………どっちも本当の『西行寺幽々子』よ。これは……………私の偽ざる考えよ」

「……………そう。やっぱりあなたは器の広い人ね。どちらも『西行寺幽々子』として受け入れるなんて……………簡単にできることじゃないわ」

幽々子は笑顔で言った。

「……………怒らないのかしら？」

「何が？」

「……………私は気がつくことができなかつたから。私にとってはどちらも……………西行寺幽々子だから。私が彼女を『西行寺幽々子』で

あることを認めなければ……私は気がつくことができていたのに」

紫は表情を暗くして言った。

「紫……怒らないわよ。だって……あなたは私の大切な親友ですもの」

「幽々子……ありがとう」

「……ええ。でも……その変わりつていうわけではないけれど……どうかミコトのことを恨まないであげて？」

幽々子は紫の目を見て真剣な表情で言った。

「……どうして私がミコトを恨まなければならぬのかしら？」

「あなたがさつき言ったんじゃない。あなたにとってどちらも本当の『西行寺幽々子』だって。だったらあなたは……その西行寺幽々子を殺した彼に憎しみを抱くのではないかと思って。あなたは……優しいから」

「……」

「ミコトは……彼はちゃんとわかっているわ。自分が何をしたのかを。そしてなにより……ミコトは必要以上に苦しんだ。彼はこれから先一生この苦しみを背負っていこうと覚悟している。だから……これ以上彼を苦しめないであげて。お願い」

幽々子は紫に頭を下げた。幽々子は普段ならばこのようなことは絶対に紫にはしない。それは紫が彼女にとって無二の親友だから。その幽々子が頭を下げてまで頼んでいる。

「……わかったわ。私は彼を憎まないわ。もとよりそんなつもりもはなからなかったわ」

紫はそう言った。その言葉が真か偽りかは……紫以外には知る由もないが。

「そう……ありがとう紫」

幽々子はホツとした様子で言った。彼女は紫の言葉を信じるようだ。

「なんであなたがお礼を言うの幽々子」

「言うわよ。だって……」

好きな人が親友に憎まれるのなんて嫌なもの」

「……好きな人？幽々子、あなたたまさか……」

「ええ。私は……ミコトが好き。私を救ってくれたミコトが好きになっちゃったの」

「……そう」

「紫は……私を応援してくれる？」

「……どうかしらね。霊夢もミコトのことが好きみたいだし。それに霊夢だけじゃなくて藍までミコトに惹かれているわ」

「あら？霊夢はそうなんだろうと思っていただけけれど藍もそうなの？これは強力なライバルね」

「その二人だけじゃあないわよ。他にもミコトのことを思っている人はたくさんいるわ」

「そうなの……それは大変そうね、頑張らないと……それで？もしかして紫もミコトのことが好きなのかしら？」

「……いいえ、確かに彼は私のお気に入りだけれど……そういう感情は抱いていないわ。なにより……私はもうそういう感情は抱かないって決めているから」

紫は言う。深い悲しみをあらわにし、強い後悔を抱き、今にも泣き出しそうな表情をしながら。

「……『紅』だったかしら？あなたが生涯ただ一人愛したっていう」

「……そうよ」

「……そう」

それ以降、紫も幽々子も黙り込んでしまった。

幽々子は『紅』という者について詳しいことは知らない。知っているのは……あの紫が唯一愛している人物ということだけである。

だから幽々子は知らないのだ。紫と『紅』の間に何があったのかは。……ところで紫、あなたにもう一つ聞きたいことがあるのだけれど」

しばらくして、幽々子は口を開いた。

「何?」

「彼を……紫黒竜希のことをあなたはどうするつもり?」

「……ああ、あの紫黒家の」

「……300年前、当時の紫黒家の当主が犯した大罪。それ故に紫黒家は幻想郷から離れざるを得なかった。彼はその紫黒家の末裔……そして私の予想だけれど彼はこのまま幻想郷に留まろうとしている。……彼を幻想郷に住まわせて大丈夫なのかしら?」

幽々子は紫に問う。

「……大丈夫よ。確かに彼は紫黒の人間だけれど、300年前の当主のような愚か者ではないわ。彼は自分から好き好んで幻想郷を脅かすことはしないと思うわ」

「どうしてそう思うのかしら?まだ彼のことをほとんど何も知らないのに」

「私は彼の他に何人もの紫黒家の人間を見てきたわ。だけど彼はそのどれとも違う……歴代の紫黒の中でも最も強い力を秘め、それ故に自らの力を利用しようという野心がない。何より彼は……戦うことを嫌っているみたいだから」

紫は今日初めて竜希を見た。しかしそれだけで竜希が今までの紫黒家の人間とは違うと分かった。それほどまでに竜希は紫黒の人間でも特殊ということであろう。

「……わかったわ。なら……彼をここに住ませてもいい?」

「彼をここに？」

「ええ。彼は今の妖夢にとって必要な人なの。彼の存在が……妖夢を剣士として大きく成長させる。だからここに住まわせようと思うの」

「……そう。あなたがそういうのならそれでいいわ。好きにきなさい」

「ええ。そうさせてもらうわ」

「……それじゃあ私はもう帰るわね」

「わかったわ。またね紫」

「ええ、また」

紫は隙間を開いて帰っていった。

「……『一夢命』に『紫黒竜希』。あなた達ふたりは……この幻想郷に何をもたらすのかしらね？」

幽々子は誰もいなくなった空間でそう呟いた。

「私達はこれで失礼するわね」

翌日の朝、ミコト、霊夢、魔理沙は帰るために冥界の入口に来ていた。

「ええ。今回は色々と迷惑をかけてごめんなさいね」

「気にするな。幽々子の意思ではなかったんだし、もう過ぎたことだしな」

「そうだぜ！それに幻想郷で一番最初に花見ができたんだ！気にしなくともいいぜ！」

「そう、ありがとう」

「それじゃあ竜希、幽々子と妖夢に迷惑をかけすぎるなよ」

「ちよつと!?!その言い方だとまるで俺が迷惑をかけるのが当たり前前みたいに聞こえるんだけど!?!」

「そのつもりで言った」

「俺そんなに信用ねえの!?!」

「そんなことない信用している。…………絶対迷惑をかけるだろうなという意味だな」

「そんな信用いらぬから！」

「ミコトと竜希は何やら言い争いを始めた。

「……………本当によかったの？竜希をここに住ませて」

「霊夢が幽々子に聞いた。

「ええ。その方が色々面白そうですもの。それに……………そうした方が妖夢も喜びそうだし」

「なっ！幽々子様！」

「ふふふ、ほら喜んでる」

「う、うう〜」

「妖夢は恥ずかしそうに顔を赤くしている。

「霊夢、魔理沙。帰ろう」

「ん？もう竜希とじやれあうのはいいのかミコト？」

「じやれあう言うな魔理沙。気持ちが悪い」

「とかいいながらミコちゃんまんざらでもないくせに〜」

「……………(カチャ)」

「ミコトは何も言わずに銃を手に持つ。

「つて待て待て待て待て！銃なんて構えんなよ！」

「どうかミコト……………一々突っ込んでたら帰れないわよ？」

「……………それもそうだな」

「ミコトは銃を鈴に戻した。

「それじゃあまたな竜希、幽々子も妖夢も」

「うん。またね〜ミコちゃん」

「またね」

「それではまた」

ミコト達は結界をくぐって帰っていった。

「さて、それじゃあ二人共屋敷に戻りましょう」

「はいはい。わかりました〜」

幽々子にいわれ、竜希は白玉楼に戻ろうとする。

「竜希さん」

そんな竜希を妖夢は引き止めた。

「ん〜？何かなよくむちゃん？」

「……これからよろしくお願いします」

妖夢は笑顔を浮かべていった。

「!!……うん。よろしくね〜」

竜希もまた笑顔で応えた。

「クッソ！後少しだったのによお！」

ここは幻想郷でも現代でもない空間。ひとりの男が悪態を付いて

いた。

「いや、残念だったね。あんなに頭使って考えた作戦が失敗しちゃつて」

もうひとりの男が茶化すように言う。

「うっせえ！何しに来やがった『プライス』！」

「何しにつて……決まってるじゃないか。作戦が失敗して落ち込んでいる君を慰めに来たんだよ『スピリット』」

「ケツ！笑いに来たの間違いだろうが！」

「アツハハ！まあそうとも言えるかな？」

プライスと呼ばれた男がヘラヘラとした表情で言った。

「ちっ！本当に忌々しい奴だ！俺はてめえのそういうところが大嫌いなんだよ！」

「まあまあそう言わずに。同じ作戦失敗した者同士仲良くしようよ。それに……今回は仕方がなかったよ。ミコトくんに加えてあんな規格外まで出てきちゃったんだから」

プライスは先程までとは違う不敵な笑みを浮かべる。

「……紫黒竜希。今更負け犬の紫黒の人間が出てきたところで気にするまでもないと思ってたけど……あれはちよつと想定外すぎる。はつきり言つて彼は脅威なんてレベルじゃあない」

「はっ！所詮は人間だろうが！あんな奴どうにでもなる！」

「じゃあ君はそのどうにでもなるような奴に作戦は破られたつてこと？」

「グツ……」

「……認めようよ。彼は僕達にとつて……最も警戒すべき者の一人だ。なにせ彼とまともにやりあえば……僕達は一瞬で殺されるだろうからね」

プライスは言い放った。

「……ちっ」

スピリットは忌々しそうに舌打ちする。先程はああ言っていたが……スピリットもまた竜希がどれほど驚異になるのか理解しているのだ。

「ミコトくんは竜希くん。この二人を如何に対処するかが……僕達の悲願を達成できるかに繋がる」

「……竜希俺が対処する。俺の作戦を潰してくれた札をたつぷり
としたいからな」

「……そつか。なら竜希くんは君に任せるね。僕はミコトくんを
どうにかするからさ」

「てめえに言われるまでもねえよ」

異変の裏で暗躍する存在

彼らの目的とは？

ミコトと竜希。彼らに待ち受ける運命とは？

それが明かされるのはまだ先のこと

座談会

妖々夢編終了！

ということでは今回は恒例の（前回の章ではやらなかったけど）スペシャル座談会を行います！進行は……

「ミコトだ。よろしく頼む」

「霊夢よ」

「ヤッホゥ皆！竜希で〜す！」

「妖夢です。よろしくお願いします」

この4人と進めていきます！

「あ、あの……本当に私なんかがこの場に出てもいいのでしょうか？幽々子様の方が適任なのでは？」

「何言ってるのよ〜むちちゃん？十分すぎるほど適任だよ」

そうですよ。妖夢さんはこの章の後半からはメインの一人と言っても過言ではないんですから。しかも妖夢さんはこの小説のもうひとりの主人公、竜希さんのメインヒロインなんですからこの場にいるのは当然です。

「わ、私が竜希さんの……／／／」

「アハハ！やっぱり赤くなつたよ〜むちちゃんは可愛いな〜！」

ですね！

「う、うう〜」

「……はあ、あんた達それぐらいしておきなさい。座談会が進められないじゃない。妖夢もそんなことでいちいち赤くなつてたらないわよ。メインヒロインっていうのはいつでも胸キュンイベントが起きるのかわからないんだから」

「そ、そうですね……善処します」

いや〜流石は先輩ヒロインの霊夢さん！いうことが違いますね！

「……というか霊夢。胸キュンイベントなんて俺は仕掛けた覚えがないぞ？」

「あなたにそんなつもりがなくても十分すぎるほど起きてるのよ。私が今までどれだけドキドキしたと思ってるのよ〜」

「……そこまでなのか」

「はあ、これだから天然ジゴロは困るんだよね。カグちゃんも同じようなことよく俺に愚痴ってたよ」

「そのセリフはお前にだけは言われたくない」

「確かに、竜希も妖夢と会って早々に可愛いとか言ってたものね」

「あれは……本当にビックリしました」

「……アハツ♪」

「笑ってごまかすな!」

「……あのく皆さん?そろそろ今回の章のことについて話しませんか?これじゃあ座談会じゃなくて雑談会になっちゃいますよ?」

「つと、そうだな。それじゃあ座談会に入るとするか」

「だね。ところで今回の座談会ではなんの話をするのかな?」

ええ、今回は私が話したいことを好き勝手話していきます!

「……お前な」

「それはいくらなんでも……」

いいやないですか別に!これは私の小説なんですから!

「……まあいいけど。それで?まずはなにから話すのよ?」

まずはなんといっても竜希さんのことです!

「おお!俺のことか!」

「まあ以前から存在をほのめかしてはいたからな。今回の章でようやく登場というわけだ」

「ただ……思っていた人とはかなり違ったけどね」

「そうなの?ミコちゃんは俺のことをどう話していたのかな?」

「別に、変なことは話していなかったと思うぞ?」

「私がミコトに聞いたのは、私にとっての魔理沙のような存在でとにかく強いついていうことよ」

「その話を聞く限りあっているように感じますね」

「そうだね。霊夢ちゃんはどこが思っているのと違うと思ったの?」

「破天荒すぎるどころ」

「……ああ、そういえばそういうところは霊夢には話していなかった

たもんな」

「破天荒すぎるって……そんなことはないと思うんだけどなあ」
いえ、十分すぎるほどありますから。竜希さん破天荒すぎますから。出てきて早々にシコトさんのことをちゃんづけしてますし。」

「えー、あれぐらい普通なんだけど〜?」

「お前にとつてはだろ。世間的にあれば破天荒だ」

「確かにそうですね」

「よくむちゃんまで言う?俺ってそんなに破天荒?」

「どこからどう見てもな」

「うっ……で、でもちゃんと真面目にやってた時もあるじゃん!」

「……それがより一層破天荒さに拍車をかけたような気もするわね」

「……ギャップが激しすぎるんだよお前は」

「……慣れていないと相手にするのは疲れるんですよ〜。」

「……俺って一体」

「で、でも、あの真面目な方が本来の竜希さんなんですよね?」

「あく……うん。まあね」

「ということどこからしばらくは竜希は真面目モードに入る」

「ちよつと待てシコト。勝手なことは言わないでくれないか?」

「……とか言いながら即真面目モードに切り替えるとは……
本当に器用ですね。」

「……それよりも、俺についての話すことはもうないのか?ないなら普段のキャラに戻したいのだが?」

いえ、まだありますよ。具体的には二つほど。」

「二つ?なんだ?」

まず一つに紫黒家のことについてです。」

「……それは厳密には俺のことではないのではないか?紫黒家の事つていうのは300年前のことだろう?」

まあそうですね。」

「そういえば紫と幽々子は300年前の紫黒家の当主は大罪を犯したと言っていたな。それで紫黒家は幻想郷から離れざるをえなかった

と言っていたし……一体300年前の紫黒家の党首は何をしたんだ？ 霊夢と妖夢は何か知らないのか？」

「知らないわ。というより私は紫黒家のことさえ知らなかったんだから」

「私もよくは知りません。お祖父様なら何か知っているかもしれないが……」

「そうか……」

「……というよりもミコト、なぜ紫黒の人間である俺に聞かないんだ？」

「お前は聞いたところで答えないだろう？ 本編でも言いたくなさそうにしていたし」

「まあ確かに言うつもりはないが……」

300年前に紫黒家の党首が犯した大罪についてとなぜ負け犬なのかは紫黒家の存在意義と共にいずれわかりますよ。これがいずれ大きなフラグになりますしね。

「そうか……ならそれまで待つとしよう。それでもう一つの話すことについてのはなんだ？」

それは……竜希さんの求めについてです。

「……やっぱりそれなのか」

まあ今後の竜希さんの物語ではこれが鍵となりますので。

「でもこれについては本編では伏せられていたのよね。私も知らないし。知ってるのは今のところ本人である竜希とミコトと妖夢だけね」

「正確には私は一つはミコトさんに聞きましたがもう一つは知りませんけどね」

「それで？ その求めってというのはなんなのよ？」

それを言ったらつまらないので……でも伏せますが……ヒントいくつか出しましょう。

その1、竜希さんは最強

その2、竜希さんはなによりも神楽さんを愛していた
これがヒントです。

「……よくわからないですね」

でしたらまたいずれということですが、さして、ここら辺で竜希さんの話は終わりにしましょう。正直に言ってしまうとまだ話足りないのですが……その辺はキャラ設定に載せますので。

「それじゃあ次の話いつてみようか？」

「……自分の話が終わった途端にそれなの？」

「気にしない気にしない！それじゃあ次はミコちゃんの話……」

「おい、勝手に決めるなよ」

いえ、竜希さんの言うとおりはミコトさんの話をするつもりでしたので。

「……そうか」

「ミコトについては何を話すの？」

ミコトさんについて話すことはやはりミコトさんの変化についてです。ミコトさんは神楽さんの死によって変わってしまいその結果自分に向けられる愛に全く気がつくことができなくなってしまいました。

「気がつく事ができなくなった？それって以前のミコトさんなら気がつくことができたということですか？」

そうです。ミコトさんは誰よりも愛に飢えていたが故に愛に対して敏感になっていたので自分に愛が向けられていればすぐに気がつくことができました。ですが……神楽さんの死に責任を感じたミコトさんは変わってしまった。その変化が原因でミコトさんは愛を感じられなくなったんです。そして……その変化にミコトさん自身はわかっていない。

「それほどの変化が……霊夢さんはそれを知っているんですね？」

「……ええ。だから私は……ミコトを愛し続けると誓ったの」

「……霊夢……俺は」

「ミコト……何も言わなくてもいいわ。これは私が決めたことだから」

「……ああ」

「……ミコちゃん。霊夢ちゃんはここまでミコちゃんのことを思っ

てくれているんだ。だから……早く自分の変化に気がついて……
ちゃんと愛を感じられるようになってないとダメだよ？」

「……わかってる」

「……うん、ならいいよ」

さて、それじゃあ最後に……最後に出てきた彼らについて話
しましょう。

「彼らって言う……あのプライスとスピリットって奴のことか
？」

ええ。

「あいつら……一体何者なのかしら？」

「作戦とか言ってたけど……まさか今回の異変は彼らが糸を引い
ていたの？」

そうです。彼らが……というよりもスピリットが今回の異変の
黒幕です。彼が能力を使って幽々子さんの死体に秘められた命を呼
び起こしたのです。

「じゃあ彼が幽々子様を……彼の能力とは一体なんなのですか？」

それはまあ秘密ですが……一つだけ言っておきましょう。彼
はその能力ゆえにスピリットという名を持っているのです。

「スピリット……精神。霊。生気って意味だね。でもそれだけじゃ
あどんな能力かは確定できないなく。ねえミコちゃん」

「……」

「ミコちゃん？どうしたの？」

「ん？ああ、なんだ？」

「……何か考えごと？」

「……主、スピリットって名は能力からきているんだっただな？」

ええ、そうですよ。

「……プライスもそうなのか？」

……そうですよ。

「それがどうしたのミコト？」

「……プライス……価値、代償、代価……犠牲。それが意
味する能力……」

「……気になるの？」

「……ああ、なぜかはわからないが……とにかく気になるんだ」

「ミコト……」

「……さて、それではこの話はここまでにしますか。」

「随分いきなりですね」

これ以上は空気に私が耐えられませんので。ですのでここで切り上げます。

「そだね。俺も息が詰まりそうだしここまでにしようか。ミコちゃんもそれでいい？」

「ああ。構わない」

それでは……この章でミコトさんのハーレムに加わった者の発表といきましょう！

「……結局それはやるのかよ」

もちろんですとも！それでは発表しましょう！今回の章で新たにハーレムの一員となったのはこの方達！

メルラン・プリズムリバー

西行寺幽々子

以上の2名です！今回は少なかったですね！

「いやいやいや！少ないとかそういう問題じゃあないだろ！一体今何人いると思ってるんだ！」

「15人ね」

「霊夢が答えるのかよ！いや、それはいい、15人とかどう考えても多すぎるだろ！」

そんなことありませんよ！まだ増えますし！

「この期に及んでまだ増えるのか！」

「まあある意味当然だよね。だってまだ東方キャラ半分も出てないんだから」

「……俺いつか本気で刺されるんじゃないか？霊夢が最近ヤン

デレ気味でヤバイし」

「ははは！ガンバー！ミコちゃん！」

「笑って言うな！」

まあまあ落ち着いてくださいミコトさん。ところで竜希さん。

「ん？何？」

あなたは笑っている余裕はないと思いますよ？何せ……あなただって同じぐらいのハーレムになる予定なんですから。

「……え？マジで？」

マジです。

「……すみません主さん。その辺りのことを詳しくオシエテクレマセンカ？」

「よ、よくむちちゃん？何その黒い笑顔？なんか目からハイライトも消えてるし……」

「……若干ヤンデレに染まっているようだな」

「……うそ〜ん」

「……頑張れよ竜希」

「……はい」

さて、それでは最後に次章予告をして締めましょう！

新たに幻想郷の一員となった竜希！

彼は幻想郷でどのように過ごすのか？

もちろんミコトの話もあり！

そして新たな東方キャラも登場！

次章 東方く儂き命の理解者く

日常編第2弾！

最強の道化の日常！

乞うご期待！

「次回もまたきてくれ（きなさい）（きてください）（きてね）
！！」

最強の道化の日常 第63話

春雪異変が終わり、ミコトたちが帰った次の日

side 妖夢

「う……ん。もう……朝？」

襖の隙間から漏れ出す日の光を感じて、私は目を覚ました。

「……朝ごはん……作らないと」

私は布団から起きて寝巻きから普段着へと着替える。

寝起きでまだ少し頭がぼんやりしているけれど早く朝食を作らな
いと幽々子様が起きてしまう。幽々子様は起きた時に朝食が用意さ
れていなかったら駄々をこねてしまう。幽々子様はなによりも食事
を楽しむ方だから。

それに……今はこの白玉楼に彼もいる。

彼のためにも……できるだけ時間をかけて美味しいものを作っ
てあげたい。

「……よし」

私は鏡で身だしなみを整っているのを確認し、部屋を出た。

私が朝食を作り台所に向かう途中……

「え？竜希さん？」

彼が……竜希さんがいた。縁側に腰掛け庭を眺めている。

「ん？ああ、よくむちゃん、おはよう。ずいぶん早いんだね」

「それはこちらの台詞です。こんなに朝早くにどうしたんですか？」

「別に。どうもしてないよ。俺はいつもこの時間には起きてるからね」

「そうなんですか。早起きなんですね」

「まあね。ほらよく言うでしょ？早起きは3文の得だって。健康にもいいし俺は特別なことがない限り早く起きるようにしてるんだ」

「いい心掛けですね」

でも……正直に言うと少し意外です。竜希さんがそんな事を気にする人だなんて……。ふふ、なんだか新しい竜希さんの一面が見られて嬉しいです……。あれ？でもどうして私……「そういうよくむちゃんはどうしたの？こんなに早くに起きて」

私が少し考え事していると竜希さんが聞いてきた。

「私は朝食を作るために起きたんです。幽々子様が起きる前には準備をしておかなければいけませんので」

「へえ、えらいねよくむちゃんは」

「そんな……。これくらい当たり前です。私はここに住まわせてもらっている身ですので」

「そっか……。ということはもしかして家事全般よくむちゃんがやってるとか？」

「ええ、まあそうですね」

「そっか……。よし！それなら俺も手伝うよ」

「え？手伝う？」

竜希さんはニコリと頬笑みを浮かべて言った。

「そ！俺もここに住まわせてもらっている身だからねだからよくむちゃんと一緒にここの家事手伝うよ」

「い、いえそんな……。竜希さんは客人なのでそのような事を気にする必要は……」

「そんなことないよ。俺だって自分の出来ることで役に立ちたいん

だ。そうでなきや俺の気がすまないからね。それに俺は客人じゃなくて居候だよ。それなのに働かないだなんて二トトじゃないか。そんなの俺は断固お断りだよ」

「そ、そうですか………」

竜希さんって律儀な人なんだ……なんだかそれも意外……いや、これが本来の竜希さんっていうことなのでしょいか？たえ道化の仮面をつけていたとしても竜希さんの本質自体が変わるわけではなくて……竜希さんのこの気持ちは偽ざる本心ということなのでしょいか？

「よくむちゃん？どうしたの？何か考え込んでるみたいだけど」

「あ、いえ、なんでもありません。気にしないでください」

「ふくん。そつか。それじゃあ朝ごはん作りに行こうか？」

「……ええ、そうですね」

私は竜希さんに手伝ってもらうことにした。正直に言うのと竜希さんに手伝ってもらうのは少し気が引けるけれど……竜希さんが気を利かせて言ってくれたこと、無下にするわけにはいきません。

「それではよろしくお願いしますね。台所はこちらです」

「はいはい。わかったよ」

私は竜希さんと並んで台所へと向かった。

「よくむちゃん。この味噌汁味付けどうかな？」

「……はい。いいと思いますよ。ですがもう少し薄いほうが幽々子様の好みに合います」

「わかった。それじゃあもう少し薄めるよ」

そう言っただけで竜希さんは味噌汁にほんの僅か水を加えた。それにしても……

(竜希さん……手際がいいな)

竜希さんの料理の手際はとてもいい。無駄なことはしないでテンポよく作っている。素人の動きではないとひと目でわかった。どうやら竜希さんは料理が得意なようだ。……でも……得意ということとは……

「あの……竜希さん」

「ん？なに？」

「随分と手際がいいですけど……竜希さんって料理が好きなんですか？」

私は思わず竜希さんに聞いてしまった。

昨日のミコトさんの話では竜希さんは自分が求めることの才能は決して手に入らないと言っていた。だけど竜希さんは料理が得意ということとは……竜希さんは料理が嫌いなのだろうか？

私はつい気になってしまって聞いてみた。

「うん……特に好きというわけではないかな？でも特別嫌いというわけでもないよ。こう言ったらアレだけど嫌いだったら面倒くさがってやりたいとも思わないし、理由がなければ絶対にやらないよ」

竜希さんは微笑みながら言った。

「そうですね……」

竜希さんは常に自分に仮面をつけている。だから今の言葉も嘘の言葉かもしれない。でも……今の言葉が本当なら……少し安心します。私は……竜希さんにはやりたくないことをして欲しくないから。

「……よくむちゃん。魚焦げちやうよ？」

「えっ？ああっ!!」

竜希さんに声をかけられて私は魚から僅かに焦げ臭い匂いがしていることに気がついた。

(し、しまった．．．．．竜希さんのことを考えすぎて意識が料理から離れてしまった)

私は大急ぎで魚に掛けてた火を消した。

side 竜希

あくあ．．．．．これ魚ちよつと焦げちゃっただろうなく。

よくむちちゃんつたらもう．．．．．そんなに気になったのかな？

俺が料理が出来ることが。

異変を解決した日の夜、多分だけどよくむちちゃんはミコちゃんから俺の話の聞いているんだろう。だから．．．．．俺が料理ができることが何を意味しているのかを理解してそのことで考え込んでしまった．．．．．ということだろう。

俺のことを考えて魚を焦がしてしまったっていうなら．．．．．ちよつと申し訳なく感じるなく。

でもよくむちちゃんは何でそこまで気にするんだろう？ミコちゃんに何か吹き込まれたのかな？

．．．．．時間があるときに聞いてみよう。

「な、なんとなりました……」

私は魚を見ながら呟いた。魚は僅かに焦げて黒ずんでしまっているがそれでもなんとか食べられるレベルだ。味にもさして影響はない……と願いたい。

「……」

ふと、竜希さんが私の顔をじつと見つめているのに気がついた。

「ど、どうしたんですか竜希さん？私の顔をじつと見つめて……」

「……いや〜？ちよつとね〜」

竜希さんは少しいたずらっぽく笑って言った。

「……すぐく気になるんですけど。言いたいことがあるのなら言ってください」

「……そっか。それじゃあ遠慮なく言わせてもらおうけど……慌てふためいているよ〜むちちゃんは可愛いな〜と思ったんだよ♪」

「みよん!？」

私はつい変な声を出してしまった。しかも顔がものすごく熱い……確実に赤くなっているだろう。

「た、竜希さん！あなたはいきなり何を言っているんですか！」

「ん〜？俺はよ〜むちちゃんが言えつて言ったから正直に思ったことを言っただけだよ〜？」

竜希さんはその笑みを絶やさずに当然のように言った。

「ま、全く竜希さんは……そういう冗談を言うのはやめてくださいー！」

「……冗談じゃあないよ」

「え？」

「今言ったこと……冗談じゃあないよ」

竜希さんは私の目を真っ直ぐに見ながら先程のいたずらっぽい笑とは違う優しい笑顔を浮かべて言った。

今の竜希さんの雰囲気はさっきまでの気の抜けたものとも刀を握っていた時のような研ぎ澄まされたものとも違う。うまく言葉に

できないけれど……ただただ穏やかさを感じる。

「それとさあ……初めて会った時に言ったことも……あれ冗談とかじゃあないからね」

「初めて会った時？」

初めて会った時って……私は竜希さんになんて言われたんですしたっけ？あの時竜希さんに言われた言葉……確か……

『可愛い子の名前は是非とも聞きたいものでしようよ！』

「っ!!」

も、もしかして……あれのこと？

「……およろ？どったの？顔すっごく赤いよ？」

竜希さんは雰囲気に戻して聞いてきた。

「な、なんでもありません！気にしないでください！」

「アハハ！そっか。それじゃあ気にしないでおくよ。さあ、朝食の準備を進めようか」

そう言っつて竜希さんは調理に戻った。

何なんでしょう？先ほどの竜希さんは。私がこれまで見てきたものとも……ミコトさんに聞いたものとも違う。

……ミコトさんは刀を抜いた時の竜希さんが本来の竜希さんだと言っていた。それは私も間違いないと思う。

でも……先ほど見せた穏やかな竜希さん

あれもまた……

本来の竜希さんであるように私は感じた

第64話

side 妖夢

ここは白玉楼。食卓にはいつもと同じように朝食とは思えないほどの数の皿が並べられ、いつもと同じように幽々子様がその料理に舌鼓を打つ。

でも……今この場にいつもと違うものが2つある。

「ねえ妖夢」

「なんででしょうか幽々子様」

「今日の朝ご飯もすごく美味しいんだけど……この魚だけ香ばしいというか……なんか焦げてないかしら？」

「うっ……そ、それは」

一つは焦げてしまった魚。普段ならばこのようなものが食卓に並ぶことはないのが今日は私のミスで焦がしてしまった。

そしてもうひとつの違うものは……

「あく……ごめん幽々子さん。それ俺のせいで焦げちゃったんだよね」

彼……竜希さんがこの場にいることだ。

「え？」

「そうだったの」

「違います幽々子様、それは……うん。本当にごめんね」

竜希さんは私の言葉を遮って言った。

「別にいいわ。これはこれで美味しいもの」

幽々子様は全く意に介する素振りを見せずに焦げてしまっている魚を美味しそうに口に含んだ。

「あの竜希さん……どうして」

私は幽々子様に聞こえないように小声で竜希さんに聞いた。

「ん？だって本当のことでしょう？あれは俺が原因で焦げちゃったみたいだし」

「それは……」

私はそんなことないと断言することができなかった。実際に竜希

さんのことを考えていたから魚から目を離してしまい焦がしてしまつたから。だから焦がしてしまつた原因が竜希さんにあるというのは間違いではない。

でも……

「それでも過失は私にあります」

「あく……かもね。でもいいじゃん。幽々子さんあんまり気にしないみたいだしさ。よくむちゃんもあんまり気にしなくてもいいんじゃない？」

「なんというか……いい加減な物言いですね。だけど……竜希さんに言われると本当にそれでいいような気になってしまふ。」

「それよりも……早く食べないとよくむちゃんの分なくなつちゃうよ？」

竜希さんが苦笑いを浮かべて言ってきた。机を見ると半分以上のお皿が空になっていた。

その原因は幽々子様だ。相変わらず食べるのが途轍もなく早い。

「……そうですね」

私は竜希さんの言うとおりに、食事を進めることにした。

「ふう、美味しかったわ」

しばらくして大量にあつた料理は全てなくなった。今は食後のお

茶を飲んでいる。

「今日の朝食は竜希も作ったのよね？」

「うん、そだよ」

「なかなかいい腕よ。妖夢にも引けを取らないわ」

「いやいや、そんなことないよ？よくむちちゃんの方がずっと上手だし」

「そんな・・・私なんてまだまだです」

「そんな謙遜することないよ。もっと自信持ちなつて！」

「そうよ妖夢。あなたの料理はいつも美味しいわよ」

「・・・ありがとうございます」

私は褒められて少し恥ずかしなつてしまった。

「やつぱり照れてるよむちちゃんは可愛いな」

「!!た、竜希さん！」

「アツハハハ！」

「ふふふ」

竜希さんはおどけたように笑つた。そんな光景を幽々子様は微笑みながら見ている。

「もう・・・食器を洗ってきます」

私は机の上の皿をまとめて持ち上げる。

「あ、じゃあ俺も」

「いえ、竜希さんはいいです。その代わりに幽々子様の手をしておいてくださいませんか？」

「え？幽々子様ちゃんの？」

「ええ」

（竜希さんが手伝いを申し出てくれたのは嬉しいけれど・・・正直ずつと一緒にいると色々と考え過ぎて家事に集中できなさそうだし）
「そうね・・・一人だとやるのがなくて暇だから少し相手をしてもらっていいかしら？」

「うん。わかつたよ」

「それじゃあ行きましょ」

「はいはい」

竜希さんと幽々子様は今から出て行き、幽々子様の部屋に向かった。

「……さて、私も食器を片付けないと」

私は食器を持って台所に向かった。

side 幽々子

「これでどうかしら?」

パチ

「あくそうくるか。それじゃあこう」

パチ

「あら?これはちよつとまずいわね」

私は今竜希を相手に将棋を指している。私はそれなりに強いという自覚はあるのだけれど……彼もなかなか強いわね。

「うくん……どうしましょう?」

「……ねえ幽々子さん。聞きたいことあるんだけどいい?」

私が次の一手を考えていると竜希は話しかけてきた。

「何かしら?」

「……どうして俺をここに住ませようと思ったのかな?」

聞いてきた竜希の口調はさきほどと変わらないがその眼は真剣だ。

「……妖夢のためよ」

パチ

私は駒を打ちながら答えた。

「よくむちちゃんの?」

パチ

「ええ。妖夢には……妖夢が強くなるにはあなたが必要だから」

パチ

「……そっか。幽々子さんは随分とよくむちちゃんのことを思ってるんだね」

パチ

「ええ。あの子は……私にとって大切な子ですもの」

パチ

「……へえ、そうなんだ」

パチ

「でも……正直に言うかね。私自信は妖夢が強くなろうがどうなるかがどうでもいいと思ってるの」

パチ

「……どうということ?」

パチ

「……別に強くなかったって構わないもの。私は……あの子が居てくれるだけで構わないから」

パチ

「……居てくれるだけで構わないねえ。でもさ……よくむちちゃんはその思っではないよ?」

パチ

「……わかってるわよ。妖夢は……私を守るために強さを求めている。だから……私はその気持ちを汲んであげたいの」

パチ

「……それが何を意味しているのかはわかっているのか?」

パチ

「……ええ。強くなるということは……それだけ危険が大きくなるということ。大きな力を持てば戦いを引き寄せてしまう」

パチ

「……わかっていながら強くなって欲しいと願うのか?大切な者を……危険に晒してもいいのか?」

パチ

「……………それが、あの子の願いだから」

パチ

「……………そうか」

パチ

「……………詰んだわね」

「ああ。俺の勝ちだ」

「……………強いのね」

「……………ああ」

「……………竜希、妖夢ことをお願い」

私は竜希の目を正面から見据えて言った。

「……………」

スツ

竜希は立ち上がり、部屋の入り口の戸に手をかける。

「……………言われるまでもない。妖夢を強くすることは……………」

俺の願いでもあるんだからな」

「そう……………ありがとう」

「……………」

パタン

竜希は何も答えずに部屋から出て行った。

「……………本当に強いわね彼は」

私は将棋の駒を撫でた。

「でも……………次は勝つわ」

私以外誰もいなくなった部屋でそう呟いた。

side 妖夢

「フツ！ハアツ！」

私は家事を一通り終え、私は庭で刀を持ち素振りをしていた。

「ハアハア……」

「やっぱり綺麗な太刀筋してるね」

「!!」

声のする方を見ると、そこには竜希さんがいた。

「素振りしてたんだ」

「……ええ。家事は一通り全て終わりましたので」

「へえ、そっか」

「……これじゃあダメなんですよね？」

「ん？」

「これじゃあ……このままじゃあ……私は強くなれないんですよね？」

今のままじゃあ……竜希さんの言う綺麗な太刀筋じゃあ私は……
は……

「……そうだね。その太刀筋じゃあ……強くはなれないよ」

竜希さんは苦笑いを浮かべて言う。

「……綺麗な剣を振るうだけじゃあ強くなることはできない。大事なのはどうすれば相手を斬ることができるのか……その為にどう動けばいいのか。それを知る必要がある」

「……」

「あの時にも言ったけど強者にとって無駄のない動きほど読みやすいものはない。知性の低い奴や戦いに精通していないような奴だったら綺麗な今の妖夢でも全く問題なく対処できるだろうけどね」

「……そう、ですか」

「……やっぱり私は……弱いんだ。」

今までは剣を振るうことしか考えていなかった。

太刀筋をより鋭くすることが強くなるために必要なことだと思っていた。

でも違う……私が今までやってきたことは……強くなる為には役に立たないことだったんだ。

ギユウ……

私は自分の今までやってきたことの無意味さを恨み刀を強く握り締めた。

「でも、だからこそ妖夢は……強くなれる」
「え？」

「……太刀筋を見ればわかる。妖夢が今までどれほどの思い出剣に向き合ってきたのかが。その思いが……ひたむきさが……剣に対する誇りとなる」

「誇り？」

「……今までの妖夢に足りなかったものは二つ。一つは剣を振るうことに対する覚悟。もう一つ戦闘経験。それさえあれば妖夢は……確実に強くなれる」

覚悟と……経験……

「魂魄妖夢。お前は……強くなりたいか？」

竜希さんは私を正面から見据えて、あの時私に刃を向けた時のように研ぎ澄まされた雰囲気をもとい問う。

(凄い威圧感……押しつぶされてしまいそう……でも)
「……はい。私は……強くなりたい」

私は竜希さんの問いかけに答える。決して目を逸らさず、正面から見据えて。

「……何の為にだ？」

「……幽々子様を守るため、そして……竜希さんの『求め』に応えるためにです」

強くなりたい理由。それは……昔から変わらない思い。そして……新たに芽生えた思い。その為に私は……強くなつてみせる。

「……ミコトから聞いたんだな？」

「はい」

「……覚悟はあるんだな？」

「……はい。刀を振るう覚悟も……強くなる覚悟も……あなたの『求め』に応えるための覚悟も。私にはあります」

「そうか……わかった。なら俺が……妖夢を強くする。」

妖夢に戦い方を教えてやる。だから……頼むから……強くなってくれよ?」

「……はい!」

「……ありがとう (ボソツ)」

「え?」

「……とりあえず修行は明日以降からだよく。今日は……明日からの地獄の修行に備えてゆっくりしてな」

竜希さんはいつもの口調に戻し、私に背を向けて手をヒラヒラと振って屋敷に戻っていった。

竜希さん、私は必ず強くなってみせます。

あなたの『求め』るもの……

あなた以上に強い存在に必ずなってみせます

第65話

（博麗神社）

side 霊夢

「今日もいい天気ね」

「そうだな。春だもんな」

「……ええ」

よく晴れた日の昼下がりに。私はミコトと共に縁側に腰掛けてお茶とミコトが作ってくれたお団子を食べていた。

「ふわぁ……」

「ミコト眠いの？」

「ああ……少しな」

「寝てもいいわよ。もう今日の掃除とかは終わってるから」

「……そうか。それじゃあ……おやすみ」

ミコトは横になって目を閉じる。そして直ぐにミコトから規則正しい寝息が聞こえてきた。

「……こうして見ると本当に綺麗な人ね」

美しく艶のある長い黒髪に女性のように整った顔立ち、今は見えな
いが閉じられた瞼の向こうにある月のように淡い金色の目。そし
て……誰よりも他人を思いやる優しく暖かい心。

本当にミコトは綺麗な人だ

身も心も……私が今までに出会った誰よりも

そんなミコトが愛されていなかったなんて……信じられない

そんなミコトを愛する人がいなかったなんて……許せない

そしてなによりも……

そんなミコトを絶望に突き落とし、その心をずたずたに引き裂いた……神楽が憎い

たとえどんな理由があつたとしても……
たとえどんな想いだつたとしても……

私は彼女が憎くてたまらない

「……ミコト」

私はミコトの頬を撫でる。

「……大丈夫よ。何があつても私は……私だけは……あなたを愛し続けるから。私は……神楽とは違うから」
私はミコトに顔を近づける。

そして私とミコトの唇があと少しで重なるうという瞬間。

「ミ〜コ〜ちやく〜ん！」

……能天気な叫び声が聞こえてきた

「……ん」

ミコトの瞼が開きそうになる。私は急いでミコトから顔を離れた。

「この声……竜希か？」

ミコトの瞼は完全に開かれ、ミコトは目を覚ました。

「え、ええ。そうみたいね」

「あいつは……折角気持ちよく眠っていたというのに」

ミコトは呆れたように額を抑えて言った。

「全くね……あと少しだったのに」

「ん？あと少しって何がだ？」

「……なんでもないわ。気にしないで」

……言えない。ミコトが寝ている隙にキスしようとしただなんて口が裂けても言えない。

「ミ〜コ〜ちやく〜ん！居ないの〜？」

また竜希の叫ぶ声が聞こえた。

「……はあ、仕方がない、行ってくる。どうやら俺に用があるみたいだからな」

「みたいね。私も行くわ……用ができたし」

「そうか。それじゃあ行こう」

「ええ」

私はミコトと共に竜希のいるであろう場所に向かった。

(竜希……カクゴシナサイヨ?)

side ミコト

俺の能力を頼りに神社の参道に向かうとそこには竜希と妖夢がいた。

「やつほくミコちや「霊符「夢想封印」!!」ってうお!」

竜希の顔を見るなり、霊夢は突然スペルカードを発動した。竜希は襲い来る弾幕を全て躲した。

「ちよつ!……いきなり何するのよ霊夢ちゃん!」

「ちつ、全部躲されたか」

「舌打ち!?何!?俺霊夢ちゃんの気に障るようなこと何かした!?!」

「うるさい。黙れ」

れ、霊夢?本当にどうしたんだ?俺は眠りを妨げられたから怒っているが……お前に何があつたんだ?

「とにかく……いつペン吹っ飛べ!「夢想……」

「待て霊夢落ち着け」

俺は霊夢の腕を掴んで止めた。

「離してミコト。私はこいつを吹っ飛ばさないと気がすまないの」

「……その気持ちには同意するがやめておけ。たとえ「夢想天生」でもこいつに当てるのは不可能だ。無駄な労力になる」

竜希なら確実に躲すだろうからな。

「むう……わかったわ」

霊夢は「夢想天生」のスペカをしまった。

「た、助かった……」

霊夢が止まったことに安心した竜希は胸をなでおろした。

「竜希さん……あなたは一体霊夢さんに何をしたんですか？」

妖夢がジト目で竜希を見つめながら言った。

「いやいやいやいや！俺さっきここに着いたばかりなんだよ？何かするような時間なんてないでしょう！」

竜希は大きく首を横に振り潔白を訴えた。

でもまあ確かに霊夢は本当になんで怒っていたんだろう？まあ考えてもわからないから今は置いておこう。それよりも本題に入ろう。

「それで竜希。お前は何しに来たんだよ？」

「よくぞ聞いてくれました！俺がここに来た理由はミコちゃんに用があるからだよ！」

「それくらいはわかっている。あんな能天気な大声で名前を呼ばれたんだからな。その用がなんだと聞いているんだ」

「能天気って……ひどいなあ。まあいいけど。用っていうのは……これだよ」

そう言つて竜希は腰に指している刀を抜いた。

「！これは……」

「……この通り、こいつはもう使い物にならないんだよ」

竜希の左手に握られた刀は……刃こぼれだらけでボロボロになつてしまつていた。

「これ……一体何があつたのよ？」

「……どうやら『西行妖』を斬つた時にこの刀は壊れてしまったようです」

『『西行妖』を斬つた時に？』

「うん。俺の能力『悉くを斬る程度の能力』は斬るものが強大であればあるほど込める力も強くしなければならぬんだ。まあつまるところ……『西行妖』を切るときに込めた俺の力にこの刀が耐えられなかったってことだよ。この刀も外の世界ではかなりの業物に分類されるんだけどねえ」

竜希は刀を眺めて残念そうに言った。

「そうか……それで？俺に何をしたいって言うんだ？言っておくが刀を直すなんて芸当は不可能だぞ。俺が治せるのは命を持つ者だけだ」

「それくらいわかってるよ。俺がミコちゃんに頼みたいのは……人探しだ」

「人探し？」

「そ。ミコちゃんに『雲上空（くもがみ そら）』っていう子を探して欲しい」

雲上空？

「……誰だそれは？」

「雲上空、幽々子さんに教えてもらったことなのですが……どうやら彼女は刀の付喪神のようです」

「付喪神？確か……命が宿った物体のことだったか？」

「そうです。そして彼女にはある能力が備わっています。その能力は……『刃を創り操る程度の能力』」

『刃を創り操る程度の能力』？……なるほど。そういうことか。

「その子に新しい刀を作ってもらうっていうことか？」

「そのとおり！さすがミコちゃん！察しがいいねえ！」

やっぱりか。でも……

「大丈夫なのか？竜希の能力はかなり強いだろ？生半可な刀じゃ作ってもらっても直ぐに壊れるんじゃないか？」

「それなら大丈夫です。彼女の作る刀は十分すぎるほどに強力ですから」

「なんでそんなことが言えるのよ？」

「……この剣『楼観剣』は彼女が生み出した刀です」

妖夢は腰にさした長刀に手をかけて言った。

「この刀はただ一振りで10の幽霊を引き裂くことができる程の力があります。それほどの力があれば……竜希さんの能力にも耐えられると思います」

それほどの刀を能力で生み出せるなんて……その空という子はとてつもないな。

「事情はわかった。だが……俺に頼んだところで無駄じゃあないか？俺はその子の命のことは知らないからその子を探すのは無理だぞ？」

俺は今までに感じたことのある命でないと個人の特定ができないからな。

「でも……付喪神の命ならどう？」

「付喪神の命？俺は今まで付喪神にも会ったことないから無駄……

いや、待てよ」

「どうしたの？」

霊夢が俺に尋ねてきた。

「今までに会ったことがないなら今までに感じたことがない命を探ればあるいは……」

「それが付喪神の……空って子の命かもしれないっていうことだね」

「そういうことだ」

これなら見つかるかもしれないな。

「となれば善は急げ！早速探しに行こうか！」

そう言つて竜希は俺の手を掴もうとした。

「待ちなさい！何勝手に決めてるのよ！」

そんな竜希を霊夢が止めた。

「え？でもミコちゃんは乗り気だけど……」

「いつミコトが了承したのよ！ミコトは行くだなんて一言も言っていないわー！」

「……まあ確かに俺の口からは一言も探しに行くとは言っていないな」

「……あ」

さて、どうしたものかな。別に探しに行くのはいいんだが……
竜希にはさつき眠りを妨げられた恨みがあるからな。と、そういえば……

「なあ竜希。ひとつ聞かせてくれ。どうして刀が必要なんだ？」

「それは……」「私の為です」

妖夢が竜希の言葉を遮って言った。

「私は今後竜希さんに剣で戦う術を教わることになりました。そしてその為には……竜希さんに見合う刀が必要なんです。私は強くないといけない。だから……お願いしますミコトさん。空さんを探すのを手伝ってください」

妖夢は頭を下げて俺に頼んできた。

……そうか。妖夢は……竜希の望みを叶えるために……
竜希以上に強くなる為に竜希から戦い方を教わろうとしているのか。
その為に刀を……ならこの頼みは断れないな。

「……わかったよ」

「ミコト!？」

「その子を探すのを手伝ってやるよ」

「おお! さっすがミコちゃん! 頼りになる〜!」

「……言っておくがお前のためじゃあないぞ。妖夢が頭を下げて頼み込んできたからだ。お前一人の頼みだったら聞くつもりは一切なかった」

「……うわあ。俺ってば人徳ねえ」

「それと条件がある」

「条件……ですか？」

「付き合っただけやるのは今日だけだ。明日は用があるから手伝えん。今日中に見つからなかったら俺はもう知らないからな」

明日は紅魔館で執事の仕事があるからな。

「わかった。それでいいよ。それじゃあよろしくね〜!」

竜希はヘラヘラと笑みを浮かべて言った。人にもものを頼む態度ではないがそれは竜希だから仕方がないと納得しておこう。それより

も……

「済まないな霊夢。勝手に決めてしまつて」

「いいわよ。それがミコトの長所だつてわかつてるし」

「そうか」

「それよりも早くその子を見つけて帰つてきなさいよ？夕御飯作つて待ってるから」

「ああ。それじゃあ行つてくる」

「行つてらっしゃい」

霊夢に見送られて、俺、竜希、妖夢の3人で空という子を探すために博麗神社をあとにした。

第66話

side ミコト

俺、竜希、妖夢は今、紅魔館近くの森で空を探している。それにしても……

「……竜希」

「ん？何ミコちゃん」

「なんというか……お前人間離れしすぎてるだろ。というかお前本当に人間か？」

「ちよ！それどう言う意味よ〜」

「……なんで飛んで移動してる俺達に普通に追いついてるんだよ」

そう。竜希は飛んで移動している俺と妖夢に併走しているのだ。

「え？なんでって……俺飛べないから走ってるんだけど」

「そう言う意味じゃねえよ」

「あの竜希さん、ミコトさんが言いたいのは普通は飛んだ方が走るのよりも断然に早いはずなのにどうして平然と追いつけるのかって聞きたいんだと思います」

妖夢の言うとおりだ。しかも竜希は全然息を切らしていない。もう2時間近く走っているというのに。

「ああ、そのことね〜。まああれぐらいならなんとかなるよ〜。気を足に集中させればね〜」

気を足に集中して……本当に人間ばなれしすぎているとしか言えんな。こいつさういうのとは無縁な外の世界で育ったくせに。

「そうか……というより足に気を集中させるなんて器用な真似できるなら飛べよ」

「アツハハ！それは無理だよミコちゃん！だって俺……空を自由に飛びたいって思ってるからね〜」

「!!」

竜希のその言葉を聞いて、俺と妖夢は竜希が何故飛べないのかわかった。

竜希は飛べないのではない……飛べないのだ。

飛ぶことは竜希にとって……心から望む願い。

故に竜希には……飛ぶための才が一切存在しないのだろう。

「そんなことよりどおミコちゃん？見つかった？」

竜希はなんでもないといいつつふうに聞いてきた。……おそろくもう竜希にとつては一々気にするのも臆劫になっているのだろう。

「……いや、それらしい命は感じられない。この辺りには居ないようだ」

「そつか……博麗神社から出てもう2時間も経つのにまだ見つからないのか」

「無理ありません幻想郷は結構広いですからね。簡単には見つかりません」

「そうだな。かなり広範囲を調べてるんだが……」

ちなみに今は大体半径10km圏内で探査している。そのおかげで人間やら妖怪やら妖精やらの命を感じすぎてしまって落ち着かない……というよりも少し気持ち悪い。だが……

「……仕方がない。もう少し探査範囲を広げてみるか」

「広げるって……どれくらい？」

「半径20km圏内だ。今の俺が探査できるギリギリの範囲だ」

「20kmって……ミコちゃんも十分に人間離れしてるでしょ。

俺のこと言えないよ？」

「大丈夫だ。俺は自覚しているからな」

「自覚って……」

「それよりも大丈夫なんですか？先程命を感じすぎて気持ちが悪いと行ってましたが……範囲を広げたら余計に気分が悪くなるのでは？」

妖夢が心配そうに聞いてきた。

「確かにそうだがそうも言ってられないだろ？俺が手伝えるのは今日だけなんだ。だったら今日中に見つけたほうがいいだろ？」

「そ、それはそうですね……」

「まあ気分が悪くはなるが耐えられん程ではない。問題はないさ」

「そっか……ありがとねミコちゃん」

竜希は笑顔で礼を言った。ヘラヘラした笑みではないのでちゃんと感謝しているようだ。

「……気にすんな。それじゃあ探査範囲を……うわあ」
探査範囲を広げようとしたら、こちらに向かってくる命を感じ取ってしまった。

「ん？どったのミコちゃん？頭抑えて」

「……いや、少しめんどくさいことになりそうだな」

「めんどくさいこと？」

「ああ……やはりか」

その命は真っ直ぐ俺たちのいるところに向かってくる……ものすごいスピードで。そして……

「ミツコトさくん！」

彼女……射命丸文がやってきた。

「どうもミコトさん！会いたかったですよ！」

「……何かようか文？」

「ええ！ミコトさんに『春雪異変』について色々教えていただこうと思ひまして！ミコトさんのことですから絶対に関わっていると思ひましたので！」

「『春雪異変』？」

「はい！この間まで春なのに雪が降っていたじゃあないですか！だからこの異変を『春雪異変』と名づけたのです！」

なるほどな。それは納得だ。

「……なんか妖夢が若干凹んでるように見えるな。責任感じてるのか？」

「……」

ポン、ナデナデ……

あ、竜希が妖夢の頭撫でてる。どうやら慰めてるようだ。妖夢は恥ずかしそうに顔を俯かせている。

「……というか迷わずにここに直行したみたいだけどなんでここ

に居るってわかったんだよ?」

「ふふふ……私は烏天狗ですよ?烏にあなたがここにいと聞いたんです!」

「……さいですか」

あくクソ。本当に面倒な奴に見つかった。文に捕まると2, 3時間は取材させられるからなあ。

「あく……ミコちゃん?その子誰?」

竜希が少し呆気にとられた様子で聞いてきた。竜希でさえ文の勢いには少し気圧されるのか……

「あやや?見ない顔ですね?いいでしょう自己紹介してあげます!私は射命丸文!文々。新聞を発行する清く正しい烏天狗の記者です!」
文は元気よく挨拶した。……というか前から思ってたけど文は清く正しいっていう感じがあんまりしない気がするんだが。

「そ、そうなんだ。じゃあ俺も自己紹介するね?俺は紫黒竜希。ミコちゃんの親友です」

「私は魂魄妖夢と申します」

「竜希さんと妖夢さんですね!どうぞよろしくお願いします!それではミコトさん!取材させていただきます!」

「それでは……脈絡なさすぎるだろ。というか取材なら俺じゃなくて竜希にしろ。あいつも俺と同じで外の世界から来た奴だし異変の解決にも一役買ってるんだぞ」

妖夢に至っては首謀者の一人だし。まあ言わないけど。

「あや?そうなんですか?……でもまあやはりミコトさんから話を聞きましょう」

「いやなんでだよ?新参者の竜希を取材したほうがネタ的にいいんじゃないか?」

「まあそれはそうなんですけど……なんとなくですが竜希さんからは真面目に話を聞けるような気がしませんので」

……それについては否定しないな。あいつのことだからぶざけてあることないことを大げさに語るおそれがある。結構深刻な話もある分面白おかしくしてシリアスさを消して真実もみ消しそう

だし。

「それにミコトさんのことを記事にして欲しいという声が非常に多いのですよ！だから取材する対象はミコトさん以外ありません！ミコトさんは私専属の取材対象でもありますから！」

「ちよつと待て！俺がいつから文専属の取材対象になった！」

「？初めて取材した時にですよ？」

「そんなの聞いていない！というか『なんでそんな当たり前な事きくんだろう？』みたいな顔するな！」

本当にもう……文の相手をするとかチで疲れる。

(ミコちゃん超疲弊してるなあ……ちよつと同情する)

(ミコトさん……すごく疲れた顔してますね。大丈夫でしょうか？)

……竜希と妖夢もすげえ同情の目を向けてくるし。まあともかく今は取材を受けている暇はない。文には悪いが断らさせてもらおう。

「すまないが文、今は少し忙しいんだ。取材ならまた今度にしてくれ」「忙しい？ミコトさんは今何をしているのです？」

「人探しだ。俺の能力を使って探しているのだが中々見つからないんだ？」

「そうなんですか？それなら仕方ありませんねえ……ちなみに誰を探しているのですか？」

「雲上空という子だ」

「……すみません。もう一度言ってください。誰を探しているのですか？」

文は目の色を変えてもう一度聞いてきた。

「……雲上空という子だ」

「……そうですか。なるほど……ふふふ」

文は突然笑い出した。

「どうした文？」

「いえ……どうやら天は私を味方しているようです」

「？どういうことだ？」

「私は彼女の居場所を知っています」

なっ！

「本当か!？」

「はい！誓って本当です！何せ今日会っていますしどこに行くのかを聞いていますからね！」

「マジかよ……」

「さてミコトさん。空さんの居場所を教えてあげてもいいですけど……条件があります」

……条件か

「……わかった。その条件呑もう」

「あや？まだ条件の内容行つてませんよ？」

「聞かなくてもわかる……どうせ取材させろって言うんだろ？」

「はい！」

文は眩しい程の笑顔で返事した。

「ただし、明日からは少し用があるから取材はその子のいるところに移動しながらでいいか？」

「はい！もちろんです！」

「それじゃ案内頼む。それと低く飛んでくれ。竜希は飛べないからな。あとスピードはちゃんと落としてくれ。本気のお前に追いつくとか無理だから」

「わかりました！きちんとスピード落ととしてゆっくり行きますよ！その方が取材もしやすいですね！それではこちらです！付いてきてください！」

俺達は文について空のいるところに向かった。

「彼女……すごくいいですね」

取材をしながら俺達の前を飛ぶ文ちゃんを見ながらよくむちゃんが呟いた。

「ん？何が？」

「いえ、あのミコトさんをあそこまで疲弊させているので」

「アハハ！それぐらいなら俺でもできるよ」

「竜希さんはある意味当然です」

よくむちゃんは俺の言葉に即答した。

「……ねえよくむちゃん？なんか俺に厳しくない？まだ会ってそんなに経ってないよね？」

「そんなことはありません。これが普通です」

「……いや、それはよくむちゃんの普通とは違うと思うよ？なに？この短期間で俺の扱い方心得たりしちゃいました？」

「……まあいいや。でもまあミコちゃんがあそこまで疲弊するのは仕方がないかな？文ちゃんはミコちゃんの苦手なタイプだし」

「そうなんですか？」

「うん。ああいうイケイケ系は苦手なんだよね」

「そうですか……ならミコトさんには悪いことをしてしまいましたね」

「へ？どして？」

「だって空さんのところに案内してもらうために今取材を受けているんですよね？苦手な人から取材されるのは嫌だと思いませんか……」

よくむちゃんは申し訳なきそうに言った。

「あくなるほど。そうとったか。大丈夫だよよくむちゃん。その心配はない」

「え？」

「ミコちゃんは文ちゃんのことを苦手だけど別に嫌っているわけじゃ

あない。そして……接するのが嫌っていうわけでもないよ。というかありえない」

「ありえない? どうしてですか?」

「だってミコちゃんが文ちゃんのことを苦手に行っている理由は……」

「混符「アンビバレンス・ストリーム」!!」

「つてうわっ! いきなり何すんのさミコちゃん!」

俺は突然スペカを発動したミコちゃんに向かって叫んだ。

「竜希……お前妖夢に何余計なこと言おうとしてんだよ」

「……あらく。聞こえてたんだ。」

「余計なことと言うな。わかったな?」

「ミコちゃんはすっげえ怖い顔で俺を睨みつけて言う。」

「はいはい。言いませんよ」

「全く……」

「あく……ミコトさん? 続きますか?」

「ああ。中断して悪かったな」

「いえいえ。それでは次は……」

ミコちゃんと文ちゃんは取材を再開した。

「ということでごめんね? ミコちゃん怒るから話せないや」

「いえ。私は構いません」

「なら良かった」

それにしてもミコちゃん、そんなに隠したいことなのかな?

文ちゃんがミコちゃんの初恋の人に似てるのを。

第67話

side ミコト

「着きましたー!ここにです!」

文に案内されて俺たちがやって来たのは……数多の向日葵が咲き誇る場所であった。

「向日葵畑?ここに空さんはいるんですか?」

「ええ。空さんはこの向日葵畑の主とお友達なんです。今日はその方に会いに行くと言っていましたので居るはずですよ」

妖夢の問いに文は答えた。

「へえ〜……ミコちゃん」

「わかつている」

俺は空という子が本当にここに居るのかどうかを知るために能力を使って探ろうとした。すると……

「!」「ギヤああああ!!」「!」「!」

どこからともなく悲鳴が聞こえてきた。

ドサツ!

そして向日葵畑の奥の方からボロボロになった数匹の妖怪が飛んできた。……というかこいつらどこかで見たような?

「ク、クソツ……何なんだあの女共」

「可愛い顔して滅茶苦茶やりやがって……」

「今度会ったら……痛い目に合わせてやる」

ボロボロになった妖怪どもはなにか恨み言を言っている。

「おい、お前ら」

俺は何があったのかが気になったため声をかけた。

「あ?なんだ……」

こちらに振り向いた妖怪どもは俺の姿を見て固まった。

「!」「ああああああ!!」「!」「!」

そしてしばらくして突然絶叫した。

「お、おとお前はあの時の……」
ん?あの時?

「あやや？ミコトさんの知り合いですか？」

「いや、こんな知り合いは俺にはいない……あ」

こいつら……もしかして。

「ん？どつたのミコちゃん？」

「……思い出した。お前ら確か迷いの竹林で会ったな」

そうだ。こいつらあの時にてると兎妖怪たちを襲ってた奴等だ。

「な、なななななんでお前がここにいるんだよ！」

妖怪共のうちの一体がびくつきながら聞いてきた。

「人を探してるんだよ。そういう貴様らはここで何をしている」

「べ、別にお前には関係ないだろ！」

まあ確かにそうだな。こいつらがどこで何をしようが俺には関係

ない。もちろんあの迷いの竹林に行かなければの話だがな。

「そ、それじゃあ俺達はこれで……」

妖怪共がそそくさと向日葵畑から去ろうとする。すると……

「待ちなさい」

ビクツ!?

女性の声が聞こえてきた。その声に反応して妖怪共はビクリと反応を示し、ギギギと音が聞こえてきそうな様子で声の方に首を向けた。俺たちもその声のする方に向いた。

そこにいたのは緑の髪に赤い目、白のカッターシャツとチェックが入った赤のロングスカートを着用し、その上から同じくチェック柄のベストを羽織っており日傘をさしている少女がいた。

「どうも幽香さんー」

彼女の姿を見た文が挨拶をした。

「あら文じゃない。何か用かしら？」

「ええ、まあ少し」

「なら後にして頂戴。これから……そこにいる妖怪共にお仕置きしなくちゃならないから」

幽香という少女はニコリと笑みを浮かべてそう言った。その笑顔は非常に可愛らしいものであるのに若干の……というかなんかの寒気を感じた。

「」「ヒツ、ヒイイイイ!!」「」

妖怪共は怯えた声をあげて縋るように俺の背に寄ってきた。つて……

「貴様等は何をしている?」

「た、頼む! いや、お願いします! 助けてください!」

「こ、このままじゃ俺達……あいつに殺される!」

ガタガタと震えながら妖怪共は俺に助けを乞う。

「あら? あなたまさか私のお仕置きの邪魔をするのかしら? だってら……あなたもお仕置きしないとね」

向こうは向こうでやる気(殺る気)になってるし。

「あんた確か幽香っていったな? ひとつ聞きたいことがあるんだがいか?」

「何かしら?」

「こいつらは一体何をしたんだ? お仕置きっていうぐらいならなにかしでかしたんだろ?」

「ええ。こいつらは……私の大切な向日葵を傷つけたのよ」

そう言った彼女の表情からは激しい怒りが秘められているのを感じた。よほどこの向日葵達を大切にしていたのだろう。

「た、たかが向日葵だろ! 大げさなんだよ!」

「ちよつと傷つけたって理由で俺達をボコボコにするなんて……ふぎけんじゃねえ!」

「あんなもんがどうなったってこっちは知ったこっちはやねえんだよ!」

後ろの妖怪共は先程とは打って変わって強気にお声を張り上げた。俺が助けしてくれると思っているのか、はたまた彼女が俺を標的にしている隙に逃げようとも考えているのだろうか……くだらない。

「……そうか。わかった」

俺はスペルカードを取り出した。

「!？」

それに反応して幽香は戦闘態勢を取る。

「混符「黒と白の螺旋」」

俺はスペルカードを発動した。

「「「ぎやあああああ!?!」」」

後ろの妖怪どもに対して。

「え?」

そんな俺の様子を見た幽香は困惑の表情をした。

「ぐうう……」

「な、なんで……」

妖怪共はうめき声をあげてながら俺に向かって言う。

「……ふざけんなよ?」

「「「G:」」」

俺は妖怪どもの方に向き直り殺気をぶつけた。

「たかが向日葵だど? たとえ花にだって命はあるんだよ。貴様らはそれを悪びれもなく傷つけた。だから……貴様らはぶっ飛ばす!」

俺は両手に銃を構え、スペルカードを取り出しちようど試してみたいと思っていたスペルカードだ。

「恋符「マスタースパーク」

「?!それは……」

構えた銃から極太のレーザー……マスタースパークが放たれ、妖怪どもに当たった。

「「「う、うわあああああ!?!」」」

マスタースパークの直撃を受けた妖怪共は遠くに吹き飛んでいった。

「ミ、ミコトさん。今のは魔理沙さんの……」

文が聞いてきた。

「ああ。俺は霊力と妖力も使えるけど元々持っていたのは魔力だからな。だから魔法に少し興味があつたから魔理沙に習ったんだよ」

と言っても魔理沙ほどの威力は出ていないけどな。やはり本家本元には敵わないな。と、そんなことより……

「すまなかつたな幽香」

「え?」

「あいつらぶっ飛ばしちまったから、お前にお仕置きさせることができなくなっちゃった」

あいつらの発言について頭にきちまったからな。

「……別にいいわ。あいつらが吹き飛ぶの見たらスッキリしたし。むしろお礼を言うわ。ありがとう」

幽香は笑顔で礼を言ってきた。先程とは違って寒気を感じることはない。素直に感謝しているようだ。

「気にしなくてもいいさ。と、そういえばまだ自己紹介していなかったな。俺は……」

「知ってるわ。一夢命でしょう？文の新聞を読んだし、あなたは結構有名な人だから」

「今やこの幻想郷でミコトさんのことを知らない人の方が少ないですものね！」

「……そうか」

俺ってそんなに幻想郷中に知れ渡ってたのか？……なん
か複雑な気分だな。

「……あのく？ちよつといっすか？」

竜希が遠慮気味に声を掛けてきた。

「ああ、そういえば居たな竜希」

「いたよ！さつきから全然喋ってないけど俺はここにいましたよ！」

竜希は声を張り上げて言った。

「えつと……私もいます」

続けて妖夢も控えめ気味に行ってきた。

「大丈夫だ。妖夢のことは忘れていなかったから」

「俺のことは忘れてたのに!?相変わらず俺に辛辣すぎるでしょミコちゃん！」

「うるさいぞ、喚くな竜希。それよりも本題に入ったらどうだ？」

「誰のせいでもうなったと……まあいいや。幽香ちゃんちよつ
といいかな？」

「……あなた誰？」

「あ、これは失礼。俺は紫黒竜希。ミコちゃんの親友です！」

「私は魂魄妖夢です」

竜希と妖夢が幽香に自己紹介をした。

「そう。それで？何か用かしら？」

「うん。ここに空っていう子が来てないかな？」

「空？確かに来ているけど、あの子に何か用があるの？」

「まあね。その子に会わせてもらってもいいかな？」

「いいわよ。ついてきなさい」

そう言つて幽香は向日葵畑の中に歩んでいった。俺達はその幽香について行く。

「あや？そういえば幽香さん。気になったのですがどうしてここに空さんいないんですか？彼女のことだから幽香さんと一緒にあの妖怪どものお仕置きをしようとしていたと思うのですが」

歩きながら文は幽香に質問した。

「お仕置きならしていたわよ。あいつらがあなた達のいたところに吹き飛ばされる前までは。でもあいつらがあまりに弱かったからつまらないと言つてついてこなかったのよ」

幽香は文の方に振り返つて答えた。

「……ねえミコちゃん、よくむちちゃん」

竜希が小声で俺に声を掛けてきた。

「なんだ？」

「今の幽香ちゃんの話聞く限りさあ……空ちゃんつてももしかしなくても好戦的なのかな？」

「そうかもしれないね」

「だよね、ハハハ……なんかさ？嫌な予感がするんだけど……これはきつと気のせいだよね？」

竜希は苦笑いを浮かべて聞いてきた。

「……それはきつと気のせいではないと思うぞ」

「……私も多分竜希さんと同じことを考えていると思います」

「……やっぱり？」

「……なんというか。この先の展開が読めてくるな。」

とりあえず竜希は頑張ることになりそうだ。

第68話

side ミコト

幽香についてしばらく歩いていると開けたところに出た。そしてそこには……

「……」

長い髪をポニーテールにして和服を着ている少女がいた。少女はスケッチブックに絵を書いている。

「空」

「……ん？ああ、幽香か。お帰り。もうお仕置き終わったのか？」
幽香に声をかけられた少女……空は少し間を置いて返事を返した。どうやら幽香が戻ってきたことにすぐに気がつかない程絵を描くのに集中していたらしい。

「ええ。あなたは絵を描いていたのね」

「ああ。お前が育てた向日葵は綺麗だからな」

「あら？嬉しいこと言ってくれるわね」

「本当のことだよ」

「ありがとう。見てもいいかしら？」

「ああ。いいぞ」

幽香空のスケッチブックを覗き込んだ。

（……この子が雲上空か）

俺は能力を使って空の命を探ってみた。

（……なるほど。確かに今までに感じたことのない独特な命だな。これが付喪神の命か）

「ところであなたにお客さんよ？」

「客？私に？」

「ええ。彼等よ」

そう言って幽香は俺たちの方を指す。そして空は俺達の方に顔を向ける。

「おお文か。さつきぶりだな。んでお前たちは？」

「ああ、俺は……」

「お前はいいや。一夢命だろ？お前のことは文に聞いて知ってる」
「……………そうか」

……………空にまで知られていたのか。俺が知らない人が俺のことを知ってるというのにはやはり慣れないな。

「んで？そつちの二人は？」

「どうも！俺は紫黒竜希だよ！よろしくね！」

「私は魂魄妖夢といます」

「んあ？紫黒に魂魄？」

空は二人の苗字を呟いたあと何か考え込む素振りを見せた。

「んにゃ？どうしたの空ちゃん？」

「……………おいお前」

空は妖夢に声をかけた。

「私ですか？」

「ああ。お前は……………魂魄妖忌の血縁か？」

「お祖父様を知ってるんですか!？」

「お祖父様……………なるほど妖忌の孫か。お前の祖父さんならよく知ってるぞ。何度も剣を交えたからな。あいつの刀も創ってやったし」

「それって……………この楼観剣ですか？」

妖夢は腰に下げた刀を指して聞いた。

「おおそうそう！確かそれだった！それで？妖忌は元気か？最近会っていないから少し気になってたんだよ」

「それは……………わかりません。お祖父様は現在行方不明ですので」

妖夢は少し表情を曇らせて言った。

「……………そうか。まああいつのことだから元気にやっているとは思うけどな」

「……………はい。そうですね」

空の言葉を聞いても未だに妖夢の表情は暗い。心の底から心配しているのだろう。

「……………」

ポンッ

そんな妖夢の頭に竜希は慰める手を置いた。

「あ……竜希さん？」

「……よくむちゃん、君にそんな表情は似合わないよ」

竜希はいつものように軽い口調で言う。だがその表情は……ヘラヘラしたものではなくて包み込むように優しい笑顔だった。

「竜希さん……ありがとうございます」

妖夢は笑顔になって竜希に礼を言った。

「……うん！やっぱりよくむちゃんは笑顔が一番だよ！ちよく可愛い！」

「みよん!? 竜希さん！」

妖夢は顔を真っ赤にした。

「アツハハハ！」

竜希はそんな妖夢を見て満足そうに笑う。

（……本当、コイツは空気読むのが上手い奴だよな。慰め方も的確だし……器用な奴だ）

「……お前、竜希って言ったな？」

「ん？なくに？俺にもなんか聞きたいことあんの？」

「ああ。お前は……あの『紫黒』の人間か？」

空は竜希を鋭い眼光で睨みながら言った。

「……うん。そうだよ」

竜希はヘラッと笑って答えた。

「そうか……なんで幻想郷にいるんだ？お前達『愚かな紫黒一族』は300年前幻想郷から出て行ったはずだが？」

『愚かな紫黒一族』？空は竜希の一族について何か知っているのか？
「……まあそうなんだけどね。俺はちよっち事情があつてこの幻想郷で暮らしてるんだよ。と言ってもほんの数日前からだけけどね」

「ふうん……まあ私には関係ないことだから別にいいけどな」
「空？その紫黒一族ってなんなの？」

気になったのであろう幽香が空に聞いた。俺も少し気になるな。

「……話すと長くなるからまた今度教えてやるよ」

「……………そう。わかったわ」

……………結局聞けないか。まあいい。今度時間があるときにでも聞いてみよう。命がわかったから探そうと思えば探せるし。

「それよりも私の客つてことは私に用があるんだろ？話しなよ」

「はいはい！実は……………」

竜希は空に事情を話した。

〈少年説明中〉

「なるほどね。つまりお前の力に見合った刀を削ってほしいっていうことだな」

「まあそうなるね」

「ふうん……………はつきり言うぞ。嫌だ」

空はきつぱりと断言した。

「えつと……………なんでかな？」

「理由は単純だ。私は弱い奴の刀なんか作りたくない」

「……………それは竜希さんが弱いつていうことですか？」

妖夢が空に問いかけた。

「ああ。そうだ」

「なぜそんなことが言えるのですか？あなたに竜希さんの何がわかるんですか？」

再び問いかける妖夢。その声は普段よりもいくらかトーンが低く怒気を含んでいるように聞こえる。竜希のことを弱いと言ったのが癢に触ったようだ。

「ちよつとよくむちちゃん。落ち着いて」

当の本人は全くと言っていいほど気にしていないようだ。まあ竜希にとつて弱そうというのはある意味では非常に嬉しいことなのだろうから。コイツはそれを望んでいたから。

「竜希のことは知らねえけど紫黒のことは知ってる。紫黒の人間とは何度も戦ったことがあるから。だから私は……………紫黒の人間は

偉そうなことばかり言ってるのに大した強さも持ち合わせていないことを知ってるんだよ。どうせそいつも同じさ。所詮紫黒の一族の人間だからな」

空は竜希の方を見ながら言った。その目と声からは呆れの感情が読み取れる。昔紫黒の人間と何かあったのだろうか？

「そんなことありません！竜希さんはそんな人たちとは違います！何も知らないくせに勝手な事を言わないでください！」

「随分とムキになるな。そういうお前はこいつの何を知ってるんだ？」

「私は……私は知っています。竜希さんの強さを。竜希さんは……誰よりも強い剣士です。他の紫黒の人間とは絶対に違います」

妖夢は空に言い放った。その言葉には強い想いが込められているように感じる。

「……俺も妖夢と同意見だな」

「ミコト？」

「竜希は……強いよ。それこそ君が考えるよりも……いや、君自身よりも遥かに強い。君じゃあ手も足も出ないだろうな」

まあ、だからこそ竜希は苦しんでいるんだがな。

「……へえ。私よりも強いか。それって本当か竜希？」

空はニヤリと笑って竜希に聞いた。

「……はあ、ミコちゃんもよくむちゃん勝手なこと言いすぎだよ。……まあ二人の言うとおり……俺は強いけどな」

竜希は口調を真面目なものに変えて空に言い放った。

「そうか。なら……試させてもらおう」

そう言つて空はどこからともなく二振りの刀を取り出した。そしてその内の一本を竜希に差し出す。

「私と戦え。もしも勝ったらお前が勝ったら……お前の望み通りお前の刀を創つてやるよ」

「……それはどうも」

竜希は刀を受け取りながら答えた。

「その代わり、私に負けた時は……二度と私に関わるな。代わりは今お前が持つてる刀はやるからさ。そいつは今お前が腰にさしてる刀よりはいい業物だからそれで我慢しな」

「……わかった」

竜希が返事をした後二人は間合いを取るために少し距離をとった。

「竜希さん」

妖夢が竜希に近づいて声をかけた。

「……なに？よくむちちゃん？」

竜希はヘラッと笑い不真面目な態度で答えた。不真面目な態度に戻したのは……これから戦うからだろうな。コイツは戦い嫌い故に真面目に戦うのを嫌うから。

「すみません。焚きつけるようなことをしてしまつて」

妖夢は申し訳なさそうな表情で言う。

「いいよ別に。気にしてないからさ」

「でも……戦いたくないんでしょう？」

「……まあね。でもまあ……こうなるんじゃあないかって思ってたから。ある意味予定通りだよ。こうなったのはよくむちやんのせいだとかそんなこと全然ないからそんな暗い表情しなさんなつて。笑つてよ。これから戦いに行く戦士にとってはそれが何よりも嬉しい餞になるんだからさ」

「竜希さん……わかりました。頑張ってくださいね」

妖夢は竜希に笑顔を向けた。

「ん、ありがとう。それじゃあちよつと離れててね？」

「はい」

そう言つて妖夢は俺達のいるところに戻つてきた。

「話はもういいのか竜希？」

「うん。もういいよ。それじゃあ始めよつか。ミコちやくん、なにか合図お願〜い！」

「……わかった」

俺は服のポケットから硬貨を取り出した

「こいつが落ちたら始める。いいな？」

「ああ」

「りよ〜か〜い」

「それじゃあ・・・行くぞ」

キンツ

二人の確認を取り、俺は硬貨を指で弾いた。硬貨は放物線を描き宙を舞う。そして・・・

トスツ

硬貨は地面に落ちた。

ガキン！

それとほぼ同時に金属がぶつかり合う音が聞こえた。空が竜希に斬りかかったのだ。

「ほう！初撃を防ぐとは中々やるな！」

「アハハ！それはどうも〜！」

「だが・・・これはどうかな！剣技「爪竜連牙斬」！」

空はスペルカードを発動して連続で竜希に斬りかかった。

「おっと」

竜希はその斬撃を全て刀で受け流す。そして斬撃を全て防ぎ終えると距離をとって間合いをとる。

「ふつ、なるほど。確かに今までの紫黒の人間とは違うようだな・・・面白い！」

空は笑みを浮かべながら竜希に斬りかかっていった。

第69話

side ミコト

ガキンガキンガキン!

向日葵畑に鳴り響く剣戟。その発生源は俺たちの目の前にいる竜希と空だ。

現状は空が繰り出す剣技を竜希が刀を使って捌いている。

竜希は……自分からは斬りかかっていなかった。

「……へえ。彼結構やるわね」

「ですね。空さんは剣士としてかなりの実力者。その空さんの剣をあそこまでの確に捌いているんですから」

俺の隣で戦いを眺める幽香と文がそう呟いた。

「でも……結果は見えているわね」

「……どういう意味だ幽香?」

「どうもこうもないわ。彼は空の斬撃を防ぐので精一杯。対する空は……まだ本気を出していない。彼も中々強いようだけれど勝ち目はないわ」

……中々強いか。

「……それは「違います」妖夢?」

「幽香さんは竜希さんのことを中々強いと言いましたがそれは違います。彼は……竜希さんは『最強』です。故に竜希さんに勝てるものなどいません」

妖夢は静かに、だが力強い口調で言った。

「『最強』? 竜希さんがですか? 私にはとてもそんな風には見えませんが」

「全くだわ。彼からは『最強』に値するほどの覇気を全く感じないもの」

二人は妖夢の言っていることが信じられないようだ。

「……いいや。妖夢の言うとおりだよ。竜希は『最強』だ」

「ミコト」

「さっき幽香は言っていたな。空は本気を出していないと。だ

が………竜希もだよ。それどころかあいつはまだ戦ってすらい
ない」

「?戦ってすらいない?どういうこと?」

「あいつは………竜希は………ただ確かめているだけだ。空の
実力の底を。そしてそれももうすぐ終わる」

「………」

「信じられないのなら見ていればいい。すぐに………知ることにな
るだろうからな」

俺は目の前の戦いに視線を戻した。そしてそれに伴い3人も目の
前の戦いに意識を集中させた。

side 空

「剣技「閃空裂破」!!」

「あま〜いあま〜い!」

「クッ!」

竜希はまたしても私の繰り出す剣技を的確にさばいた。

(コイツ………何なんだ一体?)

私は焦りを感じていた。私は今まで数え切れないほどの数の剣士
と戦ってきた。だから刃を交えればそいつがどれぐらいの実力なの
か、どんな思いで剣を振るっているのかを大体把握することができ
る。それなのに………

わからない

竜希のことがなにもわからない。

強さも

思いも

意志も

竜希の件からは何も感じない。

まるで……意図的に隠されているかのようには。

「どうしたの空ちやくん？随分と険しい表情しちやってるみたいだけど？」

「うるさい！剣技「崩龍斬光剣」!!」

スペカを発動して連続で切りつける。だが……

キンキンキン！

「ッ!!」

その全てがいつも容易く防がれてしまった。

「いい動きしてるね。まさに実戦特化の剣って感じだ。何よりも剣を振るう意味をきちんと理解している。剣士としての実力はかなり高いよ。それこそ俺が今までに戦ってきたどの剣士よりも圧倒的に強い」

竜希はヘラヘラとした笑みを浮かべてそう言ってきた。その表情からは余裕を感じる。

「……そんなヘラついた表情で言われても嬉しくねえな」

「アハハ！それはごめんね。でも嘘はついてないよ。本当にそう思ったんだから♪……でも……まあ、うん。そうだね」

「……なんだよ？」

「……はつきりと言わせてもらおうよ。君じゃ俺には勝てない。今も……これから先も永遠にね」

「なんだと!!」

「気を悪くしちゃったかな？ごめんね。でも……事実だから」
苦笑いを浮かべて竜希は言う。そんな竜希に私はただただ腹が立った。

「なんで……なんでそんなこと言い切れるんだよ！何を根拠に言ってるんだ！」

「……………根拠ならあるよ。君が俺に永遠に勝てない根拠、それは……………」

君の初撃を防いだからだよ」

……………は？

「私の初撃を……………防いだから？」

「そ。それが根拠だよ」

初撃を防いだのが根拠って……………

「……………ふ、ふふふふ。アツハハハハハ！なにそれ！それが根拠？まさか竜希、あの初撃は本気で斬りかかったものだとも思っているのか？全くもって見間違いだよ！あれは……………いや、私はこの戦いで本気なんて微塵も出してない！今までののはただのウォーミングアップだ」

「……………へえ。そうなんだ」

「ああ。だがまあ……………そんなにお望みとあらば……………見せてやるよ私の本気を！後悔するなよ！」

私は刀を鞘に収めた。そして抜刀術の構えを取る。

「いくぞ……………奥義「居合い・絶」!!」

私は最高速の抜刀術を放った。高速で繰り出される斬撃が竜希を捉える……………

ガキン！

……………ことはなかった。

「なっ!？」

私の奥義は……………竜希の持つ刀によって阻まれてしまった。しかも竜希は微動だにしていない。

「それが空の本気か？なら……………次は俺の番だ」

「ッ!？」

そう言った竜希の声は先程までのヘラヘラとしたものとは全く違う。

重く

鋭く

張り詰めたものだった。

side 妖夢

「そんな……本気の空の奥義を……あんなに容易く」

「それに……なんですかあれは？なんて重い覇気……彼は……本当に竜希さんですか？」

二人は今の竜希の雰囲気を見て表情を驚愕に染めている。先程までは雰囲気ガラリと変わった竜希さんに、そして竜希さんの覇気に気圧されているのだろう。

「……確かに今空さんが放った抜刀はとてつもなく早いです。威力も相当なものでしょう。ですが……竜希さんの抜刀術はあんなものではありません。あれを遥かに超えるものでした」

「空の奥義を超えるほどの抜刀術を？竜希は……そこまでの剣士なの？」

「ああ。言っただろう？竜希は最強だと。そしてこの勝負は……もうすぐ終わる。竜希の勝ちでな」

ミコトさんが幽香さんの問いかけに応えた。

空さんは決して弱くはない。いや、むしろとてつもなく強い方です。今の私では手も足も出ずに敗北を喫していたでしょう。先ほどの抜刀術も私では防ぎきることはできない。だが竜希はいつも容易

く防ぎきつてみせた。

(竜希さん、あなたは……私が思うよりも遥かに『最強』なのです。でも……私は……必ずあなたを超えてみせる)

私は竜希さんの強さを再認識しつつも、それを必ず超えてみせると心に強く誓った。

side 空

「覚悟しろよ。この勝負……ここで終わらせてもらう」

「グ……ウ……」

なんて覇気だ。さっきまでとは全然違う。剣を交えていないのに、はつきりと感じる。竜希の力を強さを。

わかってしまう。認めたくないけど……悔しいけど……竜希は私よりも遥かに……

でも……それでも私は……負けたくない!

「……来い」

私は刀を構え直した。これから来るであろう竜希の斬撃を防ぐために。

「……覚悟を秘めたい目をしているな。だが……その覚悟は無意味だよ」

バツ!

竜希はものすごいスピードでこちらに迫ってきた。

(来る！)

私はこれから来るであろう斬撃に備えて身構える。

ビュッ！

ある程度近づいてきた竜希は飛び上がり刀を振り上げた。

「飛天「龍槌閃」」

そして私に向かってその剣を振りかざす。私はそれを防ごうと頭上に刀を構えようとするが……

ギロツ！

(!?うご)……けない?)

竜希の鋭い眼光に睨まれ、身動きがとれなくなってしまった。そして刀は振り下ろされ……

ザンツ！

私の立つ位置からほんの僅か横にそれた場所に斬撃が繰り出された。斬撃を受けた大地は深く抉られている。

竜希は……わざと私から斬撃を外していた。

「あ……ああ……」

「……俺の勝ちだな。雲上空」

竜希は刀を鞘に収めながらそう言った。

「ふ……ふぎげ……」

ふぎけるなど言おうと思った。こんなのが決着だなんて認められない。でも……うまく声が出なかった。

「……いや、これで決着だよ。君はもう……俺に剣を向けることはできない。二つの意味でな」

「二つの……意味？」

「……お前の持つてる刀見てみるよ」

言われるがままに私は刀を見た。

「!?これは……」

私の刀は……刀身が半分になっていた。周囲を見渡すと折れた刀の残骸が地面に突き刺さっているを見つけた。

「いつの……間に？」

「お前の抜刀を防いだ時だよ。あの時からそいつはもう折れていた。そんな刀じゃあ……もう戦えないだろう？」

「クツ……」

「それに何より……お前自身がもう俺に対する戦意を失っている」

「そんなこと……」

「ないと言えるか？」

「……」

……反論できなかった。事実私はもう……戦いたいとは思えなくなった。戦う気にはなれなかった。竜希と……

「そんな状態でさっきまでと同じように剣を振るうなんて不可能だよ。それはお前自身よくわかっているだろう？だからこの勝負は……俺の勝ちだ」

……私は紫黒竜希という圧倒的な……『最強』の剣士に敗北を喫した。

第70話

side 妖夢

「……おい竜希。お前に率直に言いたいことがある」

「な、何かなミコちゃん？」

「……やりすぎなんだよ」

ミコトさんは手で目を覆いながら呆れたような声で言った。

「同感ですね」

「私もよ」

文さんと幽香さんの二人もミコトさんに同意する。

「ア、アハハ……やっぱり？」

竜希さんは苦笑いを浮かべながら申し訳なさそうにしている。まあ無理もないだろうと思う。なにせ……

「……綺麗な向日葵だなく」

私たちに背を向け体操座りをしながらじつと向日葵を眺めている空さんが目の前にいるのだから。その小さい背中からは何とも言えない哀愁が漂ってくる。

「ま、まああんな負け方をしたのですから無理もないですけど……」
空さんの気持ちは非常によくわかる。私も竜希さんに負けたあの時とはとにかく落ち込んだ。自分と同じ同じ剣士に斬られずに負けるというのは非常に屈辱的だから。

「前からよく思っていたがお前の負かし方は結構ひどいぞ？俺がお前に負けたときどんだけ凹んだことか……特に最初のときは軽く心が折れた」

ミコトさんは若干目を虚ろにして言った。

「あや？ミコトさんも竜希さんと勝負したことがあるんですか？」

「ああ。まだ外の世界で暮らしてたときに強くなる為に竜希と勝負して鍛えてもらった」

「ちなみにどんな負け方をしたんです？」

「……散々俺に攻撃させてようやく構えたと思ったら木刀を弾き飛ばされて連続で7回斬撃を首元で寸止めされた」

「う、うわぁ……………」

「そ、それは……………本当に心が折れますね。」

「竜希さん……………あなたという人は……………」
「……………アハツ♪」

「笑って誤魔化さないでください！私の時もそうですけどどうしてあなたはそういう勝ち方をするんですか！」

「いやくだって俺刀で傷つけるの嫌いだし〜」

「体は傷つかないですけど心がズタズタに傷つけられるんです！」

「ごめん。心から反省してる」

「急に真面目にならないでください！対応に困ります！」

「妖夢、竜希は別に真面目になってるわけじゃない。妖夢のツツコミが面白いから真面目なフリをしたただけだ」

「さつすがミコちゃん！よくわかってるね〜！」

「それたち悪すぎです！」

「はぁはぁ……………す、すごく疲れる。どうして私はこんなに突っ込んでいるんですか？」

（まるでコントね）

（この人達は見ている面白いですね〜）

（妖夢がいると竜希へのツツコミがサボれるから楽だな）

「……………なんか幽香さん文さんとミコトさんに若干失礼なことを思われているような……………ってそんなこと考えてる場合ではありません。今は……………」

「ところで竜希さん、どうするんですか？」

「へ？どうするって何が？」

「刀のことです」

「刀……………ああ！」

「……………もしかして忘れてました？」

「……………アハツ♪」

「……………はぁ」

「ありや？ツツコミなし？」

「……………もう疲れたんです」

正直今日はもう……ツツコミをしたくない。

(まだ持久力に欠けるな……まあ竜希と暮らしているんだからス
タミナはすぐにつくだろう)

……またミコトさんに変なことを思われているような気がす
る。というかミコトさん何かキャラ変わってませんか？

(ミコトさんは昔竜希さんへのツツコミでよく疲れていたのうんざ
りしていました。今は妖夢さんにツツコミ役を押し付けようと考え
ています by 作者)

「だが本当にどうするんだ竜希？空があれば刀を作ってもらえない
ぞ？」

「あく……どうしようかな？」

「……おい」

「あや？空さん、現実世界に戻ってきたんですね」

「その言い方はやめろ文。まるで私が現実逃避のために異次元の世界
に旅立っていたみたいだろ」

……それは事実では？

「もう大丈夫なの空？」

「……なんのことを言っているのかはわからないが大丈夫だ幽香」
「ならいいけど」

「ところで空ちゃん。俺の刀の事なんだけど……」

竜希さんが空さんに尋ねた。すると……

／／／／

空さんは竜希さんを見ると同時に頬を赤くした。

「？どつたの空ちゃん？」

「ツ！なんでもない！」

空さんはフィツと顔を背けた。その頬は赤いままだ。

(空さんもしかして……竜希さんのことを？)

ムカツ

……なんだろう？なぜだかムカムカする。私どうしてしまっ
たんでしよう？

(あや？これは面白いことになってますね♪)

(まさかあの空が竜希のことを……)

(空が竜希に……色々大変なことになりそうだ。とりあえず妖夢。頑張れよ)

「……安心しろ。刀はちゃんと創ってやる」

「本当!？」

「……それが約束だからな」

「ありがとく空ちゃん」

竜希さんはニツコリと笑ったお礼を言った。

「べ、別に礼を言う事じゃない。約束だから創るんだ」

「それでもありがとく」

「／／／／／」

これは……空さん竜希さんにベタ惚れですね。

ムカムカムカ

そしてなぜか竜希さんが空さんに笑顔を向けているのを見るとムカムカが一層強くなってる。本当に私はどうしてしまったんだろう？

「ただ一日待ってくれ。お前に見合う刀となると私もそれなりに集中して創らないといけないからすぐにはできん。明日の未の刻ぐらいにまたここにきてくれ」

「うん。わかったよく」

ともかくこれで竜希さんの刀が手に入る。私達の目的を果たすことができた。

「それと明日は竜希一人で来てくれ」

えっ？

「ほえ？俺ひとりで？」

「ああ……お前に話したいことがある。二人でな」

「俺に話ねく……まあ空ちゃんがそう言うならそうするよ。明日は俺ひとりで来るね」

「ありがとう」

竜希さんと二人で……一体何の？

「よし。それじゃあよくむちゃん、ミコちゃん。俺たちは帰ろうか」

「え？あ、はい。そうですね」

「ああ。霊夢も待つてるし早く帰らないとな」

「私も帰ってミコトさんの取材内容を記事にまとめないと」
「用も済んだので私達は帰ろうとした。すると……………」

「待ちなさい」

幽香さんが引き止めた。

「どうしました幽香さん？」

「ええ。さっきの空と竜希の戦いを見てたら私少し興奮しちゃったの。だから……………」

少し相手をしてくれないかしら？」

ゾクッ！

「ッ!!」

幽香さんの笑みを見て私は戦慄した。笑顔は非常に清々しいものだけれど目は狂気の色に染まっている。さらに全身からおぞましいほどの気迫を放っていた。

「えく…………俺さっき空ちゃんをやったばっかだからちよつと勘弁して欲しいんだけど」

ただ竜希さんはいつもと変わらない調子で幽香さんにそう返した。幽香さんに気圧された様子は全く見られない。

「安心しなさい。私が相手をして欲しいのは竜希じゃなくてじゃなくて……………」

スッ

「…………ミコトだから」

「…………はっ。」

幽香さんはミコトさんに傘の向けて言った。ミコトさんは突然のことに疑問の声を上げる。

「そつか。ならいいやく。ご自由にどうぞ」

「ありがとう。それじゃあやりましたようか」

幽香さんは傘を構えて戦闘態勢に入った。

「ちよつと待て。俺を置いて話を進めるな」

当事者である自分を差し置いて話が進める幽香さんと竜希さんに待ったをかけた。

「というより竜希、俺のことを勝手に決めるなよ。お前にそんな権限はないだろ」

「別にいいじゃん」

「よくない。お前はもう何も言うな。面倒なことになるから」

「え……………」

「え……………じゃない。とにかくお前はもう黙ってろ」

「はくい……………よくむちゃん。ミコちゃんが反抗期突入で辛辣だよ。」

俺悲しい〜」

「…………今のはどう考えても竜希さんが悪いですよ。ミコトさんのことなのに勝手に決めちゃうんですから」

「え〜、そんなこと……………あるけどさ〜♪」

…………竜希さんって本当に真剣な時とのギャップが激しい人だ。

side ミコト

「幽香、なぜ俺がお前と戦わないといけないんだ？」

俺は今だに闘争心むき出し状態の幽香に聞いた。

「さつきも言ったでしょう？空と竜希との勝負を見て興奮しちやつたのよ」

「そう言う意味で聞いたんじゃない。なぜ俺なのかって聞いているんだ」

「あなたに興味があるからよ」

「俺に？」

「ええ。以前文の新聞であなたの活躍ぶりを見てからずっと興味を持っていたの」

「……まさか文の新聞が原因でこんな面倒が起きるなんて。今度から本気で取材断ろうかな？」

「それに……さつき見たあなたのマスターパーク。あれで一層あなたに対する興味が強くなったわ」

マスターパークで？

「どう言う意味だ？」

「それは……私と勝負すればわかるわ」

幽香は再び傘を構えて戦闘態勢を取る。やる気まんまんだな。だが……

「……悪いがその勝負断らさせてもらう」

この勝負は受け入れられないな。

「あら？どうしてかしら？」

「理由は三つだ。まず一つに俺は単純にあんまり戦いが好きじゃないから。第二に早く帰って夕飯の準備をしなければならぬから。そして第三に……俺は竜希と空のように上手く戦えないからだ」

「上手く戦えない？」

「ああ。俺は二人みたいに……この向日葵たちが傷つかないように戦うなんて器用なこととはできないんだよ」

「……え？」

「俺がここで幽香と戦ったらほぼ確実に向日葵を傷つけてしまうだろうな。だからここで幽香とは戦えない」

こんなにも綺麗に咲いている向日葵たちを傷つけるだなんて俺は

したくない。竜希と空は激しく剣戟を打ち合っていたが決して向日葵が傷つかないようにと配慮していたことはわかった。だが俺にはそんな風に器用に戦うことはできない。俺のスペカは基本的にどれも攻撃範囲が広いからなおさらだな。

「ということですかまないが諦めてくれ」

「……………どうして?」

「ん?」

「どうしてあなたはそう思えるのかしら?あの妖怪たちを吹き飛ばした時も思っただけだ……………なぜあなたはそこまで?」

幽香は真剣な眼差しで尋ねる。先程までの狂気の色は見られない。闘争心も収まっている。

「……………感じるからな」

「感じる?」

「ああ。小さいけどこの向日葵たちからは……………しっかりと命を感じる。一つ一つから綺麗な命を。だから俺にはわかる。幽香がこの向日葵たちをどれだけ大切に育てていたのかが」

「……………」

「そんな向日葵を傷つけるだなんて……………忍びないだろ?」

「……………ええ、そうね。わかったわ。あなたとの勝負は諦めるわ」

良かった。勝負せずにすんだな。

「ただし今はよ。あなたと勝負するのを諦めたわけじゃあないわ。あなたには今度改めて勝負を仕掛けさせてもらう。もちろん場所を変えてよ。その時は……………断らないでちょうだいね?」

幽香ニコニコと清々しい笑顔で言った。

……………どうやら勝負すること自体は諦めてくれなかったようだ。これは勝負しないというわけにはいきそうにない。

「……………それじゃあ今度こそ俺たちは帰るな」

「ええ。引き止めて悪かったわね」

「それじゃあまたな」

「またね」

「失礼します」

俺たちは向日葵畑をあとにしてそれぞれの帰るべき場所へと向かった。

side 幽香

あれが一夢命か……

「フフフ♪」

「機嫌良さそうだな幽香」

空が私に声をかけた。

「あら？そう見えるかしら？」

「ああ。そんなにミコトのことが気に入ったのか？」

「ええ。ますます興味を惹かれたわ」

「へえ。素直だな」

「誤魔化す必要なんてないもの。そういうあなたはどうかの？」

「どうって何がだ？」

「竜希のことよ。はじめは鬱陶しそうにしていたのに今じゃあ顔を合わせる的真つ赤にさせちゃって」

「なっ!?べ、別に私は竜希のことなんて……／＼／＼」

空ったら顔を真つ赤にさせちゃって、可愛いわね♪

空は明らかに竜希に惹かれている。原因は間違いなくあの戦いだろう。おそらくあの戦いの時に見た竜希の強さ、気迫、覇気。それに魅了されたのだろう。

やっぱり空も乙女だったということね。

「しかも二人で話がしたいだなんてあなたも大胆ね。まあ私は応援し

ているから頑張りなさい」

私はからかうつもりで竜希に言った。だが……そのあとの空の反応は私が予想したものとは全く違っていた。

「……」

「空？」

「……違う」

「え？」

「あいつと二人で話したいって言ったのは……幽香が考えているようなことが理由じゃない。もっと違う理由がある……あいつに聞きたいことがあるんだ」

空は静かに言った。その声のトーンは少し低く表情は先程まで真つ赤になつていただなんて信じられないぐらい真剣そのものだ。

「聞きたいこと？それって……」

「……幽香、部屋借りるな。竜希の刀作らないといけないから」

「え、ええ。わかったわ」

「ありがとう」

そう言つて空は私の家に向かって歩き出した。

(空……あなたは一体竜希に何を?)

私は疑問に思いながらも空の後について家へと戻った。

side 妖夢

「いや〜なんとか空ちゃんに刀を創ってもらえるようになってよかったですよかったです！ね〜よくむちちゃん」

「……」

「よくむちちゃん？」

「え、あ、すみません。聞いてませんでした」

「もどつたの？ボクとしちやつてさ」

「な、なんでもありません。気にしないでください」

「そう？ならいいけどさ」

「……まあ実際はなんでもないということとは全くないのだけれど。」

私の心の中で引つかかっていることがある。それは……明日のことだ。

空さんは竜希さんに二人きりで話がしたいと言っていた。一体空さんが竜希さんとなんの話をしようとしているのか……とでも気になる。

まさか……空さんは竜希さんに……その……こ、告白を……

もしそうだったら私はどうすれば……ってあれ？どうして私そんなことを心配しているんでしょうか？

「……ねえよくむちちゃん」

「え？なんですか竜希さん？」

「俺さ。どうしても今よくむちちゃんに聞きたいことが一つあるんだ」

「聞きたいことですか？」

「うん。すごく大事なこと」

「大事なこと？」

竜希さん……一体何を？

「うん。あのさ……」

「未の刻っていつ?」

「……え?」

「いや、空ちゃん明日未の刻に来てくれって言ったけどさ。未の刻って俺いつかわからないんだよね。アハハハ……」

「こ、この人は本当に……」

「それで?いつなの?」

「え、えっと……未の刻っていうのは八つ時のことです」

「……ゴメン。それも俺わかんない。24時間で言ってくれる?」

「……私はその24時間っていうのがよくわからないのですが」

「マジで?……どくしよ(汗)」

「……はあ、本当にこの人は……」

「帰ったら幽々子様に聞いてみましょう」

「そだね。まあその前に夕飯作らないとだけど」

「フフツ。そうですね」

「なんだかさっきまで心配していたのが馬鹿らしくなってきました。」

「とにかく早く帰って幽々子様が駄々をこねないように夕御飯を作らないといけませんね。」

「竜希さんと一緒に。」

第71話

side 竜希

「そろそろかな〜?」

未の刻、俺は空ちゃんから刀を受け取るために昨日の場所に來ていた。

ちなみに未の刻がいつなのかは幽々子さんに聞いてわかった。

と言っても幽々子さん自身も24時間表記が分かっていたわけではなく幽々子さんの「大体おやつ時間帯のことよ〜」という発言でわかったのだ。うん、わかりやすいね〜。

「竜希」

しばらく待っていると空ちゃんが現れた。手には刀を持っている

「やあ空ちゃん!」

「すまん。待たせたか?」

「うんにゃ?そんなに待ってないよ〜」

「・・・そ、そうか／＼／＼」

俺が笑顔を向けると空ちゃんは頬を赤く染めた。

(あ〜・・・昨日の反応見た時思ったけどもしかして空ちゃん俺のこと・・・どくしよ?)

自分で言うのもアレだが俺は結構鋭いほうだ。だから空ちゃんが俺に向けている感情についても分かっている。

(・・・まあとりあえず今は気づかないふりかな?空ちゃんの好意は嬉しいけど・・・それを受けられるほど心にゆとりはないしね)

気づいていながら応えないとは・・・我ながら最低だな。空ちゃんにも・・・よくむちゃんにも本当に申し訳なく感じる。

「どうした竜希?」

「へ?」

「いや、なんか雰囲気暗かったから」

「・・・なんでもないよ〜。気にしないで〜」

俺はニヘラツと笑みを浮かべて誤魔化した。

「ならいいが・・・じゃあ本題に入るか。ほら」

空ちゃんは手に持った刀を俺に差し出した。

「これがお前のために削ったお前だけの刀だ。受け取れ」

「・・・うん」

俺は空ちゃんから刀を受け取った。

「・・・うん。いい刀だね」

「刃も見えないのにわかるのか?」

「わかるよ。この刀からははつきりとした強い力を感じる。これなら俺の能力を受けても耐えられるだろうね」

本当にいい刀だ。外の世界じゃあこれほどの業物は存在しない。それも間違いなく妖夢ちゃんが持つ楼観剣以上の刀だ。

スラッ

鞘から少し抜いくと黒い刃が現れた。

「へえ、黒刀なんだ」

「お前には黒が似合いそうだったからな。だから黒刀にしたんだ」

「そうなんだ。まあ確かに『黒』は好きだよ」

『黒』は・・・あいつと同じ色だからね」

「なら良かった」

「アハハ。本当こんなにいい刀削ってくれてありがとうね」

「礼なんていらねえよ。私はただ約束守っただけだから」

「それでも、だよ」

「・・・ああ」

空ちゃんはプイツつとそっぽを向いてぶつきらぼうに答えた。恥ずかしいのかな?

「と、そういえば空ちゃん。この刀に名前はあるのかな?」

「ねえよ。私がやるのは刀を削ることだけだからな」

「そうなんだ。それじゃあこれ俺が名前を付けてもいい?」

「ああ。好きにしろよ」

「ん。じゃあそうさせてもらうね」

「この刀の名前・・・そうだな・・・」

「・・・よし決めた!この刀の名前は『絶柵(ぜつき)』だ」

『絶柵』？変わった名前だな。なんで絶柵なんだ？」

「…………それがこの刀に込めた願いだからね」

「願いの？」

「そ」

柵（しがらみ）を絶する。この刀は…………俺の『最強』という呪縛を消すためのものだからな。俺にとってはこの名前が一番しっくりくる。

「まあ持ち主であるお前が決めたんだからそれでいいんじゃないやね？」

「うん。さて、それじゃ俺の本題は終わったことだし次は…………空ちゃんの話の話を聞こうかな？」

俺は刀を腰に差しながら空ちゃんに言った。

「…………気づいてたのか？」

「そりゃあね。わざわざ俺ひとりで来るように指示したんだから気がつきもするよ…………俺に何か聞きたいことがあるってね」
それ以外に一人で来いなんて理由は思い当たらないからね。

「…………そうか。思ったよりも察しいんだな」

「まあね。それで？空ちゃんは俺に一体何を聞きたいのかな？」

「……………」

俺が尋ねても空ちゃんは何も答えない。黙って神妙な面持ちで下を向いている。

「…………聞きづらいことなの？」

「…………別に。そういうわけじゃ…………」

「なら話してくれるかな？」

「…………ああ」

空ちゃんは顔を上げて俺を正面から見据えた。

「聞きたいことはいくつかあるがまずは…………お前が幻想郷に来た理由について教えてもらう」

…………俺が幻想郷に来た理由か。

「昨日お前は事情があって幻想郷で暮らしてると言っていた。その事情というのは…………紫黒の使命か？」

「……………」

紫黒の使命……そうか、そういえば空は紫黒のことを知っていたんだったな。

「お前は紫黒の使命を果たすために……」

奴を殺すために幻想郷にいるのか？」

「……」

「答えろ、紫黒竜希」

空ちゃんは鋭い目つきを俺に向けて聞いてきた。

「……違う。俺が今幻想郷に居るのは紫黒の使命とは何も関係ない。第一俺は紫黒の使命なんてもものには欠片も興味を持っていない」「それほどの力を……奴を殺せるほどの『力』を持っているのか？紫黒にとって何よりも必要な『力』を持っているのに」

「ああ」

そうだ。俺は紫黒の使命にはなんの興味もない。そもそも俺はたまたま紫黒の人間として生まれただけであって紫黒の人間であることに何も感じてなどいない。

「……そうか」

空の顔から疑念の表情が見て取れた。

「信じきれないという顔をしているな」

「そりゃあな。今までに私が会った紫黒の人間は自慢げに自分たちは

奴を殺すための無二の存在だと言い張っていた。竜希は今までの紫黒の人間とは違うというのは昨日の戦いでわかったがそれでもお前が紫黒の人間であることには変わらん。だからお前の言うことは信用しきれん」

「……これは手厳しいな。全く、俺の先祖は今まで空に何をしていたんだ？」

本当に……思わず頭を抱えなくなる。

「安心しろ。俺の言ったことに嘘偽りは一つもない。俺にとって紫黒の使命なんてものは気に止める価値もないどうでもいいものだ。ついでに言う空はひとつ勘違いしている」

「勘違い？」

「お前は紫黒の使命が奴を殺すことだと思っっているな？」

「……実際にそうだろうか？」

「まあ使命を果たせば結果的にはそうなるだろう。だが殺すこと自体が紫黒の使命というわけではない。紫黒の使命は……万が一の時に奴を止めること。それが他ならない奴自身が紫黒に与えた使命なんだよ」

「奴を止めることが……」

「そうだ。それが紫黒の本来の使命だ。もともと空の話を聞く限り昔の紫黒はその使命をはき違えて理解していたようだがな」

本当に……そんなんじゃあ紫黒に使命を与えた奴は頭を抱えていただろうな。幻想郷から去るきっかけを作った300年前の当主に関しては特に。

「というわけで俺はあいつを殺さねえよ。殺すつもりなんてない」

（まあ……ミコトたちに仇なさないならの話だがな）

「……わかった。その言葉信じてやるよ」

「……サンキュ。さて、聞きたいことはいくつかあると言っていたし、他にも聞きたいことはあるんだろ？言ってみろよ」

「……それじゃあ遠慮なく。私にお前に刀を創ったわけだが……」

お前は本当に刀を必要としていたのか？」

!?

「……………どう言う意味だ？」

「……………私は剣士だ。だがそれ以前に……………刀でもあるんだ」
「……………それがどうした？」

「私自身が刀だからこそわかるんだ。お前は……………刀を嫌って
いることがな」

「……………」

「お前が刀を見る目は嫌悪の目だ。お前は剣士でありながら刀を何よりも嫌っている。違うか？」

……………刀だとそんなこともわかるのか。

「……………その通りだよ。俺は刀が嫌いだ。刀だけじゃなく、武器そのものや戦闘術、戦いそのものを心の底から嫌ってる……………自分の力もな。憎んでさえいるよ」

「……………ならばなら刀を求めた？なぜ嫌っているものを……………憎んでいるものを求めた？それ以前になぜ戦いそのものを憎んでいるのにお前は『最強』なんだ？」

「……………さあな」

「え？」

「どうして俺が『最強』かだなんて……………そんなの俺自身でもわからねえよ。正直言って……………望んでもいないものにさせられて迷惑してるんだ」

……………力を求めて必死に修行している者もいるというのに我ながら失礼な物言いだな。

「……………刀を欲したのは俺の『求め』を叶えるために必要だからだ。その為に空に俺に見合う刀を創ってもらった」

「竜希の『求め』？それって一体なんなんだ？」

俺の『求め』

俺が昔から何よりも求め、焦がれている願い

それは……………

「……………俺よりも強い存在に剣士として敗北すること。それが……………俺にとって最も大切な『求め』だ」

「敗北することが……………求め？」

「……ああ。俺は……『最強』なんかでいたくないんだ。『最強』であることは……俺にとって何よりも忌むべきことだ」
「……」

「でも俺は『最強』でなければならぬ。それが俺の存在理由で……俺にかけられた呪縛だから。俺にはそれしかないから」

「……竜希」

「だからこそ俺は……壊して欲しいんだよ。俺にかけられた『最強』という呪縛を。俺よりも遥かに強い存在によって」

たとえそれによつて……俺の存在理由が消えてしまつても構わない。『最強』でいることよりも遥かにマシだ。

「……俺は『最強』の剣士だ。だからこそ『最強』の剣士として敗北するためには俺に見合った刀が必要だった」

「……そうか。じゃあその求めが竜希がこの幻想郷にいる事情なのか？」

「ああ。『最強』の剣士として負けること、その『求め』を叶えるために俺は幻想郷に来たんだ。そして……その求めを叶えてくれるであろう存在に出会うことができた」

「竜希の『求め』叶えてくれるであろう存在？それって……誰だ？」

「……魂魄妖夢だよ」

「何？」

「彼女が……魂魄妖夢こそが俺の『求め』。俺を上回る可能性を持った存在だ」

「魂魄妖夢……あいつが？」

空は困惑しているような表情になった。おそろくなぜ妖夢が『求め』であるのかがわからないのだろう。

「どうして妖夢が……つて思つてるだろ？」

「……ああ。正直あいつはお前の『求め』になるような存在だとは思えない」

「まあそうだな。今の妖夢はまだまだ弱いからそう思うのは無理もない。だが……俺にはわかるんだよ。鍛えれば妖夢は俺よりも強

くなる可能性がある」

「なんでそんなことを言えるんだ？根拠でもあるのかよ？」

「……俺はこの幻想郷に来て一番初めに妖夢と戦った。その時俺は……妖夢の初撃を躲したんだよ」

「初撃を躲した？」

「ああ。それが根拠になった」

「どういうことだ」

「……俺は戦う時に必ず相手の初撃を何も考えずに本能で対処すると決めている」

「本能で？どうしてだ？」

「相手の力がどれほどのものかを見定めるためだ。そして俺は妖夢の初撃を防がずに躲した。つまり妖夢の斬撃は万が一でも防ぎきれずに受けてしまったら危険だと本能的に察知したんだ」

「それが……根拠か？」

「ああ。その時に俺は思ったよ。妖夢ならば俺を超える存在になり得るのではないかと」

「……そうか」

空は再び顔を下に向けた。

「……どうした空？」

「……私じゃあダメなんだな」

「え？」

「私の初撃はお前に防がれた。それはつまり……私はお前の脅威にならないって……私じゃお前は越えられないっていうことだよな」

「……ああ、そうだ。空は確かに強いよ。昨日言ったとおり今まで俺が戦ってきたものの中では一番だ。でも……君の実力のそこはもう知れている。君では……俺には勝てない」

「……そうか」

空は表情をさらに暗くさせた。おそらく……屈辱なのだろう。剣士としてのプライドが傷つけられたようなものだから。それと同時に悔しいのだろう。俺が言っていることが事実だとわかって

しまうから。

「……………他に聞きたいことはあるか空？」

「……………いや、特にない」

「そうか……………それじゃ俺はこれで失礼させてもらってもいいかな？」

俺は口調と雰囲気をいつものものに戻して空に訪ねた。

「……………ああ。もういいぞ。話を聞かせてくれてありがとな」

「うん。それじゃあ行くね。また今度会った時は一緒に遊ぼ。きっと楽しいからさ」

俺は今できうるかぎりの明るい口調で空ちゃんにそう言った。

「……………おう、そうだな」

空ちゃんは笑って返事を返してくれた。

「それじゃあまたね」

「ああ、またな」

俺は空ちゃんの下から去った。

第72話

side 竜希

空ちゃんから刀を受け取り、話も終えて白玉楼に戻る道中。

「竜希！」

「んにゃ？おおっ！魔理沙ちゃん！」

箒に乗った魔理沙ちゃんがこっちに来た。

「よう！こんなところで何やってるんだよ！」

「うん。ちよつと野暮用があつてね。今から白玉楼に帰るところだよ。魔理沙ちゃんは？」

「私もちよつと用事が……つとそうだ！竜希今から帰るところってことは暇だよな？」

「え？まあ確かに暇って言えば暇だけど……」

今から帰つても夕飯の準備までにはまだ時間あるし。掃除とかの他の仕事も出かける前にあらかた終わらせたい。

「なら付いてこいよ！面白いものが見れるぜ！」

「面白いもの？何それ？」

「それはついてからのお楽しみだ！行こうぜ！」

そう言つて魔理沙さんは箒に乗って飛んでいく。

「全く、せつかちだね」

仕方なく俺は魔理沙ちゃんについていくことにした。

「……っていうか魔理沙ちゃん！俺空飛べないからもつと低く飛んで！」

「あ、そういえば俺魔理沙ちゃんに聞きたいことがあるんだけど」

目的の場所に向かう道中、竜希が声をかけてきた。

「ん？なんだぜ？」

「あのさく……魔理沙ちゃんってミコちゃんのこと好きなの？」

「ふえ!?」

なっ!? た、竜希のやつ……いきなりなんてこと聞きやがる!

「その反応からして凶星だね〜♪」

「な、何言ってるんだぜ竜希! そんなことあるわけ……」

「ないの〜?」

「うっ、そ、それは……あるけど」

私は自分でもわかるぐらいあからさまに小声になった。

「アハハ! やっぱりそうか!」

「う、うう……た、竜希。このことはミコトには……」

「わかってるって! そんな野暮なことほしないよ〜」

「ほ、本当だな? 絶対に言うなよ?」

「大丈夫大丈夫〜」

い、イマイチ信用ならないな。ミコトも竜希の言うことは聞き流せ
と言っていたし……不安だぜ。

「ねえねえ、魔理沙ちゃんや。もしかしてだけどさく咲夜ちゃんもミ
コちゃんのことが好きだったりする?」

不安に駆られている私の胸中なんて知ったことではないといった
感じで竜希はニヤニヤと笑みを浮かべて聞いてきた。

「あ、ああ。多分そうだと思うぜ? たまにだけどミコトを見る目が妙
に艶っぽい時があるしな」

あ、やば、これ勝手に言ったらまずかったな? ……すまな
いぜ咲夜。

「ほうほう、やはりか……ミコちゃんはモテモテだね〜」

竜希はまるで自分のことかのように嬉しそうに優しい笑みを浮かべている。

「……随分と嬉しそうだな」

「ん？そりやあね〜。大切な親友がモテモテなんだから嬉しいに決まってるよ〜」

「へえ〜」

親友っていうのはそういうもんなのか？もしも霊夢がモテモテだったら……なんかムカつくな。やっぱりよくわからないぜ。「で？魔理沙ちゃんはミコちゃんのどこを好きになったの？その辺りのことじっくり教えてくれないかな〜？」

先程までの優しい笑顔から一変して竜希はいやらしい笑みを浮かべて聞いてた。

「そ、それは………ノーコメントだぜ」

「それは受け付けませくん！さあさあ白状して♪」

（そ、そんなこと恥ずかしくて言えるわけがないぜ！）

「………撤退!!」

私はスピードを上げて竜希から逃げた。

「逃がすか!」

竜希もまたスピードを上げて追ってきた。私と竜希は目的地に着くまで追いかけてつこうをすることになった。

「ハアハアゼイ……」

「すごい息切れしてるね魔理沙ちゃん」

「ハアハア……あ、当たり前……だろ。ゼイ……あ、あんだけスピード出したんだから……ハア……疲れるんだぜ」

「え？飛んでるんだから体力使わないでしょ？それでも疲れるの？」

「ハア……ま、魔力を使うと……そ、それなりに疲れるんだぜ」
「へえくそうなんだ」

便利だと思っただけど空を飛ぶっていうのも大変なんだね。

「というか……なんでお前は息ひとつ切らしてないんだよ？」

「鍛え方が違いますから！」

「……あっそ」

「それよりもさく。目的地っていうのはあそこのこと？」

そう言つて俺は目の前にある大きな紅い屋敷を指差した。

「ああ……そうだぜ」

息が整つてきた魔理沙ちゃんが答えた。

「そつかく……見事なまでに紅いね。目がチカチカするよ」

「確かにな。ミコトも初めて来た時には同じようなこと言つてたぜ。

私はもう慣れたけどな。ミコトもそうみたいだし」

もう慣れたね……なんだか慣れると視力が落ちるような気がするなく。

「ちなみに、あそこは咲夜が働いてるところでもあるぜ」

「へく咲夜ちゃんはあんなに立派なお屋敷でメイドをしてるんだく。

咲夜ちゃんほどの手練をメイドにしているんだからあの屋敷の主は大層立派な人なんだろうねく」

「……立派ねく」

「ん？」

魔理沙ちゃんは意味深な笑みを浮かべて呟いた。

「まあいいや、それよりも早く行こうぜ」

「はいはい」

俺は魔理沙ちゃんに促されるままに屋敷の正門へと歩を進めた。

それにしても面白い物つて一体何かなく？

「おっ？コイツはちょうどいいぜ」

正門が見えてきたあたりで魔理沙ちゃんはそう呟いた。

「ちょうどいい？何が？」

「さっき言った面白いものがあるんだよ。ほら、あそこ」

魔理沙ちゃんが指差す方向を見るとそこには……

「ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ……」

呪文のように謝罪の言葉を唱えながら土下座をする赤い髪の女性と

「中国？あなたは一体どれだけ言い聞かせればわかってくれるのかしら？」

ニコニコととてもない黒い笑顔を浮かべ、ナイフを構えながら赤髪の女性を見下ろす咲夜ちゃんと

「ま、まあまあ咲夜さん。少し落ち着いてください」

執事服に身を包み苦笑いを浮かべながら咲夜ちゃんを宥めるミコちゃんの姿があった……って、はあ!?

「ミ、ミコちゃん!？」

俺はあまりのことに大声でミコちゃんの名を叫んでしまった。

「ん？おや、竜希さんじゃないですか。それに魔理沙さんも」

た、竜希さん!?

「よっ、ミコトー！」

「こんには魔理沙さん。今日もパチユリーさんに本を借りに来たの

ですか?」

「まあな!」

「ところでなぜ竜希さんと一緒なんですか?」

「ああ、来る途中で会ったから連れてきたんだぜ」

「そうなんですか」

「……………エツト……………今俺の目の前にイルノハ一体ダレナ
ンダロウ?なんか俺のシンユウに物凄く似てるんだけどキノセイか
なく?」

「……………竜希さん?」

「へ?」

若干頭が混乱している俺にミコちゃん似の誰かが声をかけてきた。

「先程からボクっつとしていますが……………どうかなさったのですか?」

「い、いやなんでもないけど……………っっていうかさ」

「なんですか?」

「……………君は一体誰かな?なんか君ミコちゃんっていう俺の親友
によく似てるんだけど?」

「?何を言っているんですか?私そのあなたの親友のミコトですよ
?」

「……………PARDON?」

「だから私はミコトです。というよりなぜ英語で聞き返すのですか
?」

「……………この人が……………ミコちゃん?俺の親友の……………」

ミコちゃん?

「……………ええええええ!」

う、嘘お!?この人本気にミコちゃんなの!?

「急に大声を出したりしてどうしたんですか?」

「いやいやいやいやいや!大声も出したくなるっつうの!」

「なんでですか?それよりも竜希さん、空さんから刀は受け取れたん
ですか?」

「何事もなかったかのように流すなよ!っっていうかさん付けするな!
敬語やめろ!」

「ミコトもミコトで、あれはものすごく楽しんでるわね」
「だな」

ミコトのやつすっげえにニコニコしてるからな。竜希をからかうのを心から楽しんでるって感じだぜ。

「あ、あのく……咲夜さん、魔理沙さん」

「あら？いたの中国？」

「いましたよ！というかさつきまで私に説教していたじゃないですか！」

「そういえばそうだったわね。ごめんなさい、忘れていたわ。今から説教の続きをしてあげるわ」

「し、しまった！」

「それじゃあ中国………覚悟しなさい♪」

「い、いやあああああ！」

こっちはこっちで咲夜が美鈴の説教を始めた。

「ハハハ、本当に賑やかな連中だぜ」

第73話

side 竜希

あの後しばらくして、ミコちゃんは咲夜ちゃんと魔理沙ちゃんと共に屋敷に入っていった。その時に屋敷の主（たしかレミアちゃんって言ってたっけ？）に挨拶したらどうだと聞かれたが丁重にお断りした。だって……………」

「はあはあはあ……………」

そんな余裕ないくらいに疲弊してしまったから。

「つ、疲れた……………なんかものすごい疲れた。昨日空ちゃんと戦った時よりもものすごい疲れた」

なんなのあのミコちゃん？確かに執事姿は似合ってたけど……………キアラが違いすぎるよ。あんな風に俺に親切かつ敬意を持って接してくれるミコちゃんなんミコちゃんじゃないよ。ミコちゃんも俺が戸惑うのわかっててわざとやってるし。

魔理沙ちゃん……………本当にあれのどこが面白いものなの？俺は悍まじさと恐怖しか感じなかったよ？

「あの……………大丈夫ですか？」

疲労によつて憔悴しきつた俺に赤い髪的女性が心配そうに声をかけてきた。

「あはは……………大丈夫だよ。心配してくれてありがとね。というか君もさつきまで咲夜ちゃんに説教されてたよね？大丈夫だった」

「大丈夫です……………もう慣れましたから」

そういう彼女の眼は虚ろで遠くを見ているように見えた。

「……………うん、ごめん。余計なこと聞いたみたいだね」

「あはは……………大丈夫ですよ」

……………なんだろう？彼女にはなにか俺と通じるものがあるように思えるな。

「と、そういえばまだ自己紹介してませんでしたね。私は紅美鈴。この紅魔館の門番です」

「これはどうも。俺は竜希、紫黒竜希だよ。よろしくね」

そう言つて俺は手を差し出した。

「はい、よろしくお願いします」

美鈴ちゃんは俺の握手に応じた。

(！……………この人)

「……………」

「？竜希さん？どうしたんですか」

「いやさ……………美鈴ちゃんのスベスベだなくと思つて」

「なっ!?いきなり何を言つてるんですかあなたは!」

「あ、顔赤くなつた。もしかして照れてる?」

「もう!知りません!」

美鈴ちゃんは手を離してプイツとそっぽを向いた。

「……………」

そんな彼女を俺はじつと見つめた。

(……………かなり強いな……………間違いなく空ちゃんよりも上だ。

身体能力なら多分俺と互角だろね)

俺は美鈴ちゃんの立ち居振る舞いを見て思った。おそらく彼女は

何かの武術の使い手だろう。それもかなりの使い手だ。

……………全く、幻想郷に来てまだ一週間も経つてないのに外の世

界では存在し得ないとしてもない強者が次々と出てくるなあ。幻想

郷はある意味魔境だね。

「な、なんですか?そんなにじつと見つめて……………」

俺の視線に気がついた美鈴ちゃんが声をかけてきた。

「……………別に。ちよつと美鈴ちゃんに見とれてただけだよ」

「なっ!?なんですかそれ!そんな冗談やめてください!」

「アツハハハハハ♪」

美鈴ちゃんはまた顔を顔を真っ赤にさせた。どうやら言われ慣れ

ていないようだね……………にしても、誤魔化すためとはいえこん

な口説くようなこと言うなんて……………俺は最低だな。

「……………はあ、なんだかあなたの相手をするのは疲れそうです」

「それは光栄だね」

「……………とりあえず竜希さんがいい性格をしているのはよくわかり

ました」

「．．．．．いい性格ね。まあ確かにそうかもね。そういう仮面を作ったんだから。」

「まあそれはともかくとして。竜希さんに聞きたいことがあります」
「俺に聞きたいこと？なに？」

「あなたはミコトさんの友人ですよね？」

「うん。俺はミコちゃんの唯一無二の親友だよ」

「ということは．．．．．強いんですね？」

ピリッ

美鈴は不敵な笑みを浮かべ覇気を込めた目で俺を見てきた。

「．．．．．いきなりどうしたの美鈴ちゃん？」

「ミコトさんから聞きました。自分にはとてつもない力を持ち、勝てる者など存在しないほど強い友人がいると。それって竜希さんのことですよね？」

「．．．．．ミコトのやつ、余計なことを。」

「．．．．．だつたらどうなのかな？」

「．．．．．少し、相手をしていただけませんか？」

そう言うやいなや美鈴は構えを取った。同時に美鈴から凄まじい闘気を放たれる。

（この構え．．．．．中国系統の拳法だつたっけか？．．．．．隙の少ないいい構えだ。僅かな隙を突いて攻撃すれば確実にカウンターをもらうだろうな）

「さあ．．．．．掛かってきてください竜希さん！」

「断る」

「．．．．．へ？」

まあ俺には戦う気なんてサラサラないけどな。

「こ、断るって．．．．．なんでですか？」

「俺戦うのの大嫌いだもん。だから戦わない」

「戦うのが大嫌い？」

「そ、だから美鈴ちゃんには悪いけど断らさせてもらおうね」

「そうですか．．．．．わかりました。そういうことなら仕方ありません」

せんね」

美鈴ちゃんは構えを解き、闘気を収めた。

「およ？随分とあつさりと引き下がるんだね。もつと食い下がるかと思つたよ」

「確かに戦えないのは残念だと思いましたが。戦いたくない人と無理に戦うつもりなんてありませんよ」

「へえ、意外だなあ。美鈴ちゃんは戦闘狂なのかと思つたのに」

「戦闘狂!?!どうしてそうなるんですか!?!」

「だつて会つたばかりの俺にいきなり勝負を仕掛けて来るんだもん。そう思つても仕方なくない?」

「それは………否定できませんね」

美鈴ちゃんは自覚したようでシユンとした。なんか小さい子供みたいで可愛らしいな。

「アハハ、まあともかく、俺はどうしてもつて言う理由がない限りは戦わないから。多分これから先も美鈴ちゃんと戦うことはないと思うよ。それは覚えておいてね」

「はい。わかりました」

美鈴ちゃんは素直に了承してくれた。ちゃんと聞き分けてくれる子でよかつたよ。これが空ちゃんだったら多分………戦うつて言うまで食い下がってきただろうからな。

「さて、それじゃ俺はこれで帰るとするよ」

流石にこれ以上妖夢ちゃんと幽々子さんを待たせるわけにはいかないからね。

「はい。それでは竜希さん、また」

「うん。またね美鈴ちゃん」

俺は美鈴ちゃんと挨拶を交わして白玉楼への帰路についた。

side 美鈴

竜希さんが帰って少しして……

「…………断られてしまったようですね」

「ミコトさん」

ミコトさんが私に声をかけてきた。

「屋敷に戻ったのではないのですか？」

「一度は戻りましたよ。ですが二人のことが気になって戻ってきました」

「そうなんですか。どうして顔を出さなかったんですか」

「顔を出したら竜希さんがまた狼狽えてしまいそうでしたからね。二人の会話の邪魔になるかと思ったのでやめました」

「そうですか」

それって会話してなかったら顔を出して竜希さんを追い詰めていたということでしょうか？…………前から思っていましたけどミコトさんって咲夜さんに劣らない結構なSですね。

「それよりも美鈴さんから見た竜希さんはどうでしたか？」

「…………ミコトさんの言うとおりでした。彼はとてつもなく強い。それこそ歩き方一つをもつてしても洗練されていることが隠しきれないほどに。私では確実に勝てないでしょうね」

「そうですか…………美鈴さんにそこまで言わせるだなんて流石は竜希さんといったところでしょうか」

ミコトさんは頬笑みを浮かべながらそう言った。

「ミコトさんは随分と竜希さんのことを買っているんですね」

「まあ……………たったひとりの親友ですからね」

「ふふ、そうですか……………ミコトさん、ひとつ聞いてもいいですか？」

「なんですか？」

「竜希さんは……どうして戦うことを嫌っているんですか？」

「……」

私が聞くとミコトさんは笑みを消して黙り込んだ。

「これは私の持論なんです……強者というものはえてして戦いを好むものだと思うんです。戦いを好まなければ強者にはなりえないですからね。たとえ本人がどんなに否定したとしても、心の奥底では戦いを好み、求めるものなんです。例えば……ミコトさんのように」

「……私がですか？」

「はい。以前ミコトさんと戦ったとき……あの時のミコトさんは生き生きとしているように感じました。私は長い間戦いの中に身を置いていましたのでそういうことには鋭いです。ミコトさんが自分でどう考えているのかはわかりませんが戦いを好んでいるというのは確かだと思いますよ？」

「……そうかもしれませんね」

「ですが竜希さんは……竜希さんからはそう言った感情を全く感じませんでした。ゆるい口調ででしたが竜希さんは本気で私との戦いを拒絶していた」

「……」

「正直私にはわからないんです。あれほどまでの強さを持っているにもかかわらずなぜ竜希さんが本気で戦いを拒絶しているのかが。親友であるミコトさんでしたらその理由がなにか知っているんじゃないですか？」

「……」

「どうなんですか？」

「……ええ、知っていますよ」

「でしたら教えてください」

「……なぜ知りたがるのですか？美鈴さんには関係のないことだお思いますけど？」

「確かに関係ないです。でも知りたいんです。あれほどの力を持つ強

者が戦いを拒む理由を私は知りたい」

私は真つ直ぐにミコトさんの目を見据えて言った。一切目は逸らさない。私は本気で……知りたいたいから。

「……わかりました。そこまでいうのならお教えしましょう」
ミコトさんは渋々といった様子で承諾した。

「竜希さんが戦いを嫌うのは……そこに目的も価値も見いだせないからです」

「……え？」

目的も価値も……見いだせないから。

「竜希さんは知っています。どんなに自分が強くても、どれだけ戦っても自分の心から欲するものは何も手に入らないことを……何よりも大切なものを守れないことを」

心から欲するものが何も手に入らない……何よりも大切なものを守れない……

「戦いとは自らの望みを果たすための一つの手段です。でも竜希さんは戦いによつて果たせる望みがない。だから……心の底から戦いを嫌っているんですよ」

竜希さんには戦いで果たしたい望みがない……

私は戦うことでさらなる強さを求めている。

それはこの紅魔館の門番として私を拾ってくださったレミリア様たちを守るためにだ。

それが私が戦いによつて果たしたい望み……心からの願い。

でも竜希さんには……そんな望みが……ない。

それは一体……どんな……どんな……

「……まあ強いてあげるとしたら一つだけ望みはあるのですけどね」

「え？」

ミコトさんは小さな声で一言付け足した。

「……すみません美鈴さん。私はそろそろ屋敷に戻りますね。次の仕事がありますので」

「は、はい。わかりました。話してくれてありがとうございます」

「いえ、それでは失礼いたします」

ミコトさんは屋敷に戻っていった。

「……竜希さん」

私は竜希さんの気持ちはわからない。おそらく一生知ることもないと思う。でも……

(なんででしょう？竜希さんのことを考えると……少し胸が痛いよ
うな……苦しいような……いったい私は……)

私は心の中に芽吹いた思いに戸惑っていた。

「……」

特別編く年越しく

side ミコト

「霊夢、境内の掃除終わったぞ」

「ありがと。それじゃあお守りの在庫数えるの手伝ってくれる？」

「わかった」

今日は12月31日。つまり大晦日だ。神社にとって大晦日というのはえてして忙しいものであり、この博麗神社もまた例外ではない。普段は参拝者など滅多に来ないが年越し、三が日にはそれなりに忙しくなるくらいには人がやって来るらしい。

「マスター」

「……」

「クラマ、シラマ」

お守りの在庫を数えていると用を頼んでいたクラマとシラマが帰ってきた。

「参道の整備とはびこっていた妖怪の退治終わりました」

「……(コクコク)」

「ありがとう、(っ)苦労だったな」

俺は仕事を終えた二人の頭を撫で労った。

「いえ」

「♪」

2人は気持ちよさそうに目を細めた。やはり元々猫だったからか頭を撫でられるのが好きなようだ。

「もう戻ってもいいぞ」

「はい。戻りますよシラマ」

「……(コクン)」

クラマとシラマは鈴になって俺の右手に巻き付いた。

「よし、これで参拝客も多少は来やすくなるだろう」

人里から神社への道は結構荒れておりその上妖怪も出る。参拝客にとつては辛いだろうと思っただので俺はこの期にクラマとシラマに頼んで参道を整備してもらったのだ。

「ありがとうね、ミコト」

「やったのはクラマとシラマだよ礼なら二人に言ってくれ」

「そうね。ありがとう、クラマ、シラマ」

霊夢は俺の右手についている鈴に頬笑みを浮かべながら礼を言った。

チリン♪

そしてそれに応えるように鈴が音を鳴らす。

「どういたしまして……だつてさ」

「ふふふ、それじゃあ残りの仕事も終わらせましょう」

「そうだな」

俺と霊夢は作業を再開させた。

「それにしても霊夢、随分と頑張ってるな」

「そう?」

「ああ。それこそ異変を解決するときよりも張り切ってるように見えるぞ」

「ふくん……まあそうかもしれないわね。この時期は神社にとって一番の書き入れ時だしそれに……守矢神社には負けたくないから」

「ははは……そうだな」

まあ今年は守矢神社っていうライバルがいるもんな。張り切る気持ちはわかる。……正直信仰では博麗神社圧倒的に負けてるし。

「ふふふ……絶対に……絶対に早苗には負けないわ」

霊夢は不気味に笑い出した。その目は少し据わっている。

「……霊夢。その笑顔ちよつと怖いんだが」

霊夢は何故か早苗に強烈なライバル意識を抱いている。はじめは同じ巫女だからだと思っていたがどうやらそういうわけではないらしい。本当にどうしてなんだろうか?

「というわけだから参拝客を得るためにできることは全部やるわよミコト」

「了解。あ、そういえば霊夢、聞きたいことがあるんだが」

「なに？」

「博麗神社ってなんの神様を信仰しているんだ？」

俺はずっと疑問に思っていたことを聞いた。この博麗神社に来てもうすぐで一年になるが俺は今だにこの博麗神社が信仰している神を知らなかった。

守矢神社には神奈子と諏訪子さんという二人の神を信仰しているが博麗神社はどうなのだろうかと純粋に疑問に思った。

「いないわよ」

「……え？」

「この博麗神社には信仰する神様はいないわ」

「……REALLY？」

俺はつい英語で聞いてしまった。

「りあ……？なに言ってるのミコト？」

と、そうだった。霊夢は英語全くわからないんだったな。

「……それは本当か？という意味だ」

「だったらはじめからそう言いなさいよ」

「すまない、あまりのことだったからついな。というかなんで神社なのに信仰する神様がいないんだ？」

「正確に言うといけないというよりは知らないと言ったほうが正しいわね」

「知らない？」

「ええ、私はこの神社に何が祀られているのか何も知らないのよ。誰からも聞いたことがないし記録が残ってるわけでもないから」

「……そうか」

それって……神社にとっては致命的じゃないか？神様がいないと信仰が集まらないし……そりゃあ参拝客も少なくなるはずだ。今は守矢神社の分社が建てられて多少は何とかなってるんだろうけど。というか神様いないのに博麗神社はどうやって存続しているのだろうか？

「霊夢、それって結構由々しき問題だと思うのだが……」

「そうなの？」

霊夢はコテンと首をかしげて聞き返してきた。

「神様がいないってというのは信仰が失われていることと同義だからな。致命的だ」

「言われてみればそうね…………お賽銭が入らないし」

そう言つて霊夢は顎に手を当て真剣に考え込む仕草を取った。

「いや、そういうレベルの問題ではないんだが…………」

博麗神社…………本当に大丈夫なのだろうか。というか俺は幻想郷に来たとき神様がいないというのなら一体誰何に対して願ったのだらうか？いや…………考えるのはやめよう。なんとも言えない気持ちになるし。

(…………とりあえず仕事しよう)

俺はともかく仕事に没頭することにした。

時は過ぎ、新たな年を迎えると、数多くの参拝客が初詣にやって来た。やって来たのだが…………

「…………ねえミコト」

「なんだ？」

「…………今、この神社には私が巫女になってから最も多くの数の参拝客が来てるわ」

「よかったじゃないか」

「まあ確かにそれはいいんだけど…………なんで…………なんで…………

ほとんど妖怪なのよ!」

そう、参拝に来ているのは殆どが妖怪だ。人間は全体の2割程度しかいない。

「……うん。まあ仕方がないかな?」

「どうしてよ!」

「いやだって……俺たちの知り合いつてほとんど妖怪だろ?」

「それは……そうだけど」

実際俺が幻想郷で知り合った奴つてほとんどが妖怪なんだよな……そりゃあ人間の知り合いも多少は居るけど妖怪の方がずっと多いし。まあ人間の知り合いにしたつて人外っぽいのはっかだけど。咲夜とか輝夜とか永琳とか妹紅とか。あと……

「あけおめく!!参拝に来たよくミコちゃん!」

「……出たな、人外中の人外」

俺は参拝にやって来た竜希に対して言い放った。

「いきなりすつげえ辛辣!?俺まだ何もしてないでしょ!」

「気にするな。こつちの話だから」

「気にするよ!」

「はあ……新年早々五月蠅いなお前は」

「誰のせいだよ!」

「竜希」

「……新年になつてもミコちゃんは平常運転だ。俺ウレシイナ」
竜希は苦笑いを浮かべながら言った。

「そうか。それは良かった」

「ミコトく、あけましておめでとう」

「おめでとうございます、ミコトさん」

竜希と共に参拝にやって来た幽々子と妖夢が挨拶してきた。

「ああ。あけましておめでとう、幽々子、妖夢」

「ちよつと、どうしてミコトには言ってお私には何も無いのよ」

「あら？ごめんなさい。忘れてたわ。あけましておめでとう、霊夢」

「おめでとうございます、霊夢さん」

「あきらかについてじゃない・・・」

「まあまあ霊夢。参拝に来てくれたんだからいいじゃないか」

「まあそうね」

「そうそう！早ちゃんの守矢神社じゃなくて霊夢ちゃんとミコちゃん
のいる博麗神社に来てあげたんだから感謝してよ」

「二竜希に感謝するつもりは一切ない」

俺と霊夢は竜希に向かって同時に言った。

「うわ・・・新年早々息ぴったりだね二人とも」

「ふふふ、まあ守矢神社にも後で参拝に行くんだけどね」

「・・・は？それどういうことよ？どうしてうちに参拝した後
に守矢神社に参拝に行くのよ」

「しよがないでしょう霊夢ちゃん。早ちゃんとも付き合
いがあるんだから」

「まあ俺達が止める権利はないから別に構わないけどな」

「そうそう。あ、よかつたらミコちゃんも行く？」

「そういうわけにはいかないだろ。俺は博麗神社の人間
なんだから」

「ですよね。さなちゃん残念がるだろうな」

まあ可能なら俺も行つてあげたいと思うのだが・・・流石にそ

れは霊夢と博麗神社に対してに失礼すぎだしな。

「そんなことよりも3人共参拝は済ませたんだらうな？」

「ええ、先程終えました」

「ちちゃんとお賽銭入れたでしょうね？」

「アハハ。心配しなくてもちちゃんと入れたよ」

「ならいいわ」

「霊夢は本当にブレないわね〜」

「本当にな。まあそれでこそ霊夢らしいが。」

「別にいいでしょ……と、そうだ。せっかくだし3人共おみくじでも引いてみない？今年最初の運試しとして。もちろん代金は貰うけど」

「霊夢が3人に提案した。」

「おみくじですか……」

「ふふ、いいわね。引きましようか」

「そうですね。竜希さんもいいですか？」

「え？あ〜……うん。いいんじゃないかな？」

「竜希は妖夢の問いに歯切れ悪く答えた。」

「竜希さん？どうかしたんですか？」

「いや、別にどうもしてないけど……」

「どうもしてないなんて無いだろ？素直に言ったらどうだ？おみくじが好きじゃないってさ」

「え？そうなんですか竜希さん？」

「……うん。まあね」

「何か理由があるのかしら？」

「……昔からさ、俺っておみくじ引くと……大凶しか出ないんだよね」

「……え？」

「おみくじにかけては俺って本当に運が全くとっていいほどないんだよね……」

「確かにな。俺は竜希のおかげでおみくじには本当に大凶があるんだって知った。」

「……俺にとっておみくじは軽いトラウマだよ」

「それはその……なんというか……心中察します」

「……ありがとうよくむちゃん」

「なんかいたたまれない空気になったな。」

「でもまあここは外の世界じゃなくて幻想郷だ。今までとは違うかも

しれないぞ？試しに引いてみるよ」

「う、うん……そうだね。ちなみに聞くけど博麗神社のおみくじには大凶ってある？」

「……フツ、喜べ竜希。博麗神社のおみくじは……」

「もしかして大凶ないの？」

竜希は目を輝かせて聞いた来た。

「……すべての結果が同じ数だけ用意されている」

「それむしろ確率が上がってね!?何を喜べばいいの!？」

「大凶が出る確率と大吉が出る確率が同じなんだ。喜べよ」

「俺は補正がかかっているから大凶の確率が跳ね上がっているんだよ！」

「あくもう。つべこべ言わずに引きなさいよ」

霊夢はおみくじ棒が入った箱を差し出してきた。

「くそ……こうなりややけだ！引いてやる！」

竜希はおみくじ棒を引いた。

「これだ！38番！」

「私は22番です」

「私は15番よ」

「38に22に15ね。ほら」

俺は結果の書かれた紙を3人に渡した。

「あ、私は中吉ですね」

「私は大吉よ」

「本当ですか？すごいですね幽々子様」

「ふふつ、ありがとう妖夢」

「……まあ実際どれも確率は同じだからそこまですごくはならないんだけどな。」

「それで……竜希さんはどうだったんですか？」

「……」

竜希は黙り込んで答ええない。

「も、もしかして……大凶だったんですか？」

「……や」

「やっ」

「やったー！ー！ー！！」

ガバツ！！

「みよん!?」

竜希は勢いよく妖夢に抱きついた。

「ちよ……竜希さん／＼／」

「よくむちゃん……俺やったよ！」

妖夢を抱きしめる竜希の手に握られたおみくじには……
と書かれていた。

「とうとう……とうとう大凶の呪縛から解放されたよ！」

「わ、わかりました！嬉しいのは本当によくわかりましたから離してください!!」

「うふふ」

妖夢は恥ずかしさから顔を真っ赤にして竜希に訴えかけた。その様子を幽々子は微笑ましそうに見ている。

「……ねえミコト」

「なんだ霊夢？」

「……私凶のおみくじ引いてあそこまで喜ぶ人を始めて見るわ」

「ああ、俺もだ。多分これから先も見ることはないだろうな」

「そうね」

よほど嬉しかったのだろうな。あいつ今素で喜んでるよ。

にしても……大凶の呪縛から解放されたか……

これを期にあいつの……『最強』という呪縛から解放されたらいいんだがな。

まあその件は妖夢に託すでしょう。

しばらくして参拝客も減ってきて仕事もひと段落したので、俺と霊夢は休むことにした。

「ふう……流石に疲れたわね」

「朝から働きっぱなしだったからな。無理もないさ」

「そうね。ミコトもお疲れ様」

「ああ……ふわあ……」

「ふふ……眠そうねミコト」

「まあ……ちよつとな」

朝から今までほとんど休みを取っていなかったからな。流石に眠くもなる。

「なら少し寝ましようか。朝になったらまた参拝客が来るでしょうから、寝れる時に寝たほうがいいわ」

「そうだな。それじゃあ寝るか」

俺は朝まで少し眠ろうと自分の寝室に向かおうとした。すると……

「待ってミコト」

霊夢が俺の服の裾を掴んできた。

「霊夢？」

「その……ミコトと一緒に寝てもいい？」

霊夢は頬を赤らめ上目遣いで聞いてきた。

「……いいよ。それじゃあ行こうか」

「うん……」

俺は霊夢とともに寝室に向かった。その間霊夢は俺の服の裾をずっと掴んでいた。

寝室の布団を引いて俺たちはそこに横たわった。背中合わせとなる体制をとっているため背中に霊夢の体温を感じる。

「……なあ霊夢」

「何？」

「霊夢はこの神社に神様がいないって言ったよな？」

「ええ、言ったわね」

「それは神社にとって致命的だ。だからさ、俺考えたんだけど……いないなら創ったらどうかかな？」

「創る？それって神様をつていうこと？」

「ああ。昔どつかで聞いたことがあるんだ。神様つてうのは人の願いと信仰によって生まれることもあるつてさ。だから俺達が願えばこの博麗神社に神様が出来るんじゃないかって思う」

「なにそれ？随分と都合がいいわね……でもいいかもしれないわい」

「だろ？」

「ふふ……それで？なんの神様を創るのかはもう決まってるの？」

「決まってるよ。この博麗神社の神様は……絆の神様だよ」

「絆の……神様？」

「ああ。俺はさ外の世界では忌み嫌われ、誰からも拒絶されていた」

俺は目を閉じ、昔のことを思い出しながら言った。

「でもこの博麗神社に来てからはいろんな人に出会えた。俺を必要だと言ってくれる人ができた。俺が……一緒にいたいと思える

人ができた。これって凄いことだと思うんだ」

霊夢をはじめとするこの幻想郷で出会ったかけがえのない大切な人思い浮かべながら言う。

「ミコト……」

「だから……俺が幻想郷で一番最初に訪れたこの博麗神社には……絆の神様がいてもおかしくないと思った」

「それで……」

「どう……かな？」

「……いいんじゃないかしら？この博麗神社の神様は絆の神様……決まりね」

「ああ」

「……ミコト」

霊夢は俺を後ろから抱きしめてきた。

「霊夢？」

「今年も……ううん、今年だけじゃない。来年も再来年も……10年後も50年後も……ずっとずっとよろしくね」

「……ふふっ、あんまり先のこと話すと鬼が来て笑われるぞ？」

「萃香鬼ならよく来てるじゃない」

「ははは、違う……こちらこそよろしく、霊夢」

「ええ」

霊夢は抱きしめる力を強くした。

この日、幻想郷は新たなる年を迎えた
そして博麗神社に『絆の神様』が生まれた
今はまだ誰も知らないけれど・・・
いつか幻想郷中に知れ渡るだろう
博麗神社は絆の神様を信仰していると

「あけまして、おめでとーございます」

第74話

side 妖夢

竜希さんが刀を手に入れて4日たったある日……

「はああああー！」

私は両手に持った刀で竜希さんに斬りかかる。

「アツハハハハ！甘い甘い！」

しかし竜希さんはそれを余裕の表情で躲す。

「まだです！幽鬼剣「妖童餓鬼の断食」!!」

めげずに私はスペルカードを発動して連続で斬りつけるが……

「うーん……相変わらずいい太刀筋だねー!!」

竜希さんには一太刀もかすりもしない。

「はあはあ……」

「……もう終わり？なら……こっちからいくぞ」

竜希さんの身にまとう空気が張り詰めたものにガラリと変わった。

そして抜刀術の構えをとり私に接近してくる。

「させません！」

私はそれを受け止めるべく刀を構える。

ヒュン!!

竜希さんは抜刀する。が……

「え？」

私が構えた刀にはくるはずの衝撃がこなかった。そして……

スツ

「!?」

「勝負……ありだ」

私の首筋に黒い刃が添えられる……竜希さんの右手によって

抜刀された刀の刃だ。

「……私の負けですね」

「……アハハ、これで俺の24勝目だね」

竜希さんは雰囲気をいつものそれに戻し、納刀しながら言った。

「まさか右手で抜刀するなんて……それも飛天御剣流の技の一つ

「なんですか？」

「そ、飛天「偽龍閃」。利き腕で抜刀をするふりをして逆の手で抜刀する技だよ。タイミングをずらして相手のガードをすり抜けさせる為に使うんだけどよくむちゃんは見事に引つかかったね♪」

「うっ……」

「……事実なので何も反論できません。」

「ですがそのような技をいとも簡単に繰り出せるなんて……本当によろこいですね」

「そんなことないよ。慣れれば飛天の技の中でも結構簡単な部類だし。たぶん何回か練習すればよくむちゃんにもできるよ」

「私にも……ですか」

「……今度練習してみましよう。」

「それにしても……いい感じだよよくむちゃん「え？」」

竜希さんは私に微笑みを向けてそう言った。

「修行を開始してからまだ三日しかたつてないけど、強くなったのがよくわかるよ」

「そう……でしようか？自分ではよくわからないのですが？」

なにせ竜希さんと剣を交えること24回……ただの一度も私の太刀が竜希さんをとらえることはなく、いつも竜希さんが刀を抜くのとほぼ同時に敗北を喫しているのだから。

「うん。はじめの時と比べて随分と動きが良くなった。無駄な動きに取り入れられておかげで動きを読みにくくなったよ」

「……その割には平然と躲していたじゃないですか」

「あれは予測じゃなくて反射で躲していたんだよ。俺ってば反射神経もずば抜けて高いからさ!!」

「自慢ですか？」

「これについてはそうかもね」

竜希さんはニコニコと笑みを浮かべている。

「……やっぱりわからないですね」

ただそれが本当に自慢なのか……私には判別できなかった。

「ま、何はともあれよくむちちゃんは強くなってるし、もつと強くなれるよ。動きが読みにくくわなったけど今度は若干無駄が多すぎるようになったっちゃったからこれからはそのあたりを意識するようにするといいよ」

「はい。ありがとうございます」

「んじゃひと段落したし休憩しようか。俺ちよつと疲れちやつたしさ」

「わかりました。じゃあ私お茶入れてきますね」

「お願い」

私はお茶を淹れに台所に向かった。

（強くなってるか……頑張ろう。一日でも早く竜希さんに勝てるようになる為に）

side 竜希

「……出てきたらどうだい？」

俺は何もない空間に向かって声をかけた。

「あら？よくわかったわね」

その空間に『スキマ』が現れ、中から一人の女性が出てきた。

「気配と視線を感じていたからね」

「そう……あなたといいミコトといい、外の世界の人間というのは敏感なのかしら？」

「アツハハ！俺とミコちゃんが異常なだけだよ。普通の人間ならまず気がつかないだろうね」

「それは自分が普通でないと自覚しているということかしら？」

「まあね」

「……そう」

「……ところでさあ、いい加減自己紹介して欲しいんだけどいいかな？」

「……まあ、なんとなくわかってるがな。」

「それはごめんなさい。私は八雲紫。この幻想郷を創った者よ。あなたは？」

「……聞くまでもなく知っているんじゃないかな？」

「本人の口から聞きたいのよ」

「……なるほどね。俺は竜希。300年前に彼に多大な迷惑をかけた結果幻想郷から立ち去った一族。紫黒家の末裔の紫黒竜希でくす！よろしくね」

俺はわざとおどけた風に言った。

「……食えない人ね」

「それはお互い様だよ。で？俺に何か用でもあるのかな？二日前から俺のこと見てたみたいだけど？」

「……別に。用なんてないわよ。ただあなたを観察してただけだから」

観察……ねえ。

「見張っていたの間違いじゃないの？」

「……」

「理由は……俺が幻想郷に仇なす可能性があるから」

紫黒家は300年前に幻想郷から立ち去ることになった。半ば強制的にだったからそのことで俺が恨んでいると思われても仕方がないだろう。

「そして……俺に幻想郷を滅ぼすほどの力があるから……でしよっ」

「……そのとおりよ」

「……アハハ、やっぱりそうか。安心しなよ。俺は幻想郷をどうこうしようなんて微塵も思っていないさ。300年前のことだっとう考えても当時の紫黒の党首が悪いって思ってるんだしさ」

「……」

「あら？信用ない？」

「……そういうわけではないわ。ただ……あなたの意思や考えなんてものは関係ないわ。問題はあなたが幻想郷を滅ぼす力があるということよ」

紫は俺を殺気のこもった目で睨みつけてきた。

「人の考えなんて簡単に移ろうものよ。今のあなたの考えが明日になっても変わらないだなんて言い切ることもなんてできない。いやがおうにも……私はあなたを警戒せざるをえないのよ」

「……なるほどね。確かにそうだ。君の言うとおりだよ。でも大丈夫……もし仮に俺の気が変わって幻想郷を滅ぼそうとしても……ミコちゃんが俺を止めるさ」

「ミコトが？」

「うん。もしもの時はミコちゃんが……俺を殺して止める（ニコツ）」

俺は自分でもわかる程の笑みを浮かべて紫に言う。

「ミコトが……あなたを殺す？……ミコトはあなたの親友なんでしよう？そのミコトがあなたを殺すだなんて思えないわ」

「いいや殺すよ。もしもの時ミコちゃんは迷いなく俺を殺す」

「なぜ言い切れるの？」

「それこそ……ミコちゃんは俺の親友で……俺はミコちゃんの親友だからだ」

親友だからこそ……ミコトはもしもの時俺を止めてくれる。たとえ俺を殺すことによって自分がどんなに苦しむことになったとしても……ミコトは俺を殺す。ミコトはそういう人だから。

「……わかったわ。そこまで言うのならひとまずあなたを信じてあげるわ」

「そりやどうも♪」

「それじゃあ私はこれで失礼するわね」

紫はスキマを開いて帰ろうとする。

「あっと、ちよい待ち。もうひとつ言っておくことがある」

「言っておくこと？何かしら？」

「さっきの話さ……逆もまたしかりだから」

「逆？」

「そ、もしもの時は……俺がミコちゃんを殺して止めてあげよ。だから安心しな。君の愛する幻想郷、俺とミコちゃんが脅かすことはないから♪」

「……そう、わかったわ……私もあなたにもうひとつ言っておくことがあったわ」

「なくに？」

「……幻想郷にようこそ。私はあなたを歓迎するわ」

紫は頬笑みを浮かべてそう言った。

「……ありがとう」

「……」

紫は俺に背を向けてスキマに入って帰って行った。

「本当に食えないね……お互い」

あれが幻想郷の創造主……妖怪の賢者八雲紫か。ちよつと好きにはなれそうにないな。

「竜希さん」

「ん？あつ、よくむちゃん」

声のする方に振り向くとそこには妖夢がいた。すぐ側には幽々子もいる。

「お待ちせして済みません。お茶が入りました」

「うん、ありがとう・幽々子ちゃんも一緒にお茶？」

「ええ。ちようど美味しいお団子が手に入ったの。一緒に食べましょう？」

「おつ、それはいいね」

俺は妖夢ちゃんと幽々子さんと共に屋敷の縁側に腰掛け、談笑しながらお茶とお団子を味わった。

「うん。美味しいね」

side 紫

全く、ミコトといい竜希といい……本当に面白い子達ね。一体どんな人生を歩めばああいうふうになるのかしら？

「お帰りなさいませ、紫様」

「ただいま、藍」

うちに帰ってきた私を藍が出迎えてくれた。

「二日前からどこにでむいていたのですか？」

「ええ、ちよつと竜希の様子を見ていたのよ」

「竜希……あの紫黒のですか？」

「そうよ」

「そうですか……」

藍は少し不機嫌そうになった。

「藍は相変わらず紫黒の人間が嫌いなようね」

「別にそういうわけでは……ただ自らの使命を履き違え、あのよ
うな愚かな行為をした紫黒の人間が幻想郷に帰ってきたことに少し
納得できなくて……」

「まあ気持ちはわからないでもないわ。でも竜希は大丈夫よ。彼はそ
ういう愚かしいことをするような人ではないし紫黒の使命にも興味
がないみたいだから」

「……それはそれで問題があります。自分の使命を放棄している
ということじゃないですか」

「かもしれないわね。でも……多分だけどいざとなったら彼は正
しく使命を果たすんじゃないかしら？」

「どうしてそう思われるのですか？」

「女の勘よ♪」

「……………そうですか」

藍は今の私の発言に少し呆れてしまったようだ。

「それよりも藍、頼んでおいたことは調べ終わったかしら？」

「はい。といってもほとんど何もわからなかったのですが……………」

「そう。話して」

「はい。わかったことは一つ、例の暴虐者と末路はこの幻想郷で生まれたものではなく、やはり幻想郷の外から来たよということ。空間がこじ開けられた形跡を発見しました」

「……………やっぱりそうなのね」

「誰かが手引きをしたのは間違いないでしょう。そして……………その誰かが西行寺幽々子の死体になにかして、命を呼び起こしたのだと思われまます」

「……………そうね」

「いったい誰が……………なんの目的でそんなことを？」

「紫様は今回の件をどう考えているのですか？」

「……………わからないわ。誰がなんの目的でそんなことをしたのか見当もつかない。ただひとつ言えることは……………それを仕掛けてものはこの幻想郷の敵だということよ」

ミコトと竜希は今のところ私たちの敵になろうという意思が全く見受けられないからいいけれど……………こいつらは明確な悪意を持っている。面倒だわ。

「引き続き調査をお願いするわね、藍」

「わかりました」

どこの誰だかは知らないけれど、幻想郷に仇なすものは許さない。

必ず正体を突き止め……………

滅してやるわ

閑話 第0話〜二幕〜

愛されることを知らぬ者

愛することを知らぬ者

二人の出会いによって歯車は動き出した

もう止めることなどできない

動き出した歯車は回り続ける

壊れてしまうまで……ずっと

side 神楽

私は今双子の愚弟である竜希の部屋に來ている。目的は竜希に聞きたいことがあるからだ。だが……

「すう……すう……」

竜希は学校の制服を着たまま規則正しい寢息を立てて昼寝をしている。

私はそんな竜希を……

「おい、起きろ（ゲシツ）」

「ガッ!？」

蹴り起こした。

「ちよ、ちよつとかぐちゃん!?!いきなり何するのさ!」

「五月蠅いから大声を出すな。少しポリウムを下げろ」

「気持ちよく寝ていたのにいきなり蹴り起こされたんだから大声の一つも出したくなるよ!」

「ポリウムを下げろといっただろ。第一私に蹴り起こしてもらえたのだからそこは感謝するところだろう」

「いやいやいや!俺どんなM男だよ!」

あくもう……本当にうるさい。

「仮面を外せ。そのお前では話もまともに進められん」

私は竜希にそう命じた。

「……ちつ、話ってなんだよ神楽?」

竜希は身に纏う雰囲気張り詰めたものへと変えた。

竜希は普段から道化の仮面をつけている。が、私が言えばこいつはその仮面を外す。

「ああ、お前に聞きたいことがある……一夢命という奴のことを知っているか?」

私が聞きたいこと、それは今日出会った一夢命という男のことだ。

「……そいつがどうかしたのか?」

「質問に答えろ」

「……わかったよ。まあ一応同じクラスだからな。チラツとだが見たことはある」

「チラツと?同じクラスなのか?」

「あいつ……授業出てないからな。毎回サボってる」

「毎回?」

「ああ。一応テストだけは受けてるらしいがな」

あの時屋上にいたのは偶然ではなく……いつもあそこに居たということか?

「教師連中は誰も注意しないのか？」

「ああ。なにせあいつは……神楽と真逆の存在だからな」

「私と真逆……だと？」

「ああ。あいつは……何者からも蔑まれている」

「!?なんだと……？」

「悪口陰口は当たり前、皆あいつに関わろうとせずに距離をとってる。教師でさえだ」

「……なんでだ？ミコトは何かをしたのか？」

「何も。ただどうやらあいつにはうちの学校出身の兄がいるらしくてな。そいつがまた相当優秀な人だったらしい。そいつと比べられてできが悪いから……っていうのが周りの反応を見る限り理由の一つだと思う」

「……は？ミコトができが悪いだと？……うちの学校には目が節穴な奴しかいのいのか？」

「ただまあ……それだけではないように思えるがな。なんとというかあいつは……存在そのものを否定されているように感じた」

存在そのものを否定？

「どういうことだ？」

「俺もよくはわからん……ただそんな気がするんだよ」

「……そうか」

存在そのものを否定か……本当に私とは逆だな。

私は何ものからも肯定される絶対の存在だ。私を否定するものなど何一つありはしない。

ゆえに……わからない

ミコトが一体……なにを感じて生きているのか

「お前は……どう思う？」

「は？」

「ミコトのことを……どう思っている？」

「どう思っているかね……別になんとも思ってたねえよ。正直なんでも皆があそこまで奴を否定するのかわからん。ただ……」

「ただ？」

「あいつは……普通じゃない気がする。奴は……一夢命は俺と神楽と同じように……異端な存在だと思う」

「……私やお前と同じか」

私は異端だ。あらゆるものから愛されるといふ最低な呪いを受けた異端。その自覚が私にはある。そしてこの愚弟もまた……最低な呪いを受けた異端の一人。

ミコトも同じなのか？あいつも私と同じ……異端なのか？

「……それにしても珍しいな」

私がミコトに思いを馳せていると竜希が口を開いた。

「……何がだ？」

「お前が他人に興味を持つことがだよ。しかも名前まで呼んだ……俺以外では初めてじゃないか？」

「そうだったか？いちいちそんなことを意識などしたことがないからわからんな」

「意識していないのは興味のなさの現れだ。お前は……他人のことをなんとも思っていない」

「……かもしれんな」

「そんなお前が興味を持った……一夢命にはそれほどの何かがあるのか？」

「……何かか。」

「それは……お前もミコトに直にあつて話せばわかるさ。邪魔をしたな。ゆつくりと永眠する程の眠りにつくがいい」

「……ちよつとかぐちやくん！それは酷いんじゃないの!？」

私は再び仮面をつけた竜希の気の抜けた声を背に受け、部屋から出た。

私とは違うミコト……

私とはまるで逆のミコト……

ああ、私は……………

「お前を知りたい……………ミルト」

side 竜希

「……………」

ゴロン

神楽が去った後、俺は布団に寝転んだ。

「……………一夢命」

あの神楽が興味を持った男

あの神楽に名前を呼ばれた男

あの神楽に……………

「くそっ……………嫉妬なんてみつともねえ」

俺は自分の内に生まれたどす黒い心をなかつたことにするために眠りにつくことにした。

side ミルト

いつもどおり、俺が学校の屋上で寝転がっていると……………

「……本当に来たのか」

彼女が……紫黒神楽がやって来た。

「なんだ？来ないと思っただのか？」

「……まあ少しはそう思っただけ」

「ふつ、馬鹿な奴だな。来るに決まってるだろう。私は自分で言ったことを違えるようなことなどしないからな」

「……そうか」

「……本当に愛想のない奴だ。この私が来てやったのだからもつと喜べ」

本当に偉そうな奴……まあ確かに神楽がきてくれて嬉しいとは思っただけだな。

「これでも喜んではいらぬ。ただ感情の起伏が少ないんでな」

「昨日キスしたときに取り乱していた奴の言うことではないな」

神楽はいたずらっぽく笑って言った。

「……それは忘れろ」

「それは無理な相談だな。それよりも、隣いいか？」

「……好きにしろ」

神楽は俺の隣に腰を下ろした。

「……いい天気だな」

「……そうだな」

「こういう日は絶好の昼寝日和……なのか？」

「なんで聞くんだよ」

「生まれてこの方昼寝というものをしてることがなくなつてな。わからぬだ」

「昼寝をしたことがないか……それは人生の3割損をしているな」

「いや3割って……そんなになのか？」

「ああ。昼寝は……いい」

まあ……あんな幸せな夢を見ることなければの話だな。

「そうか……」

ゴロン

突然神楽は寝転がった。

「何してるんだ？」

「お前が言ったのだろう？ 昼寝をしないのは人生の3割を損しているのだと。だからその3割の損失を取り戻そうと思っただけだ」

「……あつそ」

「……案内単純なのか神楽は？」

「とはいえ眠気がないので眠れそうにないな……」

「目を閉じていればそのうち眠れるさ」

「それは昼寝上級者の貴様の意見だろ。私のような初心者にはその理屈は通じんぞ」

「安心しろ。とりあえず目を閉じるっていうのは昼寝の基礎中の基礎だから。初心者にもお勧めだぞ？」

「そうか……だがやはりそれだけでは眠れそうにない。ミコト、何か眠くなるような話をしろ」

眠くなるような話って……

「つまらん話を聞かせろということか？」

「そんな無礼を私に働くのは許さん。楽しい話をきかせて眠くさせろ」

「……そんなの無理に決まっているだろ。」

「……話すネタがないから無理だ。諦めろ」

「……ほう？ この私に諦めろというのか。いい度胸をしているな」
「どうも」

「……いいだろう。ならば特別サービスだ。私が聞くことに答えろ。それで手を打ってやる」

「手を打つって……俺は悪いことなどした覚えはないぞ？」

「口答えをするな。手を打ってやるというのだから黙って従え」

「……はあ、わかったよ」

「それでいい」

「……今日はなかなか眠りに付けそうにないな。」

「ミコトはいつもここでサボっているのか？」

「ああ。雨の日以外はな」

「雨の日以外は？ 雨の日はどこでサボっている？」

「多目的教室。あそこは普段無人だからな」

「なるほど．．．その多目的教室はどこにあるのだ？」

「うちの生徒なのに知らねえのかよ？」

「普段使わん教室の場所など知ったところで記憶の無駄遣いだろ」

「ならなんで聞くんだよ？」

「そんなもの、雨が降った日にお前がどこにいるのかわからないと困るからに決まっているだろう？」

．．．は？

「神樂は何を言っているんだ？それじゃあまるでこれから先も俺に会いに来るみたいな聞こえるぞ？」

「みたいもなにもそのつもりだ」

「．．．え？」

「これから毎日私は会いに行く。授業は全てサボる」

「．．．本当に何を言ってるんだお前は？授業全部サボったりしたら卒業できないぞ？」

「それはない。私が直々に頼めば卒業ぐらいどうとでもなる」

「どうとでもって．．．」

．．．神樂はこの独裁者だ？しかも神樂が言くと本当にどうにかかなりそうだなからタチが悪い。

「というより、それを言うならお前はどうかなのだ？お前こそ卒業できないぞ？」

「．．．大丈夫だよ。確実に卒業できるさ」

「この教師からしたら厄介者である俺を卒業させずにとどめる理由なんてないからな。」

「この教師だけではない。皆が．．．俺を厄介者扱いする

どんなに俺が皆のことを思っても．．．それは変わらない

俺は．．．誰から必要とされない

「．．．悪い神樂、俺はもう眠気に勝てそうにない。だから眠らせてもらうぞ。お前も寝たければ．．．自力でどうにかしろ」

「．．．わかった」

「それじゃあお休み」

俺は眠りにつこうと目を閉じた。

「待て、眠る前にお前に言っておくことがある」

言っておくこと？

「私は……違うからな」

「え？」

「私は……他の連中とは違う」

神楽はその黒い眼で俺を正面から見据えて言った。

「……そうか」

俺は目を閉じた。そして直ぐに心地のいい眠気が俺に迫ってきた。

『私は……他の連中とは違う』

先程神楽が言っていたことはどうということなのだろうか？

まさか神楽は……

俺を……愛してくれるのか？

(なにを馬鹿なことを……そんなことありえない)

俺は意識を手放して眠りの世界へと落ちていった

その日俺はあの幸せな夢を見ることはなかった

そして、目を覚ました時、俺の隣には規則正しい寝息を立てる神楽

が居て・・・
何故か俺と神楽の手は繋がっていた

萃夢想く鬼は何に酔うのかく

第75話

もつと・・・

もつともつともつと・・・

もつと集まれ・・・

もつと集まって・・・

私を酔わせて

side ミ「ト

「それでは！俺の幻想郷入りを祝しまして・・・」
「違うだろ」

ゴンツ!

「痛っ!?!」

盃をもって乾杯の音頭を取ろうとした竜希の頭に拳骨を落とした。「ちよつとミコちゃん!?!何してくれてんのさ!」

「うるさい。これはお前の幻想郷入りを祝うための宴会じゃない。春の到来を祝うための宴会だ」

「えく・・・そんな細かいこと気にしなくてもいいじゃん」

「細かくない。というからお前の幻想入りを祝うとか・・・はあ」

「なんでそこでため息!?!」

本当に・・・こいつの相手をするのは疲れる。

((あ、あのミコトが・・・漫才している))

なんか皆から視線が気になるし・・・悪ふざけはここまでにするか。

「竜希」

「わかってますって!それでは幻想郷の春の到来を祝しまして・・・」

「[[乾杯!!]]」

竜希の音頭で宴会は始まった。

「全く・・・これだから竜希は」

「本当にミコトも大変だな・・・ほい、ツマミ」

「ありがとう魔理沙」

俺は魔理沙が差し出してくれたツマミを受け取った。

「でもまあ・・・少なくとも竜希の方が乾杯の音頭は上手いな」

「悪かったな。どうせ俺はノリが悪いですよ」

「ハハハ!まあそう拗ねるなって!」

「・・・拗ねてねえよ」

魔理沙にからかわれて俺は思わずそっぽを向いた。

「魔理沙、あんた何ミコトに絡んでるのよ?」

「おお霊夢。そーいや姿が見えなかったが何してたんだ?」

「紫に捕まってたのよ」

「紫に?どうかしたのか?」

「くだらない話よ。ミコトが気にすることじゃないわ」

「そうか・・・ほら、霊夢」

霊夢の持つグラスが空になっていたので俺は近くにあつた酒を注いだ。

「ありがとう」

「それにしても・・・竜希って積極的ね」

魔理沙は竜希の方を見ている。

竜希は今美鈴と何か話をしている。

「まああいつは人あたりいいしフレンドリーだからな。向こうの世界にいた時も友人は多かった」

「ミコトもその一人っていうことね」

「・・・甚だ不本意だな」

あいつのせいで色々と苦労したこともあるし。

主にあだ名のこととかあだ名のこととかあだ名のこととか・・・

・・・なんかムカついてきたな。

「ミ、ミコト?どうしたんだ?」

「何がだ?」

「何だか・・・黒いわよ?」

おっと、いかんいかん・・・つい。

「すまん、竜希に対する怒りが急にこみ上げてきてな。あとでシバくか」

(ミコト・・・あんた本当に竜希の親友なの?)

(竜希・・・軽く同情するぜ)

ビクッ!

「うおっ!?!」

美鈴ちゃんと話をしていると急に悍ましい寒気を感じた。

「どうしたんですか竜希さん?」

「なんか急に寒気がして……ハッ!まさかミコちゃんが俺の事をシバこうとしてるんじゃない」

「い、いくらなんでもそれは……」

「いいや十分にありえる……事実今までにミコちゃんにシバかれた49回全てに虫の知らせがあつたからね」

「ただだけシバかれてるんですか!?!というか数えてるんですか!?!」

ミコちゃん……今回はなにに怒ってるんだ?最近怒らせるような事した覚えはないし……またあだ名のことかな?

「ちよつといいかしら?」

「んにゃ?」

俺がミコちゃんが何に起こっているのかを考え込んでいると水色の髪に紅い瞳……そして大きいコウモリのような翼をもつ少女が話しかけてきた。近くには咲夜ちゃんと金髪で紅い瞳をした女の子、それと紫色の髪の子もいる。

「えつと……咲夜ちゃん。この子たちは?」

「はじめまして。私はレミア・スカーレット。紅魔館の主よ」

「私はフランドール・スカーレット!お姉ちゃんの妹だよ!」

「妹様……それではわかりにくいですよ」

「あ、そっか」

「私はパチュリー・ノーレッジ。紅魔館の図書館の管理人よ」

紅魔館……ああ、あの真っ紅な屋敷の!そんでミコちゃんが執事をしている……

執事を……

「うっ……」

俺は執事ミコちゃんの事を思い出してクラッとした。あれは思い出すのも悍ましい……

「?..?どうしたの?..?」

「な、なんでもないよ。気にしないで。ところで俺になんかようかな？」

「ええ、咲夜から聞いたわ。あなたミコトの親友らしいわね」

「そだよ。俺はミコちゃんの唯一無二の親友だよ」

「聞いたとおり随分と軽薄ね。よくミコトは親友やつてられるわね」

「それどう言う意味レミアちゃん!？」

「ちゃんづけはやめなさい。不快だわ」

「お断りします♪」

「・・・いい性格してるわね」

うわっ、レミアちゃんすっげえ呆れ顔で俺のこと見てるよ・・・

「ねえねえ！竜希はお兄様のこと色々知ってるのよね？」

「お兄様？」

「ミコトのことよ。妹様はミコトの事をお兄様と呼んで慕っているの」

「なるほどね。まあ確かに俺はミコちゃんのこと色々と知ってるよ。なにせ親友だもん！」

「それじゃあ今度お兄様のこと色々とお話して！お兄様あんまり自分のことは話してくれないから」

「あゝ・・・ミコちゃん確かにそういうこと話すタイプじゃないもんね。オツケー。色々と教えてあげるよ。ミコちゃんのあることこんなことをね」

「やった〜!!」

ははは。すっごい嬉しそう。そんなにミコちゃんのこと知れて嬉しいってことは・・・ミコちゃん子のこともフラグ立ててるんだね。

「・・・竜希、その時は私にも話さない」

レミアちゃんが言ってきた。なるほどレミアちゃんもか・・・ミコちゃんただけフラグ立ててるんだよ。

「了解！あ、その時は咲夜ちゃんも聞く？」

俺はから買うつもりで咲夜ちゃんに聞いたら・・・

「ぜひお願いするわ」

すんげえ食いついてきた。やっぱり咲夜ちゃんもミコちゃんにぞつこんつていうことか。

まあいいけど。それよりも……レミアアちゃんやフランドールちゃんのような小さい子にも慕われているなんて……なんかミコちゃんが犯罪者のように思えてきた。

「混符『黒と白の驟雨』!」

「つて、うおっ?!いきなり何すんのミコちゃん!」

突然ミコちゃんが遠くから俺に攻撃してきた。

俺はそれを間一髪で躲す。

「いや、今お前にすごく失礼なことを思われた気がしてな」

「どんだけ勘がいいんだよ!」

「……その言葉は肯定と取るぞ?」

「あ……」

これ……もしかしてヤバイ?

「竜希……酔い醒ましの運動に付き合ってもらおうぞ?」

「ちよつと待つて!酔い醒ましてミコちゃん酔つてないでしょ!」

「細かいことを気にするな」

「いや気にするから!」

「うだうだ言うな。行くぞ。混符『アンビバレンス・スプラッシュ』!!」

「あつぶね!本当に打ってきた!」

「いいぞミコト!もつとやれ!」

「頑張つてミコト!」

「魔理沙ちゃん霊夢ちゃん!お願いだから焚きつけないで!!」

「混符『黒と白の螺旋』!!」

「マジで勘弁して!!」

こうして、俺はなぜかミコちゃんの弾幕を避けまくることになった。

これって俺のせいなのかな?

side ???

「ハハハ！皆楽しそうだな〜！やっぱり宴会はこうでなくちやな！」

私は酒を飲みながら宴会の様子を眺めていた。

「もっともっと楽しくしなくちやなく・・・まだまだ酔い足りないし

〜」

そうだ。まだまだこんなのもじゃあ酔い足りない。

もっと・・・もっとだ・・・

もっと集まれ・・・

まだまだ集まれ・・・

集まって集まって集まって・・・

「もっと・・・もっと私を酔わせて」

私は・・・もっともっと酔いしれたいんだ。

もっともっと・・・

第76話

さあ、今日も始まる

今日は前よりも酔えるかな？酔えないかな？

・・・できれば酔えるといいな

私のもつと・・・もつと酔いしれたい

酒に酔って・・・

——に酔いたい

side ミコト

前回の宴会から三日後、今日もまた宴会が行われていた。

周りを見ると皆酒を酌み交わし、会話を楽しんでいる。

そんな中俺は・・・幽々子と一緒に酒を飲んでいた。

ただ・・・少々問題がある。

「はいどうぞでミコト」

「あ、ああ・・・ありがとう幽々子」

幽々子は俺の杯に酒を注いだ・・・身体を密着させ、胸を押し当てながら。

しかもなぜか着物がはだけていて胸元が少し見えている。

こう言つては悪いが今の幽々子はまるで遊女のような様子になっていて相当な美人だから尚更そう思わせる。着物姿が

「な、なあ幽々子・・・」

「なあにミコト？」

「その・・・当たっているのだが？」

「フフフツ♪当てているのよ♪」

何を言ってるんですかアンタは。酔ってるのか？酔っ払ってるのか？確かに今飲んでる酒は結構強いが……

「大丈夫よ。酔ってなんかいないから♪」

「……勝手に心を読むなよ。それは別のピンク髪の実力だ」

「……それ誰？」

「……？誰だろ？」

……俺は酔っているのか？何でこんなわけのわからないことを口ずさんだ？でも……そのうちに本当に心を読む能力を持ったピンク髪の子に会うような気がする。それもかなり高い確率で。

まあそれはともかくとして。酔っていないのに幽々子はなぜ俺に密着してくる？そりや俺も男だから悪い気はしないのだが……どうにも理由がわからないと怖い。どう対処すればいいんだ？

「ねえミコト」

俺が頭を悩ませていると幽々子が声をかけてきた。その声はどうか甘ったるいように感じる。

「なんだ幽々子？」

「……あなたも竜希と同じように白玉楼で暮らしてみない？」

幽々子は上目遣い気味に俺に聞いてきた。しかもわざとらしく胸元を強調させて。

……目のやり場に困る。

「私ね……あなたのことが気に入っちゃったの。あなたを……ずっと一緒に居たいと思うの。だから……一緒に暮らしましょう？」

幽々子は俺の胸に頬を擦り寄らせてきた。慣れないからか年上の女の人にこういうことされるとなんか不思議な感覚に陥る……ような気がする。

(一緒に……か)

……考えるまでもないな。答えは……もう決まっている。

「悪いがそれはできない」

俺は擦り寄ってくる幽々子を引き剥がしながら答えた。

「どうしてかしら?」

「俺の家は……この博麗神社だ。だから幽々子の頼みは聞けない」
どうしてそこまで執着するのかわからない。どうしてそう思う
ことが自然になっているのかもわからない。

でも……俺の帰るべき場所はこの博麗神社……いや、霊夢
の隣なんだ。

だから幽々子には悪いが白玉楼で暮らすことができない。

「……そう。それは残念だわ」

幽々子は微笑みを浮かべる。

「言うほど残念そうには見えないが?」

「そんなことないわよ。ただまあ……あなたがそう答えるのは予想
できていたから」

「……予想できていたのに聞いたのか?」

「ええ、予想していても聞かずにはいられなかったから。もしかした
らっていうちよつとだけ期待もしていたし」

女心ってやつだろうか?まあ正直よくはわからないが……

「……悪かったな。せつかくの誘いを無下にしてしまった」

「いいえ、気にしなくてもいいわ」

「……そうか」

「……ミコト、お酌お願いできるかしら?」

「ああ」

俺は幽々子の杯に酒を注いだ。

「ありがとうミコト」

スツ

「え?」

突然、幽々子は俺の頬に口付けをしてきた。

「これは……お礼よ」

いやいや礼って……そんなに簡単にやっていいことじゃないだ
ろ?」

「ちよつと幽々子!」

霊夢がすごい形相を浮かべてこちら……というか幽々子に迫っ

ていった。

ひと目で怒っているというのがわかる。

「あら霊夢」

「あら、じゃない！あんたミコトに何やってるのよ！」

「何って……ホッペにチュウよ♪」

幽々子は上機嫌気味に言った。

「……言葉にするとすごく恥ずかしいな。」

「なんでそんなことしてるのよアンタは！」

「別にいいじゃないこれぐらい」

「よくない!!」

霊夢はかなりぐっ立腹の模様……なんでそこまで怒ってるんだ？

「それじゃあミコト、私紫と話したいことがあるから。またね」

「こらっ！まだ話は終わって……」

幽々子は霊夢のことなどお構いなしといった様子でこの場をあとにして行った。

「……行っちゃったな」

「全く……ミコトもミコトよ！」

「え？」

「どうして黙ってやられたの！躲しなさいよ！」

幽々子がいなくなった為に、今度は俺に矛先が向いてきた……というか本当になんで怒ってるんだ？幽々子にキスされたの（頬にだけど）がそんなにいけないことなのか？

「いや……突然のことだったし」

「もう……仕方がないわね」

霊夢は俺の膝の上に腰掛けてきた。

「霊夢？」

「……罰としてしばらく椅子になりなさい」

そう言って霊夢は俺に背を預けてきた。霊夢の心地の良い体温が伝わってくる。

何の罰なのかはよくわからないがまあ悪い気はしない……とい

うかむしろなんか嬉しい。

「……ん。了解」

俺は霊夢の頭を撫でながら了承した。

「それでいいのよ」

本当に……なんか俺、霊夢には適わないような気がする。

「それにしても……なんか変な霧が出てきたわね」

霊夢の言うとおり、周りには霧が立ち込めていた。

「……そうだな」

(……あの子が酔えていればいいのだがな)

side 竜希

「少しいいかしら?」

「んにゃ?」

離れたところで皆の様子を眺めながら一人で酒を飲んでいるとレミアちゃんが声をかけてきた。

「なくにレミアアちゃん?」

「……ちゃん付けはやめてってえ言ったでしょう?」

「アハハッ!ごめんねレミアアちゃん!」

「……はあ、もういいわ」

レミアアちゃんはため息をつきながら諦めた。

フフフツ……俺に呼び方を改めさせようとしたって無駄だ!なにせ俺は何度咎められ、何度ほこられそうになってもニコちゃんの呼び方を直さなかったんだからね!

「それよりも……なんで一人で居るのよ？あなたのことだから誰かと一緒に馬鹿騒ぎしてるのだと思っただけだよ」

馬鹿騒ぎって……俺まだレミリアちゃんと会って三日しか経ってないのになんでそこまで言われなあかんの？

何？この幻想郷において俺の扱いは既に決定されたの？ルール化されてるの？

「えっとねレミリアちゃん……俺にもたまには一人でいたいアンニユイな気分になることがあるんだよ？別にいつも馬鹿みたいに騒いでるわけじゃあないよ」

「そう。どうでもいいわね」

……レミリアちゃん、そんなはつきり言わないで。泣きそうです。俺のガラスのハートが粉々に砕けそうです。

「……ところでレミリアちゃん。わざわざ俺に声をかけたっていうことは何か用でもあるの？」

「ええ。前は言い忘れたのだけれど……あなた紅魔館の門番にならない？」

……え？俺が紅魔館の門番？

「美鈴から聞いたのだけれど……あなた相当腕が立つようね？」

「……まあね。少なくともここに居る誰よりも強い自信があるよ」

俺は周りに居る皆を見ながら言った。

「随分な自信家ね……まあいいわ。あなたが門番に来てくれれば紅魔館の平和は約束されたも同然。どうにも美鈴はあなたのことを気に入っているようだし……どうかしら？報酬は弾むわよ？」

レミリアちゃんは不敵な笑みを浮かべて俺をスカウトしてきた。

……フツ、そんなの……俺の答えはもう決まっている。

「お断りさせてさせていただきますま〜す♪」

俺は満面の笑みを浮かべてレミリアちゃんに言った。

……紅符「スカーレット……」

「ってちよい待ち！なんでスペカ構えてるの!？」

「……あなたの笑顔がムカついたからよ」

「辛辣!?!何!?!俺は満面の笑みを浮かべることさえ許されないの!?!」

マジで泣きてえよ!?!これなんかのイジメ?俺はこれから笑顔を浮かべるたびにスペカをくらうの?」

「…………まあそれはともかくとして、どうして断るのかしら?」

「そんなの決まってるでしょ…………執事ミコちゃんに会いたくないからだ!」

「…………は?」

「だって!紅魔館の門番になるっていうことは執事ミコちゃんとエンカウントする可能性が高いっていうことですよ!そんなの俺の精神が耐えられない!間違いなく俺のS A N値はゴリゴリと減少していき、終いには発狂してしまう!」

はつきり言って執事ミコちゃんは俺にとつて毒でしかない!もうあのミコちゃんとは二度と遭遇したくない!断固としていやだ!

…………まあ白玉楼から離れたくないからっていうのもあるんだけどさ。

「そ、そんなに嫌なのね…………わかったわ。そこまで言うなら諦めるわ」

「ホントごめんね」

「別にいいわ」

「…………で?他にも何かあるんでしょう?」
「!?!」

俺が聞くとレミリアちゃんは驚いた表情をした。この反応からして凶星か。

「…………どうしてわかったのかしら?」

「なんとなく。ただの勘だよ」

俺の勘って無駄によく当たるんだよね。

「…………そう」

「それで?何が言いたいのかな?」

「…………」

レミリアちゃんは少し俯いて沈黙した。…………話しにくいことなのかな?

「……紫黒竜希」

しばらくして顔を上げたレミアちゃんはいやに神妙な表情で口を開いた。

「あなたには……運命が待ち受けている」

「運命？」

そういえば……レミアちゃん的能力は運命に関するものだった。ミコちゃんが言っていたっけ。

「そう……どのような運命かは私でも詳しくはわからないけれど……あなたにとつて受け入れがたいもの、あるいは乗り越えるのが困難な悍しき運命よ」

「……」

「あなたは……いずれ運命の奔流に飲み込まれる。決して逆らうことなどできない……それを心に刻んでおきなさい」

……逆らえぬ運命か。

「……わかった。心しておくよ。教えてくれてありがとうね」

「別にあなたのためじゃないわ。あなたのような人でもミコトの親友だから。あなたが傷つき、苦しめばきつとミコトは悲しむ。そうなるのが嫌だから教えただけ」

……アハハッ！本当にレミアちゃんはミコちゃんのが好きなんだね。

「それでもお礼を言うよ。教えてくれて本当にありがとうね」

「……ふん」

要件が済んだからであろう。レミアちゃんは去っていった。

「……悍しき運命ね」

一体どんな運命なんだろうか？

……まあ、神楽を失うことに比べればどんな運命も俺には……大したものじゃあないだろう。

「霧見酒って言うのも中々悪くないね」

俺は周囲に立ち込める霧をボンヤリと眺めながら酒を口に含んだ。

side ???

「ハハハッ！今日の宴会も楽しいな！」

やっぱり宴会はいい。どんどん酔える。

でも……

「まだまだ……まだまだ足りない」

もっと酔いたい。

まだまだ酔いたい。

もっと強く酔いしれたい。

酒に酔いたい……

——に酔いたい……

だから……

「また二日後に……」

第77話

いつからだろう？

酒に酔つても心から楽しいと思えなくなったのは？

いつからだろう？

酒に酔えても——に酔うことができなくなってしまったのは？

そして今も……まだ——に酔えない

……怖いから

side 咲夜

「フツツ」

「何を笑っている咲夜？」

共にお酒を飲んでいるミコトが首をかしげながら私に聞いてきた。

「いえ……執事じゃないあなたとこうして二人で話をするのは久しぶりだと思つて」

「ああ……そういや最近咲夜と話しをするときは紅魔館で執事の仕事してる時ぐらいだったけな」

「執事のとときのミコトは敬語で私の事をさん付けするから……本当に慣れないのよね」

「それは申し訳ありません咲夜さん（ニコツ）」

ミコトは執事の仕事をするときのような礼儀正しい口調で私に笑顔を向けて言った。

「……お願いだからやめてちょうだい」

「クククツ……わるいわるい」

ミコトは悪戯つぽく笑つて言う。全く……いい性格をしているわ。しかもミコトのことだから自覚してるんでしょよね……タ

チが悪いわ。

「……まあそういうところも嫌いではないけれど。」

と、そういえば……

「ミコト。前から気になっていいることがあるのだけれど」

「なんだ？」

「あなた随分と掃除の仕方や料理に精通しているようだけれど……
どうしてかしら？」

「どうって……前にも言ってるだろ？慣れてるからだよ」

慣れているから……ね。

「……やっぱり納得できないわ。」

「……7年」

「ん？」

「私は紅魔館のメイドになってもう7年になるわ。始めの頃はなれな
いことばかりでミスを繰り返してお嬢様に迷惑をたくさんかけてし
まっていたわ」

本当に……メイドになつたばかりの時は大変だったわね。あ
の時の未熟な私のことはあまり思い出さたくないと思える程に。

「仕事に慣れるのに1年はかかった。そしてお嬢様に褒めていただけ
るようになるまでに4年はかかったわ」

「……何が言いたい？」

「あなたの仕事ぶりは明らかに慣れているという次元ではないわ。慣
れだけであそこまでこなせるとは思えない。一体あなたは外の世界
でどういう生活を送ってきたのかしら？」

私はミコトの目を正面から見据えて言った。

ミコトは執事としてのレベルが高すぎる。それこそ完璧とって
いいほどに。普通に生活しているだけでは到底至れない境地。

私はなぜミコトがそこまですることができるのかがどうしても知りたかった。

「……俺は3年だ」

「え？」

「俺は慣れるのに3年かかったよ。それに……褒められることは
なかった」

ミコトは苦笑いを浮かべながら言った。

「それって……」

「別に執事だったわけじゃあない。ちよつと裕福だったけど一般的な家庭だった。ただ……うちの家事を全部引き受けていただけだ」「家事を全部……どうしてミコトがそんなことを？」

「……俺にできることはそれだけだったからな」

「父さんからも母さんからも兄さんからも……俺は何一つ期待されていなかったし必要とされていなかった。そんな俺があの人たちにできることは……家事全般を引き受けることぐらいだったからな」

期待されていない？必要とされていない？

……家族から？

「10年もやってたからな……おかげで家事全般は得意になった」「10年も……」

「……まあ、一度も褒められたり感謝されてりはしたことはないけどな」

また苦笑いを浮かべるミコト。ただどこか……無理をして笑っているように見える。

……当然かもしれないわね。誰からも褒められず、感謝されず、自分を必要としない家族のために家事をしていたただなんてきつと……

「……辛くなかったの？」

「え？」

「ミコトは……辛くなかったの？その……自分を必要としない人のために家事をするのが」

私は恐る恐るとミコトに聞いた。無遠慮だということは重々承知しているけれど……聞かずにはいられなかった。

「……別に。家事は嫌いじゃないから辛くはなかったよ」

ミコトはニコリと笑って私の目を正面から見据えて言った。

「……嘘なんてつかなくてもいいわよ」

「え？嘘なんてついてないが？」

「あなた……嘘をつくときは相手の目を見ていつもの2割増の笑顔を向けるのよ。ちようどさつきみたいだね」

「……マジで？」

「マジよ。まあミコトのことだから嘘だつて見透かされないために無意識にやってるのでしようけど」

特にこういう相手に気を遣わせてしまいそうな時にはそれが顕著ね。ミコトは……他人に心配させるのを嫌ってるみたいだから

「……まいったな。咲夜は俺のことよくわかってるんだな」

「……ええ。まあ」

まあこのことは以前霊夢に言われて気がついたのだけれど……黙っておきましょう。

「……まあ、確かにちよつと辛かったかな。やれて当たり前みたいに思われて……ちよつとミスれば大目玉だったからな」

ミコトは少し顔を伏せて言った。あまり思い出したくはないのでしょうね。

それにしても、自分の家族……それも家事をしてくれるのにそんな振る舞いをするなんて……ミコトの家族はあまりいい人ではないよね。

「でもまあ……今となってはどうでもいいな」

「どうでもいい？」

「昔のことだし……今の俺にはもう関係ない。でもまあ……」
「ミコト？」

「そのおかげで紅魔館の執事として仕事ができるようになって、レミアやフラン……紅魔館の皆に感謝されるようになった。咲夜の負担が減らせるようになった。そう思うと……少しはやってて良かったかなと思えるよ」

ミコトは目を閉じて頬笑みを浮かべながら言う。

私にはそれが先程の嘘をつくための笑顔ではないとすぐにわかった。

「……これからもよろしくお願いしますね咲夜さん」

「それはやめてって言うてるでしょう?」

「ごめんごめん」

「もう・・・」

謝ってはいるもののミコトに悪びれた様子はない。本当にいい性格をしているわ。

・・・次に執事の仕事をしに来た時には思いきししごいてあげようかしら?」

「・・・咲夜、今何か不穏なことを考えなかったか?」

・・・中々鋭いわね。

「いいえ、そんなことはないわよ。それよりも・・・また霧が濃くなってきたわね」

私は周囲に立ち込める霧を見ながら言った。

三日前の宴会の時も出ていたし・・・この霧一体なんなのかしら?」

「・・・ああ、そうだな」

ミコトはどこか憂いの籠った目をして言う。

「??どうかしたのミコト?」

「何がだ?」

「いえ、なんとなく・・・様子がおかしかったから」

「・・・気のせいだ。気にするな」

「そう・・・」

・・・本当になんでもないのかしら?少し気になるわ。

side 竜希

「・・・おい」

「ん?」

俺が気持ちよく酒を飲んでいると金髪で白と青の衣装で札の付いた帽子をかぶっていて肌触りの良さそうな九本の尻尾を持った女性が話しかけてきた。しかもなんか睨みながら。

「えっと……君は？」

「……私は八雲藍。紫様に使える式神だ」

女性……藍さんはぶっきらぼうに名乗った。

「紫ちゃんの式神なんだ。あ、俺は……」

「知っている。紫黒竜希だろう？」

「およ？知ってたんだ」

「ああ。君のことは紫様に聞いているからな。それと……」

紫さんにねー……紫さん藍さんに俺のことなんて話したんだろ？まああんまりいいことは言っていないだろうな。あの人多分俺のことあまり好いてないだろうし。

「藍さんみたいな美人に知ってもらえてるなんて光栄だねー」

「そうか」

藍さんは無表情に……というか機嫌が悪そうに返事をした。

「……藍さん？なんか随分と機嫌が悪そうだけど……俺君に何かしたかな？」

「……別に。君個人がどうというわけではない。だが……」

『紫黒』とは色々あつてな」

……ヤバイ。なんか嫌な予感がするんですけど。というか藍さんの纏う空気がすごく黒くなってるんですけど。

「えっと……藍さんは紫黒について詳しいのかな？」

「ああ、よく知っているさ。なにせ私を幻想郷にはびこる悪しき妖怪と言つて37回も殺そうと襲いかかってきたからな」

「ごめんなさい」

俺は藍さんに深々と土下座した。

本当に紫黒の人は何をしちやってくれてるんだよ。馬鹿なの？死ぬの？もう本当に嫌になるんですけど。

「君が謝ることじゃないさ。君は今までの愚かな紫黒の人間ではないだろうしな」

「……藍さん。そう言うならその怒気を引っ込めてください。流石に居心地悪いです。」

「……まあそんなことはどうでもいいから頭を上げてくれ。それよりも君に聞きたいことがある」

「何か？」

「……君は紫黒の使命についてどう受け止めている」

藍さんはまっすぐと俺の目を見据えて聞いた来た。

身に纏う雰囲気はかなり重い。これは相当真剣だね……下手な誤魔化しは通じなさそうだ。

「……仕方がない。真剣に答えるか。」

「……別に。どうとも思っていないさ」

「何？」

「……はつきり言つてどうでもいい。確かに俺には紫黒の血が流れているがその使命に縛られるつもりはない。俺は俺のやりたいようにやるだけだ」

「やりたいようにだと？つまり使命を果たすつもりは……力を持つものとしての責任を果たすつもりはないということか？」

藍はキツと俺を睨みながら言ってきた。

「まあそうとつてもらつても構わないさ」

所詮は俺の先祖が勝手に決めたことだからな。俺には関係ない。

「……」

「……俺のことを軽蔑したか？まあ別に構わないがな……ただ一応言っておくが何も俺だけが使命を放棄したわけじゃあない。そもそも使命を履き違えたのはかつての紫黒の人間なんだ。その時点で使命は破綻している」

「……そうだな」

藍は忌々しげな表情をする。よほどかつての紫黒の人間を嫌っているようだな。

「……まあ俺も嫌われているんだろうけどな。」

「……私はこれで失礼する。邪魔をしたな竜希」

藍は立ち上がつてこの場から去ろうとした。

「ちよつと待て」

だが俺はそんな藍を引き止めた。

「……なんだ？」

「……さつき言ったとおり俺は紫黒の使命のことをどうでもいいと思っている。だが……もしも奴が俺に……俺の友人に仇をなすと判断したときは……使命を果たすことになるだろうな」

「……」

「……言いたいことはそれだけだ。引き止めて悪かったな」

「……いや、それではな」

藍は俺を一瞥して去っていった。

「……あくあ。これは藍さんに嫌われちゃっただろうな」

本当に俺ってどうしようもないな……気が重いよ。

「……使命か」

……俺にとつて紫黒の使命なんて本気でどうでもいい。果たそうとも思わない。

でも……奴が俺や俺の友達に手を出すときはほぼ必ず使命を果たすべき時であろう。

その時は……結局俺は紫黒の使命を全うするんだろうな。

「本当に……使命なんて果たしたくないよ。その時が来ないに越したことはないし」

俺は少しずつ濃くなっていく霧を眺めながら呟いた。

side ???

「フンフン〜♪」

目の前で繰り広げられる宴会を眺めながらひょうたんに入っている酒を飲む。

「……随分と機嫌が良さそうだな」

「ん？ああ、お前か。こんなところで何してるんだ？」

「ちよつと夕涼みだよ。それよりも……いいかげん混ざったらどうだ？その為に集めているんだろ？」

「あ……まあそうだけどさ」

「……まだ怖いのか？」

「……うん」

そう、こいつの言うとおりで。

私はまだ怖い。

だから私はまだ……——に酔えない。

「早くしたほうがいい。そろそろ皆感づくだろうからな」

「……わかってる」

「……ならいいがな。頑張れよ。俺も……協力するから」

「……うん。ありがとう……」

「ミロト」

第78話

side ミコト

「……おかしい」

「……ああ。おかしいな」

博麗神社で宴会の準備をしているさなか、突然、霊夢と魔理沙がわりと真剣な表情でそう呟いた。

「おかしいって……何がだ？」

俺はそんな二人に尋ねる……まあ答えはわかっているのだがな。

「そんなの決まってるでしょ！いくらなんでも宴会が多すぎるわよ！」

「全くだ！もうこれで10回目だぞ！」

……やはりこれか。まあ予測はついていたが。流石に三日置きに10回も宴会が行われればおかしいと思われて当然か。

「……確かに少し不自然ではあるな」

「少し!?そんな次元じゃないわよ！明らかに不自然だわ！」

「霊夢の言うとおりだ！コイツは絶対に異変だぜ！」

「そ、そうか……」

二人は俺に凄い形相で詰め寄ってくる。あまりの迫力に少し気圧されてしまった。

まあそれはともかくとして……やはりもう誤魔化しきれないか。流石にこれだけ宴会が続いてしまったのだから仕方がないのだが……

「まあ二人共落ち着けよ。確かにコイツは異変かもしれないが別に悪い異変ではないんじゃないか？二人だって宴会好きだろ？」

「確かにそれは否定しないわ。費用は他の皆が出してるから私はただ酒が飲めるし。でも……宴会のたびに場所を提供するのが嫌なのよ！おかげで毎回準備と片付けが大変なのよ！準備はともかくとして片付けは基本ミコト以外誰も手伝ってくれないし！」

霊夢は肩をワナワナと震わせて怒りながら叫んだ。

……まあ確かにそうだな。準備の方は手伝ってくれる人はいる

けど宴会が終わると皆そそくさと帰って大体俺と霊夢の二人（まあクラマとシラマに手伝ってもらうが）でやってるんだよな。

「……それに關しては本当にすまないと思っっている。」

「しかも宴会のたびに妖怪が大量に来るせいで参拝客が寄り付かなくなるし！」

「……いや、参拝客の数はそんなに変わっていない（元々あんまり来ない）んだが……。それは言わないでおこう。これ以上霊夢を怒らせると流石に手がつけれない。」

「ま、まあ霊夢の言い分はわかるが……。魔理沙はどうしたんだ？お前だって宴会好きだろ？宴会のたびに結構はしゃいでるし」

「確かに宴会は好きだが……。私はずつと幹事をやらされてるんだぜ！宴会のたびに段取りや余興を考えて……。いい加減頭が痛いんだよ！もう余興のネタが無い！」

魔理沙は頭を抱えて唸った。

「……。うん。本当にマジでごめん魔理沙。そういうの考えるのつて大変そうだな……。俺じゃ絶対無理だ。」

ちなみに魔理沙が感じになった理由は厳選なるくじの結果が。何十人もいる中で引き当てるとは……。くじ運が悪いにも程がある。一部の奴（特に霊夢、アリス、パチュリー）は日頃の行いが悪いからと容赦なく言い放ったが。

「まあ……。うん。大変だな」

「他人事みたいに言うな!!」

「すまん」

まあ霊夢の件に關しては他人事ではないのだが……。俺も片付けの負担背負ってるし。

「もう我慢できないわ……。この異変を解決するわ！」

「おう！いい加減宴会から解放されたいからな！」

やっぱりこういう流れになるか……。どうしたものかな？

「まあ二人の気持ちはわかったが……。異変を解決するにしてもどうするんだよ？手がかりなんてないだろ？」

「……。それ本気で言ってるのミコト。」

霊夢がジト目で俺の方を見てきた。

「……やはり無理があるか。なにせ……」

「どう考えてもこの霧が関わってるに決まってるでしょ！」

霊夢は両手を広げて言った。

現在博麗神社……というより幻想郷中に霧が立ち込めていた。あいつが霧をだしたのはおよそ1ヶ月前……すなわち宴会が始まった時期からだ。

宴会と霧が関わっているなど一目瞭然だ。

「……まあ冗談だ。流石にそれくらいはわかっている」

「こんな時に冗談なんて言わないでよ。笑えないわよ？」

「ごめんごめん」

「はあ……」

霊夢は呆れたようにため息を吐いた。

「……やつぱりあからさまに不自然すぎるか。いくらなんでも無理がありすぎる。」

「でも……本当にこの霧何なんだぜ？なんか怪しい妖気を感じるし……明らかに普通の霧じゃあないぜ」

魔理沙は霧を見つめて思案顔になる。

「まあとりあえず……恋符「マスターズパーク」!!」

魔理沙はポケットからスペルカードを取り出してマスターズパークをぶっ飛ばした。

マスターズパークによって霧は吹き飛んだがそれは僅かのあいだだけですぐに空いた空間を霧が埋め尽くす。

「……やつぱダメか」

「当然だろ。いくら吹き飛ばしたところでこの濃さのきりじやあ焼け石に水だ。吹き飛ばすとしたら全ての霧を一気にでないという意味がない」

「だよなあ……でもいくらなんでもそこまでの威力はマズパでも無理だぜ」

「というかどんなスペカでも無理よ。この霧は幻想郷中に広がっているんだから。それぐらい考えるまでもなくわかるでしょ。やつぱり

この霧を出している元凶を叩かないと……というわけで紅魔館に行くわよ！」

霊夢は俺と魔理沙にきっぱりと言い放った。

「??なんで紅魔館だよ?」

魔理沙は首を傾げて霊夢に尋ねた。

「思い出してみなさい。前にもレミリアが霧を出して異変を起こしたでしょう?だから今回の異変も多分レミリアの仕業よ。というかう間違いはないわ」

ひどい言いがかりだな。今回は珍しく勘が働いていないようだな。

確かにレミリアは異変を起こした前科持ちだが……いくらなんでも短絡的だろ。魔理沙だって俺と同じように考え……

「そうだな!今回の異変の元凶はレミリアだ!間違いないぜ!」

……まさかの霊夢に同調か。やはりこの二人は仲のいい類友ということか……

「そうとわかれば行くぜ霊夢!ミコト!」

「ええ!」

「ちよくと待った!」

霊夢と魔理沙は紅魔館に乗り込むべく飛び出そうとしたらそれを止めるゆるい声が聞こえてきた。

「竜希」

二人を止めたのは竜希であった。

竜希の近くには幽々子と妖夢、さらにレミリア達紅魔館の住人がいた。

「全く……さつきから聞いていれば随分好き勝手言ってくれてるわね?」

レミリアが霊夢と魔理沙を恨めしそうに、責めるような目で睨んできた。まあろくな証拠もないのに犯人だと疑われて(決めつけられて)しまったのだから仕方がないな。

「なによ。レミリアは前科持ちなんだから疑うのは当然でしょ?」

「どの口がそう言ってるのかしら?疑うという次元を通り越して決め付けていたじゃない」

今度は咲夜が睨みながら言う。かなりぐっ立腹の様子。

「まあ否定はしないわ。というわけでこの霧を消しなさい」

霊夢はレミリア達に宣言した。

「無理よ。だって私達はこの霧になんの関わりもないもの」

「おいおい、嘘はよくないぜレミリア？」

「嘘じゃないわ。まごうことなき事実よ」

「……あくまでシラを切るの？」

「シラなんて切ってないわ。私達は無実よ」

「……」

霊夢、魔理沙の二人と紅魔館組の面々のあいだに火花が散る。まさに一触即発だ。

そんな中……

「はいはいストップ」

竜希が手をパンパンと叩きながら双方の間に割り込んで仲裁に入った。

「少し落ち着こうよ。そんなに怒ったりしたら可愛い顔が台無しだよ」

竜希はにへらとゆるい笑顔を浮かべながら言った。だが……

「うるさい！黙れ！」

皆は竜希に向かって怒号を放つ。まあ気持ちはよくわかる。なんか今のむかつくし。

「……ねえよくむちゃん。俺泣いてもいいかな？」

「自業自得です。あの場面であんなふざけたことを言ったんですから」

「……マジで泣きてえ」

竜希はガツクリと肩を落とした。というか妖夢……最近少し竜希に辛辣になってないか？まあおそろく愛情ゆえになんだろうが。

「そんなことよりも話を進めたら竜希？」

「そんなこと……そんなことか……アハハ」

幽々子が笑顔で竜希に言う。竜希は乾いた笑い声を上げた。

……流石にちよつと同情するかな？

「……まあいいか。とりあえず話を戻すけど霊夢ちゃんたちは証拠もないのにレミリアちゃんたちを疑つちやダメだよ。事実レミリアちゃんたちは犯人じゃないんだからさ」

「どうしてそんなことが言えるのよ」

「アハハ。だって俺達……というかよくむちゃんと幽々子さんはレミリアちゃんたちに疑われちゃってるからね。今回の異変の元凶なんじゃないかって」

「……え？」

「どういうことだぜ？」

霊夢と魔理沙は首を傾げて竜希に尋ねた。

「霊夢ちゃん達と同じだよ。二人は前回の異変の元凶だから今回の異変もそうなんだってレミリアちゃんたちに思われてるってわけ」

「……あんた達ね」

「……私と霊夢のと言えないじゃないか」

霊夢と魔理沙はジト目でレミリア達を見た。対してレミリア達は何食わぬ顔をしている。

「まあそのことは一旦置いておきなよ。それよりも今は……異変の元凶を突き止める方が先決でしょ？その為にレミリアちゃん達と一緒に来たんだからさ」

再び竜希が二人を宥める。

「とりあえず、レミリアちゃん達紅魔館組は今回の異変の元凶じゃないよ。もしそうだったとしたらわざわざ調査なんてしないでしょ？んで同じ理由でよくむちゃんと幽々子さんも違うね。進行形で調査してるわけだし」

どうやらレミリア達紅魔館組と幽々子たち白玉楼組も宴会と霧のことを怪しんで調査しているようだ。まああからまきにおかしいから当然といえば当然か。

だが……そうなるとマズいな。

「だったら一体誰が異変の現況だって言うのよ？」

「それを聞くためにわざわざ博麗神社まで来たんだよ」

「聞くために？どういうこと？」

「それは……ね！」

「!?」

ガキン!

突然竜希が刀を抜刀して俺に斬りかかってきた。俺は鈴を剣に変えてかろうじてそれを防ぐ。

「竜希!？」

「お前何やってるんだよ!？」

突然の事に霊夢と魔理沙は表情を共学に染めて大声を上げた。

「アハハ、流石ミコちゃん。いい反応してるね」

「……なんのつもりだ竜希?」

「なんのつもりもなにも……今回の異変の関係者に話を聞こうと思ってる」

竜希はニヤリと不敵な笑みを俺に向けてきた。

「異変の……関係者?あんな何言ってるの?」

霊夢は戸惑いながら竜希に聞いた。

「あのね霊夢ちゃん。どう考えても不自然なんだよ。ミコちゃんはすっごく頭が良くて察しもいい。それなのに今回の事態を不自然に感じる素振りを一切見せていなかった」

「……買いかぶりすぎだ。俺はそこまで察しはよくない」

「またまたそんな。俺はミコちゃんの親友だよ?ミコちゃん能力ならしつかりと把握している。ミコちゃんならもつと早く気づいていることが自然なんだよ」

「……」

「それにさく……いつものミコちゃんならもつと積極的に異変を解決しようとするのにあまりにもおとなしすぎる。『命を理解する程度の能力』っていう調査にうってつけの能力があるにも関わらずだ。それをさつきだつて霊夢ちゃん達とレミリアちゃん達が争いになりそうになったときは……止めようとせずにはまるで我関せずって感じにじつと様子を見ていた。ミコちゃんにはおかしすぎる」

「……」

「そしてなにより……俺はミコちゃんの親友だからな。ミコちゃ

んが……何かを隠しているっていうのがよくわかるんだよ」
「……………」

「さて……どうなんだ？一夢命？」

竜希は真剣な眼差しで俺を見てきた。

……本当、面倒な親友を俺は持つてしまったようだな。

竜希には……………下手な隠し事はできない。

でもまあ……………こつちも簡単に白状するわけにはいかない。

せいぜい……………抗わせてもらおう。

「……………混符「アンビバレンス」」

俺はスペルカードを発動して竜希に向かって弾幕を展開した。

「おっと」

竜希はバックステップをとり、それを軽々と回避する。

「ちよ、ミコト！あんた何やってるのよ！」

「……………わるい霊夢。少し下がっていてくれ。皆もな」

俺は霊夢と……………そして皆に向かって言う。

「え？それって……………」

「本当に……………ごめん」

俺は手に持った剣を銃に変化させ……………

「竜希……………知りたければ力づくで聞いてみる」

竜希に突きつけながら言い放った。

「まいったね、本当はやりあいたくはなかったけど……………まあミ

コちゃんが今どれくらい強いのかを知るいい機会かもね」

竜希もまた刀の切っ先を俺に向けてくる。

「……………いくぞ竜希！」

「……………来なミコちゃん！」

俺は竜希に向かって引き金を引いた。

第79話

nosside

「混符『黒と白の驟雨』!!」

ミコトは上空からスペルカードを発動し、銃で竜希に向かって弾幕の雨を降らせた。

「アハハッ♪甘いよ〜」

だが竜希はその弾幕を全て見切り、隙間を塗っていともたやすく躲す。

「飛天『飛龍閃』」

そして竜希は大きく身体をひねりながら、鞘に納めた刀『絶柵』の鏢を親指で弾いて刀をミコトに向けて飛ばした。刀は猛スピードでミコトに向かって接近していく。

「ッ!!」

ミコトは体を逸らして回避する。が……

パシッ!

「!?!」

いつの間にかミコトの背後に飛び上がった竜希は左手で刀掴む。そしてミコトを強襲するべく刀を振り上げた。

「飛天『龍槌閃』」

「チイッ!」

ガキンッ!

振り下ろされる刃をミコトは銃を剣に変化させて辛うじて防ぐことができた。

ドンッ!

「ガハッ!」

だが竜希の力強い剣圧に押され、ミコトの体は地面に叩きつけられる。その衝撃でミコトの周りに砂埃が舞った。

「さっすがミコちゃん。いい反応するね〜」

「………そいつはどうも」

竜希は着地しながらヘラヘラと笑みを浮かべて言う竜希に対して、

ミコトは片膝をつきながら答えた。

「ミコトー」

地面に叩きつけられたミコトの姿を見て霊夢は駆け寄ろうとした。

「待ちなさい霊夢」

だがそんな霊夢の手を掴んで止める者がいた。

「紫……お前いつの間に」

魔理沙がいつの間にか現れて霊夢の手を掴んでいる紫を見て驚きの声を上げる。

「離して紫ーミコトが……」

「全く……あなた本当にミコトの事になると冷静さを失うわね。いじやない。ミコトがやられちゃっても」

「何言ってるのよー！いいわけないでしょ！早く離しなさい！」

霊夢は紫の手を振りほどこうともがく。その表情から明らかに冷静さを失っていることが見て取れた。

「全く……落ち着きなさい博麗霊夢」

「!?」

そんな霊夢を紫は睨みつける。紫に向けられる鋭い眼光によつて霊夢はひるんでおとなしくなった。

「いい霊夢？どんな理由があろうともミコトは今回の異変の関係者なのよ？つまりミコトは博麗の巫女たるあなたにとって敵なの。だつたら……ここで彼が倒されるのはあなたにとって望むところではないかしら？」

「そ、それは……」

「幻想郷で起こる異変を解決することは博麗の巫女の使命……ま

さかそれを忘れたのではないでしょうね?」

紫は霊夢を責めるような眼で見つめる。

「……………忘れてないわ。でも……………でもミコトは私の……………ミコトは……………」

霊夢は顔を伏せながら表情を曇らせる。

博麗の巫女としての使命とミコトという愛しい存在の狭間で霊夢は苦悩していた。

(……………霊夢がここまで思い悩むなんて)

紫はそんな霊夢を見て少なからず驚いていた。

以前までの霊夢……………ミコトに出会う前の霊夢ならば何よりも使命を重んじていただろう。普段の態度からはわかりにくいが霊夢は博麗の巫女としての誇りを抱いていたから。

だが今の霊夢は迷っている。一夢命という一人の……………愛おしい人物が原因で。

時に母のように霊夢に接していた紫にとってはそれは喜ばしいことであるが……………幻想郷の創設者、妖怪の賢者八雲紫にとってはそれは危惧すべきことであった。

(……………仕方がないわね)

紫は短くため息を吐いた後、霊夢に語りかける。

「……………安心しなさい霊夢。ミコトも竜希も……………二人共ちゃんとわきまえているわ。必要以上に互を傷つけるようなことはしないわよ」

紫は霊夢を安心させるように優しい口調で言う。

紫の言っていることは事実であった。

命は弾幕の威力を抑えているし竜希もミコトを斬らないように峰打ちで戦っている。二人共致命傷を与えないように気を使っているのだ。

「だから……………今は黙って戦いを見守っていなさい」

「……………わかったわ」

霊夢は紫の言葉に従って、その場で大人しく二人の戦いに視線を向けた。先ほどのように取り乱した様子は見られない。ひとまずは大

丈夫であろう。

「・・・それで紫？あなたは一体ここに何をしに来たのかしら？」

霊夢とのやり取りを終えた紫に対して幽々子が尋ねた。

「・・・ここに来た理由は二つ。一つはあの二人の戦いを見に来たのよ」

「あら？あなたがわざわざ見に来るなんて・・・そんなに興味があったの？」

「ええ。なにせミコトと竜希は共に特異な存在ですもの。ただまあ・・・結果は目に見えているけれど」

「・・・この戦いは竜希さんの勝ちですね」

妖夢が戦いを眺めながら言う。

「そうね。ミコトは確かに強いけれど・・・竜希には敵わないでしょうね」

「そんなに竜希は強いのか？」

竜希の強さを知らないレミリアが紫に聞く。他にも竜希をよく知らない者たちは紫の方を見た。

「強いわよ。それこそ・・・この幻想郷で最強を名乗れるほどに」

紫は神妙な面持ちで語る。そんな紫を見てそれが決して冗談で言われたことではないと察した一同は冷や汗を流しながらゴクリと喉を鳴らした。

「・・・それで？もう一つの理由は何？」

幽々子は紫にもう一つの理由は何かと尋ねる。

「それは・・・この異変の実行犯に会いに来たのよ」

「実行犯？」

「そう。ミコトはあくまでも異変の協力者。実際にこの霧を出して宴会を起こさせた人物は他にいるわ」

「・・・紫、あなたもしかしてその実行犯が誰なのかわかっているのかしら？」

「ええ。知っているわよ」

幽々子の間に紫はあっさりとその答えを答えた。

「それって一体誰なんだぜ？」

「…………それは二人の戦いが終わればわかるわ」
戦いを眺めながら紫は魔理沙に言う。

この時、周りを覆っていた霧がいつの間にか濃くなっていることに紫以外の者は誰一人気がついていなかった。

「混符『黒と白の螺旋』!!」

「飛天『龍巻閃』」

ミコトが放つ螺旋状の弾幕を竜希は回転しながら全て叩き落としたりした。

「チツ……………」

弾幕をいとも容易く防がれたミコトは舌打ちを打つ。

先程からこれの繰り返しだ。ミコトが弾幕を放ち、竜希はそれを躲すか防ぐ。ミコトの攻撃が竜希に当たる気配は全く見られない。

「アハハハ。いい弾幕だけどそれじゃあ俺は仕留められないよ」

竜希は余裕そう刀の峰で肩をポンポンと叩きながら言う。

「さて、それじゃあ次は…………罅迫り合いと行こうか!!」

竜希は刀を構えてミコトに接近し、斬りかかる。

「クツ……………」

ミコトは両手に剣を構えて応戦する。

ガキングキングキン!!

辺り一帯に金属がぶつかり合う音が響き渡る。

その剣戟は常人では目で追うことさえできないほどの速さで繰り広げられる。

「随分と劍の腕上がつてるね。師匠として嬉しいよ」

「悪いが俺はお前を劍術の師匠だと思つたことは一度もないよ。そもそも二刀流は我流で身につけたものだしな」

「ひどい言い草だな。まあ俺もミコちゃんも弟子だなんて本気で思つたことはないけどね！」

ドガツ！

竜希はミコトの腹に向かって蹴りを放つた。だがその蹴りは同じく放たれたミコトの蹴りによって防がれる。そしてミコトは蹴りの反動を利用して竜希から間合いを離した。

「おおっ！よく防いだね！今のは決まつたと思つただけだな」

『劍士を相手にするときには劍だけに集中するな』……お前の教えだろ」

「ハハハッ！そうだったね。忠実に守ってくれているみたいで嬉しいよ」

二人は笑みを浮かべて会話をする。だがお互いに構えは解かず、臨戦態勢を維持している。

(……わかつていたがこのままではマズいな)

だがミコトは笑みを浮かべながらも内心はかなり焦りを感じていた。

傍目から見ればミコトと竜希の間に実力差はあまりないように見える。だが実際は……戦いの流れは完全に竜希が掴んでいる。

竜希の親友であり、竜希の強さを一番理解しているミコトだからこそわかつているのだ。自分は……竜希の手の平の上で踊らされていると。

(……このままやつても俺が竜希に勝てるはずない。俺と竜希では力が違いすぎるから)

ミコトは理解していた。この戦いに自分に勝算などありはしないと。この戦いはただの自分の悪あがきに過ぎないということ。

(だったら……せめて一泡吹かせてやる)

「……クラマ、シラマ」

ミコトが呼ぶとクラマとシラマは劍から元の姿へと戻った。

「おおよよ？まさか3対1で戦うき？残念だけどそれでも俺には勝てないよ〜」

「そんなことぐらいはわかっているさ……やるぞクラマ、シラマ」
「はい」

「……（コク）」

ミコト、クラマ、シラマの3人は手を前に出した。そしてミコトの手には黄金の光が、クラマの手には黒い光が、シラマの手には白い光が集まる。

「混符『トリニティ・マスタースパーク』!!」

3人はそれぞれにマスタースパークを竜希に向かって。3つのレーザーは途中で1つに合わさって威力を増大させた。

それぞれ単独で放ったマスタースパークは魔理沙のマスタースパークよりも力は弱かったが……ミコトの魔力、クラマの霊力、シラマの妖力が合わさったそれは魔理沙の放つもの以上の力を秘めていた。

「うわお。コイツはすごいね〜」

竜希は迫り来る極太レーザーを見て感嘆の声をあげた。そうしている間にもマスタースパークは竜希向かって迫り来る。

「まあ……無駄だけど」

だが……それでも竜希は全く焦りを見せない。竜希は冷静に刀を鞘に収め、そして……

「飛天『絶龍閃』」

ザンツ!

抜刀術でマスタースパークを断ち斬った。

「……やはり届かないか」

マスタースパークが斬り裂かれるのを見て、ミコトは苦笑いを浮かべながらクラマとシラマを鈴に戻した。

「……終わりだ」

竜希は戦いを終わらせるべく、ミコトに接近し刀を振りかぶる。

そして竜希の一撃がミコトを捉えようかというその瞬間……
パシッ!

ミコトと竜希のあいだに割って入り、竜希の一撃を受け止める者がいた。

その人物は白のノースリーブに紫のロングスカート。薄い茶色の髪に赤の大きなリボンをつけ……。頭の左右からねじれた形の大 きな二本の角がはえている幼い容姿の少女であった。

「萃香……」

「ミコト……ごめんな」

幻想郷を覆う霧は……。いつの間にか晴れていた。

第80話

n o s i d e

「……君が異変の首謀者？」

竜希は目の前で自分の刀を受け止めている鬼の少女……萃香に問いかける。

「……ああ。そうだ」

「……へえ」

竜希は刀を鞘に収めた。

「ミコト……本当にごめん。私のせいで……」

「……気にするな萃香。俺はただ……自分のしたいようにしただけだ」

「それでも……ごめん」

「萃香……」

「……ねえミコト。そいつは誰？」

霊夢が近づいてきてミコトに尋ねた。

「……この子は」

「待てミコト……自分で言う」

「……わかった」

「……私は伊吹萃香。この異変を引き起こした者だ」

萃香は霊夢に向き直り、名乗った。

「そう……どうしてこんな異変を起こしたの？」

「……それは俺が話すよ」

「ミコト……でも……」

「いいんだ。考えたのは……俺だからな」

そしてミコト口から今回の異変を起こした経緯が語られた。

〜異変の始まる1週間前〜

(……ん?)

紅魔館での執事の仕事を終えたミコトは博麗神社に帰る途中、一人の少女を目にした。

(あの子は・・・鬼か?)

ミコトは頭の左右からねじれた形の大きな二本の角がはえていることから少女は鬼なのではないかと思った。

少女は近くにある巨木に体を預け、ひょうたんに入った酒をグイッと飲んでいる。

(・・・なんだろう?なんかあの子・・・引つかる)

ミコトはその少女になにか引つかるものを感じた。その何かがなんなのかが気になったミコトは能力を発動し、少女の命を感じとる。

(これは・・・)

ミコトは少女の命から引つかかるものの正体を理解した。

そしてミコトは・・・

「・・・やあ。こんにちは」

その少女に話しかけた。

「・・・?誰だお前?」

急に声をかけられた少女は首を傾げてミコトに尋ねる。

「俺はミコト。一夢命だ」

「・・・へえ、お前がか」

「俺のこと知ってるのか?」

「ああ。お前は結構有名だからな」

「はは、そうか。有名・・・ね」

ミコトは苦笑いを浮かべた。

今現在ミコトの名は幻想郷中でほとんど知らない者がいないと言えるほどに有名になっている。異変解決に協力したり文々。新聞で特集されたりしていたのである意味では当然であった。

・・・まああの本人からすれば不本意もいいところのようだが。

「ところで君の名前は?」

「・・・萃香。鬼の伊吹萃香だ」

萃香はぶつきらぼうに名前を名乗った。

「萃香ね。よろしく」

「・・・恐くないのか?」

「??何がだ?」

「……私のこと。私は……鬼だぞ?」

古来より鬼は『力』、『悪』、『恐れ』の象徴とされている。それはこの幻想郷においても例外ではなかった。

人だけではなく、妖怪でさえ鬼を恐れ、拒絶するものは多い。

だが……

「別に恐くなんてないさ」

ミコトは……萃香^鬼を恐がらなかった。

「どうして?」

「理由がないからだ。別に萃香に何かされたわけじゃないし」

「……ミコトは変わっているな」

「そうか?」

「ああ……飲むか?」

萃香はいつの間にか取り出した杯に酒を注いでミコトに差し出した。

「いただきます」

杯を受け取ったミコトは萃香のとなりに腰掛け、杯に入った酒を口に含んだ。

「……ほう。美味しいな」

「当然だ。なにせ私特性の酒だからな。ほら、もう一杯飲め」

「ありがとう」

萃香は空になったミコトの杯に酒を注ぐ。

「ところで萃香。聞きたいことがあるのだが」

「なんだ?」

「……お前はいつも一人で酒を飲んでいるのか?」

「……ああ。まあな」

「そうか……寂しくないのか?」

ミコトは萃香を見つめながら問う。その目は……憂いが秘められていた。

「……うん。寂しいよ」

萃香は悲しそうな表情で顔を伏せてながら答えた。

(・・・やっぱりか)

萃香のその答えはミコトの予想通りのものであった。

ミコトが萃香の命から感じ取ったもの・・・それは寂しさ。それも命に顛れるほどに大きな寂しさだ。

「・・・ならどうして一人で酒を飲んでいるんだ？寂しいなら・・・誰かと一緒に酒を飲めばいいんじゃないか？」

「・・・私だってそうしたいさ。でも・・・んだ」

「怖い？」

「ああ・・・私は・・・嫌悪されている。鬼だから・・・皆に嫌わられている。私はそれが恐くてたまらないんだ。嫌われるのが・・・怖い」

萃香は自分の体を両腕で抱きしめる。

「・・・よほど恐いのだろう。体は小刻みに震えていた。

「酔いたいのに・・・——に酔いしれたいのに私は・・・ダメなんだ。嫌われるんじゃないかって思ってしまった・・・恐くて誰かと一緒に酒を飲むことができない」

ついには萃香は涙を流してしまった。

萃香の悲しみは・・・寂しさはあまりにも深すぎる。

「萃香・・・」

ギョツ

「え？」

そんな萃香を・・・ミコトはそつと抱きしめた。

「そうだよな。怖いよな。嫌われるのつて・・・すごく辛いよな。萃香の気持ち・・・俺はよくわかる。俺も・・・同じだったから」

「ミコトも・・・同じっ？」

「俺もな・・・皆から嫌われていた。誰からも嫌われていて拒絶されていて・・・すごく苦しくて辛かった時期があった。だから・・・萃香の気持ちは俺はよくわかる」

「・・・」

「でも大丈夫だ。今は・・・一人じゃない。今は・・・俺がいる」

ミコトは抱きしめる腕の力を強くした。

「だから……一緒に酔おう。俺は萃香を……嫌わないから」

ミコトは萃香の心を溶かすように暖かな口調で語りかける。

「本当に……嫌わない？」

「ああ」

「私と……一緒に酔ってくれる？」

「ああ。だから……大丈夫だ」

「ミコト……ト。ありが……とう」

萃香はミコトにしがみつき、胸に顔をうずめて涙を流す。

ミコトは萃香を優しく受け止めた。

「宴会？」

「そ。来週博麗神社でやる宴会、萃香も来ないか？」

しばらくして泣き止んだ萃香にミコトが提案した。

「で、でも……」

だが萃香はその提案を受け入れようとはしなかった。

「……不安か？」

「……うん。ミコトは私を嫌わないでくれるけど……他の人は

そうだとはいえないし」

「……大丈夫だよ。宴会に参加するのは皆俺の知人だが……萃

香のことを嫌うような子達じゃない。それは俺が保証する」

ミコトは萃香を安心させるために笑顔を向ける。

「それでも私は……」

だが萃香の表情は晴れない。

今まで嫌われ、虐げられて生きてきたのだ。萃香の心に染み付いた

恐怖が簡単には払拭されなかった。

「……わかった。なら……」

「……それでこの異変を起こしたってことね」

「ああ。萃香が宴会に参加できるようになるまで何度も宴会をしようと考えたんだよ。萃香の能力を使えばそれが可能だったからな」

「萃香ちゃんの能力？それってどんな能力なのかな？」

竜希は萃香に尋ねる。他の者も気になっているのであろう。一斉に萃香の方を見た。

「……私の能力は……」

『密と疎を操る程度の能力』……それが萃香の能力よ」

萃香の言葉を遮って、紫が言った。

「紫……」

「久しぶりね……萃香」

紫は萃香を見ながら胡散臭い笑みを浮かべた。

「……そうだな」

対する萃香の方は複雑そうな表情をしている。おそらく過去に何かあったのだろう。

「紫、あんたこの鬼と知り合いなの？」

「ちよつとした昔馴染みよ」

「そう……それで？その『密と疎を操る程度の能力』ってどんなの

？」

「密度を操る能力……もつと詳しく言うなら物質から精神に至るまで様々なものを萃めたり疎めたりすることができる能力よ」

「なるほどね〜……それで俺達を萃めて宴会を起こさせたわけか〜」

竜希が納得したように大きく頷いた。

「……その通りだ。皆には本当に悪いと思っている。私が……私に勇気がなかったから……今までお前たちを巻き込んで……」
「萃香……違う……萃香は悪くない。この異変を考えたのは俺だ。だから非は俺にある」

ミコトは顔を失せて申し訳なさそうにしている萃香の頭を撫でながら優しく慰めた。

「皆……本当にすまなかった」

ミコトはその場にいた者たちに頭を下げて謝罪した。萃香の為とは言え……皆を巻き込んでしまったことに対しては本気で罪悪感を持っているようだ。

「ミコト……はあ、全く。頭をあげなさい」

霊夢はミコトに頭を上げるように指示した。そして言われた通りに頭を上げたミコトに対して……

ペチン

軽く平手打ちした。

「霊……夢？」

「あんたねえ……なんで私に一言も言わなかったの？言ってくれば……私だって協力したわよ」

「え？」

ミコトは一瞬キョトンとした表情をした。

「でも……霊夢は博麗の巫女だから異変に協力するなんてできないんじゃない？」

「そうよ。だから……異変にしなければいいの。異変にしないで……普通に宴会を起こせばいい。そうやってそいつが宴会に出られるように普通に繰り返してればよかったのよ」

「いや……でもそれは……」

「少なくとも異変を起こすよりはずっとまともでしょ？もしも反対する奴がいても私が黙らせるし」

霊夢は（黒い）笑みを浮かべて言った。

（）……霊夢が言うところならいいなあ（）

この場にいたものほとんど全員がそう思ったのは、ある意味当然だろう。さすがは霊夢である。

「まあ確かに霊夢の言うとおりだな。そっちの方が異変を起こすよりはよっぽどいいと私も思うぜ。まあ幹事の仕事をするのは結構きついけどな」

魔理沙もまた笑顔を浮かべながら霊夢のいうことに同意した。

「そもそも……萃香っていつたけあんだ？」

「あ、ああ」

「あんたも何遠慮してんのよ。宴会に参加したいならさっさとくればよかったのよ」

「で、でも……」

「でもじゃない。いい？ここには妖怪やら吸血鬼やら亡霊やら魔法使いやら人外やらいろんな奴がいるのよ。今更鬼が一匹増えようと気にする輩なんていないわ」

霊夢はその場に居る者たちを見渡しながら萃香に言う。

「……ねえ霊夢ちゃん？なんか人外って言ったとき俺の方見なかった？俺だけじゃなくてミコちゃんも……もつと言うと霊夢ちゃんや魔理沙ちゃんも人外だよね？」

「うるさいわね。今はそんなのどうでもいいんだから割り込んでこないで」

「……はい。わかりました」

霊夢に言われて竜希は肩をがっくりと落としながら凹んでいた。流石に哀れに思えたのか妖夢が竜希の肩を叩いて慰めている。

「ともかく！あんたの事情なんて正直知ったことじゃない！だから今日の宴会にはあんたも参加しなさい！これは決定事項よ！いいわね！」

「あ、ああ」

霊夢はビシツと自分を指差しながら言い放つ霊夢の勢いに押されて、萃香はつい了承してしまった。

「はい。じゃあこれで異変は解決。とっとと宴会の準備を進めるわよ。ミコトと萃香もちゃんと手伝いなさいね。あんたたちもよ」

霊夢はミコトと萃香、そしてその場にいた全員に向かっていった。

「……了解霊夢」

「わ、わかった」

ミコトと萃香の返事を聞いてクスリと微笑んだあと、霊夢は皆と一緒に宴会の準備にとりかかった。

「……はははっ、霊夢らしいな。さて、それじゃあ準備を手伝おうか萃香」

「……」

「萃香?」

「……ミコトの言うとおりだったな」

「え?」

「ここに居る連中は……全然私のことを嫌ってるように見えなかった。異変を起こして迷惑までかけたのに……皆私を疎ましく思っていないみたいだし……」

「……ここにはそんな小さいことを気にするような奴はいないさ。なにせ皆……相当の変わり者だからな」

ミコトはニコリと頬笑みを浮かべながら言った。

「……そうか。本当に……もつと早くに出てこればよかった」

「……だな」

「二人共!早く手伝いなさい!」

話し込んでいるミコトと萃香に向かって霊夢の激が飛ぶ。

「今行くよ。萃香」

「ああ」

ミコトと萃香も宴会の準備に加わった。

第81話

side ミコト

「萃香……楽しそうだな」

俺は少し離れたところから萃香の様子を眺めていた。

今萃香は霊夢と魔理沙の二人と一緒に酒を飲んでいる。本当に楽しそうに笑顔を浮かべて。

「やつほくミコちゃん」

「……竜希か」

竜希がヘラヘラとした笑みを浮かべながらやってきた。その手には酒瓶と杯を持っている。

「随分とまあ満足そうな顔しちやってるじゃない」

「……そう見えるか？」

「それはもう」

「……そうか。お前にそう見えるということとはそうなんだろうな」

まあ実際……この結果にはそれなりに満足しているがな。

萃香は孤独ではなくなった。誰かと酒を酌み交わすことができるようになって……——に酔えるようになった。

……これで良かったんだ。

「ほら、ミコちゃん」

竜希が俺に酒の入った杯を手渡してきた。

「……サンキュ」

俺はそれを受け取って一気の飲み干す。酒独特の辛さが舌と喉を焼く。

「随分と強い酒だな」

「ハハッ！ 幽々子さんにもらった取って置きだからね。美味しいでしよっ。」

「ああ。悪くない」

「それは良かった……ところでミコちゃん。聞きたいことがあるんだけどいいかな？」

「……なんだ？」

「・・・どうして萃香ちゃんに協力したの？昔の自分と似た境遇の萃香ちゃんに同情したから？それとも・・・自己満足のため？」
竜希は俺を正面から見据えて尋ねてくる。表情も口調も依然ゆるいものだが・・・目は真剣そのものだ。下手な誤魔化しなど通用しないであろう。

「・・・両方だよ。ただまあ・・・どちらかといえば後者に近いがな」

そう。俺が萃香に協力した一番の理由は・・・俺自身の自己満足のためだ。

俺は萃香にかつての自分の境遇を重ねた。

誰からも拒絶された俺と

誰からも受け入れられなかった俺と

誰からも蔑まれていた俺と

誰からも価値を与えられなかった俺と

だから俺は・・・自分と似た境遇の萃香に協力し、救うことで・・・まるで俺自身が救われたかのように思おうとしたんだ。

・・・他ならぬ自分の為に。

「・・・ふん、そっか。それを聞いてちよつと安心したよ」

・・・え？

「安心・・・だと？」

「そ。だって俺の知る限りミコちゃんは自分の為に行動を起こそうとしない人だったからね。そんなミコちゃんが自分のエゴのために行動を起こして異変にまで関与しちゃったんだから・・・親友としては嬉しいんだよ」

竜希はニツと歯を見せながら俺に笑顔を向けてきた。

「もつと・・・自分を大切にしなよ親友」

・・・全く。コイツは本当に・・・

・・・竜希が親友でよかった。まあ絶対に口には出さないが。

「・・・善処しよう」

「・・・あはは！そこは素直に了解してよく。でもまあ・・・頷いてくれたぶん進歩かな？今のミコちゃんを・・・あの子に見せてあ

「げたいよ」

竜希は懐かしむように空を見上げながら言う。

「あの子？」

「ほら、笑顔の似合う可愛い後輩ちゃんだよ。数少ないミコちゃんを拒絶しなかったね。まさか忘れちゃったなんて言わないよね？」

ああ……あいつのことか。

「忘れるはずないさ。あいつは……大切な後輩だったからな」

元居た世界で俺を拒絶せずに、受け入れてくるた人間が4人だけ居た。

神楽と竜希。そして……俺が初めて恋焦がれたあの人と……俺の中学時代の後輩の女の子。

「もう長いことあってないけど……きつと今はもつと可愛くなってるんだらうね。そこんところどうなの？」

「……さあな。俺も神楽が死んで以来は会ってないから」

「そなの？」

「ああ。でも……あいつにくらい別れの言葉を言っておきたかったな。それだけが……外の世界に唯一残してきた後悔だよ」

「……それは俺も同感だね」

あいつは……元気であの世界で笑って過ごしているだろうか？

「今頃お前は どうしているんだ……」

早苗」

俺はかつての友人を思い返しながら、再び酒を口にした。

side 霊夢

「なあ霊夢。ミコトはここで暮らしてるんだよな？」

一緒にお酒を飲んでいた萃香が私と魔理沙に尋ねてきた。

「ええ」

「じゃあ霊夢はミコトとの付き合いは長いのか？」

「まあそうね。幻想郷でミコトと一番長く一緒に過ごしているのは私だし」

「でもミコトが幻想郷に来たのはまだほんの3ヶ月前のことだぜ？それほど長くはないと思うが？」

魔理沙がからかうような笑みを浮かべて突っ込んできた。

「うるさいわね。そんな細かいことはどうだっていいじゃない」

「いや、そこまで細かくはないと思うんだが……」

「それで？それがどうかしたの萃香？」

魔理沙がなにかぼやいてるが私は無視することにした。

「ああ。なんていうか……ミコトはなんであんなに優しいんだ？」

「は？」

「コイツ……何言ってるのかしら？」

「ミコトは私の為に力を貸してくれた。私を救う為に……それはすごい」

く嬉しい。でも……出会って間もない私にどうして協力してくれ
たのか私にはわからないんだ。人間なんて所詮……自分の為にし
か動かないような奴なのに」

随分な言いようね。まあ否定はしないけれど。私だって自分に利
益のないことはしたくはないし。

「ふふ……その答えなら私でもわかるぜ！ズバリそれがミコトだから
だ！」

「え？」

魔理沙はビシツと萃香を指差して堂々と言い放った。萃香はポカ
ンとした表情で唾然としている。

「えっと……意味がわからないんだが？」

「ミコトはな……とにかく底抜けに優しい奴なんだよ。いつだって
他人のことを思いやって誰かを救うためなら自分が傷つくことも厭
わないほどにな。ミコトはお前が人間に抱いている常識とはかけ離
れた奴なんだぜ！」

魔理沙はまるで自分のことのように胸を張って自慢げに言う。

……なんで自分のことでもないのにこんなに偉そうに言えるの
かしら？

「底抜けに優しい……それがミコトか」

萃香は納得したように頷いて頬笑みを浮かべた。

……確かにミコトは優しい。底抜けに……信じられないく
らい優しい。私もそんまミコトの優しさで心地よさを感じることに
今までに多々あった。

でも……

「……多分違うわよ」

「……え？」

私は……そうではないと思う。

「今回萃香に協力したのは……ミコトが優しいからだけじゃないわ」
「……どういふことだ霊夢？」

魔理沙が首を傾げて聞き返してきた。

「確かにミコトは優しいわ。いつだって誰かのことを思いやって……

誰かの為に力を貸して……馬鹿みたいに優しい奴よ。でも今回萃香に手を貸したのは……もちろん萃香のためっていうのもあるんでしようけどそれ以上に自分の為にやったことだと私は思うわ」

「自分の……為に？」

「ええ。ミコトは多分……萃香にかつての自分の境遇を重ねたのよ。だから萃香を救おうとした」

「かつての自分の境遇と私を重ねた？」

「そう。ミコトは……元居た世界で拒絶されていたのよ。誰からも認められず、誰からも価値を見出されず……誰からも愛されなかった」

「……自分で言っていて怒りがこみ上げてくるのがわかる。ミコトを拒絶していた連中への怒りが。」

「な、なんだよそれ？そんなの……私は聞いてないぜ？」

「……そんなこと自分から好き好んで話すわけ無いでしょ。そんな……辛いことを」

「そ、そうか……」

「ともかく、今回ミコトが萃香に手を貸したのは萃香に自分の境遇を重ねて放っておけなかったからだと思っわ。萃香を救うことで……自分が救われた気になるために。自己満足のためにね。だから萃香……あんたは救われなきゃいけないのよ」

「え？」

「あのミコトが……いつも他人のことばかりで自分のことをないがしろにしていたミコトが自分の為にあんたを救うことを願った。だからあんたは救われなきゃいけないのよ。それがミコトの救いになるんだから」

私は真っ直ぐに萃香の目を見据えながら言う。

「私が救われることが……ミコトの救い？」

「そうよ。ミコトに感謝してるのなら……きっちり救われなさい。それがミコトへの恩返しになるから」

「ミコトへの恩返しか……そうだな。私が救われることでミコトが救われるなら……私は救われてなきゃな」

萃香はニツコリと笑顔を浮かべる。

それは……まさしく救われた者の笑顔だ。

「ん。わかればよろしい」

私はそんな萃香の頭を撫でてやった。ミコトならそうするだろう
なと思っただから。

「……随分とまあめちやくちやな理屈だな霊夢」

魔理沙は苦笑いを浮かべながら突っ込んできた。

「なにか文句あるの？」

「いや別にないけどさ……」

「ならいいじゃない。それよりも、せっかくの宴会なんだから二人共
もつと飲みなさいよ」

私は先ほどから手が止まっている魔理沙と萃香に促した。

「ああ！じゃんじゃん飲むぞ！」

「言われなくてもわかってるぜ！つと、そういや萃香、その瓢箪に入っ
てる酒って美味しいのか？」

魔理沙は萃香の手に行っている瓢箪を指差して言った。

「当然！なにせ私特性の酒だからな」

「そいつは興味深いな……ちよつと飲ませてくれ」

「いいぞ。霊夢も飲むか？」

「ええ。もうわ」

「ほら」

萃香は杯にお酒を注いで私と魔理沙に渡した。

「それじゃあ改めて……乾杯！」

そして魔理沙が改めて乾杯の音頭をとって、私達はお酒を一気に飲
み干した。

side ミコト

「……ふう」

俺が煙管を吸いながら涼んでいると……

「こんなところで何してるんだミコト？」

萃香が話しかけてきた。

「見ての通り。煙管吸いながら涼んでるんだよ」

「へえ……ミコトって煙管吸うんだな」

「まあな。結構気に入ってる」

「そうか……ミコト、さつき霊夢から聞いたんだが……お前も私と同じだったのか？」

「ん？」

「私みたいに……蔑まれながら生きていたのか？」

萃香は悲しそうな表情で聞いてきた。

「……ああ。そうだよ」

「……私に協力してくれたのは……自分の境遇と私を重ねてたからなのか？」

「……ああ」

「そつか……ミコト。私は……救われたよ」

「え？」

「私は……救われた。こうして誰かと一緒に酒を飲めるようになった。こうして……『者』に酔いしれることができるようになった」

萃香は満足そうな微笑みを俺に向ける。

「そうか……それは良かった」

萃香の望み……それは『者』に酔いしれること。

萃香は自分以外の『者』を恐れていた。だからこそ萃香は孤独に苛まれ、『者』にようことができなかった。

でも今は違う。今は……萃香とともに笑いながら酒を飲んでくれる『者』がここにいる。萃香はもう孤独ではなく、ちゃんと『者』に

酔いしれることができている。

萃香は……救われたんだ。

「だからさ……ミコトも救われたよな?」

萃香は俺の顔を覗き込みながら少し不安そうに聞いてきた。

「……ああ。救われたよ。萃香が救われたから……俺も満足だ」

「……なら良かった!」

ペアツと無邪気な笑顔を見せる萃香。

その笑顔を見ると……俺も救われたという実感が湧いてきた。

(……こういう感覚も……悪くはないな)

「あく……ところでミコト。ごめん」

俺が少し悦に入っていると萃香がバツの悪そうな表情をしながら謝ってきた。

「??なにを謝っている萃香?」

「ああ。実は……」

「みことお〜♪」

「!?!」

突然、俺の背後から二つの何かが飛びついてきた。バランスを崩して倒れそうになるのをなんとか堪え、後ろを振り向くとそこには……

「えへへ〜♪みことお〜♪」

「みことおはあつたかいぜ〜♪」

顔を真っ赤にさせて擦り寄ってくる霊夢と魔理沙の姿があった。

「……萃香。これはどういうことだ?」

「あく……えつと……私の酒を飲ませたら……こうなっちゃった。ミコトは平然と飲んでたから大丈夫だと思っただけだな……」

萃香はアハハと苦笑いを浮かべながら視線を逸らして説明してきた。

(……マジかよおい)

俺は思わず頭を抱えてしまった。

「みことお〜。わたしいにだまっていへんのでだしゆけなんかしたんだから……うめあわせしてもらおうわよ〜♪」

「もちろんわたしいにもなく♪」

二人はとろんとして焦点の合っていない目で俺を見つめながら猫撫で声で俺に甘えてくる。

「あはは・・・それじゃあミコト、頑張れよ」

「ちよつと待て萃香。こいつら何とかしてくれ」

「・・・ごめん。私には無理だ。まあ据え膳食わぬは男の恥って言うし・・・頑張れ」

「その微妙な笑顔やめろ。つうか待て。行くな萃香」

俺が引き止めるのも虚しく、萃香は去って行ってしまった。

「みことおっ♪」

相変わらず甘えた声を出してくる霊夢と魔理沙。

(・・・仕方がない。自分で何とかするしかない・・・か)

言うまでもないがこの後霊夢と魔理沙を鎮めるために俺は奮闘することになった。

紅月狂く吸血鬼の愛せしもの 第82話

n o s i d e

幻想郷の霧の湖。その畔に大きな屋敷が一軒建っている。

屋敷の名は『紅魔館』

見るものを圧倒するほどに鮮やかな紅い屋敷だ。

「……もうすぐね」

その屋敷の主たる吸血鬼……レミリア・スカーレットは自室の窓から月を眺めていた。

「お姉様」

そんなレミリアに声をかけるものが一人。

レミリアの妹……フランドール・スカーレットだ。

「……もうすぐなんだよね?」

フランドールはレミリアの隣に立ち、月を仰ぐ。

「ええ……二日後にあの月は……私達を狂わせる」

レミリアは月を見つめながら悲しそうな声色で語る。

「……お姉様。私……私怖い」

「……わかってるわ。私も……怖いもの」

二人の脳裏によぎるのは過ぎ去りし日の記憶。狂気に支配され、ひたすらに破壊と殺戮の限りを尽くした悍しき記憶。

「……大丈夫よフラン。もうあんなことにはならない。その為にパチエが頑張ってくれたんだもの。きつと……大丈夫よ」

レミリアは強く、優しくフランドールを抱きしめる。フランドールを安心させるために。当の本人も恐怖にとらわれているにも関わらず……

「お姉様……うん」

レミリアの胸に顔を埋めるフランドール。その目からは……涙がこぼれ落ちる。

(大丈夫……絶対に大丈夫よ。絶対に……)

レミリアはフランドールを抱きとめながら、心の中で強く言い聞かせた。

屋敷を見下ろす淡き黄金の月

二日後にはその月は……『紅』に染まる

吸血鬼が最も愛し、もつとの忌み嫌う『紅』に

夜が明け、博麗神社にて

「ミコト……一緒に飲もう！」

神社境内に鬼の少女……。萃香の快活とした声が響き渡る。その手には酒の入った瓢箪が握られており、顔がほんのりと赤い。既にいくらか酒を飲んでいようだ。

「うるさいわね。もう少し声を抑えなさいよ」

その声を聞き、本殿の中からこの神社の巫女……。霊夢が顔をかめながら姿を現した。

「アハハ！ごめんな」

「全くもう……」

悪びれなく笑いながら言う萃香に対して、霊夢はやれやれといった様子で額に手を当てた。

「ところでミコトはどこだ？」

萃香はキョロキョロと辺りを見渡しながらミコトの姿を探す。

「残念ながらミコトならいないわよ」

「え〜……ミコトと飲むの楽しみにしてたんだけどな〜」

ミコトがいらないと言われてがっかりと肩をすくめる萃香。

「……ちなみにいつになったら帰ってくるんだ？」

「三日後よ。それまでは神社には帰ってこないわ」

「三日も!?!?どうして!?!」

まさか三日も帰ってこないとは思っていなかったために萃香は驚きの声を上げる。

「今日から三日間、紅魔館で執事の仕事をすることになってるのよ」

「咲夜さん、少々よろしいでしょうか？」

場所は変わって紅魔館。屋敷内の清掃を一通り終えた後、ミコト

(執事バージョン) が咲夜に声をかけた。

「なにかしらミコト？」

「レミリアお嬢様とフレンドールお嬢様に何かあったのですか？」

「……どうしてそんなことを聞くのかしら？」

問われた咲夜はミコトに訝しげな視線を向ける。

「いえ……先ほど会った時に少し様子がおかしかったので気になりまして……」

事実、ミコトの言うとおりレミリアとフレンドールの様子は普段のものとはまるで違っていた。

レミリアはミコトが話しかけてもどこか上の空であり、生返事を返してくるばかりであった。

フレンドールはミコトが部屋に訪れた際にはいつも嬉しそうに飛

びついてはしゃいでいるのに今日は大人しくしており、元気がなかった。

そんな風に二人の様子がいつもとは明らかに違っていたことからミコトは心配になったのだ。

「お二人に何かあったのですか？ あったというのなら教えてください
咲夜さん」

「・・・なぜ知りたいのかしら？」

「私は今この紅魔館の執事ですので。お嬢様方を悩ませる何かがあるというのなら私はそれを知り、その悩みの種を取り除きたいと思えます」

ミコトは真っ直ぐに咲夜を見据えて言う。その目は真剣そのものだ。

「・・・それは越権行為よ。お嬢様も妹様も一言でもあなたに助けを求めたかしら？ 執事ならば仕える者の言うことのみにただ従事すればいいのよ。余計なことをする必要はないわ」

しかし咲夜はきつぱりと言い放ち、ミコトを突き放した。

「・・・いいえ、私はそうは思いません」

「え？」

「たとえお嬢様方の命令がなくとも、お嬢様方が今一番何を求めているのか、何を望んでいるのかを知り、その為に尽くす・・・それが執事としてのあるべき姿であると私は思っております。たとえそれでお嬢様方から疎まれようとも」

「・・・」

執事であるミコトにとって恐ることはレミリアやフランドールに疎まれることではない。最も恐るのは二人の力になれないこと。二人の為に力を尽くせず、二人を苦しみから助けられないこと。

二人の為になれるのならミコトにとって疎まれることは恐るるに足らぬことであった。

「教えてください咲夜さん。お嬢様方に何かあったのですか？」

故にミコトは・・・決して引こうとはしなかった。何がレミリアとフランドールを悩ませているのか・・・それを知り、その悩みを

取り除きたいと心の底から願っているのだ。

「全く……まだ執事になって三ヶ月程度だっというのに……」
「咲夜さん？」

「あなたの言うとおりのよ。一流のメイドや執事はたとえ命じられていなくとも、仕える者の為には持てる力を尽くすものよ。まさか執事になって日が浅いあなたがそこに到れるなんてね。やっぱりあなた素質があるわ」

咲夜は素直にミコトのことを賞賛する。それはまごうことなき咲夜の思いであった。

ミコトの言っていることは執事として正しいことであった。一流の執事ならば言葉に出されずとも主の求めに答えられる器量が必要となる。それをわかった上で咲夜は先ほどミコトを突き放したのだ。ミコトを試すために。

「いえ、素質なんて……私はただ……」

「謙遜しなくてもいいわよ。長年この屋敷でメイド長を務めている私が言うのだから誇ってもいいわ」

「……はい。ありがとうございます。それで……お嬢様方に何があつたのですか？」

「……あつたのではないわ。これから起きるのよ」

咲夜は表情を暗くし、顔を伏せながら言う。

「??これから……起きる??」

「ええ。正確には明日の夜……月が昇つその時に……」

「月が昇つた時に……ですか？」

「明日の月は魔性の月。明日の月はまるで血のように紅く染まる。その月が……お嬢様と妹様を狂わせるのよ」

「紅い月がお嬢様方を狂わせる……紅い月の魔力が原因ですか？」
ミコトもまた魔力を持ち、僅かではあるが魔法を扱うことができる魔法使い。故に月に秘められた魔力についてのことは理解していた。「そうよ。紅く染まった月が放出する特殊な魔力は吸血鬼の妖力に作用するの。そして理性を崩壊させ、狂わせるのよ」

「……以前のフランドールお嬢様のようにですか？」

ミコトはかつて自身が対峙した時の……破壊の限りを尽くそうとしたフランドールのことを思い出す。

「……いいえ、それ以上の狂気よ。あの時の妹様は破壊することに囚われていたけれどまだ理性が残っていた。でも紅い月の魔力に当てられてしまえば……理性は一切働かなくなる。私はかつて一度だけその状態のお嬢様と妹様を見たことがあるけれど……狂気のままに破壊と殺戮を繰り返し、死体から血を啜るその姿は正しく……吸血鬼、『血を吸う鬼』だったわ」

咲夜は自らの腕を押さえつけて言った。その体は微かに震えている。おそらく……というより間違はなく恐怖から来る震えであろう。「つまり……レミリアお嬢様とフランドールお嬢様はそれを恐れているということですか？」

「ええ。以前お嬢様が起こした異変……お嬢様は太陽の光を遮るために起こしたと言っていたけれども一つ……月を遮るためでもあったと私は思うわ。月を遮れば月からの魔力の影響も受けずに済むから。それほどまでに紅い月からもたらされる魔力を……狂気にとりつかれたご自身を恐れていらっしやるのよ」

「あの異変にはそんな意味も……」

むしろレミリアにとってはあの異変はそちらのほうが本懐であった。レミリアは狂気に支配されることを何よりも恐れているから……

しかしそのことはミコト達には話さなかった。余計な気を使わせたくないと思っていたからだ。

「……なら今からまた霧を発生させればいいのでは？ そうすれば月の魔力の影響を受けずに済むのではありませんか？」

ミコトははっと思いつき咲夜に提案した。

だが……

「残念ながらそれは無理よ。あの霧を発生させるのはかなりの手間を要するの。今からでは到底間に合わない」

しかしミコトの思いも虚しく、それは叶わぬものであった。

「そうですか……なら何か別の方法は……」

ミコトは何か方法はないかと必死で知恵を振り絞った。

「……あるわ」

「え?」

「月の魔力の影響を受けなくなる方法ならある。パチュリー様が開発した魔法陣……その中に入っていれば紅い月からもたらされる魔力の影響を受けずに済むの」

「本当ですか!？」

咲夜から対抗手段があることを聞いてミコトは嬉しそうに喜んだ。

「ええ。ただ……」

「ただ……なんです?」

「……パチュリー様が言うには確実に防げるとは言い切れないらしいわ。このような魔法を試みるのはパチュリー様初めてらしいから確証が持てないみたいなの。そのことはお嬢様達も知っています……」

「だからまだ……お嬢様方は恐怖にとらわれているんですね」

「……そうよ」

「……そうですか」

対抗策はあってもそれは確実性に欠ける。故に失敗して……またかつてのように狂気に支配されてしまうかもしれない。

そう思ってしまうからこそ……今なおレミリアとフランドールは恐怖にとらわれているのだ。

「……咲夜さん。少し時間をいただいてもよろしいでしょうか?」

咲夜から話を聞いた後しばらく何かを考え込んでいたミコトがそう告げた。

「ミコト?」

「……お嬢様方のところに行かせてください。私にできることなど微々たるものかもしれませんが……少しでもレミリア様とフランドール様の不安を和らげたいのです。どうかお願いいたします」

ミコトは深々と咲夜に頭を下げ、頼み込んだ。

「ミコト……わかったわ。行きなさい」

咲夜はミコトの頼みを聞き入れた。

「ありがとうございます」

咲夜から許可をもらったミコトはその場をあとにする。

(・・・ふふっ、やっぱりミコトは執事に向いているわね)

咲夜は頬笑みを浮かべ、ミコトの後ろ姿を見つめていた。

(いっそずっとここで執事で行ってくれたらいいのに・・・そうすれば私もっとミコトと・・・って、私ったら何を・・・)

首を横に振って自分を落ち着ける咲夜。

(ミコト・・・お嬢様と妹様をお願い。あなたならきっと二人を・・・)

咲夜はミコトを見送ると、メイドの仕事を再開させた。

第83話

no s i d e

「……明日か」

レミリアは自室に備え付けられたベッドに横たわり、ぼんやりと天井を眺めていた。その表情からは憂いが見て取れる。

明日の夜、紅い月が昇ると同時に、自分は狂気に支配されてしまう。その恐怖がレミリアの心を蝕み、苦しめている。

「どうして……私達は逆らえないのかしらね」

消え入りそうな声でレミリアは呟いた。

狂気に支配され、嬉々としてあらゆるものを壊し、あらゆる命を奪いつくし、その血を啜る自分自身の姿を想像するレミリア。

そしてレミリアは思う。きっとその時の自分は……酷く醜いであろうと。

それがレミリアにとって恐ろしかった。

自分を慕ってくれる従者咲夜に、自分の大切な親友パチュリに、屋敷を守ってくれる門番美鈴に、そして何よりも……愛する者ミコトに狂気に染まった自分を見られてしまうことがたまたまなく恐ろしかった。

「……怖いよお」

レミリアは自身の体を強く抱きしめながら涙を流した。

数百年という長い時を生きてきたレミリア。だがしかし、そんな彼女でも当然のように怖いものはある。

レミリアにとってそれは『狂気に染まった自分を見られること』。

狂気に染まり、破壊の限りを尽くすのももちろん怖い。だが彼女にとってはそのと同じくらい……否、それ以上に狂気に染まった自分を目にして、大切な者が自身を拒絶し、嫌われてしまうことがレミリアにとって恐ろしいのだ。

それがレミリアを蝕む……恐怖であった。

「う……うう……」

ポロポロポロと恐怖に囚われ涙を流すレミリア。

そんな時……

コンコン

レミリアの耳に、部屋をノックする音が聞こえてきた。

「ツ!!だ、誰?」

レミリアはすぐさま涙を拭って対応する。

「ミコトです」

聞こえてきたのはレミリアが心より愛してやまな人物、ミコトの声であった。

「ミコト? どうしたの?」

ミコトの来訪に多少動揺したがレミリアはそれを悟らせぬようにいたって平静に尋ねた。

「少々お話がありまして……入ってもよろしいでしょうか?」

「……悪いけど今はちよつと忙しいからまた後にして頂戴」

レミリアはミコトの入室を断る。

レミリアにとってミコトはある意味では今一番会いたくない人物であった。このように恐怖に囚われ、弱っている自分の姿を見られたくなかったからだ。

「……そうですか。わかりました」

レミリアの返答を聞き、了承した後ミコトは……

「では失礼します」

扉を開き、部屋に入ってきた。

「って、ミコト!? なんで入ってきてるのよ!!」

了承したにも関わらず全く逆の行動を取ったミコトに対してレミリアは思わず声を荒げてしまった。

「すみません。どうしても話したかったものでしてレミリアお嬢様の意思に背いてしまいました。どうかお許しを」

「自分の意思を優先するってあなた本当に執事!? というよりはじめから話すつもりだったらなんで一々許可を取ろうとしたの!?!」

礼儀正しくお辞儀をするミコトにレミリアはもつともなツツコミを入れた。

「なんでと言われましても……礼儀です」

「……あなた今びっくりするくらい矛盾したこと言ってるって自

分気づいてる？」

「それはもう承知の上ですよ」

呆れながら尋ねてくるレミリアに対して清々しいまでの執事スマイルを向けて答えるミコト。大物ではなからうかと錯覚してしまうほどのふてぶてしさである。

「……というより先程までのシリアスははどうしてしまったのであろうか。」

「全く……それで？話って何？」

これ以上突っ込んでも仕方がないと判断したレミリアは仕方なしにミコトの話を聞くことにした。

「その前に……失礼いたします」

スツ

レミリアに近づいたミコトは取り出したハンカチでレミリアの顔を撫で始めた。

「何してるのミコト？」

「……目が少し腫れています。それに頬を濡れておりますし……泣いておられたのですか？」

「!？」

凶星を突かれたレミリアは思わず体をビクリと反応させてしまった。

「……やはり泣いておられたのですね」

「ち、違うの……これは……」

「……レミリアお嬢様」

ギョッ

「え？」

ミコトはレミリアの体を抱きしめた。壊れ物を扱うかのように優しく……

「隠す必要などありません……咲夜さんから聞きました。明日のことを……」

「!?そう……なんだ」

「はい。それともう一つ……レミリアお嬢様が今恐怖に囚われ、悲

しんでいることもわかっております。それこそ命に現れるほどに」

そうミコトは感じていた。レミリアの命から隠しきれないほどの恐れと悲しみを……

「……本当に便利な能力ね。でも……今の私にとっては忌々しいわ。恐れも悲しみも……筒抜けだななんて」

「そうですね。私もこの能力は好きではありません」

ミコトは苦笑いを浮かべながら言った。

「……レミリアお嬢様。やはりあなたは狂気に支配されるのを恐れているのですね」

「……ええ、そうよ。ミコトには隠しても無駄なんでしょうから言うわ。私は……恐いの。狂気に支配されて、見境なく壊してしまうのが……それが恐くて堪らない」

レミリアはミコトの胸に顔を埋めて涙を流しながら訴えた。

「そしてそれ以上に……嬉々として破壊を楽しんでしまう姿をあなた達に見られるのが怖い！あんな醜い私を見られたくないの！そんな私を見せて皆に嫌われたくないの！」

「レミリアお嬢様……」

声を荒げながら必死に訴えかけているレミリアを見てミコトは思った。自分が考えている以上にレミリアの恐怖の根は深いということに。

「狂気に支配されないようにする魔法をパチュリーが開発してくれたのは知ってる。でも……それだって確実性はない。もしかしたら失敗するかもしれない。失敗して結局狂気に飲まれて……私は……」

言葉を紡ぎ終わった後、レミリアの体が小刻みに震え始める。

それはまるで怖いものに怯える小さな子供のように……

そんなレミリアにミコトは……

「……大丈夫ですよレミリアお嬢様」

安心させるような優しい声色で語りかけながら、頭を撫でた。

「パチュリー様を信じてあげてください。彼女はあなたの親友なのですから。きつと明日のために……レミリアお嬢様のことを思い、必死の思いで魔法を開発したのでしようし」

「ミコト．．．わかってる。それでも．．．」

「．．．それでも不安は拭えませんか？」

「．．．うん」

レミリアは決してパチュリーのことを信じていないわけではない。だがあまりにも恐怖が強大であるが故に、万が一を考えずにいわれなくなっているのだ。

「そうですか．．．でしたら誓いましょう」

「誓う？」

「ええ。万が一レミリアお嬢様が狂気に支配されてしまったとしても．．．私はお嬢様を嫌ったりなどしません」

「え？」

「私は知っていますから。それがお嬢様の本意でないことを。それがお嬢様の望みではないことを。だから私は．．．お嬢様が狂気に囚われたとしても、決してお嬢様を嫌ったりなどいたしません」

「ミコト．．．」

「私だけではありません。咲夜さんもパチュリー様も美鈴さんも小悪魔さんも．．．あなたを嫌ったりなどいたしません。皆．．．心よりあなたを慕っているのですから」

「皆．．．私を嫌わない？」

その言葉は．．．レミリアの心に染み込んでいった。

「はい。そもそも私含め、この屋敷の住人がお嬢様を嫌うなどありえないことですしね」

ミコトの言うとおりであった。咲夜もパチュリーも美鈴も小悪魔も好きでこの屋敷に．．．レミリアの傍にいるのだ。彼女たちがレミリアを嫌うなど．．．いかなることがあろうともありえないことであった。

「それと．．．もう一つ誓います。お嬢様が狂気に囚われてしまったその時は．．．私の全力を持ってお嬢様を止めます。お嬢様の狂気からお嬢様が愛するものを守り抜きます」

ミコトの決意の言葉を口にした。

「ミコト．．．ありがとうミコト」

ミコトから言葉を受け取ったレミリアは再びミコトの胸に顔を埋めて泣き出した。

だがこの涙は悲しみからいずる涙ではない。

それは……ここまで自分を思ってくれるミコトに対する嬉しさからいずる涙であった。

「……ミコト、お願いがあるの」

「なんででしょうか？」

しばらくして泣き止んだレミリアが、ミコトに語りかけた。

「……私と同じようにフランも恐怖と悲しみに囚われているわ。だから……あの子のことも助けてあげて」

「……ええ、わかっております。もとより私もそのつもりでありましたから」

ミコトはニツコリとレミリアに頬笑みを向けながら返事を返した。

「そう……ふふ、やっぱりミコトは根っからのお人好しね」

ミコトの返事を聞いて、レミリアはクスリと嬉しそうに笑みを浮かべる。

「褒め言葉として受け取っておきます」

「……フランをお願いね」

「承知いたしました。それでは失礼いたします」

ミコトはペコリとレミリアに一礼したあと、部屋から出て行きフランドールのいるところに向かった。

「……ミコト。本当に……本当にありがとう」

ミコトが去った後、レミアは心からの礼を言葉を口にした。レミアの中からすべての恐怖が消えたわけではない。今でも明日のことを思うと胸を締め付けるような恐怖を感じている。

しかし……ミコトが来る前に比べて幾分かそれが和らいだのも事実であった。

ミコトの誓いは間違いなく……レミアを心を救ったのだ。

「本当に……ますますあなたに焦がれてしまうわね」

嬉しそうに笑みを浮かべながらレミアは静かに呟いた。

第84話

noside

『キュツとして〜…………ドカ〜ン!!』

(いやだ…………やめて…………)

フランは夢を見ていた。

『全部全部全部…………ぜ〜んぶ壊れちゃえ!』

(お願いだから…………やめて)

それはかつて壊すことを楽しいと思いついて…………思い込もうとした自分自身の夢。

『壊れた壊れた!!もつともつともつと壊そう!!』

(やめてやめてやめて…………)

嬉々として周りのものを壊すかつてのフラン。

『アハハハ!!』

(やめてよお…………)

狂ったように笑うフラン。そんなフランの前に…………

『フフフツ。次はあなたね♪』

(お兄様!)

自身が兄と敬愛し、また恋焦がれる存在…………ミコトが現れた。

『それじゃあいつくよ〜』

(やめて!お兄様を壊さないで!)

フランはその手に大剣を携え、そして…………

ザンツ!

ミコトの体を引き裂いた。

『アハ♪アハハハハハハハハハ!』

(いやああああ!!)

引き裂かれたミコトは崩れるように倒れ伏し、微動だに動かなくなった。

(いや…………だ。嫌だ嫌だ嫌だ!!こんなの…………嫌だよ。お願い…………誰か助けて)

「お嬢様……お嬢様」

「んん……」

自身の体が揺さぶられ、声をかけられるのを感じるフラン。

「お嬢様。フランドールお嬢様」

「う……ん？……お兄様？」

フランが目覚めると目の前にミコトが居た。ミコトは心配そうな表情でフランの体に手を当てている。

「良かった……目が覚めたんですね」

「お兄様……お兄様が起こしてくれたの？」

「はい。ノックをしても反応がなく、どうしたのかと思いい中の様子を伺いましたらうなされていたフランドールお嬢様の姿が見えましたので。勝手にお部屋に入ってしまった申し訳ありません」

「ううん……起こしてくれてありがとうございます」

フランは悪夢から目が覚めたことからミコトに対して心の底からの礼を述べた。

「いえ、お気になさらずに」

微笑みを浮かべながら柔らかな声色で言うミコト。

そのミコトの姿が一瞬……血に染まったようにフランの目には映った。

「ッ!？」

「フランドールお嬢様？いかがなさいました？」

顔色が一気に青ざめ、怯えてように自身の体をギュツと強く抱きしめるフランドールに声をかけるミコト。

「お兄……様。私……壊したくない」

「え？」

「私……もう何も壊したくないよお」

フランの表情が苦痛に染まり、眼から涙が溢れ出した。

「フランドールお嬢様……」

「さつき……見てしまったの。昔の破壊を楽しむ……破壊を楽しもうとする私の夢を。そしてその夢の中で……私はお兄様を壊した」

フランは先ほどの夢でミコトを斬り裂く自分自身の姿を思い返した。

「もう嫌なの！私は……私は何も壊したくない！昔みたいに破壊に支配されたくない！あの時みたい……大切な人を壊したくないの！それなのに……それなのに……明日私は破壊に支配されてしまう！昔の私と同じように……それ以上に破壊することに囚われて、またお兄様を壊してしまうかもしれない！」

「お兄様あ……私……どうすればいいの？」

フランはミコトに抱きつく。強く強く……すぎるように抱きついた。

フランが生まれた時よりその身に宿した能力……『破壊の力』。その能力はフランの人生に常に付き纏う絶望であった。

そのあまりにも大きすぎる破壊の力はフランの精神を蝕み、強い衝動を植え付けていた。その衝動はあまりにも強く、本人の意思さえも支配していた。

あまりにも強大すぎるその衝動に抗うことができなかったフランはその衝動のままに破壊に従事し、それが原因により姉であるレミアアをはじめとする周囲の者達との絆に隔たりが生じてしまった。

そしてなにより……ミコトを壊してしまった。

それはフランにとってはこの上ないトラウマである。今でこそミコトのおかげで破壊衝動はなりは潜めているが……今でも先ほどのように悪夢を見ることが度々ある。

明日はまた昔のように……否、昔以上の破壊衝動に囚われてしまう。大切な物も大切な者も……衝動のままに見境なく全てを壊そうとしてしまう。

フランにとってそれは……恐ろしくて恐ろしくて堪らなかった。

「……フランドールお嬢様」

ギユツ

ミコトは自身にしがみつくとフランドールの体を優しく抱きしめ、頭を撫でた。

「明日のことは……紅い月がフランドールお嬢様とレミリアお嬢様を狂わせてしまうということは先ほど咲夜さんから伺いました。ですが……大丈夫ですよ」

「え？」

「そうならないように、パチュリー様が魔法を開発したのですから。パチュリー様を信じてください」

ニツコリとフランに笑顔を向けながら言うミコト。

「でも……成功するとは限らないってパチュリー言ってた。もし失敗したら結局私は……」

「その時は……私が止めます」

「お兄様が……止める？」

「ええ。全身全霊を持ってお嬢様方が何も壊さぬように私が止めます。ですから……泣き止んでくださいフランドールお嬢様」

ミコトはそつとフランの涙を拭き取った。

「でもでも……そしたらお兄様が壊れてしまうかもしれない。私は……そんなの耐えられないよ。もうお兄様を……壊したくない」

フランはミコトの左手を握った。かつて自身が壊し、失われてしまっていた左手を。

「……心配していただきありがとうございます。ですが……その心配は無用ですよ。だって私は……壊れませんから」

「壊れ……ない？」

「はい。私は……この紅魔館の執事。そしてフランドールお嬢様は私の主の一人でございます。執事として主の望まぬことは決していたしません。私は……何があってもお嬢様に壊されることなど

ありません」

ミコトはフランの目を正面から見据えて言い放つ。ミコトの目からは真剣さが感じとれ、ミコトの言葉が嘘偽りのないものであると証明していた。

「……本当に?」

「ええ」

「本当の本当に?ミコトは……壊れない?」

「はい。壊れませんよ」

「本当の本当の本当に?」

「フランドールお嬢様は疑い深いですね。でしたら……」

ミコトはフランに左手の小指を差し出してきた。

「指きりをしましょう」

「指きり?」

「ええ。私が絶対に壊れないことを誓って」

「……」

フランはおずおずと自身の左手の小指をミコトの小指と絡ませた。

「それではいきますよ?」

「う、うん」

「指きりげんまん嘘付いたら針千本飲みます。指きった」

約束を交わし、二人の指が離れた。

「これで私は近いを破ったら指を切って、拳骨を一万回受けた拳句針千本を飲まなくてはならなくなりました。流石にそれは私も勘弁願いたいですので誓いは必ず守らせていただきます」

くすりと笑みを浮かべながら言うミコト。その笑顔を見たフランは……胸の奥の不安が和らぐのを感じた。

「……フツ。お兄様って意外と子供っぽいところがあるのね」

「そうですか?指きりというのはとても重い誓いの儀式なのですよ?」

「そうなの?」

「ええ。詳しい話は……いずれまたの機会ということでは」

「……ええ。楽しみにしているわ」

本当に楽しみにしているといったように満面の笑顔をミコトに向けてるフラン。

「それでは私はこれで。仕事を咲夜さんに任せておりました……これ以上待たせると怒られてしまうかもしれないから」

「うん。またね！」

苦笑いを浮かべて部屋から出るミコトをフランはいつものフランらしく元氣よく見送った。

「……お兄様」

フランはミコトと指きりを交わした小指にそつと触れた。

「……ありがとう」

そしてポツリと呟いたあと、そつと小指に口付けを落とした。

「全くミコトくんは……随分とまあ余計なことを」

幻想郷ではないどこかの空間。男は……プライスはミコトやレミリア、フランの映ったモニターを眺めていた。

「このままじゃあ面白くなさそうだなあ……よし決めた！出てきて、るーちゃん、はーちゃん」

「はーい!!」

「呼んだらマスター？」

プライスがパンと手を叩くとるーちゃんと呼ばれて元氣な少女……瑠璃とはーちゃんと呼ばれたほんわかとした少女……玻璃が現れた。

「君たちにちよつとお願いがあるんだ。二人共レミアちゃんとフランちゃんのこと覚えてる？」

「覚えてるよ。前にマスターが利用しようとした幻想郷の吸血鬼だよね？」

「玻璃がコテンと首を傾けながら返事した。

「そうそう。その吸血鬼だよ」

「その吸血鬼がどうかしたの？」

「うん。明日は紅い月だって言うのは二人に話したよね？この紅い月は吸血鬼に影響を与えて狂わせるんだけど・・・そんな愉快なことを邪魔しようとする子達がいるんだ」

「え〜？何それもつたいない」

「でしょ？だからさ・・・二人でその邪魔の邪魔をして欲しいんだ」

「ニヤリといやらしい笑みを浮かべるプライス。

「オツケー！そういうことなら任せてマスター！」

「ほんとこいですよ」

「それじゃあお願いね」

「はい。マスター」

二人は膝まづきながら返事をするやうに姿をくまませた。

「・・・はははっ！これで面白いことになりそうだな」

紅き月が昇る夜。決して・・・無事には済みそうにはなかった。

第85話

nosside

「ミコト」

紅い月がのぼる日の早朝。執事としての仕事をこなしていたミコトにパチュリーが声をかけた。

「どうしたのですかパチュリーさん？この時間に図書館から出るとは珍しいですね」

「ええ。あなたにお願いがあるの。ちょっと図書館に来てくれないかしらっ。」

「そうですね・・・今は仕事ですので咲夜さんに聞いてみなければ・・・」

ミコトは少し考え込む仕草をとってから答える。

「それなら大丈夫よ。咲夜にはあらかじめ許可はとってあるから」

「どうやら事前の手回しは完了しているようだ。」

「そうでしたか。わかりました。では行きましょう」

ミコトはパチュリーと共に図書館に向かった。

「どうぞパチュリー様、ミコトさん」

図書館に着くと、小悪魔がミコトとパチュリーをコーヒーを差し出した。

「ありがとうございます。紅魔館でコーヒーとは珍しいですね」

「レミイは大のコーヒー嫌いだものね。でも私と小悪魔はコーヒも好

きだから図書館では置いてあるのよ。ミコトはコーヒー嫌い？」

「いえ。紅茶と同じくらい好きですので問題ないですよ」

「そう言いながらミコトはコーヒーに口をつけた。

「なら良かったわ」

パチュリーもまたコーヒに砂糖とミルクを淹れてからコーヒを啜る。

「ところでパチュリーさん。用事というのはなんでしょうか？」

「・・・今夜のことで話があるの」

パチュリーはミコトの目を正面から見据えながら言う。その表情は真剣そのものだ。

「今夜のこと・・・ですか？」

「ええ。事情はもう把握しているのよね？」

「はい。理解しております。パチュリーさんはお嬢様方を狂気から守るために魔法を開発したのですよね？」

ミコトは昨日咲夜から聞いた話を思い出しながら答えた。

「そうよ。それで用事っていうのはその魔法のことについてよ」

「魔法のことと言いますと？」

「単刀直入に言うわ。あなたにもその魔法の発動を手伝ってもらいたいの」

「魔法の発動の手伝い？」

「以前魔理沙に聞いたのだけれどあなたは随分と魔法の才が高いそうね。魔理沙のマスターパークも習得してみたみたいだし」

パチュリーは以前の魔理沙からの聞いた話と竜希との戦いでミコトがマスターパークを使ったのを思い出しながら言う。

「いえそんな。パチュリー様や魔理沙様に比べれば私など・・・」

「本当にあなたは謙虚なのね。レミィや魔理沙の言うとおりだよ。あなたの魔力があれば魔法の質を高めることができるかもしれないから。いいかしら？」

「そういうことでしたら是非。私の方からお願い致します」

ミコトは迷うことなくパチュリーの頼みを聞き届けた。ミコトに

とつてもレミリアとフランを狂気から守るのは心からの願いであるのだから当然と言える。

「それじゃ早速試してみましよう。魔法の発動の仕方は……」
パチュリーはミコトに魔法の発動の仕方について手ほどきを始めた。

～1時間後～

「それじゃやるわよミコト」

「はい。パチュリーさん」

パチュリーはミコトに目配せし、ミコトは応えるように頷いた。

「魔壁『インサニティ・ゼロ』」

ミコトとパチュリーが同時に唱えると、二人の周囲が結界に包まれた。

「……成功ね。ありがとうミコト」

「いえ、私の力がお役にたてて本当に良かったです」

二人は結界が展開できたことが確認できたので結界を解除した。

「それにしてもまさかたったの1時間でここまで……本当にあなたはすごい才能の持ち主ね」

「そんな事ないですよ。私ができるのは結局パチュリー様のサポートだけで一人で魔法の発動ができるようになったわけではありませんし」

「それは当然よ。この魔法は私が1年以上の時間をかけて開発したんだから簡単に習得されたら私の立つ瀬がないわ。でもあなたのおかげで魔法の質は上がったし私の負担もかなり抑えられた。並大抵の魔法使いではここまでの成果はあげられないわ。十分に誇ってもいいことよ」

「パチュリー様……お褒めの言葉ありがとうございます」

ミコトはパチュリーに向かって礼儀正しく頭を下げた。

「では私は仕事に戻らせていただきますね」

「ええ。今夜はよろしく頼むわよ」

「はい。それでは失礼いたします」

ミコトは執事の仕事に戻るべく、図書館をあとにした。

「……あなたは本当に優しいわねミコト。レミイとフランが焦がれるのも無理ないわね」

「あれ？もしかしてパチュリー様も好きになってしまわれたのですか？」

ミコトが去った後にポツリと呟くパチュリーに小悪魔が悪戯っぽい笑みを浮かべながら尋ねた。

「そんなわけ無いでしょ。馬鹿なこと言わないで小悪魔。でもまあ……弟子にしたいとは思ったわね。ミコトの才能は本物だし」
(弟子ですか……パチュリー様にそこまで言わせるなんてミコトさんは本当に凄いですね)

小悪魔はパチュリーに高く評価されているミコトのことを素直に感心した。

「それよりも小悪魔、その本を片付けておいて頂戴」

「は〜い。わかりました」

小悪魔はパチュリーに言われるがままに本を片付けに行った。

「……頼りにしてるわよミコト」

「おや？」

美鈴に昼食を届けに紅魔館の門に赴いたミコトは目を閉じている美鈴の姿を捉えた。だがミコトは美鈴がいつものように眠っているわけではないとすぐに気がついた。

(ものすごい気ですね・・・肌がピリピリします)

ミコトは美鈴が集中して気を高めているのだと感じとった。

「・・・何の用ですかミコトさん？」

美鈴は目を閉じながらミコトに尋ねた。

「昼食をお持ちしました」

「昼食・・・もうそんな時間ですか」

美鈴は目を開き、集中を解いた。それと同時に周りの空気が戻るのをミコトは感じる。

「わざわざありがとうございますミコトさん」

「いえ、これも私の仕事ですので。それにしても目をとっていたのによく私が来たことに気がつきましたね」

「姿を目にしていなくても気配は感じていましたので。ミコトさんの気配は独特でしたのですね」

「独特・・・ですか？」

ミコトは小首を傾げながら聞き返す。

「はい。うまく言葉にはできませんがなんとというか・・・少しごちゃごちゃしているとといった感じですね」

(あく・・・なるほど)

ミコトは美鈴が言っていることの意味をすぐに理解した。ミコトはその身に魔力、霊力、妖力を同時に宿しているのでそれが原因だろうと考えたのだ。

「と、そうでした。こちらをどうぞ」

ミコトは昼食の入ったバスケットを差し出した。

「ありがとうございます」

美鈴はバスケットを受け取り、昼食を摂り始める。

「ところで美鈴さん。先程は何をしておられたのですか？いつもと様子が違っておりましたが」

「ああ、アレですか。今夜に備えて意識を集中して気を練っていたんです」

「今夜に備えて……ですか？」

「はい。パチュリイ様にもしも魔法が失敗したときはお嬢様方を止めるように言われていましたので」

「なるほど。確かに美鈴さんでしたら可能でしょうね」

美鈴はこの幻想郷においてトップクラスの力を有している。だからこそ『最強』であるあの竜希が認めるほどにだ。その美鈴であれば狂気に染まった二人を止めることはできるやもしれない。

「私もお嬢様方にはこの屋敷に置いていただいている恩がありますので……せめてそれぐらいの事はしなければ」

美鈴は真剣な面持ちで述べる。普段は昼寝して門番の仕事をサボりがちになってしまっただけはいるがそれでも屋敷の主であるレミリアやその妹であるフランに対する忠義は厚いようだ。

「美鈴さん……もしもその時が来たのなら私も全力を尽くして止めます。お嬢様と約束いたしましたので」

「ありがとうございますミコトさん。まあそのもしもの時が来なければそれにこしたことはないですけどね」

「そうですね。それでは私はこれにて失礼いたします。また後でバスケットを取りに来ますね」

「はい。それじゃあまた後ほど」

「ええ」

ミコトは美鈴に挨拶を交わした後、屋敷に戻っていった。

(……レミリアお嬢様。フランドールお嬢様。あなた達は本当にこの屋敷の住人に慕われておられるのですね)

屋敷に戻る道中。ミコトはレミリアとフランへと思いを馳せてい

た。

(彼女たちの為にも……必ずや誓いを果たさなければなりませんね)

ミコトは来るべき時へ改めて決意を強くした。

そして紅い月が昇る時が、刻一刻と迫りくる。

第86話

nosside

紅魔館の大広間。この場にレミリア、フラン、咲夜、パチュリー、小悪魔、美鈴、そしてミコトといった紅魔館の主だったメンバーが集っていた。

その目的は……例の時に備えるためにだ。

「咲夜。あとどれぐらいかしら？」

「30分程でございませうお嬢様」

「そう……」

「お姉様……」

咲夜からの回答を受け、不安そうに俯くレミリア。そしてそのレミリアの手を同じように不安な表情を浮かべたフランがギュツと握った。

30分。それは紅い月が昇る……二人にとっては絶望の時へのカウントダウンであった。

「……大丈夫ですよレミリアお嬢様、フランドールお嬢様。パチュリー様と私を……信じてください」

そんな二人の不安を拭うかのようにミコトは優しく頭を撫でる。

「ミコト……ええ。そうね」

「私……信じる。お兄様とパチュリーのことを」

ミコトに励まされたレミリアとフランは僅かに表情を明るくさせた。

「ミコト。そろそろ始めましょう」

「わかりましたパチュリー様」

パチュリーに促されてミコトは定位置について魔力を練り上げ始めた。

「いくわよミコト」

「はい」

「魔壁『インサニティ・ゼロ』」

ミコトとパチュリーはレミリアとフランの周りに魔力でできた結

界を展開した。

「……二人共気分はどう？」

「……ええ。すごく心地いいわ」

「本当に……なんだか落ち着く」

パチュリーに問われたレミリアとフランは落ち着いた様子で答えた。

「この結界はいわばアロマセラピーみたいなものよ。結界を構成する魔力が対象者に作用して心身をリラクセスさせる効果があるのもつとも効力はアロマセラピーなんかとは比較にならないほどのものだけけど」

「この結界の効力をもってお嬢様方の狂気を打ち消すというわけです」

「なるほど……」

パチュリーとミコトの説明を聞いて納得したように頷くレミリア。

「ということは……お兄様とパチュリーはこの結界を一晩中貼り続けるっていうこと？」

「まあそうなりますね」

ミコトはなんともないといった様子で答える。

「大丈夫なの？一晩中だなんて魔力が持たないんじゃない？」

「大丈夫よ。私の魔力はそんじょそらの魔法使いと比較にならないほど高いんだから（まあ本当はミコトがいなかったら少しきつかったんだけど）」

心の中でポソツと呟きながらレミリアの問いかけにパチュリーが答えた。

「ならいいけど……」

「それよりも……まだ月は昇っていません。パチュリー様の開発した魔法を疑うわけではないけれど万が一ということもありますし……警戒は解かないようにしておきましょう。美鈴、もしもの時は頼んだわよ？」

「はい咲夜さん！……って、あれ？今私のこと名前で……」

「どうしたの美鈴？」

「……………いえ！なんでもありません！（ようやく咲夜さんから名前を……………！）」

美鈴は咲夜にようやく名前を読んでもらえたことに感激していた。「パチュリー様、体調が悪くなったら直ぐに言ってくださいね！直ぐにお薬を用意しますから！」

「ありがとう小悪魔」

両手いっぱい何らかの薬を抱えて自信満々に言う小悪魔にパチュリーは少々苦笑いを浮かべながらも礼を述べる。

（……………本当にこの屋敷の皆さんは仲がいいですね）

ミコトは目の前の仲睦まじい光景を見てクスリと笑みを浮かべる。

（だからこそ……………守らなければなりませんね）

そして、ミコトは彼女たちの笑顔を守ろうと決意を強くした。

月が昇り、一時間が経った。

レミリアとフランは……………

「……………どうやら成功みたいね」

「うん」

狂気に囚われてはいなかった。パチュリーの魔法は成功したようだ。

「あとは夜明けまで魔法を維持していれば……………お嬢様方が狂気に犯されることはありません」

ミコトがそう述べると皆は安堵のため息を吐いた。

その中でも当事者であるレミリアとフランは特に嬉しそうにして

いた。

無理もないであろう。なにせもう狂気に恐れる必要はなくなり長年自分を苦しめていた問題が解決したと思ったのだから。

ただ……

得てして、ハッピーエンドというものは簡単には訪れたりはいしな

い。「そんなに思い通りに行くかな？」

「!?!」

突然気の抜けたような軽い調子の声がある場にいた全員の耳に入ってきた。

そして……

「キャッ！」

声が聞こえるのとほぼ同時に、パチュリーの体が弾幕によって弾かれ、吹き飛んでいった。

「パチュリー様!?!」

ドサリと倒れ伏したパチュリーに慌てて駆け寄る小悪魔。

「大丈夫ですかパチュリー様？」

「え、ええ。大丈夫よ。それよりも早く魔法を……」だめだよ。そんなもつたいたいことしたら……え？」

急いで立ち上がるとうとするパチュリーの傍らにぼわぼわした雰囲気身を纏った少女……ガラスが現れた。

「うふふ。二名様ごあんなくい♪」

ガラスが手を翻すとパチュリーと小悪魔の目の前に紫のスキマの様

な空間の裂け目が出現し、その場にいた3人はその裂け目に飲み込まれてしまった。

「なっ!？」

「パチュリー様!小悪魔」

咲夜と美鈴は声を荒げ、先ほどまで二人がいた場所に駆け出そうとする。

そんな咲夜と美鈴の背後に……

「君達にも来てもらおうよ!」

「!？」

先ほどの少女と雰囲気は違うが容姿は瓜二つの少女……瑠璃が現れる。

そして瑠璃は玻璃と同じように咲夜と美鈴、そして自身を空間の裂け目に飲み込ませた。

「これは……一体？」

流石のミコトも目の前で起きた異常事態に対処しきれず、呆然としている。

その時……

ゾワッ!

「ッ!!」

突如ミコトは背筋に凍りつくような寒気が襲う。慌ててミコトがその場から飛び退くと……

ドンッ!

つい先ほどまでミコトの居た場所を巨大な紅蓮の槍が貫き、無数の紅の弾幕が降り注いだ。

「この槍と弾幕は……」

ミコトが槍の飛んできた方に振り向くとそこには……俯きながら黙り込んでいるレミアとフランが居た。

二人の体は次第に小刻みに震えだし、そして……

「アハハ……アハハハハハハハ!!」

表情を狂気に染め、大声で狂った笑い声を上げた。

「ここは……一体？」

空間の裂け目に飲み込まれた咲夜の眼前には、草木が一本も生えていない荒野が広がっていた。

「咲夜さんー！」

自分の名を呼ぶ声に反応し、振り返るとそこには美鈴が居た。そのすぐ近くにはパチュリーと小悪魔もいる。

「美鈴、パチュリー様、小悪魔」

直ぐに3人のそばに咲夜は近寄る。

「3人共無事だったのね」

「はい。それにしても……ここはどこなんでしょう？」

「見た限り幻想郷……ではないですよね？」

美鈴と小悪魔は辺りを見渡す。

「それよりもどうにかして紅魔館に戻らないと……レミイとフランクが……」

そんな中パチュリーが不安そうな表情を浮かべていた。

自分がこの場にいるということはすなわち……魔法が解除されてしまったということだとパチュリーは理解していた。

「そうですね。一刻も早く紅魔館に……」

「そういうわけにはいかないよー！」

紅魔館に戻る方法を思案しようとする咲夜の耳に聞き覚えのある声……先ほど自身をこの空間に連れてきた者の声が聞こえてくる。

声に反応して振り返る咲夜。そこには……瑠璃と玻璃がいた。

「どうもはじめまして！私は瑠璃ちゃんだよー！」

「はじめまして。私は玻璃ちゃんでーす」

何食わぬ表情で名を名乗る瑠璃と玻璃。

「ここいい場所でしょう。私たちの故郷なんだ」

「まあこんなにしちやったのは私たちなんだけどね！」

二人はニコニコと笑顔を浮かべながら言う。

「あなた達……一体」

「『一体誰なのか?』って聞きたいんだね?でも無駄だよ!答えるつもりないもん!」

瑠璃は可笑しそうに笑いながらキツパリと言いつつ。

「なら答えなくてもいいです……私たちを紅魔館に帰してください」

「それはだめ。だってつまらないもん」

睨めつけながら言う美鈴の言葉に、今度は玻璃が答えた。

「つまらない?」

「うん。今日は吸血鬼の姉妹がいい感じに狂って暴れてくれる日なのに……それを邪魔しちゃうなんてつまらないよ!」

「そうそう。せっかくの機会なんだから吸血鬼には目一杯暴れてもらわないと」

瑠璃と玻璃は全く悪びれた様子を見せずに楽しそうに言う。

「それでそれで!どうせなら……あの吸血鬼ちゃん達にはミコトくんを壊しちやっつて欲しいよね!」

「ね〜♪」

「……何ですって?」

ミコトを壊して欲しい。その言葉を聞いて咲夜は激昂を顕にした。「あなた達随分とつまらない冗談を吐くのね……切り刻むわよ?」

咲夜は瑠璃と玻璃に殺気をぶつけながらナイフを構える。

「きやく!こわ〜い!流石は切り裂き魔さんだね〜」

「!?あなた……なぜそれを……?」

咲夜の表情は驚愕に染まる。

「知りたい知りたい?でもそれも教えてあげないよ!」

「くっ……」

明らかにからかわれていると咲夜は自覚し、表情を強ばらせる。

「咲夜、無駄話はそこまでよ。話が通じる相手じゃないって言うなら……やることは一つよ」

「彼女たちにお仕置きして……力づくで紅魔館に帰させてもらいましょう」

「それしか無いようですね」

パチュリー、小悪魔、美鈴は戦闘態勢に入った。

「そう簡単にはいかないよ！あなた達には夜が明けるまではここにいてもらうんだから！」

「皆く。出てきてく」

玻璃が呼ぶと地面から夥しいほどの数の黒い人型が現れた。

「それは……あの時の！」

咲夜にはその人型に見覚えがあった。その人型は……かつて紅魔館に現れた暴虐者であったのだ。

「皆……やっちゃえ！」

瑠璃の指示のもと、暴虐者たちは一斉に咲夜達に襲いかかった。

一方紅魔館では……

「アハハハハハハ!!」

未だにレミリアとフランは狂った笑い声を上げていた。

（……まずいですね。パチュリー様がいなければ魔法の発動ができません）

そんな二人の姿を見たミコトは冷や汗を浮かべていた。

ミコトができるのはあくまでパチュリーの魔法の補助のみ。魔法の発動自体はミコトにはできないのだ。

「ねえミコト」

笑い声を止めたレミリアがミコトに声をかける。その表情から……完全に狂気に染まってしまっているとミコトは理解した。「今夜の月は……すごく綺麗だと思わない？」

レミリアはうっとりとした様子で大広間の天窓から紅い月を眺める。

「知ってると思うけれど私はね、紅い色が大好きなの。だから……ミコトを血で真っ紅にしちゃってもいいよね？」

ニタアと悍ましい笑顔をミコトに向けるレミリア。

「アハ！アハハハハハ！壊す壊す！お兄様を……お兄様を壊して遊ぶ！アハハハハ……！」

一方フランは未だに笑い声を上げながら今まさにミコトを壊そうとウキウキしている。

「レミリアお嬢様……ランドールお嬢様……仕方がありませんね。こうなってしまうては……誓いを果たさなければなりません」

ミコトは服装を正し、クラマとシラマを双剣へと変化させた。

「お嬢様方……私はあなた達に何も壊させません。そして……私自身も壊れません」

ミコトの思い返す。悲しみにくれ、涙を流す二人と交わした誓いを。そしてその誓いを違えないと心に強く言い聞かせる。

「さあ……くるならきてください。私は……誓いを果たして見せます！」

「アハハハハハ!!」

決意を固めたミコトに向かって、二人の吸血鬼が襲いかかった。

紅い月が昇る夜……

狂乱の宴が幕を開けた

第87話

n o s i d e

『壯絶』

紅魔館の大広間で繰り広げられる光景に相応しい言葉はまさにそれであった。

「アハハハハッ！紅符『スカーレットマイスタ』!!」

狂喜しながら放つ無数の紅の弾幕を放つレミリア。

「アハハハハッ！バラバラになっちゃえ！」

同じく狂喜しながら手に持った大剣、レーヴァテインで斬りかかるフラン。

二人の攻撃は非常に激しく、常人ならばすぐさまに壊れてしまうほどのものであった、

「クッ……」

だがミコトは時に躲し、時に銃から放つ弾幕で防ぎ、時に剣で受け止めるている。

ギリギリもいいところであるがミコトはどうかレミリアとフランの猛攻を凌いでいた。

「アハハッ！流石はミコトね！まさかここまで凌げるなんて！」

「本当！壊しがいがあるねお姉様！」

「はあはあはあ……」

嬉しそうに言葉を交わすレミリアとフラン。だがその一方でミコトは余裕がなさそうに肩で息をしていた。

戦闘が始まってまだ僅か1時間。紅い月が沈むまでにまだ6時間はあるというのに……既にミコトは疲弊しきっているあった。

無理もない。狂気に支配されたレミリアとフランは理性によって抑制されていた力が解き放たれ、平時よりも遥かに強力な力を振るうことができるようになっていたのだから。

二人のうち一方のみを相手どるだけでもとてつもないほどに体力と集中力を消耗するというのに二人同時に相手取って1時間も凌いでいるのだからその疲労は想像を絶するものであろう。

「でも……少し気に入らないわね。どうしてミコトは攻撃してこないの？」

「そうだよお兄様！お兄様からも攻撃してこないとつまらないよ！」

レミリアとフランは不満そうに……。それでも狂った笑みを崩さずにミコトに尋ねた。

そう、ミコトはレミリアとフランに対して一切の攻撃をしていなかった。

弾幕はレミリアとフランの弾幕を相殺するために。剣は防御のためにしか使われていなかった。

「はあはあ……。それは当然ですよ。私は……。執事ですので。お嬢様達を傷つけるつもりなど微塵たりともありません。なによ……。攻撃する理由がありませんから」

ミコトは息を切らしながらも柔らかな笑顔で二人の問いかけに答えた。

ミコトが攻撃しないの理由の一つはミコトが二人に仕える執事であるからだ。執事として主に刃を向けるなどもつてのほかである。

そして二つ目の理由は……。ミコトの目的がレミリアとフランを倒すことではないからだ。

ミコトが戦う理由はあくまでレミリアとフランが何も壊さないように止めるため。その為にレミリアをフランを傷つける必要など一切ない。

故にミコトは自らレミリアとフランに攻撃を仕掛けることはしないのだ。

「……そう。随分とつまらない理由ね。まあそれならそれでいいわ。あなたを血で真っ紅に染め上げることにはかわりないから！」

「アハハ！グチャグチャになるまで壊してあげるねお兄様！」

嬉々として再びミコトに襲いかかるレミリアとフラン。そしてその猛攻にミコトは対処する。

(流石にこれはキツイ……。いざと言う時はアレを使わなければならぬかもしれないですね)

所変わって異空間に飛ばされた者たちは……

「月符『サイレントヘレナ』!!」

「ハアッ!」

暴虐者に向かってパチュリーは弾幕を放ち、小悪魔は長く伸びた爪でその身を引き裂く。

「グアアアア!!」

攻撃を受けた暴虐者達は断末魔の叫びを上げて消滅する。だが……

「ホシイ……『愛』ガホシイ……」

その程度では焼け石に水。倒したそばから暴虐者達は地面から再び現れ、数を増やしていった。

「ほらほら頑張ってお前達!!」

「ちやくんとしてくれたら『愛』をあげますよ」

「グオオオオ!!」

『愛』がもらえる。その言葉によって暴虐者たちは奮起し、パチュリーと小悪魔に襲いかかった。

……『愛』を感じることもできないにも関わらず。

「クツ……」

「これではキリがありません」

どれだけ倒しても一向に数が減らないことにパチュリーと小悪魔は悪態をつきながらジリジリと後ずさりする。

「ニヒヒヒー!本当にあいつらは愚かだねー!愛を感じることができないのに求めるなんてさー!まあそのおかげで扱いやすいんだけどー!」

「無駄話するなんて随分余裕ね」

「へ?」

笑いながら様子を伺ってた瑠璃の背後に咲夜が能力を使つて回り込む。そして……

「奇術『エターナルミーク』」

瑠璃に向かってナイフの弾幕を放つ。ナイフは高速で瑠璃に近づいていく。

「きゃ、きゃああああ!!」

自らに迫るりくるナイフを目にして悲鳴を上げる瑠璃。

「……………なんてね♪」

だが悲鳴はすぐに止み、代わりに瑠璃は意地の悪い笑みを浮かべた。

そして……………

ガキーン!

「なっ!」

瑠璃はいつの間にかどこから取り出した剣でナイフを全て弾き飛ばしてしまった。

「残念だったね切り裂き魔さん! いい奇襲だったけど……………私には見えてたから!」

「見えてい……………いた?」

「そ!というかさ……………隙だらけだよ?」

「!?しまった!」

瑠璃に意識を向けていたせいで自身の背後から剣で斬りかかる玻璃に対する反応が遅れてしまった咲夜。

刃が咲夜の体を引き裂こうというまさにその瞬間……………

「させません!」

ビュンツ!

間一髪のところでも美鈴が玻璃に向かって拳を突き出す。

その拳は玻璃に当たりはしなかったが、玻璃は回避のために大きく飛び退いたために咲夜への奇襲を阻むことには成功した。

「ありがとう美鈴。助かったわ」

「いえ、お気になさらず」

助けられたことに対して礼を言う咲夜。美鈴は何事もないといっ

た様子で笑顔で返した。

「ごめんね瑠璃。失敗しちゃった」

「気にしないで玻璃！チャンスはまだいくらでもあるんだからさ！」

一方瑠璃と玻璃はおどけたように互いに笑いかけていた。

「それにしても……まさかあの奇襲を凌がれるとは思わなかったわ。タイミングも場所取りも完璧だと思ったのだけれど……」
「そのことですが咲夜さん。凌がれたのはおそらくあの二人の能力に起因していると思います」

「二人の能力？」

「あらあら？もしかしてもう気がついちゃったの？」

「まさかとは思うけどハツタリじゃないよね？言ってみなよ！合ってるかどうか確認してあげるから！」

瑠璃と玻璃はニコニコと笑みを浮かべながら美鈴に尋ねた。

「あなた達の能力は……視界を共有する能力ですね？」

「視界を……共有？」

「はい。先ほど咲夜さんが奇襲を仕掛けたとき、もう一人は咲夜さんの姿を視界に捉えていました。だから奇襲に気がつくことができ、的確に対処ですることができました。あの二人は戦闘が始まってからずっと互いの死角を補うように別々の方向を向き続けていたので間違いのないと思います」

美鈴は自身の推測を話す。その表情からは普段昼寝して門番の仕事をサポートしているものと同一人物とは思えないほどに真剣そのものであった。

「……へえ、思ったよりも鋭いんだね！まさか短時間でそこまで見抜かれるとは思わなかったよ！」

「そうね。でも……それじゃあまだ正解の5割っていったところね」

「正解の5割？」

「そうだよ！私と玻璃が共有するのは視覚だけじゃない。聴覚や嗅覚、触覚はおろか味覚さえも共有するの！」

「私たちの能力はズバリ……『感覚を共有する程度の能力』な

んだだよ。これってすつごく便利なんだ」

(感覚を共有する程度の能力……厄介すぎるわ)

瑠璃と玻璃から能力を聞き、咲夜は顔を顰めた。

『感覚を共有する程度の能力』……それは敵に回すにはあまりにも厄介すぎる能力だ。

視覚と聴覚を共有するということは単純に考えて索敵能力は軽く倍近くになる。その為相手の隙をつく奇襲はほぼ不可能。そしてパートナーの動きに合わせることも容易になるためコンビネーションの質は相当に高い。

ただでさえ彼女たちの実力は高い。それこそ単独でも風見幽香クラスの実力を秘めているといつていい。

一人相手にするだけでも面倒だというのに能力のせいで二人同時に相手取することは非常に困難を極める。そんなことができるのは幻想郷でも片手で数える程にしかないだろう。

にも関わらず……

「……咲夜さん。この二人は私が相手をします」

「え？」

美鈴は自分ひとりで瑠璃と玻璃の相手をしようとしていた。

「ですので咲夜さんはパチュリーさんと小悪魔さんの援護に向かってください。かなり苦戦しているようですので」

「何を言っているの美鈴！あいつらの力は……」

「わかっています。その上で言っているんですよ」

美鈴は咲夜の言葉を遮ってキツパリと言い放った。その声色からは有無を言わさぬ迫力がある。

「美鈴……でも……」

「心配しないでください咲夜さん……私を誰だと思っているんですか？」

不敵な笑みを咲夜に向ける美鈴。その表情からは確かな覚悟と自信が感じられる。

「……そうだったわね。わかったわ。ここは任せたわよ」

「はっ」

咲夜はこの場を美鈴に任せてパチュリーと小悪魔の援護に向かった。

「……ねえお姉さん！一人で私たちの相手をするとか本気？」

「だとしたら舐めすぎだよ。私たち結構強いんだから」

「……舐めているのはそつちですよ」

ゾクッ！

「!?」

瑠璃と玻璃は凍ってしまうのではないかと思える程の寒気を感じた。

瑠璃と玻璃は……目の前で闘気を身に纏った美鈴に対して、怖いほどの恐怖を抱いた。

「悪いですけど手を抜くつもりはありませんから。本気で……潰させてもらいます」

美鈴は身に纏う闘気を更に強くしながら言う。

(これが……紅美鈴……)

(マスターが言っていた……幻想郷の特記戦力の一人)

「それでは……いきますよ」

美鈴は構えをとり、瑠璃と玻璃に接近していった。

幻想郷で五指に入る実力者の本気の戦いが……今始まる。

「きゅっとして……ドカッ!!」

バン！

「くっ……」

フ란の能力による爆発をミコトはかろうじて回避する。だが爆破の勢いが強すぎるために爆風によって吹き飛ばされて体が地面に叩きつけられる。

「神槍『スピア・ザ・グングニル』!!」

その隙を逃すことなくレミリアはランスをミコトの心臓を目掛けて投擲する。

「恋符『マスタースパーク』!!」

ミコトはランスを弾くためにマスタースパークを放つ。だが体制が悪い状態で放たれたせいかマスタースパークの威力は全力とは程遠く、ランスを弾き飛ばすことはできなかった。精々威力を少し弱めた程度であった。ミコトは地面を転がることでギリギリでランスを躲す。

ドスッ!

ランスは地面に深々と突き刺さった。もしもミコトの体に触れていたのならば間違いなく心臓を貫通していただろう。

「はあはあはあ……」

ヨロヨロとふらつきながら片膝をつくミコト。

体に傷は一つたりともついてはいなかったが……既にボロボロであった。

服は何年も着古したかのようにところどころ破けており、爆熱によって煤もついていた。

そしてなにより……ミコトの体力はもう既に底をつきかけている。

それこそ指一本動かすのにも相当の気力を要するほどに……

「……までよく頑張ったわねミコト。でも……もう終わりみたいね」

「アハハ! ようやくだ……ようやくお兄様を壊せる!」

ミコトがもうすでに限界であることはレミリアにもフ란にもわかっていた。

もうすぐミコトを壊せる。そう思い、二人は更に表情を狂わせた。

「はあはあ……申し訳ありませんが……そういうわけにはいきません。私は……お嬢様方に壊されるわけにはいきませんので」
しかしミコトは息を切らしながらもレミリアとフランに反発した。
「何を言ってるのお兄様？お兄様もう限界なんですよ？大人しくした方がいいと思うよ。そうすれば楽になるから」

「そうよミコト。大人しく私達に壊されなさい。そうすれば……もう苦しまなくてもすむのよ？」

ミコトに優しく語りかけるレミリアとフラン。しかしその表情は狂気に染まったままであった。

だが……二人の言っていることは的を得ていた。これ以上苦しみ、もがくよりもここで諦めて大人しく壊されてしまったほうが楽になるのは間違いないのだから。

しかしミコトは……

「……いいえ。私は……苦しむ道を選ばせてもらいます」

ミコトは……レミリアとフランの言葉を拒否した。

「私は……誓ったのです。もしもお嬢様方が狂気に飲まれてしまったその時はお嬢様方を止めるために全力を尽くすことを。決してお嬢様方に壊されないことを。それを……レミリアお嬢様とフランドールお嬢様に誓ったのです。ですから私は……私は決して諦めません」

ミコトは立ち上がりながら決意を秘めた表情でレミリアとフランに言い放った。

「誓いね……くだらないわ。私はそんなもの覚えていない」

「私も。そんなのくだらない誓い覚えてないもくん」

二人は馬鹿にしたように鼻で笑いながら言う。

だが……

「それならば……それならばなぜお嬢様方は泣いておられるのですか？」

「……え？」

ミコトの言うとおり、レミリアとフランの目からは涙が溢れ出ていた。

「嘘……」

「な、なんで……」

意図せず流れた涙に戸惑うレミアとフラン。

二人は……覚えていた。ミコトと交わした誓いを。

記憶からは消えていた。

だが……心は……魂は覚えていたのだ。

狂気に染まりながらも……

理性を失いながらも……

愛した者と交わした誓いを忘れてなどいなかった。

「誓いがある限り私は……私は立ち止まる訳にはいきらないのです。例えどんな手を使おうとも私は……誓いを果たしてみせます！」

「ツ!!」

ミコトの気迫に押されてレミアとフランはたじろぐ。その目からは……まだ涙が流れていた。

(そうです。私はまだ……倒れるわけにはいきらない。私は……諦めるわけにはいかない)

ミコトは懐から一枚のスペルカードを取り出す。

「不朽不滅『命いのちふるかぐらのまい猛る神楽舞』」

そしてミコトはそのスペルカードを発動した。

代償を伴うスペルカードを

自らの命を削るスペルカードを

誓いを果たすために。

第88話

nosside

「どうしました？もう終わりですか？」

「うう……」

瑠璃と玻璃は美鈴の目の前でボロボロになって膝をついている。誰が見てもどちらが優勢なのか一目でわかる状況であった。

「ま、まだ……！」

「終わるわけにはいかないよ」

二人は剣で美鈴に斬りかかる。能力を用いて絶妙なコンビネーションで繰り出されるその刃を……

「華符『彩光蓮華掌』」

バキン！

わずか一撃で粉碎した。

「ええ!？」

「その程度では……私は討てませんよ？」

美鈴は挑発するように瑠璃と玻璃に向かって満面の笑顔を浮かべた。

清々しいほどに綺麗な笑顔であるが瑠璃と玻璃にはそれは恐怖しか感じられない。

「つ、強いとは聞いていたけど……」

「ここまでだなんて……予想以上だよ」

瑠璃と玻璃は酷く動揺していた。

美鈴が強いということは自分達の主、プライスから聞いていた。だがその強さは二人の創造を遥かに絶するものであった。

「いい加減私達を紅魔館に戻してくれませんか？あなた達も……これ以上傷つきたくはないでしょう？」

美鈴は二人を威圧しながら指示する。その威圧はまさしく百戦錬磨の強者のそれだ。並大抵の者であるのなら震え上がって言うとおりにしてしまうであろう。

「瑠璃ちゃん……これってものすごくまずくない？」

「……うん。そだね」

しかし二人は主に命じられて美鈴達をこの空間に閉じ込めているのだ。そう安々と彼女達を紅魔館に戻すわけにはいかない。

「……どうする瑠璃ちゃんく？」

「どうするも何も……ことが終わるまでは彼女達に戻すわけにはいかないでしょ？」

「だったら……」

「……うん」

「……戦略的撤退！」

「キヤッ！」

瑠璃と玻璃はどこから取り出したのか？閃光弾を炸裂させ美鈴の目を一瞬眩ませた。そしてその隙に二人は逃亡をはかる。

「あははははー！」

「捕まえてごら〜ん」

まるでふざけているかのような態度であるが逃走スピードはかなり速い。

「くっ、油断してしまいました。逃がしません！」

美鈴は瑠璃と玻璃を捕まえようと駆け出した。

「紅符『スカーレットシユート』!!」

「禁忌『カゴメカゴメ』」

レミリアとフランは夥しい数の弾幕をミコトに向けて放つ。

「……甘いですよお嬢様方」

ザンザンザン！

「この程度では……今の私は壊せません」

ミコトは両手に持った剣で弾幕を一つ残らず切り刻んだ。その太刀筋は先ほどまで疲弊しきっていた者と本当に同一人物なのかと疑うほどに鋭いものであった。

「くっ……どういふことミコト！あなたどうしてそんなに動けるのよ！」

「さっきまで……あんなに疲れきっていたのに……どうして？」

レミリアとフランはミコトに疑問の言葉を投げつける。疲弊しきっていたはずのミコトがまるで全快したかのように動いているのだからその疑問は尤もであった。

「それが先ほど私が発動したスペルカード……『命いのちふるかぐら猛る神楽舞』の効力だからですよ」

『命いのちふるかぐら猛る神楽舞』の……」

「効力？」

「ええ。このスペルカードの効力は生命活性。発動と同時に私の生命力が跳ね上がり、あらゆる疲労、ダメージが瞬時に回復するようになるのです。たとえばそれが命に関わるほどのダメージであっても」

「それって……まさか……」

レミリアはミコトの言っている事の意味を理解し、表情を驚愕に染めた。

「はい。今の私は決して何があろうとも死なない……蓬萊人以上の絶対的な不死なのですよ」

ミコトはニコリと笑みを浮かべながらそう宣言した。

あらゆる疲労、ダメージを即時に回復させ、不死となる『力』。それは酷くおぞましく、恐ろしい力である。なぜなら一度この『力』を使用すれば、生死をかけた殺し合いの戦闘において、負けることがなくなるのだから。

「……」

宣言されたレミリアとフラン俯きながら口を閉ざす。

だが……

「……フフフ……アツハハハハハハ!!」

口を閉ざしていたのはほんの僅か。周囲一体に二人の高笑いが響き渡った。

「ミコト……やっぱりあなた最高だわ!それってつまり……何度も何度もあなたを壊せるということでしょ!」

「アハハハハ!お兄様を何度も壊すことができるなんて……私すつごく嬉しいわ!」

どうやら今のレミリアとフランにとってはミコトが不死になったことは喜ぶべきことのようにだ。

愛おしい人物を一度のみならず何度も壊すことができるようになったと、二人は表情を狂喜に染める。

……もつともその眼からは依然と真実の彼女達が流す涙が溢れ続けているが。

「いくよお兄様!禁忌『フォーオブアカインド』!!そしてさらに禁忌『恋の迷路』!!」

スペルカードによつて4人になったフランがこれまでとは比較にならないほどに夥しい密度の弾幕を展開する。

「私もいくわよ!『紅色の幻想郷』!!」
そしてレミリアからも、フランのものと劣らない規模の弾幕が放たれる。

もはや弾幕ごつこのルールなどあったものではない、回避する隙が一部もないほどの弾幕がミコトに襲い掛かる。

「……どうやらお嬢様方は勘違いなさっているようですね。『命猛る神楽舞』いのちふるかぐらのみまいを使ったのはお嬢様方に私を何度も壊させる為ではありません……壊されないようにするためです。紅衣『スカーレット・シユラウド』」

ミコトがスペルカードを発動し、紅の外套をその身に纏う。

そして外套を振りかざすと……弾幕は全て、後かともなく消し飛んだ。

「……ミコト、その素敵な外套は何かしら?」

うつとりと外套を見つめながらレミリアは尋ねる。

「これは私の全魔力を練り上げて作った外套ですよ。外套に秘められた魔力が装備者を守護し、弾幕を弾く効果があるんです。お嬢様方への忠誠の証として『紅』にしたのですがお気に召していただけただけですよ。よかったです」

「……全魔力を使ったのに平然としているのはそれも『命いのちふるる神楽舞』の力だからなのお兄様？」

「ええ。『命いのちふるる神楽舞』は生命力のみならず、消費された魔力も即座に回復することができまますので」

「そうなんだ……やっぱりお兄様は凄いわね！」

「お褒めのお言葉ありがとうございます。ところで……この外套は先ほど言いましたように私の全魔力を用いて作ったものです。そう簡単には壊すことはできませんよ？」

「確かに。その外套があつたんじや弾幕でミコトを壊すのは難しそうだわ。でも……だつたら直接ミコトを壊しにいけばいいだけよ！ 神槍『スピア・ザ・グングニル』！」

「禁忌『レーヴァテイン』！」

レミリアは槍を、フランは大剣を携え、自らの手で直接壊そうとミコトに襲い掛かる。

「何度も言いますが……お嬢様方に私を壊させません。霊槍「ランス・ザ・ロンギヌス」。妖剣『アロンダイト』」

ミコトは右手に霊力でできた槍を、左手に妖力でできた大剣を出現させる。

「アハハハハハ!!」

ガキнгаキнгаキン!!

レミリアとフランによって繰り出される剣戟を、ミコトは全力で受け止める。周囲に金属がぶつかり合う音が鳴り響いた。

二人の攻撃を一切手を抜くことなく全力で受け止めるミコト。常のミコトならばあつという間に疲弊し、その身を引き裂かれていたであろう。

だが今ミコトは命は活性している。

消耗された体力はその瞬間に回復しているので、今のミコトは疲弊

することがなく、常に全力であれるのだ。

現在ミコトはまさに誓いの通りに、レミリアとフランを止め、二人壊されぬように全力を尽くしているのだ。

(もう少し……もう少しで……夜が明ける)

紅の月が沈むまであと1時間。

狂乱の夜が終わるその時が……誓いが果たされるその時が……

刻一刻と近づいていた。

第89話

n o s i d e

二人の吸血鬼を狂わせる紅き月の夜

二人の吸血鬼を苦しませる紅き月の夜

二人の吸血鬼を悲しませる紅き月の夜

二人の吸血鬼が尤も忌み嫌う紅き月の夜が……

終わりを迎えようとする

「……………」

カラン

レミリアとフランが手にしていた武器……槍と大剣が二人の手から滑り落ちた。

「ようやく終わりましたか……お嬢様方。気分はいかがですか？」

ミコトは微笑みを浮かべながらレミリアとフランに尋ねる。

「ミコ……………」

「う…………ヒグツ」

二人は涙を流しながら、辛そうな表情でミコトを見る。

「どうしました？なんで泣いているのですか？」

「わた…………し。ミコトを…………壊そうとして」

「お兄様を…………ボロボロ」

「大丈夫でございますよ。確かに服は少々傷んでしまいましたが身体に傷は一切ついておりません。ですので…………お二人が涙を流す必要は無いのですよ」

涙を流すレミリアとフランに近づいた命は目線を二人に合わせるように屈み、二人の頭を優しく撫でながら諭した。

「でも……………」

「私達……………」

「レミリアお嬢様、フランドールお嬢様。私はお嬢様方と交わした誓いを守ることができたのです。ですから……………私は十分に満足です。ですからどうか……………どうか涙を見せないでください。どうかお嬢様方の笑顔を私に見せてください」

「ミコト……………」

「お兄様……………」

二人は流れる涙を手で拭った。そして……………

「ありがとうございます。ミコト（お兄様）」

眩しいほどに美しい笑顔をミコトに向かって振りまいた。その笑顔を間近で見たミコトは先ほどまでの激闘による心労が全て癒されるのを感じ、心の底から喜びの感情が湧き上がってきた。

「いえ。私はお嬢様方の執事でございますから」

ミコトは二人に満足そうに綺麗な笑顔を浮かべて見せる。

こうして狂乱の夜は……………無事に終わりを迎えた。

だが……………

「そういえばミコト……………咲夜達は？」

まだ事態の全てが収束したわけではなかった。レミリアが思い出したようにハツとしてミコトに尋ねた。

「それは……………わかりません。感知できる範囲では命を感じないので近くには居ないようですが……………」

ミコトが咲夜達の行方を思案し始めたその時……………

グニヤリ

「!?!?」

ミコト達の目の前に空間の裂け目が出現した。

「ぐ……うう……」

「全く……随分と手こずらせてくれましたね」

ボロボロになり、力なく跪く瑠璃と玻璃を美鈴は見下ろしながら呟いた。

「もう一度言います。これで最後ですよ。私達を紅魔館に戻してください」

美鈴は鋭い殺気を二人に浴びせながら言った。

「そういうわけには……いかないんだよね！」

「私達にも……引けない理由があるんだから」

二人は力を振り絞って立ち上がり、美鈴に言い放つ。

「……そうですか。でしたら申し訳ありませんがあなた達の志を砕かせてもらいます」

美鈴は瑠璃と玻璃に拳を振りかぶる。二人は意を決して目を閉じるが……

パシッ!

二人の間に割り込んでその拳を受け止める者が居た。

「痛ッ! うわ……凄いい力だね」

「マスター!?!」

美鈴の拳を受け止めたのは瑠璃と玻璃の主、プライスであった。

「……誰ですかあなたは? 随分と巫山戯た格好をしていますね」

美鈴はプライスを鋭く睨みながら言う。プライスの格好は黒いフードを目深に被り顔は道化士がつけるような仮面で覆っている。

巫山戯ていると思われても致し方ないであろう。

「あはは! 僕もそう思うよ紅美鈴さん」

「マスター……どうしてここに?」

「るーちゃんとはーちゃんがなんか危ない目にあつてたからね。主としては放っておけなかつたんだよ」

「マスター……私達のために……」

「ありがとうマスター！」

プライスに心配してもらえたことに瑠璃と玻璃は喜び礼を言った。

「さて、それじゃあ二人共、彼女達を紅魔館に戻してあげて」

「えっ？でも……」

「大丈夫だよ。向こうはもう終わっちゃってるから」

「終わってる!?それって……」

美鈴の脳裏に最悪の光景がよぎり、表情を強張らせた。

「そんなに恐い顔しなくてもいいよ美鈴ちゃん。向こうは君達の言うところのハッピーエンドになってるからさ。本当にミコト君は憎たらしいほどに有能だね」

プライスはやれやれといった風に仮面に手を置く。

「とうわけでーちゃん、はーちゃん。お願い」

「はーい！」

「わかりました」

瑠璃と玻璃はプライスに敬礼し、美鈴達の足元に空間の裂け目を出現させた。

ミコト達の目の前に出現した空間の裂け目から、咲夜、パチュリー、小悪魔、そして美鈴が姿を現した。

「ここは……紅魔館？」

「どうやら戻ってこられたようね」

「！そっか……お嬢様と妹様は！」

咲夜達4人はレミリアとフランを探して辺りを見渡した。

「咲夜！皆！」

「よかった！皆戻ってきた！」

そんな咲夜達にレミリアとフランが駆け寄った。

「お嬢様！妹様！」

「皆大丈夫？怪我はない？」

レミリアは心配そうに4人に尋ねる。

「私達は大丈夫。それよりもレミイ達は……」

「私達も大丈夫よ。ミコトが止めてくれたから」

「そうですかミコトさんが……ってミコトさん!?ボロボロじゃないですか！」

ミコトのボロボロの姿を見た小悪魔は表情を驚愕に染めた。

「落ち着いてください小悪魔さん。ボロボロなのは服だけですので。

怪我はしておりません」

「そうですか……ならよかったです……」

「ミコト……お嬢様方を止めてくれてありがとうございます」

咲夜はミコトに礼を述べながら頭を下げた。

「頭を上げてください咲夜さん。私は執事として当然のことをしたままでですから」

微笑を浮かべながら答えるミコト。

そんな中……

「……皆さん。お話はそこまでです」

話に参加していなかった美鈴がある一点を見ながら皆に促した。

美鈴の視線の先にあるのは……空間の裂け目。そしてその

空間の裂け目から……

「やつほ……こんにちは……いや、今は時間的におはようございますかな？」

「!?!」

プライスが瑠璃、玻璃を引き連れて現れた。

「……誰ですかあなたは？」

ミコトは銃口をプライスに向けながら尋ねた。

「おいおい、初対面でいきなり銃口を向けるのはやめてくれない？流石に怖いよ」

プライスはわざとらしく恐がるそぶりをする。

「……質問に答えてください。でないと本当に撃ちますよ?」

「ノリ悪いなく……まあいいけど。僕の名前はプライス。るーちゃんとはーちゃん……ああ、僕の傍に居るこの二人の事ね。この二人の主だよ。よろしくね♪」

「……そうですか」

ババババババ!!

ミコトは躊躇うことなくプライスに向かって弾幕を放った。ミコトだけじゃなく、咲夜とパチュリーも弾幕を放つ。

「うわっとーおいおい。名乗ったのにどうして撃つかなく?しかもそのふたりまでさ」

プライスは弾幕を回避してミコト、咲夜、パチュリーに抗議する。

「そんなの決まっているわ」

「あなたがそこに居る子達の主だというなら……私の魔法の邪魔をするように指示をしたのはあなたということでしょう?」

「だったら……私達にはあなたを討つ理由があります」

パチュリー、咲夜、ミコトはプライスを睨みつけながら言う。

「あくなるほど。それは尤もだね。だけど少なくとも今はこれ以上君達に迷惑をかけるつもりは無いんだ。だから見逃してくれないかな?」

「見逃す……ですって?」

ビュン!

プライスの肩を巨大な槍が掠める。

その槍は……レミリアによって投擲されたものであった。

「……ふざけたことを言わないでくれないかしら?あなたのせいでは……私とフランは……!」

「……許さない。私は絶対にあなたを許さない!」

レミリアとフランは夥しいほどの殺気をプライスにぶつけながら怒号を放つ。

「……そっか。僕を許さないか……クククツ……アハハハハハ!!」

プライスはおかしそうに大声を出して笑う。

「なにがおかしいのかしら？」

「ごめんごめん。でもさあ……あんまり僕を嘗めないでくれるかな？」

「「ツ!?!」「」」

突如、プライスを包む空気が変貌した。気の抜けるような軽いものから張り詰めたものに。そして何より……まるで目に見えるかのようなドス黒い殺気……ミコト達が身を震わせるほどの殺気を身に纏っていた。

「僕がその気になればここに居る全員を殺すことができる。それを今しないのは興が乗らないからだ。だけど……君たちが僕を攻撃するっていうのなら仕方が無いよね？」

プライスは更に殺気を強めながらミコト達に言い放つ。

「……皆さん。闘気を収めてください」

「美鈴?でも……」

「言うとおりにしてくださいレミリアお嬢様。このまま戦えば……勝てたとしても少なくとも代償を払うことになります」

「……」

美鈴は真剣な表情でレミリアを諭す。その表情からレミリアは美鈴がどれほど本気で言っているのかを理解する。

「流石は美鈴ちゃん。幻想郷の特記戦力の一人名だけあるね。こと戦闘に関しての感性はとても鋭いようだ」

「……あなたに褒められても嬉しくありませんね」

「そんな。僕シヨックだなく……まあいいけどさ。それじゃあ僕達はそろそろお暇させてもらうね。中々楽しかったしまた遊びにくるからね」

「楽しみにしているわ。その時は……私達を愚弄した罰をしつかり受けてもらうから」

レミリアはその紅の瞳をプライスに向けながら堂々と宣言する。

「……恐い恐い。と、そうだ。最後に君達にいい事を二つほど教えてあげよう」

「いい事？」

「そう。まず一つ。僕は単独で動いているわけではない。僕には何人も仲間が居るんだ。同じ野望を胸に抱いた仲間がね」

「仲間……ですか？」

「うん。そして第二に……僕達が胸に抱いた野望についてだ。僕達の野望、それは……この幻想郷の支配者になるということだ」

「「なっ!?!」」

プライスの口から語られる野望の内容は、ミコト達を驚愕させる。

「そしてそのその為にはね。君がこの上なく邪魔なんだよ……ミコト君」

「私……が？」

「当然だろ？君の力は本当に厄介なんだからさ。いつか君を殺してあげるから覚悟してね。それじゃあバイバイ！」

プライスは瑠璃、玻璃を連れて空間に裂け目に入っていき、紅魔館から去っていった。

「あいつら……本当になんなのよ！」

「お兄様を殺すって……そんなの絶対に許せない！」

レミリアとフランは居なくなつたプライスに対しての激情をあらわにする。

「落ち着いてくださいお嬢様方。確かにあの男が言っていたことは気になります……これで全て終わったのです。今はそのことに安堵しましょう」

「ミコトの言うとおりですお嬢様、妹様。もう……終わったのですから」

ミコトと咲夜は傍に寄つてレミリアとフランを宥めた。

「……うん。わかつたお兄様、咲夜」

「……まあ終わったことを気にしても仕方が無いものね」

二人に宥められ、レミリアとフランは落ちつきを取り戻す。

かくして、紅の月の夜……『紅月狂』は終わりを迎えた。

第90話

no s i d e

「本当にもう行っちゃうのお兄様?」

執事服から私服に着替えたミコトに対してフランが尋ねた。

「ああ。霊夢には今日帰るって言ってあったしな」

フランの問いかけに答えるミコトの口調は執事としてのものではなく普段のそれであった。相変わらず切り替えが早い。

「だとしてももう少し休んでいったほうが……あんなことがあつたばかりなんだから疲れているでしょ?」

「疲れてはいないさ。それに早く帰らないと霊夢に怒られちゃうからさ」

「そっか……」

ミコトの返答を聞いて落ち込むフラン。ミコトともっと一緒に居たいと思っていたのであろう。

「……ねえミコト」

今までずっと沈黙を貫いていたレミリアが口を開く。

「ん?なんだレミリア?」

「今のミコトは……もう執事じゃないのよね」

「まあな。それがどうかしたのか」

「もしも……もしもミコトが執事じゃない時に紅い月が昇っていたら……あなたは どうしていた?」

「お姉様? 一体なにを?」

「それでもあなたは……私を助けてくれていた? それとも……」

レミリアの顔は不安で染まっていた。ミコトが自分とフランを助けてくれたのはミコトが執事だから。でも今のミコトは執事ではないしそもそも執事でない時間の方が長いのだ。

だからレミリアは……執事でなければミコトは自分とフランの事を助けてくれなかったのではないかと考えているのだ。

「お姉様……」

フランはレミリアの意図することの意味を理解した。そしてレミ

リアと同じように不安そうな表情でミコトを見つめる。

「……はあ、何を聞くかと思えば。そんなの……」

ポンツ

「え？」

ミコトはレミリアとフランの頭に手を乗せる。

そして……

「助けるに決まってるだろ」

穏やかで優しい声色で二人にそう言った。

「執事としての俺は……忠誠心から二人を助けようと思った。そして執事ではない普段の俺ならば……助けたいから助けようと思うだろうな」

「ミコト……」

「お兄様……」

「つまりは……執事であろうとそうではなからおう俺のやる事は変わらないということだ。俺にとって……レミリアもフランも大切な存在だからな」

ミコトは二人に頬笑みを浮かべて見せた。

「うっ……」

「お兄様あ……」

「つて、おいおい。なんで泣いてるんだよ？」

急に泣き出したレミリアとフランをあやすようにミコトは二人の背に手を回す。

「ごめんなさい。でも……嬉しかったから」

「お兄様がそう思ってくれて……嬉しくて」

「だからって泣くことないだろ。全く仕方がないな」

ミコトは二人の涙をハンカチで拭き取った。

「ねえミコト」

「なんだレミリア？」

「また……紅い月が昇るときは……私たちを助けてくれる？」

「……ああ。当たり前だろ。たとえばその時執事であつても執事でないくても……俺は二人を助けるよ。約束する」

「なら……約束しよ?」

フランは小指を差し出してきた。

「指きりか……わかった」

「お姉様も……ね」

「え、ええ」

レミリアも小指を差し出してきた。

「それじゃあ……」

ミコトは自信の両手の小指をレミリアとフランの小指と絡ませる。

「二指きりげんまん嘘付いたら針千本飲みます。指きった」

そして約束を交わし、小指は離れる。

「……約束守ってね?」

「破つたりしたら……承知しないから」

「ああ。ちゃんと守るさ。それじゃ俺はそろそろ帰るな。いい加減霊夢が待ちくたびれてるだろうから」

「ええ。またねミコト」

「またねお兄様!」

「ああ。またな」

挨拶を交わして、ミコトは部屋から出て行った。

「……ねえお姉様」

「なにフラン?」

「お兄様は……本当に優しいね」

「……そうね」

レミリアとフランは互いに自分の小指を見つめている。

「お姉様。お姉様は……ミコトのことが好き?」

「……ええ。私はミコトが好きで……ミコトを愛してるわ」

「……私も。私のお兄様を愛してる!」

二人の吸血鬼はミコトを愛する。

その想いは……未来永劫変わることはないだろう。

「あらミコト。今から帰るの?」

「そうだが・・・何をやっているんだ咲夜?」

ミコトが紅魔館の門にくるとそこには・・・正座をしている美鈴と美鈴を見下ろす咲夜が居た。

「見ての通りよ。中国つたらまた門番の仕事をサボっていたから注意していたの」

「咲夜さくん・・・もう許してくださいよ。というよりなんで呼び方が戻っているんですか?」

清々しいほどの黒笑を浮かべる咲夜に美鈴は涙を流しながら訴えかけた。

その情けない姿からは昨夜の勇姿は微塵たりとも想像できない。

「まあ今日くらい大目に見てやれよ。美鈴だって疲れてるんだから」

「ミコトさん・・・」

助け舟を出すミコトを美鈴はありがたそうに見つめた。

だが・・・

「それはそれ。これはこれよ」

咲夜はキツパリと言い放った。

「・・・そうか(すまない美鈴)」

ミコトは心の中で美鈴に謝罪する。

「それじゃあ俺はこれで失礼するな」

「あ、待ってくださいミコトさん」

紅魔館から立ち去ろうとするミコトに美鈴は待ったをかけた。

「なんだ?」

「ミコトさんは・・・あのプライスという方のことをどう思いますか?」

美鈴は神妙な面持ちでミコトに尋ねる。

「……俺からは只者ではないとしか言えないな。だが……間違ひなくかなりの実力者だ。今の俺では勝つのは難しいだろう」

「そうですね……」

「美鈴はどう思う?」

「概ねはミコトさんと同じです。ですが……」

「なんだ?」

「なんと言いますか……彼の気は酷く澀んでいたんです。今までに感じたことのない気でした。だから……」

「……不気味か?」

「……はい」

「本当にあいつはなんなんだ?」

「……」

「? 咲夜さん? どうしたんですか?」

美鈴は表情を暗くさせながら顔を伏せている咲夜に声をかけた。

「……なんでもないわよ」

「?? そうですね……」

『きやく! こわく! 流石は切り裂き魔さんだね』

(彼女達は私の過去を知っているようだ。おそらくあのプライスという男も……一体どうして……)

「……まあわからないことを考えても仕方がないだろう。一つ言えることは……あいつらは俺たちにとって敵だということだけだ」

「……そうね。もしもまたお嬢様に仇をなそうというなら……」

その時は必ず……!」

咲夜はギュツと拳を握り締める。

「さて、それじゃあ……説教を再開しましょう美鈴♪」

「えっ!? ちよ、咲夜さん……それはもう終わつたんじゃ……?」

「何言ってるのよ……そんなわけ無いでしょ?」

咲夜は美鈴をいい笑顔でどん底に陥れた。

「はは……あはははははは……」

もはや美鈴は笑うしかないようだ。

(美鈴……愁傷様)

美鈴を心の底から哀れむミコト。

その時……

ズキッ！

「!?」

ミコトの体に激痛が走る。

(そろそろ……時間切れか)

「……それじゃ俺はこれで失礼するな」

「ええ。またねミコト」

「さようならミコトさん……」

咲夜と美鈴に見送られ、ミコトは博麗神社へ帰っていった。

体に走る痛みが、どんどん鋭くなるのを感じながら……

「はあはあ……」

博麗神社にもどる道中、ミコトは苦しそうにしながら木にもたれかかっていた。

「これは……想像以上だな」

ミコトは自身の体に走る想像以上の痛みで顔を顰める。

「……辛そうねミコト」

そんなミコトに声をかける人物が一人……

「紫……か」

その人物は……紫であった。

「それがあのスペルの副作用なのかしら？」

「……まあな」

「本当にあなたは無茶をするわね……私のスキマであなたを博麗神社に送ってあげるわ。もう歩くのも辛いでしょう？」

「……すまない。助かる」

「気にしなくてもいいわ。あなたのおかげで私も敵のことを知ることができたのだから。ただ……霊夢にはもうある程度事情を話してあるわ。覚悟はしておきなさい」

「ああ……わかった」

紫はスキマを出現させ、ミコトを博麗神社へと送った。

「……プライス」

紫は表情を憎しみに染めながら、プライスの名を呟く。

「誰であろうと……私の幻想郷に仇をなそうというのなら私は……！」

紫は幻想郷の敵であるプライスに対して憎しみを募らせた。

「紫から話は聞いていたけど全く……本当にあんたは……」

霊夢は布団の上で悶え苦しむミコトを辛そうに見つめた。

「すま……ない。霊……夢」

ミコトは苦しそうにしながら霊夢にたどたどしく謝罪の言葉を述べる。

「謝るくらいならはじめからしないでよ……馬鹿」

「……ごめん」

「……もういいから喋らないで。話すのも辛いんでしょ？」

霊夢の言うとおりであった。もはやミコトは言葉を口にするだけでも苦しくなるほどの痛みが全身を襲っている状態なのだ。

ミコトがこのような状態になっているのは……『命いのちふる猛かくらのる神楽舞』の副作用であった。

『命いのちふる猛かくらのる神楽舞』の生命活性の力はいわばミコトの命の前借り。発動中はあらゆる傷、疲弊を癒すという強力な効果を得る代わりにあまりにも大きすぎるデメリットを伴っていた。

それが現在ミコトの全身を襲う死んだ方がマシだと思わせるほどの激痛である。

この激痛はこの先1週間はミコトを蝕む。更にたとえどんなに死にたいと思うほどに苦しんだとしても、死ぬことさえ許されぬ。非常に重く、苛烈なデメリットだ、

「霊……夢。頼みが……ある」

ミコトは余計に苦しむことになるかと理解しつつも霊夢に語りかけた。

「何？」

「頼むから……レミリアとフランにはこのことは言わないでくれ。このことを知ったらあの二人……責任感じるだろうから。だから……」
「……わかつてるわよそれくらい。心配しなくてもレミリア達どころか誰にも言わないわ。あんたの気持ちは……私が一番よくわかっているんだから」

「ありが……とう」

「その代わり、この埋め合わせは後でちゃんとしてもらうから覚悟しなさい」

「了……解」

「わかったらもうじつとしてなさい。その方が……楽でしょ」
「ああ……」

霊夢に言われてミコトは目を閉じた。激痛から眠ることはできないであろうが、その方がまだ幾分かは楽なのであろう。

「本当に……馬鹿なんだから」

そんなミコトを見て、霊夢は静かに呟いた。

「全く、本当にミコトくんってば厄介だね」

幻想郷でも現代でもない空間にて、プライスは悪態をつきながらもどこか楽しそうに笑っていた。

「それに紅美鈴も……思ったよりもずっと強かったようだ。まさかーちゃんとはーちゃんがあそこまで手が出ないだなんて思わなかったよ」

「ごめんなさい〜」

「別に謝る必要なんてないよ。君たちはよくやってくれたんだからさ」

「でも……私たちがもっと上手くやってればこうちゃんも……」

「……あ?」

ガシッ!

突然、プライスは瑠璃の首を強く締めた。

「あ……が……!」

「瑠璃ちゃん!」

苦しそうにする瑠璃を見て玻璃は悲痛の声を上げる。

「あのさく瑠璃ちゃん……僕をそうやって呼ぶなって言ったよね?」

「何度も言ったよね?」

プライスは手の力をさらに強めながら言う。その表情は依然笑顔であるにも関わらず……夥しいほどの怒りと憎しみを感じさせた。

「ぐ……め……マス……タ……」

「マスター！お願いだから瑠璃ちゃんを許してあげて！もう二度と言わないから！」

「……仕方がないな」

ドサツ！

プライスは瑠璃の首から手を離した。瑠璃の体は崩れるように落ちる。

「ゲホツゲホツ!!」

「大丈夫瑠璃ちゃん？」

「う、うん……大丈夫だよ瑠璃ちゃん」

苦しそうに咳き込む瑠璃を瑠璃は心配そうにいたわった。

「……今回は許してあげるけど次はないからね。二人共ちゃんと胸に刻んでおくんだよ？」

「……はい。マスター」

相変わらずの笑顔で……だが脅すように言うプライスの言葉に瑠璃と瑠璃は返事を返した。その表情には確かな恐怖が宿っている。

「わかればいいよ。それにしても……面白い。本当に面白い世界だよ幻想郷は。ミコトくんや美鈴ちゃん……そしてそれ以上のバケモノもいるだから！」

プライスの笑みがニタリと大きく歪んだ。

「これが君が求めた……君が望んだ世界なんだね……」

紫」

プライスは愛おしそうに……そして憎らしそうに幻想郷の創造主、紫の名を口にした。

特別編く咲夜く 第91話

幻想郷の中で人が暮らす領域……人里。

この地に今、あてもなく歩き回っている者が一人。

その人物は……

「お嬢様……今頃何をしているのかしら？」

紅魔館のメイド長、十六夜咲夜であった。しかし、今の彼女を見てもメイドである事を判別することはできないであろう。

なぜなら……普段とは違いメイド服を着ていないからだ。

今咲夜が着ているのはワンピースにカーディガン。青と白を基調にしているそれらを、咲夜は見事に着こなしていた。

なぜ咲夜がこのような姿で人里にいるのか？事の発端は今より2時間ほど前に遡る。

「……お嬢様？今なんと？」

いつものようにレミリアの部屋に紅茶をいれに来た咲夜は自身の主、レミリアに告げられたある一言によって困惑していた。

レミリアの告げたことの内容は……

「だから、今日一日咲夜はメイドの仕事をしなくてもいいって言ったのよ」

咲夜に仕事をするなというものであった。

「お嬢様……私は何かお嬢様の気に障ることをしてしまったでしょうか？」

咲夜はシユンと表情を暗くさせながらレミリアに訪ねる。

「……………は？何言ってるのよ咲夜？」

「だって……………今お嬢様は私にメイドを辞めろと……………」

「そんなこと言ってるじゃないでしょ……………私は一日仕事をしなくていいと言ったのよ？つまりは咲夜に休暇を与えるって言っているの」

「休……………暇？」

休暇という言葉に咲夜の困惑は収まるどころかさらに深くなった。

まあ無理もないであろう。なぜなら咲夜はメイドになってからこれまでの間、レミリアから休暇などただ一度も与えられたことはないのだから。

「そうよ。今まで咲夜は本当によく働いてくれたから一日ぐらいは自由な時間を与えようと思ってね」

「は、はあ……………」

普通ならば休暇を与えられれば喜ぶところであるだろうが咲夜にはそういった感情は見られなかった。

正確にはレミリアから気遣われた事自体には喜んでいいる。しかし今まで休んがことのない咲夜からしたらメイドの仕事をすることが当たり前であり、それは彼女にとつては息をすることと殆ど同義だ。それをいきなり休んでいいと言われたので戸惑いの方が喜びよりも遥かに上回ってしまったているのだ。

……………どうやら咲夜は若干仕事ワーカーホリック中毒を患っているようだ。

「というわけで咲夜。これに着替えて外に出なさい」

レミリアは咲夜に服を渡しながらそう指示した。

「あ……………これは？」

「今日一日はメイドの仕事はお休みなんだからその服装はおかしいでしょ。咲夜はメイド服以外の服ほとんど持ってないから私が用意したのよ」

「あ、ありがとうございます……………でもどうしてわざわざ外にでないといけないのですか？」

「咲夜のことだから屋敷の中いたら気がついたらメイドの仕事をし始めるでしょう。だから外に出たほうがいいわ」

おそらくレミリアの言っていることは正しいであろう。咲夜の性

格上、屋敷の中にいたら仕事をしようとするのは火を見るよりも明らかだ。

「で、ですが私がいなくなつては屋敷のことは……」

「ああもう！それはこつちでなんとかするからとにかく咲夜は今日一日外に出て羽を伸ばして来なさい！これは主としての命令！ちゃんと聞き入れなさい！」

中々咲夜が休暇を受け入れようとしないことに業を煮やしたレミアは有無を言わせぬ剣幕で咲夜に命令を下した。

「わ、わかりました！それでは一日休ませてもらいます！失礼します！」

流石の咲夜も今のレミアの剣幕に圧されてしまい、服を持ってレミアの部屋から出て行った。

こうして咲夜は半ば強引に一日休暇をとることになった。

そして話は冒頭に戻る。

レミアより一日の休暇を与えられた咲夜は現在……

「……はあ。暇ね」

暇を持て余していた。というのも今まで身を粉にしてメイドの仕事に従事していた咲夜からしたら休暇中、何をすればいいのかわからなくなつてしまつていたのだ。

何か暇つぶしになるものがあると思ひ人里に來たのだがその悩みが晴れることはなかった。

結局暇を持て余し、気がつけば屋敷にいるレミアのことや仕事のことを考えてしまうという仕事中毒特有の症状に陥つてしまった。

(……やっぱり屋敷に帰ろうかしら?)

ふと咲夜はそんなことを考え始めた。

(このまま人里にいたところで暇を持て余すだけ。そして暇を持て余した結果お嬢様やメイドの仕事のことばかりを考えてしまい、心が休まらない始末。ならばいっそ屋敷に戻って仕事をしていたほうが実に有意義だわ。お嬢様にはきちんと話をすればわかってくくださると思うし……そうしましょう)

自分で自分を納得させた咲夜は屋敷に戻ろうと引き返そうとした。

その時……

「……咲夜？」

「!? ミコト……」

たまたま人里に訪れていたミコトが咲夜に声をかけてきた。

「ど、どうしてミコトが人里に……?」

「ちよつと用があつたから来たんだよ。俺が人里にいるのがおかしいか?」

「い、いえ……そういうわけではないけど……」

(なんで……どうしてよりもよって今ミコトにあつてしまったの?)

普段ならば偶然ミコトに会えたのならば心が弾むほどに喜んでいただろうが今はそうではなかった。むしろ今の咲夜にとってミコトはある意味一番会いたくない相手であった。

なぜなら……

「そうか……というか咲夜、その服は?いつものメイド服はどうした?」

「そ、それは……(や、やっぱり聞かれた……)」

今の服装についてミコトに突っ込まれなくなかったからだ。

メイド服ばかり着ており、それ以外の姿をほとんど晒したことの無かった咲夜にとって、今の服装をミコトに見られることは彼女にとってとてもなく恥ずかしいこと。

その上もし仮に万が一似合っていないなどと言われた日には……二度と立ち直れなくなってしまうほどのダメージを心に負うことになる。咲夜は悟っていた。

故に今この状態でミコトに会うことは断固として拒否したいこと

であつたのだ。

だが現実是非情。なんのいたずらか今日たまたまミコトは人里に用があり、咲夜と会うことになってしまったのだ。

「?どうした?なんか様子がおかしいぞ?」

咲夜の様子がおかしいことに疑問をもつたミコトは咲夜に尋ねてみる。

「な、なんでもないわ。気にしないで」

「いや、なんでもなくはなさそうなんだが……まあいいや。それにしてもその服いいな。いつもと違って新鮮だし似合ってるよ」

「……え?」

ミコトが何気なく口にした一言により咲夜の思考は一瞬真っ白になった。

「えつと……ミコト?今なんて?」

「?いつもと違って新鮮でその服似合っているって言ったんだが?」

「……」

その瞬間、咲夜の心に花畑が広がった。

『その服似合っている』。まさかその一言でこれほどまでに自分の心が至福に包めれるとは咲夜には思ってもみないことであつたであろう。

「……ミコト。もう一度言つてちょうだい」

咲夜はもう一度至福を味わおうとミコトに頼む。

「?おかしな奴だな……まあ構わないが。その服新鮮で似合っているよ」

(……ああ。やっぱり幸せだわ)

再び咲夜の心を満たす至福を堪能する。

これほどまでに咲夜に至福を与えられるものはレミリアを除けば一人たりともいないであろう。

「ところで咲夜。できればで構わないがいい加減いつものメイド服じゃなくてその服を着ている理由を教えてくださいんだが?」

咲夜の心情を知るよしもないミコトがその服を着ている理由が気になるように尋ねる。

「ええ。それは……」

ミコトに似合っているとされたおかげで気分を良くした咲夜が理由を語り始めた。

少女説明中

「なるほど、今日一日休暇か」

咲夜から事情を聞き、ミコトは納得する。

「ええ。といつても何をすればいいかわからなくて困っていたからもう屋敷に帰ろうと思っていたところだけけど」

「そうか……もつたいないな」

「もつたいない？」

「ああ。せっかく休暇をもらったのにここで帰るのはもつたいないって言うてるんだよ。もうちよい満喫しろよ」

ミコトは咲夜に頬笑みを向けながら言う。

「で、でも……さつきも言ったけど何をすればいいかわからなくて暇なのよ」

「なら……俺がその暇つぶしに付き合っただけでやるよ」

「……え？」

ミコトの突然の提案に咲夜は目を丸くして呆けた声を出す。

「……」

そう言っただけでミコトは歩き出した。

「……はっ！待ってミコトー！」

呆けている間に歩き出したミコトに追いつこうと、咲夜も足早に歩き出した

第92話

nosside

「着いたぞ」

「咲夜がミコトに連れてこられた場所は……」

「ここって……団子屋？」

「人里の中にある団子屋であった。」

「ああ。この団子は美味しいんだ。人里の中でも評判はいいし俺もよく来る」

「美味しいって……あなた甘いものは食べられないでしょう？」

「ミコトが大の甘いもの嫌いであることを知っている咲夜は首を傾げた。」

「甘くない団子もあるんだよ。とにかくここで息抜きしよう」

「え、ええ」

「咲夜はミコトと共に団子屋の暖簾をくぐる。」

「いらっしやいませ……あーミコトさん！」

「店の中に入った二人に挨拶をした団子屋の娘が、お客の一人がミコトでわかるとすぐに満面の笑みを浮かべながらミコトの下に駆け寄ってきた。」

「今日も来てくれたんですね！」

「ああ。この団子は本当に美味しいからな」

「ありがとうございます！……ところでミコトさん。そちらの女性は？」

「娘は咲夜を見ながら探るように尋ねた。」

「ああ、彼女は俺の友人兼仕事の先輩だよ」

「ミコトは素直に咲夜に対して思っていることを言う。」

「友人兼仕事の先輩……ですか」

「??どうした？」

「えっと……その……恋人ではないんですか？」

「娘は恐る恐るといった様子でミコトに尋ねる。」

「恋人？咲夜が俺の？まさか。そんなわけ無いだろ」

「……………」

苦笑いを浮かべながら否定したミコトを咲夜は無言で睨みつける。
「ん？どうした咲夜？」

そんな咲夜の心境など知りもしないミコトは咲夜の態度が気になつて尋ねた。原因は明らかにミコトにあるのだが……………」

「……………」別に。なんでもないわ（本当に鈍いんだから……………」

咲夜は内心でミコトに対して悪態をつきながらそっぽを向いた。

「よかった……………」恋人じゃないんだ（ボソツ）」

「え？」

「な、なんでもないよ！なんでも……………」

娘は焦つたように手を振つて誤魔化した。

（もしかして……………」この娘もミコトの事を？）

咲夜はその様子からこの娘もまた、ミコトに気があるのではないかと察する。

咲夜のこの考えは正しく、この団子屋の娘はミコトに惚れている。

しかもミコトに惚れているのはこの娘だけではない。実はこの人里にいる女性の多くはミコトに好意を抱いていたりする。

まあその話は今は置いておこう。

「そ、それじゃあ席に案内するからついて来て！」

「ああ。ありがとう」

ミコトと咲夜は娘に案内された席に座る。

「ご注文は？」

「俺はいつものよもぎ団子で咲夜は……………」どうする？」

「ミコトに任せるわ。私はあまり詳しくないから」

「わかった。それじゃあ咲夜には3色団子で頼む」

「は〜い！それじゃあ待っててね！」

ミコトから注文を受けた娘は元気よく団子の準備をしに向かった。

「……………」ねえミコト。聞いてもいいかしら？」

娘が去った後、咲夜がいやに神秘的な面持ちでミコトに尋ねる。

「なんだ？」

「さっきこの店にはよく来ると言っていたけれどどれくらいの頻度で

来ているのかしら?」

「大体週一ぐらいだが……それがどうかしたのか?」

「……まさかとは思うけれどこの店に来てるのってあの娘が目当て?」

「……は?なんでそうなるんだ?俺がここに通いつめてるのは単純にこの店の団子と茶の味が気に入っているからであの娘はなんの関係もないぞ?」

ミコトは咲夜の質問にわけがわからないといったように首を傾げながら答えた。

それはミコトにとってい偽ざる考えなのだが……傍から見ると平然とフラグをへし折っているようにも見える。本人に悪気はないのであろうがひどい話である。

「……そう」

「??おかしな奴だな……と、そういえば咲夜。あの時からレミリアとフランの様子はどうか?何か変わったことはあるか?」

あの時とはもちろん紅い月が登った日のことである。

「ええ。変わりなく過ごしているわよ。というよりあの日ある意味で一番実害を受けたのはミコトなのにお嬢様方の心配をするなんて……そういうところは変わらないわねあなたは」

「そういうところ?」

「……まあ自覚していないならそれはそれで構わないわ。気にしなくてもいいわよ」

咲夜は悪戯ぽく……だがどこか呆れた様子で笑みを浮かべながら言う。

「お待たせしました!お団子とお茶持ってきましたよ!」

先ほどの娘が注文しただんごとお茶を持って戻って来た。

「ありがとう」

「いえいえ、これが仕事ですから!それでは私は接客もありますので失礼しますね!ごゆっくりどうぞ!」

娘はペコリとお辞儀をすると直ぐに別のお客のところに駆けていった。

「……中々騒がしい娘なのね」

「まあな。でもいい娘だよ。さて、それじゃあ食べよう」

「そうね」

二人は串に刺さった団子を一口に含んだ。

「……美味しいわね。ちょうどいい甘さで……このお茶もよく合うわ」

咲夜は口の中でよく団子を味わい、お茶に口をつけた後に満足げな表情浮かべる。

「だろ？ 帰りにレミリア達にお土産に買ってつたらどうだ？」

「ええ、いいかもしれないわね……ところでミコト。どうして私をここに連れてきたの？」

「え？」

「だってあなた会った時に用事があつて人里に来てるつて言ったじゃない。それなのに……どうして？ 用事っていうのはいいの？」

「用事の方は別に構わないよ。人里では見つからなかったから」

ミコトは団子を口にしながら言う。

「見つからなかった？ 何か探し物でもしていたの？」

「あ……まあな」

ミコトは妙に歯切れ悪く返事を返した。

「それよりも咲夜をここに連れてきた理由だが……実はレミリアが咲夜に休暇を出したのは俺が原因なんだ」

「え？」

「レミリアに咲夜はいつも休みなく働いていると聞いてな。それで以前休暇を与えたらどうだつて提案したんだよ。たまには息抜きが必要だと思ったからさ」

「そうだったの……」

「ただ咲夜は息抜きする手段を知らなかったみたいだからさ。それでレミリアに提案したのは俺っていうこともあつてとりあえず俺が行きつけにしている団子屋に連れていけば少しは気が休まるかなと思つて連れてきたんだが……もしかして迷惑だったか？」

ミコトは自分は余計なことをしてしまったのではないかと思ひ、不

安げに咲夜に尋ねた。

「そうね……確かにいきなり休暇を与えられたことには少し戸惑ったわ。私にとってメイドとして仕事をするのは当たり前のことだけれが生きがいでもあったから」

咲夜は苦笑いを浮かべながら率直に感じていたことをミコトに話した。

「そうか……」

「……でも、今日お嬢様から休暇をいただけなかったらミコトと一緒にこの団子を食べることもなかったと思うと……休むのもいいかもしれないと思うわ。この服もなんだかんだで新鮮な気分になれて気に入ったし」

「え？」

「ありがとうミコト。あなたがお嬢様に提案してくれたから……あなたが私に付き合ってくれたから息抜きすることができたわ。おかげで明日からまたメイドの仕事を頑張れそうだよ」

咲夜はミコトに対して満面の笑みを浮かべる。

「……それはよかった」

そして咲夜の笑みを見たミコトもまた、満足げに頬笑みを浮かべた。

「ねえミコト……もしもまたお嬢様から休暇を頂いたその時は……またあなたと一緒に過ごしたいのだけれどいいかしら？」

「もちろん。俺でよければ喜んで」

「ありがとう……それじゃあ予約しておくわね」

ミコトと共に過ごせるのならば休みもいいものだ。

咲夜はそんな気持ちを胸に抱いていた。

ミコトと別れ、お土産の団子を持って屋敷に戻るとそこには……
「はあ……. やっぱりこうなっていたわね」

妖精メイドたちが慌ただしく右往左往している光景が咲夜の目に映った。

咲夜はこの光景にある程度予想がついていたらしく額に手を当てながらため息を吐く。

「咲夜さん！お帰りになられたんですね！」

「お願いします咲夜さん！お仕事手伝ってください！私たちじゃあ何をどうすればいいのか…….」

妖精メイド達は咲夜の姿を確認すると一斉に助けを求めに来た。

「どうやら咲夜がいない間、メイドの仕事は滞りまくっているらしい。」

「仕方がないわね……. わかったわ。ただ先にお嬢様に帰ったことを報告しに行くからそれまで待つてなさい」

「「はいー」」

妖精メイド達は希望に満ちた目で返事をした。よほど困り果てていたようだ。

（本当にこの子達は……. しっかりとこの子達がメイドの仕事をマスターしてからじゃないと休むに休めそうにないわね）

咲夜は心の中で妖精メイド達への不満を述べながら、レミリアの居る部屋へと歩を進めた。

特別編くフランく 第93話

霧の湖のほとり、ここに一人の少女がいた。

少女の名前はフランドール・スカーレット。湖の近くに建つ館、『紅魔館』の主、レミリア・スカーレットの妹だ。

「今日はいい天気だねく♪」

空に輝く太陽を眺めながらフランは言う。吸血鬼であるフランにとってなので本来は太陽の光は害悪なのだが今は違う。八意永琳が開発した薬を服用することによって時間制限はあるが吸血鬼である彼女も太陽の下をで歩けるようになっていたのだ。

「おおよ？・フランちゃん？」

鼻歌交じりで機嫌が良さそうに歩くフランに声をかける人物がひとりいた。

「あ、竜希！」

声をかけた人物は竜希であった。現在白玉楼で暮らす外来人でミコトの親友でもある。

「こんにちははくフランちゃん」

竜希はヘラヘラとした表情でフランに挨拶する。彼は普段からこのような軽い調子なのであるが……そんな態度で見かけ幼女であるフランに声をかける光景はどこか危なく感じられる。外の世界では通報されても仕方がないであろう。

「ちよつと失礼だよそれ!?!」

「??いきなり何を叫んでいるの?」

「い、いや……なんかつつこまなきやいけないような気がして……」
……
流石に勘が鋭い男である。

「変な竜希く」

「あははく、そうだねく。ところでフランちゃん。こんなところで一人で何をやってるの?」

「お散歩だよ。屋敷が騒がかったから出てきたの」

「屋敷が騒がしい？何かあったの？」

竜希は単純に疑問に思ったのかフランに尋ねた。

「えつとね、お姉さまが今日一日咲夜にお休みをあげたの。それで咲夜の代わりに妖精メイドたちが屋敷のお仕事をすることになったんだけど……何をどうすればいいか分からないみたいで皆パニックになっちゃったの」

「何をどうすればいいのかわからないって……その妖精たちってメイドだよな？」

「普段屋敷の仕事は咲夜が一人でやってるから。お兄様が執事するときはお兄様もやっているけれど」

「あの屋敷の仕事を普段一人でやって……咲夜ちゃんパネエ。屋敷の規模を考えると妖精ちゃん以上だよ」

竜希は咲夜のスペックの高さを知り、苦笑いを浮かべた。

確かに咲夜の仕事量はとんでもない。おそらくだが労働量なら幻想郷一であるだろう。

「ところで竜希はこんなところで何をしているの？」

今度はフランが竜希に尋ねた。

「俺？俺も散歩だよ。幻想郷は自然が多いから歩き回るだけでも楽しいからね」

竜希は楽しそうに両手を広げながら言う。

確かに幻想郷の自然は多い。開発が進み、自然がみるみる削られていく外の世界とは大違いだ。それ故に竜希は散歩を楽しんでいるであろう。

「そうなんだ……じゃあ竜希は今急いでないんだよね？」

「ん？まあそうだね。あてもなく歩き回ってただけでまだ白玉楼に帰るまでには時間があるからね」

「それじゃあお兄様のお話して！」

「ミコちゃんのお話？あ……そういえばこの前約束したもんね。いいよ。それじゃあ俺の知ってるミコちゃんのアレやこれやお話をしてあげるよ」

「やったー!!」

フランは両手を挙げて無邪気に飛び上がった。大好きなミコトのことが知れるのがよほど嬉しいのであろう。

「さて、それじゃあ何の話からしようかな」

竜希は何の話から始めようかと思案し始めた。どこか悪戯っぽい笑顔をしているように見えるが気のせいではないであろう。

一方その頃

「ん？」

「あらう・どうしたのミコト？」

咲夜は共に団子を食べていたミコトは何かを感じ取っていた。

「いや、なんというか……今竜希が俺関連でよからぬ事を考えているような気配を感じ取ってな」

「……何その具体的な気配？」

思わず呆れ顔になる咲夜。だが対照的にミコトの表情は真剣であった。

「あいつ……何を考えてるんだ？とりあえず次会ったときにシバいておくか」

「それはいくらなんでも理不尽すぎるわよ？」

旗からすれば咲夜の言う事は尤もである。だが現実として現在進行形で竜希はミコト関連でよからぬ事をしようとしていたりする。ミコトの『竜希の不穏行動』に対するリーダーは非常に正確であるようだ。

なんにせよ、竜希は次にミコトに会ったときにシバかれることが決定した。

「えっ!?!お兄様って『——』が苦手なの!?!」

場所は戻って霧の湖のほとり。フランは竜希から告げられてミコトの意外な弱点に驚きを隠せずにいた。

「そうだよ。俺も初めて知ったときはびっくりしたなく。なにせ

『——』を見たときガタガタ震えながら顔を真っ青にさせてその上涙目になってたからね」

「お兄様が涙目!?!」

フランは声を張り上げた。

普段のミコトを知る者からしたら竜希の言っていることを大げさな冗談だと受け取って信じない者も多いであろう。

だが竜希の言っていることはまごうことなき事実である。それほどまでにミコトは『——』が苦手なのだ。

『——』がなんなのかはいずれまたの機会に……

「それにしても……竜希ってお兄様のこと色々知ってるんだね」

「そりゃあ……ね。俺はミコちゃんの親友だから」

「親友か……いいなあ」

「……まあフランちゃんもミコちゃんといれば色々わかるようになるよ」

「それもだけど……それだけじゃない」

「へ?」

「竜希には話してなかったけど私……少し前までお姉様にずっと紅魔館の地下に幽閉されていたの」

フランは憂いを帯びた表情で言う。かつて……紅魔館の地下に幽閉されていた時のことを思い出しながら。

「レミリアちゃんがフランちゃんを幽閉?」

「うん。あ、でもお姉様は何も悪くないんだよ。幽閉されてたのは……私が破壊衝動を抑えられなかったからなの」

「破壊衝動？」

「少し前までの私は自分の能力に振り回されて……何もかもを壊そうとしていた。そして壊すことを楽しいことだと思いついていた。そんな私が外を出歩くのは危険だってお姉様は考えて……それでお姉様は私の為に私を幽閉したの」

「フランちゃん……」

「今はお兄様のおかげで破壊衝動は抑えられるようになったから外に出られるように……ずっと地下にいた私には親友って呼べる人はいなかったの。だから竜希みたいな親友が居るお兄様のこと……少し羨ましい」

495年もの間地下に幽閉されていたフランには親友と呼べる存在はいなかった。それ故にフランは親友という存在を羨望していたのだ。

「お兄様は凄く優しくいい人だから……きつと竜希以外にもたくさん親友がいたんだろうなあ」

ただ……フランが何気なく言ったこの一言は……誤りであるが。

「ミコトに俺以外の親友……か」

突然、竜希の身に纏う空気が変化した。それに伴いヘラヘラとした表情も引き締まり、口調も声色も張り詰めたものになる。

「??竜……希？」

フランは竜希の変化に戸惑い顔にした。

「そうか……ミコトはフランに話していなかったんだな。まあミコトはあんなこと自分から好き好んで話すような奴ではないから当然か」

「あんな……こと？それってなんなの竜希？」

「……ミコトには俺以外の親友はいなかった」

「え？」

「それどころか……親しい人間も片手で数える程しかいなかった

し……むしろ周りからは蔑まれ、存在そのものを否定されていた」
「お兄様が……蔑まれていた？否定されていた？どういう……
こと？」

フランは竜希が何を言っているのか理解することができずにいた。
フランにとってミコトは恩人であり、最愛の人物だ。ミコトは今ま
でに自分が出会った誰よりも心優しく、暖かく強い人……。それ
なのにそんなミコトが蔑まれ、存在を否定されていたなど信じるこ
とができないのであろう。

「……それがミコトの業だからだよ。あまりにも重く……。あ
まりにも辛いな」

「お兄様の業……」

「……フランが望むのならば教えよう。ミコトが外の世界でどん
な思いをして生きてきたのか……。ミコトがどんな人生を歩んでい
たのか。俺の知る限りではあるがな。どうする？」

「……」

しばし口を閉ざし、考え込むフラン。

そして……

「……教えて竜希。お兄様が一体どんな思いをしていたのか……
私は知りたい」

フランは決断した。何よりも愛するミコトのことを知りたいか
ら……知って少しでもミコトを支えたいと長ったから。

「……わかったよ。それじゃあ話そう。俺の知る限り最も哀れな存
在であるミコトのことを」

そして竜希は……かつてのミコトを蝕んだ苦しみを語り始め
る。

第94話

「…………今話したのがミコトが外の世界で味わってきた辛酸だよ」
「そんな…………な」

竜希から外の世界でのミコトの境遇を聞いたフランは愕然としていた。

フランの知る限り誰よりも優しく、誰よりも思いやりがあり、誰よりも暖かい存在であるミコト。そんなミコトが味わってきた苦しみは…………フランの想像を遥かに超えるほどのものであった。

(お兄様…………)

『辛かったし苦しかった。誰も愛してくれないのに愛することが。それでも無理にでも愛しようとしていた…………それが俺にできることだったから。だから愛することを拒めなかった。余計に自分を苦しめるってわかってても愛することをなによりも大切だと思おうとした』

フランはかつて自分が救われた時にミコトに言われた言葉を思い返す。『誰からも愛されなかったのに誰かを愛そうとした』。フランにはそれが苦しいということは理解できたがそれがどれほどの苦しみだったのかは理解できなかった。

かつてフランは地下に幽閉されていたがそれはひとえにレミリアがフランを守るために…………レミリアがフランを愛しているからに他ならない。そのことはフラン自身も自覚していた。自分が愛されていたという事実を…………

だがミコトは…………何者からも愛されず、それどころか誰からも蔑まれていた。ミコト自身に他人に虐げられる要素がないにも関わらずだ。

フランにとってそれは…………許しがたいものであった。

「…………私ね竜希、壊すことが嫌いなんだ」

「ん？」

「私の能力は『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』。壊すため

の能力なの。お兄様に出会う前までははこの能力に振り回されてなんでもかんでも壊そうとしていたけれど……今は壊すことが大嫌い」

フランは元々心優しい子だ。だから自分の壊すための能力を嫌っており、その能力を極力使わないようにしている。

だが……

「でも……私は思うの。お兄様を苦しめた連中を……全部全部滅ぼしてしまいたいって。全部全部滅ぼしてしまいたいって」
フランは怒りに身を震わせ……涙を流しながら言った。何よりも壊すことを拒むようになったフランが……自分の意思で壊してしまいたいと。

フランの心は憤怒に染まっていた。外の世界の人間たちに対して……今までにないほどの激情の炎をたぎらせ、ドス黒い憎しみを募らせていた。

「フラン……」

「お兄様は私の手を握ってくれた！お兄様は私の頭を撫でてくれた！お兄様は私を抱きしめてくれた！お兄様は私の恩人なの！そんなお兄様を苦しめる連中は……私が壊す！私の力で！私の手で！全部全部壊してやる！」

フランは感情任せに叫ぶ。恩人であるミコトに仇なす者たちへの憎しみを……破壊の願望を。それはフランにとって……初めて心の底から望んだ破壊の衝動であった。

「……気持ちわかるフラン。俺もかつては……同じことを考えていたからな」

竜希はフランを見据えながらそう言った。

そう、かつての竜希もフランと同じであったのだ。誰よりも戦うことと傷つけることを嫌う竜希だが、親友であるミコトを拒絶する者達に対して……ミコトを受け入れようとしなかった世界に対してはつきりとした敵意を抱いていたことがあった。それこそ自身の力で全てを断ち斬ってしまったおうかと思うほどに。

ミコトが虐げられることは仕方のないこと。ある意味ではそれが

ミコトの存在意義であり、それがその世界におけるミコトという存在であるのだから。それは竜希自身もミコトを見て理解はしていた。それでも……竜希は憎まずにはいらなかったのだ。

「だからこそ……だからこそ俺は今ミコトがこの幻想郷にいるという事実を嬉しく思うんだよ」

「え？」

「幻想郷は理から外れた世界。この幻想郷ならばミコトは虐げられることない。この幻想郷ならばミコトは受け入れられる。この幻想郷ならば……フランのようにミコトを愛してくれる人がいる」

竜希は憂いを帯びながら言う。

「竜希……」

「フラン、お前が抱く怒りの感情も憎しみの感情も……俺は否定しない。でも……ミコトのことを想ってくれているのなら憎しみを抱くよりも前にミコトを幸せにしてやってくれないか？」

「お兄様を……幸せに？」

「ああ。ミコトは……苦しすぎた。これ以上ミコトが苦しむ必要なんてない。俺は……ミコトに幸せになってもらいたいんだ。ミコトを愛する者の手によって……」

「お兄様を愛する……」

フランは目を閉じ、ミコトのことを想う。

自身を救い、自身を受け止めてくれた愛するミコト……愛おしいミコト……

ミコトはフランにとってなによりも、誰よりも大切な存在だ。

そんなミコトの幸せを……フランが望まないはずがない。

「……わかったよ竜希。私お兄様を幸せにする。お兄様の苦しみを、辛さを忘れさせるほどに……お兄様を幸せにしてみせるよ」

フランは決意した。ミコトは自分を救ってくれた。だから今度は自分がミコトを救い、幸せにしよう。

「……よろしく頼むよ。フランちゃん」

竜希は普段のヘラつとした軽い笑顔を浮かべながらフランに言った。

「うん。それにしても……竜希って本当にお兄様の親友なのね」「え?」

「あんなにお兄様の幸せを願うのは親友だからだよ?正直に言うとなんかお兄様の親友だつていうの疑ってたんだ」

「フランちゃんひどいよ」

笑顔でいうフランに対して竜希はわざとらしくよよよと泣き真似をしてみせた。

しかし……

(まあ俺がミコトの幸せを望むのは……ミコトに対する復讐心でもあるんだけどな)

竜希の心は態度とは裏腹に僅かに陰っていた。

「それじゃ俺はそろそろ白玉楼に帰るね」

竜希は自らの心情を誤魔化すように帰ることをフランに告げた。

「わかったわ。今日はお兄様のお話を聞かせてくれてありがとうね」

「なんのなんの。また次会ったら色々話してあげるね」

「うん。それじゃあバイバイ竜希!」

「またね」フランちゃん

竜希は挨拶をした後、白玉楼へと帰って行った。

「……さて、そろそろ私も帰ろうかな」

そう言ってフランもまた紅魔館へと戻ることにした。

「ただいま」お姉様

紅魔館に帰ってきたフランは真っ先にレミリアの部屋に趣いた。

帰ってきたらちゃんと報告するようにレミリアから言われていたのだ。

「あら、フランも今帰ったのね」

「お帰りなさいませ妹様」

フランがレミリアの部屋に入ると、ちょうど咲夜も帰ってことを報告していたところであった。

「咲夜もう帰ってきたの？」

「はい。お屋敷のことが心配でしたので……帰ってきたら案の定でしたし」

「あ、あはは……」

咲夜ががいなくててんてこ舞いな状態を知るフランは苦笑いを浮かべずにはいられなかった。

「と、そうだフラン聞いて。咲夜ったらさつきまでミコトと一緒に居たそうよ」

「お兄様と一緒に!?!」

「ええ。偶然会ったので」

「本当に幸運よね」

「いいな〜」

レミリアとフランは羨ましそうにしながら咲夜を見た。

「あ、ねえ咲夜。聞いてもいい？」

「なんででしょうか？」

「お兄様……楽しそうだった？」

「は、はい。まあそれなりに……」

「そっか……よかった」

「!?!」

フランはミコトが楽しそうにしていたと聞いて嬉しそうに笑顔を浮かべる。そんなフランを見てレミリアと咲夜は首を傾げていた。

「……お姉様、咲夜」

「なに？」

「なんですか妹様？」

「……絶対にお兄様を幸せにしようね」

「え？」

突然のフランの発言に二人は呆気にとられる。

だが……

「……まあなんで急にそんなことを言ったのかはわからないけどそんなの当然よ」

「私も……ミコトの幸せを望んでいますから」

レミリアも咲夜も直ぐに頬笑みを浮かべて自らの思いを口にした。

「……ふふっ、そっか。それじゃあ私は部屋に戻るね」

そう言いながらフランはレミリアの部屋を出た。

「ミコト……幸せにするからね」

特別編く霊夢く

第95話

「はあ………」

ある快晴の日のこと、縁側に腰掛けた霊夢の表情はは天気とは裏腹に曇っており、元気がなさそうにため息を吐いた。

その原因は………

「………ミコト」

………ミコトにあった。

く昨日の夜く

「え？明日も出かけるの？」

「ああ。用があつてな」

「そう………」

霊夢は目に見えて落胆していた。

まあ無理もない。なにせミコトはここ数日、毎日外出しているのだから。

ミコトに好意を寄せている霊夢からしたらミコトと過ごせる時間が少なくなることは十分に落胆するに値するものであった。

「すまないな。でも掃除とかはきちんと終わらせてから行くからさ」
「………別にそれはどうでもいいわよ」

「え？」

「ねえミコト………明日はどこに行くの？」

霊夢は少し不安そうな表情で尋ねた。

しかし………

「ん、ああ……ちよつとな」

ミコトは具体的にどこに行くのかを告げず、歯切れ悪く言う。

「ちよつとつて……だからどこだよ？」

「……」

改めて霊夢は問う。しかしミコトは答えずに霊夢から視線を逸した。

そんなミコトの態度に……霊夢は腹を立てる。

「なんで答えないのよ！私には言えないの!?!」

「それは……ごめん。でも……」

「もういいわよ！どこにでも好きに行けばいいじゃない！なんなら帰ってこなくてもいいわ！」

「え……?」

激情に任せて心にもないことを言ってしまう霊夢。そしてその言葉を受けたミコトは表情を強ばらせた。

「あつ……」

そんなあミコトを見て、ハツとする霊夢。そして自分がミコトに言うてしまったことに対して激しく後悔した。

「……霊夢。俺は……」

「ッ!!」

霊夢はミコトの言葉を最後まで聞くことなく、部屋から飛び出していった。

(……あれからミコトと一言も喋ってないのよね。しかも朝早くから出て行っちゃったし……)

霊夢は今にも泣き出しそうな表情で呟いた。

(……ミコトが悪いのよ。ミコトと一緒に居てくれないから……)

霊夢は心を込めず、ミコトに形だけの擦り付けをする。

ミコトが最後に一日中霊夢と共に過ごした日は今から1週間ほど前……ミコトがスペカの副作用で動けずにいた時であった。

副作用が消えてからはミコトは毎日どこかしらに外出しており、博麗神社にいるのは朝と夜ぐらいになってしまっていた。

それは依存するほどにミコトに好意を抱く霊夢にとっては寂しさが募らせるのには十分であり、今回の件を引き起こしてしまったのだ。

(ミコトのバカ。バカバカバカ……)

何度も心の中でミコトのことを罵る霊夢。だが……いくら罵ったところで気持ちが悪くなるはずなどない。

それどころか……霊夢の心の陰りは濃くなるばかりであった。(……違う。バカなのは私のほうだ。悪いのも……私なんだ)

そして霊夢はどうとう……ようやく自らの過ちを受け入れた。同時に自らの昨日の行いに対する後悔が霊夢の胸中を飲み込み始めた。

どうしてあんなに腹を立ててしまったのだろうか

どうしてミコトにあんなことを言ってしまったのだろうか

どうしてミコトを……傷つけてしまったのだろうか

(ミコト……本当に出て行っちゃったのかな？本当に……もう帰ってこないのかな?)

ツ……

とうとう霊夢の目からは涙が溢れ始めた。

(……嫌だ。ミコトが帰ってこないなんて嫌だ。私は……もつとミコトと一緒に居たい。ミコトと一緒に暮らしたい。ミコトを……手放したくない)

傍からすれば身勝手な独占欲のようにも思われる霊夢の想い。しかしそれは霊夢がどれほどミコトを必要としており、どれほどミコトに恋焦がれているのかの証明であった。

霊夢の想いは恋する者としては何らおかしいものではなく……

否定することなどできはしないであろう。

「嫌だよ……ミコト……」

ポロポロポロポロと止めど無く霊夢の目からは涙が溢れ出てくる。今の霊夢の姿は酷く痛々しく思わせた。

そんな時に……

「おーい霊夢〜！来てやったぞ〜！」

空から魔理沙が箒に乗ってやってきた。

「まり……キョ？」

「つて、うおっ!?!どうした霊夢!?!なんで泣いてるんだ!?!一体何があつたんだ!?!」

魔理沙は珍しく涙を流す霊夢の姿を見て、少なからず動揺していた。

「……魔理沙！」

ガシツ！

「おおっ!?!」

突然霊夢は魔理沙に縋り付き、魔理沙は思わず素っ頓狂な声を上げてしまった。

「どうしよう……ミコトが……ミコトが……ミコトが……」

「霊夢……ミコトがどうかしたのか？私でよければ聞いてやるから話してみろよ」

いつもとは違うあまりにも弱々しい友人を見ていたたまれない気持ちになった魔理沙は霊夢の背を撫でながら優しい声色で尋ねた。

「……実は昨日……」

ポツリ、ポツリと霊夢はたどたどしく昨日あった出来事を魔理沙に話し始めた。

「そっか．．．．．そんなことがあったのか」

「どうしよう魔理沙．．．．．本当にミコトもう帰ってこないかもしれない。もしそうなら私．．．．．」

ミコトが帰ってこないことを想像した霊夢は辛そうに俯く。

「．．．．．率直に言わせてもらえば今回の件は結局どこに行くのかを話さなかったミコトにも非はあるけど．．．．．やっぱり霊夢の非の方が大きいな」

「．．．．．うん。それはわかってる」

「でも．．．．．霊夢がそこまで心配する必要はないと思うぜ」

「え．．．．．?」

魔理沙が微笑みを浮かべながら優しく言う。霊夢はキョトンとした表情になった。

「それって．．．．．どういう意味?」

「どうもこうもないさ。ミコトは絶対に帰ってくるから霊夢の心配はただの杞憂だつてことだぜ」

「絶対に帰ってくるって．．．．．どうしてそんなこと言えるの?」

「霊夢のいるこの博麗神社がミコトの帰る場所だからだ」

「ここが．．．．．ミコトの帰る場所?」

「そうだけ。実は私さ．．．．．前にミコトにうちで暮らさないかって聞いたことがあったんだ。少しでもミコトと一緒にいる時間を増やしたかったからさ／＼／＼」

魔理沙はその時のことを思い出しながら少し恥ずかしそうに言う。
「でも．．．．．断られちゃったんだ。それも悩む素振りも見せずにはつきりと。断られた理由も理由だっただし少しショックだったな」

「．．．．．ミコトはなんて言つて断つたの?」

「『魔理沙の申し出は嬉しいけど俺の帰る場所は霊夢のいる博麗神社だから。だから魔理沙とは一緒に暮らせない』．．．．．つて言われた」
「え．．．．．?」

霊夢は信じられないといったように目を見開いた。

「すごく悔しかったぜ。だってミコトの中で霊夢は私よりも大きな存在になってるっていう証明みたいなもんだったんだからさ」

「ミコトがそんなことを……」

「それと……これは私も最近になって知ったことなだけでさ、ミコトは同じようなことを他の奴からも提案されてたみたいなんだ。レミリアとか輝夜とか幽々子とか……確か藍もだつたっけか？ただ……ミコトは決して首を縦に降ることはなかった。私のときと同じように……全部断つたんだよ」

「……」

「だから霊夢がそんな心配する必要なんてない。ミコトは……絶対にここに……霊夢のところに帰ってくるんだからな」

魔理沙は安心させるためにニツコリと頬笑みを浮かべながら言った。

「本……当？」

「ああ。だからいい加減泣きやめよ。お前が泣いてるところを見ると調子が狂う」

「魔理沙……ええ。わかったわ」

霊夢は巫女服の袖で涙を拭いながら返事をする。

霊夢の目からは……もう涙は流れていなかった。

「おかげで気が楽になったわ。ありがとね魔理沙」

霊夢は頬笑みを浮かべながら魔理沙に礼を言った。

「霊夢がお礼か……明日は豪雨確定だな」

「は？それどう言う意味よ？」

「だつてお前が素直に礼を言うとかありえないだろ？」

「……随分といい度胸してるじゃない」

悪戯っぽい笑みを浮かべる魔理沙に対して霊夢はジト目を向けた。

「ハハハッ！そうそう。霊夢はそうでなくちやな」

「全くあんたは……今回は一応ちゃんとあんたに感謝してるんだからお礼くらい素直に受け取りなさいよ」

「悪い悪い。でも礼を言うくらいならお茶とお茶菓子のを出してくれの方が私としてはありがたいんだが？」

「図々しいわね……わかったわよ。特別に新しい茶葉で入れたお茶とミコトが昨日買ってきてくれたお団子をご馳走してあげるわ」

「サンキューー!」

「それじゃあ今からとって来るからそこで待つてなさい」

「できるだけ早く頼むぜ」

「はいはい……」

霊夢は縁側から立ち上がり、お茶と団子を用意しに台所に向かった。

「……全く。らしくない友人を相手にするのは大変だぜ」

魔理沙は空を見上げながらどこか疲れたような表情で呟く。

(それにしても、あの霊夢があんな弱々しくなるなんて…….
それほどミコトのことが好きだっていうことか……. まあ私も人のことは言えないんだが)

魔理沙はミコトのことを思い、頬を少し赤く染めた。

(本人は無自覚だろうがミコトは確実に霊夢を特別に思っている……. 今のところは霊夢にリードされてるけど…….)
「負けるつもりはないぜ……. 霊夢」

第96話

(さて……………どうするか)

ミコトは神社の鳥居の前で立ち尽くしていた。

(昨日霊夢には帰ってこなくてもいいと言われてしまったからな……………でも今の俺にとつて帰る場所はこの博麗神社だし……………)

昨日霊夢は自分が怒らせたということはミコト自身理解している。

それ故にミコトは昨日霊夢に言われたことを気にしているようだ。

『本当は自分はここに帰るべきではないのでは?』という思いと『それでもここに帰ってきたい』という思い……………この二つの思いがミコトの心でせめぎ合っているために、ミコトは現在神社の前で立ち尽くしているのだ。

(俺は……………ここに帰ってきてもいいのか?)

ミコトがどうしようか思い悩んでいると……………

「ミコト?」

神社の本殿から霊夢が現れ、ミコトのもとに駆け寄ってきた。

「霊夢……………俺は……………」

ミコトは戸惑いと不安の籠った瞳で霊夢を見つめる。

「……………おかえりなさい」

「え……………?」

「……………おかえりなさい、ミコト」

霊夢はミコトに頬笑みを浮かべながら言う。

「……………帰ってきてきても良かったのか?」

「当然よ。ここは……………ミコトの帰る場所なんだから」

恐る恐ると聞くミコトの手を握りながら霊夢は答えた。

「霊夢……………ありがとう。それと……………ただいま」

ミコトは安心したように笑みを霊夢に向けた。

「……………中に入りましょミコト。話したいこともあるし」

「ああ」

二人は手を繋いだまま神社の中に入っていく。

「はい、霊夢」

「ありがとう」

霊夢はミコトから受け取ったお茶を口に含んだ。

「……やっぱりミコトはお茶汲みが上手よね。私ミコトが淹れてくれたお茶好きよ」

「それは嬉しいな……ところで霊夢、昨日のことなんだが……本当にごめ……」

昨日の件でミコトが謝ろうとすると、霊夢はミコトの口元に人差し指を当てて言葉を止めた。

「ミコトが謝る必要はない。昨日の件は……私が悪かったんだから」

「そんなことない。あれは俺が……」

「そんなことあるの。昨日の件は……私がミコトを独り占めしたいと思っちゃったのが悪かったの」

「霊夢が……俺を独り占めに？」

「うん。私ね……ミコトと一緒に居ると安らぐの。ミコトと他愛のない話をして、ミコトと笑い合っ……そうしている時間がいつのまにか私にとって凄く幸せなものになった」

霊夢はミコトと共に過ごした日々のことを思い返しながら言う。

「だから……ミコトが外出ばかりして一緒にいられる時間が少なくなって私……寂しかったの。その寂しさが原因でイラついて……昨日はつい心にもないことを言ってミコトを傷つけてしまった」

霊夢は後悔から表情を曇らせた。

「昨日の件は私に非がある。だからミコトは謝らなくてもいいの。謝るべきなのは私だから……」

「霊夢……」

「本当に……本当にごめんなさいミコト」

霊夢はミコトに対して深々と頭を下げ謝罪した。

「……霊夢、これ」

そんな霊夢に、ミコトは箱を渡した。

「これは……?」

「開けてみてくれ」

「う、うん」

ミコトに促されて霊夢は箱を開ける。

「これって……ブローチ?」

「その……霊夢にはいつも世話になつてるからさ」

ミコトは照れくさそうに霊夢から視線を逸らしながら言う。

「もしかして……最近よく外出してたのって……」

「霊夢にプレゼントするものを探してたんだ。昨日までは人里で探していたんだけど良さそうなのが見つからなくて……今日香霖堂にいつてようやくそれを見つけたんだ」

だからミコトは行き先を霊夢に話すことができなかつたのだ。まさか『霊夢に渡すプレゼントを探しに行く』など本人に言えるはずもない。

「でもまあ……そのせいで霊夢に寂しい思いをさせてしまっていたなら本末転倒だな。やっぱり今回のことは……俺が悪いよ。寂しい思いをさせてごめん霊夢」

今度はミコトが霊夢に頭を下げ謝った。

「……ううん、そんなことない。そういう理由があつたんなら言えるはず無いもの。やっぱりミコトは何も悪くない。だから……頭を上げて」

「でも……」

「ミコト……本当にいいから」

「……ああ。わかつたよ霊夢」

ミコトは霊夢に諭されて頭をあげた。

「わかればいいの。それにしても……綺麗なブローチ」

霊夢はミコトから渡されたブローチを眺める。ブローチの中央には紅白に彩られた石がついている。

「赤と白……その巫女服と同じ色をしていたから霊夢によく合うと思ってるな」

「凄く気に入ったわ。つけてみてもいい？」

「ああ」

霊夢はブローチを自分の胸元取り付けた。

「どう？」

「思ったとおり……いや、思った以上に似合っているよ」

「ありがとう……一生大事にする」

「一生って……大袈裟だな」

「大袈裟なんかじゃないわ。だって……ミコトからの贈り物なんだから」

霊夢は満面の笑みを浮かべた。その笑顔からどれほどミコトからのプレゼントが嬉しかったのかが伺える。

「……だとしたら俺も嬉しいよ」

ミコトもまた嬉しそうに笑みを浮かべる。

「さて、それじゃあそろそろ夕飯の準備を始めないと」

「あ、今日は私が作るからいいわよ」

夕飯を作ろうと立ち上がったミコトを霊夢が引き止めた。

「それよりもお風呂を沸かしてあるから先に入ってきたらどう？」
「……そうだな。それじゃあそうさせてもらおうよ」

ミコトは風呂に入り、そして霊夢は夕食を作りに向かった。

「ふう……」

夕食を終えまもなく日付が変わる時間、ミコトはいつものように神社の縁側で煙管を吸っていた。

「さて……そろそろ寝ようかな」

そろそろ眠ろうと煙管の火を消すミコト。そんなミコトに……
「ミコト」

霊夢が声を掛けた。

「霊夢？どうしたんだ？」

「えっと……」

霊夢は言いにくそうに口ごもる。

「何もないなら俺は寝させてもらうが……」

「待って！その……ていい？」

「え？」

「今日……一緒に寝ていい？」

霊夢は恥ずかしそうに頬を赤らめながら上目使い気味にミコトに聞いた。

「……いいよ。それじゃあ行こう」

「……うん」

ミコトと霊夢は同じ布団で背中合わせになって横たわっていた。

「……ねえミコト」

「なんだ？」

「ミコトにとってここは……博麗神社は帰る場所なのよね？」

「ああ」

「これからも……ここに帰ってきてくれる？」

「ああ」

ミコトは迷うことなく、霊夢の問いかけに答えていく。

「……よかった」

「よかったって言ってくれるんだな」

「言ったでしょ？私はミコトと一緒にいると安らぐの」

「なら……これから先もずっと俺はここに帰ってきてもいいのか？」

「……ええ。当然よ」

「そうか……霊夢」

「なに？」

「ここに住まわせてくれて……ありがとう」

「……どういたしまして」

「……ふふっ」

二人は振り返り、互いに頬笑みを浮かべた。

「おやすみ……霊夢」

「おやすみ……ミコト」

そして二人は眠りにつく。

二人の寝顔は……とても幸せそうであった。

風神録く現人神の秘めし想いく 第97話

く数年前く

『止めて！放してください！』

少女は自分の腕を掴む男に抗議する。

『そう嫌がるな。楽しいこととしてやるからついてこいよ』

『嫌です！あなたなんかについていきたくありません』

男は少女の腕をグイグイと引っ張る。少女は抵抗するが力に差がありすぎるためビクともしない。

『めんどろうだな．．．．．あんまり抵抗すると痛い目に合わずぞ？』

『ヒツ．．．．!!』

男にドスを効かせた声で脅されると、少女は恐怖から顔を青くさせ、抵抗を弱めてしまった。

『よし、大人しくなったな。それじゃあ黙ってついて．．．．』

トントン

不意に、男は背後から肩を叩かれた。

『あ？なんだ．．．．』

バキッ！

『がっ!?!』

男は振り返ると同時に、そこにいた少年に殴り飛ばされた。その殴打の威力はあまりにも高く、男の気味の悪い声を上げたあとに意識を失ってしまった。

『．．．．え？』

その光景を目の当たりにした少女は突然のことに思わずキョトンとしてしまう。

『全く．．．．見ていて不愉快この上ない』

少年は気絶して倒れ伏している男を見下ろしながら不機嫌そうな声を上げた。

(この人．．．．私を助けてくれた?)

少女は自分を助けてくれた少年に視線を向ける。

(すごく綺麗な人……)

少年はポニーテールにするほどに長い黒髪を持ち、月のような淡い黄金の瞳を煌めかせ、まるで女だと思わせるほどに中性的な顔立ちをしていた。そんな少年の美しさに少女が見惚れてしまうのは仕方がないであろう。

『……お前、怪我はないか?』

『ふえ?……あ、はいっ!大丈夫ですっ!』

少女は突然少年に声をかけられてしまったせい、声を裏返しながらかみんでしまった。

(い、今変な声が……それに噛んじゃったし。変な人だと思われたらどうしよう……)

少女は自分を助けてくれた恩人に変な人だと思われたらどうしようかと内心でびくつく。

しかし……

『……そうか。ならいい』

少年はまるでそれをなかつたことであるかのように振る舞い、微笑みを浮かべた。少年なりに少女に気を遣っているのかもしれない。

『……俺はもう行く。お前もそいつが目を覚ます前にここから離れろよ』

少女に背を向け、少年はその場から離れようとする。

『ま、待ってください!』

だが、そんな少年を少女は引き止めた。

『……なんだ?』

『あ、あの……よければ名前を教えてくださいませんか?』

少女は恐る恐ると少年に名を尋ねた。

『……ミコト。一夢命だ』

少年……ミコトは少し考える仕草を取ったあと、少女に名前を乗る。

『ミコトさんですね。私は東風谷早苗といいます。助けてくれて本当にありがとうございます』

少女……早苗は眩しいほどの笑顔を浮かべながらミコトに感謝の言葉を述べた。

(……よし、これで全部だな)

時は進み、幻想郷の人里に食材の買い出しに来ていたミコトは買い忘れたものがないかをチェックしていた。

(さて、それじゃあ神社に帰……)

「やつほく！ミッコちゃん！」

神社に帰ろうとすると、背後から、自身の名を呼ぶ気の抜けた声を耳にするミコト。

「うわぁ……」

ミコトが振り返るとそこには竜希の姿があった。そしてその隣には妖夢も居る。

「うわあつて……ちよつとミコちゃんその反応はないんじゃないの？俺は心が広いから許してあげるけどさ」

「あつそ。それはそうとこんには妖夢」

ミコトは視線を竜希から妖夢に移し、挨拶した。

「はい。こんにちはミコトさん。食材の買い出しですか？」

「ああ。そういう妖夢は？」

「私は竜希さんの提案で修行の息抜きの散歩をしているところです」

「そうか。どうだ？修行は順調か？」

「ええまあ・・・それなりに手応えは感じています。まだ竜希さんには全然敵いませんが」

妖夢は苦笑いを浮かべながらいう。

「まあ竜希は異常だからな・・・だが修行を続けていけばどんどん強くなると思うからこれからも頑張れ」

「はい。ありがとうございます」

ミコトに激励され、妖夢は嬉しそうに頬笑みを浮かべた。

「・・・あのくミコちゃん？よくむちゃん？俺を放つたらかしにしません？」

先ほどから自分をよそこに会話が進むことに若干の不満を抱いた竜希が恐る恐ると二人に声をかける。

だが・・・

「いたのか（いたんですか）、竜希（さん）」

そんな竜希にかけられたのは非常な一言であった。

「ヒドッ!?というかよくむちゃんまで!？」

「すみません・・・面白そうだったのでつい」

「面白そうって・・・よくむちゃんそんな性格じゃないでしょ」

「まあ竜希の弄りやすさは多分幻想郷でも五指に入るレベルだからな・・・仕方がないだろ」

「・・・すみません竜希さん。否定できません」

「そんなく・・・」

がつくりと肩を落とす竜希。しかしその行動は一々大げさでわざとらしく思わせた。

まあ実際竜希自身このやりとりを内心で楽しんでいるのだが。

「それはそうと用がないなら俺はもう神社に戻らせてもらうぞ。早くしないと食材が痛むからな」

そう言いながらミコトは神社に戻ろうと二人に背を向けた。

「ちよい待ちミコちゃん。俺とよくむちゃんも博麗神社に行きたいんだけど」

「え？」

しかし竜希はミコトを引き止め、自分も神社にいくと述べた。そのことは妖夢にとつて想定外であつたらしく、頭に『?』を浮かべる。「えつと……竜希さん？私達博麗神社に用なんてありましたっけ？」「いや、用はないんだけどさ。俺のシックスセンスが告げてるんだよね。今博麗神社に行けば何か面白いことがあるってね。」

「面白いこと……だど？」

「ぞ。ミコちゃん知ってるよね？俺のそういう勘はよく当たるってさ。」

「……ああ。嫌というほど知っているよ。お前にとつての面白いことは俺にとつての面倒事だつていうこともな。」

ミコトはジト目で竜希を見ながら言う。

「いやいや。今回はミコちゃんにとつても面白いことだと思うよ。」

「……はあ、もういい。来たいなら好きにしろ。」

拒否したところで竜希のことだから嫌でもついて来るということを理解しているミコトは観念する。

「そうさせてもらいます。それじゃあ行こつかよむちゃん。」

「は、はい……。」

竜希は妖夢を伴つて博麗神社へと向かう。

(……本当に面倒なことが起きなければいいが)

2人の後を追うように、ミコトも神社への帰路についた。

少年少女移動中

「ようやく着いたよ。やつぱり博麗神社は遠いね」

神社の鳥居の前で一息つきながら竜希は言う。

「だったら来んなよ……」

「まあまあそう言わないでよミコちゃん」

「全く……と、そうだ。二人共神社に来たんだからちゃんと賽銭は入れるよ?でなければ鳥居は敷地は跨がせないからな」

ミコトは竜希と妖夢に少し強めに念を押した。

「あのミコトさん。私達参拝に来たわけではないのですが……」

「それでもだ。普段参拝客とかあまり来ないんだから入れてけ」

「ミコちゃんもう立派な博麗神社の人間だね……というかなんかミコちゃんそういうところ霊夢ちゃんに似てきてない?」

「私もそんな気がします」

「そうか?特に意識はしていないんだが……それよりも早く中に入るぞ。あ、参道の真ん中は歩くなよ」

「わかってるよ。そういう作法は俺もあの子に教わったんだからさ」

「あの子?」

竜希の『あの子』という言葉に、妖夢が反応した。

「んにゃ?よくむちちゃん興味津々?」

「いえそういうわけは……」

「またまた。本当は少し気になってるんでしょ?」

「……はい。少しですけど」

竜希に言及され、妖夢は白状した。

「それじゃあちよつとだけ話してあげるね。あの子っていうのは俺とミコちゃんにとって大切な後輩ちゃんの事なんだよ」

「大切な後輩?」

「そ。その子は学校……こつちで言う寺子屋だね。その後輩だったんだ。んでその子は神社の子で俺達はその子から神社の作法を習ったってわけ」

「なるほど……そういうことですか」

「懐かしいな〜・・・もう随分会ってないけど元気にしてるかな〜？ミコちゃんはどう思う？ミコちゃんは俺よりもあの子と仲良かったから結構気になってたりしてない？」

竜希はミコトの前に回り込んで尋ねる。

「まあ・・・気にはなるな。あいつに何も言わずに幻想郷に来てしまったことには少し・・・後悔してるしな」

ミコトは儂げな表情を浮かべながら言った。表情からその子に何も告げられなかったことを多少なりとも悔いていることが伺える。

「本当に・・・元気にしているといいんだが」

その子に対して思いを馳せるミコト。

その時・・・

「なんですって!?!もう一度言ってみなさい!!」

神社の奥から霊夢の怒鳴り声が響き渡ってきた。

「今の声・・・霊夢ちゃんだよな?」

「はい。何か怒っているようですが・・・」

「ふむ・・・どうやら客と揉めているようだな」

ミコトは気配を察する能力をONにすることで客が着ていると知り、そう推測した。

「とりあえず行ってみよっか〜」

「ああ。そうだな」

3人は神社の奥に向かって歩を進めた。

(それにしても・・・なんだこの命は?なんで・・・こんなに懐かしく感じるんだ?)

博麗神社の本殿の前、ここで二人の少女が言い争いをしていた。

一人はこの博麗神社の巫女である霊夢。そしてもう一人は緑色の髪に蛇と蛙の形をした髪飾りをつけ、霊夢のものと色違いだと思わせるような巫女服を着た少女だ。

「何度でも言います。この神社を私たちに譲渡してください」

緑髪の少女は怒りで興奮する霊夢に対して、キツパリと言い放つ。

「随分と巫山戯た事を……何様のつもりよ！そもそもなんでそんなことしなきゃならないの！」

「なんでと言われましても……この神社は信仰が少ないのですよね？ 私達は信仰を得るためにこの幻想郷に来たので私達の神社の糧となった方がまだ役に立つと思ひまして。よろしいですか？」

さも当然のように理由を話す少女。なんともまあ……食えない性格をしているようだ。

「よろしいわけ無いでしょ！新参者のくせに調子に乗って……終いには怒るわよ！」

「もう怒っているように見えるのですが……まあいいでしょう。またこちらに伺いますのでその時には神社を廃社してくださいね。それでは失礼します」

「待ちなさい！まだ話は終わってないわよ！」

文句を言う霊夢を無視してその場を立ち去ろうとする少女。

その時……

「早……苗？」

「……え？」

少女……早苗は自身の名を呼ぶ聞き覚えのある声を耳にする。

声のする方に視線を向ける早苗。

そこには……彼女にとつて大切な存在であるミコトがいた。

「早苗……なのか？」

「ミコト……先輩？」

二人は互いを見つめ合い、表情を驚愕に染める。

予期せぬ再会を果たしたミコトと早苗。
二人の再会は何をもたらすのか……？

物語は……動き出す。

第98話

『あ、あのー!』

『ん?』

学校に向かう途中の通学路にて、ミコトは背後から声をかけられた。後ろを振り向くとそこには……ミコトと同じ学校の制服に身を包んだ見覚えのある少女がいた。

『私のこと……覚えていますか?』

少女は恐る恐るとミコトに尋ねる。

『……東風谷?』

ミコトは少女……早苗の名字を口にする。

『覚えていてくれたんですね!』

『そりゃあ……な。君は例外だったし』

『例外?』

早苗はミコトが何気なく口にした例外という言葉に反応する。

『気にするな、こつちの話だから』

『そうですか。それにしてもまさかまた会えるとは思いませんでした。しかも一緒に学校だったなんて……ふふっ』

『なにを笑っている?』

ミコトは早苗がなぜ笑みを浮かべているのか疑問を感じ、尋ねてみた。

『こつちの話ですから気にしなくてもいいですよ。それよりも……もしよかつたら学校まで一緒にしませんか?』

『それは……』

ミコトは早苗の提案に答えあぐねる。

まずミコトはあらゆるものから拒絶されている自分と共にいれば早苗も冷たい目で見られてしまうのではないかと考えた。しかし、目の前のいたいけな少女の提案を無下にしてしまうのは気が引ける。

故にミコトは悩んでいるのだ。

『もしかして……迷惑ですか?』

『い、いや。そんなことはないが……』

不安そうに表情を曇らせる早苗を見て、ミコトはついそう返してしまっただ。

『本当ですか?』

嫌がられていないと分かり、曇っていた早苗の表情はすぐさま明るさを取り戻す。

『よろしく願いますね一夢先輩』

『……先輩?』

今まで先輩と呼ばれたことなどただの一度もなかったミコトは、思わず反応してしまった。

『どうかしましたか?』

『いや……できれば名字で呼ぶのは止めてくれ。慣れてないんでな』

『わかりました。それじゃあミコト先輩って呼びますね。その代わりと言ったらなんですが……私のことも早苗と呼んでくれませんか?』

早苗は首を傾げながらミコトに問う。

『……ああ。わかったよ早苗』

『ありがとうございます。さて、それでは行きましょう』

二人は肩を並べ、学校へと向かい歩を進めた。

(なに……これ?あいつミコトのことを知ってるの?)

表情を驚愕に染めたまま、見つめ合うミコトと早苗を目の当たりにしていた霊夢は思わず呆然としてしまった。まあ無理もないであろう。いきなり現れて神社を廃社しろと言ってくる者が自身が愛しく思っているミコトと知り合い同士のだから戸惑って当然だ。

「……ミコト先輩！」

ギョッ

突然、早苗はミコトに近づき強く抱きしめた。

「会いたかった……ずっとずっと会いたかったです……ミコト先輩」

「……ああ。俺も会いたかった」

自分の胸に顔を埋めながら涙を流す早苗をミコトは抱きとめる。

「もう会えないと思ってました。もう二度と……会うことはないと思っていました」

ポツリポツリと、早苗の口から言葉は紡がれる。

「でも……会えました。こうしてミコト先輩に会えました。私……すごく嬉しいです」

顔を上げ、満面の笑みをミコトに向ける早苗。未だに目から涙は溢れていたがその笑顔はミコトにとって眩しいものであった。

「……そうか」

ミコトはそんな早苗の頭に手を置き、優しく撫でた。撫でられた早苗は気持ちよさそうに目を細める。

「先輩に撫でられるの懐かしい……気持ちがいいです」

「全く……少しは大きくなったと思っただらそうでもないようだな」「いいじゃないですか。好きなんですから」

「まあ早苗がそれでいいなら構わないがな」

まるでその場に二人だけしかないかのような空気が二人から漂ってくる。

そんな空気に終りをもたらしたのは……

「あの……さなちゃん？俺もいるんですけど……？」

竜希であった。

「あ、竜希先輩もいらしたんですね」

「居たよ！とかさなちゃんまで俺に辛辣!？」

今の今まで本当に竜希がいた事に気がつかなかった早苗のこの言葉に竜希はショックを受け項垂れる。

「竜希さん……ドンマイです」

そんな竜希を流石に哀れに思えたのか、妖夢は竜希の肩に手を置いて慰めた。

「というより……本当にどうしてお二人が幻想郷にいるんですか？」
早苗は今になってようやくミコトと竜希が幻想郷にいることに対して疑問を抱いたらしく、二人に尋ねてみた。

「ああ、それは……」
「ミコト」

ミコトが早苗に自分が幻想郷にいる理由を説明しようとしたまさにその時、それを阻むようにミコトの名を呼ぶ者がいた。

無論それは……霊夢である。

「一体これはどういうことなのかしら？その子は一体ミコトのなに？
というかいつまで頭を撫でてるの？」（黒笑）

霊夢は清々しいほどの黒笑みをいまだに早苗の頭を撫で続けているミコトに向けながら問う。

「……あの、今は私がミコト先輩に質問をしているのですから横
槍を入れないでくださいませか？」（黒笑）

自分の質問に対する答えを妨げられてイラついた早苗が、霊夢に負けず劣らずの黒笑を浮かべながら霊夢を見る。

「あら？さつきといい今といい突然現れたくせに随分と偉そうね。一
体何様のつもりなのかしら？」

「それは私のセリフです。あなたの方こそ何様ですか？」
「……」

バチバチと火花を散らせながらにらみ合う霊夢と早苗。二人の間の空気は絶対零度を思わせるほどに冷え切っていた。

（なんだ？霊夢といい早苗といい……一体どうしたんだ？）

そんな二人の様子を見ながら何事かと首を傾げるミコト。どうやら二人の間に漂う険悪な空気を察していないようだ。

……よもやここまで自分のことに鈍いとは。
その一方で……

「あ、あの竜希さん……空気が重いですけど」

「あれが修羅場ってやつだよよくむちゃん。中々面白いことになった

ねく」

竜希と妖夢は二人の険悪さを敏感に感じ取っていた。ただ妖夢は怯えており、竜希は楽しんでいるといったように二人の反応には大きな違いがあるが。

「あく……とりあえずちゃんと説明するから中に入らないか？立ち話もなんだし」

「……それもそうね」

「私もそれで異論ありません」

ミコトの提案によつて話の続きは神社の中ですることとなり、ミコト、霊夢、早苗の3人は神社の中へと入っていく。

「……竜希さん、これ私も居てもいいんでしょうか？というより私が居る意味はあるんでしょうか？」

「そうだねく……とりあえず俺としては居て欲しいかな？楽しいけど流石に一人で傍観するのはきついし」

「わ、わかりました」

少し遅れて、竜希と妖夢も歩き出した。

「ほえく……そんなことがあったんですか」

出されたお茶を飲みながらミコトと竜希から幻想郷に来た経緯を聞いた早苗は思わず感嘆の声を漏らす。

「あの時は突然のことだったから正直驚いたな」

「俺なんて異変解決の真っ最中に来ちやったしね」

「なんとというか……大変だったんですね」

苦笑いを浮かべながら言うミコトと竜希に対して同情の目を早苗は向けた。

「それじゃあ次は私の質問に答えてもらうわよ。ミコトはコイツとどういう関係なの？」

霊夢は払い棒で早苗を指しながら不機嫌そうにミコトに尋ねた。ちなみに早苗の質問から先に答えたのは早苗が霊夢とのジャンケンに勝利した結果である。

「早苗は俺が元居た世界での通ってた学校……こっちで言う寺子屋での後輩だよ」

「後輩？」

後輩と聞いて霊夢は少々怪訝な表情をする。

「もしかして先ほど竜希さんが言っていたのは……？」

「うん。その後輩っていうのがこのさなちゃんなんだよね」

神社に來た時に聞いたことを思い出しながら尋ねる妖夢に竜希は答えた。

「……へえ。ミコトの後輩ね……」

霊夢はジト目で早苗を見つめる。

「なんですかその目は？」

「別に。ただ本当にただの後輩なのかと思っただけ」

「……後輩ですよ。私は……ただのミコト先輩の後輩です」

「??」

返事を返す早苗の表情は、どこか含みのあるように霊夢には思えた。

「……まあいいわ。それよりも気になったんだけどあんたは……いえ、やっぱいいわ」

霊夢は早苗にある質問をしようとしたが、すぐにそれを取り消した。

霊夢が質問しようとしたこと、それは……早苗がミコトのことを拒絶しなかったのかどうかだ。ミコトを愛する霊夢にとつてそれは何よりも重大なことであるから。

しかし……霊夢は結局それを聞くことはしなかった。拒絶している者がミコトを『先輩』付で呼び、慕っているわけないと考えたからだ。

「ところでさう、俺とミコちゃんが幻想郷にきた理由は話したけどさなちゃんはどうして幻想郷にいるの？俺としてはそのへんのこと詳しく知りたいんだけど」

「俺も気になるな……話してくれるか早苗？」

「もちろんですミコト先輩、竜希先輩。私が幻想郷にいるのは……」
早苗はミコトと竜希に自身が幻想郷に来た理由を話し始めた。

く少女説明中く

「えつと……つまり早苗さんの住む神社は外の世界では信仰を集めにくくなってしまったので信仰を集めるために幻想郷に来たというわけですか？」

早苗の説明から妖夢は話を簡潔にまとめる。

「はい。平たく言うとうそなりますね」

「まあ今の外の世界は神様離れが顕著になってきているしわからないでもないな」

「同感」

「外の世界の事情をある程度知るミコトと竜希は納得して領いた。

「それにしても……早苗が現人神とはな」

「流石にびつくりだよ。普通の人間とは違うな」とは思ってたけど」

ミコトと竜希は驚きをあらわにする。まあ無理もないであろう。自分たちの後輩が人間でありながら同時に神である存在を指す現人神であったのだから。

「今まで隠してすみませんでした」

「別に謝ることはないさ。たとえば現人神であろうと早苗が大切な後輩であることには変わらないんだからさ」

申し訳なきように謝る早苗にミコトはニコリと頬笑みを浮かべながらそう言った。

「ミコト先輩……ありがとうございます」

そんなミコトの笑顔を見て、早苗もまた頬笑みを浮かべた。

(ミコトを見るこの目……もしかしてこいつミコトのこと……?)

霊夢は早苗のミコトを見る目を見てある考えを抱いた。

第99話

『おはようございますミコト先輩！』

学校の屋上で横になっているミコトに、早苗は元気よく挨拶をした。

『おはよう早苗』

ミコトは起き上がりながら早苗に挨拶をした。

『神楽先輩と竜希先輩はまだいらしてないんですか？』

『ああ。今日はまだ来ていない。まあもう少ししたら来るだろうかな』

『そうですか。それじゃあお二人が来るまでお話ししましょう』

早苗はミコトの隣に腰掛けながら言う。

『それは構わないんだが……早苗、お前いい加減に授業出たほうがいいぞ？もうずっとサボってるだろ？』

ミコトは少し心配そうな表情で早苗に尋ねた。

実はミコトが学校にいる間ずっと屋上に来ていると知った時から早苗も毎日授業をサボって屋上に訪れているのだ。

『確かにそうかもしれないませんが……私にとっては正直授業なんてどうでもいいんです』

『え？』

『私にとっては……ミコト先輩と一緒にいる時間の方が授業なんかよりもずっとずっと大切ですから』

早苗はニコリとミコトに微笑みを向けた。

『早苗……それって……』

『そんなことよりもミコト先輩！昨日やっていたドラマなんです……』

ミコトの言葉を遮って、早苗は別の話しを始めた……まるで何かを誤魔化すかのように。

二人は神楽と竜希が来るまでずっと二人で話し続けていた。

「あ、もう日が暮れそうですね。帰って夕食の準備をしないと」
地平線に沈みかけている夕日を見て、早苗が立ち上がった。

「ようやく帰るのね……さっさと行きなさい。そして二度とここに近づかないで（黒笑）」

清々しいほどの（黒い）笑顔を早苗に向ける霊夢。

……どうやら霊夢の中で早苗への好感度は底辺に近くにあるようだ。

「そんなつれないこと言わないでくださいよ。私と霊夢さんの仲じゃないですか（黒笑）」

対して早苗も満面の（黒い）笑顔を浮かべながら返す。

……ここまで来ると逆にこの二人は仲がいいのではないかと錯覚してしまいそうだ。

「た、竜希さん……なんだか凄く寒いです」

「覚えておけ妖夢。これが修羅場ってやつだ」

霊夢と早苗が纏う凍てつく空気に当てられて怯える妖夢に竜希は無駄に真面目っぽく論じた。

「修羅場？ どういうことだ竜希？」

わけがわからないといったように首を傾げるミコト。当事者であるにもかかわらず事態を把握しきれていないとは……驚きの鈍さである。

「ミコちゃん……事情はわかっているけどマジでもうちよいやんとしようよ」

「??」

竜希に言われるも依然意味はわかっていないようだ。

「では私はこれで帰りますね。失礼します」

早苗は皆の方に向き直ってペコリとお辞儀をした。

ただ……

「それでは行きましようミコト先輩」

「……は？」

早苗の口から出たこの一言によって、皆は頭に『?』を浮かべ硬直してしまった。

「えっと……さなちゃん？君は一体何を言っているのかな？」

いち早く硬直から解けた竜希が早苗に尋ねる。

「なにして……ミコト先輩を連れて行こうと思っただけですが？」

竜希の問いかけに早苗はコテンと首を傾げてさも当然のように答えた。

「何言ってるのよあんた！ミコトはうちに住んでるのよ！そんなの許されるはずないでしょ」

もちろん霊夢は早苗のこの発言に憤怒し、早苗を怒鳴りつけた。

「いいじゃないですか。そもそも私とミコト先輩はミコト先輩が幻想郷に来る前からの付き合い……つまり霊夢さんよりもずっと長く時間を共にしてきたんですよ？だったら霊夢さんのところにいるよりも私のところに来た方がいいに決まっています」

霊夢に怒鳴られながらも早苗は全く戸惑うことなく、堂々と言い放った。

なお……

(……あのくさなちゃん？だったら何で俺を連れてこうとしなかったのかな？)

竜希はミコトと同じく付き合いが長いにもかかわらず自分だけ除け者にされたことに心の中で疑問を抱いていた。

「良くないわよ！あんたははじめから何でもかんでも勝手に決めて……いい加減私も堪忍袋の緒が切れそうなんだけど？」

霊夢は青筋をピクピクさせながら早苗に言う……もはやいつ爆発してもおかしくはない。

「霊夢……少し落ち着け」

そんな霊夢の肩に手を置いて抑えるミコト。

「ミコト……でもあいつ！」

「……大丈夫だよ(ボソツ)」

「え?」

ミコトはそつと霊夢にだけ聞こえるように耳打ちした。

「早苗……お前の言っている事はわかるし気持ちは嬉しいよ」

「本当ですか?でしたら……」

「でも……いくらなんでも急すぎる。そんないきなりじゃ俺だつて戸惑うよ」

「あ……」

早苗は今になってそのことに気がついたようであった。

「というわけで悪いけど今日は早苗についてはいけない。すまないな」

「いえ……私に方こそ急にすみませんでした。ミコトさんへの配慮が足りませんでしたね」

「謝ることないさ。とりあえず今日のところはもう帰りな」

「はい。それではまた」

ミコトに説得されて、早苗は大人しく帰って行った。

「流石はミコちゃんだね。さなちゃんの扱いをよくわかってる」

竜希は感心したようにミコトに言った。

「……その言い方なんかムカつくんだが?」

「いや別に他意はないよ。素直に感心してるだけだって」

「……そうか」

「ところでミコト。さつき今日はついていけないって言ってたけど……?」

さつきのミコトの言い方からもしかしていずれミコトは早苗のところに行ってしまうのではないかと考えた霊夢は不安そうにミコトに尋ねてみた。

「ああ、あれな。あれはなんとというか……その場しのぎに言ったことだよ。ああでも言わないと早苗は引き下がらないと思ったからさ」
「だらうね。さなちゃん結構頑固だし。でもどうするのミコち?」
「今回は誤魔化せたけど……次同じ手は通用しないと思うよ?」
「私も竜希さんと同じ考えです。なんとというか彼女は……相当ミコトさんに入れ込んでいるように見えましたし」

「それは・・・まあ考えておくさ」

竜希と妖夢苦笑いを向けながら答えるミコト。

「それよりも二人もそろそろ帰ったほうがいいんじゃないか？あんなに遅くなると幽々子が心配するぞ？」

「と、そうだね。それじゃ俺とよくむちちゃんもそろそろおいとまさせてもらうよ。それじゃあ行こっかよくむちちゃん」

「はい。それでは失礼します」

竜希ちよくむは白玉楼へと帰って行った。

「・・・さて、俺もそろそろ夕食の準備しないとな」

そう言いながら夕食の準備をしようと立ち上がるミコト。

だが・・・

「・・・ミコト」

霊夢はミコトの服の袖を掴んで、ミコトを引き止めた。

「どうした霊夢？」

「その・・・本当なのよね？本当にあれはその場しのぎで・・・ミコトは早苗のところに行ったりしないわよね？」

ミコトから説明を受けてもまだ霊夢の不安は晴れることはなかったようだ。

まあ無理もないであろう。なぜなら早苗は霊夢よりもミコトとの付き合いは長いという事実があるのだから。

「霊夢・・・そんなに不安そうな顔するなよ。さっき言ったことは本当のことなんだから。それに・・・前にも言っただろ？俺の帰る場所・・・この博麗神社だって」

ミコトは霊夢を安心させるために優しく頭を撫でた。

「早苗がああ言ってくれたことは嬉しかったけど・・・俺にとって帰る場所はこの博麗神社。それが変わることはないよ。だから・・・心配しなくても大丈夫だ」

「ミコト・・・ありがとう」

「別にお礼を言うようなことじゃないさ」

ようやく安心したように笑顔を浮かべた霊夢を見て、ミコトもまた微笑みを浮かべた。

(・・・ミコト先輩)

守矢神社へ帰る道中、早苗はミコトへと思いを馳せていた。

(もう会えないと思っていたのに・・・未練は断ち切ったと思っていたのに・・・)

もう二度と触れることはないと思っていたミコト。もう二度と声も聞くことができないと思っていたミコト。

そんなミコトに・・・早苗は再開することができた。

(ミコト先輩・・・相変わらずかっこよかったな。それに優しいし一緒にいると凄く安らぐ)

「・・・ああ、やっぱり私はミコト先輩のことを・・・

愛しているんだ」

第100話

「へえ、昨日そんなことがあったのか」

早苗の来訪の翌日。もはや日課に近い頻度で博麗神社に訪れた魔理沙に、ミコトと霊夢は昨日の出来事を話した。

「あくもう、今思い出しても腹が立つわ」

「まあまあ、少し落ち着けよ霊夢」

机に肘をつきながらムスつとした表情をする霊夢にミコトはお茶を差し出して宥める。

「まあ霊夢の気持ちはわからないでもないぜ。いきなりきて神社を廃社しろって言うってその上ミコトを連れて行こうとするんだもんな。私が霊夢の立場だったら絶対マスパ食らわせてたぜ」

「魔理沙それは流石にやりすぎじゃ・・・」

「そんな事ないわよ。私だって夢想天生食らわせようと思っただし」

「・・・そいつはマジで洒落にならないからやめろ。早苗は俺にとつて大切な後輩なんだから」

「わかってるわよ。だからやってないんじゃない」

「そ、そうか・・・」

一応霊夢もミコトの心情を察してか早苗に手荒な真似をすることは躊躇ったようだ。

「でもどうするんだ？さっきの話からするとその早苗って奴はまたそのうちここにくるんだろ？そうなったら色々と面倒になると思うんだが・・・」

「わかってるわよ。だからどうしようか魔理沙に相談してるんじゃない」

（今相談されてたのか・・・てつきり愚痴を聞かされたたと思っただぜ）

まさか今まさに相談されていたとは思ひもしなかった魔理沙はそう思った。

「それで？どうしたらいいと思う魔理沙？」

「いや、どうしたらいいと言われてもな・・・とりあえず神社の事はともかくとしてミコトがここから出ていくことには反対だ

な・・・ミコトに会える頻度が下がるの嫌だし（ボソツ）」

「ん？魔理沙最後になんて言った？」

魔理沙が最後に小声で言った言葉を聞き取れなかったミコトは魔理沙に尋ねる。

「なんでもないぜ。気にするな」

「？そうか・・・」

「それよりも魔理沙、神社のことはともかくってどういうことよ？」

「いや、私からしたらそんなに問題じゃないから・・・」

「何言ってるのよ！これは由々しき問題よ！」

「霊夢の言うとおりにね」

「ん？」

突然聞こえてきたその場にいないはずの4人目の声に首を傾げる
霊夢と魔理沙。

すると・・・

「こんにちは霊夢、魔理沙、ミコト♪」

スキマが開いて中から紫が現れた。

「ほら紫」

「ありがとう」

紫の突然の登場に全く動揺することなく、ミコトは紫にお茶を差し出し、紫はそれを受け取った。

「紫・・・またあんたは勝手に」

「んでミコトは例によって気づいてたのかよ・・・」

ミコトと紫のやりとりを見て霊夢と魔理沙は呆れ顔になる。二人からしたら別段珍しい光景ではなくなっており、若干億劫になっているようだ。

「あら？二人共そんな顔してたら幸せが逃げるわよ？」

「誰のせいだと思ってるのよ（思ってるんだぜ）・・・」

「ふふっ、誰のせいかしらねっ♪」

霊夢と魔理沙に対していたずらっぽい笑顔を向けて言う紫。本当にいい性格をしている。

「まあそれはともかくとして、大体の事情は把握しているわ。博麗神

社が廃社になるのは私にとって……というよりも幻想郷にとつて由々しき事態だわ」

先程までとは一変し、紫は真剣な表情で浮かべた。

「どういうことだぜ紫？」

意味がよくわかっていない魔理沙が紫に説明を求める。

「どうもこうもないわ。この博麗神社は幻想郷と外の世界の境界に建っている。つまり幻想郷と外の世界の両方に存在しているのよ」

「幻想郷と外の世界の両方に？そんなことありえるのか霊夢？」

「ええ。博麗大結界によってその矛盾を可能にしているの。そしてその結界を管理することが博麗の巫女である私の……ひいては博麗神社の役割なのよ」

「その博麗神社が廃社なんてしてみなさい。幻想郷と外の世界との境界がなくなって二つの世界が混ざり合ってしまうわ。そうやってしまったら幻想郷が消滅してしまう恐れさえある。だから博麗神社が廃社するのは由々しき問題なのよ。博麗大結界の管理は博麗の巫女以外には務まらないし」

「そうだったのか……知らなかったぜ。ミコトは知ってたか？」

「ああ。前に気になって霊夢に聞いたからな。あと補足するならば幻想郷と外の世界との境界は博麗神社以外にもある。まあそつちは滅多なことがない限り行き来できないがな」

ちなみにその滅多なことで幻想郷に訪れたのが竜希だったりする。

「まあともかく博麗神社が廃社になるのがヤバイってことはよくわかったぜ。それだったらマジでなんとかしないとな……」

「だからそれをどうするかを話し合ってるんじゃない」

「といつてもこれといつていい案は思いつかないんだけどな」

「あら？別にわざわざ話し合う必要なんてないじゃないかしら？」

「どういうこと紫？」

霊夢は首を傾げながら紫に聞く。ミコトと魔理沙も気になるらしく紫の方を見ている。

「何のために”弾幕ごっこ”っていうものがあると思ってるの？」

「……あ」

3人はそろって間の抜けた声を上げる。どうやら弾幕ごつこの存在はすつかりと頭から抜けていたようだ。

「そっか・・・そういえば弾幕ごつこってそういう問題ごとを解決するためにあつたんだった」

「完全に忘れてたぜ」

「霊夢、魔理沙・・・あなた達どうやったらそういう肝心な事を忘れられるの?というよりミコトならすぐに思いついたと思うのだけれど?」

「いや、俺にとつて弾幕ごつこは危険なものっていう認識が強かったから・・・」

まあミコトがそう思うのも無理もないかもしれない。なにせミコトが今まで行ってきた弾幕ごつこのほとんどは命懸け、あるいは多大な被害を被るものであつたのだから。

「でも早苗は最近こっちに來たばかりだぞ?それなのに弾幕ごつこで決着をつけるって不公平じゃ・・・」

「何を言ってるのよミコト。『郷に入れば郷に従え』って言うでしょ?向こうは望んで幻想郷に來たのだから幻想郷のルールに従うのは当然よ」

「言っている事は尤もだが・・・向こうが弾幕ごつこを受けなかつたら?」

「それこそその時は潔く諦めてもらえばいいのよ。それが幻想郷のルールだつて言つてね」

「・・・まあ確かにそうだな」

ミコトの疑問に淡々と答える紫の言うことは一切破綻はなく、ミコトは納得した。

「思い立ったが吉日。結論が決まったのならさっさと乗り込みなさい。あまり長引かせると面倒なことになりかねないわよ?」

「それもそうね。ミコト」

「ああ」

紫に促されて出発しようとミコトと霊夢が立ち上がる。

だが・・・

「ちよつと待った」

魔理沙が二人に待ったをかけた。

「なによ魔理沙？もしかしてついて来る気？」

「まあそれもあるんだが・・・それよりも大事なことだ」

「大事なこと？」

「・・・二人共相手がどこにいるのかわかってるのか？」

魔理沙はミコトと霊夢に相手の居所を尋ねる。

確か早苗がいる守矢神社のある場所は早苗の口からは語られてはいなかった。

だがまあ・・・

「わからないわ。でも問題ないわよ。勘で探すし」

「ある程度近づけば俺の能力で見つけられるしな」

この二人からすれば全くと言っていいほどに問題にはならない。霊夢の超自然的な勘とミコトの異常なまでの探査の能力があればこの幻想郷で見つけられないものなどほぼないと言ってても過言でないであらう。

「そ、そうか。ならいいんだけどな」

「それじゃあ今度こそ行くわよミコト、魔理沙」

「ああ」

「わかったぜ」

霊夢を先頭に、二人は守矢神社に乗り込むため博麗神社を後にする。

「行ったわね・・・それじゃあ私も彼を呼びに行こうかしら」

一人博麗神社に残された紫はスキマを開き、その中へと入っていた。

第101話

ミコト達が神社を出発して一時間後……

「……間違いないわ。早苗はこの山にいるわ」

ミコト達は幻想郷のとある山の前にいた。

「ここは……妖怪の山か」

「ミコト知ってるのか？」

「ああ。以前藍から話を聞いたことがある。幻想郷でも特に多くの妖怪が住まう山だそうだ。天狗の本拠地もここにあるらしい」

「へえ、そうなのか。でも本当にここにその早苗って奴がいるのか？」
「何言ってるのよ。私の勘を頼りにして来たんだからいるに決まってるじゃない」

魔理沙の疑問に霊夢が自信満々に答えた。

普通ならば何の根拠もないと思うであろうがそこは霊夢クオリティ。幻想郷一鋭いといっても過言ではない霊夢の勘であるので信憑性はかなり高い。

「まあ霊夢が言うなら間違いないだろうな」

「でも一応確かめたほうがいいんじゃないミコちゃん？」

「ああ、そうだな……って、ん？」

ミコト達の耳になんの脈絡もなくこの場にいるはずのない人物の声が聞こえてきた。

ミコト達3人が声のする方に振り向くとそこには……

「やつほミコちゃん」

「どうもこんにちは」

竜希と妖夢が居た。

「竜希に妖夢……お前たちどうしてここに？」

「紫ちゃんにここに連れてこられたんだよ」

「紫に……だと？」

「そ。一時間ぐらい前に紫ちゃんが白玉楼に来て多方の事情を説明されてさ。それで俺も行けって言われてスキマを通ってここに来たってわけだよ」

ミコトの質問にあいも変わらずヘラヘラとした表情で答える竜希。

「紫の奴……どうせなら私達もスキマでここに送れよな」

「全くね。それで妖夢はどうしてここにいるのよ?」

次に霊夢が妖夢に質問した。

「私は竜希さんにそろそろ修行の成果を確認しようと言われて連れてこられたんです」

「修行の成果?」

「修行と言えども俺の相手をしてばかりだからね。とりあえずよくむちやんが今どれくらい強くなってるのかを本人に確認してもらいたかったんだよ。この山は好戦的な妖怪が沢山いるらしいから相手は出てくると思ったしね」

「なるほどな」

「竜希さんの期待に応えられるように頑張ります」

目を閉じ、刀に手を置きながら言う妖夢を、竜希は微笑みを浮かべながら励ました。

「ところでミコちゃん、能力使って探らなくていいの?俺とよくむちやんが直でここに連れてこられたってことはこの山に居るのは確実だけど正確な位置は知っておくべきじゃない?」

「そうだな……確かめてみるか」

ミコトは正確な場所を知るために能力を発動した。

すると……

「……あ」

小さく声を漏らした後に、ミコトは顔色を悪くした。

(な、なんで早苗の近くにアレの気配が……?しかも今までに感じたことがないくらいでかいし……)

「どうしたのミコト?顔色が悪いわよ?」

「な、なんでもない。き、気にするな」

心配して声をかけてきた霊夢にそう答えるミコトであったが、明らかに動揺しているのが見て取れた。

「なんでもないって……とてもそうは見えませんか?」

明らかに何かありそうだと思った妖夢が言う。

「ほ、本当になんでもないから……それはそうと早苗の正確な位置はわかった。ついてきてくれ」

ミコトは誤魔化すようにそそくさと先に山に入っていった。

「ミコトの奴どうしたんだぜ？」

「わからないわ。あんなミコト初めて見る」

いつもとは明らかに異なるミコト。それは共に暮らしている霊夢でさえ初めて目の当たりにするものであった。

一方で……

(ミコちゃんがあそこまで動揺することといえば……あれしかないか)

外の世界から付き合いのある竜希にはミコトが動揺している理由を理解していた。

(……ここはミコちゃんを立てて言わないでおいたほうがいいかな？まあいつかはわかることだとは思うけど)

ただこの場ではミコトの名誉の為に言わ内でおくことにしたようだ。

「はいはい。皆気になるのはわかるけど今は先に進む事を考えようよ。ミコちゃんもどんどん先に言っちゃってるし」

「……それもそうね。行きましよう」

「だな。竜希に急かされるのはしやくにさわるけど」

「それどう言う意味魔理沙ちゃん!？」

「あはは……ドンマイです竜希さん」

恒例の竜希弄りを交えつつ、霊夢達はミコトの後を追った。

ミコト達が山に入ってからしばらくして……
「待ちなさい」

二人の少女が行く手を阻んだ。

一人はまるで茜色の服を身に纏い、髪には紅葉のような髪飾りをつけている。

そしてもう一人は黄色い上着にエプロンを羽織り、蒲萄の飾りの着いた帽子をかぶっていた。

「ん？なんだお前ら？」

突然現れた二人に魔理沙が尋ねる。

「私は秋静葉。紅葉の神です」

「私は秋穰子。豊穰の神よ」

「紅葉に豊穰……つまり二人は秋を司る神様ってことかな？」

竜希は二人の自己紹介から推察する。

「ええ、そうよ」

「それで？その秋の神様が一体私達になんのようなのかしら？」

「……私達はあなた達に弾幕ごっこを挑みます」

静葉が静かに……だがはつきりとした口調で宣戦布告した。

「弾幕ごっこを……ですか？」

「なんでだ？」

「そんなの決まったるわ……人気を得るためよ！」

「……は？」

ミコト達は穰子の発言を聞き、わけがわからないといったように首を傾げた。

「幻想郷でもトップクラスの人気を誇るあなた達を倒せば私と静葉の人気はうなぎ登り……不遇な立場からから脱することができるわ！」

「だから……私たちと弾幕ごっこしてください」

困惑するミコト達を尻目に話をすすめる穰子と静葉。もはや二人の暴走は誰にも止められそうにない。

「……あの、これはどうすればいいんでしょうか？」

「言ってることがよくわからないからできれば回避したいのが……それは無理そうだな」

妖夢の問いかけにミコトが答えた。

「仕方がないわね。相手をしてあげましょう」

「そうだな。それじゃあ……」

「いくわよ（いくぜ）、ミコト」

霊夢と魔理沙はほとんど同時にミコトに促した。

「……ん？」

「あゝ、これは……」

「なんとというか……先の展開が読めますね」

二人に促されたミコトは首を傾げ、竜希と妖夢は先の展開を予想して苦笑いを浮かべた。

「……あんた何でしゃばってるの？ここは私とミコトの二人で相手をするからあんたは下がってなさい（黒笑）」

「……それは私のセリフだけ霊夢。ここは私とミコトでやるから霊夢は高見の見物を決め込んでろよ（黒笑）」

互いにいい笑顔（黒）を浮かべて牽制し合う霊夢と魔理沙。二人の周りの気温が下がったように思われるのは気のせいではないであろう。

「あゝ……二人共。そんなにやりたいなら二人で行ってきたらどうだ？」

事態を収集しようと案をだすミコト。

だが……

「それが一番ありえないでしょ（ありえないだろ）！」
ミコトの案は一蹴されてしまった。

「……竜希、妖夢。俺何かおかしなこと言ったか？」

まさか二人に却下されるとは思わなかったのか、ミコトは竜希と妖夢に尋ねた。

「まあそりゃあね〜……………」

「あそこであれはないですよミコトさん……………」

竜希と妖夢は呆れた様子でミコトに言う。

霊夢も魔理沙もミコトと一緒に弾幕ごっこをしたいと思っているのだからミコトの提案は見当違いにも程があるのだ。

尤もそのことをミコトに理解しろというのはまず無理であるのだが……………」

「仕方がないわね。ここは正々堂々……………ジャンケンで決めるわよ」「わかったぜ。勝った方がミコトと一緒にあいつらと弾幕ごっこをする。念のため言っておくが一発勝負だぜ」

「わかってるわよ」

どうやらどちらが出るのかはジャンケンで決めるようだ。

「それじゃあ行くわよ……………ジャンケンポン！」

こうして霊夢と魔理沙による弾幕ごっこの参加権を掛けたジャンケン対決が始まった。

(……………というか今さらだが俺が出ることは決定事項なのか?)

二人がジャンケンをするのを眺めながらそんなことを考えるミコト。

そして……………」

「……………なんで私達蚊帳の外みたいな感じになってるの?」

「……………やっぱり私達は不遇なんだ」

誰からも構ってもらえずにいた穰子と静葉は少々いじけていた。

「よっしゃ！勝ったぜ！」

「くっ……負けたわ」

14回ものあいこの末、ジャンケン対決は魔理沙が制した。

「へへっ、悪いな霊夢。ここは私とミコトに任せてもらうぜ」

「……わかったわよ」

ニヤリと自慢げに笑みを浮かべる魔理沙を霊夢は恨めしそうに見ながら渋々と返事を返した。

「いくぜミコト」

「ああ」

穰子と静葉に向き直るミコトと魔理沙。

「待たせたな穰子、静葉」

「全くね。それじゃあ……始めるわよ！豊符『オヲトシハーベスタ』!!」

「葉符『狂いの落葉』」

穰子と静葉は同時にスペルカードを発動した。

二人のスペルカードによる弾幕がミコトと魔理沙を襲うが……

「甘い(ぜ)!!」

ミコトは右に、魔理沙は左に飛ぶことで軽々と弾幕を回避した。

「次は……」

「こっちから行かせてもらう」

次は魔理沙とミコトは穰子と静葉に向かって弾幕を放った。

「うわわっ!?!」

「あ、危なかったあ……」

様子見程度に放った弾幕であるのでそこまで規模は大きくなかったのだが穰子と静葉は危なっかしい様子でどうにか躲していた。

「……おい、ミコト。私思ったんだがこいつら……弱くないか？」

魔理沙は先ほどの弾幕と拙い回避を見て率直に思ったことをミコトに伝えた。

「魔理沙……それは思っても口に出さない方がいいと思うが?」

「いやだって事実だし……ミコトもそう思っただろ?」

「……ノーコメントで」

それはもはや肯定しているのと同じである。

まあ二人がそういう思うのは無理もない。穰子も静葉も弹幕ごっこには慣れていないのだ。

「張り合いないな……仕方がない。とつとと終わらせるぜミコト」
「わかった」

魔理沙はミニ八卦炉を取り出し、ミコトはクラマを銃に帰る。

そして……

「恋符『マスタースパーク!!』」

二人は同時にマスタースパークを放った。

当然弹幕ごっこに慣れていない穰子と静葉が熟練者である魔理沙とミコトのマスタースパークを回避できるはずもなく……

「きやああああ!!」

二人はマスタースパークの直撃を受けて吹き飛んでいった。

すなわち……この弹幕ごっこは魔理沙、ミコトペアの勝利ということだ。

「やっぱり弹幕パワーだぜ!」

(俺はどつちかというと手数重視なんだが……まあ言う必要はないか)

「ミコちゃん、魔理沙ちゃん。お疲れ様〜」

弹幕ごっこを終えた二人に竜希が労いの言葉を掛ける。

「ああ、サンキュ竜希」

「それにしても……えげつないわね。魔理沙一人でも相当な威力なのにミコトのも加わるなんて……」

「……穰子さんと静葉さんには同情しますね。怪我してなければいいのですが」

霊夢と妖夢は吹き飛んでいった穰子と静葉を憐れむ。

「まあ確かに少し心は痛んだな……でも吹き飛んだ瞬間に能力使っ

てイノチを与えたから怪我してても治ってるはずだから大丈夫……
だと思っ」

「ミコちゃん……随分と器用なことできるね」

竜希はミコトの器用さに素直に感心していた。

「それよりもさっさと進もうぜ。先はまだ長いんだし」

「それもそうね」

「行くか」

穰子と静葉を退けた一行は、早苗のいる神社に向かって歩を進めた。

第102話

ミコト達一行が山の奥へと進んでいく途中……
「ちよつと待った!」

それに待ったをかける者がいた。

「ん?なんだぜお前?」

「私は河城にとり。この山に住む河童だぞ」

魔理沙が聞くと少女、にとりは素直に名前を名乗った。

(河童ね……前々から思っていたが幻想卿の妖怪って俺のイメージとだいぶ違うな)

にとりが河童であると知ったミコトはそんな風に思った。

無理もないであろう。にとりは水色の髪をツインテールにし、水色の服と緑の帽子を着用しており、外見はミコト達と同じ年頃の少女だ。とてもではないが河童だと言われてもそうなのかと納得はできない。

そしてにとりの他にもそう思わせる妖怪はこの幻想郷には多々いるのだ。

「にとりちゃん……ね」

「どうかしたんですか竜希さん?」

にとりの名をつぶやきながら何かを考え込む素振りをとる竜希に妖夢が尋ねる。

「あく別に大したことじゃないんだけど……もしもキャッチコピーをつけるとしたら『幻想郷一お値段以上!』とかになるのかなって思ってます」

「……は?」

「えつと……それどう言う意味なんだ?」

竜希の言っていることの意味を全く理解できないようで霊夢、魔理沙、妖夢、にとりは頭に『?』を浮かべる。

「竜希……気持ちにはわからないでもないがそれはやめろ」

そんな中竜希の言っている事をただ一人理解できているミコトは呆れたように額に手を当てる。

「え〜？でもにとりって言ったたら某有名な家具……」

「だからやめろって。それ以上は色々と面倒だから」

「りようか〜い」

((もう何が何やら……))

ミコトと竜希のやりとりを訳も分からず眺める霊夢、魔理沙、妖夢、にとりの4人。完全に置いてけぼりだ。

「ところでにとり。お前は どうして俺達を引き止めたんだ？」

「え？あ、ああ。その理由は単純明快だぞ。お前達をここから先に通すわけにはいかないんだ」

「通すわけにはいかない？どうしてよ？」

「ここから先は危険だからなく。だから行かせるわけにはいかないんだ」

にとりは神妙な面持ちでミコト達にそう告げた。

「危険か……まあそうだろうな。この山には沢山の妖怪が住んでいて俺達みたいな余所者に対していい顔をしないものも多いだろう」

ミコトはにとりの言葉からそう推測した。

「その通りだよ。だから素直に帰ったほうが身のためだぞ」

「……優しいな」

「え？」

「にとりにとっても俺達は余所者なのに……にとりは俺達のことを心配してくれている。にとりは……優しい子だな」

「なっ!?べ、別にそんなこと……私はただ河童の盟友である人間が傷つくのが嫌なだけで……」

ミコトに褒められて照れくさいのか、にとりは頬を赤く染め、手をもじもじとさせながら視線を泳がせる。

「にとり……ありがとな」

「ヒュイツ!」

ミコトが穏やかな微笑みを浮かべながら礼を言うと、にとりは素っ頓狂な声をあげながら顔をさらに赤くさせる。

そんな様子を見たミコトにとりを除く一同は同時にこう思っ

た……ミコトがまたフラグを建てたと。

(……はあ、またやったわねミコト)

(本当にミコトは……ある意味すごい奴だぜ)

(ミコトさん……本当に罪作りな方ですね)

(これでミコちゃん素なんでもなく……マジに重症だね)

4人はそれぞれミコトに対して呆れていた。流石はS級フラグ建築士といったところだろうか。

「でも……ごめんにとり。俺達はどこで立ち止まるわけにはいかないんだ。俺達には俺達の目的があるから……だからここを通してくれにとり」

ミコトは表情を真剣なものへと変えてにとりにそう告げる。

「……そういえばまだ名前を聞いてなかったな。お前の名前は？」

「ミコト。「夢ミコトだ」

「そうか……ミコト、お前がどうしても先に進みたいっていうのはわかった。でも……それでも私はお前を……お前達をこの先に進ませたくないんだ。だから……この先に進みたかったら私を倒していけ！」

にとりは水の弾幕を展開しながら臨戦態勢に入った。

「やっぱり弾幕ごっこをするしかないか……皆下がっていてくれ。ここは俺がやる」

「ミコト……わかったわ。頑張つてねミコト。負けるんじゃないわよ」

霊夢は激励の言葉をミコトに送りながら数歩後ろへと下がる。それに伴って竜希、魔理沙、妖夢も霊夢と同じように後退する。

「それじゃあいくぞミコト！ 洪水『デリユーヴィアルメア』!!」

にとりがスペルカードを発動すると、水でできた数多の弾幕がミコトに襲いかかる。

「こいつを試してみるか……霊符『夢想封印』!!」

ミコトは使用したスペルカード、夢想封印によって発生した弾幕により、にとりの弾幕を相殺した。

「あれって……霊夢さんのですよね？」

「そうよ。前々から教えていてつい最近習得したのよ」

ミコトが夢想封印を発動したことに妖夢は驚きを顔にし、霊夢はどこか嬉しそうに微笑みを浮かべた。

「私のマスパも習得しまうし……ミコトって本当に器用だな」
「まあそれがミコちゃんだからね」

ミコトの器用さに魔理沙と竜希は感心する。もはやミコトはいずれ幻想郷に存在している者すべてのスペルカードを習得してしまいうような勢いだ。

「やるなくミコト！だったら次はこれだ！河童『スピン・ザ・セファリックプレート』!!」

ゴゴゴ……!

スペルカードの発動と同時ににとりの近くに何とも形容し難い機械のようなものが出現した。

「……は？」

流石のミコトもこれは予想外であつたらしく、素っ頓狂な声を上げた。観戦している4人も呆然としている。

「ふふふ……あまりの凄さに言葉も出ないようだな」

そんな中にとりはえっへんと胸を張る。どうやらこれは彼女の自信作のようだ。

「さあ！お前の性能を見せつけてやれ〜！」
ピキーン！バババツ！

にとりが指示を出すと機械はミコトに向けて大量のレーザーと弾幕を放った。その規模は先ほどまでの比ではない。

だが……

「おっと」

ミコトはレーザーも弾幕も平然と回避する。

「今のを回避するなんてやるなミコト！でもまだまだ！」

機械は休むことを知らずといった様子で弾幕やらレーザーを乱射する。

だがその全てをミコトは軽々と時には回避し、時には剣をだして弾

いたりして凄いでいた。

(さて、どうするかな……この程度の弾幕なら対処できるが流石にずっと出されると面倒だ。かと言ってあれはにとりの自信作っぽいから壊すっていうのもな……)

ミコトがどうしたものかと考えを巡らしていると……
プシュンツ……

突然機械から気の抜けた音が聞こえてきたかと思うと、煙を上げて活動を停止した。

「うつ、もうオーバーヒートした……やっぱり活動時間に難ありだなく」

にとりは残念そうに落ち込んだ。その様子からしてどうやらこの機械はまだ欠陥があるものようだ。

これを好機と見たミコトはスペルカードを構えて発動しようとする。

「おっと、そうはさせないぞ！光学『ハイドロカモフラージュ』!!」

しかしそれに気がついたにとりが素早くスペルカードを発動。そしてにとりの体が透け始め、すぐに姿が見えなくなってしまった。

「こいつは……光学迷彩か？」

「そうだ！これこそ河童の技術の集大成！河童の技術力は幻想郷一だ！」

姿を消した状態にとりは誇らしげに声を上げる。

「なるほど、ここまでの光学迷彩を作れるなんて確かに河童の技術力は大したものだな。だが……俺には通用しない。混符『黒と白の奈落』!!」

ミコトはスペルカードを発動し、夥しいほどの黒と白の弾幕が展開される。

弾幕は一見何もないような場所に飛んでいくが……

「うわあああああつ!？」

突如辺り一帯に悲鳴が響き渡る。そしてそれと殆ど同時に、にとりが姿を表した。

「悪いなにとり。俺の勝ちだ」

被弾し、倒れ伏したにとりにミコトが言い放つ。

「う、うう……どうして私のいる場所がわかったんだ？」

「俺の『命を理解する程度の能力』のおかげさ。この能力を使ってにとりの命を感知したんだ」

そう、ミコトにはこれがあるのだ。

ミコトは能力のおかげであらゆる命を察知することができる。ミコトを前にして姿をくramsなどまず不可能といってもいいのだ。

「そんな能力があったのか……私の完敗だな」

「すまないにとり。今回復するから」

そう言うのとミコトはにとりに自信の生命力を分け与える。

「暖かいなく……強くて治癒までできるなんてミコトは凄い奴なんだな」

「そうでもないさ。俺よりも凄い奴なんてこの幻想郷にはいくらでもいるだろう」

「まあそれは否定しないけど……やっぱりミコトは凄いと私は思うぞ」

「そっか……ありがとうなにとり」

ミコトはにとりの頭を撫でながら礼を言う。

「べ、別にお礼を言われるようなことじゃない／＼／＼」

もちろんというかなんというか……頭を撫でられたにとりは頬を赤らめ、どこか嬉しそうな表情になっていた。

「そ、それよりも私に勝ったんだから先に進んでもいいぞ。ミコトぐらい強ければきつと大丈夫だ」

「そうか。それじゃあ行こうか皆」

「……」

ミコトが霊夢達の方へと振り向くと皆じつとミコトを見つめていた。その中でも霊夢と魔理沙はジト目だ。

「ん？皆どうしたんだ？」

「はあ……なんでもないわよ。それよりも早く行きましょ」

「そうだな。さっさと行こうぜ」

「あ、ああ……って、ちよつと待てよ霊夢、魔理沙」

スタスタと足早に歩き始めた霊夢と魔理沙の後ろをミコトは追いかけていった。

「……なあお前ら。ミコトっていつもあなのかく？」

その様子を見ていたにとりがその場にまだ残っていた竜希と妖夢に尋ねる。

「まあ……そうですね」

「それがミコちゃんですから。でもにとりちゃんもミコちゃんのそういうところに惹かれたんじゃないの？」

「ヒュイツ!? な、何言ってるんだお前は〜！」

竜希がニヤニヤとした表情でからかうと、にとりはわかりやすく動揺した。

「ほら！ お前達もさっさと行け！」

「わかったわかった。行こうよ〜むちゃん」

「はい。それでは失礼します」

竜希に促されると、妖夢はにとりにペコリと一礼する。そして二人もミコト達もその場から離れようとする。……

「と、ちよつと待て。最後に一つ言っておくことがある」

「ん？ なくに？」

「この山に最近神様が居着いたのは知ってるかく？」

「知っています。というよりもそもそも私達はその神様のところに行こうとしていますから」

「その神様が原因で今この山には腹の収まりが悪くなってる奴が多い。中でも一番殺気立ってるのは天狗の長だ。その長の命令で天狗は今警戒を強めているから会ったら喧嘩を売られるかもしれない。気をつけろよ」

にとりは真剣な表情で忠告した。それほどまでに今の天狗は危険らしい。

「ご忠告ありがとうございます」

「ありがとね〜。それじゃあばいばいにとりちゃん」

今度こそ妖夢と竜希はその場をあとにして、ミコト達を追った。

第103話

「皆、ちょっとストップ」

山の奥へと進む途中、ミコトが皆を引き止めた。

「ミコちゃん、もしかして……」

「ああ。お前の思っている通りだと思うぞ」

皆が何事かと首を傾げる中、竜希だけは察したようだ。

「どういうことだぜミコト？」

「ああ……ここに向かって急速に近づいてきている奴がいる。多分俺達を山から追い出すためだろうな」

「また？」

ミコトの話聞き、霊夢は嫌そうに顔を顰めた。

「まあ俺達はこの山の妖怪からしたら侵入者だから仕方がないでしょう」

「そうですね……ちなみにミコトさん。数は何人ですか？」

「二人だ。しかも……」

「あややややや!! 見つけましたよ!!」

「だから早すぎますって文様〜!!」

妖夢の問いかけに答えようとしたミコトの言葉を遮るようにして、射命丸文と文に涙目でしがみつく獣の耳と尻尾を持つ少女が登場した。

「……この通り一人は文だ」

ミコトは頭が痛いと言ってように額に手を当てる。他の者(竜希を除く)も面倒そうな表情をしている。

「文様……この人達に何かしたのですか? なんかすごく面倒そうにしているんですが」

「あやややや……心当たりはないんですがね〜」

ジト目気味で尋ねる少女に文が苦笑いを浮かべながらそう答えた。

「まあそれはともかくとして! ミコトさん! 早速取材を受けてもらいますよー!」

「いやいやいや……俺が言うのもなんだが文のやるべきことって

それじゃあないだろ？」

文はペンとメモを手に取りながら迫る文をミコトは窺めた。

「彼の言うとおりですよ文様……私達の目的は彼等をここから先に通さないことです」

少女はミコトに同意しつつもミコト達に鋭い視線をぶつける。

「わかっていますよ権さん。ちよつとした冗談ですよ」

「ですが彼が了承したら取材する気だったんですよ？」

「それはもちろん♪」

「……はあ。やっぱりこの人疲れる」

ガツクリを肩を落とす少女。登場してほんのわずかであるにも関わらず彼女の疲労はマツハだ。

「あゝ……君大丈夫？」

そんな様子の少女に流石に同情したのか、竜希が優しい声色で声を掛けた。

「ええまあ……慣れましたので」

「苦労してるんだね」

((お前が言うな))

竜希のこの言葉に対して、ミコト、霊夢、魔理沙、妖夢の心が一つになった。

「ところで君は何者なのかな？俺としてはできれば知りたいんだけどな」

「え？あ、はい。私は白狼天狗の犬走権といいます」

竜希に名を尋ねられ、少女……権は礼儀正しく自己紹介をした。

「そつかく、権ちゃんっていうんだね。素敵な耳と尻尾をしてるね」

「す、素敵!？」

竜希がヘラツとした笑顔で言うと、権は恥ずかしそうに顔を赤らめた。

「あははっ、顔を赤らめて可愛いね」

「可愛いって……うう／＼／」

さらには可愛いと言われて一層顔の赤さが増していく権。どうやら言われ慣れていないようだ。

ちなみに……

「……」
そんな竜希の様子を妖夢は面白くなさそうに見ていた。まあ仕方がないことであろう。

「それじゃ俺達はこれで失礼するね。行こっか皆」

「そうだな。それじゃあまたな権」

「はいまた……って違います！」

すんでのところで当初の目的を思い出すことができた権は一行の行く手を阻んだ。

「ありやりや残念。もうちよいだったんだけどね」

「惜しかったな」

残念そうにする竜希とミコト。どうやら本気で今ので誤魔化して先に進むつもりだったようだ。

「何を残念そうにしてるんですかあなた達は！まさか止めなかったら本当にこのまま先に進もうとしていたんですか！」

「そのつもりだった」

（こういう時は息ぴったりなのねこの二人……）

（やっぱりとも変わった奴だぜ）

（こういうところを見ると二人は親友だと納得させられます）

真顔で権に返事を返す竜希とミコトを見た霊夢、魔理沙、妖夢はそんなことを思っていた。

「あははは……まあ茶番はこの辺にするとして、あなた達がなん目的をもってこの山に入ったのかは存じませんが私達は天狗の長、天魔様の指示であなた達を山から追い出さなければならぬんです」

先ほどまでとは打って変わって普段からは考えられないような真剣な面持ちで文が語り始めた。

天狗社会は上下関係がかなり厳しい。故に普段ははっちゃけた性格である文であっても、自身の考えがどうであれ天狗の長からの指示には従わざるを得ないのだ。

「……まあ先程はミコトの取材を優先しようとしていたが。

「文様の言うとおりで。大人しく帰るといふならこのまま見逃しますが、もしも帰らないというなら……強硬手段を取らせてもらいます」

自身の持つ刀に手を掛けながら楯は脅しをかける。それに伴って文も扇子を手にとった。

「……悪いな文、楯。俺達には俺達の事情がある。ここで退くわけにはいかないんだ」

「強硬手段に出るっていうなら……相手になるわ」

ミコトと霊夢が応戦しようとする。しかし……

「二人共ちよつと待ったー!」

二人の前に竜希が立ちはだかり、待ったを掛けた。

「なによ竜希?」

「悪いけどこの勝負……よくむちゃんに任せてもらえないかな?」

「……え?」

突然の竜希のこの申し出に一番驚いたのは妖夢であった。

「そ。そろそろよくむちゃんには修行の成果を知ってもらわないとね。というわけで……行けるねよくむちゃん」

竜希は妖夢を正面から見据えながら言う。表情はいつも通り気の抜けた笑顔であるが、その目からは真剣さが感じられる。

「竜希さん……わかりました」

先程までは急なことに戸惑っていた妖夢であったが、小さく頷きながら返事を返した。その目からは竜希に応えるかの如く決意が秘められている。

「それでは行つてきますね」

「うん。しっかり見てるから存分に戦つてきな」

竜希に見送られながら、妖夢は文と楯に歩み寄つていった。

「なあ竜希ちよつといいか?」

「なくに魔理沙ちゃん?」

「妖夢を行かせることには特に異論はないんだが……一人で大丈夫なのか?あの楯つて奴のことは知らないがはつきり言つて文は強

いぜ」

「そうね……私でも結構苦戦するレベルよ」

魔理沙と霊夢の言うとおりだ。

普段は明るく、はっちゃけたキャラをしている文であるが実はその実力はかなり高い。それこそ幻想郷の中でもトップクラスといってもいいだろう。

「それくらい文ちゃんと初めて会った時からわかってたよ。ついでに言うど権ちゃんも決して弱くはないから二人同時に相手をするのは大変だろうね」

「だったら……でも大丈夫だよ……え？」

「今のよ〜むちゃんなら大丈夫だ。なにせ俺が鍛えてあげたんだからさ」

竜希はニヤリと笑みを浮かべながら言う。

「……そうだろうな。でなけりやお前が送り出すはずがない」

「さつすがミコちゃんわかつてる」

「まあ俺も昔お前に鍛えられていたからな」

ミコトもかつては竜希に修行を付けてもらったことがある。だから問題ないと判断しているようだ。

「まあ心配せずに霊夢ちゃんと魔理沙ちゃんは黙って見てればいいよ〜。多分そう長くはかからないだろうしさ」

「……わかったわ」

「そうさせてもらうぜ」

霊夢と魔理沙はひとまずは竜希の言うことに納得することにして、妖夢に視線を向けた。

「あやや？妖夢さん一人ですか？」

「はい。私一人で相手をさせてもらいます」

「……そうですか」

権はわかりやすく不機嫌さを顕にする。

「一応言っておきますが私はあなた達二人を侮っているわけではありません。私が一人で戦うのは……自分の今の強さを知るため。竜希さんに鍛えられ、今の私がどれだけの強さを手にしているのかわかるためです」

「……わかりました。でしたら手加減は致しません。全力でやらせてもらいますよ」

「一人で戦いに趣いたこと……後悔してください！」

ガキン！

権は刀を振りかざし、妖夢に先制攻撃を仕掛けた。妖夢はそれを右手で抜刀した楼観剣で受け止める。

「私もいきますよ！」

ビュン！

文が扇子を翻すと、妖夢に向かって突風が放たれる。突風は妖夢の体を襲うが、妖夢は下手に逆らうことはせず、むしろ体を預けることによつて風による負荷を無くし、風に乗って上手く権から距離をとつた。

「あやや……今のに怯まずに逆に利用するとは中々やりますね」

文は自身の風を巧みに利用した妖夢を素直に賞賛する。

「感心している場合ではないですよ文様……」

「わかっていますよ権さん。今度は……利用なんてさせませんか」

不敵な笑みを浮かべながら権にそう返す文。

「そういう権さんこそ・・・しっかりとお願いしますよ」

「わかってます！」

文に返事を返した後、権は再び妖夢に斬りかかっていた。

(大丈夫・・・私はあの『最強』の竜希さんに鍛えられたんだから)

妖夢もまた、左手で白楼剣を抜刀しながら権に斬りかかりに向かう。

妖夢の戦いはまだまだ始まったばかり。

はたして妖夢はどれほどの強さを手にしているのだろうか・・・

第104話

「狗符『レイビーズバイト』!!」

「風神『天狗風』!!」

椀と文はスペルカードを発動し弾幕を展開。二種類の弾幕が妖夢に襲いかかる。

「……甘いです」

しかし妖夢はその弾幕の悉くを両手に持った刀を用いて捌く。打ち漏らせば被弾してしまうのは明白であったが、弾幕は一つ残らず切り刻まれた。

「そ、そんな……」

「あややや……今のを全部捌ききるとは……」

まさか今の弾幕を全て捌ききられるとは思いもしなかった椀と文の表情は驚愕に染まる。

「見くびらないでください。私は竜希さんに……『最強』の剣士に修行をつけてもらったんです。はつきり言って今の私ならばこれくらいは造作もありません」

傍からすれば今の妖夢の言動は自惚れにも取れるものであった。しかし妖夢は決して自惚れているわけではない。

『最強』の剣士、竜希に鍛えられた妖夢は確かな実力を身に付けた事を自覚している。今の言動はその自信から来るものであった。

ただ……

「っ!!……舐めないでください!」

そんな事は椀からすれば知ったことではない。妖夢の言葉を挑発と受け取った椀は妖夢に襲いかかる。

「……決して舐めているわけではないのですが……そう聞こえてしまったのなら申し訳ありません」

妖夢は謝罪しながらも冷静に椀の斬撃を見極め、的確に受け流す。

(まずいですね……椀さん完全に冷静さを失ってしまっています。ここは私がフォローしなければ)

「岐符『サルタクロス』!!」

棍をフォローすべく文は新たなスペルカードを発動。弾幕は棍を避けて妖夢にのみ降り注ぐ。

「餓王剣『餓鬼十王の報い』」

「くっ!？」

それに対して妖夢はスペルカードを発動。驚異的なスピードで繰り出される斬撃により、弾幕を棍ごと弾き飛ばした。

「あやや．．．．．本当に厄介ですね」

予想以上の強さを見せる妖夢に文は冷や汗を流しながらある考えに至る。

今相對している少女は．．．．．自分よりも圧倒的に強いということ。

「す、すげえ．．．．」

「前に竜希と戦った時とはまるで違うわ．．．．」

妖夢の戦いぶりを目の当たりにした魔理沙は、思わず呟く。同じく霊夢も驚きを隠せずにはいた。

「あれが今のようむちゃんだよ。こと剣を使った戦闘なら既にミコちゃん以上の實力を持つてるからね」

「ミコト以上!？」

「別にそこは驚くことじゃないぞ二人共。俺はそもそも剣の才能がないんだからな」

「いやいや、お前あれで才能がないって．．．．」

魔理沙はミコトの物言いに呆れていたがミコトの言っている事は正しかった。

実はミコトは剣の才能はそこまで高くはない。剣を用いてある程度戦うことができるのは単に身体能力に頼っているからに過ぎないのだ。事実、ミコトは剣を用いたスペルカードを作成することができ

ずにいる。

「それにしても……」

「ん？どうしたのミコちゃん？」

「いや、妖夢のあの戦い方……本気を出した時のお前に似ているな」
「本気を出した時の竜希？」

魔理沙はどういうことなのかと首を傾げた。

「わかる気がするわ。なんていうか……凄く静かなところが似てるわ」

「そう言われてみれば……」

『静寂』……今の妖夢の戦い、そして本気を出した時の竜希はその言葉がふさわしかった。

滾らず、高ぶらず、常に冷静に冷酷に戦いに赴くその姿は……達人が身につけることができる境地の一つであると言ってもいいだろう。

「わずかの時間であの域にまで到達できるとは……妖夢の才能は恐ろしいな」

「……それについては俺も同感だね。でも……よくむちやんの凄いところはそれだけじゃない」

「え？」

「どういうことだぜ竜希？」

「……まあとにかく今は戦いを見守ろうよ。もしかしたらその凄いところが見られるかもしれないしね」

竜希は不敵な笑みを浮かべながら目の前で戦う妖夢へと視線を戻した。

「はあはあ……なんで? どうして?」

権は肩で息をしながら妖夢と向かいあう権が呟く。

「なんで……どうして勝てないっ! こっちは二人なのに……文様と二人で戦ってるのにどうして!」

「権さん、少し落ち着いて……」

「落ち着いてなんていられません! だって……だって私は毎日修行してるんですよ? 毎日毎日強くなるために修行しているのに……どうして?」

「権さん……」

権は努力家だ。そして努力すればそれが報われると信じている。故に権は努力を惜しまず、修行し続けていた。

だが……現実には彼女の思っているようなものではない。

確かに権は修行を重ねた。しかし……それでも敵わぬ相手が目の前にいる。

天狗の中でも……幻想郷の中でも上位の力を持つ文と組んで戦っているにも関わらず敵わぬ相手が。

その事実が根が真面目な権にとって悔しくてたまらなかった。

「……権さん。あなたは何のために強さを欲していますか?」

そんな権に……妖夢は問いかける。

「何の……ために?」

「守りたいものがあるからですか? 倒したいものがあるからですか? それとも……それが自らに課せられた義務だからですか?」

「私は……私は……」

「答えられないのですか? だとしたら……あなたでは私に勝てません」

「え?」

「私にはあります。強さを欲する理由が。強さを求め、渴望する理由が」

妖夢が強さを求める理由……それは大切な主である幽々子を守るという使命を果たすため。なにより……竜希の心からの願いを叶えるため。

そのために妖夢は日々修行を重ねていた。

来る日も来る日も鍛錬し、修行を重ねてきた妖夢と権。だが……振るう刃に乗せた想いには決定的に違いがあり、それが実力の差となった。

「もう一度聞きましょう。権さん……あなたは何のために強さを求めますか？」

「……」

妖夢の問いかけに答えられず、権は口を閉ざし俯いてしまう。

なぜなら権には……強さを求める理由がなかったから。

戦意を失った権は、刀を握る手から力を抜く。

「……権さん」

ギョツ

今まさに刀がこぼれ落ちようとするその瞬間、文が権の手を自身の手で包み込み、それを阻止した。

「文……様？」

「権さん……このまま言われっぱなしでいいんですか？悔しくないんですか？」

文は正面から権の目を見据える。

「それは……でも私……」

「確かに妖夢さんの言うとおり権さんには……強さを求める理由がないのかもしれませんが……それでも権さんが今まで剣を振るってきた事実がなくなるわけではありません。少なくとも私は……権さんが今まで努力し続けていたことを知っています」

「文様……」

「戦いましょう権さん。例え敵わないとしても……それでも最後に意地ぐらいは見せてやりましょう」

「……はい！」

文に励まされ、気力を取り戻した権は再び刀を構え直した。

「というわけです妖夢さん。最後の悪あがき……受けてもらいますよっ！」

文もまたニツコリと微笑みを扇子を構える。

「……ええ。望むところです」

対して妖夢は不敵な笑みを浮かべながら気合を入れ直す。

最後の一撃が……今放たれる。

「牙符『咀嚼玩味』!!」

「風神『二百十日』!!」

先に仕掛けたのは権と文であった。スペルカードを発動し、権は刀を、文は扇子を振りかざして現段階で自身が持つ最大の技を放つ。

おびただしい量の弾幕が妖夢を襲う。

「……凄い!でも……負けません!」

弾幕の勢いに気圧される妖夢。しかしそれは一瞬のことであり、妖夢は二本の刀を鞘に納めた後、臆さずに自ら弾幕に突っ込んでいった。

わずかの間に弾幕を見切り、妖夢は隙間を掻い潜っていく。

そして妖夢は高密度の弾幕を被弾せずに突破した。

「……いきます」

両手で二本の刀に手をかけ、妖夢は抜刀術の構えをとり……腕を振り抜く。

「させない!」

「甘いですよ!」

権と文は斬撃を躲そうととバックステップをとった。

しかし……

「!?!」

次の瞬間二人の表情は驚愕に染まった。

なぜなら……振り抜いた妖夢の手には刀が握られていなかったのだから。

腕を振り切った勢いそのまま妖夢は逆手で刀を掴み、そして……

「魂魄『偽霊双閃』」

抜刀して二人の首筋に刃を添えた。

「あやや……これは……」

「……私達の負けですね」

文と権は潔く自分達の敗北を認めた。

「妖夢が……勝ったのか？」

「そうみたいね」

「あの勝ち方……どつかの誰かを思い起こさせるな」

「えく？それって誰のことく？」

「お前以外に誰がいる？」

3人の竜希に対するツツコミは見事にハモった。

「あははく♪」

「全く……それにしても今の妖夢のあの技……」

「うん。俺の『偽龍閃』をベースにしてよくむちゃんなりにアレンジしたものだろうねく。今日初めて見たけどあれは流石に俺も予想外だったよ。俺のより完成度高いし」

かつて妖夢は一度だけ竜希から『偽龍閃』を受けていたことがある。そこから妖夢は自分に合った形に技を変化させ、自らの技へと昇華させたのだ。

「本当に今の妖夢は強いぜ。私でも勝てるかどうか……」

「そうね。私も……油断すればやられるわ」

魔理沙と霊夢は妖夢の強さを理解し、もし自分が戦ったらどうなるか想像する。

（……確かに妖夢は強いな。剣術勝負では間違いなく俺では勝てないだろう。それに……最後のアレ。あの時妖夢は……）

「おろ？どつたのミコちゃん？」

「……いや。ただどうしてお前が妖夢を見込んだのがようやくわかっただけさ」

「そっか。本当に凄いでしょ？」

「……ああ」

命は理解した。

なぜ妖夢が竜希の『求め』となり得るのかを。

そして……妖夢に秘められた恐るべきその才能を。

(妖夢の才能……恐怖すら覚えるな)

第105話

「お疲れ様く、よくむちゃん」

「ありがとうございます竜希さん」

竜希は戦い終えた妖夢を笑顔で出迎えると、妖夢も笑顔で応じた。「それで？俺と修行してから初めての俺以外との実戦わけだけどうだった？」

「はい……自分で信じられないくらい動けました」

「そいつはなににより。まだまだよくむちゃんは発展途上だから修行を続ければもつと強くなれるよ」

「もつと……強く」

「まあ何はともあれ……よくやったねよくむちゃん」

ナゲナゲ

竜希は妖夢の頭を優しく撫でた。

「あ、ありがとうございます」

妖夢は恥ずかしそうに顔を赤らめながら俯く。しかし、決してそれを拒むことはなかった。

「……なあ、霊夢。あれどう思う？」

その様子を見ていた魔理沙が霊夢に尋ねる。

「どうも何も……そういう事なんじゃないの？」

「だよな。やっぱり妖夢の奴竜希のこと……というか竜希あれ意識してやってるのか？」

「たぶんね。竜希はどっかの誰かと違って鈍くはないみたいだから」

「それはタチが悪いぜ……無意識でやるどっかの誰かと比べても」

「そうね……」

霊夢と魔理沙はミコトの方に視線を向けながら言う。

「二人共どうして俺の方を見るんだ？というかどっかの誰かって誰のことだよ？」

「……はあ」

「なんでため息？」

「……別に意味はないぜ」

「ええ。魔理沙の言うとおりだから気にしないで」

「そうか……わかった（結局どっかの誰かって本当に誰なんだ？）」
「……もはやコントのようなやり取りである。」

「それはそうと文、権。俺達は先に進ませてもらうが構わないか？」

「ミコトは戦い疲れて座り込んでいる文と権に近づいて聞く。」

「ええ……私達は妖夢さんに負けてしまいましたからね」

「ここで通さないというほど往生際は悪くありません。どうぞお進みください」

「文も権もこの期に及んでミコト達の行く手を阻もうとは思いはしないように、潔く許可した。」

「ありがとう。それとすまないな」

「もういいですよ。それよりもミコトさん、一つお聞きしたいことがあるのですが」

「なんだ？」

「ミコトさん達はこの山に一体何しに来たのですか？」

「ああ、そのことか。俺達はこの山に最近現れた神社に用があつて来たんだよ」

「神社って……あの？それはまた……」

「なに？その神社がどうかしたの？」

「意味ありげなことを言う文に霊夢が尋ねる。」

「それはもう。あの神社は今我々天狗……いえ、この山に住む妖怪の間では悩みの種になっていますから」

「悩みの種？」

「ああ、そういえばにとりちゃんが言ってたね。山に居着いた神様が原因でこの山の妖怪は腹の収まりが悪くなってるって」

「竜希さんの言うとおりです。我々の長、天魔様も物凄くお怒りですからね……おかげで私達は居心地が悪いです」

「権がゲンナリとした様子で言う。どうやらよほど天魔とやらの虫の居所は悪いらしい。」

「全く……早苗の奴相変わらず変なところ抜けてるんだな」

「ミコトさんはその神社の方と縁があるんですか？」

「まあちよつとな」

「でしたら一つ伝言をお願いします」

「伝言？」

「はい。この山に居座るのならまず先住民達にしっかりと挨拶をするようにと行ってください。そもそも皆が怒るのはあちらがなんの話も通していないからなんで」

「それくらい自分達で言いなさいよ」

霊夢がいかにも面倒くさそうな表情をして言う。

「そもいかないんですよ。我々は天魔様に神社に勝手に近づかないように言われているのですから。他の種族の者達も長に接触を禁じられているようですし」

「それはどうしてですか？」

「単純な話だよ〜むちゃん。来訪者は向こうなのにどうしてこっちから挨拶に行かなくちゃならないんだってようことさ」

「まあそんなところですね。かと言ってこのままにしておくのも面倒ですので・・・お願いできないでしょうか？」

「わかった。それぐらいなら構わないよ」

ミコトは快く文の頼みを承諾した。

「いいのミコト？」

「ああ、それぐらい大した手間じゃないだろ？」

「まあそうだけど・・・全く、早苗といい神社の奴らは随分なろくでなしね」

「あく・・・さなちゃんのこととはともかく流石の俺も否定しきれないな〜」

竜希は事態が事態なので弁明できずに苦笑いをする。

「じゃあ俺達はそろそろ行くな」

「はい。伝言の件確かに頼みましたからね。それと次会った時には取材もお願いします」

「相変わらずちやつかりしてる・・・それじゃあまたな」

「・・・待ってください」

その場から去ろうとするミコト達一行を権が引き止めた。

「どうしたんですか権？」

「ええ、ちよつと・・・妖夢さん」

「なんですか？」

「・・・いつかまた勝負してください」

「え？」

「次に勝負するときは今みたいな無様な姿は晒しません。私は・・・あなたに勝つために修行して強くなってみせます！」

権は妖夢にはつきりと宣言する。

「・・・だったら私は権さんよりもさらに強くなります」

対する妖夢も、微笑みを浮かべながら権にそう返す。

(うんうん、青春だね)

その光景を見て微笑ましそうに竜希はニコニコと笑顔を浮かべていた。

「それと・・・竜希さん」

「俺にも？一体何かな？」

「・・・私に可愛いって言った責任はいつかとってもらいますから

／＼／＼

権は顔を赤くしてモジモジしながら小声で言った。

「・・・え？」

「そ、それでは失礼します！いきましよう文様」

「ふふふつ・・・権もすみにおけないですね」

足早にその場を去る権、そのあとを文は追っていった。

「えつと・・・ねえ皆。権ちゃんの言う責任っていうのは一体どういうことだと思っかな？」

竜希は恐る恐るとミコト達の方へと振り向きながら聞いた。

「・・・知らないわよ」

「同じくだぜ」

「自分で考えろ」

「竜希さん・・・あなたという人は？(スラッ)」

霊夢、魔理沙、ミコトは白い目を向け、妖夢は刀を抜刀し始めた。

「皆辛辣!?!というかよくむちゃんはなぜに抜刀してるの!?!」

「覚悟はいいですか?」

「いや、良くないから〜!」

慌てて逃げ出す竜希、そして妖夢はそのあとを追った。

「……さて、行くか」

「そうね」

「行こうぜ」

残った3人は我関せずといったように神社へと歩みを進めていった。

「ここが早苗のいる神社ね」

文達と別れて30分後、一行は目的地である神社の前に到着した。ちなみに竜希と妖夢のいざこざは道中でどうにか解決したもよう。

「さて、それじゃあ乗り込みましょう。そして早苗を……ふふふっ」

「れ、霊夢? お前何する気なんだぜ?」

「知りたい?」

「あ、いいです」

清々しいほどの黒笑を浮かべる霊夢を見て、魔理沙は追求するのをやめた。

「それじゃあ皆、行くわよ」

「はい」

「おっけ〜」

「わかったぜ」

「……」

「?ミコト?」

皆が霊夢に返事を返す中、ミコトだけは黙り込んでいた。その顔色はどこか悪いように見える。

「どうしたのミコト? 顔色も悪いわよ?」

「そ、それは……」

「あれ? 君たち誰?」

突如として、会話に乱入してくる者いた。

5人が声のする方に振り向くとそこには……幼い少女がいた。

「およよ? そういう君はどちら様?」

「私? 私は守矢諏訪子。この神社の神様だよ」

少女……諏訪子は笑顔を浮かべて自己紹介する。

「はあ!? あんたが……この神社の神様!」

「嘘だろ!? こんなちんちくりんが!」

「なっ!? ちんちくりんって何さ!」

驚く霊夢と魔理沙に対して、諏訪子はちんちくりんと言われたことに対して怒りを顕にする。

「いや、まさかこの神社の神様があんな小さい子だったなんて意外だねミコちゃ……って、あれ?」

竜希がすぐ隣にいたミコトに声をかけようとするがそこにはミコトはいなかった。

「ミ、ミコト? あんた何やってるのよ?」

ミコトがいたのは……霊夢の後ろであった。ミコトはなぜか霊夢の背に隠れるように身を縮こまらせている。

「あ……いや……その……それは……」

霊夢の問いかけにしどろもどろになるミコト。その姿は……まるで何かに怯えているようであった。

「君どうしたの?」

「く、来るな!」

様子のおかしいミコトに近づこうとする諏訪子。しかしミコトは

それを激しく拒絶した。

「……………え？」

「あ……………す、すまない……………でも頼むから……………俺に近づかないでくれ」

申し訳なさそうにするミコト。しかし依然として様子はおかしく、涙目になっている。

「ミコちゃんのこの様子……………もしかして」

竜希は何かに気がついたかのようにはつとする。

「ねえ諏訪子ちゃん……………君つてもしかしてだけどカエルと縁があるのかな？」

「う、うん。まあそうだけど……………」

「あ……………それでか。能力のせいを感じとちやつたんだね〜ミコちゃん」

「どういうことですか竜希さん？」

「あ……………これ言ってもいいのミコちゃん？」

「す、好きにしろ……………」

一応はミコトに許可を取る竜希。ミコトは今更隠すのは無理だと判断して了承した。

そして竜希は……………

「じゃあ言うけどミコちゃんは……………」

第106話

『ええっ!?!ミコト先輩ってカエルが苦手なんですか!?!』

ミコト、神楽、竜希、早苗の4人はいつものように学校の屋上に集まって雑談に興じていた。そんな時、ミコトの苦手なものが話題となり、それを聞いた早苗は驚きを隠せずにいる。

『……ばらすなよ』

『別にいいでしょ、知られて損するってわけでもないんだからさ』
『それに早苗だけが知らなかったのだ。それでは不公平だろう?』

『お前らな……』

ミコトは全く悪びれることなく意地の悪い笑顔を浮かべる神楽と竜希を見て頭を抱える。

『あ、あはは……それにしても意外ですね。ミコト先輩がカエルが苦手だなんて』

『そんなに意外か?』

『そりやもう。というかそもそもミコト先輩

に弱点なんてないと思っていました』

『早苗は俺のことをなんだと思ってるんだよ……』

『まあまあ。でもなんでカエルが苦手なの?』

『それは私も気になるな。理由までは聞いていなかったし』

竜希と神楽は興味津々といった様子だ。

『……昔散歩中にこけて田んぼに落ちたことがあってな。そしてら……口と耳にカエルが4、5匹入ってたんだ』

『『うわあ……』』

顔を悪くしながら語るミコト。そして3人はその場面をイメージして同じように顔を真っ青にさせる。

『それは……苦手にもなりますよね』

『完全にトラウマものだよ……』

『……ドンマイだミコト』

『本当にカエルだけは……』

『心中お察しします。でもカエルが苦手となると諏訪子様のこと

も……(ボソツ)』

『ん?なんだって?』

小声でボソツと呟く早苗。ミコトはそれが聞き取れなかったらしく聞き返した。

『あ、いえなんでもありませんよ。ところで神楽先輩には苦手なものってあるんですか?』

『私か?あるぞ。私はここに居る3人以外の人間が嫌いだ』

『はつきり言いすぎだろ神楽……しかも苦手なものから嫌いなものになってるぞ』

『それがかぐちゃんクオリテイだよ。ちなみに俺が苦手なものは……』

『『あ、聞いてないから言わなくていい(です)』』

『3人して辛辣すぎね!』

これぞまさしく竜希クオリテイである。

「ね、ねえ……」

ビクッ!

諏訪子が声をかけると、ミコトは体を大きく震わせ、霊夢の背に隠れてしまった。

「……これは相当だぜ」

「ミコトさん……そんなに苦手なんですネ」

ミコトのあまりの怯えつぷりに魔理沙と妖夢は思わず苦笑いを浮

かべた。まあ普段のミコトとあまりにギャップがありすぎるのだから仕方がないであろう。

「ミコト……大丈夫よミコト。私がついてるから」

そんなミコトを見て母性が覚醒したようで、霊夢はミコトの頭を優しく撫でながら言う。

「あ、ありがとう霊夢。でも……やっぱりダメだ。震えが止まらない」

「そう……わかったわ。そういうわけだから諏訪子。あんたどっか行きなさい」

「ええっ!?!どうして!?!」

「あんたのせいでミコトが怯えちゃってるんだから当然でしょ?これ以上ミコトを怖がらせないで」

「で、でもここは私の神社……」

「早くしなさい。出なきゃ……ぶっ飛ばすわよ?」

なんとも酷い言い草である。どうやら霊夢の母性は暴走状態にあるようだ。

「れ、霊夢ちゃん。とりあえずちよつと落ち着いて」

「そ、そうだけ霊夢。気持ちにはわからんでもないが……」

「流石にそれは……可哀想すぎますよ?」

流石に諏訪子が不便に思えたらしい竜希、魔理沙、妖夢が霊夢を宥めようとする。

だが……

「うるさい」

今の霊夢には通用しないらしい。その短い一言できっぱりと一蹴してしまった。

もはや誰も霊夢を止められないと思われたその時……

「れ、霊夢。流石にぶっ飛ばすのはダメだ。諏訪子が悪いってわけでもないし……だからな?」

今度はミコトが霊夢を宥める。

すると……

「わかったわ」

霊夢は笑顔で了承した。

((.....理不尽すぎる))

その光景を見た3人の心は一つになった。

「あ、あのさ.....いい加減話を進めたいんだけどいいかな?」

流石にこれ以上話が進まないのはどうだろうかと思つた諏訪子が皆に提案する。

「あ、うん。おつけくだよ」

「それじゃあ聞くけど君達は.....」ミコトせんぱく!!「.....え?」

諏訪子が話を始めようとしたその瞬間、それを遮るかのような大きな声が響き渡る。

そして.....

ドガツ!

「キヤッ!」

「うおっ!」

声の主は霊夢を突き飛ばし、ミコトに勢いよく抱きついた。

その人物は言わずもがな.....早苗である。

「ようこそお越しく下さいましたミコト先輩! さあさあどうぞ中へ!」

「ちよ.....待て早苗」

ミコトの神社の中に連れて行くとする早苗。ミコトはそれを止めようとするが早苗はお構いなしにグイグイとミコトの手を引っ張る。

「.....待ちなさい早苗」

そんな早苗に、先程突き飛ばされた霊夢が声を掛ける。

「どうしましたか霊夢さん?というか居たんですか?」

「.....突き飛ばしておいてよくもまあそんなことが言えるわね?」

「え?そんなんですか?記憶にないですね」

「.....」

バチバチと火花を散らしながら互いに黒笑を浮かべる霊夢と早苗。

．．．．．恐ろしいことこの上ない。

「あ、あのさ。とりあえず色々と話したいことがあるから神社の中で話させてほしいな。．．．．．なんて」

「竜希（さん）は黙ってなさい（黙っててください）!!」

「．．．．．うん。知ってた。こうなるって俺知ってた」

「竜希さん．．．．．元気出してください」

予想はしていたようだがあまりの扱いの悪さにしよげる竜希を、妖夢が慰めた。

「ねえ早苗、とりあえず彼の言うとおりに神社の中で話しようよ。流石に立ち話が落ち着かないしさ」

「諏訪子様がそう言うなら．．．．．わかりました。元々そのつもりでしたしね」

「だったらさっさと案内しなさいよ」

「わかってますよ。しっかりついてきてくださいねミコト先輩」

霊夢の悪態を受け流しながら、早苗は一同を神社の中へと招き入れた。

「．．．．．竜希、妖夢。私今ちよつと来たことを後悔してるぜ」

「．．．．．奇遇ですね魔理沙さん。私も同じ気持ちです」

「流石にあんなの見せられたらね。．．．．．ははは」

「おや？これは随分とお客さんが多いね」

早苗に案内され神社の中の居間に通された一同。そこには一人の女性がいた。

「あなたは？」

「私は八坂神奈子。この神社の神様だよ」

ミコトに問われると、女性……八坂神奈子が名を名乗る。

「え？神つてこのちんちくりんなんじゃ……」

「ちんちくりんって言うな！」

魔理沙にちんちくりんと言われ、怒りを顕にする諏訪子。

「はははっ！ちんちくりんはいいわね！諏訪子にぴったりだ！」

「何さ神奈子！笑わないでよ！」

「だってちんちくりんって……くくくっ」

「だから笑うな！」

神奈子にからかわれて顔を真っ赤にする諏訪子。

「……随分と賑やかなんだな。あの二人はいつもああなのか？」

「まあ大体はそうですね。神奈子様と諏訪子様は本当に仲がよろしいですから」

早苗は微笑ましそうに二人を見ながら言う。

「まあ諏訪子弄りはここまでにして……客人。そんなところで突っ立ってないでこつち来て座りなよ」

神奈子に促されて、ミコト達は腰を下ろす。ちなみにミコトは諏訪子から一番遠い位置に座っていた。

「さて……まず聞くけどあんたが一夢命でいいのかい？」

神奈子がミコトの方を向きながら尋ねた。

「ああ」

「早苗から話は聞いていたけど……確かに面白そうな男だね」

ククツと神奈子は意味ありげに笑ってみせる。

「……早苗。お前一体俺のことどういうふうに話していたんだ？」

「別におかしなことは話していませんよ？」

「ならいいが……」

「それでそつちのヘラヘラしたのが……紫黒竜希でいいのかい？」

「そうだよ」

「……そうかい」

（……諏訪子。気がついてる？）

(・・・うん。この男・・・かなりヤバイね)

アイコンタクトをとる神奈子と諏訪子。どうやら二人は竜希の持つあまりにも強大な力を感じ取ったようだ。

「神奈子様？諏訪子様？どうかしましたか？」

「ん？いや、なんでもないよ」

「早苗が気にすることじゃあないよ。それよりのミコトと竜希のことは知ってるけどそっちの3人は知らないから自己紹介してもらってもいいかな？」

「わかったぜ。私は霧雨魔理沙。普通の魔法使いだ」

「魂魄妖夢と申します」

「博麗霊夢よ」

魔理沙、妖夢、霊夢は自己紹介をした・・・霊夢はかなりぶっきらぼうであったが。

「魔理沙に妖夢に霊夢だね。それで？ここには何しに来たんだい？」

「それは・・・」

「今日からここで暮らすミコト先輩の見送りですよ神奈子様」

「違う！そんなわけ無いでしょ！」

勝手な解釈をする早苗。霊夢はそれを激しく否定した。

「とういかこんなところにミコトを住まわせるわけ無いでしょ！ミコトが嫌いなカエルがここに居るのよ！」

「いや、私は厳密にはカエルではないんだけど・・・」

「とうかさなちゃん、そのことに気がつかなかったの？」

「気がついてはいましたが・・・黙ってればわからないかなと思いますよ」

どうやら言わなければ大丈夫だと早苗は思っていたようだ。実際は大丈夫ではなかったのだが。

「で、でも一緒に暮らしていればそのうちミコト先輩も慣れて・・・」

「ごめん早苗・・・それ無理」

もはやトラウマレベルでカエルを苦手にしてしまっているミコトには、守矢神社で暮らすことは不可能であった。

「そ、そんな・・・」

「諦めなさなちゃん。こればかりは……ね?」

「うう……。わかりました。諦めます」

流石にミコトに無理強いすることはできないようで、早苗はがっかりと肩を落しながらミコトと暮らすことを諦めた。

「でもミコト先輩の件以外でここに来るとなると……。もしかして神社の廃社に同意してくれたんですか?」

「それも違う!博麗神社を廃社になんかさせないわよ!」

「まあそのことで話しをしに来たというのは間違っではないがな」

「どういうことですか?」

「それは……」

ミコトは早苗、神奈子、諏訪子に説明を始めた。

〈少年説明中〉

「つまり博麗神社がなくなったら幻想郷の存続が危ぶまれるっていうことなの?」

話しを終えると、諏訪子が霊夢に尋ねた。

「そうよ。博麗神社は幻想郷の要の一つなの。だから廃社になんてさせるわけにはいかないの」

「そんな事情があったのかい……」

「そういうことなら……。仕方がないですね。博麗神社には守矢神社の傘下に入ってもらってことで手を打ちましょう」

「……は?」

早苗の言った予想外の一言にミコト達は一瞬ポカンとしてしまった。

「ちよつと待ちなさい！どうしてそうなるのよ！」

「どうしても何も廃社できないって言うならそうなるのが自然じゃないですか？そうすれば博麗神社がなくなるわけではないですから問題は無いですよね？」

「問題大有りよ！だいたいあんたは……」

「そういう霊夢さんこそ……」

霊夢と早苗はまたしても口論を始めた。

「……なあミコト。お前早苗と外の世界にいた時の知り合いなんだろ？こいつっていつもこうだったのか？」

「まあ……少し変わってはいるな」

「これは少しではないと思うが……仕方がない。二人共ストップだ」

魔理沙は霊夢と早苗の間に割って入った。

「二人共熱くなるのはいいがこれ以上言い争っていても不毛だぜ。こ

こは……幻想郷のルールに則って決着をつけよう」

「幻想郷のルール……ですか？」

「そうだ。幻想郷流の解決方法……弾幕ごっこでな」

第107話

ミコト達は弾幕ごっこをするために外に出た。

「ふふふふ……早苗に目にも物を見せてやるわ♪」

（（怖っ!!））

楽しそうに黒い笑みを浮かべながら払い棒と札を構える霊夢を見て竜希、魔理沙、妖夢はそう思った。

「霊夢、少し落ちつけ」

「ミコト……そうね。落ち着いて早苗をボコボコにするわ」

「いやいやいや……霊夢ちゃんどこまでさなちゃんのこと目の敵にしているの?」

「まあ気持ちはわからんでもないが……でも霊夢の出番はまだ先なんだ。大人しくしてろよ」

「……わかってるわよ」

論す魔理沙に霊夢はぶっきらぼうに返事を返した。

「それにしても……気になりますね」

「そうだね〜」

「まあ……おかしいよな」

「ん?三人共どうしたんだぜ?」

魔理沙は妖夢と竜希、ミコトに尋ねる。

「その……あちら側があまりにもあつさり弾幕ごっこの申し出を受けたので。そのことが少し気になって」

「幻想郷に来たばかりの早苗達は弾幕ごっこに慣れ親しんではない。いくら幻想郷のルールだからとは言え普通に考えれば受けるのを渋るはずだ」

「それなのに二つ返事でわかりましたもんね……何かあるって思うのが普通でしょ〜」

「言われてみればそうね。あいつら一体どうして……」

3人の説明を聞いて霊夢もまた不思議に思ったらしく考え込む。

「そんなのどうだっていいぜ。要は弾幕ごっこに勝てばいいだけの話だろ?というわけではないってくるぜ」

魔理沙は深くは考えていないらしく、弹幕ごっこをするべく前に出た。

ここで今回の弹幕ごっこについて説明をする。

今回の弹幕ごっこは3回戦行われ、2勝以上したほうの勝利となる。

守矢神社側から出るのはもちろん早苗、神奈子、諏訪子の3名。博麗神社側からは霊夢と……魔理沙と竜希が出ることになる。

魔理沙が出るのは（一応）霊夢の友人だから（というのは建前で本音はただ単純に弹幕ごっこしたかったからであろう）。

竜希が出るのは……諏訪子が近くにいるせいでもともに戦うことができないミコトの代理だ。

そして一回戦……博麗神社側からは魔理沙が赴き、守矢神社側からは……

「へえ、お前が相手なのかちんちくりん」

「だからちんちくりんって言うな！」

諏訪子が出てきた。

「まあ相手が誰であろうと……やることは変わらないぜ！行くぜ！恋符『マスタースパーク』!!」

「うわっ!？」

開幕早々……というより不意打ち気味に魔理沙はマspaを諏訪子に放ち、諏訪子は驚きながらもかろうじてそれを回避した。

「今のを躲すなんて中々やるな！だがこいつはどうだ？魔符『スターダストレヴアリエ』!!」

続けざまにスペカを発動する魔理沙。星型の弹幕が諏訪子に降り注ぐ。

「わわわわわっ！いくらなんでも多すぎ！」

想像以上の弹幕の密度に驚きを隠せずにいる諏訪子。だが慌てつつもどうにか弹幕を回避していた。

「ほらほらまだ行くぜ！次はこいつだ！恋符『ノンディレクシヨナル

レーザー』!!」

魔理沙は一切の隙を与えずに次々とスペカを発動していった。

「ま、魔理沙さん……いくらなんでもあれはやりすぎでは？」

「いいのよあれぐらい。人の神社を好き勝手仕様とする連中にはいい薬だわ」

あまりにも一方的に展開される弾幕ごっこを見て妖夢は苦笑いを、
霊夢は清々するといったように笑みを浮かべていた。

だが……

「ねえミコちゃん、気づいてる？」

「……ああ」

ミコトと竜希の二人は、神妙な面持ちで弾幕ごっこの様子を見ていた。

「この勝負……魔理沙は負ける」

「……え？」

霊夢と妖夢はミコトの言っていることの意味が分からず首を傾げた。

「負けるって……どうして？どう見ても魔理沙が押ししてるじゃない」

「確かに一見そう思えるような一方的な展開だ。だが諏訪子は……」

「へえ、あの魔理沙ってやつ人間の割にはやるじゃないか」

弾幕ごっこを見ていた神奈子は魔理沙の実力に感心していた。

「そうですね。あれほどの力……きつと相当な努力をしたのでしよう。ですが……」

「ああ。それでもあの程度じゃ諏訪子にはかなわないね。今だつて……」

「諏訪子は完全に遊んでいる」

(あくもう……さつきからちよこまかと鬱陶しいぜ)

魔理沙は諏訪子を撃ち落とせないことに少々イラついていた。

(まさかここまで回避性能が高いとはな……あんなでも神だからこれぐらいはできて当然ってことか？でもまあ……そろそろ決着をつけさせてもらうぜ！)

魔理沙は懐からスペカと八卦炉を取り出す。

「悪いがここで終わりにさせてもらうぜ！ここまでもった褒美に私のおとしおきを見せてやる！魔砲『ファイナルマスターパーク』!!」
魔理沙がスペカを発動させると、八卦炉から特大のレーザーが発射される。

その質量は魔理沙にとっておきと言わしめるのにふさわしく、通常のパークを大きく上回る。

さらにこのレーザーは発射後も角度を修正して追尾する性能を持つので回避することは困難を極めるであろう。

もつとも………諷訪子には回避の必要さえないであろうが。
「………え？」

魔理沙は目の前に起きたことを信じられずにいた。

魔理沙が放ったファイナルマスタースパーク。諷訪子はそれを………手を振りかざすだけでかき消してしまったのだ。

「ふふふつ、今のは中々いい攻撃だったよ。思わず躲すのがもつたいないって思うほどにね」

諷訪子はニツコリと笑いながら魔理沙に言い放った。

「私のファイナルマスターパークが………かき消された？ 一体どうして………？」

「どうして？ おかしなことを言うね。そんなの………私が神だからに決まってるでしょ？」

「ッ!？」

魔理沙は戦慄した。無理もない。諷訪子はとても可愛らしい笑顔を浮かべてはいるが………同時に悍ましいほどの覇気を放っているのだから。

「確かに魔理沙は強いよ。でもそれは………普通の人間にしてはの話だよ。今の魔理沙程度では私には勝つことはできない」

「で、でも………さっきまでは私が押して………」

「それはただ魔理沙の実力が知りたかったから反撃しなかっただけだよ。まあ………私からしてみれば遊びのようなものだね」

「遊………び？」

魔理沙は先ほどまでのやり取りが諷訪子にとって遊びなのだと知り愕然とした。

「気を悪くしたならごめんね？ でも………私は和の国において古より信仰されていた土着神の頂点。普通の人間ごときでは私の遊び相手にはかならないんだよ」

例えどんな可憐な姿をしようとも諷訪子は神だ。秘めたる力は並の人間では到底かなわないほどに強大にして絶大。

例え弾幕ごっこで百戦錬磨の魔理沙であろうが……力の差は歴然であった。

「さて、それじゃあ……そろそろ終わりにしようかな？」

諏訪子はポケットからスペルカードを取り出した。

「スペルカード!? どうして……?」

「どうして幻想郷に来たばかりの私がスペルカードを持つてるのかな？ 私達だって別に幻想郷に来てからただ遊んでたわけじゃあないよ。ちゃんと色々と調べてたんだよ。もちろん弾幕ごっこのこともね」

これが弾幕ごっこを受けた理由であった。

諏訪子達はあらかじめ調べた上で弾幕ごっこの存在を知っていた。そしていざれ自分達も弾幕ごっこをすることになるであろうと予測し、スペルカードを作っていたのだ。

彼女達が弾幕ごっこを受けたのはそのルールを把握し……その上で自分達が負けることはないと確かな自信を持っていたからであった。

「さて……魔理沙に選択肢をあげる。はっきり言ってこのスペルカード……今の魔理沙じゃ躲すのはほとんど不可能に近いよ。間違いないで被弾するね。でも……今降参するって言うならこれは使わないであげる。さあ……どうする？」

諏訪子は首を傾げながら魔理沙に尋ねた。相変わらず放っている覇気は衰えを見せない。

「私……私……私……」

魔理沙はたどたどしく口を開いた。

そして……

「私は……降参する」

魔理沙は……降参の道を選んだ。

「……ごめん。私……」

ミコト達のところに戻ってきた魔理沙は涙を流しながら申し訳な
さそうに謝った。

「魔理沙……何泣いてるのよ馬鹿」

コツン

霊夢は泣いている魔理沙の額を軽く小突いた。

「霊……夢？」

「謝る必要なんてないわ……今勝てなくても次勝てばいいじゃない
い」

「次に勝てば？」

「そうよ。確かに今回は負けたけど……そのままにしておくあん
たじゃないでしょ？」

「霊夢の言うとおりだな。このまま負けっぱなしにしておくの
は……魔理沙の気がすまないんじゃないか？」

霊夢とミコトは魔理沙に微笑みを向けながら言う。

「でも……あんな相手に勝ち目なんて……」

「それこそ魔理沙なら……勝てるようになるまでがむしやりに努
力するんじゃないのか？少なくとも……俺の知ってる魔理沙なら
そうする」

「今までだって魔理沙は一生懸命努力して強くなってきたんじゃない
い。私……あんたのそういうところは素直に尊敬してるのよ」
「霊夢……ミコト……そうだな。私は今までそうしてきたん
だ。だったら……今回もそうする。次弾幕ごっこをするときは
諏訪子を跪かせてやるぜ！」

ミコトと霊夢に励まされ元気を取り戻した魔理沙は堂々と宣言し
た。

「それこそ魔理沙だ」

「ま、せいぜいがんばんなさい」

「ああ。二人共ありがとな」

魔理沙は満面の笑顔を浮かべながらミコトと霊夢に礼を言う。

その目からはもう涙は流れていなかった。

「いいね〜そういうの。青春って感じだよ〜」

3人の様子を見ていた竜希がヘラヘラとした笑顔を浮かべながら言う。

「竜希さん……ここで茶化すのはちよつと」

「別に茶化してるわけじゃあないよ〜。素直にいいな〜と思ってただけ〜。ね、ミコちゃん?」

「……残念ながらコイツの言ってることは事実なんだよ妖夢」
「残念ながら!?!」

「あんた……本当にムカつく顔してるわよね」
「同感だぜ」

「まさかの俺の顔面否定!?ひどいよ〜……」

竜希はあからさまにシヨックを受けたといった感じに膝をついた。まあそれはあくまでポーズだけ実際は大して気にはしていないのだが。

事実表情は笑顔のままだ。

「そんなことよりも早く行って来い竜希。向こうはもう準備万端なようだよ」

ミコトが視線を向けるとそこには前に出てきてスタンバイしている神奈子こ姿があった。

「はいはい。それじゃあミコちゃんの代理として行ってきま〜す」

竜希はひらひらと手を振りながら歩いて行った。

今、『最強』と『軍神』の戦いが始まる。

第108話

「ふふふっ……竜希さんには申し訳ないですがこの勝負はいただきですな」

早苗はクスリと微笑みを浮かべながら勝利を確信する。

神奈子は神……それも軍神だ。こと戦いにおいて、彼女は凄まじい力を持っている。

それこそ……この人外魔境の幻想郷であつても神奈子に倒せる存在など片手で数える程度しかいないほどにだ。

故に早苗が神奈子の勝利を確信するのも当然と言えば当然だ。

ただ……早苗の考えは甘いと言わざるを得ない。

なぜなら……

「……そうそう思い通りにいくとは限らないよ早苗？」

「え？どういふことですか諏訪子様？」

「はつきり言つてあいつは……竜希はヤバすぎる」

なぜなら……竜希はその片手の中に数えられる存在なのだから。

「おつ待たせく神奈子さん」

竜希はいつものゆるい調子で神奈子に声を掛けた。

「別にそこまで待つちやいなさ。気にしなくてもいい」

「はははっ！そいつはありがとね。さて、それじゃあ……はじめるとしようか」

「!?」

竜希は腰に差した刀を抜きながら身に纏う空気を張り詰めたものへと一変させる。あまりの大きな変化に神奈子は驚きを隠せずいた。

(なるほど……これがこいつの本当の顔っていうわけか。ここまでの覇気は軍神である私でも覚えがないね……)

竜希の覇気に当てられ冷や汗を流す神奈子。どれは竜希が神奈子が今までにであったどのよう存在よりも強いことを意味していた。

「悪く思うなよ。戦うのは嫌いだが親友の代理としてここに立っているんだ……半端なことではできそうにない」

「……まさか軍神である私に勝算があると思ってるのかい？」
「ああ……むしろ勝算しかないと思っっているさ」

「……中々面白い冗談じゃないか」

挑発とも取れる竜希の言葉を聞き、神奈子は不敵な笑みを浮かべる。

「冗談かどうかは……すぐにわかる」

「……わかった。だったら教えてもらおうわ！神祭『エクспанデッド・オンバシラ』!!」

スペルカードを発動する神奈子。すると竜希の頭上から22本の巨大な御柱が降り注いだ。

降り注ぐ御柱を目の当たりにした竜希は刀を構え……

「……飛天『龍巢閃』」

ザンザンザン!!

その全てを斬り刻んだ。

(これは……飛天御剣流?)

神奈子は竜希の剣技を見て訝しげな表情をする。

「どうした?何をぼんやりしている?」

「……別にぼんやりなんてしていないわ。それよりも今のを全部斬るなんてやるわね」

「この程度で褒められても困るな……こんなの準備運動にもならない。飛天『龍翔閃』」

竜希は刀の側面を刀を握っていない右手で支え、飛び上がりながら神奈子の顎を打ち上げようとする。

「甘い」

しかし神奈子はバックステップを取りながらその攻撃を回避する。

「(今の動き……まさか) 飛天『龍槌閃』」

続けて竜希は龍翔閃で飛び上がった勢いを利用して龍槌閃を神奈子に繰り出す。

だが……

「無駄だよ」

その斬撃でさえも神奈子は見切り、易々と躲して見せた。

(……やはりそうか)

「次はこっちから行くわよ！神秘『葛井の清水』!!」

神奈子がスペルカードを発動するとナイフ型の弾幕が竜希と取り囲み、一斉に襲いかかってきた。

「飛天『龍巻閃』」

竜希はその弾幕を回転しながら全て斬り落とした。そして大きく跳躍して神奈子から間合いを離す。

「これを対処するなんて……大した対応力ね」

「それはこっちのセリフだ……まあ知っていればそこまで難しいことではないか」

「……どうやら気がついてるみたいだね」

「ああ……あんた飛天御剣流と戦うのは初めてじゃないな？」

「まあね。かなり昔のことだけど……飛天御剣流の使い手とは何度も戦った。おかげでその流派の技なら全部把握してる」

神奈子がかつて軍神として飛天の使い手と戦闘を繰り広げた。その経験により当時の飛天の技の全てを把握していたのだ。

「紫黒竜希……あんたは確かに強いんだろう。でも……あんたに勝ち目はない。なぜなら私はあんたの技を全て知ってるからだ。あんたほどの使い手ならそれがどれだけ致命的かわかっているだろ？その上でもう一度聞くんが……勝算があると思ってるのかい？」

神奈子は自分の勝利を疑わなかった。

戦闘において相手に技を知られるということは致命的だ。どんな百戦錬磨の戦士であろうが攻撃方法を全て知られてしまえば格下であろうが負けてしまうことは往々としてありえる。

この勝負……神奈子は絶対的優位に立っていると思っ
てのだろう。

もつとも……

「思ってるさ。例え技を知られようとも……勝算しか
ないことには変わりはない」

今神奈子の目の前に居る竜希にとっては、そんなものはほんの些細なことであった。

「命さん……神奈子さんのあの動きはもしかして」

「ああ。間違いなく飛天御剣流の技を知っているんだろ
うな」

戦いを見守っていたミコトと妖夢は、神奈子が飛天の技を知っているのだと気がついていった。

「それって大丈夫なの？いくら竜希が強いつて言っても相手に技を知られてるんじゃない？」

「霊夢の言うとおりだぜ。それに相手は神なわけだし……」

霊夢と魔理沙は本当に竜希が勝てるのかどうか不安になっているようであった。

だが……

「大丈夫だよ（ですよ）」

ミコトも妖夢も全くと言っていいほど竜希の心配をしていなかった。

「どうしてそう思えるのよ？」

「単純な話だ。もしも技を知っているだけで勝てるって言うなら俺も妖夢も既に竜希に勝っている」

「おそらく竜希さんにとっては技を知られることなど大した問題ではないと思います。それに……確かに神奈子さんは神にふさわしい力を持っているようですが竜希さんはそれに引けをとらない……いえ、それ以上の力を竜希さんは秘めています。ですから竜希さんが負けることはないでしょう」

それは竜希と刃を交えたことのあるミコトと妖夢ゆえの言葉であつた。

「そう……あんだ達二人がそういうんならそうなんでしょね」「どうか……改めて思うが普段あんなのに竜希つて凄い奴なんだな」

魔理沙はシミジミした様子で言う。旗から聞くと酷い言い様だが普段が普段であるため仕方がないであろう。

それでも……

「当然です。確かに普段はアレですが……竜希さんはこと戦いにおいては『最強』なんですから」

それでも……竜希が最強であることには揺ぎはない。

「飛天『土龍閃』」

「ぐっ……」

竜希は地面に刀で衝撃を与えることによつて土石を神奈子ぶつけようと放つ。神奈子はそれをかろうじて一回避した。

(どうなってる? どうしてさっきから回避が……)

「どうした? 随分とキツそうだな」

「くっ……」

竜希は方に刀を置きながら神奈子に言い放つ。対する神奈子の表情からは先程までの余裕は消え去っていた。

「あんだ何をした? なんでさっきから……」

「回避が遅れるのか……か？そのことに関して言えば何もしていいないさ。ただ……俺の技が神奈子の想定を上回っているだけに過ぎない」

「私の……想定を上回る？」

「ああ……すぐに証拠を見せてやろう」

竜希は刀を鞘に納める。

「俺は次に……飛龍閃を使う」

「なんだって？」

神奈子は自分の耳を疑った。戦闘においてわざわざ相手に次の行動を教えるなどありえないことだからだ。

（一体なんのつもり？そんなのわざわざ教えられたら躲せるにきまつて……）

「飛天『飛龍閃』」

ビュン!!

「!?」

神奈子は驚愕した。なぜなら……気がつけば竜希の刀が自分の目の前にあったのだから。

「ツ!!」

迫り来る刀を神奈子は紙一重のところで躲した。

「……よく躲したな」

「なっ!？」

またしても神奈子は驚きを顔にした。竜希の声が……自分の後ろから聞こえてきたからだ。

恐る恐ると後ろを振り返るとそこには……刀を手にした竜希の姿があった。

「ばか……な。投擲した刀を自分で掴んだ？」

「これでわかっただろ？飛天御剣流の技を知っているからといって神奈子は優位に立ったわけじゃあない。いくら技を知っていようとそれは俺以外が使っていたものだからな。お前は……俺が使う飛天御剣流の技を知らない」

「……」

神奈子は沈黙しながら冷や汗を流した。

それは神奈子の誤算であった。いくら強かろうと技を知っていれば負けることはない……。だがそれは竜希が相手でなければの話。

竜希が使う飛天の技は……。完全に神奈子の想定を上回っていたのだ。

(なんなのコイツ……。こんなの人間の到達できる強さじゃない) 神として長い年月を生きてきた神奈子。だがそんな神奈子であっても今まで竜希ほどの力を秘めた人間はこれまでにあったことがない。

神奈子は竜希が本当に人間なのかと思わず疑ってしまっていた。

「さて、それじゃあそろそろ終わらせてもらおう。ついでだから最後に……。面白いものを見せてやるよ」

竜希は刀を納刀し、腰から鞘を引き抜いた。そしてそのまま抜刀術の構えをとって猛スピードで神奈子に接近する。

(この構えは双龍閃……。確か二段構えの抜刀術だったはずだ。この技は回避さえできれば隙が大きい……。これさえ躲せばまだ勝機はある。相手がこっちの想定を上回る技を出すっていうなら……。その想定を引き上げる)

神奈子は竜希の構えから次に繰り出す技を予測し、それに対応するべく意識を集中した。

「飛天『双龍閃』」

竜希は刀に手をかけ、神奈子の予想通りの技を繰り出す。

高速で抜刀される刃……。神奈子はそれを体を反らすことで躲した。

だが双龍閃はそれで終わりではない……。今度は斬撃の勢いを利用した鞘での次激が神奈子を襲う。

(これさえ……。これさえ避ければ！)

さらに意識を集中させる神奈子。

そして……

ヒュンツ!

神奈子の耳に鞘が空を裂く音が聞こえてきた。迫り来る鞘を神奈

子はバックステップをとることで回避することに成功したのだ。

(よし躲せた！この勝負……私の勝ちだ！)

勝利を確信し、スペルカードを構える神奈子。

その瞬間……

「飛天『龍碎閃』」

ドスン！

(……え?)

神奈子は胸元に衝撃を受け、膝について俯いた。

(一体……何が?)

何が起こったのか知ろうと神奈子は顔を上げた。

神奈子の目に映ったのは……刀が納められた鞘の先端を突

きつける竜希の姿であった。

「勝負ありだな。八坂神奈子」

「なに……その技?そんな技私は……知らない」

ダメージによって上手く声が出せなかったが、それでも神奈子は疑問の声を上げた。

「知らなくて当然だ。龍碎閃は俺が作った飛天御剣流の納刀術だからな」

「あんたが……作っただけ?」

「ああ……抜刀術を多用する飛天御剣流はその分納刀する機会も多いからな。だったらその納刀を利用する技がもつとあってもいいと思っただけだよ」

「はは……ははは。本当にあんたは……私の想定以上だね」

軍神であるはずの自分と竜希の間にある圧倒的なまでの力の差。それを痛感した神奈子はもはや笑わずにはいられなかった。

そんな神奈子に竜希は……どこか悲しそうな表情を浮かべながら言う。

「当然だ。俺は……『最強』だからな」

第109話

『来たか早苗』

ある日の休日、早苗は神楽に呼び出された。

『お待たせしました神楽先輩』

『全くだ。まさかこの私を待たせるとはな』

『あははは．．．すみません』

神楽の物言いに苦笑いを浮かべる早苗。ただ神楽のこの態度は今に始まったことではなく、決して悪気があって言っているわけではないと早苗は知っている所以对して気にしてはいない。

『ところで神楽先輩、私に何か御用ですか？』

『．．．お前に言っておきたいことがあつてな』

『神楽先輩が私に．．．ですか？』

『ああ。こんなこと本来私が言えたことではないのだが．．．早苗、ミコトのことを諦めるな』

『．．．え？』

早苗は一瞬神楽の言っていることの意味が分からずにキョトンとした。

『あの．．．神楽さん？ミコト先輩を諦めるなっていう意味でしようか？』

『．．．好きなんだろう？ミコトのことが』

『ッ!!』

早苗は顔をこわばらせる。それは神楽の言っていることが事実である証拠であった。

確かに早苗はミコトに好意を寄せている。だが．．．その思いが実ることはないと思っていた。

なぜならミコトには神楽がいるから。あらゆるものから愛され、最上の美しさを持つ神楽が．．．

故に早苗はミコトのことを諦めていたのだ。

それなのに．．．他でもないミコトの恋人である神楽がその早苗の考えを否定した。

『好きならば……諦めるな。何があっても……ミコトを想い続け、ミコトを自分のものにしてみせろ』

『神楽先輩……それは神楽先輩からミコト先輩を奪えということですか?』

『そうとつてももらつても構わない。まあ簡単に渡すつもりはないがな』

神楽は不敵な笑みを早苗に向けて言い放つ。

『言いたいことはそれだけだ。時間をとらせてすまなかつたな』

『それは構いませんけど……どうしてそのことを私に?』

『……ただの気まぐれだ。それ以上でも以下でもない。それじゃあまたな早苗』

神楽は軽く早苗に別れのあいさつをして、その場から去って行く。

……それは神楽が自殺する1週間前の出来事であった。

「たっだいまー!! 竜希さんがちやくんと勝つてきましたよ!!」

竜希はニヘラつと笑いながらミコト達の下へ帰ってきた。

「……」

「んにゃ?どつたの霊夢ちゃん魔理沙ちゃん?なぜに俺をじつと見つめてるの?」

「いや……なんというかな」

「……あんたのそのギャップには本当に慣れないわ」

どうやら霊夢と魔理沙は未だに竜希のギャップに慣れていないよ

うだ。

「竜希……お前いつそいつも真面目にしてたほうがいいんじゃないか?」

「あはははは……それはちよつとありえないね」

(……竜希さん)

魔理沙のいうことをおどけたような態度で竜希は否定する。だがなぜ普段ふざけた態度をとっているのかを知っている妖夢は心配そうに竜希を見ていた。

「でも……珍しいな。お前が最初から真面目に戦うなんて」

「言われてみれば……いつもは戦いを終わらせる時にしかあんならないのに」

「相手が相手だったからね。流石にふざける余裕はないかな」と

(まあ……正直に言うともう少しやると思ってたんだけど)

ミコトと妖夢にはああ返事を返したが竜希は内心で少々落胆していた。

神奈子は確かに強い。軍神の名に恥じぬ実力を備えているのは間違いない。だが……それでもその強さは竜希の想定には及ばない。

軍神ならばあるいは自分を越せるのではないかと竜希は心の片隅で期待をしていたが……残念ながら神奈子はその期待にそう存在ではなかったようだ。

(やっぱり俺を倒せるのは……)

「竜希さん? どうしたんですか?」

妖夢は様子のおかしい竜希に声を掛ける。

「……なんでもないよ。むちゃん」

竜希はふつ優しい微笑みを浮かべながら妖夢の頭を撫でた。

「みよん!? 何をするんですか竜希さん!!」

恥ずかしそうに顔を真っ赤にさせながら竜希に抗議する妖夢。

「あはは。ごめんね。それよりも……これで一勝一敗だよ」

「ええ……最後は私ね。それじゃあ行ってくるわ。ミコト……しつかりと見ててね」

「ああ……頑張れよ霊夢」

微笑みを浮かべるミコトに見送られ、霊夢は前に出た……。ミコトの微笑みがいつものそれとは微妙に違うことに気がつくことのないまま。

(ミコト、お前は……)

ただ一人、そのことに気がついていてる竜希は神妙な面持ちでミコトを見ていた。

「ごめんなさい……負けてしまったわ」

戻ってきた神奈子は申し訳なさそうに早苗と諏訪子に謝罪した。

「気にしなくてもいいよ神奈子……あれは相手が悪すぎた」

「まさか神奈子様が……竜希先輩ってあんなに強かったんだ」

「早苗は知らなかったの？」

神奈子が早苗に尋ねる。

「強いことは知っていたのですけど……あそこまでとは思いませんでした」

「正直あれは人間の域を超えすぎてるよ……というより本当にあいつ人間なの？」

「人間よ。実際に戦った私が言うんだから間違いないわ。それよりも……行ける早苗？」

「大丈夫です。この勝負……絶対に勝ってみせます」

意気込む早苗。どうやらやる気は十分のようだ。

「随分と気合が入ってるね早苗」

「はい。神社のこともそうですけど……霊夢さんにだけは負けたくありませんので。それでは行ってきますね」

「頑張りなさい早苗」

「私達がついてるからね！」

神奈子と諏訪子に見送られて、早苗は前に出た。

「お待たせしました霊夢さん」

早苗は先に準備していた霊夢に声を掛ける。

「まったくよ。この私を待たせるなんて……」

(……昔神楽さんに言われた時とは違いますね。少しイラツとします)

神楽に言われたときはなんとも思わなかったが霊夢はそうではないらしい。少々不機嫌そうだ。

「それよりも覚悟はいいかしら早苗？この勝負……一切手を抜く気はないわよ？」

「……それはこちらのセリフです！秘術『グレイソーマタージ』!!」

早苗がスペカを発動すると早苗を中心に星型の弾幕が出現し、周りに拡散した、

「殆ど不意打ちね……まあ無駄だけど」

霊夢は襲いかかる弾幕をいともたやすく躲けて見せた。

「これくらいは余裕ですか……態度が大きいだけのことはありませんね」

「一言余計よ……次はこっちから仕掛けるけど先に謝っておくわ。ごめんなさい」

「どういう意味ですか？」

「この勝負……時間をかけるつもりはないわ！『夢想天生』!!」

開幕早々、霊夢は目を閉じて自身の持つ最強のスペカ……『夢想天生』を発動した。

先程早苗の発動したスペカとは比べ物にならないほどの夥しい量

の弾幕が早苗を襲う。

「わわわっ！なんですかこれ！」

早苗は弾幕の規模に圧倒されながらもどうにかその弾幕を回避していく。

「言ったじゃない。時間をかけるつもりはないって」

「だからってこれは洒落になりません！奇跡『客星の明るすぎる夜』!!」

弾幕を躲しながらどうにかスペルカードを発動することに成功した早苗。

丸い弾幕とレーザーが霊夢に向かって放たれるが……

「無駄よ」

それらは霊夢を通り抜けてしまった。

「ええっ!?!なんですか今の!?!」

「残念ね。夢想天生を発動している間私はあらゆるものから浮いた状態……つまり無敵状態になるのよ。弾幕なんて当たらないわ」

「チート過ぎますよ！非常識すぎです！」

早苗のいうことはもつともだ。弾幕ごっこで弾幕を当てられないなど非常識にも程がある。

しかし……

「覚えておきなさい早苗……この幻想郷において常識にとらわれてはいけないのよ」

「そんなく!!」

早苗は落胆の声を上げながら、必死に弾幕を回避していた。

「い、いきなり夢想天生とは……霊夢の奴いくらなんでも容赦な

さすぎだぜ」

「夢想天生……あれほどの規模の弾幕を放ち、なおかつ無敵になるなんて……凄まじすぎです」

夢想天生を発動する霊夢を目の当たりにして、魔理沙は呆れ、妖夢は圧倒されていた。

(霊夢……そこまで早苗を目の敵にしたのか。まあわからないこともないが。それにしても……なんつう顔してんだよミコト)

竜希はいやに真剣な表情でミコトを横目で見た。

竜希の目に映るミコトは……酷く複雑そうな表情をしていた。(まあ当然か。ミコトにとっては……どちらも特別な存在なんだからな)

「はあはあはあ……」

依然として襲いかかる霊夢の弾幕。早苗はそれを必死に回避していた。

だが……それも時間の問題だ。今の早苗では夢想天生を躲しきるのほそれこそ奇跡でも起きない限り不可能なのだから。

そしてそれは……早苗自身も理解していた。

(無理……です。このまま躲し続けるなんて今の私では……どうやらここまでのようですね)

早苗は観念したかのように目を閉じた。

(すみません神奈子様、諏訪子様。私は……勝つことができませんでした。神社の力になることができませんでした)

敗北を悟る早苗。その心中では神奈子と諏訪子に対する申し訳なさで一杯になっていた。

(勝ちたかった……負けたくなかった。ミコト先輩の見ている前で負けたくなかった。でも、もう私ではどうすることも……) 『諦めるな』

「!?」

早苗が完全に諦めてしまうその直前、早苗の脳裏にかつて神楽に言われた言葉がよぎった。

そして……失われつつあった早苗の戦意が蘇る。

(……負けられない。私は……ここで諦めるわけにはいかない!!)

早苗は閉じていた目を開けた。すぐ目の前には自分に襲いかかる弾幕がある。

早苗はその弾幕を手に持った払い棒で弾いた。

「ッ!!」

非常に苛烈な勢いの弾幕を弾いたため、払い棒を持っていた手はその衝撃で痺れていた。だが……それでも早苗は目の前の弾幕を弾き、ある程度弾いたら再び弾幕を躲し始めた。

(諦めない……この勝負諦めるわけにはいかない!ここで諦めたら……また後悔してしまう!きつとまた……ミコト先輩のことも諦めてしまう!)

幻想郷に来ると決めた時……早苗はミコトのことを諦めた。

かつて神楽には諦めるなど言われていたが……それでも早苗はミコトのことを諦め、幻想郷に訪れた。

それは自分では神楽のようにはなれないと……神楽のように自分がミコトの最愛にはなれないと思っていたから。

だから早苗はミコトを諦めた。

だが……今は違う。

(絶対に負けない!霊夢さんには負けたくない!ミコト先輩の前で負けたくない!私は……絶対に諦めない!)

早苗は諦めない。この弾幕ごっこも……そしてなによりもミコトのことも。

迫り来る弾幕を早苗は避け続ける。その動きはまるで舞のように

優雅で美しかった。

そして……しばらくすると、早苗を襲う弾幕はなくなった。

早苗は……奇跡を起こして見せたのだ。

「そんな……私の夢想天生が……」

自分の最強の技を凌ぎきられるとは夢にも思わなかったのである。
う。霊夢は愕然としていた。

「すみません霊夢さん……私にも引けない思いがあるんです。この勝負……勝たせてもらいます！」

失意の霊夢に早苗は弾幕を放つ。

早苗の反撃が……今始まる。

第110話

「奇跡『客星の明るい夜』!!」

「くっ……」

弾幕ごっこは早苗が優勢となっていた。早苗が次々とスペルカードを使用し、霊夢はそれによって放たれる弾幕をかううじて回避していた。

本来であれば実力でも経験でも劣る早苗がここまで霊夢を追い詰めるというのはありえないことだ。にもかかわらず早苗が圧倒しているのは……やはり『夢想天生』を凌いだことが原因であろう。『夢想天生』は霊夢にとって最大にして最強のスペルカード。霊夢はこのスペカに絶対の自信を持っていた。だからこそそれを凌がれたことによる精神的ダメージは甚大であり、霊夢から余裕を奪っていた。

逆に早苗は霊夢の最強のスペカと凌いだことにより勢いがつき、実力以上の力を発揮している。

その差こそが今の戦局を形作っているのだ。

「まだまだ行きますよ霊夢さん！開海『モーゼの奇跡』!!」

早苗は次のスペルカードを発動すると、今まで以上に苛烈な弾幕が霊夢に襲いかかってくる。

(まずいわね。このままじゃ……負ける)

霊夢は心の内で焦りを感じながら、必死に弾幕を回避していった。

「……完全に流れはあちらに持って行かれてしまいましたね」

「ああ……やっぱり夢想天生を凌がれたのが痛いぜ」

劣勢に立たされる霊夢の姿を目の当たりにし、妖夢と魔理沙は神妙な表情を浮かべていた。

「方や自分の最大の技を凌がれ、方や相手の最大の技を凌ぎきったわけだからね。こうなるのは仕方がないね」

「……竜希さんはこの戦いどうなると思いますか？」

「……ぶっちゃけるとこのままいけば霊夢ちゃんに勝機はないね。このままさなちゃんに攻め込まれてジ・エンドだ」

「あの霊夢が……負けるのか？」

妖夢の問いかけに竜希は率直に思ったことを口にした。魔理沙はあの霊夢が負けるのが信じられずに愕然としている。

「まあ今はどうにか交わしてるけど今の霊夢ちゃんじゃ限度があるからね……とところでさ、霊夢ちゃんが窮地に立たされてるのに君は何を黙り込んでるのかなミコちゃん？」

竜希は先程から一言も言葉を発していないミコトに視線を向けながら言う。

「俺は……」

「……ミコちゃんの考えはわかってるよ。ミコちゃん……どっちを応援したらいいのかわからなくなってるんだろ？」

「……」

「沈黙は肯定の証……だね」

「ミコト……どっちを応援したらいいかってどういうことだ？なんでお前霊夢の応援してやらないんだよ？」

「そ、それは……」

魔理沙が責めるような目でみるとミコトは言葉を詰まらせながら目を逸した。

「そんな責めてあげないでよ魔理沙ちゃん。これは……仕方がない事なんだから」

「仕方が．．．ないことですか？」

妖夢は意味が分からずに首を傾げる。

「そ。ミコちゃんは幻想郷で霊夢ちゃんのいる博麗神社に置いてもらってる。そのことに関して霊夢ちゃんには感謝しているだろうね。でもその一方で．．．ミコちゃんはさなちゃんの事も大切に思っているんだよ。今回の弾幕ごっこに参加しなかったのだから本当は諏訪子ちゃんがいるからじゃなくてどっちの味方をすればいいのかわからなかったから。そして早苗ちゃんと一緒に暮らさないかと言われてその時にはつきりと断らなかつたのは．．．ミコちゃんの中で迷いがあつたから．．．だよね？」

「．．．ああ」

ミコトは竜希の言うことを素直に認めた。

幻想郷に来て、ミコトは霊夢に何度も支えられた。幻想郷に来る前、早苗はミコトを拒絶せずに接してくれた。どちらのことも大切に思うのは．．．当然のことであつた。

故にミコトはどちらの味方につくべきなのか迷つてしまつているのだ。

「そんなミコちゃんの気持ちを否定するつもりはないし非難するつもりもない。ミコちゃんは．．．悪くないからさ」

「竜希．．．」

「でもねミコちゃん．．．ミコちゃん自身は本当にそれでいいと思つてるの？どっちづかずのままこの戦いに決着がついて．．．それで本当にいいと思つてるの？」

「いいとは思っていない。だが．．．だつたらどうすればいい？霊夢にも．．．早苗にも負けて欲しくない。俺は．．．どうすればいい？」

「ミコト．．．」

「ミコトさん．．．」

ミコトは悲痛な表情で竜希に訴えかける。そんなミコトを魔理沙と妖夢は複雑そうに見つめていた。

「そんなの自分で考えろ．．．と言いたいところだが今のミコトは

見てられないからな。教えてやるよ……難しいことは考えるな」

「え？」

「とりあえず難しいことは考えるな。そして自分の心に従え。例えそれが最善でなくても。例え後で後悔することになっても。それでも……なにもしないよりもずっとマシだ」

竜希は神妙な面持ちで、そして真剣な声色でミコトに答えを提示した。

「自分が最初に思ったこと……」

(俺は……俺の思いは……)

ミコトは意を決し、一歩前に出て……自らの心の命ずるままに口を開いた。

「まさかここまで耐え抜くなんて……さすがといったところですね」

「はあはあ……」

早苗は自身が放つ数多の弾幕をここまで全て躲した霊夢を賞賛した。

しかし対する霊夢はというと肩で息をしており、既に限界が近いことが誰の目から見ても明らかであった。

「ですが……ここで決着にしましょう。私の持つ最大のスペルカードで……終わらせてあげます」

早苗は懐からスペカを取り出しながら霊夢に宣言した。

(ここまで……かしらね。もうこれ以上弾幕を躲すだけの体力が残ってない。私の……負けか)

霊夢は自身の敗北を察して頭を垂れた。

もはや霊夢の闘志……尽きかけていた。

(早苗に負けるのは癪だけど……まあいいか。守矢神社の参加になつたところで博麗神社がなくなるわけじゃないし)

完全に勝負を諦めてしまった霊夢。せめて最後は無駄なあがきをしないでおこうと目を閉じてその場に立ち尽くす。

その時……

「霊夢ー!」

(……え?)

背後から自分の名を呼ぶ声が霊夢の耳に入る。

振り返る霊夢の目に映るのは……ミコトの姿であった。

「ミコ……ト?」

「霊夢……諦めるな!ここで諦めるなんてお前らしくない!頑張り!」

珍しく声を張り上げ、霊夢を強く鼓舞するミコト。

その言葉を聞き……霊夢の中で消えかけていた闘志に勢いが戻る。

(あのミコトがあんなに声を張り上げて私を……応援してくれてる。ミコトが私を……負けられない。この勝負、ミコトの為に負けるわけにはいかない!)

霊夢は顔をあげ、真つ直ぐに早苗を見据えた。その表情は先程の諦めていた時とはまるで違う。

「(ミコト先輩、あなたは霊夢さんのことを……) どうやらまだ諦めないようですね」

「ええ……ここで諦めるわけにはいかないのよ。私は……負けられないの」

「負けられないのは私も同じです……私はこの勝負勝ってみせます! 秘術『一子相伝の弾幕』!!」

早苗は自身の持つ最大のスペルカードを発動した。これまでのものとは比べ物にならない規模の弾幕が霊夢へと放たれる。

(いくわよ……ミコト!!)

胸につけたミコトから送られたブローチに触れる霊夢。

そして……

「霊符『白紅の結界』!!」

霊夢もまたスペルカードを発動した。霊夢を象徴する白と紅の二色の美しい弾幕が早苗の弾幕とぶつかり合い相殺していく。

両者の放つ弾幕は一見すると互角に見えた。

だが……

(……ダメですねこれは)

早苗は察した……否、察してしまったというべきであろう。

この勝負……負けるのは自分であることを。

それを証明するかのように早苗の弾幕が霊夢の弾幕に押され始め、少しずつ早苗に迫ってきた。

(私の……負けですね)

早苗が微笑みを浮かべるのと同時に、白と紅の弾幕の奔流が早苗の体を包み込んだ。

「私の勝ちよ、早苗」

霊夢は自分の弾幕を受け、仰向けに倒れる早苗に近づいて言う。
「そうですね……霊夢さんが羨ましいです。ミコト先輩からの応援なんて……外の世界にいた時から付き合いのある私でもされたことないですよ？」

負けたくないという思いは霊夢と早苗も遜色はなかった。勝敗を分けたのは……ミコトの応援があつたか否かであった。

「ああ……凄く悔しいです」

両手で目を覆う早苗。頬には……雫が流れていた。

「……誇りなさい早苗。あんたは立派に戦った。ここまで私を追い詰めるなんて誰にでもできることじゃないんだから」

そんな早苗に、霊夢は手を差し出す。

「……本当に偉そうな物言いですね」

雫を拭い、早苗は差し出された手を掴んで立ち上がった。

博麗神社と守矢神社の弾幕ごっこは博麗神社の勝利で幕を閉じた。

第111話

『本当にいいの早苗?』

現代を離れ、幻想郷に赴く直前に諏訪子が早苗に尋ねた。

『はい。私は守矢神社の巫女ですから。どこまでも神奈子様と諏訪子様につき従います』

『でも……もう現代には帰って来れないんだよ? そうなったらもう……ミコトっていう子にも会えなくなる。ミコトって早苗にとつて大切な人なんだよね? 本当に……いいの?』

『……いいんです。もう……いいですよ』

神妙な面持ちで諏訪子が念を押すと、早苗は儂い笑顔を浮かべながら返事を返した。

『でも……!』

『よしなさい諏訪子。早苗が決めたことにこれ以上私達が口を出すわけにはいかないわ』

『神奈子……うん。わかったよ』

『それじゃあ行きましょう。現世より隔離された世界……幻想郷へ』
『はい。行きましょう』

3人は幻想郷へと移る準備を始めた。

(さようならミコト先輩。私の……愛する人)

「さて、それじゃあ決着もつきましたし宴会といこうか〜!」

竜希は意気揚々と高らかに宣言した。

「竜希、お前な……空気読めよ」

「読んだ上でやっています！」

「二「夕チが悪い」」

相変わらぬの竜希の破天荒ぶりにミコト、霊夢、魔理沙、妖夢の4人は呆れ返っていた。

「ねえ早苗……彼っついていつもあんな感じなの？」

「ええ……竜希先輩は普段は破天荒な方ですから」

「私はアレに完敗したのね……」

「神奈子……心中察するよ」

流石に哀れに思ったようで、諏訪子は落ち込む神奈子を励ました。

「はあ……竜希、宴会は少し待て。先に今回の件で早苗達と話を付けてくるから」

「はいはい。それじゃあ待つてまゝす！」

「全く……行こうか霊夢」

「ちよつと待つて……話をつけるのはいいけどあんた諏訪子に近づけるの？」

「……頼む霊夢」

「ええ。ミコトはここで待つてなさい」

霊夢はミコトに待つように言い、早苗達と今後のことを話合いに向かった。

「ミコトさん……流石にそれはないです」

「……カツコ悪いぜミコト」

「ミコちゃん……マジ情けないよ？」

「……ほつといてくれ」

珍しく皆に責められるミコトであった。

「……ということでもよろしいですか？」

「ええ。それで構わないわ」

早苗が最終確認をすると、霊夢はそれを承諾した。

今回の一件は博麗神社に守矢神社の分社を建てるということを決着がつく形となった。

一見すると弾幕ごっこで敗北した守矢神社側が得しているように見えるが実際は分社を建てることによつて参拝客が増え、結果的に博麗神社、守矢神社の信仰が共に増すという形になるので双方に利益がある。

霊夢自身も博麗神社の得になるのならとその案を引き受けたのだ。

「話は終わったみたいだね。それじゃあ宴会宴会〜♪」

「竜希さん……宴会好きですね」

「騒がしいの好きですから！」

「それに関しては私も竜希に同意だぜ！やっぱりと仕事終えたあとだから思い切り飲みたいいな！」

「そうね。不本意だけどこいつらの歓迎も兼ねて宴会を開きましょう」

霊夢、魔理沙は宴会を開くことに同意しているようだ。

「あの……すみません皆さん。宴会を開くこと自体は構わないのですが問題があります……」

早苗は申し訳なさそうに切り出した。

「ん？どうしたのさなちゃん？」

「えつと……宴会を開こうにもですね……それだけの食料も飲み物もうちにはなくて」

「ああ、それなら大丈夫だよ早苗。酒も食料もここにある」

「え？」

ミコトの声に反応した早苗が振り返るとそこには沢山の酒と食料があった。

「これ一体どうしたのよミコト？」

「さつき紫が来て置いてった」

「ああ……そういうことね」

紫の仕業だとわかり霊夢は納得した。

「その紫って言うのは誰ですか？」

「幻想郷を作った妖怪の賢者だ。と、そういうえば去り際に今度改めて挨拶に来ると言っていたぞ。色々と話したいこともあるそうだ」

「あゝ……まあさなちゃんたちはまだ挨拶も何もしてない状態だからね。今回の件もあるし色々とネチネチ言われるかもよ」

「……覚悟しておいたほうが良さそうですね神奈子様、諏訪子様」

「……そうね」

「……先行き不安だね」

紫との邂逅を思い、不安に駆られる守矢一家。まあ自らの撒いた種なので自業自得であるが。

「まあそれはともかくとして宴会の準備しようぜ！紫のおかげで酒も食料も大量にあることだしな！」

「それじゃあ料理作ってくるか。早苗、台所まで案内してくれ」

「わかりました」

「あ、それなら私も……」

「いやいや、俺に任せてよくむちゃんは待つてなつて」

妖夢も手伝いを名乗り出ようとするが竜希に待つように言われた。

「ですが……」

「いつも家事頑張つてて大変でしょうよ。今日ぐらいいいじゃん」

「……わかりました。それじゃあお言葉に甘えさせてもらいます」

「わかればよし。それじゃあ行こっかミコちゃん、さなちゃん」

「ああ」

「それではついてきてください」

早苗に連れられ、ミコト達は食料を持って台所へと向かった。

「それじゃあ乾杯!!」

「乾杯!!」

「……竜希の音頭で始まることに關してはスルーなのか」

竜希の音頭とともに始める宴会。ミコトは一人だけ突っ込んでいたがこの時ばかりは誰一人聞いていなかったようだ。

「まあまあミコちゃん。そんな小さいことなんて気にしないで飲もう飲もう!」

「……ああ。そうだな」

竜希に促され、ミコトは手にした盃に入った酒を一気に飲み干した。

「あの……今更なんですけど私達未成年なお酒飲んでもいいんでしょうか?」

早苗が素朴な疑問を口にした。まあすでに早苗を除く全員が酒に口をつけてしまっているので本当に今更なのだが。

「大丈夫だぜ。幻想郷じゃ酒を飲むのにそんな制限存在しないからな」

「そういえばミコトもこっちに来たばかりの時に同じような事言ってたわね。お酒を自由に飲めないなんて外の世界はつまらないよね」

「いや、別につまらないというわけではないのですが……」

「早苗もしかして酒飲むのに抵抗があるのか? だったら無理して飲まなくてもいいんだぞ?」

一向に酒を飲もうとしない早苗にミコトが提案する。

「まあ確かに少し抵抗はありますが……ですがせつかくですそ飲ませていただきます。ここで遠慮してしたら損した気分になりますので」

そう言って早苗は初めての酒を口につけた。

「どうだ早苗？」

「……喉が焼けるみたいに熱いです」

「初めて飲んだのなら仕方がないですよね」

若干涙目になっている早苗を見て、妖夢が苦笑いを浮かべる。

「ふふつ、この程度で根を上げるなんて早苗はお子様ね」

「む……ミコト先輩、もう一杯ください」

勝ち誇ったような笑みを浮かべる霊夢に挑発された早苗はミコトに酒を注いでもらおうと盃を差し出した。

「無理しなくてもいいんだぞ早苗？」

「無理なんてしていません！いいからください！」

「全く……ほどほどにな」

やれやれと肩を竦めながらミコトは早苗の盃に酒を注いでやった。

「まあそのうち慣れると思うよ。というか俺はてつきり二人に結構飲まされてると思ったんだけど違ったんだね」

竜希は先程から物凄いハイペースで酒を飲み干していた神奈子と諏訪湖を見ながら言う。

「私達も結構外の世界の定説に染まってたからね。成人する前に酒を飲ませるのはまずいと思ったんだよ」

「結局飲むことになっちゃったけどね。まあこれから早苗と一緒に飲めるようになったからいいけどね」

「なるほど。と、それはそうとお酒もいいけど料理の方も皆食べてよ。俺とミコちゃん、さなちゃんの3人で腕によりをかけて作ったものなんだからさ」

「安心しろ竜希。私はもう食べてるぜ」

「私も頂いています」

魔理沙と妖夢は自分のさらに取り分けた料理を見せながら言う。

「うおつ、いつの間に……」

「それじゃあ俺達もいただくとしようか。霊夢も早苗も飲んでばかりいないでちゃんとおまみも食べろよ」

「わかっているわよ」（わかっています）」

同時にミコトに返事を返す霊夢と早苗。仲は良くないが息はピツタリのようなのだ。

かくして一同は酒と料理に舌づつみを打つのであった。

宴会が始まってしばらくして、ある程度酒と料理を食べ終えた一同。

現在は……

「待ちなさい竜希！」

「わわわっ！勘弁してよ霊夢ちゃん〜！」

「ははははっ！いいぞ二人共！もつとやれ!!」

霊夢が竜希を追い掛け回して、魔理沙はそれを煽っていた。

なぜこうなったかという竜希がミコトを半ば強引に諏訪子に近づけようとしたからだ。

竜希としてはミコトが諏訪子を怖がって話もしようとしたくない状態を少しでもなんとかしようと思わずに純粋な親切心からやったことなのだが見事に霊夢の逆鱗に触れてしまったようだ。

魔理沙はそれを見て完全に楽しんでいた。

「あ、あの……諏訪子……さん」

霊夢が竜希を追い回す光景が繰り返される一方で、ミコトは諏訪子に声をかけた。

「どうしたのミコト?というか大丈夫なの?」

「い、今は命を感じないようにしてるから多少は……それよりもその……怖がったりしてすみません。嫌な思いをさせてしまいましたよね?」

ミコトは恐る恐ると諏訪子に尋ねた。

「別に気にしなくても大丈夫だよ。怖いものは仕方がないんだし」
「で、でも……」

「本当にいいから。別に私のことが嫌いってわけではないんでしょ?だからそんなに気にしないで」

「諏訪子さん……ありがとうございます」

「別にお礼を言うことでもないんだけど」

諏訪子はミコトの律儀さに思わず苦笑いを浮かべた。

「……ところでミコト、霊夢と竜希に関してはスルーでいいの?」

「あ、特に気にしなくてもいいですよ。竜希なんて」

「……竜希の扱いはそれがデフォなんだね」

「竜希さん……本当にご愁傷様です」

霊夢に追い回される竜希に同情の視線を向ける妖夢。

同情するくらいなら止めればいいのだが……そんなことをすれば確実に巻き込まれて自分も霊夢に追い回されると思ったのだろう。妖夢は竜希に申し訳ないと思いつながら傍観に徹することにした。

そんな妖夢に……神奈子が声をかけた。

「妖夢……ちよつといいかい?」

「あ、はい。なんですか神奈子さん」

「あんたは……竜希と懇意にしているだろう?」

「まあ……一緒に暮らしていますしそれなりには」

「……必要ないかもしれないけど一応言っておくよ。竜希のことはよく見ておいたほうがいい」

「……え？」

妖夢は神奈子の言っていることの意味が分からず、小さく声を漏らした。

「あの……それはどういうことですか？」

「竜希のあの強さ……あれはあまりにも異常すぎる。私の知る限りでは歴史上あいつよりも強い人間はいなかったし……未来永劫あいつよりも強い人間は生まれないと思うわ」

神奈子は竜希を見つめながら言う。

「……そうでしょうね」

妖夢は神奈子のいうことを素直に肯定した。

妖夢はわかっているのだ。紫黒竜希の強さというのは……軍神でさえも屈服させ、さらにはその気になれば世界そのものをも斬るほどに強大なことを。それ故に竜希を越す力を持つ人間が今後一切現れることはない、現れてはいけないということ。

「でも……だからこそわかるの。間違いなく竜希は……宿命を背負っている。あれだけの力を持つに値するほどの宿命を……人が背負うのにはあまりにも重すぎる宿命を」

(宿命……それってまさか紫黒の使命?)

妖夢は神奈子の言う宿命が紫黒の使命となにか関係があるのではないかと考えた。

「あの神奈子さん……神奈子さんは昔飛天御剣流の使い手と戦ったことがあるんですよね？」

「ああ。あるよ」

「それってつまり紫黒の人間と戦ったことがあるということですか？紫黒のこと……何か知っていることはありませんか？」

妖夢は神奈子ならば紫黒のことを何か知っているだろうと思いを尋ねた。

「……それが竜希の宿命と何か関係があるとあなたは思うの？」

「はい」

「そう．．．．私も別に紫黒の人間と親しいわけじゃないから詳しいことを知っているわけではなわ。でも．．．．彼等は自分達のことをこう称していたわ。『我々は——を殺す一族だ』つてね」

「!?——を殺す．．．．一族?」

神奈子の話を聞いて妖夢は理解した。

紫黒の．．．．竜希の背負う大きな宿命を。

(竜希さん．．．．あなたは．．．．)

「ふう．．．．夜風が気持ちいな」

宴会がお開きになり皆が眠りについた頃、ミコトは守矢神社の縁側で煙管を吸っていた。

「ミコト先輩?」

そんなミコトに．．．．早苗が声をかけた。

「早苗．．．．こんな夜更けにどうした?」

「ミコト先輩の姿を見かけたから気になって．．．．そういうミコト先輩こそ何を?」

「見ての通り一服しているところさ」

ミコトは手にした煙管を早苗に見せながら言う。

「煙管ですか．．．．神楽さんの真似ですか?」

「確かに吸い始めたきつかけは神楽の真似さ。でも今は自分の娯楽の為に吸っているようなものだよ」

「そうですね．．．．煙管もお酒も嗜むようになったなんてなんか大人って言う感じでかっこいいですね」

「別にかっこつけて嗜んでいるわけじゃないんだけどな。それにして

も……こうして二人で話をするのは本当に久しぶりだな」

「そうですね。前に二人で話をしたのは……もう2年も前のことでしたもんね」

早苗は昔のことを懐かしむように思い出しながら言う。

「ミコト先輩……今幸せですか？」

「どうした突然に？」

「答えてください……幸せですか？」

「……まあそれなりにはな。幻想郷の皆は俺のことを拒絶しないし……なにより毎日楽しいいな」

ミコトはふつと微笑みを浮かべる。

「そうですか。なら……ミコト先輩には今好きな人は居ますか？」

「……は？」

早苗の口から出た質問はあまりにも予想外のものであり、ミコトはキョトンとする。

「どうですか？」

「いや、まあ……居ない……かな？」

(あれ？なんで俺……今断言しなかった)

なぜはつきりと居ないと言い切らなかったのか？ミコトは自分自身のことであるにも関わらず理解できずにいた。

「……私には居ますよ。好きな人」

「え？」

「昔から好きでした。ずっとずっと好きで好きで……恋焦がれていました」

「さな……え？」

「幻想郷で移ると決めて……もう会えないと思っていました。もう二度と会うことはないと思っていました。でも……また会うことができた。そして今、私の目の前に居る」

早苗は微笑みを浮かべながらミコトを正面から見据える。

「早苗……それって……」

「……ミコト先輩」

少しずつ……少しずつ早苗の顔がミコトに近づいていく。

そして……………

スツ

早苗の唇とミコトの唇が重なった。

「ミコト先輩……………あなたを愛しています」

ミコトに告げられた早苗の秘めたる想い。

物語は……………動き始める。

二周年企画〜Color of Knife〜

月夜の下、少女はナイフを振るう

振るうたびに溢れ出すは紅

世界を染めるかの如く辺りは紅で穢されてゆく

そこに目的などはなく、意味もなく、理由さえもない

少女は切り裂き続けた

ただひたすらに・・・切り裂き続けた

紅魔館の中庭にて、ミコトと咲夜が手合わせをしていた。

右手で白銀のナイフを振るう咲夜に対して、ミコトはクラマとシラマを変化させた黒と白のナイフを両手に持つて斬撃をさばっていた。

「やるわねミコト」

「それはこちらのセリフだ。流星は咲夜だな」

互いに笑顔を浮かべながら常人では到底捉えきれない速度で繰り広げられる剣戟。それはもはや舞のように思わせるほどだ。

「それじゃあそろそろ・・・決めさせてもらおうわ！」

一度バックステップをとったあと、勢いをつけて咲夜はミコトに迫ってナイフを振りかざした。

それをガードするためにナイフをクロスさせるミコト。

だが・・・

「甘いわよ」

「グッ・・・」

咲夜はすぐさま空いていたはずの左手にナイフを持ち、ミコトのガードを突き崩した。

そうしてミコトにできた一瞬の隙を見逃すはずもなく……ナイフがミコトの首筋に当てられた。

「私の勝ちよ」

「……だな」

勝敗が決し、ナイフをしまう両者。

「どうやらナイフ限定の戦闘ではまだ私のほうが上のようね」

「ああ。やはり熟練度の差が出るな」

ミコトの戦闘スタイルは多種多様の武器を状況に合わせて使い分けるといふものだ。器用といえば聞こえはいいがその実一つの武器での戦闘に特化しているわけではない為、今回のように武器を限定した場合それはそれを専門とする者には一歩劣ってしまうのだ。

「ミコトはまだナイフのリーチに慣れていないという印象を受けたわ。ナイフは武器の中で小さいから小回りや小技が重要になってくる。だからこそリーチを感覚で掴めていなければ力を発揮できないのよ」

「そうなんだよな……ナイフはあまり多用するわけじゃないからどうにもまだ掴めないんだよな」

「まあ私でよければ暇なときならいつでも付き合っただけから精進しなさい」

「ありがとう咲夜。それにしても……今の話を聞いて改めて咲夜は凄いなと思うよ」

響はうんうんと頷きながら言う。

「私が……凄いな?」

「ああ。咲夜はナイフをまるで自分の体の一部分のように的確に操っているからさ。あのレベルに至るのはそれこそナイフの扱いに深くまで精通していなければならぬだろうし……本当に凄いな咲夜は」

素直な気持ち咲夜の技量を賞賛するミコト。

確かに咲夜のナイフ捌きは凄まじいの一言だ。間違いなくナイフ

の扱いにかけては幻想郷において咲夜の右に出るものはいないであろう。

だが……

「……いいえ、私は凄くなんてないわ。だって私は……」
咲夜は自分のナイフ捌きを誇ってなどいなかった。忌々しげな表情を浮かべながら、咲夜は顔を伏せる。

「……咲夜? どうした?」

様子のおかしい咲夜に語りかけるミコト。しばし沈黙が流れ……
咲夜はゆつくりと口を開く。

「……罪」

「え?」

「私にとってナイフは私の罪の象徴……私の咎そのものなのよ」
咲夜は取り出したナイフを見つめながら言う。

「ナイフが……咲夜の咎? それって一体……」

「……ミコト、あなたは『ジャック・ザ・リッパー』という名を聞いたことはあるかしら?」

「ああ。確か何人もの女性を切り殺した猟奇殺人犯……まさか……?」

「ええ……私がそのジャック・ザ・リッパーよ」

「ツ!?!」

咲夜の口から語られる事実。それはミコトにとってあまりにも衝撃的な内容であった。

無理もないだろう。咲夜が外の世界で有名な殺人者だと言うのだから。

「私はこの手で……ナイフで多くの人を切り殺した。何人も何人も何人も……月夜の下引き裂き、彼女たちを紅に染めていったの」

「……なんでそんなことを?」

「……わからないわ。私自身どうしてそんなことをしたのかわからないの。まるで決められた作業をこなすかのように感情なく人々を切り裂き続けていた」

ただひたすらに切り裂き続けた記憶が咲夜の脳裏によぎる。死にたくない泣き叫び、殺さないでと命乞いをする者たちを一切の慈悲を与えることなく切り裂き、紅に染めた。

咲夜にとつて、これ以上ないほどに忌々しい記憶。

「咲夜……」

「私がお嬢様に出会ったのはその時だったわ。偶然ターゲットにしたお嬢様にいつものようにナイフを振りかざした。まあ当然返り討ちにあっただけけどね。流石に殺されると覚悟していたけれど……お嬢様は私のことを気に入ったらしく、連れて行かれたわ」

「……それで従者になったのか」

「ええ。どうせ殺されるはずだったのだからと従ったのよ。初めは仕方なしにだっただけれど……今ではお嬢様に感謝しているわ。もしもあの時お嬢様に出会わなければ私はさらなる犠牲者を出してしまっていたでしょうから」

ナイフを翳す咲夜。咲夜の目には白銀のそれが血の紅に染まっているように見えた。

「……ミコト、あなたはこんな私を軽蔑するかしら？罪のない人々を切り裂いたにも関わらずのうのうと生きている私を……あなたは軽蔑する？」

咲夜は今にも泣き出しそうな儂い表情を浮かべ、それでも真つ直ぐにミコトを見据えながら尋ねた。

ミコトに軽蔑されることは、ミコトに拒絶されることはミコトを愛する咲夜にとつては何にも勝る絶望。それでも咲夜はミコトに話した。ミコトを愛する者として……自らの咎を知ってもらわなければならぬと思っただからだ。

心に恐怖を抱きながらミコトの返事待つ咲夜。

しかし……ミコトの返答は咲夜の予想したものとは違っていた。

「……しないさ。咲夜を軽蔑なんてしない……する理由がない」

ミコトは優しい微笑みを浮かべ、咲夜の頭を撫でながら告げた。

「どう……して?どうしてあなたは……?」

「完全に俺の勝手な考えなんだけど……咲夜がジャック・ザ・リッパ―であったことは事実であつても俺にとつての咲夜はそうじゃないから」

「え……?」

「完璧で瀟洒、そして誰よりも忠誠心が強い紅魔館のメイドで、俺の大切な仲間……それが俺にとつての咲夜だ。過去がどんなものであつたとしてもそんな咲夜を軽蔑する理由なんてないさ」

「でも……私は決して許されないことをして……」

「確かにジャック・ザ・リッパ―のしたことは重罪だよ。でも……今ここにいる咲夜がその罪を背負いはしても、それに囚われて必要以上で苦しむ必要はないさ。少なくとも……俺はそう思うよ」

「ミコト……」

「それに……このナイフだつてそうだ」

ミコトはナイフを持つ咲夜の手を自らの手で包み込む。

「かつて人々を切り裂いてきた凶器だけど……今は大切な人達を守るために振るわれる咲夜の武器だ。だからさ……誇れとまでは言わなくてもこのナイフに自信を持つてもいいんじゃないか?」

「このナイフに自信を……」

「なんて……偉そうなこと言つてるけど、結局は咲夜の気の持ちようだ。どうするか……どうあるべきかは咲夜が決めること。咲夜……君はどうありたい思う?」

「私が……どうありたいか」

ミコトに問われ、咲夜は目を閉じて考え込む。

思い返されるのはジャック・ザ・リッパ―としての罪の記憶と、紅魔館で働いてきた従者としての記憶。

咲夜の過去と現在の記憶……二つは違うものであるが切り離されているわけではない、咲夜を形作る要素。

しばらくして目を開けた咲夜が……答えを口にする。

「私は……忘れない。犯してしまった罪を。殺してきた人間達のことを。何があつても忘れずに……これから一生背負つてい

く。でも……それでも今の私を変えるつもりはない。今までどおり紅魔館のメイドとして在り続け……このナイフでお嬢様達を守ってみせるわ」

それが咲夜の選択であった。

「そうか……それでいいと思うよ。それでこそ咲夜だ」

「ミコト……ありがとう。あなたのおかげで少しだけ吹っ切れたわ。これからは……これともちゃんと向き合える気がするわ」

咲夜の目に映るナイフ。咲夜の目に映る刃は……紅と白銀が入り混じっていた。

「別に礼を言われるようなことをした覚えはない」

「ふふっ……あなたらしいわね。さて、そろそろお茶の時間ね。

ミコトも一緒にどうぞ？お嬢様も喜ぶと思うわ」

「ああ、いただこうかな」

「それじゃあ行きましょ」

並んで屋敷の中に入ってゆくミコトと咲夜。

二人の距離は以前よりも少し近づいているように見えた。

二周年企画く剣士と剣士く

「よし、今日のお手入れ終了です」

「お疲れ様、妖夢」

竜希が散歩に出ている間に、日課である白玉楼の庭の手入れをしていた妖夢。手入れが終わり軽く伸びをしたところで幽々子が声を掛けた。

「これが私の仕事ですのぞ」

「いつもありがとう。そうだわ！いつも頑張ってくれている妖夢に褒美をあげましょう！」

「そんなご褒美だなんて……私には勿体無いぞ」

「いいからいいから♪来て妖夢」

「ちよ、幽々子様！」

幽々子は褒美を貰うことを拒否する妖夢を半ば強引に部屋まで引っ張っていった。

「はい、ちよつとここに座って待つて頂戴」

妖夢にそう言うのと幽々子は柵に何かを取りに向かった。

（幽々子様……ご褒美つて何をくれるつもりなんぞでしょうか？）

先程は拒否したもののいざ貰えるとなると嬉しいのであろう。妖夢は期待に心を躍らせていた。

「お待ちせ。はいこれ」

幽々子が妖夢に差し出したのは……淡い紅が塗り重ねられた貝殻であった。

「これつて……もしかして艶紅ですか？」

「ええ。妖夢に合いそうだからいつか渡そうと思つて取つておいたの

よ」

「でもこれってすごく良い物なんじゃありませんか？そんな物を私なんかには……」

「たまにはお洒落も必要よ。早速つけてみましょうか」

「えっ!?ちよつと待ってください幽々子様!」

ニコニコと笑顔で口紅をつけようとする幽々子に妖夢が待ったをかける。

「遠慮なんかしなくてもいいのよ。これをつければ……竜希もメロメロになるかもしれないわよ?」

「……竜希さんが?」

竜希の名を聞いてピクリと反応を示す妖夢。

「だから……ね?」

「……はい。お願いします幽々子様」

このタイミングで竜希の名を出されたのだ。もはや妖夢に断る理由はなかった。

「それじゃあじつと置いてね」

幽々子は妖夢の唇に紅を塗り始めた。

「はい、終わり。確認してみなさい」

紅を塗り終え、幽々子は小さな鏡を妖夢に差し出した。

「……これが私?」

鏡に映った自分の顔。それを見た妖夢は自分の目を疑った。

お洒落といっても所詮は口紅。そこまで大それた変化はないと妖夢は思っていた。だが実際は唇に彩が加えられただけで自分でもわ

かるくらいに普段とは違う印象を見受けられた。

一言で言えば……紅をつけた自分の顔から妖夢は『女』っぽさを感じたのだ。

「見立て通りよく似合っているわ。これならきつと竜希も釘づけよ」

「竜希さんが私に……」

紅を塗られた唇に触れながら竜希に想いを馳せる妖夢。

その時……

「たっだいま〜!!」

二人の耳に竜希の声が聞こえてきた。

「噂をすれば……ね。行くわよ妖夢」

「は、はい」

二人は竜希を出迎えに向かった。

「ただいまよ〜むちちゃん、幽々子さん」

「お帰りなさい竜希」

「お、お帰りなさい……」

二人が玄関に赴くと、竜希はいつものゆるい笑顔を挨拶をし、幽々子と妖夢も挨拶し返す。しかし、肝心な妖夢は顔を伏せてしまっており、竜希からはその顔が見えづらかった。

いざ竜希と顔を合わせると恥ずかしいのであろう。

「はい、これお土産。ミコちゃん特製のお饅頭だよ〜」

「ミコト特製？博麗神社に行っていたの？」

「うん。ちよつとちよつかいかけにね〜。まあ思いつきりどやされましたが」

苦笑いを浮かべながら言う竜希。だが実際は土産を持たされたことからそこまで邪険にされていなかったのであろう。

「…………ミコトはともかく霊夢がどうであったかは定かではないが。」

「まあそれはともかくとしてこれをおやつにおやつにしましょう。ちようどいい時間だし」

「だね。それじゃあお茶の準備を…………って、よくむちちゃん？なんで俯いちゃってるの？」

竜希は首を傾げながら妖夢に尋ねた。

「そ、それは…………その…………」

「よくむちちゃん？」

一体どうしたのだろうと妖夢に近づいて確認しようとする竜希。すると…………

「お、お茶の準備をしますね！」

妖夢は大急ぎで台所に走って行ってしまった。

(もう妖夢ったら…………仕方がないわね)

走り去る妖夢の後ろ姿を見て、幽々子はやれやれといった様子で苦笑いを浮かべていた。

「美味しい！さっすがはミコちゃん特製だね。お茶によく合う」

縁側で妖夢の準備したお茶とミコト特性の饅頭を味わう竜希が満足そうに言う。

「本当に美味しいわ。ますますミコトのことが欲しくなっちゃうわね」
♪

「それ霊夢ちゃんに言ったらきつと夢想天生お見舞いされるよ？」

「そうね〜…………霊夢はミコトにべつたりだものね。まあ負ける気はないけど♪」

楽しそうに談笑する竜希と幽々子。その一方で妖夢はお茶にも饅頭にも手をつけずに未だ俯き気味であった。

(ど、どうしよう。やっぱりいざ竜希さんに見せるとなると…………恥ずかしい。でもせっかく幽々子様が気を遣って付けてくださったのに…………やはりここは勇気をだして竜希さんに!)

妖夢が決意を固め顔を上げたると…………

「よくむちちゃん?本当にどうしたの?」

妖夢のすぐ目の前に竜希の顔があった。

「みよん!?あ、あの…………その…………」

今さっき決意を固めたばかりであるがこれは予想外の不意打ち。

妖夢の顔はみるみるうちに赤く染まっていき、激しく動揺していた。

「もしかして具合悪い?饅頭も食べてないみたいだし…………大丈夫よくむちちゃん?」

竜希が心配そうな表情で妖夢の顔を覗き込もうとすると…………

「わ、私剣のしゅぶりをしてきましゅ!!」

妖夢の恥ずかしさが臨界点を突破したようだ。慌ててその場から離れてしまった。しかも思い切り噛むというおまけ付きでだ。

「よくむちちゃん…………マジにどうしゅちやっただらう?」

明らかに様子のおかしい妖夢を見て頭に『?』を浮かべながら大きく首を傾げる。

「竜希…………あなたそれ本気で言ってるのかしら?」

そんな竜希に…………幽々子が声をかける。普段のそれとは違う重い声色で。

「どういう意味かな〜幽々子さん?」

対する竜希はいつもどおりゆるい雰囲気で見返す。しかしその笑みには…………何か含みがあるように見えた。

「紫以上に掴めない人ねあなたは」

「それが俺の魅力ってやつだよ〜」

「まあいいわ。ただこれだけは言っておくわ。妖夢を無下にし続ける

というのなら……殺すわよ?」

夥しほどの殺気を竜希に向けながら冷たく言い放つ幽々子。冗談で言っているのではないと直ぐにわかる。

「殺す、ね?……あはははっ!残念だけど幽々子さんじゃあ無理だよ。俺を殺せるのは精々その気になったミコちゃんぐらいだ」

殺気をぶつけられているというのに、竜希はものともしていない。いつもの調子を……取り繕った仮面が崩れることはなかった。

幽々子では……竜希の命を脅かすことはできないようだ。

「でもまあ……よくむちやんのことを無下になんてしないさ。あの子は俺の大切な……『求め』なんだからさ。というわけで行ってきまゝす」

パクリと饅頭の最後の一口を口に放り込み、右手で幽々子にヒラヒラと手を振り、左手に妖夢への饅頭を持って竜希はその場をあとにした。

「ふふっ……どうやら私が言うまでもなかったようね」

幽々子は満足そうに微笑みを浮かべ、妖夢の手入れした庭を眺めながらお茶を啜った。

「ふっ……はっ!」

竜希から逃げ出した妖夢は屋敷の裏庭で素振りをしていた……まるで先程のことを忘れるためのよう。

そうして一心不乱に刀を振るう妖夢の耳に、パチパチと柏手を打つ音が聞こえてきた。

妖夢が素振りを止め、音のする方に顔を向けるとそこには……

「やっぱり良い太刀筋してるねよくむちちゃん」

ニコニコと笑顔を浮かべる竜希がそこにいた。

「た、竜希さん……」

竜希の姿を目にして動揺する妖夢。しかし先程まで素振りに熱中していたためか、先ほどよりは落ち着いている。

「でもまあ……ちよつち熱心しすぎだよ。ちよつと休んでこれでも食べなよ」

竜希は妖夢の分の饅頭を指しながら言う。

「あ、後でいただきますのでそこに置いておいてください」

「だくめ。そんなこと言うなら俺が食べちゃうよ。ミコちゃん特性の超絶品お饅頭。餡子が甘すぎないですっごい美味しいんだよね。こんなの早々食べられないよ」

「うっ……」

竜希の話聞き、妖夢は饅頭への欲求を抑えられなくなってきた。あそこまで言わせるのだから食べてみたくなるのは仕方がない。

しかしそれでもまだ妖夢の足が竜希の下へと進むことはなかった。

「はあ、全く……仕方ないね」

苦笑いを浮かべながらポリポリと頭を掻く竜希。

その刹那……妖夢の目から竜希の姿が消えた。

「……え？」

突然のことに呆ける妖夢。

そして竜希は……そんな妖夢の背後に回り込んでいた。

「はいよくむちちゃん。あ〜ん」

「みよん!？」

妖夢の後ろから饅頭を口元に持っていく竜希。しかもご丁寧に妖夢に逃げられないようにしっかりと肩を掴んでいる。対する妖夢はまさかあの一瞬で背後に回り込まれていたとは思わなかったようであり驚いている。

「ほらほら、早く食べないと本当に俺が食べちゃうよ」

「は、はい……頂きます」

……ここまできたら観念するしかない。妖夢はおずおずと差し出され

た饅頭に口をつけた。

「あ……美味しい」

「でしょ。もうホントお菓子作りにかけてはミコちゃん以上の奴はまずいないだろうね。ほらほら、もう一口」

「……ん」

竜希に言われるがまま饅頭を食べる妖夢。羞恥心さえも忘れる程に饅頭は美味いようだ。

結局妖夢は竜希に食べさせられる形で饅頭を完食した。

「よし、それじゃあ饅頭も食べ終わったことだし本題に入りましょうか」

饅頭を食べ終えた妖夢に、竜希がそう切り出した。

「本題……ですか？それって一体……」

「……よくむちちゃん」

竜希は妖夢の正面に回り込む。

そして……

「……この口紅。すごく似合ってるよ」

妖夢の唇に優しく触れながら、穏やかな笑顔を浮かべそう告げた。

「気づいていたんですか!? 一体いつから……」

「いつからって言われればはじめからだよ。でもなんていうかさ……ちよつと恥ずかしくて中々言い出せなかったんだよね」

竜希は若干頬を赤く染めながら言う。

普段表情豊かな竜希であるが、実はこうして赤くなるのは非常に珍しい。それこそ親友であるミコトでさえ見たことがないほどにだ。

「恥ずかしいって……ふふふっ」

「ちよ!? なんで笑うのさよむちちゃん」

「すみません。でもなんだかそういう竜希さんって珍しくてつい……」

「もう。でもまあ確かに珍しいかもね。きつと俺をこんなふうにしてしまうのは……よくむちちゃんだけだよ」

「……え?」

妖夢は竜希が最後に言った言葉の意味がわからずに、首を傾げる。

「あの……竜希さん？それって一体どう言う意味でしょうか？」
「……さて、どう言う意味だろうね？それじゃあ今日の分の修行に入りましょうか」

「なっ!?誤魔化さないください竜希さん!!」

「じゃあ俺に一撃入れたら教えてあげようかな」

「ハードル高すぎますよそれ!!ですが……いいでしょう!竜希さんに一撃入れて聞き出してみせます!」

「あつはは〜!やってみな〜!」

互いに抜刀し、竜希と妖夢は刃を交え始める。

(……ごめんな妖夢。お前が俺に勝てたその時に……必ず話すから)

妖夢の斬撃を捌きながら、竜希は心の奥底でそんなことを思っていた。

竜希と妖夢

近いようで遠く、遠いようで近い二人の距離

ただ、両者の心には……確かな想いが秘められていた

コラボ特別編 神無月神社と過去と未来を見通す巫女

第112話

ミコト……命の理解者である彼は同時に愛に生きる者でもあった

誰よりも愛情深く、誰よりも愛の尊さを知るミコト……だからこそ少女達はミコトに愛を向けているのであろう

にも関わらず、ミコトは自らに対する愛に気がつけない……否、気がつこうとしていない

なぜなら……ミコトは——を愛していないから

「……コト……ミ……コト」

「……」

「ミコトってば！」

「……ん？なんだ霊夢？」

「なんだじゃないわよ……さつきから声かけてるのに聞こえてないの？」

博麗神社の縁側で空を仰ぎながらぼんやりとしていたミコトに、霊夢が呆れたような様子で言う。

「……ごめん」

「珍しいな。ミコトがぼんやりするなんてどうしたんだぜ？」

神社に遊びに来ていた魔理沙がミコトに尋ねる。

だが……

「魔理沙……来てたのか？」

どうやらミコトはそもそも魔理沙の来訪自体に気がついていなかったようだ。

「来てたよ！っていうか気づかなかったのかよ!？」

「ああ……すまない。全然気がつかなかった」

ミコトは申し訳なさそうな表情を浮かべて魔理沙に謝罪する。

「気配に敏感なお前が気がつかなかったって……マジでどうしたんだミコト？体調悪いのか？」

「いや……別に」

いつものミコトらしくないと、心配する魔理沙にミコトはそう返す。しかし表情が優れないため、体調が悪くないとしても明らかに何かあるということは誰が見ても察することができた。

「……霊夢、俺ちよつと散歩してくる」

「ミコト……わかったわ。いってらっしゃい」

「行ってくる」

ミコトは霊夢と魔理沙に背を向け、散歩に出かけていった。

「……なあ霊夢。ミコトの奴どうしちゃったんだ？あの様子は明らかに普通じゃないぜ？」

「そんなことぐらいわかってるわよ。私はミコトと一緒に暮らしてるんだから。ここ最近はあるな感じよ」

「ここ最近はって……霊夢はミコトの様子がおかしい理由を知ってるのか？」

「知らないわ」

魔理沙の問いかけに霊夢は即答する。

「知らないって……知りたいとは思わないのか？」

「……そんなの思うに決まってるでしょ」

「だったら「でも……聞けないのよ」……え？」

霊夢は魔理沙の言葉を遮るように言う。

「あんなミコト初めて見るから……理由を聞いていいのかどうかわからないし、聞きづらいのよ。それに聞いたとしてもミコトのことだからきつと……」

「……『別に』とか『なんでもない』って言うんだろうな。実際さつき私が聞いたときそうだったし」

「なんだかんだでこの二人は幻想郷の中でもミコトとの付き合いは長いほうだ。ミコトのことはある程度わかってるらしい。」

「でもやっぱり気になるよなあ……なあ霊夢。ミコトがああなったのはいつぐらいからなんだ？」

「……守矢神社から帰ってきた時からよ」

魔理沙が尋ねると、霊夢は渋々といった様子で答える。

「おいおい……それってミコトがああなった原因は十中八九早苗にあるって事なんじゃないか？」

「……やっぱり普通はそう思うわよね」

「わかってるなら直接早苗に聞けばいいだろう？なんでそうしないんだ霊夢？」

「……癪だから」

「……は？」

魔理沙は一瞬自分の耳を疑い、素っ頓狂な声を上げた。

「霊夢……今私の耳が正常なら癪だからと聞こえたんだが？」

「そう言ったのよ。良かったわね。魔理沙の耳は正常よ」

「いやいやいや……お前な霊夢。気持ちはわからんでもないがそこは聞きに行こうぜ？ミコトがああなった原因知りたいだろう？」

「そりゃそうだけど……早苗にだけは頼りたくない」

「随分筋金入りなこと……ああもうっ！原因がわかってるなら我が儘言うな！ミコトがあんなで一番困るのはお前じゃないのか霊夢！」

魔理沙は口調を強めながら霊夢に言い放つ。

「魔理沙……そうね！ミコトをこのまましておくわけにはいかないわ！行くわよ魔理沙！」

「おう！」

意を決した霊夢は、魔理沙と共に守矢神社へと飛び立っていった。

「……………」

霊夢と魔理沙が守矢神社へと向かう一方で、神妙な面持ちで人里近くの森を徘徊するミコト。

ミコトの頭では今……………あの日の夜のことを何度も思い返されていた。

『ミコト先輩……………あなたを愛しています』

何十回、何百回……………いや、何千回もミコトの頭の中で反芻される早苗の告白。それはミコトを悩ませるものであった。

(早苗が俺のことを……………俺は一体どうすれば？そもそも俺は早苗を……………)

早苗はミコトにとって大切な後輩であり、自らを拒絶しなかった恩人でもある。そんな愛しているか否か問われれば……………ミコトは愛していると答えるであろう。

しかし……………ミコトにはわからなかった。

早苗に対するそれは大切な後輩、あるいは友人に対して向けられる『親愛』であるのか、それともかつて神楽に向けていた男女という性別の間に生じる『恋愛』であるのかどうか。

(早苗……………俺は……………)

あの日の夜、ミコトに告白した早苗であったがその場で答えを聞くとはしなかった。むしろ答えはいつでもいいと告げていた。

そんな早苗にどう答えるべきなのかミコトはあの日の夜からずっ

と考え続けていた。だが……今日に至るまで考えても答えが出ることはない。それどころか考えれば考えるほどに、自問自答するほどにどんどんとわからなくなっていく。

さらに……ミコトの悩みの種はもう一つあった。

(そもそもなんで……どうして俺は早苗の想いに気がつくことができなかつた?)

ミコトのもう一つの悩みの種……それはなぜ早苗の愛に気がつくことができなかつたのかということだ。

早苗が自らに向けた態度、行動……それらは冷静になつて思い返してみれば好意を寄せていたが故のものであつたということ。ミコトは今になって理解していた。

にも関わらず……なぜかつての自分はそれに気がつくことができなかつたのかがミコトにはわからないのだ。

(今ならわかるのに……なんであの時の俺はわからなかつたんだ? どうして早苗の気持ちに気がつくことができなかつたんだ?)

「俺は……どうして……」

「……知りたいかしら?」
「!?」

声が聞こえるのと同時に、突如としてミコトの目の前にスキマが現れる。そしてその中から……スキマを開いた張本人、八雲紫が出てきた。

「紫……」

紫の登場は予想外であつたらしく、ミコトは驚いているようだ。

「気配に敏感なあなたが気がつかなかつたなんて……それほど悩んでいるということかしら?」

「……その口ぶりからして事情は知つているということか?」

「あの時のことはこの目で見ていたから」

「相変わらず趣味の悪い……」

「ごめんなさいね。自覚はしているのだけれど……必要なことだから。それはそうとミコト……あなたは知りたいかしら? あなたがどうして自らに向けられた愛に気がつくことができなかつたの

かを」

紫はいつもの胡散臭い表情とは違う、神妙な面持ちでミコトに尋ねる。

「……紫はわかるっていうのか？その理由が」

「ええわかるわよ」

「なら……教えてくれ。一体どうして俺は……気がつくことができなかったんだ？」

「それは……私からは教えられない」

「どうしてだ？」

「私には荷が重いからよ。聞くのならば適した人物……彼女から聞いたほうがいいわ」

「彼女？それって……」

そこから先、ミコトの言葉が紡がれることがなかった。

なぜなら……ミコトはこの幻想郷から姿を消したからだ。

「……無理矢理でごめんなさいねミコト」

紫は先程までミコトの立っっていた場所に開かれたスキマを見つめながら呟いた。

「頼んだわよ……神無月の巫女」

「……」

気がつけばミコトはとある神社の前にいた。

その神社はミコトの知る幻想郷にはない神社だった。だがミコトはその神社のことを知っていた。

「……えっ？ミコトさん？」

背後から覚えのある声を耳にするミコト。

ゆっくりと振り返ると……

「葬……」

この神社……神無月神社の巫女、神無月葵の姿がそこにあった。

神無月神社、それは別次元の幻想郷に存在する地

この地でミコトは知ることとなる

自らがなぜ……愛に気がつくことができなのかわ

第113話

「……………え?」

「早苗……………お前今なんて?」

守矢神社に訪れた霊夢と魔理沙は、早苗の口から告げられたそれに呆然としていた。

「お望みならば何度でも言いますよ。私は……………ミコト先輩に告白しました。愛している」と

早苗はニコリと頬笑みを浮かべながら、再度あの日の夜にあったことを話す。

「……………」

おもむろに早苗の前に立つ霊夢。そして右手を振り上げ、早苗の顔をめがけてふり下ろそうとした瞬間……………

「ちよい待ち霊夢ちゃん」

突然現れた竜希に右手を掴まれ阻まれてしまった。

「……………竜希。なんであんたがここに居るのよ?」

「それは後で話すとして……………気持ちはわかるけどダメだよ霊夢ちゃん。さなちゃんにビンタなんて、そんなことする権利は君にはないでしょうよ?」

「でも……………」

「でもじゃない。いくらなんでもそれは理不尽すぎる。そもそもさなちゃんのこととは非難されることじゃあないしね」

「……………わかったわよ。ごめん早苗」

口調は変わらずとも真剣な表情の竜希に諭され、霊夢は早苗に謝罪しながら腕を下ろした。

「いえ、気にしないでください。私も霊夢さんの立場だったら同じことをしようとしたかもしれないし」

「ふ、二人共ヴァイオレンスだなおい……………」

霊夢と早苗の言動に思わず冷や汗を流す魔理沙。

「ところで竜希先輩はどうして守矢神社に?」

「俺はまあ霊夢ちゃん達と同じでミコちゃんの様子がおかしかった理

由をさなちゃんに聞こうと思ったんだけど……」

「だけどなんだぜ？」

「……ついさつき紫さんに会ってね。そのへんの事情は全部教えてもらった。まさかさなちゃんがミコちゃんのことを好きだったなんて全然気が付かなかつたよ」

竜希は苦笑いを浮かべながら言う。察しはいい方なので気づけなかったのは彼なりに動揺しているようだ。

「まあ隠してしまいましたので……神楽先輩は気がついていましたが」
「あ……なるほど。それでか」

竜希は意味ありげに呟いた。

「え？それでかって……どういうことですか？」

「いや、こつちの話だから気にしないで。それはそうとして本題に入らないとね」

「本題？」

「そ。俺がここに来た理由は紫さんから霊夢ちゃんに伝言を頼まれたからなんだよね」

「紫から伝言？」

「うん。全く紫さんは……絶対に霊夢ちゃんにどやされたくなかつたから俺に任せたんだろうな」

頭を掻きながらうんざりした様子で竜希はぼやく。

「霊夢にどやされるって……その伝言ってそれほどの内容なのか？」

「そりゃあもうね」

「どやさどやさないは聞いてから決めるとして、紫からの伝言ってなんなのよ」

「……ミコちゃん、しばらく留守にするってさ」

竜希はひどく言いにくそうに紫からの伝言を話した。

「は……ミコトがしばらく留守にするって……どういふことよ竜希！」

(うわ……やっぱりどやされたよ)

竜希を激しく怒鳴り散らす霊夢。予想通りのことに竜希は内心で凹んでいた。

「ミコトはどこにいるの！答えなさい竜希！」

ミコトを連れ戻そうと考えているのであろう。霊夢は竜希に居場所を聞いたです。

「迎に行こうとか思ってるなら無駄だよ霊夢ちゃん。ミコちゃんは今……この幻想郷には居ないから」

「ミコトさん、どうして……!?!」

どうしてここに居るのかとミコトに尋ねようとした葵であったが、その言葉は途中で途切れた。

なぜなら……聞く必要がなくなったからだ。

葵の持つ『未来と過去を見る程度の能力』……その力が発動し、ミコトの過去からを見てなぜ神無月神社に訪れたのかを知ったのだ。

「葵、お前は……」

「とりあえず神社の中に入りましょう。お茶を出しますので」

「……わかった」

ミコトが何かを言おうとするのを遮るように、葵は頬笑みを浮かべてミコトに告げる。

ミコトは葵に促されるままに神社の中へと入っていった。

葵に連れられ、神社の居間に赴いたミコト。そこには二人の人物がいた。

「お前は……ミコト?」

二人のうちの一人……金髪紅眼の少女、ルカがミコトの姿を見て不思議そうな表情を浮かべる。

「葵、なぜミコトがここに?」

今度は陰陽師の服を着て九の尻尾と狐耳を持つ女性、この神社の神である鬼灯が葵に尋ねる。

「ミコトさんはいさつき神社の境内で会ったの。それでお茶を出そうと思つて」

「……そうか」

鬼灯に説明する葵であるが、その内容には肝心なミコトが神無月神社に訪れた理由がない。

忘れていたのではなく、これはわざとであり、そのことに気がついている鬼灯は深くは追求しなかった。

「それじゃあミコトさん、お茶を淹れてきますので待っていてくださいね」

「ああ。ありがとう」

お茶を淹れに行く葵を見送った後、ミコトは居間に入って腰を下ろした。

「……」

「どうしたルカ?俺の顔になにか付いているか?」

ミコトはじつと自分を見つめてくるルカに尋ねた。

「……別に。なんでもない」

「そうか」

(……やはり警戒されてるか)

なんでもないと答えるルカであるが、ミコトはルカの考えに気がついていていた。

ルカは基本的に疑り深い。初対面でないにしろ、彼女にとってミコ

トは他人。それこそ神無月神社に訪れた理由もわからないので警戒するのは無理もないことであつた。

もつとも、ミコトの纏う雰囲気は葵のそれに近いこともあり、普段よりもその警戒心は薄いのであるが。

「とりあえず葵が来るまで時間を潰そう。ミコト、お前は碁か将棋は打てるか?」

「どっちもできるよ」

「では将棋にするか。相手をしてくれるか?」

「ああ。俺でよければ」

ミコトの承諾を受け、鬼灯は将棋の準備を始めた。

「お待ちせしました……あ、ミコトさん鬼灯と将棋打ってるんだ」

お茶を持って居間に戻ってきた葵の目に、将棋を打つミコトと鬼灯姿が映る。

ただ……その光景は少々異様であつた。

「……ねえルカ、将棋ってあんなに早く打つものだったけ?」

ミコトと鬼灯の駒を打つスピードはあまりにも早い。相手が打つたらかさず自分も打つといった感じで考える時間など殆どなかった。

「まあそう思うのも無理ないか。普通にやるのもアレだからって一手一秒ルールで打ってるらしい」

「一手一秒って……それで将棋って成り立つの?」

「普通は無理だな。あそこまでいくと凄いを通り越して軽く呆れる」

とんでもルールであるにもかかわらず平然と将棋を打つ二人を見て、葵とルカは思わず苦笑いを浮かべていた。

そうこうしているうちに……二人の対局は終わりを迎えた。

「……………参りました」

鬼灯に頭を下げ、自らの負けを宣言するミコト。

「ふむ。楽しい対局だったぞミコト。ただ……………」
「ただなんだ鬼灯?」

「……………随分と雑念が目立っていたな。なにか別のことで頭が一杯になっているように思えたぞ?」

「……………」

鬼灯が言うと、ミコトは神妙な面持ちで口を閉ざす。それは凶星である何よりの証明であった。

「ミコト、お前は……………」

「そ、それよりもお茶にしよ鬼灯!」

「……………そうだな。せつかくのお茶が冷めてしまう」

半ば強引に話を中断させて鬼灯にお茶を差し出す葵。その挙動は明らかに不自然であったが、鬼灯は話をやめてお茶を受け取った。

「ミコトさんもうぞ」

「ああ。急でなければお茶菓子の一つでも作ったんだが……………」

「大丈夫ですよミコトさん。お気持ちだけで嬉しいですから」

申し訳なさそうに言うミコトに対して、葵は笑顔で言う。

「急でなければか……………元々ここに来る予定はなかったんだな?」

ルカが訝しげな表情でミコトに尋ねた。

「ああ。紫のスキマで突然な」

「そっちの紫がか……………まあそんなことするのはあいつぐらいか。どの世界でも厄介な奴だな」

「それに関しては激しく同意する」

紫に対して愚痴を言うルカにミコトも同感のようだ。

「だがミコト、そうならどうやって向こうに帰る?」

「まあ紫からの迎えを待つしかないんだが……………」

鬼灯に返事を返すが、明らかに言いよどんでいる。

当然であろう。なにせ……………その迎えというのがいつ来るのかはミコトにはわからないのだから。

「もし今日中に迎えが来なかったらどうするんだ?」

「その時はまあ野宿するつもりだが……」

「野宿なんてダメですよミコトさん！いくらミコトさんが強くても幻想郷で野宿なんて危ないです！」

葵は少々声色を強めてミコトに言い放つ。

「まあ妖怪が彷徨いてる中で野宿は確かにな」

「ミコトなら大丈夫だろうが、襲ってくる妖怪は大量にでてくるだろう」

ルカと鬼灯もまた、葵と同じ気持ちのようだ。

「と言われても……それ以外思いつかないし」

「でしたらミコトさんさえよければうちに泊まりませんか？」

「え？俺としては助かるが……いいのか？」

「はい。もちろんです」

ニツコリと眩しいほどの笑顔を浮かべながら葵はミコトに言う。

「そうか……ならそうさせてもらうよ。ありがとうな葵」

「いえ。お気になさらず」

こうして、ミコトは紫からの迎えが来るまで神無月神社に泊まることになった。

第114話

「この幻想郷には居ないって……まさかミコトは」

竜希の発言から、霊夢はミコトの居るところを察したようだ。

「多分霊夢ちゃんの予想通りだよ。ミコちゃんは今……神無月神社にいる」

「……やっぱり」

どうやら霊夢の予想はあたっていたようだ。

「神無月神社？」

「どこだそこ？私は知らないぜ？」

神無月神社のことを知らない早苗と魔理沙は首を傾げている。

「二人が知らないのも無理ないね。神無月神社は別次元の幻想郷に存在する神社だから。知ってるの実際に行つたことがあるごく一部の人のみだ」

「別次元の幻想郷……それっていわゆるパラレルワールドのようなものということでしょうか？」

「まあそう捉えてもらって構わないよ」

「パラレルワールド？なんだぜそれ？」

「パラレルワールドというのは……」「なんで？」……霊夢さん？」

魔理沙にパラレルワールドの説明しようとする早苗であったが、それは霊夢の声によって阻まれてしまった。

「なんでミコトが……神無月神社に？」

「それはまあ……知らなければならぬからだよ。自分の……欠陥を」

「欠陥って……どういう事だぜ竜希？ミコトの欠陥って一体……？」

どうやらミコトの抱える欠陥がわかっていないらしい魔理沙が尋ねる。

「今のミコちゃんにはね大きな欠陥がある。その欠陥が原因でミコトは自身に向けられた愛に気がつかないで……さらに言うと

愛されていることを理解できても心がそれを自覚できていない状態にあるんだ」

「理解できても自覚できない……?」

竜希の言っていることの意味を理解できずにいる魔理沙。早苗もまた魔理沙と同じで分かっていないようであるが、唯一かつて竜希からミコトの欠陥を聞かされていた霊夢だけは悲しげな表情を浮かべていた。

「そのせいで実はミコちゃんは非常に危険な状態にあるんだよ。今まではかろうじてだけけど大丈夫だったから自分で気がつかせるために放っておいたんだけど……今はそうも言ってもらえない状況でね」
「そうも言ってもらえない状況って……もしかして私が告白したことが原因なんですか?」

恐る恐ると竜希に尋ねる早苗。ここ最近で原因となることとなるとミコトへの告白以外にはないので、そう思い至るのも無理はないだろう。

「……そうだよ。さなちゃんを責めるつもりはないけど原因は間違いないくさなちゃんが告白したことだ。それが原因でミコちゃんは悩んでしまい、どうすべきなのかを見失ってしまっているんだ。だからこそ……ミコちゃんは紫さんに神無月神社に連れて行かれたんだよ。あの子から自分の欠陥を教えられるためにね」

「……そのあの子というのは?」

「……神無月葵。神無月神社の巫女で……ある意味では誰よりもミコトに似てる存在よ」

早苗の問いかけに、どこか憂いを帯びたような表情で霊夢が答えた。

「すみません、ミコトさん。お客さんなのに手伝わってもらってしまつて……」

「いいや、気にするな葵。俺が好きでやっていることだからな」

現在ミコトは葵と共に、神無月神社の裏手にある畑で作業をしていた。

初めはお客であるミコトにそんなことはさせられないと言っていた葵であったが、それでは自分の気がすまないと半ば強引にミコトが頼み込んだ結果、こうして二人で畑作業をすることになったのだ。

「本当にありがとうございます。それにしても……随分と手際がいいですね」

先程からスムーズに作業をこなすミコトを見ながら言う葵。確かにミコトの手際は非常にスムーズで、とても素人とは思えないほどであった。

「まあたまに幽香や美鈴の手伝いをしていたからな。そのおかげで慣れているんだよ」

幽香も美鈴も花の世話をしている。その手伝いをしていたおかげで畑仕事はある程度こなせるようになっていようだ。

「幽香さんと美鈴さんの……あの二人の育てたお花は綺麗ですよね。私大好きです」

「俺もだよ。でも……この子達も負けてないよ」「え?」

畑の野菜に触れながら頬笑みを浮かべて言うミコト。対して葵はコテンと首を傾げた。

「この子達の命……凄く生き活きとしている。なんか嬉しそうって感じがして……葵達が愛情を持って育てているっていうのがよくわかるよ」

「ミコトさん……ありがとうございます。そう言っていただけでと凄く嬉しいです」

葵はニツコリと笑顔を浮かべた。

「別にお礼を言うようなことじゃないさ。さて、あと少しで終わる

し、もう一頑張りだな」

「そうですね」

葵が返事を返すと、二人は畑作業に戻った。

「……鬼灯、お前はどう思う？」

ミコトと葵が畑仕事をしている一方で、神社に残ったルカが同じく残っていた鬼灯に尋ねた。

「どう思うとはミコトのことか？それとも……葵のことか？」

「どっちもだ」

「まあそうだろうな。ふむ……まずミコトについては本人は悟られないようにしていつもりであるだろうが不安定な状態にあるのは間違いない。何か悩んでいるのだと感じた」

先ほどミコトと将棋をさしていたからだろう。鬼灯はミコトが悩みを抱えていることには気がついてきたようだ。

「そうだろうな。でなければ向こうの紫がわざわざこっちに……葵のところにはミコトを超越すはずがない。問題はミコトが何に悩んでいるかだが……」

「それこそルカの能力でわからないのか？」

「無理を言うな。別にミコトは私達に嘘をついているわけじゃあないんだからわかるはずないだろ」

ルカの能力の中に『嘘を見破る程度の能力』というものがある。これは相手が嘘をついていたとき、本音が聞こえてくるというものである。

これは相手の心内を見抜くことに長けた能力であるといえるが、それでもあくまでも見破ることができるのは相手の嘘のみで相手の隠し事を見破ることができるわけではない。

今回ミコトは心内を悟られぬようにしてはいたが一切嘘を言っているわけではない為、ミコトの心内を知ることができずにいた。

「それもそうか。知っているとしたら葵なのだが・・・」

「その肝心な葵が明らかに隠そうとしてるからな」

確かに相手の過去を見ることができ葵ならばミコトの心内を知っていてもおかしくはない・・・というよりも実際に葵はミコトが何に悩んでいるのか、そしてなぜ神無月神社に来たのかを知っている。

しかし・・・葵はそれを意図的にルカと鬼灯に知られないようにしている。事実、その話になろうとしたら葵は半ば強引に話題を変えようとしていたのだから。

「だがまあ葵のことだ。何か考えがあつて私達に知られないようにしているんだろう」

「そうだな。おそらく心配する必要はないだろう。ミコトのことは葵に任せて私達は成り行きを見守るとしようかルカ」

「そうだな」

こうして、ルカと鬼灯はミコトのことは葵に任せることにした。

「ふう・・・」

夕食と風呂を終えて葵達が寝静まった頃、ミコトは神無月神社の縁側で物思いにふけりながら煙管を吸っていた。もちろん葵達から事前に許可はとつてある。

そんなミコトに・・・声をかけるものが一人。

「クスクス、中々良い煙管を持つてるのね♪」

上機嫌そうに笑い声を上げながら何の前触れもなく姿を現したのは黒のゴスロリ服を身に纏い、美しい黄金の髪をなびかせる少女。

この幻想郷の賢者の一人にしてスカーレット家の始祖……レティシア・スカーレットであった。

「ああ。俺のお気に入りだからな」

突然現れたレティシアに、ミコトは煙管を指で弄びながら平然とした態度で返事を返した。

「クスクス、驚かないのねミコト♪」

「俺の能力はわかってるだろ？よほどのことがない限り気がつかないなんてことはないよ」

「クスクス、今はそのよほどのことがあなたにあつたから気がつかないと思つたわ♪」

「……」

レティシアの発言に、ミコトは表情を険しくさせる。

「……どこまで知ってるんだレティシア？」

「クスクス、さあどこまでかしらね♪」

口元に手を当て、意味深に笑みを浮かべながら言うレティシア。

「はあ……その様子じゃ全部わかってるんだな。まああんたのとだから当然といえば当然か」

「クスクス、褒め言葉として受け取っておくわ♪それはそうと……あなた大丈夫なの？」

まっすぐとミコトを見据えながら尋ねるレティシア。その表情からは先程までの笑みは消えており、真剣そのものであつた。

「どうせ隠しても無駄だと思ふから白状するが……あまり大丈夫ではないな。早苗になんて返事を返すべきなのか……そもそもなんで早苗の気持ちに気がつけなかつたのか。俺は……俺にはわからない」

額に手を当て、苦悩を顔にするミコト。その姿は酷く弱々しい。

「そう……」

「レティシア……お前ならわかるか？俺がなんで早苗の気持ち

に……早苗の愛に気がつくことができずにいるのか」

「……ええ。知っているわ」

「なら、それを俺に……」
「ダメよ」……「え？」

ミコトが最後まで言い終えることなく、レティシアはキツパリと拒否した。

「私では……ダメよ。それは葵の役目だから。その為にそっちの紫はあなたを神無月神社に寄越したのよ。それぐらいのことはあなたにもわかるでしょ？」

「……ああ、わかっているさ。でも葵は……葵は教えてくれない。俺の過去を見たはずだから事情は理解しているはずなのに葵は……何も教えてくれない」

「ミコト……それは葵に考えが……」

「わかってる！葵には葵に考えがあるっていうのはわかってる！でも……でも俺は……!!」

声を張り上げ、怒鳴りつけるミコト。その姿は普段の彼とは明らかに違う。余裕など全く感じられなかった。

「……こんな姿をしても私は長い時を生きているわ。だからあなたの苦悩は……少しは理解できている。だからこそ……焦ってはダメよミコト。葵が信用に足る子だということはわかってるでしょ？あの子のことを信じてあげなさい」

「レティシア……そうだな。葵を……信じるよ」

優しい口調で、レティシアはミコトを諭すと、ミコトは落ち着きを取り戻した。

「取り乱してしまつてすまないレティシア」

「クスクス、気にしなくてもいいわよ♪あなたには借りがあるもの♪」
いつもの調子に戻ったレティシアが言う。

「借り？覚えがないんだが……」

「クスクス、あなたは狂気に囚われた二人を助けてくれたじゃない♪」
「だがあのレミアとフランはお前の妹じゃ……」

「クスクス、たとえ世界は違つても二人が『レミア・スカーレット』と『フランドール・スカーレット』であることにはかわりないわ♪だ

から十分な借りになるのよ♪」

「……そうか。レティシアらしいな」

「クスクス、それはどうも♪それじゃあ私はもう行くわね♪またねミコト♪」

「ああ。また」

溶けるように闇夜に消えていくレティシアを、ミコトは手を振りながら見送った。

「……ありがとなレティシア」

聞こえるかどうか定かではないが、レティシアに対して礼を述べるミコト。

そして煙管を咥え直し、夜空を仰いだ。

第115話

「はあ……」

ミコトが紫に神無月神社に連れて行かれた翌日、霊夢は気だるそうに縁側でお茶を飲んでいた。

「おくい霊夢、来てやったぜ」

「……なんだ魔理沙か」

「なんだとはなんだ。失礼な奴だぜ」

訪れた魔理沙に明らかに落胆した表情を見せる霊夢。対して魔理沙は実に不満そうだ。

「その様子じゃあまだミコトは帰って来てないみたいだな」

「ええ……本当に早く帰ってこないかしら？」

「まあ同感だな。ところで霊夢、聞きたいことがあるんだが……」
「なによ？」

「……結局ミコトの欠陥っていうのはなんなんだ？」

いやに真剣な表情で霊夢に尋ねる魔理沙。

実は魔理沙は昨日の話でミコトに何らかの欠陥があるということを知っていたが、その欠陥がなんなのかは最後まで聞けずじまいであつたのだ。

「……ミコトは——ないのよ」

「え？」

霊夢から告げられたミコトの欠陥……それは魔理沙にとって予想外なものであつたらしく、キョトンとしていた。

「だからミコトは……自分に向けられた愛に気がついていないのか？」

「そうよ。誰にだつてある……私にもあんたにもある感情がミコトには一切ない。だからミコトは自分への愛に気がつくことができない。もつと言えば自分のことをやたらとないがしろにするのも同じ理由なんでしょうね」

「……霊夢はそのことを知っていたのか？」

「ええ。といつても竜希に教えてもらったのだけどね」

「ならなんでお前がミコトに教えてやらなかったんだ？」

魔理沙の意見は尤もであった。霊夢はミコトにとつて誰よりも身近な存在。欠陥があるというのなら教えるのが普通であるだろう。

「それは……本来ならそれはミコトが自分で気がつかなければいけないことだからよ。自分で気がついて……治さなければいけないことだから。だから私は教えなかったの」

「でも……ミコトはその欠陥を教わりに神無月神社ってところに居るんだろ？それはいいのかわ？」

「良くはないと思うわ。でも竜希が言うには今のミコトはかなり危険な状態らしいから仕方がないんだと思う。それに……教えるのは葵だし」

「葵ならいいっていうのかわ？どうしてだ？」

「葵は……ミコトに似た存在だから。それに……あの子は自分の能力でミコトの過去を知っている。竜希を除けばミコトがあつた原因を誰よりも理解できているからミコトに言い聞かせるなら葵が適任なんだと思うわ。でなければ紫がわざわざミコトを神無月神社に送るわけないし」

「そうか……ならいいが」

霊夢から説明を受けた魔理沙であつたが、まだ釈然としないという様子であつた。

「大丈夫よ。葵に任せておけばきつと……」

「随分と信頼してるんだな。会つたのって一回だけなんだろう？」

「ええ。大して話もしてないけど……不思議と信用できる子だから」

「……ふくん」

魔理沙はどこか不機嫌そうにムツとした表情を浮かべた。

「そんな変な顔してどうしたのよ魔理沙？」

「変なのは生まれつきだぜ。それよりも私にもお茶」

「はいはい。湯呑持ってくるから少し待ってなさい」

魔理沙に告げると、霊夢は台所に湯呑を取りに向かった。

「……霊夢の親友は私なのに」

不貞腐れるように呟いた魔理沙の声は、霊夢の耳に届くことはなかった。

「ミコトさん、ちよつとお願いがあるんですけどいいですか？」

朝食を終えて、ミコトが葵と二人で洗い物をしている時に、葵がミコトに声を掛けた。

「お願い？なんだ？」

「その……今日ちよつと行くところがあつて。それでミコトさんについて来て欲しいんですけど……ダメですか？」

恐る恐るとミコトに尋ねる葵。その心内では断られてしまうのではないかと不安に駆られていた。

「というのも、もしも断られてしまえば……また別のきっかけを考えなければならぬからだ。」

「行くところか……いいよ。俺でよければ」

微笑みを浮かべながらミコトは快く承諾した。

「本当ですか？ありがとうございます」

「それじゃあ早く洗い物を終わらせちゃおうか」

「そうですね」

二人は洗い物をするスピードを早めた。

「と、そういうえば葵、今どこに向かつてるんだ？」

洗い物を終えて、葵に後ろからついて行くミコトがふと思い出したように尋ねた。

「……普通は出発する前に聞くものであるのだがそこには今は触れないでおこう。」

「はい、今向かつてるのは香霖堂ですよ」

「香霖堂……霖之助のところか」

目的地を知ったミコトは少々複雑そうな表情を浮かべた。

その理由はミコトが幻想郷に来たばかりの時にあったあの出来事……霖之助に告白されてしまったことが原因であろう。

「あはは……やっぱり霖之助さんのことは苦手ですか？」

能力でそのことを知っていた葵が苦笑いを浮かべながらミコトに尋ねる。

「まあちよつとな。悪い奴じゃないし数少ない男の知人だから嫌いというわけじゃないんだが……あのことが頭から離れない」

「え、えつと……心中お察しします」

思わず頭を抱えそうになるミコトを励ます葵。どうやらミコトにとってはあの時のことはトラウマになりかけているようだ。

「ありがとう葵。それはそうと香霖堂に何の用があるんだ？」

「はい。以前お手伝いすると約束しましたのでそれで」

「なるほどな」

「すみません。本当に私一人で行くべきなんでしょうけど……その……」

「気にしなくてもいい。泊まらせてもらってるんだからそれくらいのことには喜んで手伝うよ。気分転換にもなるしな」

何かを言おうとするが、中々話せずに口ごもってしまう葵に気を遣わせないようにと命は言う。

「ありがとうございます。あ、着きましたね」

そうこうしているうちに、どうやら香霖堂に到着したようだ。

「香霖堂……他の所もそうだけどやっぱりこっちの幻想郷とは建物とか雰囲気は同じなんだな」

「次元は違っても幻想郷であることは変わらないですもんね。それじゃあ入りましょう」

「そうだな」

二人は香霖堂の中に入っていった。

「やあ、葵。こんにちは」

「こんにちはは霖之助さん」

店内の椅子に腰掛けて読書をしていた霖之助は、葵の姿を見るやいなやすぐに微笑みを浮かべて挨拶した。対する葵も嬉しそうに挨拶しかえす。

「おや？君は確か……ミコト君だったかな？」

ミコトに気がついた霖之助は声を掛ける。

「ああ……久しぶりだな。霖之助」

「そうだね。こっちに來てたんだ」

「まあ……な」

霖之助と会話するミコトの態度はどこかぎこちなさを感じさせた。

「どうしたんだい？僕が何かしてしまったかな？」

「いや、そういうわけじゃなくて……」

「えつと……霖之助さん。ミコトさんはあちらの幻想郷の霖之助さんとその……色々あつて」

「色々つていうと？」

「……できれば聞かなくてくれると助かる。あまり思い出したくはないから」

「そっか……そういうことなら詮索はしないでおくよ」

氣を遣った霖之助は、それ以上の追求をやめた。

「それはそうと二人共今日はどうしたんだい？」

「はい。今日はお店のお手伝いをしに來ました」

「本当かい？それは助かるよ。それじゃあ色々頼みたいことがあるんだけどいいかい？」

「もちろんです」

「俺にできることなら」

「ありがとう。それじゃあまずほ………」

霖之助は二人に手伝いの内容を指示した。

「葵、ちよつといいかい？」

店の裏で霖之助は一緒に作業していた葵に尋ねる。

「……ミコトさんをここに連れてきた理由ですか？」

「うん。君がわざわざ他人を手伝いに連れてくるっていうことは何かあるんだよね？」

どうやら霖之助は葵になにか考えがあることを察していたようだ。

「はい。その……ミコトさんには教えなくてはならないことがあって。そのきつかけを作るために……」

「なるほど。そういうことか」

「すみません霖之助さん。巻き込んでしまったみたいで……」

「いや、気にしなくてもいいよ。僕としても少しでも君の力になれるって言うなら嬉しいからね」

ニツコリと微笑みを浮かべながら言う霖之助。その様子からどれだけ葵にぞっこんであるのかがうかがい知れる。

「霖之助さん……ありがとうございます。その代わりと言ってはなんですが頑張ってお手伝いします！」

「うん。こちらこそありがとう」

ともに笑顔を浮かべ合う葵と霖之助であった。

「よし、こいつはこんなもんかな？」

葵と霖之助が裏で作業している一方で、ミコトは店の商品の手入れをしていた。

香霖堂に置いてある商品の中には外の世界から流れ着いたものも多い。なので外の世界の住人であったミコトが手入れを請け負ったのだ。

もつとも、一つ一つの物の手入れの仕方をきちんと把握しているミコトの知識量があつたこそなのであるが。

(それにしても……あの二人上手くいつてるみたいだな)

ミコトは葵と霖之助のいる店の裏の方へと視線を向ける。その表情はとても穏やかだ。

(まあ仲いいのはなにより……つて、あれ？そういえば俺……他人のには気づけるのか?)

ふと、ミコトは疑問を抱いた。

自分に向けられた愛には気がつくことはできないにも関わらず、自分以外に向けられた愛には鋭く察することができると。

そのことに疑問を抱くのは当然のことであつた。

(俺って本当にどうなってるんだ？自分のことなのに……全然わからない)

顎に手を当てながら神妙な面持ちで考え込むミコト。

その時……店の扉が開く音がミコトの耳に入る。

「いらっしやいませ……つて、想起。それに……早苗？」
店に訪れたのは想起と早苗であつた。

「……ミコト？どうして香霖堂……というかこっちの幻想郷に？」

「いや、俺はまあ色々あつてな……」

「色々か……まああまり詮索はしないでおくよ。でも君がこっちに

いることは葵達は知ってるの?」

「ああ。というより神無月神社に泊まらせてもらったからな。葵も今霖之助さんと店の裏にいるし。そういえばお前昨日から神無月神社に居なかつたけどどこに居たんだ?」

今更になって昨日から想起が神無月神社に居なかつたこと気がついたミコトは想起に尋ねる。

まあ気がつかなかったのはミコトにそれだけの余裕がない状態であつたからだが。

「それはその……昨日は守矢神社に泊まらせてもらったからね／＼」

若干顔を赤らめて照れくさそうにして早苗を見ながら想起は言う。

(想起……もしかして早苗と?)

「あの想起さん。こちらの方はどなたですか?」

想起に尋ねる早苗。前回ミコトがこちらの幻想郷に赴いた際に直接会っていないらしく、ミコトのことを知らないようだ。

「彼は一夢命。別次元の幻想郷の博麗神社に住んでる人だよ」

「そうなんですか。よろしくお願いしますミコトさん」

「あ、ああ。よろしく」

「どうかしましたか?」

どこか様子がおかしいように見受けられたらしく、早苗はミコトに尋ねた。

「その……早苗にそう呼ばれるのはなんか慣れなくてな」

本当は他にも理由が……早苗に告白されたからというのもあるのだがそれは言わなかつた。

「慣れてないって……そちらの私はなんて呼んでいたんですか?」

「ミコト先輩って呼ばれていたよ。俺は外の世界から幻想入りしてきたんだけど早苗は外の世界での俺の後輩だったからさ」

「そうだったんですか。なんだか不思議な感じがします」

クスリと笑みを浮かべながら早苗は言う。

「まあそうだな。気持ちはわかるよ。ところで二人はどうしてここに?」

「まあちよつと近くを通りかかつてね。ここには外の世界のものもあるから早苗に何かプレゼントしようかなと思って」

「本当にありがとうございます。ごさいます。想起さん」

「うん。気にしないで早苗」

本当に嬉しそうに想起に礼を言う早苗。対して想起も釣られて嬉しそうに笑顔を浮かべた。

「プレゼントか……なあ想起」

「何ミコト？」

「もしかして……お前と早苗って恋人同士なのか？」

「えっ!?そ、それは／＼／＼」

ミコトが尋ねると想起も早苗も顔を赤らめてもじもじしていた。

「あく……その反応でわかったよ。仲睦まじいことだなによりだ」

ミコトはニヤニヤといやらしい笑みを浮かべながら二人に対して言う。

「なっ!?か、からかわないでよミコト!」

「はははっーごめんごめん。でもまあ……早苗のことちゃんと幸せにしてやれよ想起。早苗も……想起を支えてやれ」

「……うん。わかってるよ」

「もちろんです」

ミコトが先程までとは違う、穏やかで優しい笑顔を浮かべて諭すように告げると、想起と早苗は真剣な表情で返事を返した。

「……ならいい。さて、野暮はここまでだな。俺は引っ込んでるか二人は商品を見てろ。買うものが決まったら霖之助呼んでくるから」

「うん。ありがとうミコト」

ミコトに礼を述べ、想起は早苗と店の商品を見て回った。

ミコトはその光景を微笑ましそうに見つめるのであった。

第116話

「……………」

「竜希さん、こんなところで横になつては風邪を引いてしまいますよ？」

白玉楼の庭で仰向けになりながら物思いに耽る竜希に、妖夢が声を掛けた。

「……………よくむちちゃん。君それはちよつとそれはマズイよ」

「マズイ？それはどういうことですか？」

目を手で覆いながら言う竜希に対して、妖夢はわけがわからないといった様子で首を傾げている。

「この角度からじゃ……………見えちゃうから」

「みよん!？」

竜希に言われ、妖夢は顔を真っ赤にしながらスカートを両手で押さえた。

「み、見ましたか？」

「……………ごめん。ちよつとだけ白いの見えた」

「わ、忘れてください！今見たものをすぐに忘却の彼方に消し去ってください!」

「わかつたよ。忘れるから少し落ち着きなよくむちちゃん」

酷く取り乱した様子で言う妖夢に竜希は苦笑いを浮かべながら宥めた。

「……………まあ実際は先ほど見た絶景を脳内メモリーに永久保存しているのだが。」

「うう……………そ、それはそうと竜希さん。聞きたいことがあります」

「ん？なに？」

「その……………ミコトさんの事なんですが」

「ミコちゃんの？よくむちちゃんがミコちゃんのことと俺に聞きたいことがあるなんて珍しいね。それで？ミコちゃんの何が聞きたいのかな？」

まさかミコトのことを聞かれるとは思わなかったらしく、一瞬驚い

た表情をする竜希であったが、すぐにいつもの緩い笑顔を浮かべて妖夢に尋ねた。

「はい……ミコトさんは今自分に向けられた愛に気がつくことができずにいるんですよね？」

「どうやら妖夢は竜希にそのことを聞いていたらしく知っていたよ。うだ。」

「……うん。そうだよ」

「なら……自分の愛に関してはどうなんですか？もしかしてなんですけど……ミコトさんは自分が抱いた愛にも気がつくことができずにいるんじゃないですか？」

妖夢は神妙な面持ちで自分の考えを竜希に話す。

「……凄いなよ、むちゃん。よくわかったね。その通りだよ」

「どうやら妖夢の推察は当たっていたようだ。」

「確かにミコちゃんは今自分が抱いた愛にも気づけないでいる。それもミコちゃんの欠陥が原因だよ。もしもミコちゃんが気がついていたら……とつくに彼女と結ばれているだろうからな」

「どこか儂さを感じさせる笑顔を浮かべながら言う竜希。」

竜希は誰よりもミコトの幸せを願う。

それ故に竜希は……現状を嘆いているのだ。

「……やっぱりミコトさんのことは心配ですか？」

そんな竜希の内心を知ってか、妖夢が尋ねる。

「まあね……でも多分大丈夫だよ。ミコちゃんが向こうの幻想郷に行かされたのはきつと……そのことも関係あるだろうから。本当……早く気が付けばいいんだけどね」

「どこか含みのある笑顔を浮かべながら、竜希は冥界の空を仰いだ。」

「二人共、今日はありがとう」

「いえ、霖之助さんのお役に立てて良かったです」

「俺としても結構楽しかったしな」

霖之助は今日一日店の手伝いをしてくれたことに感謝の言葉を述べると、葵とミコトは微笑みを浮かべて返事を返した。二人にとって店の手伝いは苦にはならないようだ。

「本当に助かったよ。今日はいつもよりお客さんが多かったしね」

普段はあまりお客の来ない香霖堂であったが、この日は珍しく繁盛していたらしい。

「それはなによりだ。それにしても……」

「どうしましたミコトさん？」

「いや……こっちの幻想郷には幸せそうな奴が多いんだなと思ってな」

葵に問われ、ミコトは今日来た者たちの事を思い返しながら言う。

今日香霖堂に来た客は早苗と想起をはじめとして魔理沙と魔法士と呼ばれる存在の夢幸、紅魔館で共に働く咲夜と光冥。そして賢者、紫に仕える藍と茜の4組。

この4組は……いずれも互いのことを思い合っていた。

「ミコト君の居る幻想郷ではどうなんだい？」

疑問に思ったらしく霖之助が尋ねる。

「不思議なことに皆あまり男と関わり合いにならないからカップルなんて全然いな」

「そちらの世界で能力を持った男性ってミコトさんと竜希さん、それと霖之助さんぐらいですもんね」

「……今更だけど男女比おかしい気がしてきたな」

ミコトの疑問……それは本当に今更のものであった。

「あ、あはは……そ、それじゃあ霖之助さん私達はこれで失礼しますね」

「うん。それじゃあまたね葵。ミコト君も」

「ああ。また機会があればな」

挨拶を交わして、店を出ようとするミコトと葵。

その時、店に新たな来客……霊夢と歩が現れる。

「え？ミコト？」

「なんでミコトがここに？」

二人はミコトがここにいることに驚きを顕にする。

「……霖之助。今日は本当に客が多いようだな」

「そのようだね。僕としては嬉しい限りだけど」

「良かったですね霖之助さん」

「……俺と霊夢の疑問に関してはスルー？」

自分達を置いて勝手に話をする三人に、思わず歩はツツコミを入れた。

「ああ、すまない歩。なにせ同じリアクションを今日何度も見てきたからな」

「え？どういうことよそれ？」

「あはは……ミコトさんは今日会う人皆に同じこと聞かれたんだよ霊夢」

「なるほどね。それで？結局のところミコトはどうしてこっちの幻想郷にいるの？」

「……少し長くなるかもしれないが聞くか？」

「ならいいわ。面倒だし」

「……言うと思った」

面倒くさいという理由で聞くのをやめた霊夢。その反応は予想通りであつたらしく、ミコトと歩が同時に苦笑いを浮かべながら言う。

「そういう霊夢達はどうして香霖堂に？」

「私の巫女服の替えを取りに来たのよ。歩は私の付き添い」

「つまりデートを兼ねてるってことだね」

「なっ!？」

霖之助が言うのと、霊夢と歩は顔を真っ赤にさせる。どうやら凶星であるようだ。

何とも初々しい二人の反応は非常に微笑ましいと言える。

ただ……

「デート……か」

ミコトはそんな二人の姿を、複雑そうな表情で見ている。

「もう、霖之助さんったら……って、ミコト？ あんた何変な顔してるのよ？」

からかう霖之助に悪態をつく霊夢であったが、ミコトの様子がおかしいことに気がついて声を掛けた。

「……なあ、二人は恋人同士なのか？」

「あ、ああ。ついこの間から……な」

ミコトに問われ、照れくさそうに頬を掻きながら答える歩。その隣で霊夢はゆでダコのように顔を真っ赤にさせていた。

「……そうか。おめでどう」

二人が恋人同士だと知り、優しい微笑みを浮かべながら祝福するミコト。

だが……その表情とは裏腹に、心にはズキズキとした重い痛みを感じていた。

「それじゃあ俺はもう行くな。ここにいたら二人の邪魔になっちゃうだろうし」

そう言うやいなや、ミコトはそそくさと店の扉を通って外を出ていった。

「ミコト……一体どうしたんだ？ 様子がおかしかったような……」

「そうね……なんか変だったわね」

(ミコトさん、やはりあなたは……)

ミコトの様子がどこかおかしかったと首を傾げる霊夢と歩。その一方で葵は理由に心当たりがあるようだ。

「……私ももう行くね。ミコトさん待っているかもしれませんが」

「わかったわ。それじゃあまたね葵」

「うん。またね」

軽く手を振りながら、葵はミコトを追って店の外に出た。

「……………」

店を出てすぐ近くの木に体を預けるように寄りかかるミコト、その表情からは先程までの笑顔は消えており、どこか苛立っているようにも見える。

そんなミコトの脳裏には……………霊夢と歩の姿が浮かんでいた。
(なんなんだこの気持ち？なんで……………なんでこんなにもざわつく？なんで……………胸が痛む？どうして……………)

二人が恋仲だと知った瞬間に覚えた痛み。そして自分の中に芽生えた正体不明のナニカ。これまでに身に覚えのないその感情にミコトは戸惑っていた。

そんなミコトに……………葵が近づき声を掛ける。

「ミコトさん、大丈夫ですか？」

「……………大丈夫？何がだ？」

葵が何を心配しているのかがわかっていないミコトは、逆に葵に尋ねた。

「……………やっぱりわかっていないんですね」

「わかって……………いない？どういうことだ？」

「それは……………すみません。それだけはミコトさん自身で気がつかないといけないことですから教えることはできません」

葵は申し訳なきような表情を浮かべながらミコトに謝罪する。

「葵……………いや、気にしなくてもいい。葵がそう言うっていうことは……………俺が自分で気がつくことに意味があるって事なんだろうからさ」

ミコトは微笑みを浮かべながら言う。

本当は自分が何がわかっていないのかはなんとしても知りたかったであろう。だが……………それでもミコトは葵から無理にでも聞き

出そうとはしなかった。

それはひとえに葵のことを信じているが故……葵が自分で気がつかなければいけないというのならそうなのだろうと信じたからだ。

「本当にごめんさいミコトさん。でも……その代わりというわけではありませんがミコトさんが知りたがっていること……教え
ます」

「……え？」

「……神社に帰ったら話します。ミコトさんが自身に向けられた愛に気がつくことができない理由を」

ミコトの目を正面から見据えながら言う葵の表情は真剣のそのものであった。

ついに明らかなものになるミコトの欠陥

それは酷く悲しい欠陥であり……

酷く哀れな欠陥

第117話

ここは地獄……生前に罪を犯し、咎を背負う者が死したときに訪れる光さえ届かぬ世界。

そんな地獄に……闇と見間違うほどに美しき一人の少女が我が物顔で佇んでいた。

「難儀なものだな。深い愛を持つにも関わらず……自身は愛に気がつけないとは」

少女は憂いを帯びた表情で呟きながら、煙管を取り出して火をつける。

「まあ、それもこれも全ては私の責任。私が奴に架してしまった呪い……そのせいで——を愛せなくなるとは滑稽この上ない。こうなることはわかっていたというのにな」

自嘲気味に笑みを浮かべながら紫煙をくぐらせる少女の頬には一筋の雫が伝っていた。

「神無月の巫女よ。どうかあいつを……ミコトを救ってくれ。私が唯一愛したミコトを」

祈るように目を閉じる少女の脳裏には誰よりも愛し、誰よりも自分を愛してくれたミコトの姿が映っていた。

「どうぞ」

「ああ……ありがとう」

葵に神無月神社の一室に連れてこられたミコトは、差し出されたお茶を受け取りながら礼を述べた。

ちなみにこの部屋にはルカも鬼灯も居ない。葵がミコトと二人で話をさせて欲しいと頼んだからだ。

「……………」
「……………」

ミコトと葵の流れる静寂。葵はどう話を切り出そうと思案しており、ミコトは葵の口から言葉が紡がれるのを待っていた。

そして……………その時が訪れる。

「ミコトさん……………今日香霖堂に訪れた人達を見てどう思いましたか？」

意を決して葵は話し始めた。

「どうって……………まあ幸せそうだなとは思ったよ。皆互いに想い合っているのはわかったしさ」

「そうですね。私もそう思います。皆さん大切な人と共にいて……………幸せそうにしています。ですが……………」

「ですが……………なんだ？」

「……………ミコトさん。あなたはそんな幸せそうな皆さんの姿を目にして少しでも羨ましいと思いましたが？」

「……………羨ましい？」

酷く悲しそうな目をする葵のその問いかけに、ミコトは訳が分からずにキョトンとした。

だが……………そうしていたのはほんの一瞬。ミコトは直ぐに気がついた。彼等を見ても……………羨望の感情が一切湧いてこなかったことに。

霊夢と歩の仲睦まじい姿を見て、妙な感覚に陥りはしたが……………それも羨望と言えるものではないのだ。

「もしも羨ましいと思えないとしたらそれは……………それもミコトさんの抱いた欠陥が原因です」

「俺の欠陥が……………原因？俺の欠陥って一体……………？」

「それは……………」

葵は一度言葉を止め、目を閉じる。

そしてしばらくして静かに目を開き……………ミコトに告げた。

「ミコトさん。あなたは……………自分を愛することができなくなっているんです」

「……え？」

葵の口から語られた自身の欠陥……それはミコトにとって全
くの予想外のものであったらしく、ミコトは呆然としていた。

なぜなら……

「俺が俺を……愛することができなくなっている？なんだよそれ
？そんなの……当たり前だろ？自分を愛することなんてできる
はずがない」

それは……ミコトにとっては欠陥とは思えない、当たり前前の
考え方であったのだから。

「……それは神楽さんを死なせてしまったからですか？」

「……ああ。俺のせいで神楽が死んだんだ。俺が居なければ神楽
は死ななかつた。神楽を死に追いやつた自分を愛せるはずなんかな
い」

淡々と……だが悲しげに語るミコト。その一言一言には自らへ
の憎しみさえ秘められていた。

自らを愛する……即ち自愛の心というのは本来誰にでもある
ものだ。

人は誰かを愛する前に、まず自分を愛する。そして自らの幸せを願
い、誰かを愛して誰かの愛を受け止める。もちろんそこに相手の幸せ
を願う心もあるであろうが……人とはまず自らの幸せを望むも
のであり、それが当たり前前の事である。

だが……ミコトにはそれが無い。正確にはかつてのミコトに
は……神楽を失う前のミコトには確かに自愛の心はあつたが、神
楽を死なせてしまったという自責の念からミコトは……自らを
憎み、自愛の心を捨てしまったのだ。

それによりミコトに欠陥が生じ……ミコトは自身に向けられ
た愛と自身が抱いた愛に気がつくことができなくなつてしまつたの
だ。

「ミコトさん……」

ミコトを見つめる葵。その表情は酷く悲痛なものであつた。

普段の葵ならば『なんでそんな悲しいことを言うんですか！』とミ

コトに言葉を投げかけるのであろうが……そうはしなかった。
なぜなら葵は……知っているからだ。

ミコトの過去を見たからこそ、神楽がいかにミコトにとって大切な人物であったのか、いかに神楽の存在がミコトにとって救いになっていたのかを葵は知っている。

だからこそ……そんな神楽を自らが原因で喪失してしまったミコトの計り知れに絶望を葵は理解してしまい、言葉を投げかけられなかったのだ。

だが……

「自分のことを愛せないことが欠陥だつて言うなら俺はこのままでもいい。それが俺に与えられた罰だつて言うなら甘んじて受けるさ。たとえ……一生このままだとしても構わない」

それでも……ミコトをこのままにはしておけないと、葵は強く思った。

自らの愛に気づけない……それは即ち、愛される幸せを享受することができないということと同意だ。

ミコトにとって神楽を死なせた自分とは憎むべき存在。故に自らの愛を無意識のうちに遮断し、自ら抱いた愛さえも目を逸らして自らを絶望へと追い込む。

葵はそんな絶望から……ミコトを救いたいと願った。

それはミコトの過去を知り、ミコトと同じく疎まれる苦しみを知り、そして……愛する物から愛される幸せを知った葵だからこそその思いであった。

「……ダメですよミコトさん。ちゃんと自分を愛してあげないと……ダメですよ」

ミコトを救うべく、葵は語りかけた。

「……そんなの無理だ。俺は俺を許すことができない。俺は自分を愛することなんて……」

「ミコトさんはもう十分すぎるほどに苦しみましたー！」

ミコトの言葉を遮るように、葵は声を張り上げて言う。

「十分すぎるほどに苦しんで！十分すぎるほどに自分を責めて！十分

すぎるほどに絶望を知りました！だから……だからもう自分を許してあげてください。自分を……愛してあげてください」「でも……」

「でもじゃありません！そもそも……そんなことを神楽さんが望んでいると思っっているんですか？自らを愛することができなくなっってしまったミコトさんを見て、彼女が喜ぶと思うんですか？」

「それは……」

言い淀むミコト。わかっているのだ……神楽がそんなことを望むはずも喜ぶはずもないということ。

「神楽さんだけじゃありません。他の皆だって……ミコトさんのことを知る人達だって誰一人そんなことを望みません。そうでなければ紫さんがあなたをここに連れてこなかったはずです。それに私だって……ミコトさんには自分のことを愛して欲しいと願っています」

「葵……」

涙を流しながら、必死にミコトに訴え掛ける葵。

そんな葵の姿を姿を目にし、ミコトは自分の胸が痛むのを感じた。

「……葵。もし霊夢達が俺が自分のことを愛していないって知ったら……今の葵のように考えると思うか？」

「当然です。ミコトさんは……あなたが思っている以上に多くの人に慕われているんですから。実際にミコトさんが自分を愛していないことを知っている人はいると思いますし……その人達はミコトさんのことをすくいたいと願っていると思います」

「……そうか」

ミコトは目を閉じ、幻想郷に住まう人々へと思いを馳せる。

一人、また一人とミコト脳裏をよぎるミコトの大切な仲間達。

もしもその者達を自らの欠陥が原因で悲しんでしまったとしたら……そう考えるとミコトの胸はズキズキとした重い痛みが広がった。

「葵……正直言つて俺は簡単には自分を愛することなんてできない。誰になんて言われようとも……自分への憎しみが消える

ことは多分一生ないと思う」

「ミコトさん……」

ミコトの自らへの憎悪は並大抵ではない。それほどまでに彼にとつて『神楽』という存在は大きいのだ。

ただ……

「でも、そのせいで誰かが悲しむとしたら……凄く辛い。皆にそんな思いはして欲しくないって心から思う」

自らの欠陥が原因で誰かが悲しむ……それはミコトにとつて耐え難いもの。そんな思いを他人に強いたくはないとミコトは強く思っていた。

「すぐには無理だと思う。でも……俺は俺のせいで誰かを悲しませたくない。だから俺は……自分を愛せるようになりたい」

誰かの為に自分を愛す……それは他者を慈しむミコトらしい考え方であった。

そもそも自分を愛するのは自分の幸せの為なのだからこの考え方はあまり適したものではないのだが……それでもミコトは自分を愛する道を選んだ。

自分を愛するきつかけとしては……十分であると葵は思った。

「教えてくれてありがとうな葵」

「いえ、私は私の言いたいことを言っただけですから。私こそ……偉そうなことを言ってしまひすみませんでした」

「謝ることなんてないさ。葵がああ言ってくれなかったら……俺は自分を愛そうだなんて思うこともなかったからな。本当に葵には感謝してもし足りない」

「言いすぎですよ」

クスリとミコトと葵は互いに微笑みを浮かべ合った。

自らを愛さぬというミコトの欠陥……それは簡単には治ることはない

だがしかし、たとえ少しずつであつても……

「まったく、随分と遅い迎えだな紫」

葵がミコトに欠陥を告げて数日後、ようやく紫がミコトを迎えに来た。

「ふつつ、ごめんなさい。少し整理する時間も必要だと思ったから」
あまり悪びれた様子を見せずに、紫は扇子で口元を抑えながらミコトに言う。

「……まあ俺を神無月神社に連れてきてくれたことには感謝してるから別にいいんだけどさ」

「それは何よりね。それじゃあ帰りましょ。霊夢達があなたの帰りを待ち遠しにしているわ」

「ああ、わかった。それじゃあ皆。俺はもう行くな」

ミコトは振り返り、見送りの為に集まった神無月神社の面々に向けて言う。

「何日も世話になったな。この礼はいつか必ずする」

「お礼なんていいですよ。ミコトさんには色々お手伝ってもらいましたし」

「泊まらせてくれたんだから手伝いぐらいは当然だ。それと礼は別の話だろ」

礼はいいという葵であったが、ミコトは頑なに引こうとはしなかった。

「なんていうか……ミコトのそういうところも葵に似てるな」

「確かにな。まあ好感は持てるからいいが」

「よく言えば律儀……だね」

ミコトの変な律儀さに、ルカ、鬼灯、想起は苦笑いを浮かべる。「というわけで、今度会ったときは誠心誠意込めて礼をさせてもらうから覚えておいてくれ」

「ミコトさん……わかりました。楽しみにしています」

とうとう観念した葵は、微笑みを浮かべながらそう告げた。

「それじゃあまたな」

「あ、待ってくださいミコトさん」

踵を返すミコトを葵は引き止める。

「なんだ葵？」

「ミコトさん……自分に向けられた愛もちろんそうですが、自分の抱いた愛にもちゃんと目を向けてくださいね」

「俺が抱いた……愛？それって……」

青いの言っていることの意味がわからずに聞きかえそうとするミコトであったが、それは叶わなかった。ミコトの足元に開かれたスキマに飲み込まれてしまったからだ。

「おいおい……随分と強引だな。戻ったらミコトに怒られるぞ？」

ルカがスキマを開いた張本人、紫にジト目を向けながら言う。

「大丈夫よ。ミコトのところに顔を出すつもりはないもの」

「……どの世界でも紫は紫ということか」

「褒め言葉として受け取っておくわ鬼灯。それじゃあ私も行くわ。

葵……ミコトのこと本当にありがとうね」

葵に礼を告げて、紫もまたスキマで自身の幻想郷へと帰って行った。

「行っちゃったね……葵、ミコトは大丈夫だと思う？」

想起は心配そうな面持ちで葵に尋ねた。

「……大丈夫。ミコトさんならきつと……私はそう信じてるから」

想起の問いかけに、葵は笑顔でそう答えた。

「紫の奴……本当に急だな」

「全くね」

博麗神社の境内に飛ばされ、紫に悪態をつくミコトは背後から聞き覚えのある者の声を聞いた。

ミコトが振り返るとそこには……霊夢が居た。

「霊夢……」

「何日も留守にしてくれて……この埋め合わせはちゃんとしてくれるんでしょね？」

「……ああ。もちろんだよ霊夢。俺にできることならなんでもする」「なんでも……ね。だったら」

霊夢はぎゅつとミコトの手を掴んだ。

「霊夢？」

「しばらくは……こうさせてもらうから」

そっけない態度で言う霊夢。だがどこか恥ずかしそうに頬を染めていた。

「……ああ。わかった」

そんな霊夢を見て、ミコトは霊夢の手を握り返す。

すると……ミコトは自身の胸が高鳴るのを感じた。

(……あれ？なんだこの動悸……どうして?)

ドキドキと心臓の鼓動は早くなり、体が芯から温まる感覚。

それはミコトに戸惑いと同時に……妙な心地よさを感じさせた。

「どうしたのミコト？」

「い、いや。なんでもない。それよりも少し話しをしようか。向こうであったこと色々と言夢にも話しておきたいし」

「わかったわ。それじゃあ神社の中に入りましょ」
霊夢が促すと、二人は神社の中へと入っていく。
その手はしっかりと繋がれていた。

閑話 第0話〈三幕〉

あらゆるものに愛され、何一つ愛することのなかった美しき少女、
紫黒神楽

そんな神楽が初めて抱いた愛

それは彼女の………破滅の始まり

(さて、今日もミコトに会いに行つてやるとするか)

早朝、学校に登校した神楽は荷物を机に置いて直ぐにミコトの居る
屋上へと赴こうとする。

心の中では偉そうな物言いをしているものの、その表情はどこか楽
しそうに見える。

そんな神楽に声を掛ける者が一人。

「ねえ紫黒さん。ちよつといいかな?」

声をかけたのはおそらく神楽のクラスメイトであると思われる少
年であつた。背は同年代の中では高く、容姿も優れている方だ。

「………なんだ?」

神楽はあからさまに嫌そうな表情をして応対する。無理もないで
あろう。神楽からしてみればその少年がどのような人物であろうと
も、鬱陶しいとしか思つていないのだから。

「いや、最近授業に出てないようだからどこに行つてるのかなと思つ
てね」

少年はニコリと笑顔を浮かべながら尋ねる。人あたりのいい笑顔
であるが、そんなものは神楽の不機嫌さをただ助長させるだけだ。

「どこでもいいだろう。貴様には関係ないことだ」

そっけなく返事を返し、その場から去ろうとする神楽。

しかし、少年はなおも神楽に語りかける。

「もしかしてなんだけどさ……あの男女と会ってるの？」

「男女？」

少年の問いかけに神楽はピクリと反応して足を止める。少年の言う『男女』は神楽にとって一人しか思い当たらないからだ。

「それはまさかミコトのことか？」

「そう、そいつのことだよ。その反応からしてやっぱりそうなんだね」「だったら何だ？それこそ貴様にはなんの関係もないことだろう？」

「確かに僕には関係ないけど……紫黒さん。あんな男女に会いに行くのはやめたほうがいいよ」

「……は？」

少年のその発言に、神楽は自分の中の何かが切れるのを感じた。

「どう言う意味だ？」

「だってあいつ気持ち悪いじゃないか。見てるだけで不快だし同じ空気を吸いたくないし。そんな奴に紫黒さんが会いに行く価値なんてないさ」

少年は笑顔を浮かべながらまるで空気をするかのように前にミコトを罵倒し、非難する。

そんな少年の態度は、言動は神楽にとって堪らなく腹立たしいものであった。

「あんなのに会いにくぐらいなら僕と一緒にいようよ。自分で言うのもなんだけど僕はそれなりに頭はいいし容姿もいいほうだと思ってる。僕なら紫黒さんの隣に立つのにふさわしいと思うよ」

神楽に手を差し出しながら言う少年。

その瞬間、神楽の中の何かがブチツと音を立てて切れた。

「……黙れ」

「え？」

「黙れと言っているんだこの三流モブが」

「ッ!？」

神楽は静かに、だが凄まじいほどの怒気を込めて少年に言い放つ。その神楽の纏う空気は酷く冷たく、酷く悍ましい。気圧されてしまった少年はガタガタと体を震わせていた。

「僕なら私の隣に立つのにふさわしいだと？モブの分際で一体貴様は何様だ。分をわきまえろ。私の隣に貴様の立ち位置など存在しないし未来永劫存在し得ない」

「う……あ……」

「挙句にミコトを……貴様にミコトの何がわかる。何も知りもしないであいつを侮辱することはこの私が許さん。少なくともあいつは貴様等よりよほど価値のある男だ。でなければこの私がわざわざ会いに出向くなどありえない」

神楽は知っている。ミコトという男の優秀さと価値を。ミコトは神楽が認めた数少ない人物の一人であるのだ。

「もう二度と、金輪際私に近づくな。貴様の顔など見たくもない」

神楽は吐き捨てるようにして言うと、少年に背を向けてその場から立ち去ろうとした。

「ま、待って神楽さん……」

そんな神楽を勇気を振り絞って引きとめようとする少年。だがしかし、それは火に油を注ぐ行為にほかならない。

神楽は振り返り少年に向かって止めの一言を浴びせる。

「気安く私の名を呼ぶな……ケスゾ？」

「ヒッ!？」

神楽が尋常でないほどの殺気を込めて言うと、少年は耐え切れなくなりその場にへたりこんでしまった。

そんな少年を全く意に返すことなく、神楽はその場から去っていった。

(ああ腹立たしい。イライラする。なんだこの気持ちとは?)

ミコトのいる屋上へと向かう道中、神楽は自分の中のドス黒い感情が大きくなるのを感じていた。

(どいつもこいつもミコトのことを蔑んでいるんだと思うと……憎らしい。全て消してしまいたくなる)

廊下にいる生徒達を見ながらそんな感情を抱く神楽。

元々極度の人間嫌いであった神楽だが、流石に消してしまいたくなるほどではなかった。神楽をそこまで駆り立てるのには、他の誰でもないミコトが原因であった。

神楽にとってこれまでの人生で竜希という例外を除いてただ一人認めた存在であるミコト。そのミコトがあらゆる存在から蔑まれているという現実、神楽にこれまでにないほどの怒りを覚えさせている。

(なぜだ? 私はなぜこんなにも苛立っている? こんな気持ちは初めてだ……一体どうして?)

言いようのない苛立ちを胸に抱く神楽。

無意識のうちに、屋上へと向かう足取りは速くなっていた。

「と、来たか神楽。おはよう」

「……」

屋上のフェンスに寄りかかりながら本を読んでいたミコトは、神楽の来訪に気がつくのと挨拶をする。だが神楽はそれに応じずにじつとミコトを見つめている。

「どうした？」

「……」

なおもミコトの問いかけに答えない神楽。

そして沈黙を保ったままミコトの下まで歩み寄り、ミコトに背を預けるようにして座り込んだ。

「お前本当にどうしたんだ？」

「……別に。気にするな」

(いや、流石に気にするんだが……まあいいか)

どうせ聞いたところで答えてはくれなйдらうと判断したミコトは、それ以上追求せずに神楽を受け入れた。

「……撫でてくれ」

「え？」

「頭を撫でてくれ。お前のその手で」

「……わかった」

ミコトは髪をとかすように優しく神楽の頭を撫でる。すると神楽は気持ちよさそうに目を細めた。

「ミコト、お前は暖かいな。お前は身も心も暖かい。私とは大違いだ」「神楽？」

「こんな温もりを感じたのは初めてだ。きつと私にこの温もりをくれるのはこの世界でお前だけなんだろうと思う」

「……何かあったのか？」

明らかに様子のおかしい神楽。答えてくれないかもしれないと思いつつも、ミコトは尋ねた。

「……おかしいんだ私。元々人間が嫌いだったのに最近はずっと嫌いに……憎らしく思えてしまう。消えてしまえと思ってしまう。自分が自分でわからなくなるんだ」

「……………」

「私の中のドス黒い何かが大きくなっていく。いずれそれが抑えられなくなるんじゃないかと思うと恐いんだ。堪らなく恐ろしいんだ」

抱きしめるように自分の体を掴む神楽。その表情からは確かな恐怖が見て取れ、普段の態度から考えられないほど弱々しかった。

神楽にとつて初めて抱く激しい憎悪、それは神楽に対して悍ましいほどの恐怖となっていた。

なぜこんなにも憎いのか？

なぜこんなにも忌々しいのか？

それを理解できないことが、神楽にとつてただひたすらに恐いのだ。

「ミコト、私は……………私は……………」

「神楽……………大丈夫だ」

ミコトは神楽の体を抱き寄せる。

「俺が傍に居るから」

「え？」

「さつき俺は暖かいつて言ったよな？ だったら俺が神楽を暖めるから。少しでも神楽の恐怖がなくなるように、こうして暖めてやるから」

微笑みを浮かべながら優しく語り掛けるミコト。

そのミコトの言葉が、神楽の中の黒く、悍ましい憎悪を溶かしていく。

「だから……………大丈夫だ神楽」

「ミコト……………本当に暖かいなお前は」

ギョツと、服を握り締めながら神楽はミコトの胸に顔を埋める。

「なあミコト、今日はこのままお前の腕の中で眠りたい」

「このままか……………お前はともかく俺は寝づらそうだな」

「……………嫌ならいい」

「嫌じゃないさ。ちよつと言ってみただけだ」

ククツといたずらっぽくミコトは笑みを浮かべる。

「……………私にそんなこと言えるのもお前だけだな。日が暮れるまで

たっぷり眠ってやるから覚悟しておけ」

「ははっ。了解」

「……………おやすみミコト」

「ああ。おやすみ」

程なくしてミコトに抱きしめられながら神楽は静かに眠りにつく。

その表情は穏やかで、幸せそうだ。

「お前だって暖かいさ。俺にとってはこの上なくな」

神楽の寝顔を見ながら、ミコトは再び神楽の頭を撫で始めた。

ミコトの温もりに触れ、溶けた神楽の黒き憎悪

しかし決して消えたわけではない

黒き憎悪は神楽の心に募り、やがて……………

神楽を破滅へと導く

衝撃!○○○になったミコト!!

第118話

「おいアリス、連れてきたぜ」
「おじやます」

この日、ミコトは魔理沙に連れられアリスの家に来ていた。

どうやらアリスはミコトに用があったらしく、魔理沙に連れてくるように頼んだのだ。

「いらつしゃい。わざわざ来てくれてありがとうミコト」

「いや、気にするな」

「連れてきた私に対してはお礼はないのか？」

「はいはい。ありがとうね魔理沙」

アリスはやれやれと肩を竦めながら魔理沙に感謝の言葉を述べる。

「なんかついみたい言い方だな・・・」

「当然よ。だってついでもありますもの。本当なら言うつもりはなかったし」

「薄情な奴だな」

「当然のように人の本を無断で持つてく人に言われたくないんだけど？それに比べれば私に頼みごとされるぐらいどうってことないでしょ？」

「・・・魔理沙？」

むっとした表情で言う魔理沙に対してアリスが反論すると、ミコトは魔理沙の方に清々しい黒笑を向けた。

「どうやらまた魔理沙の悪い癖が出たのだと思っただらしい。」

「そ、そんなことよりアリスがミコトを呼び出すなんて随分珍しいじゃないか。一体なんの用があるんだぜ？」

魔理沙は焦ったように話題を変えた。まあそうしなければミコトからO☆HA☆NA☆SIを受けてしまうことになってしまったであらうから気持ちはわからなくもない。

「ええ、実はミコトに・・・」

「あゝ!!」

アリスが話始めようとしたその瞬間に、それを遮るかのような声が部屋に響き渡る。

3人が声のする方向に振り返るとそこには白のショートポニーでメガネをかけており、その奥に赤い目を煌めかせている少女が居た。「やあ!会いたかったよみつくくん!!この時を待ち焦がれたよ!!」

少女は満面の笑みを浮かべながらミコトに言い迫る。それこそ鼻がつきそうなくらい顔を近づけてだ。

「み、みつくくん?」

「はあ・・・リフィア。ミコトに会えて嬉しいのはわかるけどいきなりそれは失礼よ」

初対面であるにも関わらず何故か愛称で呼ばれてしまったせいで困惑するミコト。その一方でアリスが呆れたように少女・・・リフィアを咎めた。

「ごめんごめん。嬉しすぎてついね」

リフィアはあははと笑って誤魔化する。

「えつと・・・アリス?そいつは一体誰なんだぜ?」

「この子は・・・」

「ちよつと待った!自己紹介なら自分でできるよアーちゃん!」

「わかったわ。それなら早くしなさい」

「了解!それでは・・・はじめまして!ボクはリフィア・アルカード!アーちゃんとは親友でこの家に下宿させてもらってます!よろしくね」

元氣よく、快活に自己紹介をするリフィア。その姿はまさに天真爛漫というべきものであり、好感が持てる。

「おう!よろしくなりフィア」

「よろしく。ところでリフィア、さっきのみつくんっていうのはまさか・・・」

「うん。君の渾名だよ。もしかして気に入らなかつた?」

リフィアは首をコテンと傾けながらミコトに尋ねる。

「・・・いや、別に構わない。少し気になっただけだからな」

そのように聞かれれば流石のミコトも拒否しきれないようで、渾名で呼ばれることを受け入れた。まあどこかの最強道化剣士とちがつてちゃん付けされていけないだけミコトにとってはかなりマシなのであろう。

「そっか。ならよかった♪」

渾名を受け入れられたことにご満悦なリフィア。

……よもやこうなることを予期してあのような聞き方をしたのだろうかというツツコミは無しにしていたきたい。

「ところでアリス、ミコトに用つてもしかして……」

「ええ。この子がミコトに会いたがっていたからよ」

「リフィアが俺に？それまたどうして？」

「ふふふっ……それはズバリこれだよ！」

どこにしまっていたのか、リフィアはたくさんの紙の束を取り出した。

その紙の束を見たミコトは顔を引きつらせる。

「こ、これは……」

「文の文々。新聞……しかもミコトの特集記事ばかりだぜ」

「そう！ボクはこの新聞がきっかけでみつくんに興味を持つちゃってね。是非とも会いたいと思ってアーちゃんに頼んだんだよ」

「あの時は大変だったわ……リフィアつてば会いたい会いたいって駄々をこねるんですもの」

その時のことを思い返すと頭痛がするようで、アリスは頭を押さえた。

「なんでまた俺なんかに興味を……」

「そりゃ……キミとはボクと同じで幻想入りした存在だからね。気になるに決まってるよ」

「幻想入り？ということはリフィアも元々外の世界の住人なのか？」

「そうだよ。ある日学校帰りに違う道を通ったら気がついたら幻想入りしちゃったんだ♪」

「しちゃったって……随分軽い言い方だな」

幻想入りという結構なハプニングに遭遇してしまったという割に

は魔理沙の言うとおりにリファイアの言動はどこか軽かった。

「実際そこまで深刻に考えてないからね。むしろ未知との遭遇って感じで興奮したし」

「わからなくもないな。でもなんでアリスの家で下宿してるんだ？」

「森で彷徨ってたこの子と偶然出会って・・・それでまあ色々あつてうちで住まわせることになったのよ」

(その色々ってのが気になるんだが・・・まあいいか)

敢えて暈したのだから本当に色々とあつたのだろうと判断したミコトはそれ以上追求しなかった。

「それはそうとみつくん。せっかく会えたわけだからキミに一つお願いがあるんだけど・・・聞いてくれる？」

「・・・お願いの内容によるな」

「大したことじゃないよ。ただボクと弾幕ごっこして欲しいんだ」

「弾幕ごっこ？」

「そう！アリスから教わって以来すっかり虜になったんだ。いつもはアーちゃんに相手してもたつてたんだけど是非ともみつくんに相手してもらいたくて。ダメかな？」

「うっ・・・」

真っ直ぐにミコトを見つめながら尋ねるリファイア。その眼差しは何とも断りづらい。

「弾幕ごっこなら私が相手してやるぜ」

「うくん、マツちゃんがかく・・・」

ミコトの代わりに弾幕ごっこを引き受けようとする魔理沙。しかしリファイアはあまり乗り気ではなさそうだ。

「なんだ？私じゃダメなのか？」

「そういうわけじゃないよ。ただ今はみつくんとやりたい気分なんだよね」

「そういうことか。わかった。それなら今回はミコトに譲るぜ。頑張れよミコト」

「は？ちよつと待て魔理沙、俺は・・・」

「よし！それじゃあ外でやろうかみつくん！」

リファイアは当のミコトの意見を聞くことなく、腕を掴んで外に連れて行ってしまった。

「……魔理沙、あなたミコトをはめたわね」

「へへっ。あの二人の弾幕ごっこを見てみたかったからな」

ジト目で聞いてくるアリスに魔理沙はしてやったりといった笑顔を浮かべながら言う。

「まったく……後でミコトに何言われても知らないわよ?」

「その時はその時だぜ。さあ、私達も外に出ようぜ」

「そうね」

魔理沙とアリスもまた、ミコト達のあとを追って外に出た。

(はあ……結局こうなるのか)

アリスの家の前で、リファイアと向かい合うようにして立っているミコトは内心でぼやいていた。

(魔理沙の奴はめやがって……後で説教だな)

恨めしそうに魔理沙を見つめるミコト。しかし魔理沙はというとそんなミコトの気持ちなどお構いなしといったように笑みを浮かべている。

「どうしたのみつくん?」

「……いや、なんでもないから気にするな」

「そっか。それじゃあ……やろっか♪」

リファイアはニツコリと笑顔を浮かべながら、ミコトに向かって弾幕を放つ。

不意打ち気味に放たれたそれを、ミコトは軽く体を捻らせるだけで躲した。

「ふふっ。やっぱりこの程度は当然のように躲せるよね」

「それでもそれなりに鍛えてるからな」

「流石みつくん。新聞に書かれた活躍は伊達じゃないね」

「……アレはほとんど文が誇張した内容だ。あまり間に受けないでくれ」

「どうやら文々。新聞の内容はミコトにとって頭痛の種らしい。」

「そんな謙遜しなくてもいいと思うんだけど……まあいいや！今はとにかくこの弾幕ごっこを楽しまないと！今度はさつきまでと違うから覚悟してね！」

「そう言いながらリファイアは懐からスペルカードを取り出した。」

「魔衝『シャドウスター』!!」

スペルカードを発動するリファイア。するとミコトに対して赤い閃光が真っ直ぐに向かってゆく。

「そういうスペカか。それなら……恋符『マスタースパーク』!!」

対してミコトは鈴を銃に変化させ、マスタースパークを放った。

ミコトのマスタースパークはシャドウスターを飲み込んでそのままリファイアに向かっていく。

「嘘っ!?!わわっ!!」

まさか自身の放った弾幕を躲すどころか飲み込んで反撃してくるとは思っていなかったようで、リファイアは大慌てで横にとんで回避行動を取る。

「ビックリしたく……まさかシャドウスターが飲み込まれるなんて思わなかったよ」

「それにしてもいい反応してるじゃないか。流石は吸血鬼との半妖と云ったところだな」

ふっと笑いながらミコトはリファイアに言う。

「あ? 気がついた?」

「まあな」

ミコトの言うとおりのリファイアは吸血鬼と人間の間生まれた半妖であった。ミコトはイノチからその情報を読み取ったのだ。

「確かにボクは吸血鬼と人間の半妖だよ。まあ今はこの姿は人間のも

のだけどね」

「人間である俺に合わせてるのか？」

「それもあるけどどっちかって言うど気分の問題かな？」

「そうか」

「そんなことよりも次はみつくんから仕掛けてきてよ」

リフィアは挑発するように指を振る。

「わかったよ。ならこいつを試させてもらう。紅符『スカーレットシュート』!!」

紅の弾幕を放つミコト。それは吸血鬼、レミアアの使うスペルカードであった。

「これは綺麗だね！でも負けないよ！魔障壁『クリム・イーゼス』!!」
リフィアの前に巨大な赤い壁が出現する。その壁によってミコトの紅の弾幕は阻まれてしまった。

「からの……魔斬『ファントカッター』!!」

(黒い斬撃……なかなか器用だな。だがこの程度なら)

リフィアから発せられる黒い斬撃は、ミコトの両手に持った剣で全て切り裂かれる。

「黒と白の剣……みつくんにお似合いだね。なら次は趣向を変えて……魔幻『スター・イリュージョン』!!」

カッと煌く赤い閃光を浴びるミコト。するとミコトの目のする景色がぐにやりと大きく揺らぎ始めた。

「これは……幻覚か」

「ご名答！……ここからは一気にいかせてもらうよ！魔現『メテオ・ミラージュ』!!」

スペルカードを発動するとリフィアは5人に分身し、赤い闘気を纏いながらミコトに向かってゆく。

(幻覚で惑わせて一気に畳み掛ける作戦か。いい手だが……)

「無駄だよリフィア」

ミコトは5人のリフィアを的確に躲してみせた。

「嘘っ!?!どうして!?!」

まさか対処されるとは夢にも思っていなかったであろう。リ

ファイアは驚きを隠せずにいた。

そしてさらにリファイアを驚かせることがあった。

なんとミコトは……目を閉じていたのだ。

「め、目を閉じてる……確かにそうすれば幻覚を見ないで済むけど普通本当できないよ？流石は命を理解する程度の能力つてところ？」

「我ながら利便性高いと思うよ。さて、それじゃあ……そろそろ終わりにしようか。混符『黒と白の驟雨』」

黒と白の弾幕がリファイアに降り注がれる。

「甘い甘い！この程度じゃ私は討ち取れない……」

「だろうな」

「……あ」

上空からの弾幕を回避するのに気を取られたリファイアは、肉薄してくるミコトに気がつかなかった。

これで決めようと銃口をリファイアにつきつけようとするミコト。

(マズイ！え〜とこういう時は……)

「ま、魔眠変『サイレント・シープ』!!」

焦ったリファイアは咄嗟にスペルカードを発動。羊型の弾幕がミコトを襲う。

「おっと」

しかしそれに反応できないミコトではない。ミコトは武器を銃から剣へと変化させて弾幕を切り裂いた。

だが……

「なっ!？」

「えっ!？」

急いで発動させたスペカだからなのか、切り裂かれた弾幕は爆弾のように破裂してミコトを飲み込んだ。衝撃によって発生した煙がミコトの姿を覆い隠す。

「……はっ!？み、みっくん!」

あまりのことにしばし呆然としていたリファイアであったが、煙が晴れはじめると同時にミコトへと駆け寄る。

「み、みっくん！大丈夫……夫？」

煙が晴れ、ミコトの姿を目にしたリフィアはまたしても呆然としてしまった。

まあ無理もないであろう。なぜなら……ミコトの体には大きな変化が訪れてしまったのだから。

「ふう、流石に今のはビックリしたな……って、あれ？なんか声……」

自分の声がいつもより高いことに疑問を抱くミコト。さらに胸が押さえつけられてるかのような苦しさも感じる。

どうしたことだろうと胸に手を置くと、ふによんとした柔らかい感触がミコトの手に伝わった。

「ん？なんだこの感触……」

「お、おいミコト……」

「あ、あなた……」

弾幕ごっこを観戦していた魔理沙とアリスがミコトに近づく。その表情は驚愕に染まっている。

「えっと……みつくん。そのなんて言えばいいか……」

リフィアもまた、物凄くいたたまれない表情でミコトに声を掛ける。

「ん？なんだリフィア？」

「本当にごめん。みつくん……」

「女の子なっちゃった」
「は？」

第119話

「ミコト……あなたとうとう女になっちゃったのね」

神社に帰宅したミコトを出迎えた霊夢の第一声がそれだった。

「霊夢……もう少し驚いてくれ。なんで早々に受け入れてるんだ」

霊夢の言動に、ミコトは思わず頭を抱えなくなった。まあ無理もないであろう。

「はははっ！ドンマイミコト」

「みっちゃん本当にごめんね？」

神社まで付き添ってきた魔理沙とリファイアが慰めるように肩に手を置く。だがその表情は非常ににこやかだ。おおかた面白いとでも思っているであろう。

ちなみに魔理沙がともかくリファイアまで付き添っているのはことの発端だからつきそうようにアリスに言われたからだ。

「思い切り笑うな魔理沙。それとリファイア、その呼び方は洒落にならないからマジで勘弁してくれ」

「でも今は女の子なんだよ？この呼び方の方がしっくりこない？」

「……しっくりきて欲しくないんだよ。ちゃん付けするなんてあの馬鹿だけで十分だ」

よほどちゃん付けは嫌なようだ。まあ普段竜希からミコちゃんと呼ばれることさえ本気で嫌がっているのだからし方がないであろう。

「とりあえずどういう経緯でそうなったのか教えてくれないかしら？あとそいつが誰なのかもね」

霊夢は初対面であるリファイアに視線を向けながら言った。

「ああ。わかったよ」

3人は事の経緯とリファイアのことを霊夢に説明した。

「ふうん。つまりミコトのこの状態はリフィアのスペカが原因っていうことね」

「まあそうなるかな。いや、ボクはとんでもないスペカをつくっちゃったよ」

あははと笑いながら言うリフィアからはあまり悪びれた様子は感じられなかった。

「リフィア……頼むからそんなに笑顔で言わないでくれ」

「リフィア、グッジョブよ（そうよ。やめなさいリフィア）」

「霊夢、本音と建前が逆になってるぜ？」

本音と建前が逆になってしまっている霊夢に魔理沙が指摘を入れる。

「まあ気持ちはわからないでもないけどな。なにせあのミコトが女になっちゃったんだからな」

「そうよね。元々女でも違和感ない容姿をしていたミコトが本当の女に……」

「お願いしますから本当にもう勘弁してください」

弱々しく覇気のない声で霊夢と魔理沙に懇願するミコト。相当まわってしまってるようだ。

「ごめんごめん。それで？ミコトいつになったら男に戻れるの？まさかずっとこのままだなんてことないわよね？」

「流石にずっとはないよ。せいぜい一週間ってところかな？」

「……俺からしたら十分に長すぎる」

「まあまあそう落ち込むなよミコト。一週間女を体験できてラッキーぐらいな気持ちでいようぜ？」

「フォローしてくれるのは嬉しいけどな魔理沙……そんな気持ちにはなれそうにない」

魔理沙のフォローはあまり効果がないようでミコトは落ち込んだままであった。

「まあ……とりあえず着替えてきたらどう？その服じゃその……胸がきついでしょう？」

霊夢はミコトの胸を見ながら言う。現在のミコトの胸は推定Dカップ。今着ている服ではだいぶ胸が圧迫されてしまうのだ。

「……そうする。和服なら大丈夫かな……」

ミコトはげんりしたまま着替えに向かった。

「……というか、ミコトが女になるのはまあいいとしてあの胸はなんなのよ」

「だよなあ……わかるぜ霊夢。あの胸……正直ズルいと思うぜ」

「……はあ」

溜息を吐く霊夢と魔理沙。その手は自身の慎ましい胸に置かれていた。

「あはは。まあ二人共胸小さいもんね」

「……は？」

にこやかな笑顔を浮かべながら言うリフィア。対して霊夢と魔理沙は不機嫌そうな声を出す。

その目は……リフィアの豊満なEカップの胸に注がれていた。それはもう恨めしそうに。

「あ？もしかしてこれ羨ましい？羨ましい？」

リフィアは自分の胸に手を当て、からかうような笑みを浮かべながら言う。

「……別に。羨ましくなんてないわよ」

「霊夢の言うとおりでせ。そんなの歳食ったらだらしなく垂れ落ちるのがオチだ」

「残念。ボクは半妖だから歳をとっても容姿は殆ど変わらないんだよね」

「ぐぬぬ……」

悔しさを顔にする霊夢と魔理沙。

その時……

「ふ、ふぎけるなあああ!!」

神社の奥からミコトの怒号が響き渡る。

「い、今の……みっちゃん?」

「おいおい、どうしたんだぜ?ミコトがあんなに叫ぶなんて珍しいな」

「とにかく行ってみましょう」

3人はミコトのいる部屋へと移動し始めた。

「ミコト!一体どうしたの!?!」

部屋に駆け込んだ霊夢達3人。その目には何やら紙を握りしめてワナワナと肩を震わせるミコトの姿が映る。

「……これ」

ミコトは手にした紙を渡す。紙には文字が書かれており、3人はそれに目を通す。

ミコトへ

事情は把握しているわ。女の子でいる間は私が用意した服を着なさい。

ちなみにあなたの服は私が預かってるから。男の子に戻ったら返すわね。

紫

「この手紙……紫からだな」

「ミコト、紫が用意した服って?」

「……それだ」

ミコトが指差す方には、確かに服があった。あったのだが……「うわあ……見事に女物ばかりだね」

その服というのが全て女物なのだ。ワンピースやセーラー服、巫女服、浴衣、魔女服、メイド服、果てはCAの衣装やナース服まである。

さらには下着まで置いてあり、それももちろん女物だ。

「紫……次会ったら絶対にシメテやる。絶対にだ」

紫に対する激しい怒りを顔にするミコト。ドス黒いオーラを纏っている今のミコトは親友である童希でさえ見たことがないほどに悍ましい。

「なんていうか……ご愁傷様みっちゃん」

「お前も大変だな」

「心中察するわミコト。さて、それじゃあ……」

「『どの服着る?』」

「……は?」

3人がさも当然のように言い放ったその一言に、ミコトは素っ頓狂な声を上げてしまった。

「どの服着るって……え?3人共何を言っているんだ?」

「何って決まってるじゃない。その服じゃ胸が苦しいから着替えるんですよ?」

「だからどの服着るか聞いてるんだぜ?」

「みっくんはどれがいい?」

物凄くいい笑顔をしながらミコトに迫る3人。対してミコトは冷や汗を流しながらひくついている。

「うくん……私のオススメはこのレースのついたやつかな?」

「私はこの巫女服の方がいいと思うけど」

「いいや、魔女服にしようぜ」

当事者であるミコトを置いてけぼりにして、服を手に取りながら話を進めていく3人。その楽しそうな表情は年頃の女の子らしいものであった。

「いやいやいやいや……着ないからな?なんか服選んでくれているけど俺はそれ着ないからな?それ着るくらいなら胸が苦しなくても今着るので我慢するしっせさらしでも巻けば……」

「ダメよ。さらしなんて巻いたら胸の形が悪くなるわよ?」

「いや、別に知ったことじゃないから。というか霊夢だってさらし巻いてるだろ」

「……………私はいいのよ。崩れるほど大きくないから」

「……………うん、なんかごめん」

少々声のトーンを落として言う霊夢に、ミコトは思わず謝ってしまっただ。

「ともかく、今着てる服でいいって言うけど一週間ずつとそれを着るわけにはいかないぜ?」

「マツちゃんの言うとおりだね。それにボクとの弾幕ごっこで汚れちゃってるし」

「二」というわけで……………」

「と、というわけでなんだよ? やめろ……………来るな。来ないでください。お願いだから勘弁してください」

少々タイつてしまっている目でミコトに迫る3人。ミコトはジリジリと後ずさりながら逃れようとするが……………」

「二大丈夫! ミコト(みっちゃん)なら絶対に似合うから!」

「それなにも大丈夫じゃない! こうなったら……………クラマ! シラマ! ミコトが叫ぶと、クラマとシラマが姿を現す。

「クラマ、シラマ。あの3人をどうにか抑えて……………って、おい? 何をしている?」

クラマとシラマに3人を抑えるように指示するミコトであったが……………なぜか2人は霊夢達でなく、ミコトの体を掴んで押さえ込んでしまった。

「ミコト様、着替えないのは衛生面でよろしくありません。ここは諦めてあの服を着ましょう」

「……………(こくこく)」

「クラマさん!? シラマさん!」

予想だにしない使い魔の裏切り。あまりのことにミコトは思わず2人をさん付けで呼んだ。

「二さて……………覚悟はいい(か)?」

「や、やめろ! 服を掴むな! 服を脱がせるな!」

ミコトの懇願も虚しく、5人はミコトに女物の服を着せようと迫った。

この日のことはシロトにとって一生のトラウマとして胸に刻まれることであろう。

第120話

「……………」

「お、おい霊夢……………これは……………」

「ええ……………やりすぎたわね」

「あ、あははははは……………」

部屋の隅で座り込んでわかりやすくしよぼくれているミコトを見て、霊夢、魔理沙、リフィアの三人は流石に反省したようで申し訳なさそうにしていた。

まあ無理もないであろう。身体は女であるとは言え半ば強引に女物の服を着させられそうになったのだから凹むのも仕方がない。

ちなみに、使い魔であるにもかかわらず霊夢達に加担していたクラマ、シラマは既に鈴に戻っている。

「だ、第一あんたが悪いのよりフィア。本当は着れないのわかってて悪乗りするから」

「うくん……………今回は流石のボクも反省してるよ」

先程まで服を着せようとはしていたが、実は今のミコトは女物の服を着ることが一切できない状態にあるのだ。

というのも、リフィアの例のスペカの効果で性転換した者は元の性別の服しか着られないという制約が課せられるらしい。

なんともご都合主義的な効果ではあるが……………」

もちろんスペカの持ち主であるリフィアはそのことを知っているのだが……………悪乗りして霊夢と魔理沙と一緒にになってミコトをからかっていたのだ。

「で、でもれいちゃんとかまっちゃんだって随分ノリノリだったけど?」
「……………私だって流石にやりすぎたって思ってるわよ」

「一時のテンションに身を任せる乗って……………怖いな」

リフィアに言及されると、霊夢と魔理沙はバツが悪そうにそっぽを向いた。

「ともかく……………ミコトに謝りましょう。流石に今回は私達が悪かつ

たわ

「そうだな」

「まあ、流石にみつくんには悪いことしたなとは思ってるしね」

ひとまず、3人はミコトに謝ることにした。ちなみにリフィアは反省からか、ミコトの呼び方が『みっちゃん』から『みつくん』に戻っている。

「……ミコト、さっきはごめんなさい」

「本当……悪かったぜ」

「ごめんねみつくん」

各々ミコトに対して謝罪の言葉を口にする三人。その声色からは、どれほど反省しているのが察せられる。

ただ……

「……別にいい。三人とも楽しかったんだろ？なら謝ることないじゃないか……」

ミコトは三人に背を向けたままそう答える。

今のミコトは卑屈になっていた。大抵のことは『気にするな』の一言で済ませるミコトがここまでになるのだ……相当参っているのだろう。

「えっと……た、確かにそれは否定しないけど……その……」

「……流石にミコトのこと考えずにやりすぎたと思ってるぜ」

「からかいすぎたって本当に反省してるよ。だから許してみっくん」

先程以上の反省の意を込めて謝罪する霊夢達。

そしてミコトが振り返ると……そこにはシヨンボリとしている三人の姿があった。

卑屈になっているとは言え、流石にそんな姿を目にしたとあれば許さないわけにはいかず……

「……全く。わかったよ。本当にもういいから3人とも元気出せ」

ミコトは三人の頭を撫でながら、優しい口調でそう言った。

「「よ、よかった……」」

ひとまずミコトから許してもらえた霊夢達は、ほっとしたように肩をなでおろすのであった。

「ふう……なんだから今日はスゲー疲れたな」

夜になり、霊夢と魔理沙と一緒に晩酌していたミコトはそう呟いた。

ちなみにリフィアはアリスのところに帰ったため、ここにはいない。

「なんていうか……本当にご愁傷様ねミコト。そういう時は飲んで発散するに限るわよ」

霊夢はミコトの盃にお酒を注ぎながら言う。

「霊夢の言うとおりだ。私達でよければいくらでも付き合うぜ」

「何が付き合うぜよ。あんたはタダ酒飲みたいだけでしょ？」

「まあそれもあるけどな♪」

霊夢にジト目を向けられるのもお構いなしに、魔理沙は遠慮なく酒を口にする。

まあこういうあつけらかなとしたところが、ある意味では魔理沙のいいところでもあるだろう。

「まあそう言うな霊夢。俺は魔理沙と飲むの好きだぞ？魔理沙がいると賑やかだしな」

「……それって私と一緒に飲んでも楽しくないってことかし

らっ。」

ミコトの発言で少々機嫌を損ねてしまった霊夢がむっとした表情を浮かべる。

「そういうわけじゃないさ。霊夢と二人で飲んでる時にはまたその時だけの良さがある。だから霊夢と二人で飲むのだって俺は好きだぞ？ただそれと同じくらい魔理沙を交えて酒を飲むのも好きっていうのもあるっただけだ」

「そう……まあならいいけど」

「へへへ。そう言ってもらえると嬉しいぜ。よし、今日はジャンジャン飲もうぜ！」

「そうだな。ところで……」

霊夢と魔理沙をじつと見つめるミコト。

そして……ミコトの口から信じられない言葉が紡がれる。

「二人共……いつから分身なんてできるようになったんだ？」

「……はっ。」

「う……霊夢」

ミコトはフラフラとしながら霊夢に体を預けた。

「ちよっ……ミコト!? あんた何してるの!?!」

予想だにしないミコトのこの行動に、霊夢は動揺を隠せずにいる。

「……嫌なのか？」

顔をあげて、霊夢の目を見ながら尋ねるミコト。その目はトロンとしており、なんとも断りづらい雰囲気醸し出している。

「い、嫌じゃないけど（むしろ嬉しいけど）」

「……よかった」

霊夢が嫌がっているわけではないとわかり、ミコトはニツコリと笑みを浮かべて霊夢の胸に顔をうずめて甘えだした。

（な、ねえ魔理沙……これってもしかして……）

（ああ……完全に酔ってるな）

霊夢と魔理沙はアイコンタクトを交わして、意思の疎通を図る。

（嘘でしょ……ミコトは鬼の萃香とサシで飲みあえるほどお酒強いのよ？一体どうして……）

（考えられるとしたら……女になってるからじゃないか？）

魔理沙の考えはまさにその通りであった。

女になったことでミコトの身体には様々な変化が訪れ、その作用によつて現在、酔いやすくなっているのだ。

「霊夢、魔理沙」

猫なで声で霊夢と魔理沙に声をかけるミコト。

「な、なにかしらミコト？」

「俺……本当にこれから一週間も女なのか？」

「まあリフィアがそう言ってたから……」

「……そうなんでだろうぜ」

「だよな……はあ」

ミコトはがつくりと肩を落としながら溜息を吐く。

「そうでなくても女っぽい顔してるせいでよくからかわれるのに……絶対に皆に弄られる」

「だ、大丈夫よ。あんたが女になってること知ってるのはごく一部なんだから」

「霊夢の言うとおりでだぜ。きっと大丈夫だ」

大丈夫……そうミコトに言って聞かせる霊夢と魔理沙であったが実際心の中では……

(でも・・・きつと紫が拡散してるんだろなあ)

などと考えていたりする。

「そうか・・・なら良かった」

(う・・・罪悪感が)

しかし、そんなことを屈託のない笑顔を浮かべて安心しているミコトの前で言えるはずもなく、霊夢と魔理沙はまたしてもミコトに対して申し訳なく思うことになるのであった。

「すう・・・」

しばらくして、酔いつぶれてしまったミコトは霊夢に寄りかかりながら眠りについてしまっていた。

「全く・・・ミコトのやつ幸せそうに寝てるな」

「そうね・・・こうして見ると本当に女の子にしか見えないわ」

「今は本当に女だけだな・・・でもそれ言ったらミコトに怒られるぜ？」

「わかってるわよ。それにしても・・・ふふっ」

霊夢はミコトの髪を優しく撫でながら微笑みを浮かべる。その微笑みからは母性を感じさせる。

「何笑ってるんだ霊夢？」

「なんていうかね・・・嬉しいのよ。こうしてミコトに甘えてもらえることが」

「ああ・・・なるほど。普段のミコトなら絶対にありえないもんな」
魔理沙もまた、ミコトの髪を撫でながら言う。

「ミコトってああいう性格してるから普段は頼られることの方が多い

けど……本当はミコト自身頼りたいって、甘えたいんじゃないかと思うの。一人で外の世界から幻想郷に来て、幻想郷で暮らすことにして……今は竜希や早苗もいるけど本当は未練や心残りがあ
るでしょうし」

「そうだな……どんな目に遭ってたとしても、簡単には割り切るこ
となんてできないだろうからな」

魔理沙もまた、生まれ育った家から自らの意思で出て行ったのだ。
故にミコトの気持ちに僅かにでもわかるのであろう。

「でもそのことに関してミコトは何も言わない。それはミコトの強さ
だけど……でも私はミコトに甘えて欲しいって思ってた。ミコト
に頼って欲しいって思ってた。だから……形は違えけどこう
して甘えてもらえたことが嬉しいのよ」

再びミコトを優しく撫でる霊夢。

霊夢は誰よりもミコトのすぐ傍に居る。だからこそどんな形であ
れ、こうしてミコトが甘えてくることを嬉しく思っているのだ。

(……あの霊夢がねえ)

そんな霊夢を見て、魔理沙は驚き半分、関心半分の気持ちを抱いて
いた。

長年連れ添った友人の新鮮な一面を見られたことに、魔理沙なりに
思うことがあるのだろう。

「魔理沙？なに人の顔じつと見てるのよ？」

「別に何でもないぜ。それよりも霊夢……思ったんだが」

「なによ？」

「……いつものミコトを酔わせるにはどうすればいいと思う？正
直男のミコトに甘えられるとか……すごくいいと思うぜ？」

「それは確かに」

霊夢は先程の穏やかさとは一変。真顔で食いついてきた。

「女の子もいいけれど……やっぱりいつものミコトに甘えても
らいたいわ」

「だろ？そうなるやっぱ酔わせるのが一番だが……」

「ミコトを酔わせるとなると一筋縄ではいかないわね……どうす

るか・・・」

それから、霊夢と魔理沙のやけに熱の入った『普段のミコトをどう酔わせるか?』の議論は夜遅くまで行われたのであった。

第121話

ミコトが女体化して六日、幻想郷の本日の天気は快晴。一点の曇りもなく、非常に朗らかだ。

そんな中……

「はあ……」

ミコトはこの天気似つかわしくない曇った表情で溜息を吐いていた。

だがそれも無理がないことだ。なぜなら……

「あややややー！いいですよ！いいですよ！ミコトさん！その物憂げでアンニュイな表情素敵ですよ！美人ですよ！」

……文にこれでもかと言うほど大量に写真を撮られているからだ。

「ミコト……止められなくてごめんなさい」

「いいんだ霊夢。もう……どうにでもなれ」

申し訳なさそうな表情で謝る霊夢に対して、ミコトは諦めたように遠くを見つめる。

そもそも、なぜあれほど女扱いされることを嫌がるミコトが女性と なってしまった今、潔く文に写真を撮られているのか……それはもちろん理由があった。

その理由とは……

「わあ、お兄様本当に女の子になってる!!じゃあ今はお姉様って呼んだほうがいいのかな?」

「ふふつ。まさかここまで違和感がないなんてね」

「ミコト……ごめんなさい」

訪れたレミリア、フランからは女になったことをからかわれ（咲夜からは同情の視線を向けられたが）

「ねえミコトこれ着てみない？今ならすつごく似合うと思うの」

「姫様！こちも良さそうですよー！」

「何言ってるの鈴仙！こつちのほうがいいよー！」

「あらあら」

輝夜、鈴仙、てゐからは着せ替え人形にされそうになったり（もちろん女物は着せられなかった。なお、永琳は楽しそうに眺めていた）

「中々大きな胸ね〜」

「そ、そんな・・・ずるいですミコトさん」

幽々子、妖夢からは胸のことを突っ込まれ（竜希は流石に今からかうとシヤレにならないから言う理由で留守番）

「ミ、ミコト先輩！凄く綺麗です！可愛いです！羨ましいです！」

早苗からは思い切り容姿を羨まれ（その上どこか艶っぽい目で見つめていた）

「アハハハハッ！本当にミコト女になってる！」

「ミコト女なのか〜」

「その、なんていうか・・・すみません」

チルノ、ルーミアには笑われ（大妖精は何度も頭を下げ謝っていた）

・・・とまあ連日女になったミコトを一目みようと思ってきた者達の対応をしていたために疲弊しきってしまい、いつしか文句を言う気力さえなくなってしまったのだ。

ちなみに霊夢はそう言った者たちを追い返そうと躍起になっていたが、一同のあまりの剣幕に圧倒されてしまい、途中から諦めてしまった。

そうして現在は、文による写真撮影が行われているということだ。

「ふう・・・いい仕事しました」

1時間に及ぶ写真撮影会が終わり、文は満足げに満面の笑みを浮かべる。撮った写真は1グロス（144枚）にも及ぶほどだ。

「おかげでいい記事がかけそうです！本当にありがとうございます！

「コトさん！」

「ああ………そいつはなによりだよ」

「あやや？記事にするなって怒らないのですか？」

「………どうせ俺が女になったことなんて紫が幻想郷中に広めてるんだ。今更新聞に載るのを止める意味はない」

そう発言するミコトの顔は完全に悟りを開いたものであった。

「そ、それはなんというか………ご愁傷様です。それでは私は記事を書かなくてはなりませんのでこれにて失礼しますね」

そう言いながら幻想郷最速を誇るスピードで帰っていく文。

「………ご愁傷様と言いながら記事にするのに躊躇いがない辺りが何とも文らしい。」

「………やつと終わった」

写真撮影を終えて、疲労と気疲れがピークに達したミコトは神社の縁側に腰を下ろした。

「大丈夫ミコト？」

「………幻想郷に来て以来一番疲れた」

「………本当にお疲れ様」

霊夢はミコトの頭を優しく撫でて労をねぎらった。ミコトが黙って頭を撫でられるとは何とも珍しい光景である。それほど疲れたということであろう。

そんな時………

「これは………随分と大変な目に遭ったようだなミコト」

藍が訪れ、疲弊しきったミコトに苦笑いを浮かべながら声を掛けた。

「なによ藍。あんたもミコトを弄りに来たって言うの？」

「………もう勘弁してくれ」

流石にこれ以上は看過できないとばかりに、ミコトを抱き寄せる霊夢。なお、ミコトはもはやなすがままになっているようだ。

「安心してくれ。そのつもりはない」

だが、霊夢の心配は杞憂であったようで、藍にミコトをいじるつもりはないらしい。

もつとも……

(……本当はちよつとだけ意地悪したかったが)

内心ではこんなことを考えていたようだが。藍にさえこんなことを考えさせてしまうほど、今のミコトは愛らしいようだ。

「……俺を弄りに来たんじやないって言うなら何しに来たんだ?」

「ミコト……ヤサグレすぎじやないか?」

「仕方がないでしょ……あんな目に遭ったんだから」

「俺の哀しみ……藍にわかるか?」

「……すまない」

思わず謝ってしまった藍の気持ちは推して知るべしである。

「それで? 結局のところあんたは何しに来たのよ?」

「ああ、それは……こうなつた原因は紫様にあるからな。主に変わつて謝りに来たんだ」

「なら紫に直接来させなさいよ」

「紫様は……」

『ミコトの怒りが収まるまで当分顔を出さないわ♪』

「……と言っていた」

「紫シバく」

清々しいほどに黒い笑顔を浮かべながら言うミコトと霊夢。この笑顔だけで邪神さえも凍りつかせることができそうだ。

「ま、まあともかく……紫様が本当にすまなかつた。式として謝罪する」

「別に藍が謝ることではないのだが……でもそうだな」

ミコトはじつと藍のフサフサの尻尾を見つめだした。

「ミ、ミコト? どうしたんだ?」

「……藍。申し訳ないと思っているのなら一つ頼みがあるんだがいいか?」

「なんだ? 言ってみろ」

「ああ……その尻尾枕にさせて貰ってもいいか?」

「……え?」

一瞬、ミコトの言つてゐることの意味が分からずに藍はキョトンとし

た。

「ミコト……あんた何言ってるのよ？」

「自分でも馬鹿なこと言ってるなんてわかってる。だがな……少しでも安らぎが欲しいんだよ」

生気のない目をしながらはははと笑うミコト……誰から見ても大丈夫ではないとすぐにわかる。

「まあ藍が嫌ならいいが……」

「あ、いや。ミコトがそうしたいなら好きにするといい」

そう言いながら藍は自身の尻尾をミコトに向けて伸ばした。

「それじゃあ……おやすみなさい」

藍の尻尾を枕にし、眠り始めるミコト。疲労から目を閉じてすぐに静かな寝息が聞こえてくる。

「……こんなふうに甘えてくるとはよほど堪えているのだな」

藍は残った尻尾でミコトの体を包みながら言う。

「連日私にもやけに甘えてきてるのよね。こんなミコトこれまでになかったわ」

「そうか……となると女になったことが何か関係あるのかもしれないな」

「どういうこと？」

「体の変化に応じて思考や行動も引つ張られているのだろう。でなければあのミコトがこんなふうになる理由は思いつかないからな」

「そういえば雰囲気もどことなく女っぽいし……そうなのかもしれないわね」

藍はミコトの言動は女になったが故のものであると推測し、霊夢もそれに同意する。

「だがまあ……こういうミコトもたまにもいいかもしれないな」

「ええ。それは同感ね」

安らかに眠るミコトを見つめながら、霊夢と藍は穏やかな微笑みを浮かべるのであった。

「ようやく戻れた……」

女になつて7日たち、ようやくミコトは男に戻る事ができた。

「本当に大変だったわね」

「全くだ。もう二度と女になりたく……」

「お〜いみつくん！」

ミコトの言葉を遮るようにして、リファイアが登場した。

「リファイア？何か用か？」

「うん。そろそろ効力が切れる頃かなと思つて来たんだ」

「そう。見ての通りミコトはちゃんと戻れたわよ。だからさっさと帰りなさい」

リファイアに対してかなり辛辣な霊夢。この7日間のミコトの苦勞を知っているからこそその態度であろう。

「……もつとも、霊夢は霊夢で中々の役得を得ているのだが。

「いやいや、霊夢。流石にそれはダメだつて。せつかく来てくれたんだからお茶の一杯ぐらいは飲んでいってもらおう」

「……まあミコトがそう言うならいいけど」

「それじゃありファイア。ちよつと待つててくれ」

そう言つて台所にお茶を淹れに行こうとするミコトであるが……
リファイアが待つたをかける

「あ、ちよつと待つて」

「どうした？」

「えつとね……ボクとしてはお茶よりも弾幕ごっこがいいかななんて」

そう言いながらスペルカードを取り出すリファイア。

だが、そのスペルカードは……ミコトを女に変えた例のものであった。

「……ミコト、お茶を入れてきて頂戴」

「いや、だからお茶はいらない……」

「いるわよ。なにせ……これから本気の私と弾幕ごっこするんだから」

「……あ、これもしかしくなくてもままずった？」

黒い笑顔を浮かべながらリフィアに宣言する霊夢。どうやらリフィアの目論見（ミコトを再び女にする）に感づいたようだ。その笑顔を見たリフィアは冷や汗をかきながら苦笑いを浮かべている。

「……ほどほどにな霊夢」

「善処するわ。というわけで……霊符『夢想封印』!!」

「うわっ!」

不意打ち気味に撃たれた霊夢の夢想封印を、リフィアはギリギリではあるがどうにか躲した。

「レ、レイちゃん!いくらなんでも不意打ちは酷いよ!」

「何言ってるのよ!こんなのまだ序の口よ!」

「か、勘弁して!!」

流石のリフィアも今の霊夢を相手取るのは勘弁して欲しいらしく、涙目になって逃げ回る。

「……ふむ、お茶を淹れてくるか」

そんな光景を見たミコトは、お茶を淹れにその場から離れるのであった。

守月姫く例え禁忌を犯そうともく 第122話

冥界、白玉楼の庭にて、ミコトと妖夢は剣を交えていた。

「やりますね！流石はミコトさんです！」

「そっちこそ。竜希にシゴかれてるだけのことはあるな」

両手に持った剣で激しい剣戟を繰り広げる両者。目まぐるしく振るわれる4本の剣を見切れることはよほどの戦闘経験者でなければ不可能であろう。

「だがまあ……そろそろ決めさせてもらう」

ミコトは両手の剣で妖夢に袈裟斬りを放つ。

「甘いですよ！」

後ろに飛び退いて回避を試みる妖夢。

だが……それは罠であった。

ミコトは瞬時に剣を銃へと変え、妖夢の正面から狙いを定める。

「くっ……!!」

二丁の銃から放たれる黒と白の弾幕。妖夢は上方に飛ぶことで回避を図るが……

「予想通りだな」

「きやつ!!」

それを予測していたミコトは同じように飛び上がり、妖夢にかかと落としをする。

どうにかギリギリでガードはできた妖夢であったが反動で地面に叩きつけられ、そして……

「終わりだ」

「うっ……」

ミコトに剣を突き立てられ、身動きが取れなくなってしまった。かくして、この勝負はミコトの勝利で終わった。

「お疲れ様々。はいお茶」

「ん、サンキュ」

「ありがとうございます竜希さん」

竜希によって差し出されたお茶を飲み、ミコトと妖夢は喉を潤した。

「それでも、やっぱりまだ全力のミコちゃんには勝てないようだね」「うっ……。はい。勝てると思ったのですが」

竜希に苦笑いを浮かべながら言われて、妖夢は落ち込んだように頭を垂れる。

「といっても結構ギリギリだったけどな。剣術だけで戦ってたら確実に負けてたし」

「ミコちゃんは剣の才能イマイチだからね」

「ですが複数の武器と弾幕、体術を織り交ぜた戦闘は流石の一言です。あそこまで器用な戦いができるのはこの幻想郷といえどもミコトさんぐらいでしょう」

妖夢の言うとおり、戦闘中にあれだけ武器、戦闘スタイルを変えられる者など幻想郷のなかでもミコトぐらいだ。

その戦闘スタイルで今までいくつも強敵との弾幕ごっこを切り抜けてきたのだ。

「逆に言えばそれぐらいしなきゃ勝てないんだけどな。俺は戦闘の天才というわけではないし」

「またまた、そんなことはないでしょうよ。ミコちゃんは十分すぎるほどに戦闘の才がある。でなきゃ昔の話とは言え俺を追い詰めることなんてできやしないからね」

「ええ!? ミコトさん、竜希さんを追い詰めたことがあるんですか!？」

竜希の発言に妖夢は驚きを隠せずにいた。

いくら昔のこととは言えあの竜希が追い詰められるなど妖夢には

想像もできないことなのであろう。

「落ち着け妖夢。確かに一度だけそういうことはあったが……そのあとすぐに逆に追い詰められて完敗したんだぞ?」

「……すみませんミコトさん」

当時にことを思い返して落ち込んだ様子を見せるミコトに、妖夢はいたたまれなくなつて謝罪した。

まあ勝てると思われた勝負で逆に追い込まれた上に完敗したというのなら仕方がないであろう。

(ほんとこいつのあの特性……あれは異常だな)

竜希にはとある特性があった。

それが竜希の強さに繋がり、竜希を『最強』たらしめ、竜希がこれまで戦闘で敗北を許さなかつた理由でもある。

そして……その特性ゆえに、竜希に勝てる可能性を持つのが妖夢だけなのだ。

「あははははは。それよりミコちゃんこのあと予定あったんじゃないっけ?」

「と、そうだ。そろそろ行かないと」

「ちなみにどこ行く予定なの?」

「永遠亭」

「おつ、そいつはちようどいいね」

ミコトから行き先を聞いた竜希はにっこりと笑みを浮かべる。

「ちようどいいってどういうことだ?」

「いや、実は幽々子さんに永琳さんに冥界でしか手に入らない薬草届けて欲しいって頼まれててね。でも俺永遠亭まだ行ったことないからさ。永遠亭のある迷いの竹林ですっげえ迷いやすいんでしょ?正直たどり着ける気がしなくてさ」

迷いの竹林は数多の竹のせいで方向感覚が狂いやすい。いかに竜希であっても初めてでは永遠亭までたどり着けないようだ。

「つまり俺に案内を頼みたいってことか?」

「そゆこと。いいかな?」

「まあそれぐらいなら別に構わん。だけど今回だけだぞ?お前なら一

回で覚えられるだろうし」

「うん、それでいいよ。んじやあ行こっか」

「ああ。そういうことでまたな妖夢」

出発前に、ミコトは妖夢に挨拶する。

「はい。今日は手合わせありがとうございます」

「ああ。相手して欲しい時はまた言ってくれ。時間が空いてれば付き合うから」

「ありがとうございます」

「行ってくるね。よくむちちゃん」

「はい。行ってらっしゃい」

ミコトと竜希は冥界を出て、永遠亭へと出発した。

「あ、そうそう。ちよつとミコちゃんに聞きたいことがあるんだけど
いっ。」

迷いの竹林に入ってしまったらしくして、竜希はミコトに声を掛ける。

「なんだ？」

「……さなちゃんの告白にはもう返事は返したの」

口調はいつもと変わらないがヘラヘラした笑顔を見せず、真剣な表情で竜希は尋ねた。

「……いいや、まだだ。葵に諭されて色々と考えさせられた
が……」

「答えは出ないってこと？」

「……」

ミコトは表情を暗くさせて黙り込む。それは肯定しているも同然

であった。

「そのことさなちゃんにはちゃんと話した？」

「答えが出るまで待つててくれるそうだ……本当に申し訳なく思う」

「でもまあ答えを出す気はあるんだよね？」

「……ああ」

「ならちゃんと考えた上で答えを出して……さなちゃんに伝えればいいさ。きちんと考えた上での答えならどんなものであったとしてもさなちゃんだつて納得してくれると思うし」

（まあ……その答えがどんなものかは既に決まってるようなものなんだけど。さなちゃんだつて……気づいてるだろうし）

竜希は知っている。ミコトの本当の気持ち……ミコトの想いが誰に向けられているのか。そしてそのことを早苗も既に理解できているということ。

知っていながら……口にはしなかった。

「……なあ竜希、俺からも聞きたいことがあるんだがいいか？」

今度はミコトが竜希に尋ねた。

「いいよ。俺に答えられることならね。それで聞きたいことっていうのは？」

「こんなこと聞くのおかしいかもしれないがその……もしかしてなんだが早苗以外にも俺に好意を寄せてる奴って……」

「ああ、それね。いるよ。それも俺の見立てではそれなりの数ね」

竜希は変に誤魔化さずに正直に答えた。今のミコトならわざわざ隠す必要はないと判断したのだろう。

「や、やっぱりそうなんだな……」

「やっぱりつてことは気づいてたの？」

「気づいてたというか今までのあれこれを思い返してたら……気づいた」

「まあ一々聞いて確認とつて来たからそうだとは思ったよ。それにミコちゃん元々は鈍いわけじゃないしね」

ミコトとて元々鈍感であったわけではない。神楽の件があつて自分を愛することができなくなつてしまつたが故に自分への愛に気がつけなくなつていただけなのだ。

そして葵に諭されたことにより、多少改善されたために鈍感さが薄れているようだ。

「一応言つておくけど……ちゃんとその子達の気持ちも受け止めた上で答え出さないとダメだからね？」

「……わかつてるさ」

それは場合によつては修羅場にもなりかねないのだが……それでもミコトの性格上、きちんと誠意を見せることになるだろう。

もつとも、それがどれだけ時間がかかるのかは今はまだわからないが。

「それじゃあ話はここまでつてことで……永遠亭にはまだつかないの？」

「ああ、永遠亭ならもうすぐそこ……え？」

「……およろ？」

話をしている間に永遠亭に到着したミコトと竜希。

だが、二人はその目に映る光景に驚きを隠せずにした。

「これは……一体？」

「ただごとじゃあ……なさそうだね」

二人の目に映るのは……激しく荒らされ、ボロボロの永遠亭であつた。

第123話

「ねえ、ミコちゃん。一応聞くけどこの状態が永遠亭のデフオってことは……」

「あるわけないだろ」

「だよねえ」

ミコトと竜希の目に映る荒れ果てた永遠亭。常ならぬ状態であることは一目瞭然だ。

「明らかに人為的な壊れ方してるし……誰かが襲撃してきたってところかな？問題はそれが誰かなんだけど心当たりは？」

「ないな。妹紅がほとんど毎日輝夜を殺しに来ているがここまではすることはないし行き過ぎたときは永琳が止めるからな。それによりこの幻想郷で永遠亭を本気で襲撃して且つここまで荒らせることができる者なんていないと思う」

「なんでまた？」

「八意永琳がいるからだ。永琳はこの幻想郷においてお前を除けば最強といっても過言でないほどの実力者だ。そんな奴がいてここまでの惨状になるなんて本来はありえない」

ミコトの言うとおり、永琳は幻想郷においてあの紫や戦神である加奈子以上の力を有している。そんな圧倒的強者が存在する場所を襲撃し、永遠亭を荒らすことができる者が竜希以外に存在するとはミコトには到底思えないようだ。

「まあつまりは永遠亭ではよほどのことが起きてるって考えて間違いないってことだね……流石に見て見ぬふりするわけにはいかないしとりあえず詳しい事情聞いてみよつか。こんな惨状になってるけど今この屋敷の住人はここに居るの？」

「今調べる」

ミコトは能力を使って屋敷内に人がいのかどうかを調べた。

すると……

「!?これは……」

「どったの？」

「……悪い竜希。詳しい話は後でする」

竜希にそう言うやいなや、ミコトは足早に永遠亭の中に入っていった。

（あいつがあれだけ慌てるってことは……誰か負傷者がいるのか）
竜希もまた、真剣な面持ちを浮かべてミコトを追って屋敷に入ってしまった。

屋敷に入ったミコトは、一直線に目指したある部屋の麩を開いた。部屋の中には永琳、鈴仙、そして……布団で横たわる傷つき、気を失ったてゐの姿があった。

「ミコトさん？……ミコトさん!!てゐが!てゐが……!!」

ミコトの来訪に戸惑いの色を見せた鈴仙だったが、それはほんの一瞬のことで、すぐさまミコトにすがるようにしがみついていた。

「わかっている。てゐを治しに来た」

「あの娘を……てゐを助けて!あの娘私をかばって大怪我を……お願いです!てゐを……てゐを!」

「落ち着きなさいウドンゲ。そんなにしがみつかれたら治療もできないわよ」

ミコトの声が聞こえていないらしく、必死にミコトの腕を掴みながら懇願する鈴仙を、永琳が宥めた。

「ツ!? ……ごめんなさいミコトさん。私……」

「……事情はわからないが取り乱す気持ちはわかる。治療をはじめめるから離れてて」

「はい」

冷静さを取り戻し、ミコトから離れる鈴仙。そしてミコトはてゐの治療を行うためにスペルカードを取り出した。

「命極『国生みの伊邪那岐』」

ミコトの持つ治療のスペルカード……その力でてゐの傷はみるみる治癒していった。

(……以前見た特よりも治癒のスピードが上がってる。それだけミコトの力が増しているということ?)

「これは……ただ事じゃなさそうだね」

訝しげな表情で傷が癒えてゆくてゐると、てゐを治療するミコトを見ていた永琳の耳に、竜希の声が聞こえてきた。

「あなたは……」

「こんにちは。こうして面と向かって挨拶するのは初めてかな? 俺は……」

「紫黒竜希でしょう? あなたの事はミコトから聞いているから知っているわよ」

「あ、そうだったんだ。ところで……今の状況を端的にでもいから説明して欲しいんだけどいいかな?」

「……ええ。ただそれはてゐの治療が終わってからでいいかしら?」

「ああ、もちろんだよ」

竜希と永琳は治療を見守った。

「ふう……これでよし。しばらくすれば目を覚ますと思う」

治療を終えて、ミコトは安堵の溜息を漏らしながら言う。

「てるはというと、体の傷は全て癒やされ、安らかな寝息を立てながら眠っている。」

「よかった……ありがとうございますミコトさん」

「気にするな。それはそうと一体何があつたんだ？屋敷の惨状とい
てゐの怪我といい……」

「ただ事じやなつて思うのは当然だよね……もしかしなくても相
当な面倒事かな？」

ミコトと竜希は真剣な眼差しを永琳と鈴仙へと向けながら尋ねた。

「……月」

「え？」

「月の人間が……攻めてきたのよ。私と姫を狙つてね」

顔を伏せながら言う永琳。鈴仙の表情も暗かった。

「月の人間が輝夜と永琳を狙つて？」

「それはまた陰謀がありそうだね……どういう目的があつてのこ
となのかな？」

「……彼等は姫の能力と私の頭脳を欲しているのよ。ある薬を作る
ために」

「ある薬？」

「まさか……蓬菜の薬？」

輝夜の能力と永琳の頭脳……そこからミコトが導き出した答
えは蓬菜の薬であった。

「あく……それ聞いてなんとなく察しちやつたよ。月の権力者が
それを欲しがつてるから二人が必要になつたつてところかな？」

「その通りよ。月にはいくつかの派閥があるのだけれど、その中でも
昔から蓬菜の薬を得ることに執着していた権力者を有した派閥があ
るのよ。そいつらは私達が行方をくらましてからずっと探し続けて

いたようよ」

「探していたか。それってつまり……二人はその連中に見つからない為に隠れていたということか？」

「そうよ」

元々、永琳達がこの幻想郷に移り住んだのも月からの搜索をまくためであった。それは幻想郷であればそう易々見つかることはない判断したためであり、現にこれまでは見つからずにやり過ごしてこられた。

だが……

「ただ……どういわけか見つかってしまい、昨晚連中がここを襲ってきたのよ。もちろん戻るつもりはなかった私と姫は抵抗したわ。鈴仙とてゐるも協力してくれた」

「その結果が外の惨状とてゐるの怪我……ってことか」

「はい。てゐるは戦闘中に私をかばって怪我を……」

鈴仙はてゐるに視線を向ける。その目の端には涙が溜まっていた。

「……その襲ってきた連中はどうなった？どこにも見当たらないし……気配も感じられないんだが？」

「ある程度手傷を負わせることができたから一先ず撤退してくれたわ。かろうじてだけれど。けれど……あの程度で連中が諦めたということはないでしょう。間違いなくまた攻めてくるわ。当然昨晚以上に戦力を揃えて……今夜にでも」

表情を暗くし、噛み締めるように言う永琳。その表情からは……諦めに似た感情を感じられる。

おそらく……もう抵抗しても無駄だと思っているのだろう。

「永琳、輝夜はどうした？」

そんな永琳に、ミコトは輝夜の所在を尋ねた。

「自室で塞ぎ込んでいるわ。姫は……この幻想郷を大層気に入っている。月に帰る事を望んでいないから……」

「……そうか。わかった」

それを聞いて、ミコトは部屋を出ようと襖に手をかけた。

「どっくのヤミ」ちゃん？」

「輝夜のところだ。話したいことが……話さなきゃならないことがある」

振り返りながら答えるミコト。その目からは、ある種の決意のようなものが見えられた。

「……ミコト」

そんなミコトに……永琳が声をかけた。

「姫を……お願い」

「ああ。わかった」

永琳に返事を返した後に、部屋を出るミコト。

そして……その足で輝夜のいる部屋へと歩を進めた。

嘆きの月の姫に……果たしてミコトは何を告げるのだろうか？

第124話

「あ、そだそだ。永琳さん、これ」

ミコトが部屋を去った後、竜希は頼まれていた薬草を永琳に渡した。

「幽々子さんに頼まれて持ってきました」

「……………わざわざありがとう。まあ、もう意味ないのだけれど」

竜希から薬草を売つけ取る永琳であったが、その表情はひどく優れなかった。

「え？それまたどして？」

「どうしてって……………決まっているでしょ？私は姫と共に明日には月の使者に連れて行かれてしまうのよ。これはそもそも新薬の研究の為に必要だったのだけれど……………月に行ってしまうばもうその研究もできなくなるでしょうから」

「お師匠様……………」

表情を暗くさせ、うつむく永琳。そんな永琳を、鈴仙がいたたまれなさそうに見つめている。

「……………解せないねえ」

「え？」

「あのさあ永琳さん。俺の見立てでは君かなり強いよね？それこそ君は妖怪の賢者八雲紫や軍神八坂加奈子を凌ぐ強さを持っているはずだ。違うかい？」

「……………否定はしないわ」

竜希の言葉を否定しない永琳。

悠久ともいえる時を生きた蓬莱人、八意永琳……………その力はもはや絶大だ。

だからこそ竜希は疑問に思ったのだ。なぜ永琳程の実力者がいながら月に連れ去られることになるのか。

「……………5人」

「ん？」

「私の知っている範囲となるけれど……………蓬莱人は5人いるわ。私

と姫、藤原妹紅。そしてあと二人……そのうちの一人は……」
「う……ああ」

どうやら鈴仙もその者のことは知っているようだ。その者の事を
思い返し、体を震わせている。

「……それは誰？」

「……名は法月千良ほうげつせんら。彼は私と同じ時を生きる蓬莱人であり……
月の最強戦力よ」

「月の最強戦力……それはつまり永琳さんよりも強いということ
かい？」

「ええ。それこそ……私など足元に及ばないほどに」

「……うわお。マジかよおい」

あの永琳でさえ足元にさえ及ばないほどの蓬莱人、法月千良……
まさかそんな者が存在しようとは思わなかった竜希は思わず苦笑い
を浮かべてしまった。

「つまりはそいつがいるから逃れる術はないっていうことかい？」

「そうよ。彼の力はあまりにも強大すぎる。誰であっても勝つことが
できない。それに……」

「なんだい？」

「彼は……私の元・許嫁なのよ。彼は異常なまでに私に執着して
いて……」

どうやら永琳は彼のことを余り快く思っていないらしい。好意を
寄せられ、執着されることは彼女にとって悍ましいことであり、表情
からは不快感が感じ取れる。

「……面倒そうなんだねえ。ていうか嫌いななの？」

「嫌いよ。二度と会いたくないもの」

「……はつきり言うほどに嫌いなようだ。」

「きつと月に帰ったら強引に結婚させられるのでしょね……強
引に結婚させられてあいつの好き勝手されて……あいつから一
緒にいないときはしたくもない研究をさせられて……」

月に帰ってからのことを思い、諦めたかのような表情を浮かべる永
琳。

そんな永琳に……

「ふうん……そんなに嫌なら守ってあげよつか？」

「……は？」

竜希はなんでも無いような軽い調子でそう言った。

あまりのことに永琳は一瞬呆気にとられ、間の抜けた声を上げてしまふ。

「いや、だからあ。嫌なら俺が守ってあげるって言ってるんだよ。その……えつと……名前なんて言っただけ鈴仙ちゃん？」

「……法月千良」

「そう！その法月……千良？そいつから永琳ちゃんを守ってあげるよ！」

両手を広げ、自信満々な笑みを浮かべながら言う竜希。どうやら本気であるようだ。

「じ、自分で何を言ってるのかわかっているの？彼は……彼の強さは異常なのよ？確かにあなたは私よりも強いようだけれど……それでも……」

「大丈夫大丈夫！俺より強い？だからどうした。俺は……『最強』さ。俺に勝てるのはたった一人だけ。そしてその一人は……しんらだっけ？せんかだっけ？まあなんでもいいや。そいつじゃあないから」

「……どうして断定できるのかしら？」

「いやあ、多分だけどさあ。そいつって強いだけで小物だから」

「小物……？あいつが？どうしてそんなこと言い切れるの？」

あつたこともないくせになぜ千良のことを小物だと断定できるのか？それが気になった永琳は竜希に尋ねた。

「だってさあ……物覚えのいい俺に名前を覚えられないんだよ？どんだけ強かろうとそいつが小物であることの証拠さ。俺ってどうでもいい奴の名前は昔っからおぼえられないから。困ったものだねえ」

「困ったものって……そういうものなんですか？」

竜希のあまりの緊張感のなさに、鈴仙は気が抜けてしまい、苦笑い

を浮かべてしまう。

ある意味これも竜希の長所と言えるであろう。

「……………信じてもいいの?」

「うん?」

「絶対に守ってくれるって……………信じてくれてもいいの?」

永琳は貫くような……………それでいてすがるような視線を竜希に送る。

「俺ってさ、この通り普段からヘラヘラしていい加減でちやらんぽらんでどうしようもない馬鹿なやつだけどさ……………でも人の信頼を裏切るようなことをして心が痛まないほどのクズではないって自覚してる。だから……………約束するよ。永琳さんを守ってあげるってね」

ニコリと優しい微笑みを浮かべて、竜希は約束を交わす。

必ず……………守ると。

「……………わかったわ。そこまで言うのなら信じてあげるから守ってみせなさい」

「あはははっ!ええ。守らせていただきますとも」

腰に差した刀を手にし、まるで騎士のように竜希は頭を下げた。

「ともかく……………これで少し希望が見えましたね。竜希さんが月の使者たちと戦ってくれるって言うなら……………!」

「……………あれ?鈴仙ちゃんなんか誤解してね?」

「……………ええ?」

「俺永琳さんを守るって約束したからその……………あれ、あいつ」

「……………法月千良」

「そ、そいつとは戦うけどさ。他の連中は知ったこっちゃないよ?」

「……………ええ!」

竜希のその一言に、鈴仙は驚きを隠せずに行った。

「なんていうかね……………そもそもいくら小物だと言っても強いんじゃないの相手の相手するので精一杯だからさあ。他の奴相手にする余裕ないわ多分」

「そ、そんなあ……………」

「つかさ、他の連中もそんなにヤバイの？」

「そうねえ……まあ幻想郷トップクラスに入れる程度の实力は持つてるわね。皆」

「おお、それは凄い」

「なんでお二人共そんなに余裕なんですか!？」

「なぜか余裕そうにする竜希と永琳を見て、鈴仙は取り乱してしまっ
た。」

「余裕にもなるっしょ。というか鈴仙ちゃん。むしろ君はなんでそんなに取り乱してるの?」

「そうね。我が弟子ながら情けないわよ?」

「え?それってどういう……?」

「まさか一緒に戦ってくれるのが俺だけ思ってるの?鈴仙ちゃん一人大切な人を忘れてない?」

「それって……あ」

「竜希に言われてようやく思い出したのであろう。」

「竜希だけじゃない。もう一人……戦ってくれるであろう者がいる。」

「誰よりも優しく……誰よりも他者を思いやる者がいる。」

「……ミコトさん」

「そう……ミコトがいるのだ。」

「他の連中はミコちゃんがどうかしてくれさ。俺が永琳さんを守るのなら……ミコちゃんが輝夜ちゃんを守る。そのためにミコちゃんは今輝夜ちゃんのところに行ってるんだから」

「竜希は輝夜の下へと向かったミコトのことを思い、笑みを浮かべた。」

第125話

輝夜は自室で布団にくるまりながら俯いていた。

(もう……ここには居られないんだ。明日には私は月に……) 今夜もまた月から使者が訪れる。昨夜はどうか撃退することができたが、今夜はおそらくそうはいかないと輝夜は考えていた。

おそらく今夜は昨夜とは比べ物にならない戦力で襲激してくるに違いない。そうなれば……抵抗しても無駄であろう。

いくらこちらには強大な力を持つ永琳がいたとしても……向こうにはそれ以上の力を持つ者もいるのだから。

(……嫌だ。月に帰りたくなんてない)

輝夜は月に帰ることを望まなかった。月に戻れば……正確には奴等に連れてかれてしまえば、自身は蓬莱の薬を作るための実験に利用される。そうならば輝夜に自由など許されない。一生縛りつけられるのは目に見えてるのだ、誰だって嫌に決まっている。

それに何より……輝夜は幻想郷とそこに住まう者たちを気に入っている。

この地は輝夜達を住人として受け入れてくれた……いわゆる第二の故郷といってもいい。そしてこの地に住まう者達との交流を輝夜は心から楽しんでるのだ。

その中でも特に……藤原妹紅と一夢命の存在は彼女にとってかけがえのないものであった。

藤原妹紅……かつて自身に求婚してきた男、藤原不比等の娘で蓬莱の薬を飲んだことよって輝夜と同じく不老不死となった少女。幻想郷に来てからは父親の復讐を理由に輝夜と殺し合う関係にあるが……それは輝夜にとっては嫌ではなかった。むしろ、輝夜にとっては充実したものであった。

殺し合いながらも、輝夜は妹紅のことを……大切な悪友、もしくは親友だと思っているのだ。

そして……一夢命。不死故に誰も愛することができなかつた輝夜の心の檻を壊してくれた大恩人にして……輝夜の想い

人。心の底から慕い、愛した美しく心優しい少年。彼と過ごす時間は……長い時を生きてきた輝夜にとって、何よりも光り輝く尊い日々であった。

だが……そんな二人とも、別れなければならぬ。月に連れ去られれば……もう二度と会うことができないのは目に見えていた。

「嫌……だ。もつと妹紅と……ミコトと一緒に居たいよお」
あまりの悲しみから、大粒の涙を流す輝夜。ポロポロポロポロと……とめどなく、涙は溢れてくる。

「助けて……誰か……誰でもいいから助けて」

思わず口から出てしまうのは助けを求める言葉。誰でもいい……誰でもいいから助けて欲しいという願い。それに……答えるかのように現れる者が一人。

「輝夜、何をしているんだ？」

輝夜の耳に聞き覚えのある優しい声が聞こえてくる。

顔を上げるとそこには……ミコトが居た。

「ミコト……？なんでここに？」

「なんでって……今日来るって約束してただろ？」

「あ？」

そういえばそんな約束していたと思いつく輝夜。愛しいミコトとの約束を忘れてしまうほどに、輝夜は追い詰められてしまっているようだ。

「ご、ごめんなさいミコト。忘れていたわ」

「そっか……まあ仕方ないか。昨日本当に大変だったみたいだしな」

「……知ってるの？」

「さつき永琳に聞いてな」

「そう……ミコト、私……いえ、なんでもないわ」

輝夜はミコトに助けを求めようとした。月からの使者から自分を守ってくれと。

でも……そんなこと言えなかった。言えば優しいミコトのこ

とだ、自分を守るために戦つてくれるだろう。しかし、月の使者たちは強いのだ。それこそ幻想郷の大妖怪と呼ばれる者たちに匹敵するほどに……故に、戦うことになればミコトが傷つくのは明白だ。それは……輝夜にとつては望むことではない。だから輝夜はミコトに助けを求めることができなかった。

だが……そんな輝夜の心境は、ミコトにはお見通しだ。
「……輝夜」

ミコトは輝夜を覆っていた布団を剥がし、輝夜を優しく抱きしめた。

「ミ、ミコト？」

「輝夜……俺が守るよ」

「え？」

「俺が……輝夜を守る。月になんて連れて行かせやしないさ」

ミコトは優しい声色で、輝夜に言い聞かせる。

「だ、駄目よ！あいつらは強いので私を守ろうとすればミコトが……！」

「たとえ傷つこうとも守る。守ってみせる」

「私は嫌！ミコトに傷ついて欲しくない！私のこと守らなくていいから！助けてくれなくていいから！だから……だから！」

必死にミコトに訴え掛ける輝夜。本当は嬉しかったのである。ミコトが守ると言ってくれて……ただ、それ以上にミコトが傷ついてしまうのは輝夜にとっては嫌なのだ。

「……俺のこと心配してくれてるんだな。ありがとう。でもな……俺も嫌なんだ」

「嫌？何が？」

「輝夜を守れずに……輝夜が月に連れ去られてしまうことがだ。輝夜は俺にとつて大切な存在なんだ。だから行って欲しくない。輝夜のために……なにより俺のために。俺は輝夜を守りたい」

「ツ!!で……も。それでも私……は……」

「輝夜……お前は本当はどうして欲しいんだ？お前は俺に……本当はどうして欲しい？」

「どうして．．．欲しい？私は．．．私は．．．」

ミコトにどうして欲しいか．．．．．そんなの決まっている。

傷ついて欲しくないけれど．．．．．それでも輝夜はミコトに．．．

「．．．．．いいの？私．．．．．言ってもいいの？」

「いいんだよ。それは．．．．．俺の願いでもあるんだから」

「ミコト．．．．．守って。私を守ってミコト！月に行きたくない！

実験に利用されたくないなんてない！私は．．．．．私はここに居たい！

永遠亭に．．．．．皆のいる幻想郷に居たいの！だから．．．．．だから

私を守って！」

輝夜は願いを言葉にする。真っ直ぐにミコトを見据え、自身の願いをぶつける。

「．．．．．ああ、守るよ。俺は輝夜を守る．．．．．絶対に守ってみせる。約束するよ」

ミコトは輝夜の手を取りながら約束した。

敢えて自身が嫌う『絶対』という言葉を使ってまで．．．．．守ってみせると約束した。

「ミコト．．．．．ありがとう。ありが．．．．．とう」

輝夜はミコトの胸に顔を埋めて涙を流す。先程流した絶望の涙とは違う．．．．．ミコトへの感謝と喜びの涙を。

「み、みつともないところを見せてしまつてごめんなさい」

しばらくして泣き止んだ輝夜は、顔を赤らめてもじもじとしながらミコトに謝る。

「みつともないだなんて思わないさ。だから謝る必要はない」

「ミコト……ありがとうございます」

「礼を言う必要もないんだが……まあいいか。それよりも、お客さんだぞ」

「え？お客って……」

「輝夜ー!!出てこーい!!」

屋敷の外から、輝夜を呼ぶ声が聞こえてきた。

「この声……妹紅ね」

「ああ。今日もお前を殺しに来たんだろう」

「でしょうね。こっちは大変だつていうのに……でもまあいいわ。気分転換にちよつと行つてくる」

「行つてらっしゃい」

輝夜は妹紅と殺し合いをしに、部屋を出て行つた。

「……居るんだろ？出てこいよ」

「あははっ！やっぱバレてたか。さっすがミコちゃん」

輝夜が出て行つた方とは反対の麩から、竜希が出てきた。

「人の話を盗み聞きとは感心しないな」

「そう言うなつて。聞いてたて言つても最後の方ちろつとだけなんだからさ」

「全くお前は……」

竜希の態度に、ミコトは思わず頭を抱えたくなつてしまう。

「まあまあ。あ、そうそう。ミコちゃん今夜の事なんだけど……俺も守ることにしたから」

「お前も？」

「そ。まあ俺が守るのは永琳さんの方だけどね。なんか相当強いのが向こうにいるみたいだからね。だから守るつて約束しました」

「あの永琳が言うほど……まさか今のお前より強いのか？」

「みたいだよ」

「……大丈夫なのか？」

敵方に竜希よりも強い者がいると知り、ミコトは神妙な面持ちで竜希に尋ねた。

「大丈夫大丈夫。だってそいつ俺が名前を覚えられないんだよ？た

とえ俺より強くても小物であることは確定的。心配することないよ」

「……だからだよ」

「へ？」

「お前より強くのに小物……お前が負けることはないだろう。だが、だからこそお前は……」

ミコトは竜希を心配していた。ただ……その心配というのは竜希の身を案じてのことではない。

戦ってしまえば……竜希にとって望まぬ結果になってしまう。それ故の心配だったのだ。

「……ミコちゃん、俺はこの幻想郷を気に入ってるんだよ」

「ん？」

「気に入ってるからこそ……だからこそ可能な限り誰一人欠けて欲しくないと思ってる。その思いを前にすれば……まあ、嫌ではあるけど耐えてやるさ」

「……そうか」

(あの竜希が……か)

ミコトは少なからず驚いていた。

以前の竜希であるならば、自分以上の強者と戦うことなど確実に拒絶していたであろう。戦ってしまえば竜希の特性が災いしてしまうからだ。

にも関わらず今回は戦う決意をした……それは竜希の心境が外の世界にいたときに比べ変化していることを意味していた。

「そのせいでよくむちゃんの負担が大きくなるってのはアレなんだけどね。というかミコちゃんこそ大丈夫なの？俺は多分さつき言ってた奴の相手に手一杯になるんだけどさあ……そうなるとは全部ミコちゃんが相手することになるんだよ？」

「まあそうなるな。でもこっちも大丈夫だよ。何があっても輝夜のことは守るさ」

(たたとえば……どんな手を使おうともな)

(ミコト……?)

一瞬表情を曇らせるミコト……竜希はそれを見逃さなかった。

「とにかく俺の方も大丈夫だからお前は気にするな」

「りようかくい。んじや、今夜はお互い頑張りましょうか」

「そうだな」

ミコトと竜希は互いに拳を突き合わせ、互いの健闘を祈った。

クリスマス特別編（前編）

クリスマスの夜……そのイベントは紅魔館にて開催された。
「レーディース&ジェントルマン!!」

「ジェントルマンは圧倒的に不足してるけどね……」
「ちよつと竜希さん！横槍入れないでくださいよ！」

何やらそれっぽく仕切っていた文に、竜希がテンション低めでツツコミを入れると、文はポンポンとわかりやすく怒ってみせた。

「まあ気を取り直して……今宵は聖夜！そしてそれに相応しいイベントがこの紅魔館にて今まきに行われようとしております！その名も『ドキッ！サンタだらけのコスプレコンテスト！』」

文が宣言すると同時に、会場中から歓声が響きき渡る。

「まあポロリはないそうだけどね……」

「そんなもんは水着コンテストでやればいいんですよ！今回はとにかく出場者が誰が一番サンタのコスプレが似合っているのかを審査するので！あ、ちなみに参加者以外の方もコスプレしてますので読者の皆さん安心してください！」

「安心してなにに？てかメタイよ……」

「進行はこの私！清く正しいミニスカサンタの射命丸文！そしてアシスタントは……」

「……紫黒竜希で〜す」

堂々と自己紹介する文。対して、アシスタントであるにもかかわらず、竜希のテンションは酷く低い。

「あややや？竜希さんテンション低いですよ？せつかくのお祭りなんですからもつと盛り上がりましょうよ！」

「俺だつて盛り上がりたいたいよ……こんな格好でなければね！」
竜希の格好……それは赤と白で彩られたサンタではなく、茶色に赤い鼻のトナカイであった。

「いいじゃないですか。似合ってますよ？トナカイはサンタにとってなくてはならないあ……相棒ですからね！」

「今足つて言おうとしたよね？絶対に足つて言おうとしたよね？」

「それはどうでもいいとして」「良くないからね!?!」はいはい、愚痴なら後でたっぷり聞きますから進行妨げないでください」

「ぐっ……わかったよ」

「それでいいのです。ではここで5人の審査委員をご紹介いたします！まず一人目！今では知らぬ者はいないといっても過言ではない外の世界から訪れしハイパー美形！コンテスト参加者でなかったことを嘆く女性も多数いた！一夢ミコトさんです！」

「文……なんだよその紹介は？」

紹介されたミコトは、頭が痛そうに抑えていた。ちなみに衣装はオーソドックスな厚着である。

「ミコちゃん。今からでも参加しようとは……」

「お前は黙ってソリでも引いてろ」

「いつにも増して辛辣じゃね?!」

「まあ参加するようにしつこく誘われてましたからね。それでストレスが溜まっていたのでは？」

「……わかってるならそれ以上言うな。次いけ次」

ぶつきらぼう気味に進めるように促すミコト。どうやら相当イライラしてしまっているようだ。

「了解しました。それでは二人目の審査員を紹介！二人目は魔法の森に住まう普通の魔法使いこと、霧雨魔理沙さんです！」

「私の紹介簡単すぎだぜ!?!」

自身の自己紹介があまりにも簡潔すぎることに若干ショックを受けている二人目の審査員の霧雨魔理沙。ちなみに衣装はミニスカサント。

「すみません。他に紹介の仕方が思いつかなくて……」

「だからってそれで酷いぜ……」

「嘆くな魔理沙……俺よりマシだ」

肩を落とす魔理沙をミコトが励ます。

「ミコト……ありがとうだぜ。そういえばこの衣装……似合ってるか？」

「ああ。いいと思うぞ」

「そっか・・・へへっ」

ミコトに褒められて嬉しそうな魔理沙。機嫌は完全に治った模様。なお、それを見た会場のミコトに惚れている女の子たちは羨ましそうにしていたのは言うまでもないであろう。

「では続きまして3人目。幻想郷の創設者にして妖怪の賢者！サンタとなってもその胡散臭さは微塵も揺るがない！八雲紫さんです！」
「ふふふっ。よろしくね♪」

3人目の審査員は八雲紫。衣装はスマートなドレスタイプのサンタコスプレであり、大人の優雅さを醸し出す。もつとも、胡散臭い笑顔は消えていないが。

「紫さんあの紹介には何も思わないの？」

「だって事実だもの。特に気にしていないわ」

「流石は賢者！器も大きいですね〜」

「褒めてくれてゆかりん嬉しい♪」

((ゆかりんって・・・自分の歳考えていいなよ))

今の紫の発言に会場にいる全員の気持ちが一つになった。もつとも、口に出さうものなら何をされるかわからないため心の内にとどめたが。

「では4人目・・・ここからは審査員兼スペシャルゲストになります。いつもクスクス笑顔を絶やさぬ麗しき令嬢！しかしその実態は究極にして超絶なサデイスティック！ルミナスさん作の『東方くもう一人の巫女〜』よりおいでのレティシア・スカーレットさんです！」
「クスクス、よろしくね♪」

紹介をうけ、ご機嫌な笑顔を浮かべるレティシア・スカーレット。衣装はサンタカラーのゴスロリ服である。

「よ、よく来てくれましたねレティシアさん・・・」
「クスクス、こんなに楽しい催しに呼んでもらえて光栄だわ♪でも竜希、どうしても笑顔がひくついているのかしら？」

「い、いや・・・それはその・・・あの・・・」

「クスクス、安心しなさい。コンテストが終わったらたっぷり弄ってあげるから♪」

「それが嫌なんですけど!?!」

「……どうやらレイテシアには竜希が何に怯えていたのかわかっていた模様。」

「とうか弄られるの俺だけ!?!ミコちゃんも弄つてよ!」

「俺を巻き込むなこの駄トナカイ!」

「クスクス、安心しなさいミコト。あなたも後で弄つてあげるから♪」
「勘弁してくれ……」

ミコトも竜希同様いじられることが確定した。もはや哀れとしか言えない。

「あややや……これは聞きしに勝るドサドつぷりですね。では最後の審査員の紹介に移ります。ある意味では我々にとって神とも言える存在!彼がいなければこの世界は成り立たない……この作品の作者!Exさんです!」

「はい、よろしくお願いします」

「!?!」

「第一声がそれって酷くないですか!?!」

その場にいた全員(紹介した文含む)に言われ、凹むEx。ちなみに衣装は……もうめんどいから説明なしで。

「ナレーターさん!?!とうか私ここにいるんだからナレーター誰よ!?!」

誰でもいいでしょ。一々突つ込むめんどくさい。

「すつごく辛辣ですね!?!とうか話戻しますけど第一声が帰ってなんですか!?!そこは普通なんでお前が的なりアクションになりません!?!」

「クスクス、仕方ないわ。だってあなただもの♪」

「レイテシア様!?!」

「うわあ……本当にこの人レイテシアさんのこと様付けで呼んでるんですね」

「あれでも主はサドラしいから崇拜してるらしいよ?」

「!?!このキャラでサドとかないわ」

「……あれ?目から汗が流れてきたよ?」

あまりの対応の良さに嬉し涙が出ているようだ。

「扱いひでえ……というか竜希さん、同じ弄られ系なら助けてくださいよ」

「帰ればいいんじゃないかな？」

「……こうなつたら意地でも最後まで居座つてやる」

「というわけで審査員4人+aの紹介も終わりましたのでお次はいよいよ参加者の紹介です！ エントリーN0. 1！ 幻想郷最強の人間にして名物巫女！ 同じ紅白でも今宵は巫女服ではなくサンタ服を着て現れるのは……博麗霊夢さんです！」

「なんで私がこんな……」

ブツクサと文句を言いながら登場するのは博麗の巫女、博麗霊夢。その衣装は脇を大きく露出させたサンタ服だ……。まあ、ようはいつもの巫女服をサンタっぽく仕立てたものである。

「エントリーN0. 2！ このコンテストの会場である紅魔館で働くメイド長！ ミニスカートからチラリと覗く銀のナイフがいい味出してる……十六夜咲夜さんです！」

「い、いくらなんでも丈が短すぎるわ」

スカート裾を押さえながら現れたのは紅魔館のメイド長、十六夜咲夜。衣装はミニスカサンタであり、恥ずかしそうに顔を赤くしている。

「エントリーN0. 3！ 人形を魅せれば幻想郷一！ だが今回はあなたの魅力を見せてもらうぞ！ トナカイ上海人形を携えし……アリス・マーガトロイドさん！」

「……たまにはこういうのも悪くないかしら？」

トナカイにコスプレした上海人形を肩に乗せ、満更でもなさそうな様子でアリス・マーガトロイドが現れる。その衣装はオーソドックスな厚着のサンタだ。

「エントリーN0. 4！ その笑顔の奥に秘めたるはサディスティックな本性！ だけど本当はお花が大好きな乙女！ 幻想郷のUSCこと……風見幽香さんです！」

「よろこべ」

ドレスタイプの子ンタ服を身に纏い、余裕な笑顔を見せながら登場した風見幽香。だが、よく見るとその頬は恥ずかしさでほんのり紅く染まっていた。

「エントリーNo. 5！いつもは大人な優雅さを持つ魅力的な亡霊達をすべし者！サンタになってもそれは健在か……西行寺幽々子さんだ！」

「よろしくね〜」

最後に登場したのはニコリと微笑みを浮かべる西行寺幽々子。来ている服は和服をサンタカラーにしたものだ。

「以上の5人によって競われるサンタコスコンテスト！果たして優勝の栄冠は誰の手に輝くのか！そして優勝するために待ち受ける試練とは！」

「「ちよつと待って、試練って何？」」

「詳しくは次回のコンテスト本編でわかるよ〜」

「というわけで読者の皆さん！次回をお楽しみに！」

「「まさかの次回へ続く!?!」」

まだクリスマスではないので仕方がない。

クリスマス特別編（後編）

「さて、それでは早速第一の審査と参りましょう！」

「あゝ……その前にちよつといいか」

審査を始めようとする文に、ミコトが待ったをかけた。

なお、先程までのイライラは既になりを潜めている……霊夢のサンタコスを目にした為に。

「んにゃ？何かなミコちゃん？」

「いや、審査員として気になった事なんだが……こういうコンテストの審査って何するんだ？」

「あ、私もそれ気になるぜ。事前に知らされてなかったし」

ミコトは純粹な疑問を投げかけ、魔理沙も同調する。まあ幻想郷ではこれまでこんな催しはなかったので仕方がないが。

「なるほど、それは確かに気になるでしょう。ですが……残念ながら秘密です。そのほうが面白いですから」

「おいおい、そりやないぜ」

「……ま、予想はしてたけどさ」

結局教えてもらえなくて残念そうにする魔理沙。一方でミコトは予想してはいたようなので呆れたように溜息を吐いていた。

「でもまあ大丈夫だよ。俺達もよくわかんなかったから適当にそれっぽいにしたらただだから」

「それは大丈夫じゃないだろ」

「まあ気を取り直して第一審査参りましょう！第一審査は……クリスマスケーキ作りです！」

文が宣言すると同時に、紅魔館のメイド妖精たちが準備を始めた。

「クリスマスといえばクリスマスケーキ！というわけで参加者5人にはこの場でケーキを作ってもらいます！」

「というわけで始め〜！」

「……前置き短かつ!」

あまりにも前置きが短いことに参加者である霊夢達はツツコミを入れた。

「ほらほら。突っ込んでる暇があったら早く作業進めたほうがいいですよ」

「……仕方ないわね」

「くっ……後で覚えてなさいよ」

「ケーキ……最近作ってないわね」

「料理はあまり得意ではないのだけれど……」

「……食べるのなら自信あるんだけどな」

順に咲夜、霊夢、アリス、幽香、幽々子が思い思いのことを口にして、調理に取り掛かった。

「さて、皆さん調理を始めたわけですが……審査員の方々の見解をお聞かせ願いますか？」

「ククス、やはり一番有利なのは咲夜かしらね。普段から料理しているから熟練度では一番よ」

意見を求められ、一番はじめに答えたのはレイシアであった。別次元の幻想郷とはいえ、咲夜のことをよく知る彼女からしたら大本命は咲夜であるのは当然といえは当然だ。

「そいつはわからないぜ。アリスも結構料理上手いからな。結構前だけどアリスのケーキ食べたことあるけどうまかったぜ！」

対して魔理沙はアリスを推す。どうやらアリスの料理の腕前も中々のようだ。

「それを言うなら霊夢もよ。最近どこかの誰かの影響でお菓子作りをこそこそと練習していたもの」

「紫！あんた何バラしてくれてるのよ！」

自分を推してくれているにも関わらず、調理の手を止めて紫に怒鳴り散らす霊夢。まあ、恥ずかしいことをバラされたのだから当然であるだろう。

「なるほどね。じゃあ有力なのはその3人ってことかな？幽香ちゃんも幽々子さんに関しては何ミコちゃんどう思う？」

「どうって……まあ見たとおりとしか言えないな」

竜希に促され、ミコトは幽香と幽々子へと視線を移す。

幽香はそこまで戸惑っているわけではないが、あまり満足していな

いような表情で調理している。先程自分で言っていたとおり料理はあまり得意ではないようだ。

そして幽々子はというと……調理器具の使い方がわからずに適当に扱ったり、調味料をぶちまけたりしてしまったりともはやしつちやかめつちやかだ。普段から料理は妖夢、竜希に任せつきりなので苦手な部類なのだろう。

「あややや……これはお二人にとって厳しい戦いになりそうですね。それでは調理終了までキンクリを……」

「いや、ちよつと待って!」

文がキング・クリムゾンを宣言しようとしたその時、一人の人物が声を張り上げる……まあ、E xなのだが。

「どしたの〜?」

「どうしたもなにも私だけ審査員の中でなにも意見言っていないですよ?聞いてみようとは思わないんですか?」

「ごめんなさい、正直どうでもいいです」

「「確かに」」

「皆辛辣!」

まるで打合せしたのではないかと疑うほどに息を合わせて言い放つ文と竜希、そしてそれに同意する会場中の人々。まあ、仕方がないであろう。

「クスクス、仕方ないじゃない。誰もあなたの意見なんて興味ないんだから♪」

「レティシア様……私涙が出そうなんですが?」

「クスクス、泣いたらもつと泣かせるわよ?」

「泣きません男の子ですから!」

レティシアのDSが発動し、E xはビシツと敬礼した。もはやレティシアに逆らえるものなど存在しない。

「さて、そうこうしているうちにキンクリするまでもなく調理が完了しそうですね」

「……本当ならこんなに早くケーキができるなんてありえないんだがそこは突っ込むべきか?」

もはやキンクリするのもめんどくさかったのだ。仕方がないだろう。

「ナレーターもこういつてるし、まあいいんでないの？それよりも皆できたみたいだね。それじゃあ実食と参りますか！」

実食ということで参加者達は審査員席に自分の作ったケーキを持っていく。

持っていくのだが……

「さあミコト、食べなさい」

「ミコト、自信作だから食べてみてくれるかしら？」

「見てくれはあまりよくないけれど……食べてくれるわよね？」

「ふふふ。私が初めて作った手料理よ。食べてね？」

……5人中霊夢、咲夜、幽香、幽々子の4人は他には目もくれずに真っ先にミコトの下にケーキを持って行った。

「あやや、まあこのメンバーならこうなるだろうとは予測していましたが……」

「しよがないっしょ。でも……多分あの調子じゃああの4人肝心なこと忘れてるよね」

「肝心なことというと？」

「ミコちゃん甘いのが嫌いな」

「……ミコトさんの冥福を祈りましょう」

ケーキを差し出せれ、苦笑いを浮かべながら冷や汗を流しまくってるミコトを見て、文はほろりと涙を流しながら合掌する。

なお、他の審査員達もアリスの作ったケーキを食しながらミコトを哀れんでいた。

「ミ、ミコト……大丈夫か？」

ケーキの実食を終え、満身創痍で机に突っ伏すミコトに魔理沙が声をかける。

「……」

机に突っ伏しながら手だけ上げて親指を立たせるミコト。つまり大丈夫ではないというわけだ。

「クスクス、こんなになっても全員分のケーキを食べるなんて見かけに反して男らしいじゃない♪」

「そうね。ところであなたの隣の人もミコトとほとんど同じ状態なのだけど？」

紫はレテイシアの隣に座るE Xを見ながら言う。コイツも甘い物苦手なのである。

「クスクス、放置してもいいんじゃないかしら？見かけによらず打たれ強い事は座談会で証明されているでしょう？」

「そうね」

もはやE Xに慈悲などなかった。

「さて、それでは続きまして第二の審査へと移りましょう」

「参加者の皆さん、これから俺の言うことをよく聞いてね」

「」「えく……」

「……お願いだからあからさまに嫌そうな顔しないで。俺のメンタルボロボロになるから」

「クスクス、いつものことでしょう？」

「そうだけれども！」

竜希を弄り倒すレテイシア。流石は最強のDSである、全くブレない。

「もう……とにかくよく聞いてね。まずは首を少し傾けてください」

竜希に言われ、霊夢達は渋々と首を少し傾ける。

「次に口に手を当てて」

そして次に口に手を当て……

「そして……ニコツ♪と笑って」

「[[[[「ニコッ」]]]]」

「……『ニコッ』と満面の笑顔を浮かべた。

「[[[[「ニコッ」]]]]」

「あら〜♪」

思わず言われた通りに笑顔を浮かべてしまつて、幽々子を覗く4人は竜希に怒鳴り散らした。ただ、幽々子だけは依然ポーズをとつて笑顔のままであつたが。

「だつて笑顔が審査だつて言つても無理にやろうとしたら硬くなつちやうじゃないですか？だから可能な限り自然な形で笑顔になれるようにと配慮した結果ですよ。これも審査の為ですからどうかご理解を」

「とか言いながらシャッター切りまくつたのはどこの誰よ！」

「いや〜……記者としての本能が疼いてしまつてつい」

「あの短い時間での確に撮つてた癖によく言うわね……どうせはじめから写真撮る気満々だったのでしょ？」

「なんのことやら〜」

霊夢と幽香の追求をのりくりらりと交わす文。まあ、実際は幽香の言うとおりあらかじめ取るつもりだったのだろうが。

「でもまあ審査員としては十分いい評価対象になつたからな。結果的には良かったと思うぞ」

「うわっ!? ミコトいつの間に復活したんだ!？」

いつの間にやら何事のなかつたかのように復活を果たしていたミコトに、魔理沙は驚きを蹶にする。

ちなみに復活した理由は……まあ霊夢の笑顔を見たからなのだが。

「まあ、復活したのならなによりだわ……一人きつきとは違う意味で突つ伏してる人がいるけど」

紫が視線を向けた先には……突つ伏しながら机をバンバン叩いているExが居た。

「その人どうしたのさ？」

「クスクス、皆の笑顔を見逃しちやつて悔しがつてるのよ♪」

竜希の問いに、レティシアが愉快そうに答えた。

「……………審査員の癖に見逃すつてダメじゃね？」

「クスクス、珍しく意見があったわね竜希♪」

二人にボロクソ言われているE×であったが、それは彼の耳には聞こえていなかった。

「さて、これより最終審査に入ります！」

「ようやく最後なのね……………それで？何やらせるのよ？」

ようやく最後かとぼやきながら霊夢が尋ねる。

「参加者の皆は事前に言った通り包装されたプレゼントを用意してるよね？」

「ええ。一応ね」

竜希に言われてラッピングされたプレゼントを取り出す幽香。それについて他の4人も取り出す。

「最終審査はそのプレゼントを審査員に手渡ししてもらいます。つまりどのようにプレゼントするかを審査するわけです」

「ミコトがいい!!」

審査の内容を聞いて、アリスを除く4人が同時に言う。

そして……………

「……………ねえ皆。ここはミコトと一緒に暮らしてる私に譲ってくれないかしら？」

「あら？それを言うなら私とミコトは使用人仲間。だったら私が適任でしょ？」

「私だって花の世話を手伝ってもらってるからお礼がしたいのだけ
ど？」

「ミコトには恩があるから私もミコトがいいなく」

「……」

4人による争いが始まってしまった。4人とも先ほどの審査の時
にも引けを足らない笑顔であるが……目が全く笑っておらず、
その場だけダイヤモンドダストがちらつきそうなほどの冷気に包ま
れていた。

「あ、あの……誰にプレゼントするかはくじで決めることにな
ってるんだけど」

「……」

「はいどうぞ!!」

4人に凄まれ、竜希はくじの入った箱を即座に差し出した。

（（ミコトに当たりますようにミコトに当たりますようにミコトに
当たりますように……））

鬼気迫るほどに心の中で強く願いながら、4人はくじを引いてい
く。

「……アリスさん。ここであなたがミコトさんを当ててしまった
らどうなるんでしょうかね？」

「言わないで。考えないようにしてるんだから」

ただ一人、ミコトに当たることを強く願っていないアリスは、4人
の様子を見てビクつき、自分が当たらないようにと祈る。

しかし……現実是非常である。

くじの結果

霊夢↓魔理沙

咲夜↓紫

幽香↓レティシア

アリス↓ミコト

幽々子↓ハズレ

「なんで!？」

くじの結果を目にして、アリスは思わず叫んでしまった。そして当然というべきかなんというか……霊夢たち4人はアリスを恨めがましそうに見つめていた。

(……胃に穴が空いてしまいそう)

アリスがそう思うのは無理もないことであつた。

「どうかさ……聞きたいんだけどなんで私のところハズレになつてるの？ハズレってどう言う意味？」

「」「そのままの意味」「」

「もう嫌アアアア!!」

またしても突つ伏してしまうE x。もはやライフはマイナスを振り切つてしまつている。

「また突つ伏しちやいましたね……レティシアさん、起こしてください」

「クスクス、仕方ないわね。頭を思い切り叩けば起きるわよね♪」

「ゆつくりE xが誕生するね」

「首と胴体がさようならしちゃうってことですか!？」

「あ、起きた」

流石にゆつくりになるのは勘弁願ひたかつたようで、E xはすぐさま飛び起きた。

「さて、気を取り直してプレゼント手渡しと参りましょう。まずは幽々子さんとハズレからいつてみましょう！」

「せめてE xつて呼んでくださいよ……」

もはやツツコミにさえ覇気がなくなつてしまつていた。

「うふふつ、あなたも大変ね。でも、あなたが頑張つてくれてるおかげで私達がいるっていうのもわかっているわ。だから少なくとも私はあなたに感謝してる……だからこれを受け取りなさい」

幽々子は優しく微笑みを浮かべながら、E xにプレゼントを渡す。

「幽々子さん……ありがとうございます!あなたのおかげで癒されました!」

感極まつたE xは幽々子の手を掴んで感謝の言葉を口にする。

その瞬間……

「剣伎『桜花閃々』!!」

「ぎやああああああ!」

突如現れた妖夢（ミニスカサンタ）がスペルカードを発動し、EXを切り刻んでしまった。

「……幽々子様の色目を使うことは許しません」

「い、いくらなんでも……理不尽……ガクツ」

「あらあら」

妖夢に冷ややかな視線を向けられながら、EXは気を失ってしまった。その光景を見て、幽々子はふふつと笑っていた。

「あややや……これは流石に哀れですね。同情はしませんが、

ね、竜希さん?」

「……ミニスカよくむちやん」

「あ、ダメだこの人聞いちゃいねえ」

文が竜希に話を振るが、竜希はミニスカサンタコスのようにむをガン見していたため全く聞いていない。

「まあ、竜希さんの事は放っておいて……次は幽香さんとレティシアさんお願いします」

「わかったわ」

幽香がレティシアの前に出た。

「今日はわざわざこんな催しに来てくれてありがとうね。つまらないものだけれど受け取ってくれる?」

「クスクス、ありがとう。でも自分でつまらないものだなんて言っちゃうのね♪」

「社交辞令よ。そんなこともわからないのかしら?」

「クスクス、わかっていて言ってるに決まってるでしょ?そっちこそそれくらいのことわからないの?」

「……ふふつ、本当に面白い人ね」

「クスクス、それはお互い様よ」

「(……なにこれ、すごく恐いんですけど?)」

互いににこやかな笑顔を浮かべながら会話をする幽香とレティシ

ア。後に、このドS同士のやりとりを見た者たちは間違いなく会場の空気は氷点下になっていたと語る。

「え、えく……それでは次！咲夜さんと紫さんお願いしますー！」
とうにか会場の空気を変えようと促した。

「はい、どうぞ……正直あなたには恩らしい恩はないからかける言葉がないわね」

「あら、酷いわね。私は幻想郷に住まう者ほとんど全てに尽くしているというのに」

「よく言うわね……でもまあ、あなたのおかげでこの幻想郷があるのは事実。そのことに関してだけはお礼をいってあげるわ。ありがとう」

「どういたしまして」

淡々とプレゼントの手渡しを終えた咲夜と紫。まあ二人にそれほど接点があるわけではないので仕方がないといえば仕方がないのだが……

「えく……二人共ありがとねく。では次は霊夢ちゃんと魔理沙ちゃんんで」

竜希が霊夢と魔理沙に促す。

「全く……なんで私があんたにプレゼント渡さないといけないのよ」

「おいおい、その言い草はないだろ？私に散々世話になってるくせに」
「世話をかけた覚えはあるけどお世話になった覚えはないわよ。でもまあ……あんたのおかげで楽しいって思うことがあるっていうのも事実だし……プレゼント上げるのもやぶさかじゃないわよ。だから受け取りなさい」

「霊夢……ああ！サンキュー！」

少し照れたようにそっぽを向きながら霊夢がプレゼントを差し出すと、魔理沙は笑顔を浮かべてそれを受け取った。

「あやや、これは微笑ましいものが見られましたねく。では最後にしてメインといってもいいであろうアリスさんとミコトさんお願いしますー」

「はあ……」

アリスは気が重そうにミコトに近づいていった。

「元気がないな。そんなに俺じゃ嫌だったのか？」

「いえ、あなたが直接的な原因というわけではないから気にしないで」

「そうか……優しいなアリスは」

ミコトはニコリとアリスに微笑みを向ける。

「あなたね……そういうこと簡単に口にしないほうがいいわよ？」

「なんでだ？」

「勘違いしちゃう子がいるかもしれないからよ。そうでなくてもあなたは……」

「なんだ？」

コテンと首を傾けながら聞きかせすミコト。その仕草は、容姿も相まって少々可愛らしく見える……。それこそアリスが見惚れてしまうほどにだ。

「……」

「ん？どうしたアリス？」

「……なんでもないわよ、気にしないで。それよりもこれ」

「ああ。ありがとう」

「……どういたしまして」

プレゼントを渡して、アリスはそそくさと戻って行ってしまった。

その時……会場中にいるミコトに行方を寄せる者達は気がついていない。アリスの頬がほんのりと紅く染まっていたことに。

「さてさて、それでは全ての審査を終えましたのでここで優勝者を決定いたします！」

「はてさて、誰が優勝するかな〜？」

「いよいよ訪れた優勝者発表。栄光を手にしたのは……」

「此度のサンタコスコンテストの優勝者は………博麗霊夢さんです！」

霊夢であった。

ただ………

「ふ〜ん、そう」

本人は対して興味なさそうであった。

「あやや？ 霊夢さん、そこは喜ぶところでは？」

「好きで出場したわけでもないコンテストで優勝したところで嬉しくなんてないわよ」

ドライな返答である。まあ、霊夢の性格からいって喜ぶべきことではないのであろう。

「クスクス、ここまでテンションが低いとわね。でも優勝賞品を聞いたら少しは喜んでくれると思うわよ♪」

「………優勝商品があるの？」

商品と聞いて霊夢はピクリと反応した。

「そだよ。優勝賞品はなんと………紅魔館のバルコニーの今夜一晩占領権で〜す！」

「シヨボツ」

「シヨボつてなによシヨボつて！ この紅魔館のバルコニーを一晩占領できるのよー！」

霊夢の態度に怒りをあらわにした紅魔館の主レミリア（ドレスサンタ）

「だって本当にどうでもいいし」

「………他に人を誘っても一晩一切邪魔されないんだけどね〜（ボソツ）」

「行くわよミコト！」

「え？ ちよ、霊夢？」

竜希が小声でボソツと呟いたことが聞こえたのか、霊夢はミコトの腕を引いてすぐさまバルコニーへと向かって行ってしまった。

「……………わかりやすい反応ですね」

「だね。そして……………予想してたけどほかの人たち凹んでるし」
竜希の目には、落胆し膝をつく者達が映る。霊夢以外の参加者4人はおろか、参加していない者達もだ。

「まあクリスマスという特別な日に霊夢さんにミコトさんを独占されるわけですからね……………そういう私も少々ショックですし」
「それはまあ進んで進行を買って出た文ちゃんが悪いよ。それよりも皆、凹むのはそのへんにしてクリパするよ」

竜希の号令の下、凹んでいた者達はどうにかといった様子であるが立ち上がった。

「クスクス、私も参加してもいいのよね？」

「それはもちろん、楽しんでってね」

「クスクス、そうするわ」

竜希に言われ、レティシアは楽しむ気満々といった様子だ。

「というわけで皆さんグラスを手を持って……………メリークリスマース!!」

「「メリークリスマース!!」」

こうして、竜希の音頭でクリスマスパーティーが始まるのであった。

「クスクス、ところでこれ(E x)どうするの?まだ倒れているけれど」
「好きにしちやっついていいよ」

「クスクス、じゃあまずはこの蓬莱汁を……………」

……………その後、E xの行方を知る者は誰もいなかった。

「全く、いきなりあんなコンテストに参加させられるなんていい迷惑
だわ」

「ははは．．．お疲れ様」

紅魔館のバルコニーにて、霊夢はミコトに愚痴を漏らし、ミコトは
霊夢を労わっていた。

「本当よ。でもまあ、優勝できたおかげでミコトと一緒に過ごせるっ
ていうのは嬉しいけど」

「俺と一緒に嬉しいのか？」

「それはまあ．．．当然でしょ」

顔を赤くさせ、上目遣い気味に言う霊夢。間違いなく、今の霊夢は
可愛いと断言できるであろう。

「そっか．．．俺も嬉しいよ」

「本当？」

「こんなことで嘘言っても仕方がないだろ？さて、それじゃあ．．．
料理でも食べるか？」

「そうね、お腹すいちゃったし。でもその前に．．．」

霊夢はお酒の入ったグラスを手取る。それを見たミコトもグラ
スを持つ。

「メリークリスマス、ミコト」

「メリークリスマス、霊夢」

チンと音を立てて、互いのグラスがぶつかりあった。

「それじゃあ料理食べましょ」

「ああ．．．と、そうだ。霊夢」

「なに？」

「言うの遅れたけど……その服似合ってるよ」

「……ありがとう」

二人きりのクリスマスを……ミコトも霊夢も心ゆくまで楽しんで。

第126話

満月が大地を見下ろす夜、ミコト達は永遠亭の玄関口で月からの使者を待ち構えていた。

「てゐ、まだ休んでいたほうがいいんじゃない？」

「大丈夫。傷はミコトに治してもらったし」

鈴仙が心配そうにてゐに尋ねるが、てゐは問題ないと微笑みを浮かべてそう返した。

「それに、こんな大事な時に私だけ休んでるなんてできないからね。いざとなったら私もまた戦って……」

「その必要はないよ」

「わわっ!？」

突然、ミコトに頭を撫でられててゐは驚きを顕にする。

「月の使者達は俺と竜希が相手をする……いや、竜希は法月の相手をするから俺が相手をするって言ったほうがいいか」

「月の軍勢を一人でつていうこと?でも皆で戦ったほうが……?」

「いっても無駄よてゐ。私も同じこと言ったけどミコトったら聞かないもの」

「どうやらミコトは本気で一人で戦うつもりであるらしく、輝夜は若干呆れていた。

「でも大丈夫なんですか?月の精鋭をたった一人で相手するなんて……」

「大丈夫だよ……俺なら大丈夫」

「……?」

どこか含みのある言い方をしたミコトに輝夜、鈴仙、てゐは疑問を抱く。だが、ミコトのことだから大丈夫だろうと特に気に止めなかった。

「そんな中……」

「……」

話に参加していなかった永琳が、同じく何も言っていなかった竜希

を怪訝な表情で見つめていた。

まあそれも無理もない話であった。なにせ竜希は……木に寄りかかりながら座って目を閉じており、傍目からすると寝ているようにしか見えないのだから。

「どうした永琳？」

「いえ……こんなこと守ってくれる人にいうのもなんなのだけれどこの状況でどうして寝ていられるのかと思って」

これから月の使者との激闘を控えているというのに呑気に寝ている竜希を見て、どうやら永琳は不安に思っているようだった。

「それなら大丈夫だよ。確かに寝てるように見えるけど実際は違うから」

「え？」

「精神を集中させているんだろう。相手は小物とはいえ現段階の竜希よりも強いみたいだからな。久しぶりに全力の本気を出さないといけないかもしれないからああしているんだよ。最近の本気で戦うことがなかったらうから訛っているだろうし」

その強さ故にほとんど本気を出すことがなかった竜希。それ故に感覚が訛っているの、ああして精神を集中して備えているようだ。

「それ本当？イマイチ信用できないのだけれど……」

「なら証拠を見せてやるよ」

未だに疑っている永琳の横で、ミコトは弾幕を生成し竜希に向かって放つ。

「ちよ、ミコトさん！いくらなんでもそれは……なっ!?」

鈴仙が驚いてミコトに抗議するが……それよりもさらに驚くものを見にすることになる。

なんと竜希は目を閉じたまま軽く右手を振るだけで全ての弾幕を払い飛ばしてしまったのだ。

「ほらな意識集中させてるからあの程度の攻撃は見なくても防がれる……もっと本気でやってガチで当てにいけばよかったかも(ボソツ)」

「最後ボソツと言ってるの間こえてるわよ」

「でもまあ、あれなら心配いらないね」

「それじゃあ竜希も問題ないとわかったとこところで……お出ま
しだ」

ミコトが真剣な眼差しで月を見ると、月から一筋に光が一同の目の
前に降り立つ。

光が晴れると……そこには年老いた老人を中心にして十数
人の月人の姿があった。

「お迎えにあがりましたぞ姫様」

「……」

老人がニヤリといやらしい笑みを浮かべながらお辞儀すると、輝夜
は身構えた。

「おやおや、なぜそのように身構えるのですかな？昨夜もそうですが
せっかくお迎えに上がったという二に少々お転婆が過ぎるのではあ
りませぬか？」

「何がお迎えよ！私は絶対に帰らない！私の居場所はこの永遠亭よ
！」

老人に対して堂々と宣言する輝夜。それと同時に、永遠亭の面々が
老人をキツと睨みつけた。

「おお、怖や怖や。これは致し方ありません。そちらがそのつもりな
ら……少々手荒ですが実力行使と参りましょう」

老人が軽く右手を上げると、周りにいた月の使者達は武器を手に
とって臨戦態勢に入る。

そして……その中の一人が前に躍り出て、永琳に向かって
語りかけた。

「やあ久しぶりだね八意永琳……いや、法月永琳って呼んだほう
がいいかな？」

「やめて頂戴。私はあなたの伴侶になるつもりなんてないわよ……
法月」

「明らかな嫌悪を顔にしてその男に言い放つ永琳。どうやら彼が月
の最強戦力……法月千良であるようだ。」

「ふふつ、そんな照れ隠しいらないよ。もつと僕と再会できた喜びを分かち合おうよ……ね、永琳」

「ツ!う……ああ……」

法月はニコリと笑みを浮かべるが、そこには怒気も含まれていた。その怒気から法月の恐ろしさを思い出した鈴仙は恐怖で震え上がってしまふ。

「姫様と永琳を連れ帰る……その為に僕達は来た。だけど僕は永琳……君を連れ戻すためだけにここにいるんだ」

「法月……お主まだそんなことを」

「いいじゃないですか。あんな雑魚ども僕以外の連中で十分お釣りがくる。だったら僕は永琳のことだけに集中させてもらいますよ」

老人が法月を咎めるが、それでも法月の意思は曲がらない。どうやら本当に彼は永琳しか眼中に無いようだ。

「さあおいで永琳。この手をとるんだ。でないと……少し痛い目を見てもらうことになるかもしれない」

笑顔のまま永琳に向かって手を伸ばす法月。それはこの手を取れという命令にも等しいものであった。

永琳では自分には敵わない。故に永琳はこの手を取るだろうと法月は思っていた。

だが……それを阻む者がいた。

「うっわあ……予想通りというかそれ以下の小物だねこれは」
永琳と法月の間に、ヘラヘラと気の抜けた笑みを浮かべながら現れたのは竜希であった。

「……は?いきなり現れて君なんなの?」

「俺?俺は紫黒竜希。永琳さんの騎士……いや、俺の見た目からして騎士じゃあないか。武士つてのも柄じゃあないし侍つてのもなあ……うん、ここはやつぱり……」

竜希は一段と締りのない笑顔を浮かべ……

「俺は永琳さんを守る道化さー!」

堂々と緊張感のない言葉を口にした。

「……君ふざけてるの?今の状況わかってる?」

「わかってるよ。本当はもうちょい真面目に行こうと思ったんだけどさあ……君があまりにも小物だったからその必要もないかなと思ったんだよね」

「……どうやら本当にふざけているようだね。君みたいなのは……さつさと殺すに限る」

法月は三日月型の双剣を構え、竜希に斬りかかる。常人では到底見えそうにないその斬撃を……竜希は抜刀した絶柵で軽々と受け止めた。

「流石に速いねえ。でもま……躲すほどじゃあない」

「へえ……思ったよりはやるんだ。ふざけたこと言うだけのことはあるんだね」

「それはどうも……ミコちゃん！」

法月との鏝迫り合いの最中、竜希はミコトの名を叫ぶ。

「確認するけどコイツ以外は全部任せてもいいんだよね？」

「ああ……それで問題ない」

「OK！それじゃあよろしくね！行くよ永琳さん！」

「えっ?!ちよつと!!」

竜希は永琳の手を引いてその場から走り去る。

ここで法月とやりあえば他の者達を巻き込んでしまうと判断して別の場所で戦おうというのだろう。

ちなみに永琳を連れて行くのはそうしなければ法月が追ってこないと思っただからだ。

「……仕方ない。僕と永琳を阻むというなら本気で消してやる」

法月は竜希への怒りを顕にしながらあとを追った。

「さて……俺もやるか」

ミコトは改めて月の使者達に向き直る。

（相手は……14人か。話を聞く限りじゃあ一人一人が俺と同等かそれ以上の力の持ち主。だがまあ……どうにかなるだろう）

ミコトは鈴を剣と銃に変化させ構えた。

「……なんじゃ若造？まさかこれほどの数を相手にしようというのか？」

「そのつもりだ」

「ふんっ、私には自殺行為にしか思えんの……なぜそこまでする？お前は姫様のなんなのだ？」

ミコトがなぜ戦うのかわからず、老人は尋ねる。

「俺は……輝夜の友達だ」

ふっと笑みを浮かべながらそう答えたミコトは、月の使者達に攻撃を仕掛けた。

月人との戦闘開戦。

果たしてミコトと竜希は輝夜と永琳を守れるのだろうか？

第127話

「まあ、この辺まで来れば邪魔にならないかな？」

永琳を連れた竜希は、ミコト達のもとから少し離れた場所で立ち止まる。そして程なくして法月も現れた。

「ようやく止まったね。あのまま鬼ごっこになるかと思ったよ」

「それでも良かったんだけど永琳さんを連れたままじゃ流石に逃げきれないからね。仕方ないから戦ってあげるよ高月くん」

竜希は永琳から手を離し、法月の方に向き直りながら言う。

「高月じゃなくて法月なんだけど？なに？君は人の名前を覚えられないほど馬鹿なのかい？」

「馬鹿なのは否定しない。ただ、人の名前を覚えるのは得意な方だよ。それでも君の名前を覚えられないのは……君が小物だからさ」

「……は？」

にへらつと締りのない笑顔を浮かべながら自身を蔑むような事を言った竜希に、法月は殺気を含めながら睨みつける。

もつとも、竜希にとってそれは動じるほどのないものだったらしく、一切笑顔を崩していなかったが。

「はあ……訂正するよ。君は馬鹿なんじゃない。君は……とんでもない愚か者だね。この僕を目の前にしてそんなふざけたことを言うだなんて……君こそ小物だよ」

「あはははっ！俺が小物か！それは確かに言ってるよ！でも……小物さなら君には遠く及ばないさ。永琳さんもそう思わないかい？」

「……そうね。確かに、あなたよりも法月の方がよほど小物ね」「酷いなあ永琳。僕じゃなくてこんな愚か者に肩入れするなんて。これは月に連れ戻したら……たっぷりと教育してあげないとね。今から楽しみだよ」

ニヤリと品のない笑顔で言い放つ法月。その笑顔から、その教育とやらの内容がろくでもないということが容易に想像できる。

「残念だけれどそうはならないわよ。だって私が月に帰ることなんてありえないもの」

「……どういうことだい？」

「私のことは……ここに居る竜希が守ってくれる。そうでしょう？」
「はいな。しっかりとお守りさせていただきますとも」

永琳に促されると、竜希はおどけたようにお辞儀して見せる。まるでふざけているかのような態度であったが、なぜか永琳にとってそれはとても頼もしく見えた。

「守るねえ……ありえないな。僕は月の最強戦力だよ？月で最強ということはあらゆる存在の中で最強であるのと同義だ。そんな僕から守るだなんて……冗談ならもつと面白いの考えたほうがいいよっ。」

「それはごつちのセリフだよ」

「何？」

「君が永琳さんを連れて行くことは不可能なんだ。それこそ冗談でもなければね。冗談ならもつと面白いこといいな。少なくとも冗談を言うセンスは俺よりも壊滅的に低いよ？」

「……どこまでもこの僕をコケにして！」

先程からの小馬鹿にしたような竜希の態度……とうとう法月の怒りが抑えのきかないものとなった。

法月は三日月型の双剣を抜き、構えを取る。

「選択肢をあげよう愚か者。永琳を守るために僕と戦い、生きてきたことを公開させるほどの苦痛を与えられて死ぬか、それとも永琳をおとなしく差し出し楽に死ぬか……どちらがいい？」

たとえどちらを選んでも死が待つ選選肢。どうやら法月は竜希を許す気は一切ないらしい。

だが……竜希はそのどちらも選ぶことはない。というより、選ぶことはできない。

「……残念だけどその選択肢は意味ないよ。なぜなら未来はもう決定してる。君が俺に惨めに敗北して、永琳さんを泣く泣く諦めるっていう未来以外、訪れることは決してないから」

「へえ、そんな未来あるんだ。だったら……それを僕に見せてみなよ！」

法月は怒りに任せて双剣を竜希に向かって振るった。先程放った一撃よりも更に速く鋭い斬撃……しかし、竜希はそれを先ほどと同じようにいともたやすく抜刀した絶柵で防いで見せる。

その瞬間、周囲に衝撃波が放たれ、近くの竹が数本斬られてしまったといえば、斬撃を放った法月、そしてそれを防ぎ切った竜希の実力の高さがわかるであろう。

「うん……まあまあだね。パワーとスピード……というより身体能力は今の俺よりもだいぶ上かな？」

「当然さ。悠久の時を生きる蓬莱人の力、そして生まれ持った身体能力と頭脳。それらが僕を最強の存在へと至らせた。君なんかと比べるまでもない」

「……へえ、それはすごいね。でもさ、それだけのものがないながら……いや、それだけのものがあってしまったからと言ったほうがいいか。本当に残念だ」

「残念？何が？」

「君が……対して強くないことがさ」

「ツ!!貴様……どこまでこの僕を侮辱すれば気が済むんだ！」

更に怒りを強めた……というよりはやブチギレてしまったのである。法月はひたすらに剣を振るいまくった。

上下左右あらゆる方向から放たれる斬撃は、常人であればとつくに微塵切りにされてしまってもおかしくないほどに速く、鋭い。

だが……それでも竜希には一撃たりとも当たらない。全てを刀で防がれてしまう。

「どうした！防戦一方じゃないか！そんなんで僕に勝てるって本気で思ってるのかい！」

斬撃は一切あたっていないというのに、法月の目には竜希が防戦を強いられて苦しんでいるように見えるのか、そんな調子のいいことを言う。

確かに今のところ竜希は防御しかしていない。だが、それでも現時

点で身体能力で劣る竜希に一撃も当てることができていなかった。

(……なるほど。これは確かに竜希の言うとおり小物ね)

二人の戦いを目にした永琳は、竜希の言うことが間違っていないなかったという事を思い知った。

(彼を恐れていただなんて……恥ずかしいわね。あんなのただ……身体能力が高くて頭がいいだけじゃない)

確かに法月の身体能力は、永琳を遥かに超えているし、頭脳だって永琳ほどではないが相当に高い。だが……法月はただそれだけの存在なのだ。

「あははははははっ！死ね！とつとつとくたばれ!!」

永琳から冷ややかな目で見られているとも知らないで、法月は狂ったように剣を振り続けていた。

「くそっ！くそくそくそくそ！」

数分後……法月は焦りをあらわにしながら剣を振るっていた。斬撃の鋭さもスピードも数分前よりも更に向上している。

そして対する竜希はというと、そんな法月の斬撃を刀を持っていない右手で捌いていた。左手は刀を握んだままで、自分に向かってくる斬撃を右手で剣の側面を軽く弾くだけで防いでいる。

「な、なんでだ！僕の方が押ししてるのに！僕の方が強いのに……どうして当たらない！どうして素手で防がれる！」

「知りたいかい？だったら教えてあげてもいいけど……その前にと」

竜希は斬撃の合間を縫って初めて刀を振るう。すると、法月の双剣

は何の抵抗もなくたやすく切断された。

「なっ!?そ、双月が……」

「よしっ、これで落ち着いて話ができるね〜」

切断されて使い物にならなくなった双剣を見て驚愕する法月と、刀の峯を肩に乗せながら余裕そうにする竜希。

そんな二人の姿から、どちらの方が強いかを判断させるのは容易であった。

「それじゃあ話してあげるよ。どうして俺が君の攻撃をいとも容易く防ぐことができたのかを。でもまあ、理由なんて単純明快だけどね。なにせ……ただ使いこなせてないってだけの話だから」

「使いこなせてない……だど?」

「そう。永琳さんももうわかってるんじゃないかな?俺の言っている事の意味」

「ええ……これまでの戦いを見て十分すぎるほどに理解できたわ」
竜希が永琳に問いかけると、永琳もしっかりと理解できているように頷いだ。

「ど、どういうことだ!」

「だからあ、君は使いこなせてないんだよ。その身体能力と頭脳を。確かに君の身体能力は高いし、頭脳も……そこは俺は詳しくは知らないんだけどそれなりに高いんだろうね。でもね、君はそれに見合った戦闘技術も戦術も持ち合わせていなかったんだ」

「戦闘技術と……戦術?」

「そ。どうせ自分の能力の高さに胡座かいてろくな実戦訓練なんてしてなかったんだろ? いざ戦いつてなつてもさつきみたいに身体能力任せに無闇矢鱈に斬りつけまくっただけなんだろうし」

「……」

竜希の言葉に法月は反論しない。どうやら凶星であるようだ。

「今まではそれでどうにかなる格下としか戦ってこなかったんだろうけど、俺相手となるとそうはいかないさ。もつと言えば俺でなくてもだな。あの程度なら永琳さん……それにミコちゃんでも対処できると思うし。だから君は……はつきり言つて大して強くな

いいし、戦士でもない」

「どれだけ優れた能力を備えていようとも、それに見合う技術が伴っていないければ宝の持ち腐れ。」

「自らの能力を過信し、鍛錬と研鑽を怠っていた法月は……。竜希から言えば強くないし戦士とも呼べない。」

「強くない……？戦士じゃない……？僕が……この僕が……だと？ふざけるなあああ!!」

「剣を地面に叩きつけ、渾身の力で竜希に殴りかかる法月。」

「だが……」

「ぐふっ!」

「それよりも速く、竜希は法月の腹部に殴打を食らわせた。」

「……どうということ？今の……竜希の方が法月よりも速かった」

「永琳はその光景に疑問を抱いていた。」

「確かに戦闘技術が皆無に等しい法月であるが、それでも単純に身体能力が上回る法月の方が速いはず。にも関わらず、今の殴打は竜希の方が速かったのだ。」

「……どうして俺の方が速いのかって疑問に思ってるでしょ永琳さん。そのことについても説明してあげるよ。というか、説明しようと思つたところでコイツが殴りかかってきちゃったんだけどさ」

「竜希は拳を突き出し、法月を突き飛ばしながら言う。」

「馬鹿……な。身体能力は僕の方が上なのに……なんで僕よりも速く?」

「だからそれを今から説明するんだよ。俺にはさ……ある特性があるんだ」

「特性?」

「ああ。この特性っていうのが厄介でね……コイツが俺を『最強』たらしめる理由の一つといってもいいんだ。全く憎らしい特性だ」

「自嘲気味な笑みを浮かべながら言う竜希。だが、その目はどこかもの悲しそうであった。」

「まあ、『最強』である事を忌み嫌う竜希にとっては、それを助長する

その特性など憎むべきものなのだろうから当然といえば当然だ。

「その特性っていうのは？」

「……………自分よりも何らかの力が上回る存在と対峙してしまつたら、その力を超えてしまう特性だよ」

「なっ!？」

竜希の口から語られる特性……………それを聞いた永琳と法月は驚愕を顕にした。

「この特性のせいで俺は誰よりも高い力を有することができてしまうんだよね。今だつてこいつと戦つたせいで俺はとんでもない身体能力を有してしまつたわけだし。まあ力が向上するのには1分くらい時間がかかるんだけど」

「な、なんなのよその特性……………出鱈目じゃない」

永琳がそう思うのも仕方がないことであつた。

相手の力を上回る特性……………即ち、実質竜希を力で超えることができないことを意味する特性。それはまるで竜希を超える強者が存在することを許さないような……………竜希に『最強』を強制しているかのようにだつた。

「本当に嫌なんだよねえこの特性。嫌で嫌で……………もう笑うしかない」

(……………私は笑えないわよ)

にへらつと締りのない笑顔を見せる竜希。だが、話を聞いてしまつた永琳からしてみれば笑えない。

行き過ぎた力など、不幸を生む大きな要因となる……………それを強制する特性はもはや呪いとも言える。

(紫黒竜希……………なんて哀れな存在なの)

ただひたすらに『最強』を強制される竜希に……………永琳は心から同情した。

第128話

「さて……まだやるかい？正直これ以上戦っても無駄だと思うよ
〜？今の俺はもう君より強いし〜」

竜希は鞘に収まったままの刀を法月に突き立てて尋ねる。

これで退いてくれたらいいなあと思っていた竜希だったが……
そももいかないらしい。

「……くくくつ。あつははははははは!!」

突然、狂ったように笑い声をあげる法月。その様子は竜希と永琳に
とっては気味が悪いものであった。

「何を笑っているのかしら法月？あまりにもショックで気が変にでも
なったの？」

「くふふふつ……そうじゃないさ永琳。ただ、あまりにも愚かな問
いかけだったから笑ってしまっただけだよ」

「愚か？どうして君はそう思うのかな〜？」

「確かに君の言うとおり今の君は僕よりも強いようだ。だけど君は肝
心なことを忘れて……僕は蓬莱人だ！この身体は朽ちるこ
となく、傷も一瞬で回復し、決して死なない！つまり僕はずっと戦い
続けることが出来るんだ……只の人間風情である君と違って
ね！」

これが法月が唯一竜希にとれるアドバンテージであった。

蓬莱人故に法月の耐久力、体力は無尽蔵とあっていい。対して竜希
は異常なまでの力を宿してはいるが普通の人間……疲れもする
し怪我もする。確かにそこで法月とは差ができていと言える。

「なるほど〜。つまり持久戦に持ち込んで俺を消耗させてぶつ殺すつ
て考えてるわけだ〜」

「そうさ！これなら君を殺せる！君を殺して永琳を連れて行ける！や
はり君は僕に勝てない運命にあるんだ！くふふふふ……あははは
はははっ！」

「そっか〜……そいつは残念だ」

「そうだろうか？結局君は死ぬんだ！残念でならないだろうか？」

「いや、そう言う意味じゃなくてさあ……君の思惑は見事に外れることになるから残念だつて言ってるんだよ」

「なんだと？」

竜希が苦笑いを浮かべながら言ったことに対して、法月は怪訝な表情を浮かべる。

「どういうことだい？僕の言ったことになにか間違いでもあるのかな？」

「そうだねえ……君が相手にしてるのが俺以外だったらその作戦で通用するんだろうけど……本当に残念だねえ。君が相手にしてるのは『最強の剣士』である俺だ。残念だけどその思惑は通用しない。それを……すぐに思い知らせてやる」

竜希は刀を腰にさし、抜刀術の構えを取ったあと、そのままゆっくりと抜刀をはじめめる。

「抜刀術かい？それにしても随分とゆっくりだね。それにこの距離でそんなことしてなんになるっていうんだい？」

確かに法月の言うとおり、二人の間には距離が開いていて、普通に考えればこの抜刀術で法月を斬ることなどできない。

そう……普通に考えれば。

「飛天『絶龍閃』」

刀を抜ききると同時に技名を口にする竜希、

そしてそれと同時に……法月の左腕の肩から先が斬り裂かれ、ぼとりと地面に落ちた。

「ツ!?ぐああああ!!」

自分の腕が斬り裂かれたそのあまりの痛みにも、法月は絶叫を上げる。それとともに、傷口からは大量の鮮血が溢れ出した。

「……この距離でどうやって斬ったの竜希？」

「それが俺の力だよ。俺の力は『悉くを断ち切る程度の能力』。こいつは文字通りあらゆるものを着ることができると言っただけぞその射程は『目に見えてるもの全て』なんだよ。だから刃を当てなくても斬れるってわけ」

「……『最強』に加えてとんでもない能力ね」

永琳はまたもや竜希に戦慄した。そのあまりにも広大な射程はもちろんだが、『目に見えてるもの全て』を斬れるということとは、竜希の目に映る『世界』そのものさえ斬ることができるということだ。つまり竜希一人で世界を崩壊させることがあまりにも容易であるということ……それに気がついてしまったては戦慄しないほうが無理である。

「ぐううう……貴様よくもやってくれたな。でも無駄だよ。たとえ腕が斬り裂かれようともすぐに再生……あれ?」

痛みを悶えながらもどうせ直ぐに再生するからとタ力をくくつていた法月であったが、その余裕はすぐさま崩れ去ることとなる。

なぜなら……傷口はふさがっているというのいつまでたっても斬られた左腕が再生することがなかったからだ。

「な……なんで?なんで……再生しない?どうしてだああああ!!」

「……あれもあなたの能力の一旦なのかしら?」

「いぐざくとりー。俺が能力を使って斬ったものはその結果が覆ることではないんだよ。つまり腕を斬られりや斬られたまま……再生力の高い蓬莱人であろうとそれは例外ないさ」

「つくつくとんでもないわね。本当にチート……いえ、これももうバグの領域よ?」

「自覚してますとも……まあそんなことよりも、法月……ああ、そうだ法月だ。ようやく覚えられたよ。君さあ、そんなになつてまでまだ続けるかい?俺は君が蓬莱人だろうが関係なく斬ることができるんだけど?」

「ふぎ……けるな。ふぎけるなふぎけるなふぎけるなあああ!!」
どうやら法月は自分の左腕が二度と再生しないことに相当腹を立てているらしい。我を忘れて竜希に襲いかかっていった。

「こりや話聞いちゃいないな……仕方ない。左手一本で勘弁してやろうと思ったけど……動けないよう足もいっとくか」

襲いかかる法月に向かって刀を振るう竜希。すると今度は、右足の膝から下が斬り離されてしまった。

「ぎやああああ!!足が・・・僕の足がああああ!!」

「あく・・・うん、痛いよね。ごめんね。でも・・・そうでもない君止まらないでしょ」

自分のしたこととは言え、流星に哀れに思ったのだろう。竜希は非常に申し訳なさそうな表情で法月に謝る。

もつとも・・・法月の自業自得であることは否めないのだが。

「永琳さん、鎮痛剤とかあったらくれなかな?」

「あるけれど・・・正直彼の為に使いたくはないのだけど?」

「そう言っただけでよ。というか鎮痛剤でも打ってあげないと彼いつまでも喚き続けるよ?薬は俺が打つからさ・・・ね?」

「・・・仕方ないわね」

確かにこれ以上法月の喚き声を聞きたくはないと思った永琳は、仕方なしに竜希に鎮痛剤の注射を渡した。

「一応聞くけどこれ蓬莱人にも効くんだよね?」

「ちゃんと効くわよ。麻酔も兼ねてるから意識も奪えるわ」

「それは何より。どこに打てばいいの?」

「首に打ってくればいいわ」

「了解」

鎮痛剤を受け取った竜希は法月に近づき、その首に鎮痛剤を打つ。すると程なくして法月の喚き声は収まり、その意識を失うこととなった。

「処置完了。ついでに永琳さん防衛戦も終了だ」

「随分と注射を打つのが上手いのね」

「これでも医術の心得があったりなかったりするからね」

「なかつたらダメじゃないの・・・まあいいわ。そんなことより・・・あなたのおかげで法月に連れて行かずに済んだわ。ありがとう」

永琳は約束通り自分をきつちりと守り通してくれた竜希に心からの感謝の言葉を述べる。

「あはは。どういたしまして」

それに対して竜希は大したことはしていないとばかりゆるい笑顔で答えた。まあ、実際竜希にとっては大したことではないのだろう

が。

「それにしても……貴方はとんでもないわね。蓬萊人として長い年月生きてきたから色々な人に出会ってきたけれど……あなたほど異常な存在は初めてみるわよ？」

「まあ自分で言うのもなんだけど俺は人類史上『最強』の存在であり、今後俺以上のバグが生まれることはないだろうからねえ。永琳さんがそう思うのも無理はないよ〜」

（……それをこうして受け入れられているっていうのもまた異常ね）
永琳は思う。紫黒竜希……彼はあまりにも異常すぎる存在だと。

強力な力、身体能力、特性を備えていることはもちろんだが、ある意味で一番異常と言えるのはその自我と精神力だ。並の人間であれば押しつぶされて狂ってしまってもおかしくないほどのものを背負わされながら、演技であるとは言えこうして笑っていられるのは正気の沙汰ではない。

間違いなく竜希は人類史上『最強』……その力も、その精神もだ。

そして……そんな竜希だからこそだろう。永琳は……（まったく。こんなとんでもない人間……惚れてしまっても仕方がないわよね？）

そんな竜希だからこそ……永琳は惹かれてしまったのだろう。

『最強』の剣士、紫黒竜希と月の最強戦力、法月千良

その戦いは……竜希の圧倒的なまでの勝利で幕を下ろした

第129話

「さくて、んじやミコちゃん達のところに戻りますか。癩だけどこイツも連れてってやろう」

竜希は意識のない法月の襟を掴んでズルズルと引きずって歩き出す。敵なのだから当然だが中々酷い扱いである。

「姫様……無事かしら？」

「問題ないですよ。向こうにはミコちゃんがいるんだから」

「それは分かっているわ。でも……疑うわけではないけど、彼だけで月の使者達を相手にするのはやはり難しいと思わざるを得ないわ」「心配性だねえ……その心配は無用だよ。なにせミコちゃんにはあの状況だからこそ万全に発揮できる特性があるからね」

「特性って……あなたの常に誰よりも強くなってしまうという特性と同じようにミコトにも何かあるの？」

「ああ。あの状況ではうってつけな特性がね。だから大丈夫さ」

命の特性……それを知る竜希はだからこそ命は大丈夫だと確信していた。

そして……それだけではない。

「それに何よりミコちゃんは……既に超越してしまっているしね」「超越？」

「ああ。今のミコちゃんは超越者。たとえ俺であっても……完全に殺すことが不可能なんだよ」

クスリと微笑みを浮かべながら言う竜希は……どこか儚げであった。

「くっ……馬鹿な」

「我々が……月の民たる我々が……！」

「こんな人間ごときに！」

14人の月の使者達は、肩で息をしながら命を睨みつけていた。対するミコトはというと、右手に剣を、左手に銃を構えて使者達と相対している。

それぞれ一人一人が命以上の身体能力を秘めた戦士……だが、それでも圧倒しているのは命であった。

「そんなものか？それじゃ俺は倒せないぞ？」

「ッ!?舐めるな！」

「死ね小僧！」

使者のうち、刀と槍を持った者がミコトに攻撃を仕掛ける。しかし……ミコトには通用しない。

突き出される槍を体を捻らせ躲し、さらに槍の刀身を踏みつけて地面に埋め込んで動きを封じる。後の刀による斬撃は右手の剣で受け止め、左手の銃で刀の持ち主を撃ち抜き、その後腹部を蹴り飛ばされ戦闘不能に陥った。

「ぐはっ!？」

「次はお前だ……混符『アンビバレンス・ストリーム』」

「ぐっ……がっ!？」

続いて動きを封じた槍使いを、スペルカードによって放たれるレーザーで飲み込む。その一撃で完全に意識を失ってしまった槍使いの腕を掴んで、月の使者達の方へと放り投げた。

「これであと12人だ」

「あ、ありえない……ありえない！我らの方が強い！それなのになぜ勝てない！なぜ我らが……！」

月の使者の一人が叫ぶ。なぜ勝てないのかと……自分達の方が力は上なのになぜミコトは平然とそれをはねのけるのか彼等にはわからなかった。

「なぜ勝てない……か。わからないならわからないまま倒れてろ」

そう言い放ったミコトは、今度は自分から攻撃を仕掛けにいった。ミコトがこの戦闘で圧倒的優位に進められる理由は二つある。そのうち一つはこれが一對多の戦闘であることだ。

ミコトは自身の能力、『命を理解する程度の能力』によって命を気配として察知することでたとえ相手が多数いようとも、その全てを見逃すことがない。どこに敵が居るのかを把握さえできれば、次の行動を予測し、対処することができる……つまり敵が多数でも大して不利にならないのだ。もつとも、これはミコトの知性の高さで竜希という圧倒的強者との模擬戦の経験がなければ成り立たないのだが……

そしてもう一つの理由は……ミコトの特性だ。

かつて、竜希をも追い詰めかけたミコトの特性……それはいわば大物喰らいであった。ジャイアント・キリング

ミコトは相手が自分よりも強いければ……実力以上の力を発揮することができる。それこそ相手が強ければ強いほど発揮できる力は跳ね上がるのだ。使者達の力は、法月ほどではないにせよ強大、それが仇と……いや、幸いとなっているのだ。

ゆえに……一対多かつ、相手が自分以上の実力者というこの状況はミコトにとってこれ以上ないほどの有利……そして、このような特性を備えたミコトはあるいは……戦闘において天才と言ってもいいのかもしれない。

「ず………」

「あれがミコトの戦い?」

「これは……想像以上です」

ミコトの戦いぶりを見て、輝夜、鈴仙、てゐの3人は思わず感嘆の声を漏らす。

3人はミコトの戦闘を見る機会はあまりなかった……それこそまともに見たのは竜希と戦った時の一回のみで、しかもその戦いではミコトは完膚なきまでの敗北で終わっていた。だからこそ、話で聞いて強いとは思っていたが……ここまでとは思わなかっただろう。的確な対処で一切の攻撃を受けず、逆にミコトからの攻撃はほとん

ど全て命中……一人、また一人と月の使者達は倒れていく。

(すごい……これなら……これならミコトが勝ってくれる！ミコトが……守ってくれる！)

その光景を見て輝夜は思う……やはりミコトは自分を守ってくれるのだと。ミコトは自分にとって救世主なのだ。

「……これであと一人だな」

気がつけば、残った使者は一人となっていた……そしてミコトは無傷だ。

残った使者が倒れるのも時間の問題……それを理解しているのか、使者も構えはするが積極的に戦おうとは既に思えなくなっていた。

「最終警告だ。このまま去れ。そして二度と輝夜達の前に姿を現すな。そうすれば……ここで終わりにする」

それは傲慢とも取れる発言だが……それも仕方がない。ミコトは圧倒的に優位に立っているのだから。

「ば、卍月様……ここは引いたほうがよろしいかと。一旦引いて策を……」

「何を言っておる……この愚か者が」

使者は卍月という敵の首領と思われる者に撤退を勧めるが……

卍月は呆れたように首を横に振る。

「姫様を目の前にして撤退など笑止。攻めこむのだ」

「し、しかしこの者には……」

「敵わないと申すか？ 誠に愚かな……敵わぬとしても儂が命令しておるのだ。ならば勝つか倒れるまで戦わぬか」

「そ、それは……」

「最悪時間を稼ぐだけでもよい。時間さえ稼げば法月が戻ってきてその者を八つ裂きにしてくれるのだからな。さて、以上を踏まえ……なにか反論はあるか？」

「……ありません」

卍月の言葉を聞き、使者は観念したようにミコトへと向き直る。

「随分な無茶振りだな。それに従うだけの義理はあるのか？」

「……義理など関係ない。我らは朧様の手駒……命令されたからには戦うのみだ」

「哀れだな。だが……いいだろう。付き合っただけ」

再開される戦闘。使者は武器を構えて朧へと襲いかかる。そして、ミコトの視界が彼で埋め尽くされるほど接近してきたその瞬間……閃光が走る。

「ぐっ……な……に？」

「これは……朧……様？」

その閃光はミコトと、使者の心臓を貫く。

「くくくっ……よくやった。お前はいい目隠しになったぞ」

いつの間にか弓を構えていた朧。ミコトと使者の心臓を貫いたのは……朧の放った矢であった。

「朧……様」

信じられないようなものを見るかのような視線を朧に向けたまま倒れる使者。

そしてそれと同時に……ミコトも倒れ付してしまった。

「くくくっ……くははははっ！これで姫様を儂の手に！儂も……蓬萊人になれる！」

障害を排除できたことに、朧は表情を歪めて笑い声をあげる。

そして……

「ミコ……朧。嘘……そんな……」

倒れ伏せるミコトの姿を見て……輝夜は絶望の表情を浮かべ、目からは涙が溢れていた。

第130話

「ミコトー！」

「ミコトさん！しっかりしてくださいー！」

「……………」

矢で心臓を貫かれ、倒れ伏すミコトに駆け寄る鈴仙とてゐる。その目からは涙が溢れている。その様子を…………輝夜はただ眺めていた。決して悲しんでいないわけではない。ただ…………輝夜の心には、悲しみ以上の憎悪が巣食ってしまっていた。

大切な…………愛するミコトを失うこと…………それは輝夜にとって耐え難いもの。

ミコトのいない未来…………それはどれだけ苦しいのだろう。それはどれだけ辛いのだろう。それはどれほどの…………地獄なのだろう。それを思う輝夜は…………ミコトの心臓を穿った朧月に対する憎しみを募らせていった。

「くくくツ…………儂の前に立ちはだかるからこうなるのだ。せめてその命、儂の不老不死の礎になれることを誇るがいい愚かな地上人よ」

「…………愚か？」

朧月のその一言は…………輝夜の憎悪を解き放つ。

「ミコトが…………愚かですって？ふざけたこと言わないで朧月」

「ツ!? 姫…………様？」

悍ましいほどの殺気をその身に受けた朧月は、思わずたじろいだ。

今の輝夜から発せられる殺気は、普段の妹紅との殺し合いでの戯れの殺気とはわけが違う。

純粹な憎悪によるその殺気は…………浴びせられただけで死を覚悟させるに十分なものであった。

「…………殺す。ミコトを…………私の大切なミコトを奪ったお前は！

この私が絶対に殺してやる！」

自身の周囲に弾幕を展開する輝夜。

輝夜は蓬萊人……蓬萊人は、常人を遙かに超越した存在。即ちその力は本来絶大にして強大。その力が今、卍月を殺すためだけに振るわれようとしている。

「はは……ははははははっ！素晴らしい！素晴らしい力だ！それが蓬萊人の力か！儂も……儂もその力を手にするぞ！儂も蓬萊人になるぞ！」

「蓬萊人にですって？無理よ。あなたはここで私に殺されるの」

「確かに儂では姫様には敵いませぬ。正面からやりあえば殺される……まあ、時間があればの話ですが」

「時間？」

「ええ……儂はただまともに戦わずに待てば良いのです。法月がくるまで」

「卍月にはまだ希望があった。」

月の最強戦力……法月千良さえ来ればどうにでもなると。

彼がいれば、万事うまくいくのだと確信があった。

ただまあ……その希望は既に打ち砕かれていた。

「その法月を連れてきました」

その場に似つかわしくない声はその場に響き渡る。

声のする方には竜希と永琳、そして……竜希に引きずられている、左腕と右足の無い、気絶した法月の姿であった。

「ごめんね。君の希望……俺が断ち斬っちゃった」

「法月!?ば、馬鹿な！月の最強戦力が……なんだこの体たらくは!」

「月の最強戦力……ぶつちやけいいうほど大したことがなかったよ。ただ力が強いだけ……まあ、今では俺の方が強くなっちゃったんだけどな」

「そ、そんな……ありえぬ」

「残念だったわね卍月。ここにいる男は……間違いなく『最強』の男。彼の前では法月は小物に過ぎなかったという事よ」

現実を受け止められずに呆然としている卍月に、永琳が言い放つ。

よもや月の最強戦力たる蓬萊人、法月千良が負けてしまうとは卍月にとって予想だにしない事態だろう。既に部下も全員戦闘不

能……卍月に打つ手はなかった。

「……どうやらあなたの希望は潰えたようね。大人しくここで私に殺されなさい。ミコトの仇……打たせてもらおうわ!」

「ひっ!?!」

今まさに弾幕を放たんとする輝夜と、恐れおののく卍月。

だが……

「ちよい待ち輝夜ちゃん」

竜希が輝夜の前に立ち、妨害してきた。

「……なに? 邪魔しないで? そいつは……ミコトを殺した。だから私が殺してやるの」

「輝夜ちゃんは本当にミコちゃんのことを好きなんだねえ。でも……だったらなおさら邪魔させてもらうよ。だってそんな仇討ちなんてミコちゃんは望まないんだから……だよねミコちゃん?」

「……ああ。そうだな」

「!?!」

それは聞こえるはずのない声だった。

閉ざしていた目を開き、立ち上がるのは……間違いなくミコトであった。

「鈴仙、てる……心配かけてすまなかったな」

自身の傍らで涙を流していた鈴仙とてゐに、安心させるように微笑みを向けるミコト。

「ミコト……さん?」

「嘘……だって心臓を……」

鈴仙とてゐは貫かれたはずのミコトの胸をみる。確かに服は貫かれて破れてはいたが……胸を穿った穴はどこにもなかった。

「き、貴様……何故生きている!」

なぜミコトが生きているのか……それがわからない卍月の動揺はさらに増す。

「俺の能力……『命を理解する程度の能力』の影響さ。幻想郷で取り戻したこの能力は日毎に強力になっていき、俺の生命力をも増大させていった。その結果俺は蓬莱人と同じ……いや、あるいはそれ

以上の不死者となった」

「ミコトが……私達以上の不死者？」

「そうだ。と言っても、自分の力で心臓を再生させるほどの規模のこととはしたことがなかったんで意識を戻すのには少々時間がかかってしまったがな。その点に関してはすまなかった輝夜。でももう大丈夫だ。ほら」

ミコトは輝夜の傍に歩み寄り、輝夜の手をとって自身の胸に置いた。

「……感じる。ミコトの鼓動……」

「ああ。俺は生きている。生きてここにいる。だから……憎しみにとらわれるな輝夜。勝手だけど……そんなお前は見たくない」

「ミコト……だったら」

「ん？」

「だったら心配させないですよ……馬鹿」

ミコトの鼓動が聞こえるように、胸に耳を当てながら寄り添う輝夜。

その表情は……先程の憎しみに染まったものではなく、安堵のものであった。

「ああ……本当にごめん。ごめんな輝夜。そのお詫びってわけじゃないけど……ケリ付けるから」

ミコトは輝夜の頭を撫でた後、朧月の方を見やる。

「朧月とか言ったか？俺は……お前を嫌悪する。お前は……平気で命を弄ぼうとする。自分の勝手に他人の命を無下にし、そのくせ自分は不老不死を求めらだなんて……俺は許さない」

ミコトは自分と対峙し、同じように心臓を穿かれて死んだ月の使者に視線を向けながら言う。

ミコトは命の理解者……誰よりも命に対して強く、深い思いを持っている。だからこそ、朧月のように自らの我欲の為に不老不死を求め、そのために他者の命さえも平気で切り捨てる朧月に怒りを覚えているのだ。

「ぐうう……許さないならどうするっていうのだ？」

「……俺が報いを与える。たとえそれで禁忌を犯そうとも」

ミコトはどこか悲しげな表情を浮かべ、懐からスペルカードを取り出した。

「輝夜……聞いてくれ。俺は今から外道に成り下がる」

「……え？」

「命を弄ぶ奴に報いを与えるために……俺自身も外道となり、奴の命を弄ぶ。輝夜には……そんな俺を見ていて欲しい」

報いを与えるために、同じように外道になり果てる。

同じような外道から報いを受ければ……朧月も自らの過ちに気がつくかもしれない。だからこそ、ミコトは外道に成り下がろうというのだ。

そのために……禁忌にしていたスペルカードを使おうとしている。

「ミコト……わかったわ。ちゃんと見てるわ。それと……何があっても私はミコトを失望したりしないから」

「そうか……ありがとう輝夜」

失望したりしない……それはこれから外道なことをしようというミコトにとって嬉しい言葉であった。

「さて……それじゃあ覚悟しな朧月」

朧月に向き直り、スペルカードを構えるミコト。

そして……それを発動した。

「天命『命羅万象の統括』」

第131話

「天命『命羅万象の統括』」

ミコトがスペルカードを発動した瞬間、金色の球体が現れ、それは朧月の体に命中した。

「む……?くく……ははははっ!なんだこれは?なんともないではないか!」

しかし、朧月に一切のダメージはない、特に体に異変も感じられず、朧月は笑い声を上げた。

「大層な事を口にしておきながらこの有様か?くくくつ……愚かにも程があるわ!」

「朧月……ミコトを馬鹿にしないで!」

「輝夜……よせ」

ミコトを馬鹿にしたような発言に輝夜は激昂するが、ミコトがそれを制する。視線は朧月に向けたままだが、ミコトの表情は……同情が籠っているよう見えた。

「朧月、ダメージがないことに安堵しているようだが……それは甘いよ。『命羅万象の統括』は敵を討ち倒すためのスペルじゃない。コイツはもつと悍ましい……お前の願いに最も遠く、同時にお前の願いを叶えることさえできるスペルだよ」

「なに?どういうことだ?」

「……今わかるさ」

「ツ!こ……これは?」

突然、朧月は胸を抑え苦しみだした。息は上がり、体中から汗が溢れ出ており、顔色も悪い。

「なんだ……これは?寒い……目が霞む……意識が遠のく……こ、怖い」

得体の知れない恐怖が朧月を襲う。朧月は体をガタガタと震わせていた。

「ミコト?一体何をしたの?」

朧月の様子から、ただならぬことが起きているということを探した輝夜はミコトに尋ねる。他の物達も気になつてゐるようで、ミコトを見つめている……竜希を除いて。

竜希だけが……ミコトが何をしたのかがわかっているのだろう。「俺が発動した『命羅万象の統括』は文字通り、あらゆる命を統括するものだ。さつきの金色の球体を受けた者は、俺に命を委ねられる。簡単に言えば……朧月の生き死には俺の掌の上にあるということだ」「……なっ!?!」「……」

その説明に、竜希を除く全ての者が戦慄した。

あらゆる命の統括……支配。それは神の如き……いや、あの意味では神をも超える偉業であり、禁忌の所業だ。それをミコトは成してしまつたのだ……戦慄するのも無理はない。

「今は朧月の生命力をギリギリまで落として……死の数歩手前までな。だが逆に……生命力を底上げすることもできる」「……?これは……もどつた?いや、これは……」

先程まで苦しんでいた朧月であるが、今は自身の体にあふれる活力に困惑していた。

「今はお前の生命力をもともものよりも増大させている。若い頃に戻つたような感じがするか?もつとも……俺の意思次第で、すぐにさつきのように死に近づけることもできるがな」

「なっ!?!や、やめろ!頼む!それはやめてくれ!あんな思いはもう嫌だ!」

「もう嫌だ、だど?ふざけるな。簡単に自分の部下を手にかけてお前がそんなことを言う資格があるとでも思っているのか?」

「ヒッ!?!」

ミコトの鋭い視線を受け、朧月はたじろぐ。死ぬ……自分はミコトに殺されるのだと、朧月は恐怖に囚われた。

「いい、嫌だ!儂は……儂はこんなところで死にたくない!頼む!殺さないでくれ!そ、そうだ!儂の部下にならんか?儂の部下になつて姫と永琳を月に連れてゆこうではないか!儂の部下になれば不自由はせん!姫もお前のものにしてやろう!」

死を恐れるあまり、支離滅裂な提案をミコトにすすめる卍月。その姿は、あまりにも哀れであった。

「……ふざけやがって。輝夜は貴様のモノでもなんでもないんだぞ？ それなのに好き勝手言うな」

「うぐっ……があっ……」

再び卍月の生命力を落とすミコト。それに伴い、卍月は苦しみ出す。目の前に死がある……これは間違いなく卍月の精神に多大なダメージを与えているだろう。

「その苦しみから解放されたければ……とつとつこの幻想郷から出て行け。月に帰り……二度と輝夜達に近づくんじやない。でなければ……貴様を殺すぞ？」

「ヒイイイイ!?!」

確かな殺気が込められたその目で睨まれた卍月に、選択の余地などなかった。

「かくして、使者どもは月へと帰り、永琳さん達に平穏が戻ったとき。めでたしめでたし」

「勝手に締めないでちょうだい」

腕を組んで、うんうんと満足げに頷く竜希に、永琳が呆れたように言う。

竜希の言うとおりに、卍月達は月へと帰っていった。ミコトへの恐れ

のあらわれか、それはもうそそくさどだ。ちなみに、卅月が殺した使者についてもちゃんと連れて行かせた。その際、向こうできちんと弔うようにとミコトが脅しをかけていた。

「別に俺が締めてもいいじゃん。俺つてば今回の功労者の一人よ？月の最強戦力の彼を倒したんだからさあ」

「……まさか本当に倒してしまっなんて信じられません」

「人は見た目によらないんだね」

竜希がまさか法月を倒してしまっただだなんてと、鈴仙とてゐるは感心したように言う。

「だから大丈夫だって言ったじゃないか……というかてゐちやん？見かけによらないってどゆこと？」

「言葉通りの意味。んなな竜希つてへラへラしててしよぼそうだったから」

「泣くよ俺？男の子だけどみつともなく泣いちやうよ？」

てゐるの物言いに項垂れる竜希。もつとも、それはポーズであるのだが。

「どうしてこんな男に私は……」

「お師匠様？どうしました？」

額に手を当てて、どうして竜希に惚れてしまったのだろうと呆れていた永琳に、鈴仙が声をかける。

「なんでもないわ。それよりも……どういうつもりかしら竜希？姫とミコトを二人きりにさせるだなんて」

今、この場にはミコトと輝夜の姿がなかった。というのも、竜希が永琳達を永遠亭まで連れてきたからだ。

「どういうつもりかと聞かれれば、お節介だと答えよう。輝夜ちゃんは自分を救ってくれたミコちゃんに言いたいことはあるだろうし……ミコちゃんはミコちゃんで色々あってね。いい機会だと思っただよ」

「ミコトさんの色々っていうのは一体なんなんですか？」

「それは……まあ鈴仙ちゃんやてゐちゃんにとつても全く無関係ではないんだけど、今はまだ秘密かな。今は輝夜ちゃんのターンという

ことで」

「わかがわからないんだけど……」

「私も……」

竜希の言っている事の意味がさっぱりわからないといった様子で、鈴仙とてゐる頭に『?』を浮かべている。

「まあ、今はまだわからなくてもいいさ。今はまだね。それはそうと……輝夜ちゃんがミコちゃんと二人きりているのは心配かい永琳さん？」

「……」

永琳に視線を向ける竜希。その永琳はというと、表情を険しくさせている。

「まあ気持ちはわかるよ。なにせ輝夜ちゃんはミコちゃんと……蓬萊人をも殺せる存在と一緒にいるんだ。心配するのも無理もない」
ミコトの『命羅万象の統括』はあらゆる命を統括、支配する。それは不死である蓬萊人でさえ例外ではない。

蓬萊人は確かに不死だ。だが、ミコトは直接的に死を与えるのではなく命を奪う。

人は死んで命が失われるのではない……人は命が失われ、死ぬのだ。

「私のその気持ちができるのに……姫とミコトを二人きりにしたの？」

「大丈夫だよ。ミコちゃんは輝夜ちゃんをどうしようだなんて思わないさ。あのスペルを使ったのは卍月が許せなかったからだ。命を軽んじ、弄ぼうとした卍月のことが……相当ね」

本来『命羅万象の統括』は禁忌にしているスペルだ。それを使ったのは卍月の所業にミコトがかつてないほどの怒りを覚えたからであり、そうでなければよほどのことがない限り使うようなものではない。

「……絶対に使わないという保証はあるのかしら？」

「あるよ。あいつが一夢命だから……それだけで十分に保証になる」

「はあ……安い保証ね」

「お師匠様。ミコトさんが姫様をどうしようかと考えるはずがありません」

「私もそう思う。ミコトは……優しいから」

竜希の発言に呆れる永琳に、鈴仙とてゐるが言う。二人共、ミコトに好意を抱いているがゆえに、ミコトを信用しきっているのだ。

「わかっているわよ。何も私だって本気でミコトのことを疑っているわけじゃないわ。ただ、あんなスペルを見せられたあとなんだからどうしても気になってしまうのよ」

「まああんなの見ちゃったらねえ……永琳さんからすれば心配するなつてのが無理な話つてのはわかっているよ。でも……さつきも言っただけど大丈夫だから。ね?」

そう言いながら、竜希は安心させるように永琳の頭を撫でた。

(し、師匠の頭を撫でた!?)

(うわ……これはただでは済まなさそうだなあ)

そのあまりの事態に、鈴仙は心中穏やかではなく、てゐるは竜希がどうなつてしまうのかと同情した。

しかし……

「……そうね」

(ええっ!?)

二人の予想に反して、永琳は竜希にされるがままであった。それどころか、少々頭を竜希の方へと傾けているかのようにも見える。

これも……永琳が竜希に惚れてしまったが故だろう。

(さてミコちゃん……人払いはしたんだ。きちんとけじめはつけるんだよ)

永琳の頭を撫でる竜希は、ミコトへと思いを馳せる。

その表情は……穏やかでありながら儂げであった。

第132話

「まさか本当に月の連中を追い払ってしまうなんて、さすがはミコトね」

「半分以上は竜希のおかげだけだな。あいつが一番面倒そうなのを引き受けてくれたわけだし」

月の使者との戦いを終え、ミコトと輝夜は二人で話をしていった。

「相変わらず変なところで謙虚ね。確かに竜希も頑張つてはいたんだろうけど、それは主に永琳のため。私は私を救ってくれた、守ってくれたミコトに感謝しているの。だから私の感謝の気持ち、ちゃんと受け取ってくれないと困るわ」

「そうか。ならそれは受け取らなければ逆に失礼だな。どういたしまして輝夜」

ニコリと微笑みを浮かべながら輝夜からの感謝の言葉を受け入れるミコト。中性的で整った容姿をしているミコトのそれは、たとえ見慣れていようとも輝夜の鼓動を高鳴らせるには十分なものであった。

「本当に、ミコトってある意味反則よね」

「反則？あのスペカのことか？」

輝夜の反則という言葉を、ミコトは先の戦いで使ったスペカのことだと思ったのか表情を暗くさせた。

事実として、『命羅万象の統括』は反則といってもいい能力を有している。命を持つ限り逃れることはできず、生き死には全てミコトの手のひらの上に置かれる。たとえそれが不死者であっても、蓬莱人であつても例外ではない。

「まあ、輝夜にそう言われてしまつても仕方がないか。あの力は蓬莱人である輝夜にも適用されてしまうからな。恐れられても仕方が……」

「馬鹿なこと言ってるんじゃないわよ」

ミコトの言葉に、呆れたように言い放つ。

「私があなただを恐る？そんなことあるわけないでしょ？私が一体何度

あなたに救われたと思ってるのよ。あなたは私にとって恩人で、救世主で、英雄なのよ。そんな相手を恐るなんて天地がひっくり返ろうとありえないわ」

「だが俺はお前を……」

「確かにあなたのあの力、『命羅万象の統括』は危険なものではあると思う。だけど、私は知っているわ。ミコトがそんなおぞましい力を無闇矢鱈と使うような人間ではないということを。いつだって命を真剣に向き合い、だからこそその力の重みを知り、それを行使する。それがあなたでしよう？ だったら恐る理由なんてないじゃない」

輝夜の言うことはもっともであった。ミコトは命の理解者だ。幻想郷の誰よりも命の尊さを知り、誰よりも命を大切にする。今回の件であつても、非道を尽くした朧月に『命羅万象の統括』を施しはしたが、結局はその命を奪うまではしなかった。ミコトがこういった人物であるからこそ、輝夜はたとえおぞましい力を持つともミコトを恐ることがないのだ。

「ありがとう。そう言ってもらえると気が楽になるよ」

「それはなによりだわ。というか、ミコトはどうしてそう自分に自信がないの？ すぐに自分を卑下して悪いほうに考えて……そんな生き方疲れない？」

輝夜は心配そうにミコトに尋ねる。

「俺はこんな生き方しかできないからな。だから大丈夫だ」

神楽を失ったという自責の念。それがミコトから自信というものを奪っていた。自分という存在に一切価値を見いだせず、自分を底辺に近いものとして捉える。神無月葵に諭されたとは言え、それはそう簡単に治るものではなかった。

「大丈夫って……そんなわけないじゃない。仕方がないわね。ミコト、ちようどいい頃合だしあなたに伝えたいことがあるわ」

「俺に伝えたいこと？」

「ええ。よく聞きなさい」

大きく深呼吸して息を整える輝夜。そして意を決したようにそれをミコトに告げる。

「ミコト……私はあなたのことが好き」

「……え？」

「友達としても、仲間としてももちろん好きだけど、今言ったのはそういう意味じゃない。私は一人の女として、ミコトという男のことが好きなの」

ミコトに顔を近づけて、ニコリと微笑みを浮かべながら告げる輝夜。その表情から、ミコトはそれが嘘偽りのない言葉だということがわかった。

「輝夜が……俺を？」

ミコトの口から疑問の声が漏れるが、その言葉に反して、実はミコトの心中では輝夜の告白に納得している部分もあった。以前に比べて僅かにだが自分への好意を自覚し始めたミコトは、これまでの輝夜の言動からもしかしてそうなのではと思っていた部分があったのだ。

「いいミコト？あなたはカッコいいの。優しいし強いし家事スキルは高いし器用でなんでもできるし……女からしたら魅力的な存在なのよ。それがミコトなの。それなのに自分に自信がないだなんてはつきり言つて馬鹿らしいわ」

「……それを自覚してしまつたらナルシストになるんじゃないか？」

「それは否めないけど、自分の魅力に気づかなさすぎるっていうのも問題だと思うわよ？」

「それにしたつて俺よりも優しい奴なんてたくさんいるだろ？強いつて言つても竜希よりははるかに弱いし、家事スキルは咲夜には及ばないし」

「なんでわざわざ最高峰と比べるの？」

竜希も咲夜もその分野においては最高峰と呼べる存在だ。そんな相手と比べれば劣っているのは当然であるため、いちいち引き合いに出すほうが間違っていると見えるだろう。

「とにかく、さっき私が言ったことは全部嘘偽りのない事実よ。だから少しは自分の魅力を自覚しなさい。でないと、ミコトに惚れた私が惨めになるんだから」

ちよんつと、背伸びをしてミコトに額を指で軽く小突きながら言う輝夜。その言葉はミコトのタメでもあるが、輝夜自身の為でもあった。自分の惚れた相手が、自分を卑下するなど輝夜にとっては嫌なこと。だからこそ、自分が惚れるに値する男であると、輝夜はミコトに自覚させたかったのだ。

「輝夜……わかった。善処しよう」

「ならいいわ。さて、屋敷に戻りましょう。ミコトも疲れたでしょう？ ゆっくり休みなさい」

「え？ だが……」

輝夜のこの一言に、ミコトは疑問の声を上げてしまった。

「どうしたのかしら？」

「いやその、なんとというか……」

齒切れが悪そうに言い淀むミコトだが、それは無理のないことだった。なにせミコトが聞こうとしているのは……

「ああ、もしかしてさっきの告白の答えを聞かなくてもいいのかって思ってるの？」

「あ、ああ」

そう、ミコトが聞こうと思ってたのは告白の返事の答えを聞かなくてもいいのかだった。これは流石に自分からは言いにくい。

「告白の返事は別にいいわよ。だって聞かなくてもわかってるもの」「わかってる？」

「ええ。ミコトの気持ちが私に向かないことを私はわかってる。ミコトの気持ちがどこに向かっているのか私はわかってる。だから返事を聞く必要はないわ」

輝夜はわかっていた。ミコトの気持ち、好意がどこに向かっているのか。そしてそこに自分が付け入る隙は僅かにも存在していないということを。だからこそ、告白すれど返事を聞こうとは思わなかったのだ。わかりきったことを聞きたくないから……わかっていたとしても、振られるのが嫌であったから。

「輝夜……ごめん」

「そこは謝るところじゃないわよ。私は感謝してるの。ミコトのこと

を好きになれて、私は幸せ。その幸せをくれたのは間違いなくミコトよ。だからミコトからの謝罪はいらぬ。その代わり私の感謝の言葉を受け取りなさい。ミコト、ありがとう」

屈託のない笑顔でミコトに感謝の言葉を述べる輝夜。

「告白されて感謝の言葉をもらうなんて変な感じだな。それにしても……輝夜にはわかるんだな。俺の気持ちの向かう先が」

「まさか、ミコトそれさえも気がついてないの？」

「ああ……わからないんだ。自分の気持ちがどこに向いてるのか。どこかに向いてるっていうのは自分でもなんとなくわかっているんだが……」

「それが誰なのかわからないっていうことね。鈍いとは思っていたけど自分の気持ちにさえ鈍いなんて……」

輝夜は呆れたように言う。

「癪だから具体的に誰なのかは言わないけどヒントぐらいは出してあげるわ。ミコトの気持ちに向かう先はミコトにとって誰よりも当たり前の存在よ。まあだからこそ気がつけないってこともあるかもしれないけど」

「俺にとって誰よりも当たり前の……」

輝夜に言われ、ミコトの脳裏には一瞬ある少女のことがよぎった。だが、ほんの一瞬だったため、それが誰なのかはミコトは結局影つくことはできなかった。

「まあ、ゆっくり考えなさい。考えればきつと分かることだから。というか、わかってもらわないと私が困るし」

「うん……ありがとう輝夜」

「……ええ。その感謝の言葉は素直に受け取ってあげる。それよりもいい加減屋敷に戻りましょう」

「ああ」

話を終えて、ミコトと輝夜は永遠亭に向かって歩き始める。ミコトは輝夜の後ろを歩いているが……ミコトは気がついていた。

後ろからわずかに見える輝夜の頬に、雫が流れていることに。

(輝夜……本当にありがとう)

涙を流す輝夜に心を痛めながらも、ミコトはまた心中で感謝の言葉を述べた。

閑話 第0話〜四幕〜

「ねえ、ちょっといいかな〜?」

いつも通り学校の屋上に来て、神楽を待っていたミコトの耳に男の声が聞こえてきた。

声のする方に振り返ってみるとそこには……一人の少年がいた。
(ツ!?こいつ……なんだ?)

少年の姿を目にしたその瞬間、ミコトは凍りつくかのような寒気を感じた。

学校指定の黒い制服を身にまとう、黒い短髪の少年……その表情は人懐っこい笑みを浮かべているが、ミコトはそんな少年に恐怖に似た感情を抱いた。

ミコトの本能が警鐘を鳴らしている……この男は危険だ、この男はおぞましすぎる……と。

「んにゃ?どつたの?俺の顔なんてじつと見つめちゃってさ〜」

「……いや、何でもない。すまないな」

「まあ別にいいんだけどね〜。それだけ俺のイケメンフェイスに釘づけになっちゃったっていうことだし〜?」

(こいつ……随分とまあ上手い演技をする奴だな)

おちやらかな調子でそんなことを言う少年……だがミコトは気がついていた。少年のこの道化つぷりは決して本気ではない……自分を隠すための演技であるということ。

「それで……こんなところに何しに来たんだ?何か用でもあるのか?」

「あるよ〜。俺はね〜……君に聞きたいことがあってここに来たんだ」

「俺に聞きたいこと?それまた……え?」

嫌われ者である自分に一体何を聞こうかと思っただけのミコトであったが……その思考は途中でかき消されてしまう。刹那……本当に一瞬のことであった。ミコトのしている景色が変化していたのだ。

目の前にいた少年……その姿は先程よりもずっと近くにあつて、ミコトの胸ぐらを掴んでいる。そしてその背景……学校の屋上から見えていた町並みは、青天と太陽にすり替わっていた。

(倒された?こんな一瞬に?)

またしてもミコトは恐怖した。それなりに運動神経や反射神経は常人よりは優れていると自負していたミコトだが……まさかこんな一瞬で、目にも映らぬ速さで倒されるとは予想外にもほどがあつたのであろう。

「一夢ミコト……単刀直入に聞こう。お前は紫黒神楽とどういう関係だ?」

少年はミコトの胸ぐらを掴みながら問う。その声色は先程までのしまりのないものとはまるで違い、冷たく脅すかのような重たいもので、さらに雰囲気もそれに相応しい重圧を孕んだものへと変質していた。

(これがこいつの本性……か?だとしたらとんでもないじやすまないな)

ミコトが今まで出会ってきた異端は神楽を含めて二人……その二人共が、異端に相応しい風格や佇まいをしていた。だが……この少年はそのどれとも違う。

少年はミコトに思い知らさせる……人間という種としての圧倒的なまでの格の違いを。

「黙ってないで答えろよ一夢命」

恐れを抱いていたミコトに、早く答えるように急かす少年。そしてミコトは言葉を紡ぎ始めた。

「……さあな。正直わからない」

「わからないだと?ふざけているのか?」

「ふざけてなんていないさ。本当にわからないんだよ……友達とか顔見知りとか知人とサボリ仲間とか……いろんな言葉が浮かんだが、そのどれも当てはまらないような気がした。だから……わからないんだ」

「そうか。なら質問を変えよう。お前は……紫黒神楽のことをどう

思っている?」

(どう思っている・・・か)

どんな関係かと聞かれても答えられなかったミコトだが・・・次の問いの答えはミコトでも驚く程に出てきた。

「・・・好きだよ」

「なに?」

「俺は・・・紫黒神樂のことが好きだ。彼女のことを愛している・・・一人の男としてな」

それがミコトの答えだった。

これまでにであった誰とも違う神樂・・・美しく、麗しくそれでいて荒々しささえ秘める彼女の人間性にミコトは心惹かれていた。それに神樂は・・・他の者達とは違い、ミコトを決して拒絶せず、言葉を交わし、触れ合ってくれる。

そんな神樂のことを好きになってしまふのは・・・愛してしまふのは必定とも言える。

「・・・そうかよ」

ミコトの答えを聞いた瞬間、少年は思った・・・この男も他の連中と同じなのだ。他の連中と同じく神樂に惹かれるあまり自分さえ偽ってみせる患者であるのだと。

だが・・・そんな思いはすぐに碎けることとなった。ミコトの目が・・・他の連中とはあまりに違っていたから。

(気に入らないほど真っ直ぐな目だ・・・他の連中とは到底違う)

ミコトの目はあまりにも真っ直ぐすぎる・・・他の患者共とは違い、曇ってもいないし邪な欲望も見えない。

ミコトは・・・心の底から純粹に神樂のことを愛しているのだ。(くっそ・・・結局相思相愛の上に神樂の見る目に狂いはなかったっということかよ・・・忌々しい)

少年は心の中で舌打ちをする。もしもミコトが有象無象と変わらない男だったらここで強引にでも神樂を諦めてもらおうと思っていたのだが・・・ミコトは違った。

違ったからこそ、忌々しくあり・・・同時に嬉しくもあった。

(まあ……こいつならいいか。こいつなら信頼できるし……きつと神楽を幸せにしてくれる)

ミコトならば他の有象無象と違い、神楽と真摯に向き合い、愛し合いい、そして幸せにしてくれる……少年はそう判断した。

「……ははっ」

少年は短く笑い声を上げると、胸ぐらを掴んでいた手を離して立ち上がった。

「急に荒っぽいことしちゃってごめんね〜？どうしても聞きたくつてさ〜」

少年は雰囲気を締りのないものに戻し、ヘラヘラした笑みを浮かべながらミコトに謝罪した。

「気になるな。気になるのは仕方がないと思うからな……紫黒竜希」

ミコトもまた立ち上がり、少年……紫黒竜希の名前を口にしながら立ち上がる。

「およう？俺のこと知ってたの？」

「ああ。神楽から話は聞いていたし……クラスメイトだしな」

「……へえ」

竜希は少々驚いていた。クラスメイトに不当な扱いを受けていたにも関わらず、それでも一応クラスメイトである自分のことを知っていたとは思いつきしなかったからだ。

「さっきおもつきし凄んでた俺が言うのもなんだけどさあ、君クラスメイトのこと嫌ってないの？随分と不当な扱い受けてるみたいだけど？」

「別に嫌ってはいないさ。ああいう扱いされるのには慣れてるし……仕方がないことだと割り切ってるしな」

(……こりやまた歪んでる。でもここまで歪んでいながら一切の憎しみを持ち合わせてないとは……ほんつとある意味神楽ちゃんとは真逆だねえ)

ミコトと神楽は真逆だ。誰からも避難されるのに決して憎しみを抱かないミコトと、誰からも愛されているのに憎しみを抱く神楽……

あるいは、そんな真逆な存在だからこそ、惹かれあったというのもあるかもしれないが。

(だけど……こう言う奴には神楽ちゃんみたいに愛しあう存在とは別に……理解者がいるんだろうねえ。こいつは俺が一肌脱ぐとしますか)

「……面白いね君」

「ん？」

「君みたいな面白い人と会うのは初めてだ。気に入ったよ。よければ俺と友達……いや、親友にならないかい？」

ニカツと満面の笑顔で、竜希はそんなことをミコトに提案してきた。

そんな提案を受けたミコトの第一声は……

「お前……神楽の言うとおりバカなんだな」

「いきなり辛辣!？」

まさかの辛辣な一言であった。

「いや、当然だろう。初対面でいきなり友達通り越して親友になろうだなんて……正直頭どうかしてるんじゃないかって疑われても仕方ない」

「ひ、否定はできないけど……うぐぐ」

至極もつともなことを言われてたじろぐ竜希。だが……

「でもまあ……そんな提案を受けるのを悪くないと思う俺も大概バカだがな」

「ふへ？」

「……俺は相当な嫌われ者だ。そんな俺と親友になればお前の評判もだいぶ下がると思う。それでもいいのか？」

「……当然!他の誰になんて思われようとも親友には変えられねえつてのー!」

「そうか……」

「くくく」

同じような表情で互いに笑みを浮かべあうミコトと竜希。どうやら答えは決まったようだ。

「よろしくな・・・竜希」

「こちらこそよろしく」

ギョツと右手で握手を交わすミコトと竜希。これを機に、二人は親友となった。

「さて、そうとなれば俺も今日からはここで授業サボらないとん」

「お前までサボる気かよ」

「あつたりまえでしょ！授業なんてつまらんものよりも親友のが大事に決まってるってミコちゃん！」

「・・・ミコちゃん？」

唐突に竜希から愛称で呼ばれたことにピクリと反応を示すミコト。

その瞬間・・・

「何をしているこの愚弟が」

「うぎやつ!?!」

突然、なんの前触れもなく現れた神楽が・・・竜希を蹴り飛ばした。

「ちよつ、かぐちゃん!?!いきなり現れて何するのよも」

「うるさい黙れ殺すぞ」

「超辛辣!?!なんでそんなに機嫌悪そうなのよ!?!」

「貴様・・・私に断りもなく何をミコトと会っている?」

神楽は明らかに不機嫌そうな声色で竜希を問い詰める。

「いや、断りもなくって・・・別に許可なんていんないでしょ。それに俺とミコちゃんはもう親友になったわけだし。ね、ミコちゃん?」

「・・・神楽」

「なんだ?」

「・・・もつと蹴ってもいいぞ」

「なぜに!?!」

まさかの同意を求めた相手からのさらなる辛辣な発言。これには竜希もたまったものではない。

「ちよつとちよつとミコちゃん!?!なんでそんなに辛辣なの!?!俺達親友なのになんて!?!」

「竜希……俺はな、たとえ親友であろうとも『ちゃん』付けされるは嫌なんだよ」

「……はい？」

「こんな容姿してるせいで女に間違われることが多くて……悪ふざけで『ちゃん』付けされることもたまにある。それが俺にとってはそれなりに嫌なことなんだ。だから神楽……もつと蹴り浴びせろ」「くくくつ……了解だミコト」

ミコトの頼みを聞き入れた神楽は、ジリジリと竜希に近づいていく。

「お、お願いだから勘弁してください！かぐちゃんの蹴りって結構痛い……ぎやああああ!？」

懇願虚しく、数多の蹴りを神楽から浴びせられる竜希。

流石に理不尽だと思いつつも、その心の中ではこういうやりとりも悪くはないと思っていたりした。

こうして、紫黒竜希は一夢ミコトと親友同士になった
だが……この時竜希は思いもしなかったであろう

いざれミコトのことを……心の底から憎むようになってしまふことになろうとは

再会く悉くに愛されし深黒く

第133話

「退屈だな」

煙管を吸いながら少女は退屈を口にする。誰しもが一度も口にしたことのある言葉だが・・・少女がそれを口にするのはいささかおかしいと言わざるを得ないだろう。

少女が今居るのは地獄。生前罪を犯したものが死して行き着く罪を償うために罰が与えられる場所。罰が与えられている中、退屈だと口にするものは本来いはずである。しかし、それでも少女は退屈を感じていた・・・あるいはその退屈こそが罰なのかもしれないが、この場合は違う。

少女は自らの罪を認め、自らの意志で地獄に墮ちた。だということに、この地獄で少女を罰しようというものは誰一人いなかった。生前と同じく、少女は罰を与える地獄の住人にさえ愛され、担ぎ上げられ、敬われ・・・整然と同じように酷く優遇されていた。

「はっ、確かにここは地獄だな。罰を望んでわざわざ来てやったというのに、生きてた頃と何も変わらん・・・そう言う意味では確かに地獄だが、私が望んだ地獄とは程遠い」

生前でさえ自分の生き様に少女は不満を抱いていた。悉くに愛されるのが定められていた人生。それほどつまらないものはないと・・・これほどの地獄はないと彼女は思っていた。ゆえに少女は真の地獄に期待していた。自身が犯した最低最悪な罪・・・愛する者の目の前で自ら命を断つという罪に与えられる罰が地獄で施されると少女は期待していたというのに・・・この地獄は生前の世界と何一つ変わらなかった。

ただまあ、これに関しては少女に非があるとも言える。なにせ地獄に期待など本来寄せてはならぬものなのだから。少女の意に沿わなかったという意味では、確かにここは少女の地獄と言えるかもしれない。

ゆえに少女は……ある決意を下すことにした。
「仕方がない、退屈しのぎに会いにいくとしよう。ちやうど頃合だしな」

ニヤリと不敵な笑みを浮かべ、少女は歩みだす。
少女が愛した数少ない者達のいる楽園……幻想郷へと

「はああっ！」

「おお、いい一撃。けどそれじゃ俺に当てるには千年早いよ」

永遠亭の庭にて、すでに日課になりつつある模擬戦を行う妖夢と竜希。妖夢の斬撃は竜希が幻想郷に来た当初……春雪異変の時よりもはるかに速く、洗練されている。しかし、それでもいつものようにニコニコと締りのない笑みを浮かべる竜希にはかすりもしなかった。
「まだですっ！」

「お？」

ひとときわ鋭い斬撃が竜希を襲う。その斬撃もあたりはしなかったが、先程までの竜希笑みがわずかに薄らいだ。

「へえ……今のはなかなか良かったねよくむちゃん。いつもよりも本気で避けちゃった」

「それでも当たる気配が全くしないんですが……」

「当然。本気って言ってもあくまでもいつもより、だからね。それはそうと……今日はこれで終わりだ」

「ッ!? 参りました……」

妖夢の斬撃をかいくぐって、竜希は妖夢の背後に回り込んで刀を首筋に添える。本日の模擬戦は、これにて終了となった。竜希が幻想入りしてはや数ヶ月。毎日のように模擬戦を繰り返すことで妖夢の剣

士としてめきめき力をつけているが、それでも尚『最強の剣士』たる竜希には遠く及ばない。

「それどころか……」

「あの、竜希さん」

「ん？？なによ？むちちゃん？」

「その……もしかして竜希さん、強くなってますか？」

竜希は自らの強さを嫌っている。そんな竜希にそんなことを聞いてしまつては気分を害してしまうのではないかと思ひながらも、妖夢は恐る恐ると尋ねてみた。

「……どうしてそう思うの？」

「直感的になんです、剣を交えているとき以前よりも一層竜希さんには敵わないと感じ取つてしまったので」

「いつからそう感じてた？」

「永遠亭から帰つてきたあとぐらいです」

「なるほどね……これは喜ぶべきかそうでないのか……」

竜希は頭を掻きながら、困つたように苦笑いを浮かべた。

「えつとね……結論から言うときよ？むちちゃんの言うとおりでよ。

俺は前よりも強くなつてしまった。この幻想郷にきた当初よりもね。

これには俺の厄介な特性が絡んじやつててね」

「厄介な特性……ですか？」

「うん。なんていうか俺は自分よりも何らかの力が上回つてる相手と対峙したら、それを上回っちゃうっていう面倒くさい特性があつてね」

「なんですかそのデタラメな特性は……」

妖夢は竜希のありえない特性を耳にして驚きを通り越して呆れ返っていた。

「デタラメなのは否定しないかな。ともかくまあ、永遠亭に行つたとき、俺は身体能力が俺よりも上のやつと戦つちやつてね。そのせいでそいつの身体能力を超えちやつて前以上の強さを手に入れちやつたつてわけだよ」

「竜希さん異常の身体能力つてどんなバケモノですかそれは……」

「いやいや、確かに身体能力は凄かったけど強さ的にはたいしたことなかったよ？ミコちゃんでも十分に勝てる相手だったし、今のよくむちゃんでも倒せるねあれは」

「……そうですか」

竜希の発言で、妖夢は微かにだが微笑みを浮かべた。あの竜希がある程度今の自分の実力を認めてくれていると思いい、嬉しくなったのだろう。

「というか、よくむちゃんの的にはやっぱり残念かな？」

「何がですか？」

「俺が強くなったってことはもちろんだけど……俺の特性とか『最強の剣士』である竜希を超える剣士となる……それが妖夢の、そして竜希の願いだ。ゆえに、竜希が強くなることも、竜希の特性もその願いにとっては厄介この上ないもの。だからこそ、竜希は妖夢が残念に思っているのではないかと考えているようだが……」

「いえ、特に残念には思っていません」

「ほえ？」

妖夢の予想外の回答に、竜希は間の抜けた声を上げてしまった。

「確かに、乗り越えるべきより高くなってしまいました。ですが、ただそれだけのことです。竜希さんを超える剣士になるという目標は一切揺るぎません。むしろ……」

「むしろ？」

「壁は……高ければ高いほど超えがいがあると思いませんか？」

ふつと不敵な笑みを浮かべながら妖夢は言う。

剣という凶器の恐ろしさも、剣術という殺人術の悍ましさも妖夢は知っている。知ってはいるが、それでも妖夢は剣士だ。ゆえに、剣士として超えるべき壁が高いということは、剣士としての己を高めることになるのにつながる。だからこそ、妖夢はその壁が高くなることを残念に思っただけなのだ。

「くくっ……よく言ったよむちゃん！それでこそだ！いいよよむちゃん！最高だよ！可愛いよ！」

「みよん!?可愛いは今は無関係ないじゃないですか！」

「おゝ、真っ赤になった真っ赤になった。これまた可愛いねゝ」

「ツゝ!!もう知りません!」

「あははははゝ♪」

可愛いと言われ、恥ずかしさのあまり顔を真っ赤にしてそっぽを向く妖夢。そんな妖夢を見て、竜希は愉快そうに笑い声を上げていた。「さくて、それじゃあ模擬戦も終えたことだし、お茶にしよつかく。幽々子さんもそろそろおやつって駄々をこね始める頃だしゝ」

「そうですね。屋敷に戻りましょう」
お茶にしようとして二人で屋敷に戻ろうとする竜希と妖夢。

その時……

「ほう、その半人半霊がお前の求めか愚弟?」

「え?」

「ツ!?!」

二人の耳に、女の声を聞こえてきた。妖夢は聞き覚えのないその声に首をかしげるが……竜希は、誰よりも聞き覚えのあるその声に表情をこわばらせる。

竜希が振り返ると……そこには我が物顔で立つ少女が居た。

「久しぶりだな竜希」

「かぐ……ら」

少女の名は紫黒神楽。竜希にとっては双子の姉で……最愛であつた女であつた。

第134話

(この方は一体・・・?)

突然自分たちの目の前に現れた少女を前にして、妖夢は困惑していた。

「かぐ・・・ら」

「え？」

表情を驚愕に染めて、少女の名前を呟く竜希。その名を聞いて、妖夢もまた驚きを顕にした。

『神楽』・・・その名前には聞き覚えがあった。竜希の双子の姉であり、ミコトの恋人であった・・・ミコトと竜希にとって、かけがえない存在であった少女だ。

「はっ、相変わらざるの間抜けづらだな愚弟が。この私の弟であるのだからもつと締りのある表情は出来んのか？」

「・・・久しぶりに会ったのに随分な言いようだね。この絶妙に締りのない顔が俺のアイデンティティであることは神楽ちゃんだってわかってるでしょうに」

神楽の偉そうな物言いに、竜希はいつものようにおどけた様に答える。だが、妖夢は気づいていた。竜希の心内には、未だに戸惑いが存在していることに。

「ふんっ、まあ貴様の真剣な表情などこの場で見たいとも思わんし別に構わんがな。それよりも・・・その半人半霊」

「みよん!? な、なんですか？」

いきなり声をかけられたことに動揺して変な声が出てしまった妖夢であるが、かろうじて返事を返すことができた。

「客人が来たというのに茶の一杯も出せんのか？少しは気を効かせろ」

「は、はい。すみません・・・」

客というにはあまりにも偉そうな物言いだ、妖夢は神楽に謝罪をしながら返事を返した。普通ならば怒る場面であるのだろうが、神楽

相手に怒りを抱くことはなかった。初めて会った相手だというのに、妖夢はそれが当たり前で自然なことだと受け入れ、認識してしまったのだ。

「すぐに準備しますので少々お待ちを……」

「ああ、わかった。それまではこの愚弟といくらか話しておくでしょう」

「ごめんねよくむちゃん……かぐちゃんアレがデフォだから」

「いえ、大丈夫です……ではお茶を淹れてきますね」

妖夢はお茶を淹れに、屋敷の中へと入っていく。

(あの人が神楽さん。ミコトさんと……竜希さんにとって大切な方) 妖夢は心に、何かもやっとしたものが浮かび上がるのを感じた。

「……………いい娘のようだな。お前には勿体無いほどに」

「あく……………うん。まあそうだね」

妖夢が去った後、竜希と神楽は縁側に座り話し始めた。

「もう一度聞くんが、あの娘がお前の『求め』なのか？」

「……………そうだよ」

「そうか……………まだまだ半人前の域はでないがなるほど。確かにあの娘にはそれだけのものがありそうだ」

会って間もないが、神楽は妖夢に秘められた力、才覚を見抜いてい

るようで、竜希の『求め』として申し分ない相手であるということを確認めたようだ。

「というより、かぐちゃんどうしてここに居るの？てつきりかぐちゃんのことだから自分から地獄にでも落ちて悠々自適に過ごしてると思っただけ？」

「はっ。何が悠々自適なものか。あんなところ退屈で退屈で仕方がない。なにせ誰ひとり私をまともに罰しようとしなのだから。現世と同じで誰も彼も私に媚びへつらって……まあ、そう言う意味では確かに地獄かもしれないが私の求めていた地獄には程遠い」

神楽が求めていたのは凄惨なる地獄。数多の苦痛を与えられ、もう許して欲しいと思わせるほどの絶望。だが、実際に味わった地獄はあまりにも生ぬるかかった。神楽にとってはそっちの方がある意味では最低な地獄なのだが、それでも納得できるものでは到底なかつた。

「罰せられることを望んでいたって物言いだねえ……いや、実際そうなのかな？なにせかぐちゃんが死んだせいでミコちゃんはえげつないほどに苦しんで絶望しちやつたんだからねえ。それを思えば罰を受けたくもなるか」

「知ったような口を聞くな愚弟が」

「相変わらず俺にはきつついなあ……ミコちゃんへの優しさの一割ぐらいでもいいから俺にも施してくれてもいいんでないの？」

「だからよく蹴ってやつただろうが」

「それどう考えても優しさじゃないんですけど……」

苦笑いを浮かべる竜希だが、実際のところそれもある意味では神楽の優しさであることを理解していた。神楽は自分以外の人間の多くに価値を見出していない。そんな神楽が自ら直々に蹴ってやるのは竜希ぐらいだ。それぐらいの関心を神楽に持たせる程度には、神楽は竜希と特別扱いしてくれていた。

「てかさあ、その地獄にいるはずのかぐちゃんがなんで幻想郷にいるわけ？」

「暇だったんでな。幻想郷に移り住んだお前たちに会いに来たのだ」

「……地獄ってそんなに簡単に出てこれるものなの？」

「私だからな」

説明としては不十分すぎるにもかかわらず、それで納得できてしまうところが神楽らしさであろう。

「本来は早苗とミコトに会うことをメインにしていたのだが、いかにせん冥界経由でこちらに来たからな。仕方なくお前に最初に会いに来てやったのだ」

「一応肉親である俺に対して仕方なくはないっしょ……まあいいけどさ。それよりもかぐちゃん。俺、かぐちゃんに言いたいことがあるんだけど……」

「聞くつもりはない」

「ばっさりだなあ……」

仮にも肉親から言いたいことがあると言われてこの対応である。

ただ……それは単に竜希を邪険にしているからではなかった。

「……不本意だが、お前は私が唯一肉親だと認めた相手だ。お前の考えなど手取るようにわかる。だからお前が何を言いたいのかも理解できる……だから聞くつもりなどない」

そう、神楽がそれを聞こうとしないのは竜希が神楽にとっての唯一の肉親であるがゆえにだ。だからこそ聞かなくても何を言いたいのかなどわかりきっているのだ。

「そっか……俺としては言っておきたかったんだけど、かぐちゃんがそこまで言うならいいや。どうせ俺もどう返されるかだなんてわかりきってるんだからさ」

そしてそれは竜希も同じであった。神楽がどう返答するのかはわかりきっていた。だからこそ、あまりしつこく食い下がるようなことはしなかった。

「……このあとミコちゃんときなちゃんに会いに行くの？」

「ああ。それを楽しみにしてきたわけだしな」

「その言い方だと俺と会うのは楽しみではなかったみたいだね
〜」

「楽しみではなかったな。お前と会うのは……ただの暇つぶしだ」
「ははっ……まあそうだよねえ」

特に深い意味のないただの雑談。竜希からすれば最愛とも言える相手であるがあまりにもあつさりしている。ただ、それでいいのだろう。二人共……微笑みを浮かべているのだから。

「あ、あの……お茶を持ってきました」

「ああ。待っていたぞ」

しばらくしてお茶をもつて妖夢が戻ってきた。神楽は妖夢からお茶を受け取って一気に飲み干す。

「ふむ、まあまあだな……では私はそろそろ失礼する」

「えっ？」

神楽の発言に、妖夢は困惑した。竜希の姉である神楽と色々と話がしたかったようだ。

「ちよつと待っててください。私神楽さんと……」

「魂魄妖夢」

妖夢の言葉を遮って、神楽は妖夢の名を呼ぶ。

「……竜希を頼んだぞ」

ただ一言……神楽は不敵な笑みを浮かべ妖夢にそう告げて、その場を去っていった。

(今のは一体……?)

妖夢は神楽の言葉にどういった意味合いが込められていたのかを考えていた。普通に考えれば弟の事を任せるといったような意味なのだろうが……妖夢にはそれを含めたもつと大きく、深い意味があるように思えてならなかった。

ただ……

(なんで……あのたった一言でどうしてこんなに……嬉しいんだろう?)

ただ一つわかっていることは……あの言葉の真意は定かでないが、それでもその言葉を神楽からもらえたことに、妖夢は喜びを感じているということだった。

「あれが俺のおねーちゃんのかぐちちゃんだよ。めっちゃ偉そうでしょ？」

「それは……はい。確かに偉そうだなと思いました。けど……」

不思議と不快に感じたりはしませんでした」

「まあそれがかぐちやんだからねえ……ほんつと、相変わらずでなによりだよ」

ニコリと微笑みを浮かべる竜希。その微笑みはどこか儂さを感じるものであったが……妖夢はそれを口にするとはなかった。

「さて、今度こそ幽々子さんにお茶とお菓子用意してあげないとねえ」

「あつ、そうでした。急がないと……」

幽々子の事をすっかりと忘れてしまっていた妖夢は、竜希と共にまたお茶の準備をしに台所の向かった。

神楽の言ったあの一言を……頭の中で何度も反芻させながら。